奇譚クラブ

8

1972・8

※新しい風俗文献誌※

奇譚クラブ

1972・8

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan

8

雑誌 2805-8

8月号 ¥400

奇譚クラブ＝臨時増刊

＝＜女体緊縛写真集＞＝定価一〇〇〇円（送50円）

天然色写真

柔肌に喰い込む麻縄……前田真知子
首縄横臥二態……前田真知子
典型的後手縛り……前田真知子
自由な肢のもだえ……前田真知子
麻縄と絖肌の明暗……前田真知子
厳しい縄目を味う……前田真知子
準備態勢OK……前田真知子
股間縛りの表情……前田真知子

女体緊縛の華……本誌写真部構成

金髪碧眼の美女……シーラ・ケニー
笞打ちの態勢……関谷富佐子
鞭撻の苦痛……関谷富佐子
浣腸責めの序曲……長井葉津子
亀甲縛りの美態……左近麻里子
麻縄と白肌の対照……中河恵子
陽を浴びた柔肌……左近麻里子
猿ぐつわに喘ぐ……中河恵子
緊縛裸身の羇り……中河恵子
責め疲れの放心……梨花悠紀子
没我の心境……中河恵子
痛打の末の悦虐……関谷富佐子
沖縄美人の緊縛……座間明子
剝玉子の縛り……佐々木真弓
狂変する裸女……川路叢子
責めくたびれて……佐々木真弓
紅毛碧眼の白人を責める……シーラ・ケニー
海老責の狂態……川路叢子
ボリウムに挑戦……座間明子
鞭打の下に……関谷富佐子
祭壇の人身御供……渡部好美
稚妻は縄を知りぬ……金原加奈子
開股の正面と背面……中河恵子
華麗な開股責め……中河恵子
イルリガートルを前に……長井葉津子
非情な責めの終末……長井葉津子
両手吊りの晒し……中河恵子
柱縛りの完了……川路叢子
処女縛にとまどう……三浦純子
麻縄に身をゆだねる……中河恵子
盗視するSMの目……佐々木真弓

緊縛女体の光と影……編集部構成

両手挙げ棒責め……川路叢子
柱宙縛りに浮く……長井葉津子
後手吊りに苦しむ……中河恵子
どこでも責めて……佐々木真弓
鞭の法悦境……関谷富佐子
ムチが痛い、許して……関谷富佐子
柱を挟んだ連縛……渡部・川路
花と蛇の静子です……中河恵子
針責めをして頂戴……渡部好美
二つ折りの女体……長井葉津子
猿ぐつわの哀歓……中河恵子
日本式縛りの白人……シーラ・ケニー
マゾの女王に笞……関谷富佐子
柱しばりに恥らう……金原奈加子
夫婦プレイの慈味……渡部好美
長襦袢の艶姿……花坂道子
豊満ボインを誇る……愛川悦子
美女今縛られる……梨花悠紀子
受入態勢充分……関谷富佐子
折檻にも汚れず……前田真知子
海老責への展開……佐々木真弓
責めてみたい碧眼の女……シーラ・ケニー
日本式高手小手縛……シーラ・ケニー
猫の目のような女……絹川文代
足吊りのある風景……中河恵子
亀甲縛りの媚態……中河恵子
M女二輪の花……渡部・川路
苛責に乱れた黒髪……中河恵子
開股縛りの幻想……中河恵子
鏡の前での放恣……前田真知子
愉悦のひととき……川路叢子
ハリツケ晒し……左近麻里子

これから、どうするの？……長井葉津子
美しき吊り……前田真知子
苦痛か悦楽か……関谷富佐子
一筋縄の魔術……中河恵子
逆エビ縛りに入る……三浦純子
愛撫の責め……渡部好美
俯瞰撮影……前田真知子
黒縄と白肌……中河恵子
身動きできぬ境地……関谷富佐子
ボリウムを縛る……座間明子
浮上した女体……中河恵子
麗しき背面……中河恵子
汚辱の縄……金原奈加子
高手小手本縛り……佐々木真弓
責めの陶酔境……川路叢子
失神したマゾ女……関谷富佐子
前手縛り悶悦……関谷富佐子
柱の彼方の天国……中河恵子
荒縄の海老責……三浦純子
美と縛の女神……前田真知子
はずれた猿轡……梨花悠紀子
可憐な置物……長井葉津子
ながし目の天使……佐々木真弓
酒の肴になる……川路叢子
妖蛇の洗礼……関谷富佐子
奔弄されるままに……前田真知子
海老縛りの妙味……川路叢子
柱につながれた女……長井葉津子
痛さをこらえる異国の女……シーラ・ケニー
責の果の諦観……前田真知子
痛打の一瞬……関谷富佐子
ホステス裸人生……佐々木真弓

カメラ・ハント楽我記……辻村隆

女体緊縛の醍醐味を語る……塚本鉄三

◇本誌創刊二十五周年記念◇

百万円懸賞原稿募集

▽賞　金△

入選作品	第一席	二十万円	1篇
入選作品	第二席	十万円	1篇
入選作品	第三席	五万円	3篇
入選作品	第四席	三万円	5篇
入選作品	第五席	二万円	10篇
佳作優秀作品		一万円	15篇
選外佳作作品		五千円	10篇

▽内　容△

一、創刊以来二十数年、終始広く読者の方々から原稿を募集し、幾多の傑作を以て誌上を飾ってまいりましたが、ここに再度皆様の力作を募り〈読む雑誌〉として最近急速に発展してまいりました本誌をして、更に一層充実したものにしたいと思います。

一、創刊以来、特異な風俗文献誌を標榜して生長してまいりました本誌の前衛的な内容にふさわしい力作、読む雑誌として読者にアッピール出来る読みごたえのある新鮮で異色ある傑作を心からお待ちいたします。

一、内容は本誌に発表するにふさわしいものであれば何でも結構ですが、サディズムに関連したもの、マゾヒズムに関連したものを始めとして、各種フェテッシュ一般、同性愛、切腹嗜好、褌美、女相撲、女斗美、変装、生首狂崇、妊婦嗜好、見世物性風俗、奇習珍奇風俗、風俗文献紹介、アブノーマル・テクニックなど、古今東西を問わず特異風俗に関する題材を巾広く取り上げて下さい。

一、形式は小説、創作、読物などのフィクションで読切形式、連載形式いずれでも結構ですし、告白、体験、手記といったノンフィクション物でも結構です。更に見聞記、実見談やルポルタージュといったものから、論説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲など、如何なる形式でも最も得意とされるものを選んで御執筆下さい。

一、いずれも模倣や亜流を排して、あくまでも新分野の開拓に意欲的な野心作を求めております。この際我と思わん自信のお持ちの方は奮て御応募下さるようお待ち致します。

▽規　定△

一、応募作品は編集部に於て慎重銓衡の上、入選決定しましたものは速かに筆者に通知致します。入選作品に対しましては掲載の如何に拘らず、折り返えし賞金を贈呈致します。入選作品の著作権は当社に移行することを前以て御承知おき願います。

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限ります。たとえ未発表の作品でも他社へ投稿されたものはお断りします。作品の中に他人の作品を引用する部分がありましたら、出処（作者、書名など）を明記して下さい。

一、原稿は必ず二百字詰又は四百字詰原稿用紙をご使用下さい。枚数は四百字詰換算にて三十枚以上三百枚まで。三百枚以上に亘るときは一応事前にご照会願います。

一、締切日は毎月十五日、入選作品は出来るだけ早く誌上に掲載致します。

一、懸賞応募作品は一般の原稿、読者原稿と区別するため第一頁に〈懸賞〉とお書き下さい。ペンネーム、匿名はご自由ですが、住所（連絡先）氏名は必ずお書き願います。応募者の氏名を公開したり他へ洩らしたりなどは絶対に致しませんから御安心下さい。

一、ご投稿された原稿は原則として返戻は致しません故、若しご入用でしたらコッピーをとっておいて下さい。

一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書箱第41号、暁出版株式会社編集部宛、必ず郵送（第一種郵便にて）して下さい。直接の訪問並に持込みは固くお断り致します。

女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇気を奮って御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年令、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には壱万円以上拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さるよう願います。御都合に依って分譲用又は助手介添え或はプレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに関してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真を同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先＝大阪市住吉郵便局私書箱第41号
暁出版株式会社編集部宛

美しき縛しめ

前田　真知子

奇譚クラブ

八月号目次

〈昭和四十七年〉

〈第二十六巻＝第八号＝通刊第二九四号〉

本文

フォト「息苦しい猿ぐつわ」〈梨花悠紀子〉……松村　春吉……(21)
高村浩子様へ『愛の感情とSM願望』……サド　騎士……(22)
懸賞入選告白〝女性の下着に狂う〟……木元　無人……(30)
SMカメラ・ハント『矢も楯もたまらぬとき』〈奥村まり・岸悠子・篠原レイ子の巻〉……辻村　隆……(34)
私のマゾ点描「ある春宵の幸運」……小谷　竜三……(70)
連載S小説『大噴火』〈第四十七回〉……千葉　青鬼……(74)
那津子緊縛撮影行〝雛祭の夜〟……城　章夫……(82)
女性切腹史「花の墓碑銘」(三)……中康　弘通……(94)
体験記〝底辺に生きる人々〟……黄　好夫……(98)
奈保子の自由日記帳より『七つの土鈴と玉手箱』……笠井奈保子……(116)
懸賞告白「映画館のトイレでのSMプレイ」……閑居　善人……(118)
告白〝悩ましいゴムマント・プレイの手記〟……梅川　幸子……(123)
連載・時代S小説『紫蘭の門』(12)……風流極道軒……(126)

巻頭緊縛美フォト

美しき縛しめ……前田真知子
白い肉塊に縄……笠井奈保子
開股を迫る縄……笠井奈保子
ローアングルの緊縛女体……深田　菊子
女体の屈曲と光と影……深田　菊子
SMプレイの序曲……山原　清子
或る湯の宿にて……大塚　啓子
ムチ打ちを待つポーズと
　ムチの炸裂したポーズ……関谷富佐子
鼻孔の検査・鼻をいたぶる……山原　清子
恥かしいから責めるのはイヤ……笠井奈保子
鼻毛を抜く・鼻毛を切る……山原　清子
羞らいも忘れて……笠井奈保子
責め始めの段階……前田真知子
本格的に責め始める……前田真知子
両脚を引き挙げての変化
　片脚を引き寄せての変化……前田真知子
食卓の上での足挙げ責め
　女体の緊張を求めた片足挙げ……前田真知子
「駿河問い」の一瞬……前田真知子

女体緊縛の撮影と実際
『私の縛った思い出のM女たち』…塚本　鉄三…（144）
レポ〝ある人妻からの手紙〟……大川　昌弘…（170）
連載・アブ紳士行状記「M派交友録」（29）…鬼山　絢策…（176）
マダム芙美代の饒舌『美しい五月の黒髪』……福井　桃子…（190）
小説「拷問クラブ」シリーズ＝最終回〝復讐の処刑〟……鶴見　浩一…（198）
美人魔女「うらめしやッタラうらめしや」…小倉　幸男…（205）
告白『夢遠き日頃』……前田真知子…（208）
サディスティンの乱舞「二つの便器」……芳野　眉美…（226）
読者通信……編集部選…（266）

奇クサロン（236）

M女高村浩子に捧げる唄……保利精二
縛り…止められない……早木夢二
イメージ画「カニ紋様」……小川茂正
サロン楽我記〈第98回〉……辻村隆
フォト「愛妻純子」……三浦敬一
M女性の美……臥竜子
自称浣腸日本一……平山連浣
絵「コチョコチョ」……野次馬
恋慕深田菊子嬢緊縛……益田茂夫
詩「快虐の水先案内」……霜月一
耽美の夜に迎えたい彼女……高松志朗
フォト「雪子の縛り」……伊達一也
高村浩子さんを責める……責苦与之助
編集部だより……編集部

レポ「ゆう子を責める」……最上卓也
述懐「マゾのこころ」……小山郁夫
佐藤満代様にご理解を……水野信二
短信　小杉千恵様へ……石田生
〃　高村浩子様へ……奈良秀夫
〃　鈴木千鶴子様へ……平山連浣
イメージ「ある夜の夢」……一宮ひかる
フォト「わが妻の下着」……紀川正信
愛妻弘美との夫婦プレイ……井上浩
被虐妻「深夜のプレイ」……比佐まそえ
美しきSとMの世界……山手玲
チャンスを待つの弁……国川栄一
深田菊子さん有難とう……三輪久緒

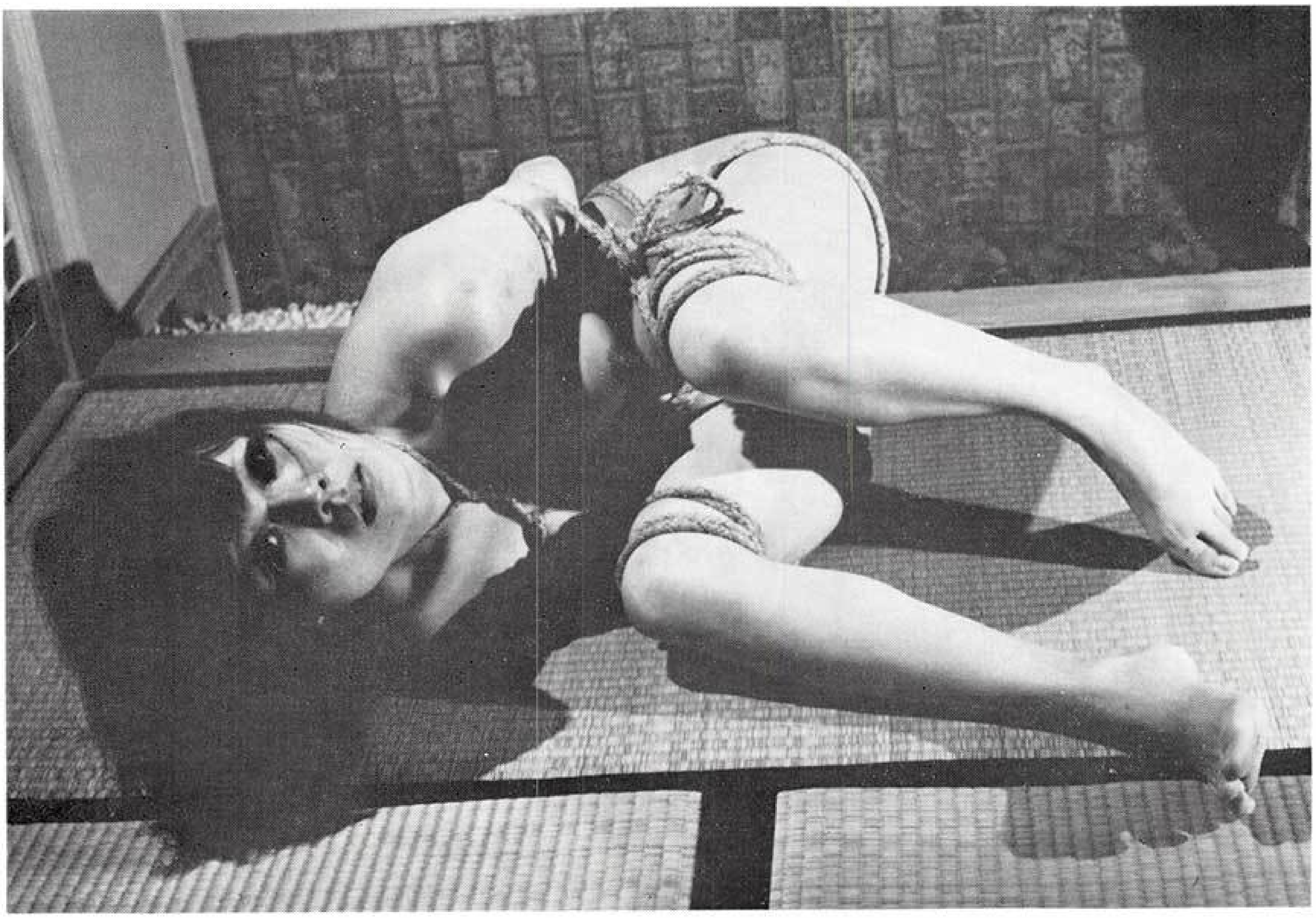
イメージギャラリー＝「ホーム・セット」春川ナミオ（72）・「鎖」須坂旭（121）・「滑川那津子さんを想う」室井亜砂路（130）・「レディのペット」飯田くにひろ（133）・「皮革のキシミ」黒田縛（137）・「落花無残」岡たかし（140）・「ホントにやる気?」春川ナミオ（180）・「社長のおつとめ」岡たかし（184）・「耐久実験」志羽利也（201）・「悦楽の苦鳴」須坂旭（203）
目次フォト……絹川　文代

〔白い肉塊に縄〕…………………………＜笠井　奈保子＞

〔開股を迫る縄〕………………………＜笠　井　奈保子＞

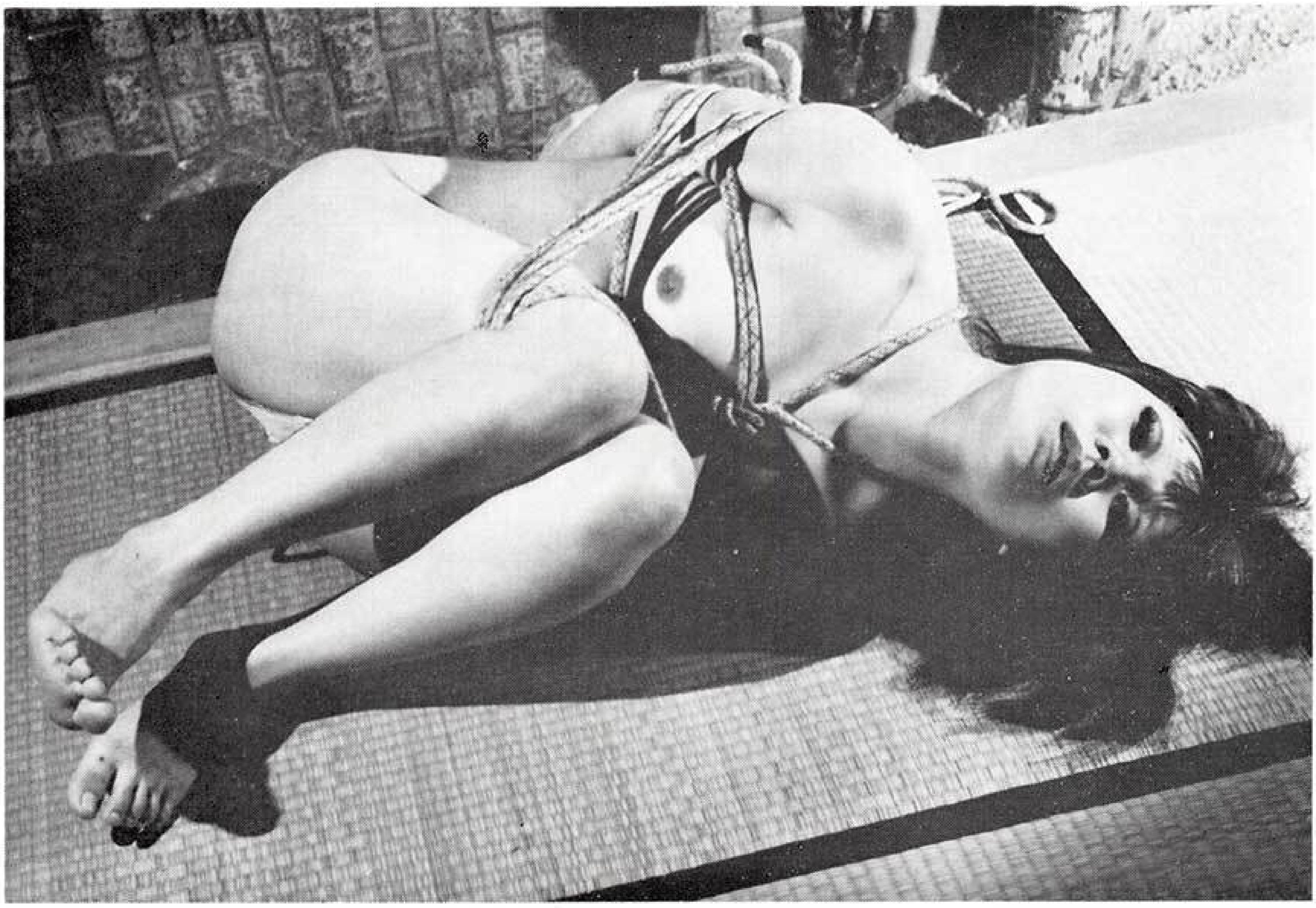
ローアングルの緊縛女体

深田菊子



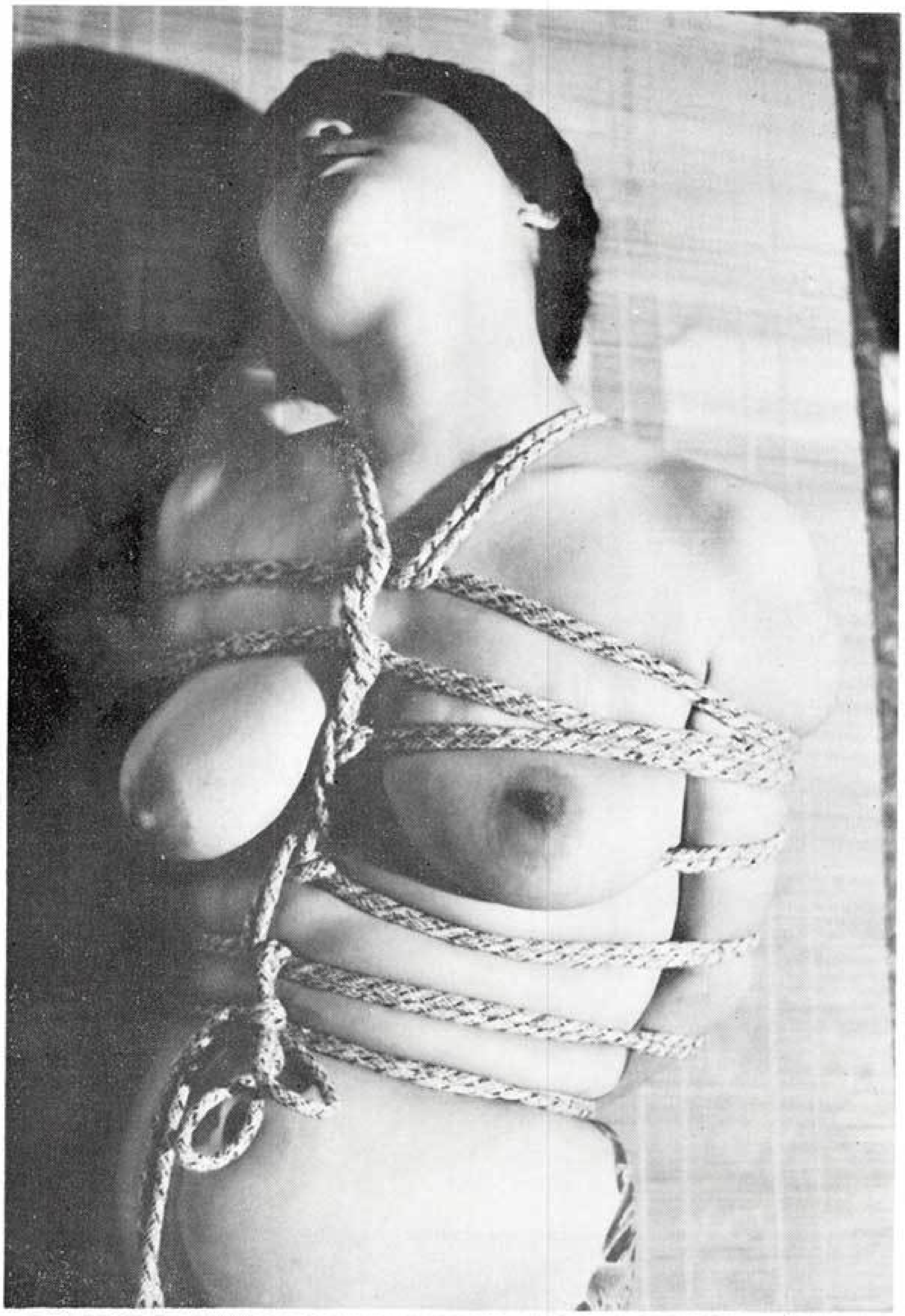
女体の屈曲と光と影

深田菊子



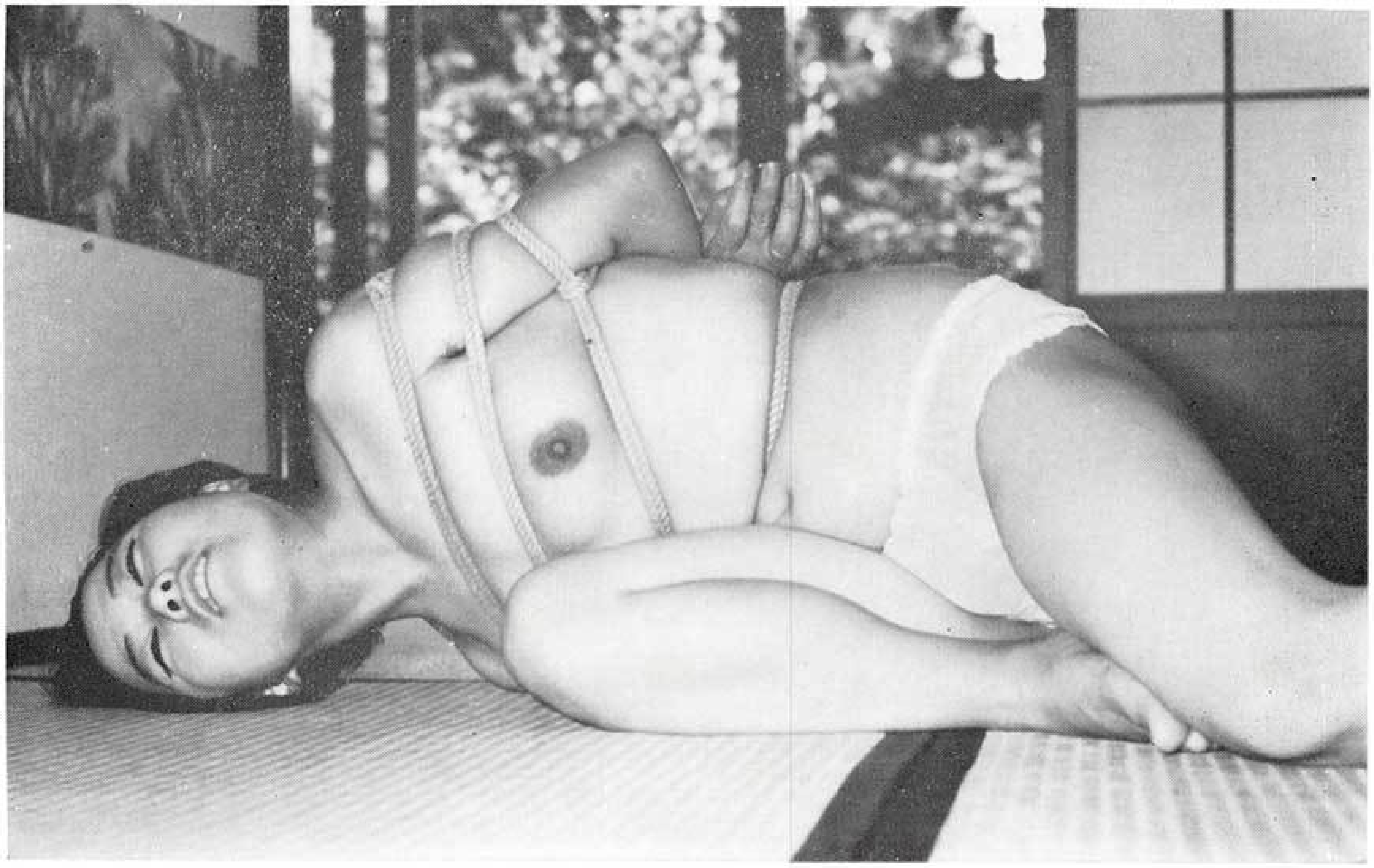
SMプレイの序曲

山原清子



或る湯の宿にて

大塚啓子



ムチ打ちを待つポーズとムチの炸裂したポーズ

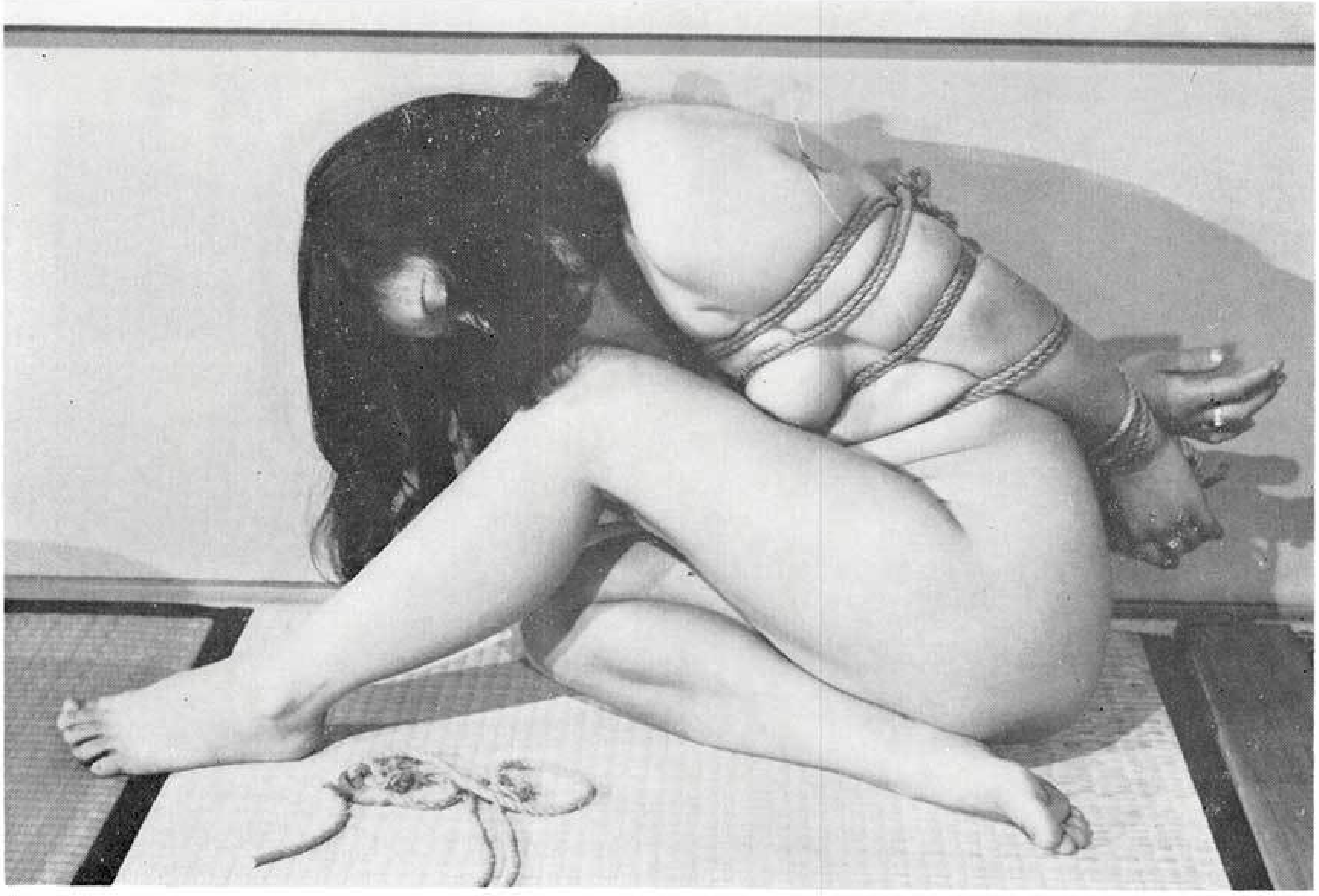
関　谷　富佐子

鼻孔の検査

鼻をいたぶる

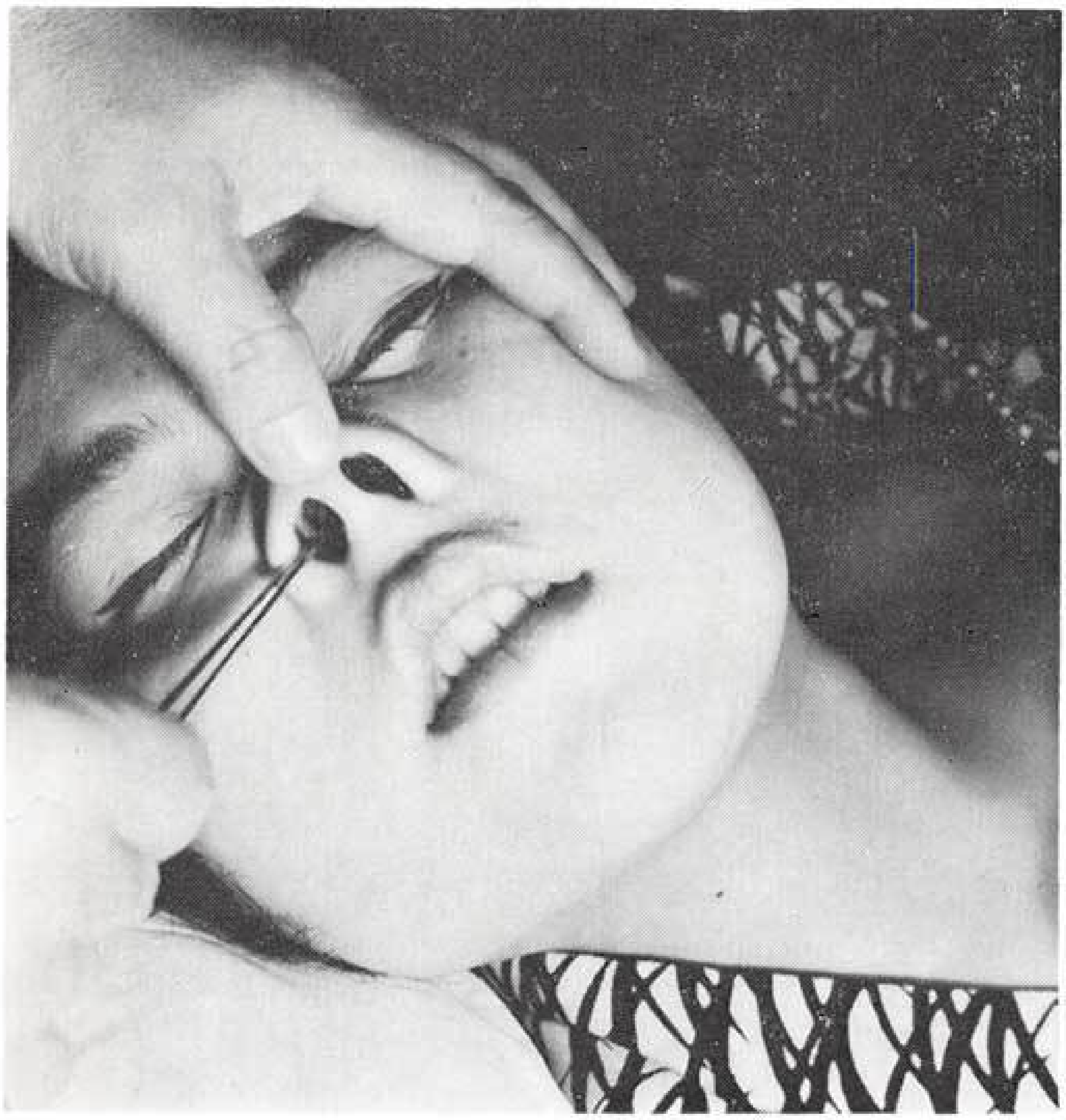
（山原清子）

恥かしいから、責めるのはイヤ……。



笠井 奈保子

鼻毛を抜く



鼻毛を切る

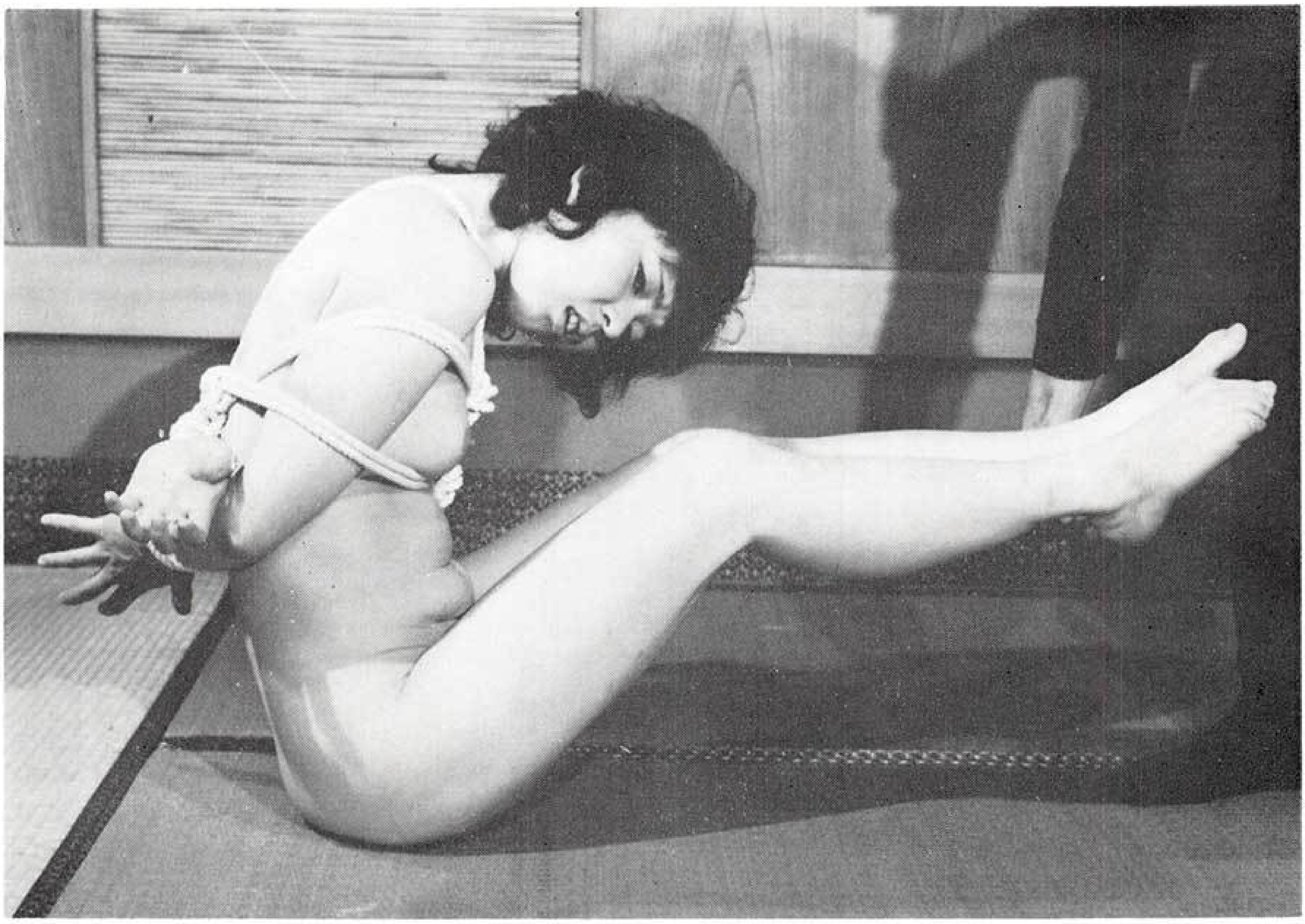
（山原清子）

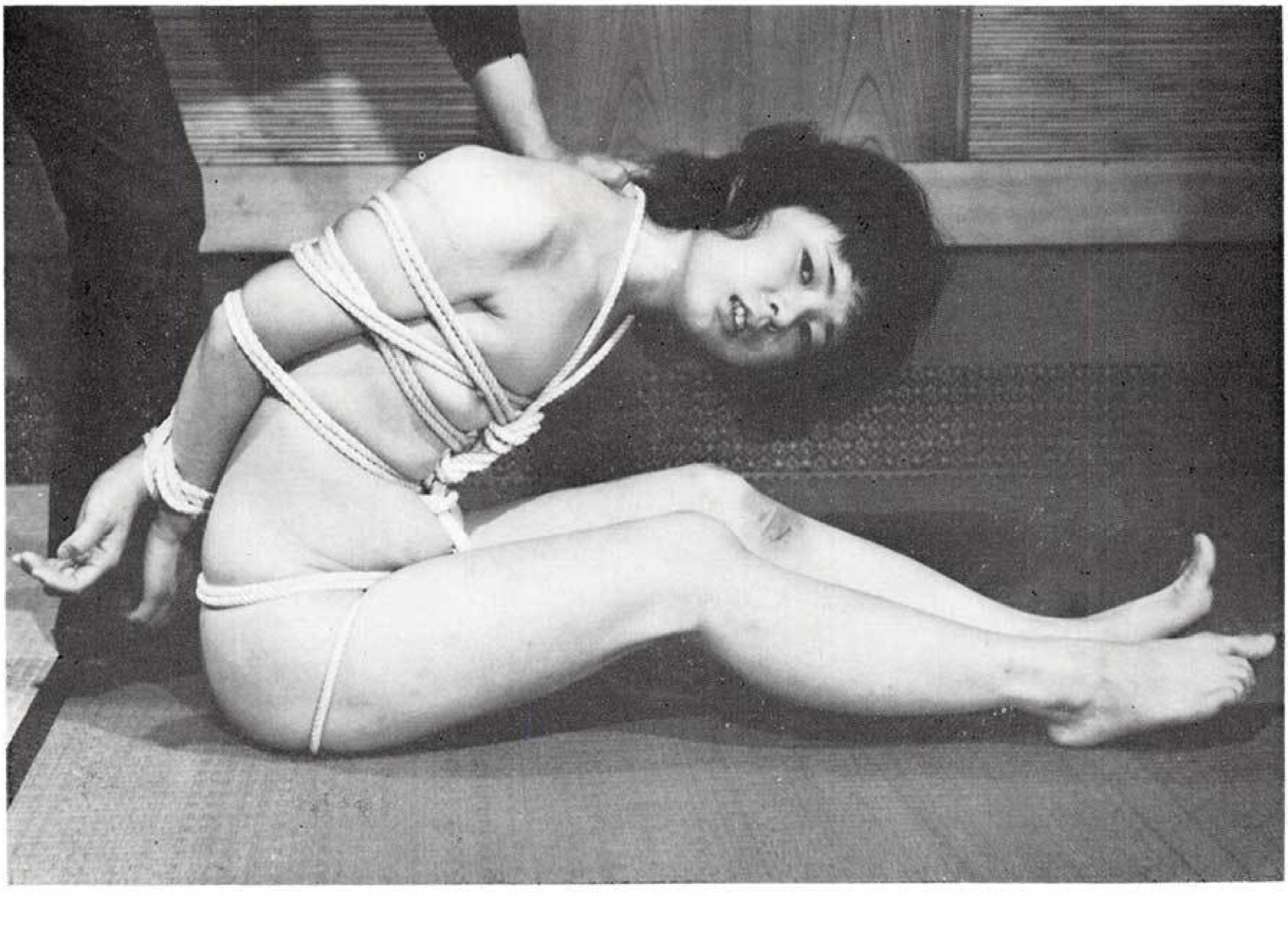
羞らいも忘れて……。

笠井 奈保子

責め始めの段階

前田　真知子





本格的に責め始める

前　田　真知子

両脚を引き挙げての変化

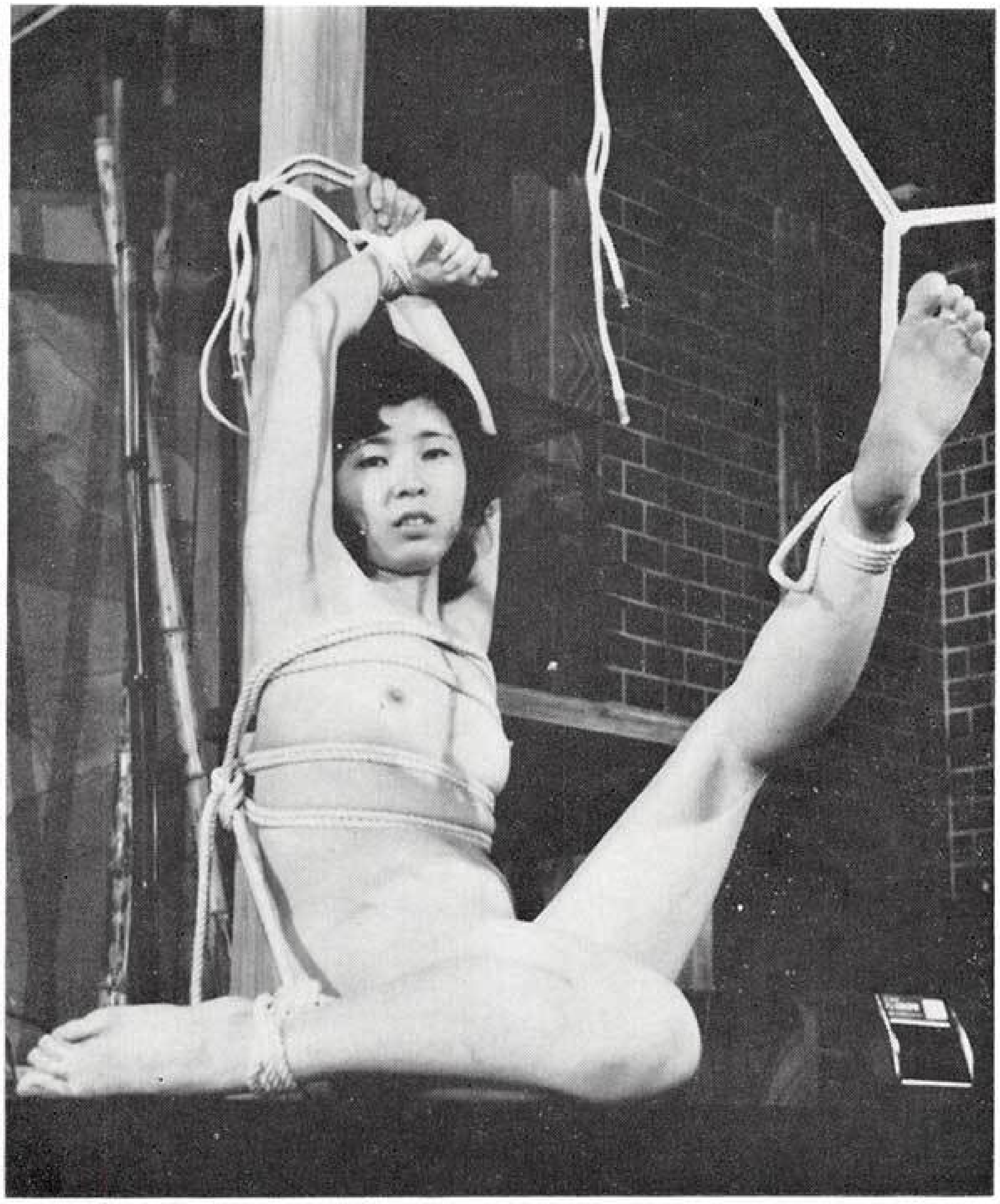
片足を引き寄せての変化

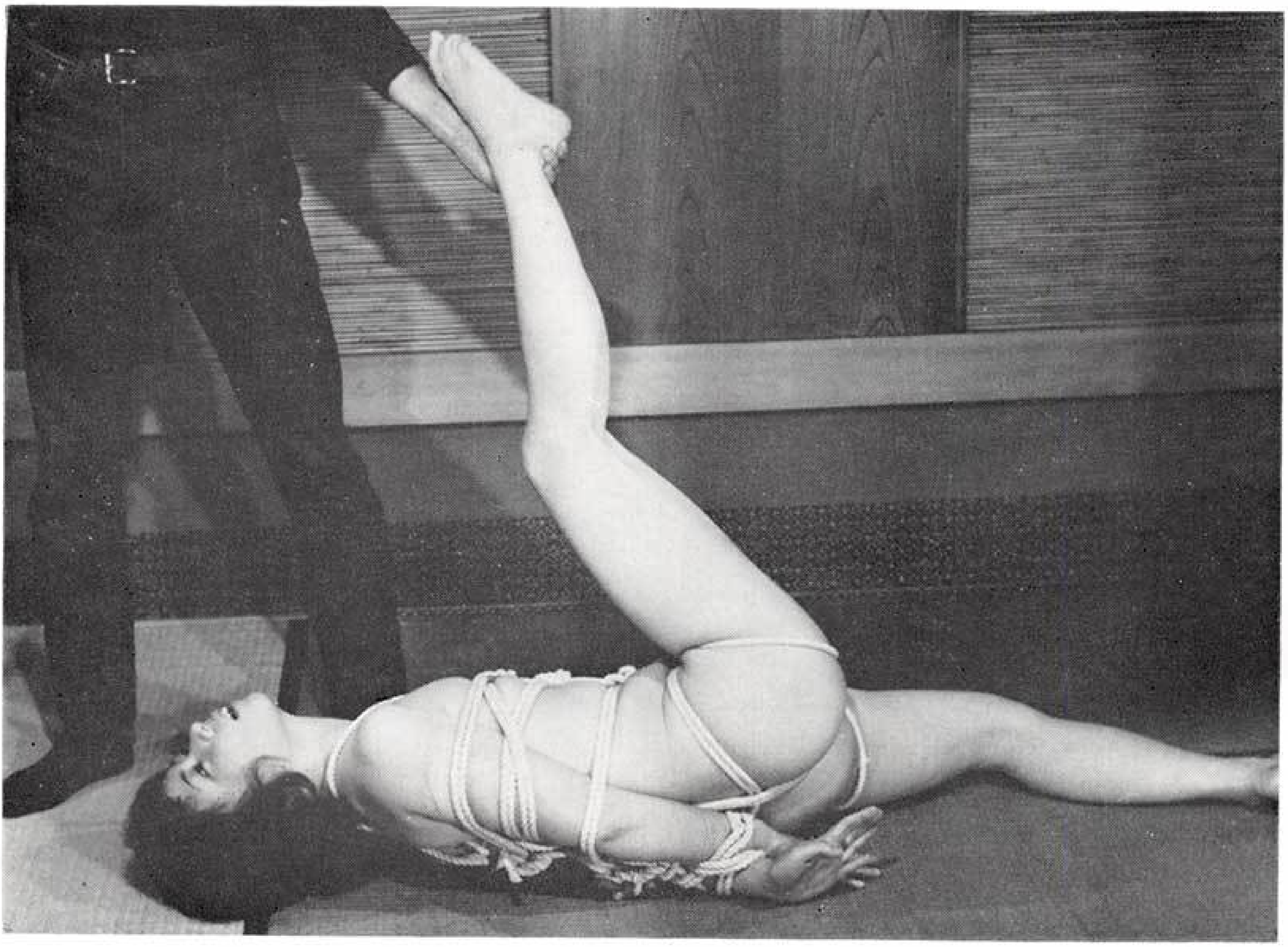
前田　真知子

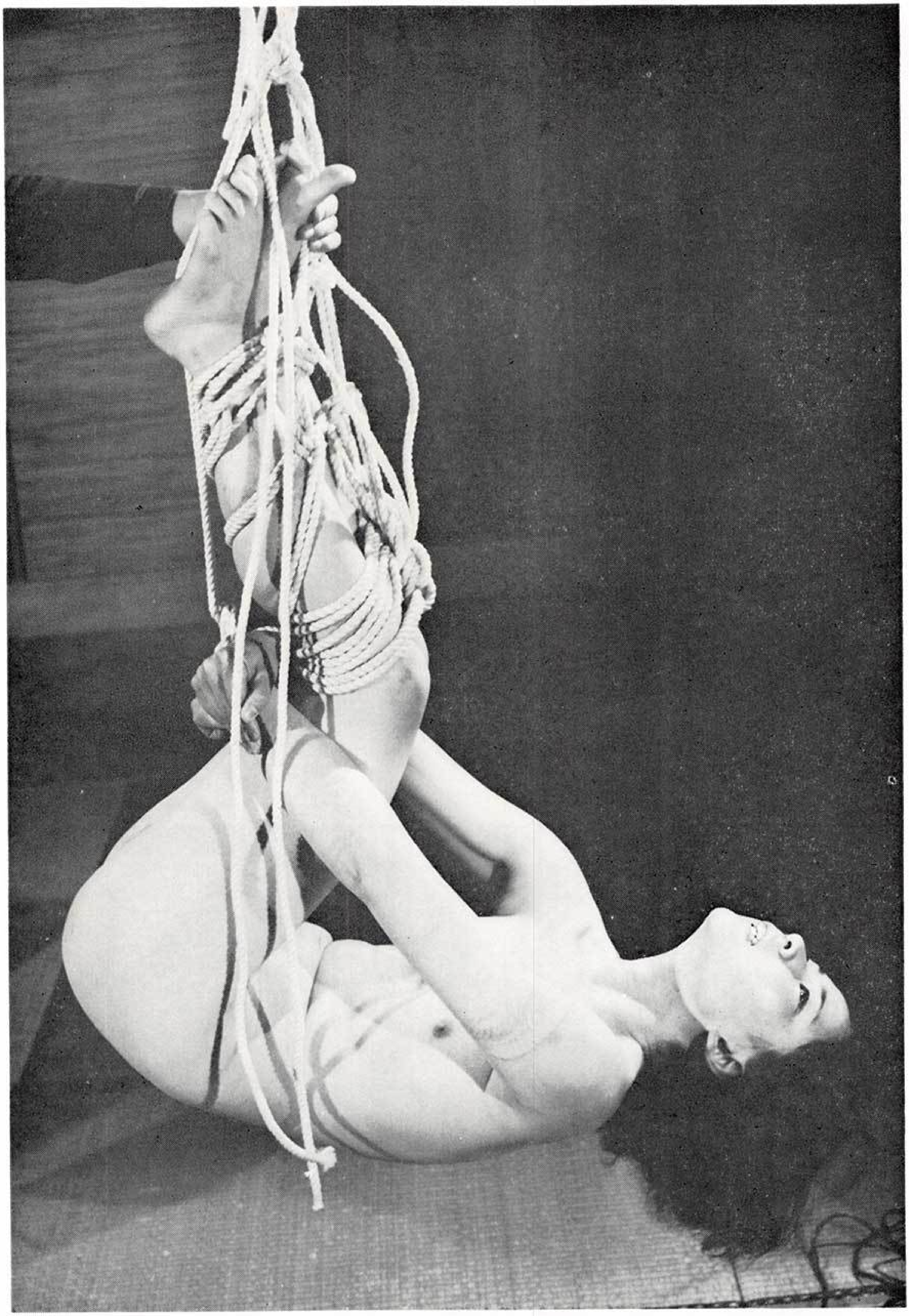
女体の緊張を求めた片足挙げ

食卓の上での足挙げ責め

前田 真知子







「駿河問い」の一瞬

前田　真知子

奇譚クラブ

1972年8月号

＜第26巻第8号・通刊第294号＞

息苦しい猿ぐつわ

モデル・梨花悠紀子

透明なビニールの布片が、ぴったりと鼻と口とを掩って、その上から黒ベルトが口中の詰め物を吐きだすことを防いでいる。

完全に呼吸を止められて、二十秒、三十秒と時間が経つにつれて、くぐもった息は忽ちのうちに、身体の中に内訌して豊かな乳房がぷーっと膨らんできたように見えた。

マゾの極致は死につながると言われるが、まさに息詰まるような緊迫の一瞬である。

（松村春吉・記）

……高村浩子様へ……

愛の感情とSM願望

——サド騎士——

浜名湖の沖の方から吹きつける風が今夜は特に激しい。ヒューヒューと電線を切る音。ガタガタと鳴る雨戸。そんな音を聞き流しながら、今、浩子さんの「M女通信」を読み終わったところです。今日は給料日なのですが休暇をとりました。

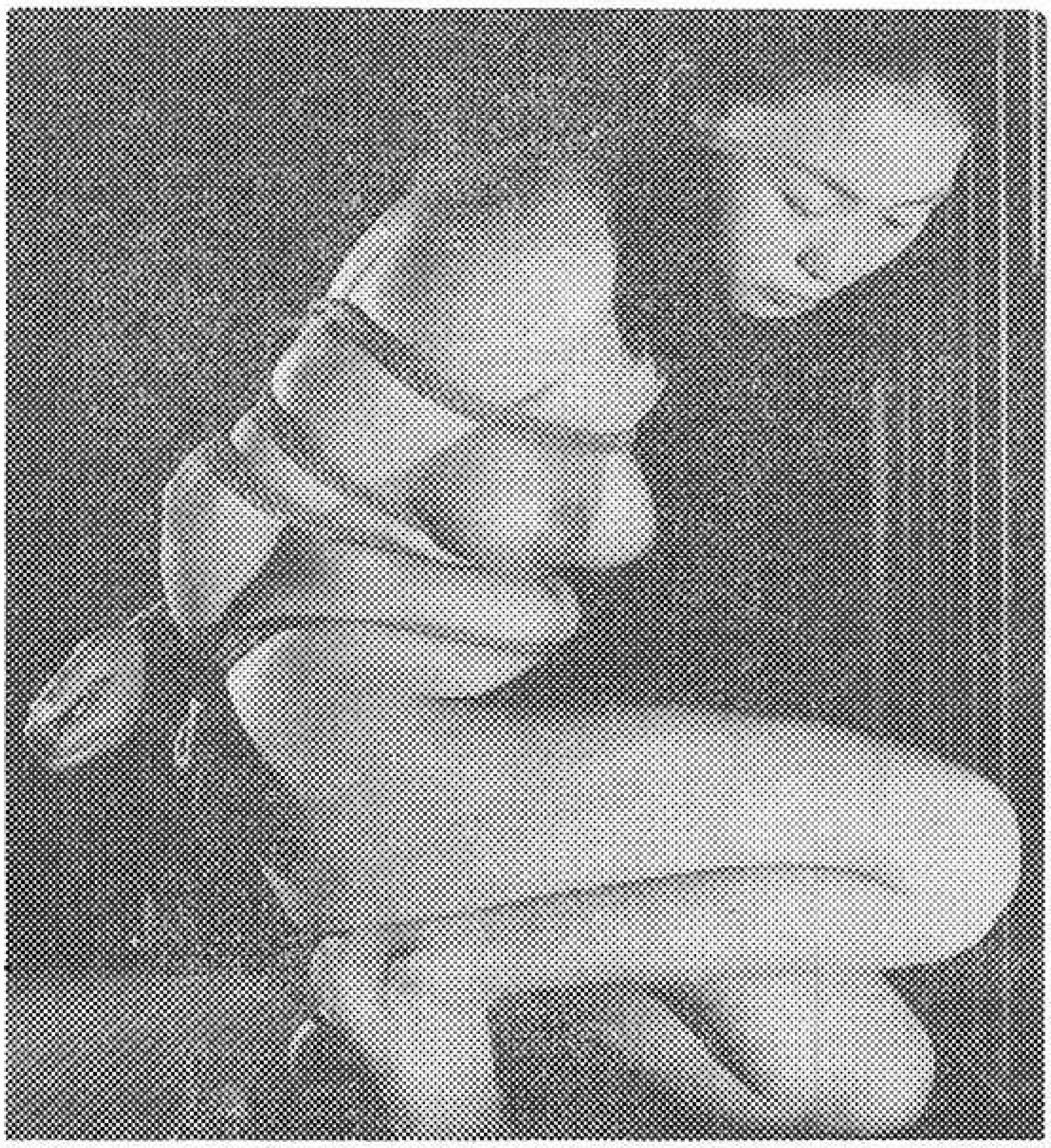
　ここは旅館の男子寮ですが、今は他に誰もいません。だから不気味な程、静かです。昨日、やっと「奇ク」が届いたので、ゆっくり読もうと思っていたのに、朝からボーリングへ誘われました。まさか奇クを読むから行けないとも言えず、遅番の同僚と球ころがし。あまり気乗りしなかったのですが、最高二〇八を出した時には、さすがに、ぼくも嬉しかった。ボーリングは大分、以前から、やっていたが、月に三回もやるようになったのは、現在、勤めているこの旅館へ来てからです。

　結局は、夜になってしまったのですが、やっぱり「奇ク」は落着いて……でも内心はワクワクしながら……読むに限りますネ。途中でやめずに一気呵成に読んでしまい、しかる後に気に入ったところを、もう一度じっくり読むという算段です。

　〝パロディ「花と蛇」〟いいですネ。塚本鉄三氏のカメラ・ルポも、ぼく好みのポーズが多くて思わず引きつけられてしまう程です。それに相変わらず女性扱いに巧みな辻村隆氏のカメラ・ハント。本当に、このように、仕事にせよ一応、M女性を縛ったり、いじめたり、出来る諸氏が、うらやましい。

　ぼくは今まで女性を縛ったことはありませんが、軽い鞭打ちなら経験があります。その女性はI子と言い、ぼくの理解者の一人だったのです。「愛の証し」として彼女は、ぼくの性向を認めてくれました。一体、愛とは何でしょう。その一つの答は彼女によって分かります。即ち、愛とは理解なりと……。

　私達は、自然や音楽、または絵画などを純粋に愛することは出来そうです。何故なら、それらは私達を決して裏切らないからです。ところが愛する対象が人間の場合には事情が変わります。ある意味で自分自身が信じられないように、相手を百パーセント信ずることが可能でしょうか？　もし信ずることが出来たなら最高です。しかし現実には、毎日のように社会面を賑わしている人間関係の激しい葛藤が引き起こす事件が後をたたないのは何故でしょう。結局は相手に対する疑惑、嫉妬猜疑など不信感と独占欲から、こうした悲しい出来事が起こるのです。ぼくは、こう思い



ます。

人間の感情は常に不条理に満ちています。愛する感情は、人間の感情の一つです。だから愛の感情は不条理と言えます。

ぼくのI子は、ただひたむきに信じ、そして愛してくれました。そして、ぼくも燃えました。どんなに言葉を尽しても決して言い表わすことのできないような、純粋な……そして繊細なものでした。涙で語り、沈黙と雄弁とが交叉した完璧なものでした。彼女は自ら進んで愛することの喜びを知ったのです。しかし、愛することを知った彼女は、愛される喜びも知ったのです。

ぼくは、どちらかというと現実派です。彼女の心はあまりにも純粋だった。それ故にこそ、愛されることを知った彼女の胸中を察すると泣けてくるほどです。彼女は決して、ぼくの求めたM性向ではなかったにも拘らず、ベルトの鞭打ちを甘んじて受けてくれたのです。ぼくの性向に迎合しようとして……。白いキャンバスに、あなた好みの色を塗って……といった彼女を忘れようとしても無理です。

しかし、破局が訪れました。現在は過去となりました。愛とは理解なり。理解し、知ってしまった後は、どうなる、どうなる？

愛しないのも、つらいです。又愛するのもつらいです。でも、愛して恋してしまう心なのです。知るためには愛さねばなりませんし又、愛するためには知らねばなりません……と、倉田百三氏は言っております。話が横道にそれて申訳ありません。

横道に入ったついでに、古いぼくの手記がありましたので、ここに書いて見ます。

○

「私は恋をしたい。素晴しい恋を……誰はばかる事のない恋を。何故か恋に恋してしまう心が淋しい。

でも恋しては、いけない。相手を傷つけるから。自分が傷つくのは、いい。しかし、相手が傷ついたら困ってしまう。

恋は恐ろしい。恋は魔物だ。取りつかれたら最後、その胸のうちを、ずたずたに引き裂いてしまう。

恋をしたい。

でも我慢しよう。自分のためにも、相手のためにも、恋だけは、すまい。

大金持の恋は出来そうにもないし、厭だ。貧乏の恋は出来ても、傷つく事が分かるから止した方がよい。分別臭い恋はいやだ……」

＜四十六年五月頃＞

○

「何故に相手の気に入るようにするのか？　彼が好きだから……。彼を愛しているから。とってもとっても、彼の事が気になります。フーン。それほどまでに思いつめているの？　ええ！　彼のために色々としてあげたいの。そして彼の傍に、いつも居たいの。だって彼って素的だもの。そうよ。好きになるのは仕方がないの。好きになるのに、いちいち理由なんかいらないわ！　ただ、今、彼が好きなのが実感なの。ううん……好きと言うよりは愛しているのよ。好きと言うのは何となく漠然としているワ。愛しているのよ。そうよ。愛があると思うの。こんなに……ホラ！　胸がドキドキしちゃうのよ。彼のために一生懸命、尽してあげたい。それが、女心ってものよ！

理解したいの。知りたいのよ、彼のすべてを。理解するためには、いろいろと話をしたいの。彼の趣味とか考え方とか……ウーン。一番大事なのは、彼が私の事をどう思っているかという事ネ。彼の気持が、はっきりと分からないから苦しいのよ。彼の気持が理解できるかしら……。言葉と行動と考え方などを見て、判断するより他には方法がないと思うワ。だから、愛するって事は理解することかも知れない。でも、愛は美しい誤解ともいうし、決して、すべてが真実ではないような気がする。彼が他の女性と話をしているのを見ると、頭へ来ちゃうしネ。とても、がっかりして私の事など、てんで頭にないみたいに思われてしまうのよ。だから、こっちだって彼の前で見せつけてやる時もあるの。それは私を、ほおっておくと知らないから、という意味が含まれているかも。他の男性と話をしていても、でも心は彼のものよ。私の心は……彼に、それが分かって欲しいと思うの。彼が野球が好きなら、私も少しは野球を覚えなくちゃあ。彼が肉が好きなら……きっと、おいしい肉料理を作ってあげるの。彼が思う事、好きな事……そして私に出来る事なら、何でもやってあげたい気持、分かる？

うん！　それに彼って、とても淋しがり屋だから、私が慰めてあげたいの。そうよ、そうよ！　彼には、私が必要なのよ！　もし彼が、いろいろな点で完全な男性だったら、私なんか、とても彼の心に入る隙が、ないのだから。彼って、とても、やさしいの。この前だって、私が、ちょっとした事で泣いていたら、彼が来て、私の目を、じっと見つめて言ったワ！　「ほらっ。泣くのを止めて。そんな弱虫ではないはずだよ、君は！」といってくれたワ。そういう彼の暖かい気持が、とっても嬉しいの。今、倖せよ、恐ろしい位。夢もあるし、希望もあるし、きっと、うまく行くわ』　〈Ｓ子の日記より（創作）〉

○

愛とは、なんと魅惑的で夢想的でしょう。彼女の愛は純粋なのです。その愛を誰が妨害できるでしょうか？　お金だって、時間だって、すべてを超越した愛こそ、彼女自身が求めていたものに違いない。彼女はただ、自分を、否、自分自身を、すべてさらけ出し、自己犠牲の真只中にあって、ひたすら愛を求めているのです。愛される事より愛する事の喜びを知った彼女は、ただ一目散に向かっていく事と思います。

「愛は惜みなく奪う」ものであってはいけないのかも知れません。彼のすべてに、いとしさと愛されたい気持が、つのればつのる程、彼を精神的に束縛してしまうような気持にさえなってまいります。果たして、彼女がひるがえって、彼にふさわしい女性であるか否かを考え始めた時、彼女自身の内面的苦痛は徐々に、湖に投ぜられた波紋の如く拡がって行くでしょう。自分の欠点と短所は、知り過ぎ

るほど知っている自分を考えた時に、本当に彼にとって充分な女性としての自信を持っている人は、何人いるだろうか。どんなに賢明で頭の切れる女性とて、一個の人間の心のすべてを知る事は不可能に近いと思われる。

おお！　何という苦しみが始まったのだろうか。知っていて知らないなんて事が、果たしてあるだろうか。彼にふさわしい女性であるためには何をどうしたらよいのだろうか。愛し、そして愛される女性であるための条件があるだろうか。お化粧をし、洗濯をし、料理を作る。ただそれだけで……充分といえるだろうか。深く愛すればこそ、彼の自由な行動を束縛してはならないと思うようになってくる。海より深く、空より広く愛していればこそ、男の夢をかなえさせてあげたいし、又自分をも愛して貰いたくなってくる。彼を愛していれば……彼が他の女性と親しくすれば腹も立ってくる。彼は自分だけの彼であって欲しいと願うのは、当然の事なのです。これは彼を愛するが故の、独占欲ともいえましょう。彼を他の女性に渡したくない気持は充分理解できます。

かといって、そこで腹を立てることは出来ません。彼は仕事中なのかも知れませんので……。あまり近くで、いつも、まとわりついていると、彼に嫌われる恐れも出て来るのです。だから自由にしてあげたい。

――愛の自由と独占――です。

今は、お互いに愛し愛され合っている二人でも、どんな障害に当たって気持が変わるか分かったものではない。愛し合っている時には、とても障害などないような気持で一杯なのですから……でも家の事情とか心変わりなどは、よくある実例なのです。新聞等の社会面に出てくる事件の、男女関係のもつれから発生するものが多いのを見ても、愛し合っていただけに、その事件は、まさに悲劇的要素さえ呈しております。男女の……いや人間の感情の変化する機微に触れる事は悲しいかも知れません。それ程、愛し合っても、何かのキッカケで憎み合う事は、しばしばです。それは愛が深ければ深い程、憎しみも深くなってくるのです。それは期待と希望とを裏切られた口惜しさ以上です。すべてを捧げ尽して愛して来た相手の心変わりが、とても悲しく、また憎悪の炎となって燃え上がるのは、この時なのです。愛するが故の憎しみは、本当に恐ろしいまでに人間破壊へと迫っているのです。何故なら全生命を賭けた愛ゆえにこそ……。

――愛の中の憎しみ――

苦しみが多ければ多い程……苦しめば苦しむ程……その後の喜びと楽しみは大きいものとなるでしょう。例えば仕事の上でも、そうです。とても仕事が忙しく、くたくたに疲れた時に飲むコーヒーは、とてもおいしく感ずるものなのです。チョット好意の目を向けただけで……又はチョット親切にしてあげただけで、もうたちまち、熱をあげてベタベタとまといつく男性に、女性は愛を持ってしまうでしょうか。否、違うようです。二人の愛が芽生えるには、それ相当の時間と交際がなければならないような気がします。勿論、世の中には一目惚れなどということも多々ありますが……それは別として……。

愛し始めると、いろいろ悩み苦しみます。自然や動物等を愛するようにはまいりません。何しろ相手は、自分と同じように感情も理性をも兼ね備えた人間なのですから。相手の気持を確かめたい欲求が湧いてきて、どうしてもいられなくなります。何気ない視線の中に精一杯の愛をこめて投げかける時、すでにその瞳の中に純粋なものを秘めているのです。しかしながら最高の恋は、何といっても忍ぶ

恋なのです。簡単に燃えあがって簡単に消えてしまう恋では、本当の恋ではないような気がします。苦しんで苦しんで……又、忍んで……耐えて、この恋がみのる時程、感動することはありません。苦しみが大きければ大きい程、又、喜びも大きくなるのでしょう。

――愛の苦しみと喜び――

　しかし恋が……又は愛が必ず、みのるとは限りません。多くの愛は、お互いを傷つけて悲しみの、どん底に陥ることが、しばしばなのです。極端になった時は、愛は別れと共にあるのです。恋人に対し「さようなら」をいう時、始めて、その恋と愛とが永遠に、その人の心の中に燃え続けるのです。（初恋を忘れ得ないように……）。それこそ知って……愛して……そして別れてゆく。それが人間の悲しい運命なのかも知れません。

　しかし、悲しい運命のために詩が生まれ、小説が出来、絵が描かれるのです。人間の淋しさと悲しさを知ったら、その現実を如何に耐えてゆくか……。淋しさと悲しさを知った人間が内面で恋をする時、その淋しさ故に、又、悲しさ故に、恋は深く内部へ沈み、その表情は、ますます素晴しくなるように思われます。魅力的な女性とは、内面に秘めた恋情が自然に、次から次へと知らずに溢れ出てくる人のことだと思います。言葉では、たった一言「好き」というのが、出て来ないで苦しんでいる。

　同じ言葉でも、我慢して耐え抜いた上で、自然と口から、ほとばしるものは、何と人の感動を揺り動かすことでしょう。愛は雄弁を欲し、又、沈黙をも欲します。ただ目と目が……視線と視線が合っただけで、意味の通じる時もあります。そして時には、熱心に生活設計を夢みて、時間のたつのも忘れて雄弁になる場合もあるのです。愛する異性が熱心に話をしているのを聞くのは、素晴しいことです。それが、未来にかける夢のかけ橋の時は一層に……。

――愛の沈黙と雄弁――

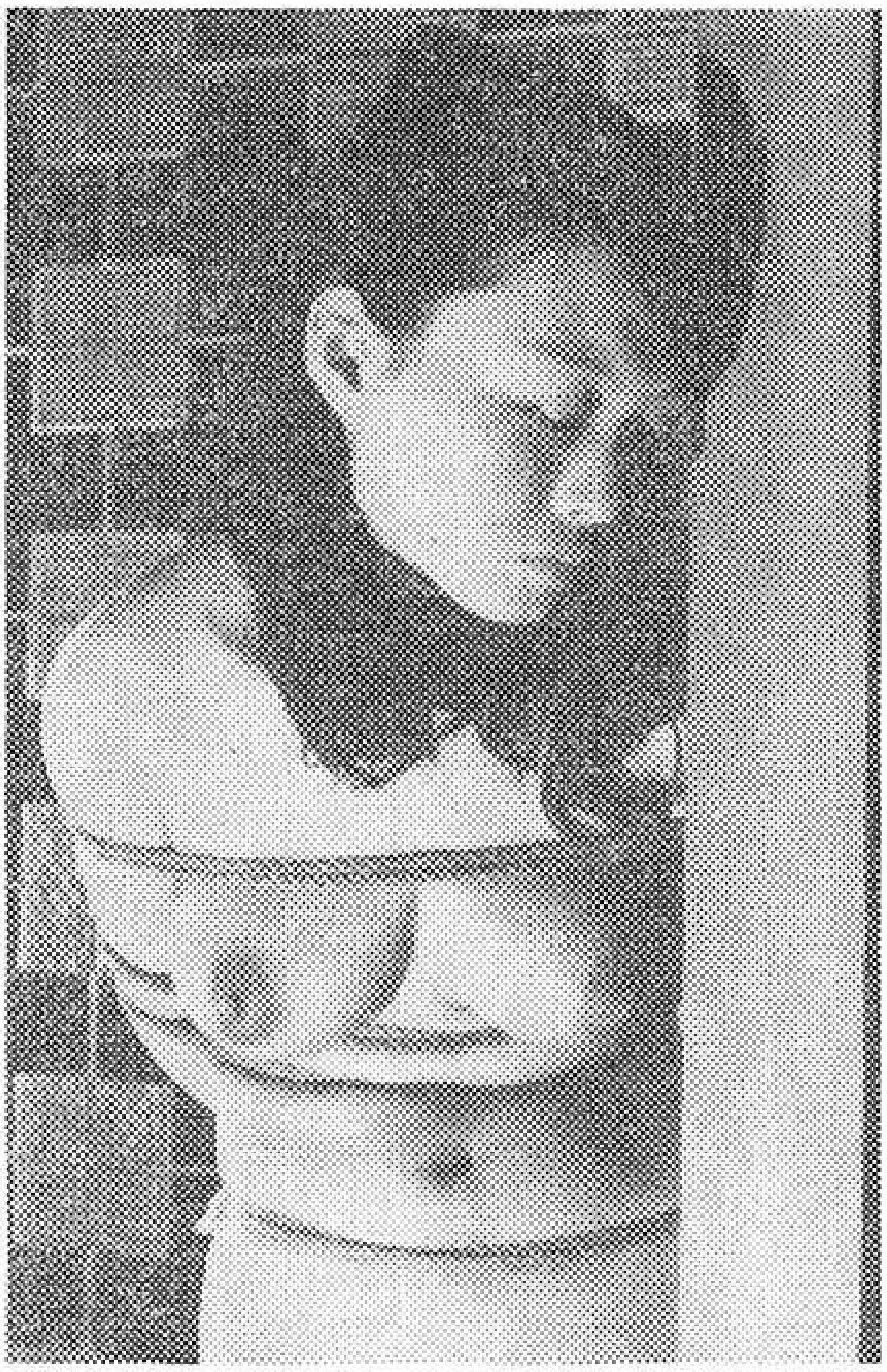
　愛について、いろいろと私なりに考えてみましたが、大切な事は、愛とは思想ではなく行動であるという事なのでしょう。全人格的な行動の裏付けこそ、愛するものの特権であると思っております。だから「愛」と「愛する」とは違う訳です。「愛」については、さまざまな手段とマスコミで知ることはできます。しかし「愛する」ことは主体的な自分自身の行動を通してのみしか知ることはできないようです。　〈四十六年六、七月頃〉

×　×　×

　ぼくは、あらゆる意味で今迄、現実にはM女性はいないと思ってまいりました。空想と想像の中で、どんなにM女性を欲したか分かりません。それに、ある種のあきらめにも似た感情に襲われ、空想なら空想でもいいと思ったりしたのです。本当にS男性とM女性との結びつきなど、稀有の事なのですから……にも拘らず、こうして又、無駄な抵抗をこころみる自己のムホン心が、うらめしい位です。ぼくは女性を縛ってみたい。ぼくは女性を苛めて恥かしめてみたい。言葉で書けば簡単ですが、自己分析した時に、ぼくは自分自身がなさけなくなる時もあるのです。裏返して見れば、女性に対する心理的劣等感なのでしょうか。ぼくの心は乱れます。それこそ、「書くべきか書かざるべきか。それが問題」なのです。

　ぼくが浩子さんを想う時、次のような情景が頭に浮かんできます。

　静かな離れに通された二人。女中が去ると俺は突然、本来の野獣性を剝き出した。一瞬の、何となく気まずいような気持と雰囲気を



吹き飛ばすべく、俺のビンタは浩子の頬に炸烈した。

「ヒッ！　痛い！」

目の前が、くらくらとして、その場へ坐り込む浩子を、俺は足蹴りにして、

「このアマ！　さっさと準備せんか！　うすのろ！」

と言った。

「ハッ……ハイ」

「ホラホラ！　お前はメスブタなんだろう。とっとと脱げよ！」

あまりの俺の急変に、いささか戸惑っている浩子へ、追い討ちをかける。スーツを脱ぎ、スリップを取って、ブラジャーとパンティだけの浩子の肢体は、これから始まるであろう男の暴虐に、かすかに打ち震える。

「これも取るんだバカヤロウ！　分からんのか！」

俺は手をブラジャーに掛ける。

「アッ、イヤ！」

思わず胸を押えようとするが、俺の手の方が早い。ブラジャーは、むしり取られて、それでなくても抱え切れない程の張切った豊満な乳房が現われる。俺の脳裏を電流が走り、嗜虐心を刺激した。俺は、用意して来た麻縄を手に持った。

「覚悟しろよ。今日こそ、お前の体内に流れているドス黒いマゾの血を、叩き出してやるからな！」

この離れは、たちまちのうちに嗜虐の部屋と化した。

「ひどい事ばしないで……」

それは主人と従者と呼ぶには弱く、むしろ御主人様と一匹の女奴隷との関係であろう。

「人間並みの事を言うな。さあ、手を後ろへ回せ！」

俺は動き易いように背広を脱いで、ワイシャツ一枚になる。麻縄で、たちまち浩子を縛り上げてゆく。両手を縛って鴨居へ結びつけてバンザイのかっこうにし、次の麻縄は……それは縛ると言うよりは「噛む」と表現した方がよい位に、浩子の上半身を噛んだ。浩子の柔らかで瑞々しい肌に深々と喰い込んだ麻縄によってオッパイは更に一層、隆起した。乳房の上下に麻縄を掛けて、まだ余ったのを腹へと回して縛ってゆく。

浩子は目を閉じて……それでも時々小さな叫び声が、その紅唇から洩れる。まだ序の口であろう。浩子は、それでも早く被虐の境地へ達したいと思っているかのように、縛られた上半身を、くねくねと動かしている。驚くほど締まった麻縄であった。

俺は、浩子の自由を奪ってしまうと、用意してきたケースの中から長さ一・五メートル位の本格的の鞭を取り出す。その鞭はアラビ

アの方で実際に使われているという鞭で、先年、俺が万国博のアラビア館で買ってきたものだ。長い鞭の柄の方で俺は、その飛び出した大きな乳房をグイと押す。

「アッ！　アッ！」

　ギシギシと、両手に連結された鴨居が音をたてる。

「どうだ、このみだらなオッパイめ！　こらしめてやる！」

「アッ……アッ……イ……」

　とぎれとぎれに発する悲鳴は、もう悦虐のためのものか。浩子の乳房は曲がり歪んでいる。鞭の柄は、情け容赦なく左右の乳房を責めたてる。乳首が深く陥没して、俺はますます猛り立つ。ぐりぐりと、ねじるようにして乳房を苛めてゆく。

「エエッ！　返事をしろ、メス犬め！」

「アッイヤ……イヤッ！」

　かすかに顔を左右に振って、責苦に耐えている。ひたいの縦ジワが、それを物語っていたが、それでも浩子は、明らかに悦虐の境地を、さまよい始めている。

　俺が、次に手にした小道具は孔雀の羽根であった。

　スラリと伸び切った肢体は、あくまでも美しく、故に俺の暴虐の嵐は、その風速を一段と増して来る。孔雀の羽根は、長さ五〇センチ位で、先端の方が柔らかな毛で出来ており色もあざやかである。羽根は、そろそろと、しかも意地悪く、その伸びきった若肌を操り始める。ビクッと筋肉が収縮して、思わず顔をのけぞらせる浩子であった。

「フッフッフッ。どうだ。羽根で操られる気持は？　今のうちに充分、肌で泣くのだ。いいな、メスブタめ」

　俺は、羽根を移動していった。くねり、悶える浩子。胸で大きく息をしようとしても、ギッチリと喰い込んだ麻縄が、それを阻むので、自然と浩子は短い間隔でのヒュ、ヒュと言ったふうの呼吸しか出来ない。俺は浩子の耳元で、ささやく。

「マゾのドスケベ！　こうされるのが、そんなに嬉しいのか？　好きなブタめ！　思い切り泣くがいい！」

「アッア――アッ……ユルシテ……」

　熱い息と共に耳たぶを襲ったこの言葉に、不自由な裸身を打ち震わせて、更に悶える浩子。だが、心の中では絶叫している。

「もっと苛めて！　もっと、ひどくして！　お願い！」……と。

　そんな浩子の心の中を見通している俺は、次の責め行動へ素早く移る。一たん、両手をほどいて、鴨居からは、解きはずす。乳房を縛った麻縄は勿論、そのままである。浩子が一息、入れる間もなく、

「そこへ四つん這いになれ！　エエ、うすのろメスブタめ！　お前に、ふさわしい、かっこうなんだ。早くしろ！」

　浩子は四つん這いになる。その白い裸身はうっすらと汗ばんで、操り責めの苦しさを偲ばせる。俺はニヤリとして、あらかじめ用意してあった犬の首環をはめ、くさりをつけると、まさに牝犬そのものとなる。

「御主人様の足を清めるんだ！　さあ、なめろ！」

　俺は靴下を脱いで、右足を浩子の顔の前に差し出す。もじもじする牝犬。俺は足の親指で、強引に浩子の紅唇を割ってやる。

「バカ！　もっと、ちゃんと清めるんだ。そう。よく御主人様の足の味を覚えておけ。分かったな。このきたないメスブタめ！」

　返事の代りに浩子は、俺の足指に更に舌を這わして奉仕の意を表わす。

「さあ、よし、歩け！　この部屋を回れ！」

　俺は、靴ベラ兼用のプラスチック製の鞭棒

で、そのモコモコと動く双丘を打ちすえた。「ピシッ！」音は大きいが、さほど痛くはないはずだ。

首環をつけて、のそのそと部屋を歩き出す浩子。「遅い」といっては叩き、「ブタ！」といっては叩いて、四つん這いの、あられもないかっこうで這い回らせる。浩子のほてった柔肌に、冷たい鎖が触れてヒヤリとする。こうして浩子は一時的にもせよ家畜として、又、奴隷として飼育されて行った。

勿論、俺の妄想は、これで終わった訳ではない。これから、まだ延々と浩子の責めは続くのであるが、それは次の機会にしよう。

〃浩子に告ぐ〃お前の好きな責めは次のうちどれか？　その責めを充分にしてやる。

一、鼻に対するもの

(a)鼻輪付け　(b)鼻リング吊り　(c)手の平による鼻潰しと鼻孔開き　(d)鼻ひねり　(f)鼻タバコ差し　(g)鼻穴拡張器　(h)コヨリ鼻穴刺激

二、乳房に対するもの（乳首を含む）

(a)ロープ等乳房挟み　(b)乳房突き針　(c)乳房露出革ブラジャー　(d)竹棒乳房挟み　(e)鉛筆乳房崩し　(f)洗濯バサミ乳房　(g)羽根擽り乳房　(h)乳房ひねり潰し　(i)乳房分銅吊り　(j)ヤットコ乳房泣き　(k)乳房ローソク立て　(l)凧糸乳房縛り　(m)内側棘付ブラジャー締め　(n)輪ゴム乳房打ち　(o)ブラシ乳房擦り　(p)乳房鞭打ち……他、多数

三、双丘（アヌス）に対するもの

(a)浣腸――(イ)空気　(ロ)食塩水　(ハ)牛乳　(ニ)グリセリン　(ホ)洗けん水　(ヘ)酒類、他、液体

(b)拡張器　(c)生花器の代用　(d)直腸鏡で拡大　(e)強烈錐揉み革製の拡大棒　(f)玩具ボーリングピン　(g)イルリガートル　(h)触口大型ガラス棒　(i)封じ用凸形ボタン　(j)剣山　(k)バイブ（大小）(l)鞭打ち　(m)コブ付きロープ　(n)ローソク立て代用……その他

四、前面部分に対するもの

(a)大小バイブ　(b)毛抜き、分銅吊り　(c)コーラ等、壜　(d)野菜、果物、卵類　(e)剃毛　(f)導尿カーテル　(g)拡張器　(h)大型万年筆　(i)攪拌器　(j)三角木馬　(k)凸形革製生理帯　(l)瘤付荒縄　(m)天狗面　(n)羽根擽り　(o)封じクリップ　(p)変形焦点自転車　(q)股裂き　(r)自慰鏡　(s)とぎ汁かゆみ責め　(t)ローソク　(u)変形……その他

五、全身に対するもの

縛り――(a)首縄高手小手　(b)片足首引き付け　(c)あぐら　(d)開股膝頭縛り　(e)菱縄　(f)立ち縛り　(g)変形エビ　(h)逆エビ　(i)十の字　(j)首縄亀甲　(k)椅子開股　(l)大の字　(m)後手柱縛り

責め――(a)髪吊り　(b)尻挙げ開脚　(c)二つ折り臀部挙げ　(d)縄猿轡痛め　(e)開股正面逆立ち　(f)逆反り弓吊り　(g)鉄砲　(h)ソロバン　(i)四つん這い……その他、いろいろ（小道具も同様）

ざっと挙げただけで、こんなに数多くの責めのバラエティがあるのだ。浩子よ、選べ！

×　×　×

思うに、ＳＭは考えれば考える程、奥行は深いと思います。しかし、ぼくの空想は……現実とは、かけ離れながらも、さまざまな姿態で、苦悶と悦虐にあえぐ女性の吐息が聞こえる程に、迫ってまいります。自分の心に忠実であればある程、その嗜虐願望の度合は深まりゆくのです。いじめて泣かせて、恥かしめて、徹底的に征服したいものだ……と。

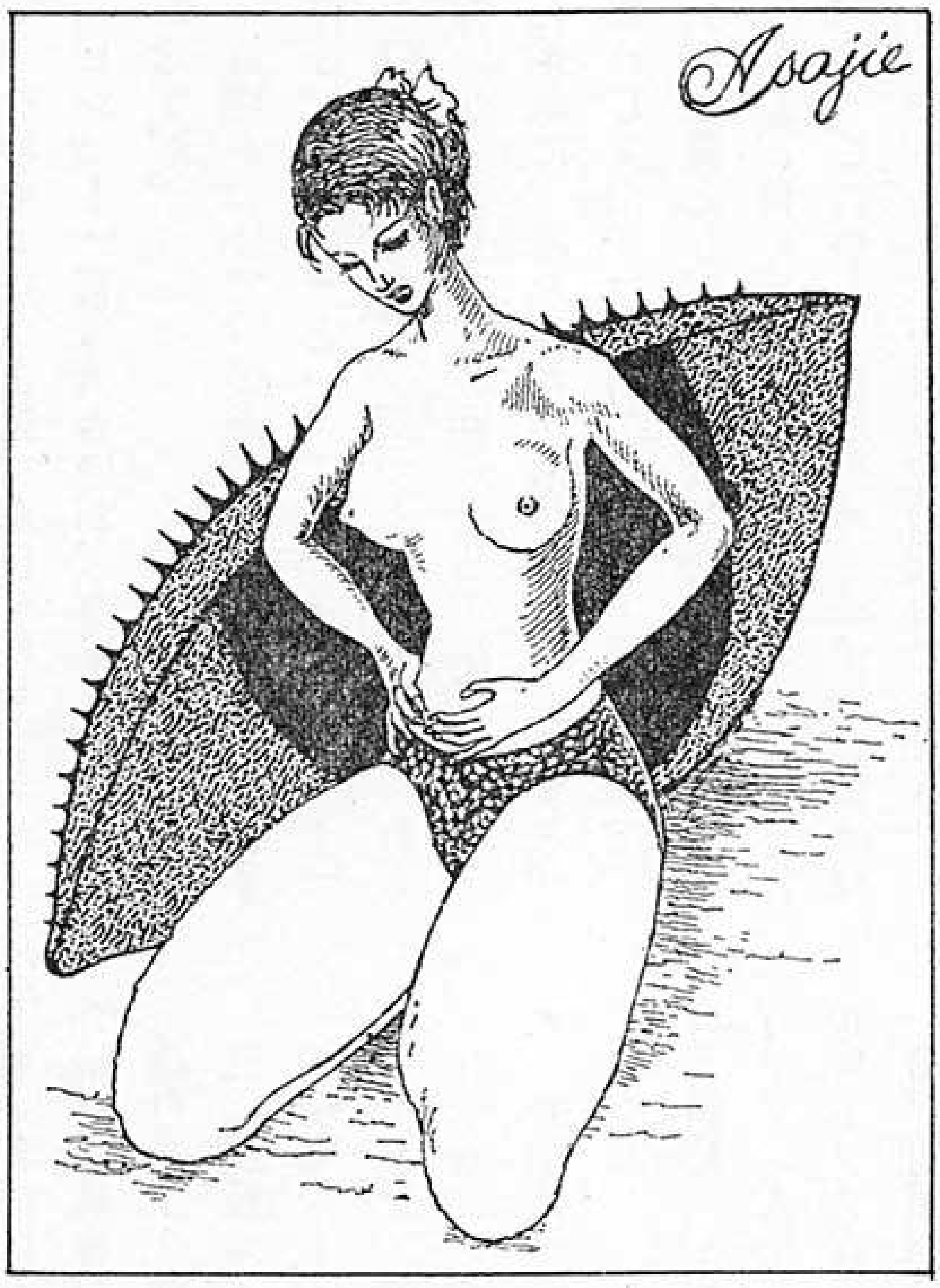
浩子さん。長々と、しかも、だらだらと、思いつくままに書きつらねてまいりました事をお詫び申し上げます。移り易い人生の中でただ一度なりとも自己の主張を表現してみようとするのも、今の言論自由のありがたさだと思います。高村浩子さんの前途に、幸多かれと祈るばかりです。

懸賞〔告白、手記、体験〕入選作品発表

女性の下着に狂う

木元無人

カット・室井亜砂路



　ぼくは、いま机に向かっている。二十Wの螢光スタンドの下に、ぼくを妖しく躍らせた憎むべきものが重ねられてある。

　ぼくは、なぜこんなものを持ちだしてきたのだろう。ぼく自身に対する罪の意識は深いのに、この持主に対してはさほど悪いと思わないのは、なぜだろうか。

　ぼくを狂わせた——幾つもの下着。この持主は、まだ何もいい出さない。これほどの下着が一度に消えたのに気付かぬはずはないのに……。

　ぼくのこの恥ずべき行為は、いつかは知られ、白日のもとに晒け出されることだろう。その時のことを思うと、ぼくはどうしてよいか分からない。きっと、死にたいような気持になるだろう。

　いや、彼女は、もう知っているのだろう。知っていて、わざと触れないでいるに違いない。でなければ半年以上も、ぼくの恐れている騒動が起こらないはずはないからだ。

○

　従姉の八代千枝が、ぼくの家に越してきたのは去年の三月末だった。彼女は今年二十歳で、S女子短大に籍をおく素晴しい美人だ。背も高く、混血のようなマスクをしている。ぼくの部屋の隣は兄の部屋だったのだが、兄が結婚してアパートに入ったので、そこを、通学に便利だという彼女の頼みに応じて、ぼくの両親が提供したのである。彼女は急速に家族の一員のような存在になっていった。

　ある日、早く帰宅したぼくは、好天につられてベランダに出てみた。

　ぼくの家は海のそばで庭がないため、二階にベランダを広くとり、父の趣味で観賞樹が整然と並べられてあるし、海が一望のもとに見渡せ、夏には日光浴に絶好の場所になるのだが、隅に洗濯物の干し場が作られてある。

何気なく見廻したそこに、父のYシャツやぼくの下着に混じって、うすいピンク色の布が、風に翻っているのが目についたのだが、その瞬間、ぼくは訳もなくドキリッとしたのだ。

ぼくのその時の心境を、どう説明したらよいだろう。上手に言葉がみつからない。突如として、血液が沸騰したようだ。

そして、無意識の行為と言ったら語弊があるだろうが、ぼくは物干し場へ近寄って、そのピンク色の布を手に取って、つくづくと眺めていた。うすいガーゼを何枚も重ねたようなパンティである。白い花柄が刺繍されていた。

直感的に、彼女のものだ、と思った。母はこんなものを穿くわけがない。ぼくの心臓の鼓動が、耳を強く打った。

宝物でも扱うように、丁寧に触って眺めていたぼくは、本能的にかどうか分からなかったが、それを裏返しにして見た。ほんのりとした黄ばみが残っていた。

ぼくの心臓は破裂しそうになった。それが狂気への疾走の始まりだったのだろうか。気がついた時には、ぼくは、その黄ばみに鼻を近づけ、匂いを嗅いでいたのだ。

しかし、洗剤の匂いがしただけであった。舌をつけたかったが、自分の心の中に「やめろッ」と叫ぶものがあって、それは躊躇われた。

われに返ってみると、ズボンの、いやに突っ張るのを感じて、未練を残しながら追われるように離れたが、突然に、ぼくを包みこんだこの興奮は、しばらくの間、何も手につかせなかった。

○

ぼくはその夜、自分の行為の背信性に責め立てられ、彼女と、まともに顔を合わせられなかった。自分の部屋にとじこもると、余計に昼間の悩ましい下着が目の前にチラついてどうしようもないのだった。

ぼくは、ますます襲いかかってくる興奮を払う法もなく、引き出しの奥から、友達に借りてあったヌード雑誌を取り出すと、ズボンのチャックをはずした。きわどいヌードポーズと、八代千枝の美しい容姿とピンク色のパンティが眼底で複合し、或は脳裡に飛来してぼくを呻かせた。

このとき始めて、八代千枝という女性を冒瀆したような快楽に浸れたのである。

○

ぼくは、その日以来、度々、物干し場に行っては、彼女の下着に触れるようになった。だが、いずれも洗濯したものばかりなので、いつの間にか彼女の直接の体臭を欲するようにまでなっていた。ぼくにとって、満足のいくようなものでなかった。

時には、まだ濡れている下着を手に取り、胸を昂ぶらせて、もはや、ためらいもなく、その黄ばみを吸ってみたこともあったのだがアルカリ性の洗剤の味がしただけであった。

日に日にぼくは、彼女の体臭の付着した下着を、という欲望に悩まされる度合の強くなって行くのを感じていた。

その、ふくれ上がった、せつないほどの願望を果たすことができたのは、偶然に訪れた幸運のおかげだった。

家の洗濯機は、浴室の前に置かれていた。この脇の洗濯カゴの中に、彼女は入浴の際に下着を替えて、入れておくらしいのは分かっていたのだが、ここはキッチンから丸見えでとても、カゴを覗くようなことはできなかった。それに母は、どんなに遅くとも、その夜のうちにカゴに入れられたものを洗濯してしまうので、なかなか彼女の下着に触れる機会を摑めなかった。

その日、所用で、たまたま遅く帰ったぼくは、最後の入浴者となった。服を脱ぎながらふと隅を見ると、浴室の前に置かれているはずの洗濯カゴが持ち込まれていたのである。何かの用で持ってきて、元の場所に戻すことを忘れていたものとみえる。

ぼくは、しめた、と思った。

今、考えると、この偶然は悪魔の悪戯のように思える。以後、こんなことは一度もなか

ったからだ。

ぼくは小躍りして、カゴの中を覗いた。

あった！　不用心にも、彼女さえ気にも止めなかったらしい。Yシャツやスリップ類の上に、ふわりと一枚、白いパンティが、のっかっていたのだ。

ぼくは頭に血が駈けのぼるのを覚えながらそのパンティを手に、とった。

まだ洗っていない彼女のパンティ。そう思うと興奮せずにはいられない。両手で拡げてみた。憧れのシミが、ほんのりと見える。ぼくは震えながら、それを裏返した。ほんのりだったのが明らかなものに変わった。鼻を近づけると、ジーンとくる匂いと共に、脳天を貫くような喜悦が急速に湧き上がった。快感が同時に訪れた。初めて嗅ぐ匂いであった。他人には嘔吐を催すのみかも知れないこの匂いが、ぼくには、この上もない甘美な宝に思えたのだ。

ぼくは『千枝、千枝！』と胸中で叫び続けた。異臭と甘酸っぱい味とが混淆して口中に拡がった。ぼくは完全に思考喪失に陥っていた。パンティに覆われた目の中に五色の紅が撥け、とび交う想いであった。

我に返ったぼくは、大急ぎでパンティをカゴに戻し、その上に、わざと、ぼくの下着を濡らして重ねた。彼女のパンティが濡れているのを、母に見とがめられないように……。

○

夏休みの時期が来ると、彼女は、よく学友を連れて来ては、ベランダで日光浴をするようになった。彼女の水着姿は悩ましく、ぼくは豊かな乳房のふくらみや、ぷっくりとした尻を見ては、あらぬ妄想を逞しくした。

浴室でのことがあって以来、彼女の汚れた匂いを直接に味わったことを思い出す度に、激しい興奮と罪悪感に、さいなまれるようになった。

彼女が何も知らずに明るい笑顔で話しかけて来ても、ぼくは眩しくて、正面きって、その顔を見られなかった。会話も上ずった調子になる。大きな瞳で見つめられると赤くなり居たたまれない気持になるほどだった。

そして彼女は、ますます美しくなっていくようであった。

八月の初め、例によって彼女は一人の学友を連れてきた。二人は何やら喋りながら、二階に上がってゆく。

ぼくは居間で雑誌を読むふりをしながら、二人の気配を窺っていた。

やがて二人は水着姿になって下りてきた。泳ぎにゆくらしい。千枝はブルーのセパレーツ、学友（Lとしておく）はオレンジ色のセパレーツだった。海岸には近いので、水着姿のままでも往復出来る。

〝チャンスだ！〟

ぼくは二階へ駆け上がった。彼女の部屋のドアを開ける。全身に熱い血潮が漲る。素早く部屋の中を見まわす。壁隅にシングル・ベッドが置いてある。目指す二人の衣服は、ベッドと反対側に位置する机の上に重ねられていた。

ぼくの視界には、その衣服以外には入らなくなった。まず、千枝の衣服から、さぐる。下着はスリップに、くるまれていた。たたんであるのを崩さぬように下着を抜き取る。白いパンティから彼女の体臭が匂ってくる。拡げて裏返す。憧れの汚れを見つめる。浴室の時以来の感激だ。匂いを嗅ぐ。唇をつける。カーッと燃え上がるような火照りが全身を包み、一カ所が痛んだ。

つぎにLの方を、さぐる。Lも可愛い容姿をしていた。ぼくはチラッと見たLの顔を思ってスリップの下からパンティを取りだす。水色のうすいパンティ。千枝のものより汚れていた。匂いを嗅ぐと、千枝のとは、また違った甘い香りがした。

ぼくは千枝のパンティとLのパンティとを比べていたが、たまらないほどの昂ぶりに我慢できず、自分の部屋に戻ろうと、パンティを、もとどおりにした時、階下から彼女たちの話し声が聞こえてきた。

ひとりが上がってくる気配だ。ぼくはドキッとしてドアの前で一瞬、躰を固くした。背

筋を冷たいものが走る。

それからの数十分は、小説の世界へのめりこんだみたいに思える。ぼくは、あわててベッドの下へ潜った。幸い、ベッドカバーが床まで垂れていたので、躰を隠すのに不自由はしなかった。

戸が開く。ぼくは息をひそめてベッドカバーの端から覗いた。千枝である。彼女は、タオルで濡れた素肌を拭くと、背中に腕を伸ばした。ドアに背を向けているので、ぼくの方からは真正面に見えた。ホックをはずして水着を取った。ぼくは、くらくらする思いで、目だけを彼女の胸に浴びせた。生まれて初めて実際の女性の体を真正面から見た。ピンク色の乳首が、上向きについた形の、いい乳房だ。水着の下に穿いていたパンティに手をかけた。ぼくの心臓は早鐘のように騒いだ。

パンティが下がる。ぼくの目は、輝くような千枝の全裸像に集中した。ヌード雑誌のモデル女より美しいと思いながら、彼女の裸身を瞼に灼きつける。

彼女はバスタオルで体を拭いてゆく。自分の城で一人きりと信じる裸女の動きは、大胆なポーズを次々と作りだす。ぼくは全身がガクガクと震えそうだった。

Lが入ってきた。下でシャワーを浴びて、水着を脱いできたらしく、バスタオルを体に巻いていた。千枝もバスタオルを纏うと、交替して出て行った。

Lは机の方に向いてバスタオルを取った。体を拭いている。残念ながら、ぼくには後姿しか見えない。それでも、ふっくらとした尻が妖しく蠢いて見えた。Lは下着を取りだして穿く。そしてスリップを着て、ベッドの上に腰かけた。髪を梳き始めたらしい。

ぼくは、蒸されるような暑さの中で、長い時間を耐えなければならなかった。

ようやく八代千枝が部屋に帰ってきた。シャワーを浴びてきたらしい彼女は、バスタオルを取ると、ベッドに居るLに背を向けて、つまり、ぼくの方を向いて別のタオルで拭き始めた。その時、より真近に彼女の全裸身を見ることができた。さらにパンティを穿くとき、ぼくの憧れとする下着の汚れの源泉までが見えたのである。

ぼくは二人が着替えて、階段を下りていくのを耳で確かめると、脱兎のようにベッドの下から抜け出て、忍び足で部屋に戻った。喉咽が渇ききっていた。全身が汗で水を浴びたようだった。ぼくは素裸になると、いま見た千枝の裸身とパンティの汚れを想った。ぼくを包みこむ紅の世界は、すぐにきた。

千枝は、その後に会っても態度を変えることはなかった。まったく知らないらしい。ぼくは心からホッとした。

○

八月の下旬になって彼女は生家へ帰った。見送った翌日、ぼくは彼女の部屋に忍び込んだ。用心のために内側から鍵をして全裸になると、彼女の小さな洋ダンスの引き出しをさぐった。下着類は二段目にあった。何枚も重ねられたパンティやブラジャー、スリップ類。ぼくは甘い匂いに酔うことが出来た。

さらに奥をさぐってみると、ネット状の厚い下着がでてきた。初めて見るゴム製のものだ。拡げると、黒く変色した汚れが、ところどころに付着している。アンネ用のパンティだと分かった瞬間の感激！　強烈な異臭！

ぼくは、それを穿いてみた。ピッタリと吸いつくように締めつけてくる刺激に恍惚となった。ブラジャーやパンティを両手に掴み、匂いを嗅ぐ。千枝！　千枝！　と口の中で叫びながら転がり廻った。

ぼくは、特に悩ましいパンティを数枚、選んで自室に持ってきた。夜な夜な、それを穿いたり、吸ったり、眺めたりしては、千枝を抱いているような錯覚に陥った。

○

彼女は、洋ダンスから下着がなくなっているのを知って、どんな態度に出るだろう。ぼくは胸が締めつけられる思いで、いつまでも机の上のパンティを、眺め続けていたのだった。

——（おわり）——

SMカメラ・ハント

〈奥村マリ・岸　悠子・篠原レイ子の巻〉

矢も楯もたまらぬとき

辻村　隆

新幹線で、東京—大阪を三時間で突っ走るスピード時代でも、特別にさし当たっての要件がないと、何となく往来が臆劫になるものである。

昨秋以来、再婚旅行を兼ねて、行く行くといっていた、岸英雄、悠子夫妻も、いつしかずるずるべったりの伸び伸びになって、どうやら来訪の約束も、立消えの状態になり、去年から期待していた、悠子さんとのSMプレイも反古になりそうで、その後は、彼の便りも途絶えたままであった。

彼としても、自分の方からいい出しておいて不履行にしたのが心苦しいのであろうが、日が経つにつれて、日々の仕事に追われ、心ならずも旅行の方は、計画倒れになったのではなかろうか。

二人きりの、誰に気兼ねも要らぬ甘い生活をしていると、今更、何を好んで旅行などするのかと、その意味を持たなくなったのかも知れない。

ロマン派生とプレイした佐野みさ子さんから、編集部の方へ、私の名指しで、SMプレイの要請の連絡もあったが、日時の指定があり、うまくその日に都合がつかず、そのままになっている。彼女も人妻のこととて、いつでもいいというわけにもゆかず、先方が都合がよければ私に差支えあり、私の方で体の空いている時は彼女の方で都合が悪いという状態で、是非一度はプレイしたいと思いつつもこれ又、ずるずるべったりの日が経ってゆくのみであった。

偶に出掛けるのだから、上京した折には、あれもしたい、これもしたいという欲が、反

って災いしているようで、相手を一人に絞れば雑作もないのであるが、つい欲が出てしまう。だから四月中旬、団鬼六さんとの対談のために上京して以来、ここ当分は東京へ行くこともないと思っていた。

　それが、ヒョンなことで、同好のドクター氏（産科）に誘われ、彼の話相手みたいな恰好で上京することになったのである。

　彼の用件は、K大医学部に在学中の独り息子の為に、マンションを買う目的であった。来年は大学院に籍をおき、国家試験、インターンの前途を見越して、不自由な下宿住いより、いっそ、マンションの一室を買ってやろうとの親心であろう。

　病院の診察は昼過ぎですまして、土曜日の夕方から上京し、その夜、新宿、六本木界隈を、のみ廻ろうというのであった。

　SMプレイの下着や、珍奇な器具にも関心の強い彼は、私の案内で〝マルゴ〟へも寄ってみたいというのである。

　翌日曜日は、彼は彼、私は私で好きなように時間を過ごすつもりである。彼とのつきあいは、日曜日の朝までであった。

　新幹線のグリーン車、ホテル代、飲食一切負担するからとの有難い申し出に、私は一も二もない。彼には、昨年も台湾行で世話をかけているし、ノンコとも、よく一緒にのみ廻っていて、私にとっては、又となきスポンサーであった。少々多忙でも、彼の無理は、きかねばならない。

　彼はホテル・オークラに、二人分の部屋を予約してくれた。

　日曜日の一日を、有意義に過ごすべく、私は同好者の二、三人に連絡の便りを、したためた。

　岸英雄にも、その旨を伝えて、差し支えなければ、しばらくの時間を割いて、久濶を舒したいと書き送る。

　同好者の中でも、二年許り前から、文通で知り合った吉川修は、上京の折には、自分のSMガールフレンドを必ず紹介するから、その節は、是非共、連絡してくれという、嬉しいことをいってきていた。

　飛び石連休続きになる五月初旬の土曜日の四時半、新大阪駅でドクター氏と落ち合う。彼は例によって手ぶらであるが、私はハントの夢を托して、いつも黒革のショルダーバッグに、プレイ道具の一切を詰め込んできていた。

「ハハ、相変わらず、重いのに御苦労さんなこったな」

　ドクター氏は、バッグに目をやって笑う。どうしても手ぶらになり切れない私の、宿命に似た支度が可笑しいのであろう。

「当てがあるの？」

「ないこともない――」

「フーン、そういうものかな」

　彼は車中の三時間、あれこれと、興深げに問い訊す。

　聞かれるままに、岸悠子の事、吉川修のSMガールのこと、同好者Hの夫婦プレイなどを、べつに隠すこともないから、スケジュールとして話す。

　しかし、在京時間は日曜日一日だけで、その夜には帰途につくつもりだから、そうそう多くも遍歴は出来そうもない。中にはキャンセルもあり、都合の悪い仲間も出来てくる事を見越していた。

　箕田氏に告げたら、佐野みさ子さんや、東京の緊縛志望女性も紹介してくれたであろうが、とてもそこまでは手が廻る筈もなく、今回のことは、箕田氏にも告げていなかったのである。

　謂わば、気侭な当たって砕けろ式の上京である。

ドクター氏にすれば、東京など、それこそ隣へでも行くぐらいの気楽さで、ものものしく上京云々と考える私を、おかしがった。

多忙のビジネスマンなら、連日、往復している、現在の距離の近さだった。

成程、新幹線に乗れば三時間。私だって、東映のドキュメント映画に協力していた時はそれこそ、昼の三時過ぎから、気軽に出かけたものだ。それでいて、さし当たっての要件のない時は、やはり、東京—大阪の距離は、何となく遠く感じるのであった。

ひとしきり、喋っていたら、もう到着である。

宵の東京の、ネオンの灯は赤い。

ホテルオークラの部屋に落着いて、一休みすると、すぐさまタクシーで巷に出動する。

赤坂の、彼のゆきつけのレストランで、血のしたたりそうなビフテキとビールで食欲をみたすと、気紛れな彼の思いつくままに、新宿のマルゴへタクシーを飛ばす。

マネージャーの鍋島氏は、二度目の訪問の私の顔を、よく覚えていてくれた。

ドクター氏は、物珍しげに店内を物色するが、静からSMブームのせいか、奇抜なアイデアのSMプレイ用具が、つくるしりからしりから、羽根が生えて売れて行き、その日はこれといった目ぼしいものは見当たらなかった。鍋島氏は気の毒そうに、あらかじめ連絡しておいてくれれば、私達の為に何とか愉快なシロモノを取り揃えておいたのにと、残念そうな口吻りである。

折しも、SMメイトの、上品な中年の紳士が店を訪れる。私は先方を知らないが、紳士は私の悪名を知ってるらしく、わざわざ名刺を出して自己紹介し、さも愉しげに、SMプレイについて語るのであった。

ゆきずりの紳士であったが、私もビールを奨め、談笑するうち、彼は、

「よかったら、私が飼育しているM女性と、春宵一刻、SMプレイしてみませんか。辻村さんさえよかったら、いつでも呼びますよ」

と、旅情を慰めてくれるかのように、気軽に誘ってくれた。

私より、傍のドクター氏が乗り気になり、話は忽ちハプニングに成立して、彼はその場から電話をかけてくれた。

奇クを愛読するその紳士にとって、ナマの私という人間と話し合えたことが嬉しかったらしい。私も彼の親切を喜んで受けることにした。この土曜日の夜、いずれはドクター氏に振り廻されるのを覚悟していたから、何の約束もしていないのが、私を自由に振舞わせた。

ドクター氏は、早くも意馬心猿であった。残り少ないプレイ用具を、まるで独りで買い占める勢いで、あれもこれもと、持ってこさせる。

黒いなめし革の全身拘束具、嵌口具、四肢拘束具などを、その中から無雑作にえらび出し、鍋島氏に袋につめさせる。

ドクター氏にとっては、どんなものでもよかったのだ。春宵のつれづれに、これらの拘束具を使って、ゆきずりのM女性と、心ゆくまでSMの痴戯に耽りたかったのである。

いつしかドクター氏と紳士は、年来の知己のように親しく談論していた。

紳士は、わざわざ自宅に電話をかけ、夫人に私の声をきかせてやって欲しいという。おそらくは、仲の良い夫婦プレイの睦言に、私の噂（主としてカメラ・ハントの話題らしかったが……）が登場しているようであった。

上品な夫人の声が受話器に流れ、私は未だみぬ紳士の奥さんに、遅滞なく仄かな情念を燃やすのであった。

「これから辻村氏と少し喋ってゆきますから

おそくなりますよ」

　と、紳士は夫人に告げ、私をダシに、これから何処を、さ迷うのか、如才がない。土曜の春の宵は、人の心を浮き立たせ、何故ともなく、そのまま帰宅出来ない衝動に、かり立てられてゆくのであろう。

　時間を計って、私達は連れ立ってマルゴを出た。

　紳士の紹介する女性、奥村マリ（勿論、おそらくは仮名であろうが）の待つ、表通りの喫茶レストラン〝ドリアン〟へ、瓢々と酔歩を運ぶ。

　かなり痛飲した私の足許も、幾分、怪しくフラついていた。家庭から解放された、見知らぬ土地の気易さが、私を思わず深酔いさせたようであった。

　紳士のお仕込みが良いのか、目指す女性は既に到着していて、私達を待っていた。

　スラリとした、都会的センスを身につけた女性で、フィーリングも満点である。

　約束を果たし終わると紳士は、あっさりと立ち上がる。彼の突然の好意を衷心より謝し関西方面へ商用で来た節には、必ず再会しようと握手して別れる。

　私の虚名が、奇ク仲間では、意外に行き渡っているらしいことを、しみじみと感じさせられるのであった。

「矢っ張り辻村ダンナを引っ張ってきてよかったよ。オレ独りじゃ、どうにもならないからね」

　と、ドクター氏は、感嘆したように呟く。奥村マリと名乗った女性も、私の名を知っていた。

「奇クを読んでるの？」

　一見、二十三、四才前後の、出会ったばかりの彼女に問いかけると、

「ええ、毎月、愛読していますわ」

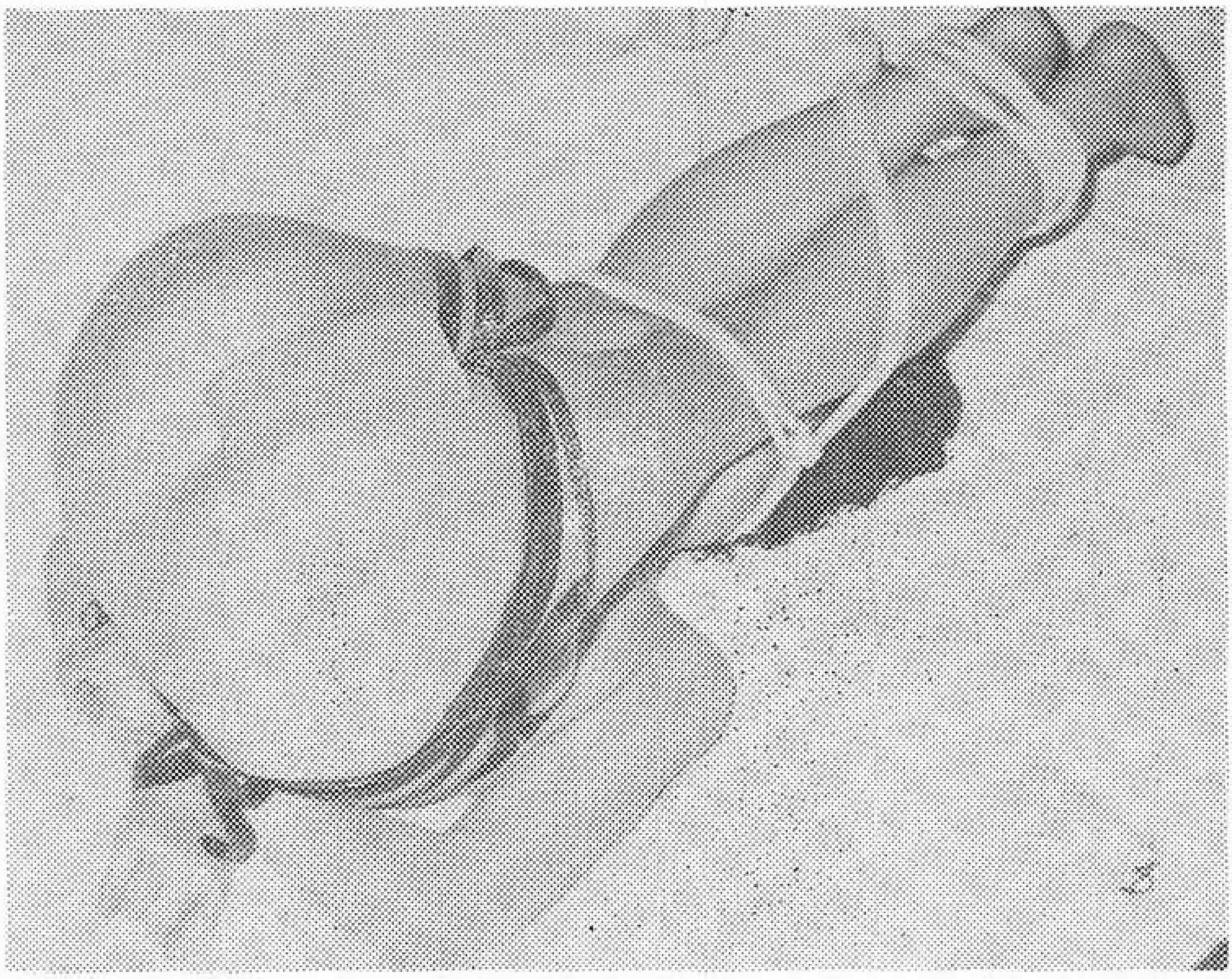
　と、心ニクイ答が、返ってくる。紳士はM女性として紹介してくれてあるし、私のことも、判っきり彼女に知らせてあった。

　私はドクター氏を、SMカメラ・ハントにしばしば登場する、例のドクター氏だと紹介する。プレイメイトは、もうそれでお互いに意志が通じ合っていた。

　勝手知らない私達の為に、彼女はタクシーを拾うと、行きつけのホテルへと走らせる。

　生憎と土曜日の夜は、アベックホテルは性の狩人で満員の状況である。

　二軒断わられて、やっと三軒目に、赤坂近



くで、どうやら落着くことが出来た。

ホテルオークラに宿泊はとってあってもSMのプレイには、どうもふさわしくない。やはり、プレイはムードのある、アベックホテルが、何となく落着けるのであった。

　男二対女一のカップルでドクター氏は、あっさりと二つの部屋をとり、時間は午後十時半頃であったが、泊り料金を支払う。

　事終われば、帰るのは、こちらの自由であった。

× × ×

プライベートな、身の上話や、M性への道程など、面倒なハナシは一切、しない。

　マリは、被虐の願望の充たされるひとときを欲び、私達は、うたかたの、春宵一刻、縛り千金を愉しめばよかったのである。

　部屋に入ると、彼女は心得たように、さっさとバスに入った。身を潔めて、被虐の全裸を曝すのも、今や、エチケットの一つでもあろう。

　意馬心猿のくせに、いざとなるとドクター氏は、場馴れた私に、プレイの先鞭をつけてほしいらしかった。

「それもいいけど、あの複雑な拘束具を一人で装着するのは厄介ですよ。センセーも手伝って下さいよ」

「ああ、勿論、手伝うよ。だけどさ、彼女は辻村という名に安心してついてきたんだからうまくリードしてくれよな」

「心得てますよ」

「ああ、よき夜じゃよ。やっぱり東京は面白いね」

「何処だって同じですよ。センセーは解放感にひたっているから、尚更そう感じるのでしょう」

「そりゃ確かだよ。寝ても醒めても、お産、お産で追いまくられて、日に何十人となく、同じところばかり見つめて暮して見給え。偶には、パアーッと、無茶苦茶に遊んでみたくなるのさ」

「毎日毎日、女性に接しられて、我々からみれば、羨ましき限りだけど、ショーバイとなると、そんなもんですかねえ」

「とてつもなくバカでかいワギナに追いかけ

られる夢をみるよ。眼医者が眼、歯医者が歯をみるようなものさ。職業でみていて、何が面白いもんか――」

　だから、一年に数回は、解放されて、何もかも忘れて遊びたいのだという。それは又、明日のエネルギーにも、つながっているかのようであった。

「少しフォトを撮ってもいいでしょう」

「折角、重いのを持ってきたのだから、いかんとはいわんがネ。少しはショーバイ気を離れて、ゆっくりとプレイの愉しさに溶け込んでみたらどう。プレイする度、新しい女性と出会う度、一にもフォト、二にもフォトと、どうも気分が中断されていかんよ。あんたはフォトを撮るためにプレイするようなものだし、オレは愉しくプレイするため、オンナをハントするんだ。ハハ、遊ぶだけのオレとの意見の相違もあろうが、いかんとはいわんがホドホドにしといてくれよナ」

　と、これが、ドクター氏と私との、いつも多少の意見の衝突である。

　フォトのためのプレイではなく、プレイのためのプレイでいいじゃないかという彼の意見はよく分かり、同感しているのである。そのくせ、心のどこかで、ハント根性が、チョッピリ、いつの場合も芽を出す私のサガを、私自身いやに思いつつも、どうしようもないのであった。

　マリは、湯上がりの裸身に、じかに浴衣を纏って、あっさりと湯浴みを、すませて現われた。

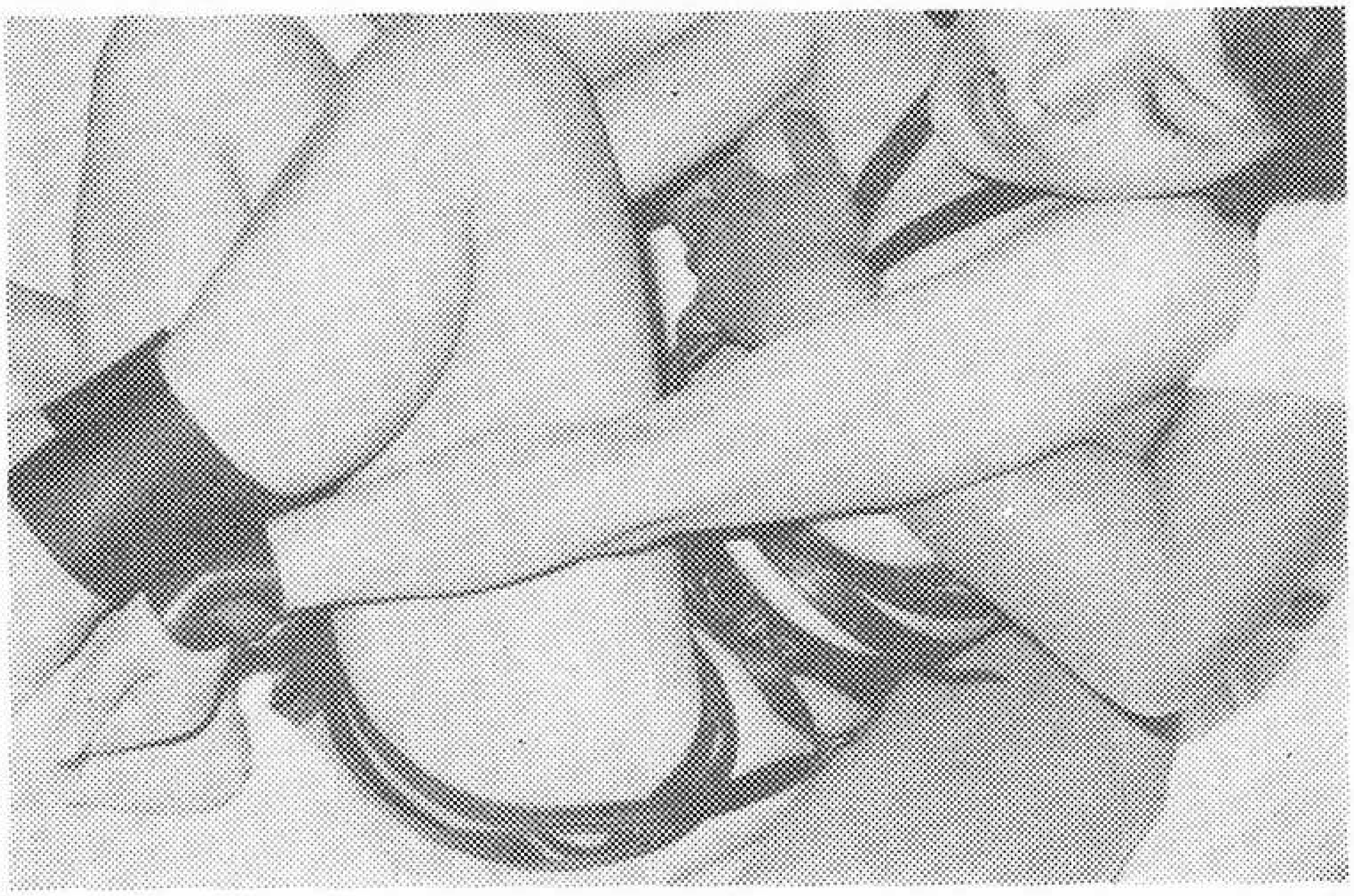
　羞恥のかげらいも、てらいもなく極く自然に、あるがままに振舞い、きどりのないのが、さっぱりとして快かった。

「そろそろ、始めようか――」

　私は、買い立てホヤホヤの、全身拘束帯を摑んで立ち上がる。つりこまれたように、ドクター氏も腰を上げた。

　マリは、さっと浴衣を裾に落とした。細身の、しなやかな裸身は、ほんのりと桃色に染まり、覚悟の上と表情もかえず、私達を、見守っている。

　縦横無尽にとりつけられた金具の尾錠を、どこへどのように使うのか使用する者によって、それは、いろいろに応用も出来る融通性を備えていたが、兎も角、胸に、股に、腿に、手にと、二人がかりで、無心の境で革帯を拘束してゆく。



　床柱を背にして立たせた、拘束像は、真白

い裸身に黒革がマッチして、欧風めいた妖しい雰囲気を盛り上げていった。

　私はカメラに走る。

　ドクター氏は、もう矢も楯もたまらぬかのように、拘束帯で締めつけられた女体に挑んでいた。更に口辺に数センチの円形がポッカリ開いた嵌口具を、マリの唇に嵌めている。

　拘束帯だけでは物足りなくなった私は、携帯してきた縄で、更に上から犇と床柱と共に縛りつけていった。

　喰い込んだ黒の拘束帯は、さながら貞操帯の如く、どうしようもなく、堅牢な秘境の防柵の役目を果たしていた。

　前にも述べたが、SMの緊縛プレイは、結局、縄に始まって縄に終わるのではなかろうか――。時として、こうしたアクセサリーを好奇と探究で使用してみても、数度使用すれば、同一の画一化された拘束のポーズに飽いてしまい、千変万化の縄を求めるようになるものである。ここにみる、マリの拘束のポーズは、緊縛というより、アクセサリーを取り付けた女体にみえるのであった。

　自由になるのは、締めつけられて、突き出した乳房の、ふくらみだけであった。

　床柱への緊縛の拘束の味を愉しむかのように、マリは眼を細め、軽い呻きを洩らして、早くも琴線を探る愉悦に、淡い陶酔の表情を泛かべていた。

　私とドクター氏の手が、自由を奪われたマリの裸身に伸び、被虐感を盛り上げるように軽く叩き、双胸のふくらみを弄び、或は、嵌口具で、上下の唇を開口したまま押えつけられている口腔内へ、指を押し込んで、息詰まる刹那の恍惚を味わわせようと試みたりしていた。

　もうこれ以上、どうにもならないと知って床柱から解き放すと、拘束帯をつけたまま、マリを布団の上に転がし、体をぐいぐい屈折させて、両手、両足を一つに、しめつける、四肢の拘束帯を嵌めていった。

　臀部が高々と屹立し、否応なく、そこにマリの神秘の扉が開かれていた。

　ドクター氏は、チラリと眼をやって、すぐ

外らし、珍しくもないといった面持ちで、四肢を拘束されて、押えつけられ、悦虐に酔ったようなマリの顔に蔽いかぶさって、鼻をつまみ、口腔に指を押し込んで、変貌してゆくマリの被虐願望に歪む、悦楽の表情を追っていた。

　彼の掌が、マリの臀部を撫で過ぎては打擲する。打擲の度に、女体はピクリと蠢動し、開ききった口腔から、言葉にならぬ、歓びの呻きが洩れていった。

　既にドクター氏は、私の存在を無視して、SMの雰囲気に完全に酔い痴れ、ひたむきに女体を愉しげに弄んで、さいなんでいた。

　いつ私のバッグから取り出したのか、羽虫に似たバイブの響きが洩れ始め、マリは被虐の歓びにのたうって、SとMが意気投合し、最早そこに私の介入する余地はなかった。

　SMの官能に陶酔し、二人は没入しつつあった。

　ドクター氏に明日はない。それだけに、今宵一夜、耽溺したかったのであろう。

　私には明日のSM的な予定がある。謂わばこれは、思いがけないハプニングで、SMプレイの飛び入りであった。

　あっさり彼に譲って、私は自分の持ちものを、そっと片附け出した。

「ダンナよ、これだけは、貸しといてくれよな。頼む――」

　彼は小型バイブを眼の前で振った。

「先にホテルへ帰っていい?」

「御自由に――」

「まあ、ごゆっくり……もう、これで会えないかも知れないな」

「オレは泊まってゆくよ、ここへ」

　ドクター氏は、充血した眼をニヤリとさせて、マリを抱いたまま、うそぶく。

　私は苦笑して立ち上がった。

「さようなら」

　どちらへともなく声をかけると、マリは、彼の胸越しに顔をあげ、

「さようなら、又ね……」

　と、済まなそうにいった。スポンサーが彼であることを、プレイ開始前に彼女は知っていたからである。

　十二時に少し前、私は独りアベックホテルを抜け出した。

　薫風が頬を快く撫でる。

　手を上げて止まったタクシーに、ホテルオークラを告げ、暗い車内に身を寄せて、奥村マリとのプレイが未遂に終わったことに、フト佗しさを感じ、今頃、激しく燃えているであろう、ドクター氏とマリの、夜もすがらの戯れに思いを馳せ、その時、何故ともなく、エトランゼの淋しさが、胸にこみあげてくるのであった。

× × ×

　ホテルのフロントが、二枚のメッセージ・スリップと、部屋のキーを手渡す。

　ツインベッドの広い部屋は、独り寝の私にとって、だだっ広く感じる。ドクター氏が帰らないことが最初から分かっていたら何とか手をうって、ベッドの空白を埋める工作をするのだったが、午前零時を、とっくに廻った今からでは遅すぎた。佗しくても私独り、この広い部屋で、ポツネンと眠るより致し方なかった。

　予期したように、メッセージは、岸英雄と吉川修からの電話の連絡であった。

　岸英雄からは、午後六時過ぎと九時半頃の二回に亘って電話があり、明日の日曜日は在宅しているから、是非、御来宅を乞うというものであった。

　吉川修のメッセージは、明日の午後一時、杉並高円寺駅前の喫茶〝U〟で、お約束の友達を紹介します。万一お差支えある場合は、

午前九時までに電話して下さい。とあって、連絡電話番号が記されてあった。

　お約束のお友達とは、いうまでもなく、彼が飼育したSMガールフレンド、篠原レイ子のことに違いない。

　午後一時に、彼等と、高円寺駅前の喫茶で出会うとなれば、墨田の亀戸天神近くの、岸夫妻の愛の巣を、ひる過ぎには引揚げねばならない。となると、かなり早いめに訪問しないと、プレイの時間がなかった。

　〝二兎を追うものは、一兎をも得ず〟フト、そんな古諺が浮かんだが、私としては、この機会に、岸悠子さんにも会ってみたいし、吉川修が、常々自慢している、若きM女性にも初見参したかった。

　SMメイト篠原レイ子のことは、彼から送られた、数十枚のフォトで承知済であった。

　かなり強烈な緊縛プレイや、彼の手製による、手枷、足枷などを嵌められた、被虐のポーズなどのフォトから窺い得る限りでは、可愛いい悪女めいた、潑溂としたお嬢さんのようであった。

　余談になるが昨年の夏、東映撮影隊の一行が、日常性の私を撮るために、私宅を訪れた時、偶々、アルバムを整理する私の光景をカメラに入れたが、その際、首枷に喘ぐ若い女性のカラーフォトに目をつけた中島監督が、この一枚をクローズアップにして撮し〝性倒錯の世界〟で発表してしまった。

　この女性が、外ならぬ篠原レイ子さんであった。慌てた私は早速、吉川修に、その件を手紙で連絡して爾後承諾を求め、彼も諒解してくれたが、カントクさんがそれを選んだのも、彼女のカラーフォトが、どれも露出していない、比較的、安全なものであった、せいであろう。

　バスで湯を浴びてベッドにもぐり込み、ともすれば脳裡を去来する嗜虐の妄想を振り払って、明日に備えて眠ることに努めた。

　ぐっすり眠りこけている私の耳朶を、電話のベルが、かしましく鳴りつづけて、聴覚を刺激する。

　音にめざめて、眼を開けば、窓の外に、薄陽が、かげっていた。枕許の時計を覗くと、午前八時。私の深い眠りを、電話のベルが、いい具合に醒ましてくれた。

　受話器をとると、流れ出してくる声の主は岸英雄であった。

「ああ、やはりおいでだったのですね。昨夜はおそくまで、辻村さんのお電話をお待ちしていたのですよ。或は、予定が変わって、お見えじゃないのかと気掛かりになって、朝早くお起こししてしまいました。御都合は如何でしょうか——。悠子も楽しみにお待ちしているのですよ」

「ええ、是非お伺いしますよ。早速これから支度して、一時間後には……。昨夜は、相棒のドクター氏と呑み過ぎましてねえ。それに一寸したプレイのハプニングがありまして、御連絡、出来なかったのですよ。今日の午後からも、会いたい人があるのです。午前中でも御迷惑じゃないでしょうか」

「残念ですね。今日一日、ゆっくりして戴こうと思っていましたのに。上京していらっしゃると相変わらずタフに御活躍なんですね。いろいろとお詫びもしなくちゃいけないし、おめにかかった上でお話し申し上げますよ。じゃあ、お待ちしていますよ。私の住居お分かりでしょうか」

「ええ、そのつもりでしたから、正月頃いただいたお手紙に同封してあった、道順の地図を引抜いてきたのですよ。タクシーで、ここから、とばすつもりです」

「それじゃ——」

　電話がきれるや、忽ち、あわただしく出発

準備を整え、軽装に着換えて部屋を出ると、フロントでドクター氏にメッセージを書いてホテルから車を呼ぶ。

　地図を頼りに、道々二、三度、尋ねて、やっと、彼等の愛の巣を探り当てる。

　かなり宏壮なK氏宅の、空地に、プレハブが数戸、継ぎ足しに建て増して、雑然と空地を占拠している。

　住居難の時代に、閑地のある人が考え出した、俄アパートみたいであった。

　岸英雄、悠子夫妻の愛の棲家は、その雑然と建て増したプレハブ住宅の一番、奥まったところにあった。

　入口の扉の上に、彼の名刺が、はりつけてある。ノックして扉を開くと、懐かしい岸英雄の顔が、すぐ奥から現われた。

　玄関と呼べる程のものでない。扉を開いて靴をぬぐと、横手がカーテンで仕切られていて、猫のひたい程のキッチンがある。すぐ目の前の唐紙を開くと、四帖半の応接兼、茶の間。右側の襖の奥が、三帖の寝室になっているという。

　しかし、この狭いところを、うまく活用して、バスもトイレもちゃんと備わっている。あとで知ったが、これで、家賃二万円ときいて、住居の値の高さに驚いたのであった。ほぼ同じ程度の住居が六軒ひしめいているからK未亡人は、家賃十二万円転がり込む勘定で丸々ただ儲けとは行かなくとも、小金を持つ未亡人の収入源には、いい活用法のようであった。

　キッチンの方で、微かな物音がしていたが多分、愛妻悠子夫人が、お茶でも淹れているのであろう。

「おみかけ通りの狭いところで、辻村さんのお邸からみたら、まるで犬小屋みたいなものですが、これでも、やっとみつけた私たちの安住の地なんですよ」

「犬小屋なんて、とんでもない。私なんか、先祖伝来の古い、だだっ広い家で反って困っているんですよ。二人暮しなら、恰好の住居じゃありませんか――」

「いずれ、もう少し広いところをと探しているのですが、仲々みつからなくて……これじゃ、ロクなプレイも出来やしませんのでネ」

　話題は早速、プレイへと移行してゆく。もともと、同好で結ばれた私達のことだ。ハナシは所詮、そこへ落着くより仕方がない。彼のいう通り、強烈なSMプレイには確かに手狭であり、派手にやると、隣家へ物音や、叫び声が聞こえそうであった。

「それでもいいじゃないですか。遂々、すべての桎梏から脱して、二人きりの、蜜のような甘い生活が出来るようになったのですから……本望でしょう」

「最初の間はね――。しかし、人間なんて勝手な動物ですよ。その歓びに狎れてしまうのか、感激が薄れるのか、それとも日々の生活に追われるのか、近頃じゃ、何てこともなしに日を送っている状態です。住居が手狭な、こんなところですから、プレイだって、余程気が向かないと、やる気になれないんです。いつだって出来るという、心のゆるみが、自然にそうなるのでしょうね。旅行だって、あの時、思い切ってゆけばよかったのです。日と共に、幾分の臆劫さと、それに、電器々具や、服装など整え始めると、もう行けなくなっちゃって、心ならずも、辻村さんにウソをついた結果になってしまったのですよ」

「よく分かりますよ、その心理――。いいじゃないですか。その代り、折あらば、私の方から、こうして押しかけてきたのですもの」

「おみえになったら、何処かホテルへ出掛けようと、悠子といっていたのです。此処じゃロクなプレイも出来ませんからね。あれも、

その覚悟はしてるらしいですよ」

「有難う。でも午後一時から、高円寺で、同好者と会う約束がありましてネ。おひる頃までしか、時間がないんですよ」

「いつも乍ら、セカセカと、お忙しいんですね。じゃあ、折角いらったんだから、ここで、少しなりと、お撮りになりませんか。余り強烈なのも出来ませんし、何しろ、朝っぱらからじゃ、も一つ、気分が乗りませんしねえ。悠子、何しているんだろうな。羞かしがって出てこないのかな」

　最後は独り言になって、立ち上がった彼は目と鼻の先の、カーテンに首を突っ込んで、小声で何か告げていた。確かに彼のいう通り、この部屋で、しかも朝の十時頃からでは、も一つ、気分も乗るまい。しかし、プレイとまではゆかなくても、悠子夫人の、あの豊満な裸身と、緊縛に接しられるだけでも、私は満足であった。彼の最愛の妻である。一対一のプレイなど、思いもよらないし、緊縛の縄も或は、私の手には委ねられないかも知れなかった。

　戻ってきた彼は、苦笑まじりに

「矢張り羞かしがっているんですよ。何しろ辻村さんといえば、怖い大ベテランのように思っているんですからね。もう間もなく挨拶に出てきますよ」

　といいながら、微かな困惑の色を泛かべていた。午前十時からの、心の準備もなき慌しいプレイが、何処か心の奥底で引っ掛かるのだろう。

　少なくとも今、ここにプレイのムードはないし、庇もれにさしこむ朝の光に、狭い洋風の茶の間は白けていた。

　オードブルと、洋酒瓶とグラスを盆にのせて、やっとお目当ての悠子夫人が現われる。

　憂愁の佳人、悠子夫人は、奇クに始めて登場した時と今も全然、変わっていなかった。いや、むしろ、晴れて二人きりの、蜜のように甘い歓びの生活にひたり切っているせいか艶麗さは弥増して、反ってフォトでみた以前よりは若やいでみえた。

　結婚当初が老けて感じたのか。

　今の彼女が、本来の悠子夫人なのか——。

　私は眩しい思いで彼女を振り仰ぎ、つつましく会釈する夫人に、あわてて鸚鵡返しに会釈を返し、

「つまらないものですが」

と、手土産のカステラを、そそくさと差し出すのであった。

「恐縮でございますわ、いただいたりして。いつも主人がお世話になっておりますのに」

にこやかな笑顔が、私に向かって深々と頭を下げた。

「お顔はフォトで、いつも拝見しておりますが、お目にかかるのは始めてです。本当に不思議なくらい、お若くていらっしゃる」

「まあ、お恥かしうございますわ……本当に何もございませんが、どうぞごゆっくりなさって下さいまし」

皓い歯が笑みこぼれ、微かな羞恥を、ただよわせて、悠子夫人はグラスに、なみなみとサントリーオールドを注ぎ、色鮮かな、心利いたオードブルに妻楊子を立てて、私に快く奨めるのであった。

昨年、私の許へ送り届けてきた、二人の熱愛の手記『桎梏より遁れて』が、事実であるならば、激しい恋愛の挙句の、彼等の結婚は昭和三十九年九月で、その時、岸悠子は二十一才だったと、自伝に書いてあった。

その計算でゆくと、満八年ちかく経ったいま、悠子夫人は、二十八、九才ということになる筈である。

人眼を忍んでの、SMプレイが始まり、彼が妻に内緒で、（夫婦SMプレイの写真）と題して投稿した昭和四十年三月号が、悠子夫人の、緊縛フォトの、処女掲載号であった。

あの時以来の、瞼に灼きつけた、華麗なる緊縛像から想像した彼女も、八年経過して、今、眼前に、楚々と、たたずむ彼女も、まるでそのまま、昨日の彼女を見る思いで、ちっとも変貌はなかった。八年の歳月が、一瞬のタイム・トンネルを潜り抜けて、今ここに蘇った、思いである。私はしばし、魂を天外に飛ばして、痴呆のように、彼女をマジマジとみつめ続けていたのである。

「どうしたのです。悠子が、どうかしたのですか?」

夫が傍から口を挟む。

「八年前と、そのままでいらっしゃるので、驚いているのです。全然、変わっておられないんですねえ」

「なあに、もうおばあちゃんですよ」

「いや、そんなことはないッ。いつまでも瑞々しくて、お美しい。そんな言葉は、奥さんに対する冒瀆ですよ」

思わず口調が、きつくなり、私は、きっぱり否定した。

じっとりと暑ばむ程の陽気に、彼女はノースリーブに超ミニのワンピースという軽い装いの普段着をつけていた。ムチムチした肉体が、惜しげもなく腕に腿に露出している。かたちよく盛り上がった胸のふくらみが、私の猥ら心を妖しく、かき立てるのであった。

彼女は余り雄弁でなかった。喋れば喋るのであろうが、努めて控えめにして、私達のSMめいた会話を、アルカイックな笑みを泛かべて、カーペットを敷きつめた床に膝をつきさりげなく聞いていた。

「奥さん。さあ、どうぞ、こちらへ」

私はソファの片辺に倚り、手招いて坐ることを、すすめた。

「ええ、いいんですよ、私は……」

遠慮したが、重ねていうと、チラッと夫に視線を投げ、彼がうなずくと、淑かに、私と並んで、間隔をおいて座を占めた。

髪はブラウンに染めているし、化粧も垢ぬけしていて、一見ファッションモデルか、ステージ・ダンサー風である。しかし、その容姿とは凡そ、うらはらに、物腰や、言葉使いは端麗であった。

「悠子と並んだところを、記念にお撮りしましょうか――」

岸英雄が願ってもない声をかけてくれる。

「ああ、是非お願いしますよ」

私は、いそいそとカメラを取り出す。

「もう少し、悠子に、くっついて下さいよ」

カメラを構え乍ら、彼は注文する。そろそろ、プレイへの誘導は始まりつつあった。

彼女に寄り添って、そっと肩へ手を回し、悦にいった私と、愧らいを泛かべた悠子夫人との、ソファで並んだ姿に、手早く数枚のシャッターが切られ、一瞬の閃光が瞬いた。

　それを契機に、三脚をとり出し、私を真中に挟んで、三人で撮ったり、彼女独りの、あでやかなポーズに焦点を合わせたりして、フォトを撮る雰囲気を盛り上げてゆくことに傾注してゆく。

　朝食を摂らず、二、三杯、傾けたグラスで白皙の岸英雄の顔面は、桃色に染まり、私も又、満々と注がれた一杯のグラスの洋酒を、のみほして、いつしか五体に軽い酔いを発していた。

　酔いが、彼を、私を挑発的にさせる。

　彼は、意識的に、愛妻悠子をソファの上で抱きしめて、倶に倒れ伏すと、拒む彼女の手を押え、ワンピースを裾から上体へと、まくり上げていった。

　ピッタリ喰い込んだパンティが、眩しく私の眼を射り、かたちよい双脚が、虚空を蹴って潑ね廻った。形だけの抵抗と知りつつも、彼女は羞恥を紛飾するために、かなり拒んでもがく。

　もがく女体に、夫の嗜虐の炎は、俄に激しく燃えさかる。

　ブラジャーに手がかかり、毟り取るように外して、遠くへ投げ捨てる。

　媚と哀願を泛かべて、悠子は懸命に反撥する。

　プレイは既に始まっていた。息を嚥んで私は見守り、慌しくカメラを構えては、痴戯の乱斗をカメラに納めていた。

「あッ、それだけは許して……お願い」

　気愧かしさを昂ぶらせて、悠子はパンティにかかった夫の手を必死で押える。

　絢爛たる夫婦の争いは、私の胸を一入、亢ぶらせていった。

　そこに悠子は、女体を丸めて、うずくまっていた。すべてを剝ぎとられて、つやつやと照り映える全裸が、ソファに俯伏して顫えていた。

　荒い息を吐き、夫は、朱色のソファの背当てのカバーを剝ぎとる。

　朱のソファに、真白い女体の配色は、こよなく美しく私の眼に映じた。

　彼も、愛用のアサヒペンタックスをとり出してきて、素早くフィルムを装塡している。

　私の耳許に口を近づけると、

「まあ、任しておいて下さい。段々と縛りにもってゆきますから」

と、自信たっぷりに、ニヤリと笑った。

　最愛の妻を、第三者の前で裸身にするのは今日が始めてであると、彼は息を弾ませて囁くのであった。

　光栄に浴するときが、刻々と迫りつつあった。

× × ×

　夫の手によって、羞恥のヴェールを剝ぎとられ、過去八年間、夫以外には見せなかった裸身を、彼女は漸く私の眼前に展開した。旧婚旅行の計画の時から、私を含めての緊縛プレイを始め、興到れば、夫婦プレイの極みを尽すことを約束させられ、言葉の上では、充分、納得し乍らも、いよいよそれが現実となった今、矢張り悠子夫人の心底には、一抹のためらいと、夫以外にみせたことのない肉体の神秘の抛擲が、愛惜の悲愴感となって、そこはかとなく漂っているかのようであった。

　ピッタリと腿をしめつけ、深々と両手で胸の隆起を抱えこんで、彼女はソファに坐っていた。

「さあ、オッパイを下から抱えるようにするんだ」

「もう少し、股を開いて――」

「ぐっと腰を捻って」
「ソファに横になって、右足を軽く折り曲げて」
「両手で膝を抱え込んで」
「俯伏せになって、ぐっと腰を上げて御覧」
「両膝を手で抱えて、左右に開いてゆく…」

　矢継早やに、彼はヌードモデルに対するごとく、種々のポーズの注文をつけてゆく。

「ポルノから、先ず始めましょう」

　という彼の言葉は、これだったのか。ピチピチした、はちきれそうな女体が一挙手一投足して、刻々と変化し、夫の命じるままに、妻は易々として、いわれるままのポーズを、とっていった。

　確かに美しい。真白き女体は、燦然と輝いて、咫尺の間で躍動する。それは譬えようもない、美の造形であった。

　思わず知らず、私のカメラは、万華に変転する女体に魅せられて、シャッターの数を殖やしていった。

　既に惜しげもなく秘境は眼のあたりに隠見し、大輪の黒薔薇は、えもいわれぬ薫香を、ただよわせていた。

　頃合を見計らって岸英雄はカメラを措くと愛用の凝脂のしみこんだ縄を、とり出す。

　よく磨かれた彫刻像さながらに、光り輝く双房を挟んで、手早く縄をかけ、後手に縛り上げていった。

　赧らむ頬に、愧らいと歓びが交錯し、微かに喘いで、悠子夫人は私の視線から遁れた。

　私は実に久し振りに、そこに緊縛美を見出した思いであった。

　愁色を漂わせて、諦観の念を、からませ、声もなく、一幅の塑像のように、女体はみじろぎもせず、私達の熱い視線をうけとめていた。

「辻村さん、どうぞ」

　岸英雄は、更に一条の愛縄をとり出すと、私に差し出す。

「いいんですか、縛って」
「お好きなように、どうぞ」

「どうも……」

欲びを胸に刻んで私は悠子夫人に近づく。ハッとしたように彼女は体を、こわばらせ、なじるような眼つきを夫に投げかけた。

始めて触れる、その肌の感触——。

ピンと張りつめた肉感は、押せば、さながらゴムマリのように弾き返った。

「構いませんか」

一抹の危惧を抱いて、肩ごしに、そっと訊ねる。

「ハイ、お手柔らかに……」

頰に羞恥を、ちらして悠子夫人は、聞きとれぬくらいの声で、うなずく。

艶やかにスベスベした乳房に手をおいて、胸縄を乳房の谷間で引き締めて、肩越しに背へ回し、背後の両手に掛け渡して、思い切って股縄にし、蒼丘で分けて繋ぎとめる。

私のこの作業を、夫はしきりにカメラに納めていた。

平静に戻った顔が媚を含んで、私達にさやかに微笑みかける。

夫のいうが侭に、悠子夫人はあらゆるポーズをとった。息をこらして、私はファインダーから、彼女に狙いをつける。

夢中の時——。

表戸を叩く音がした。ハッとして私達は顔を見合わせる。

「岸さん、お電話ですよ。岸さん……」

「大家さんですよ」

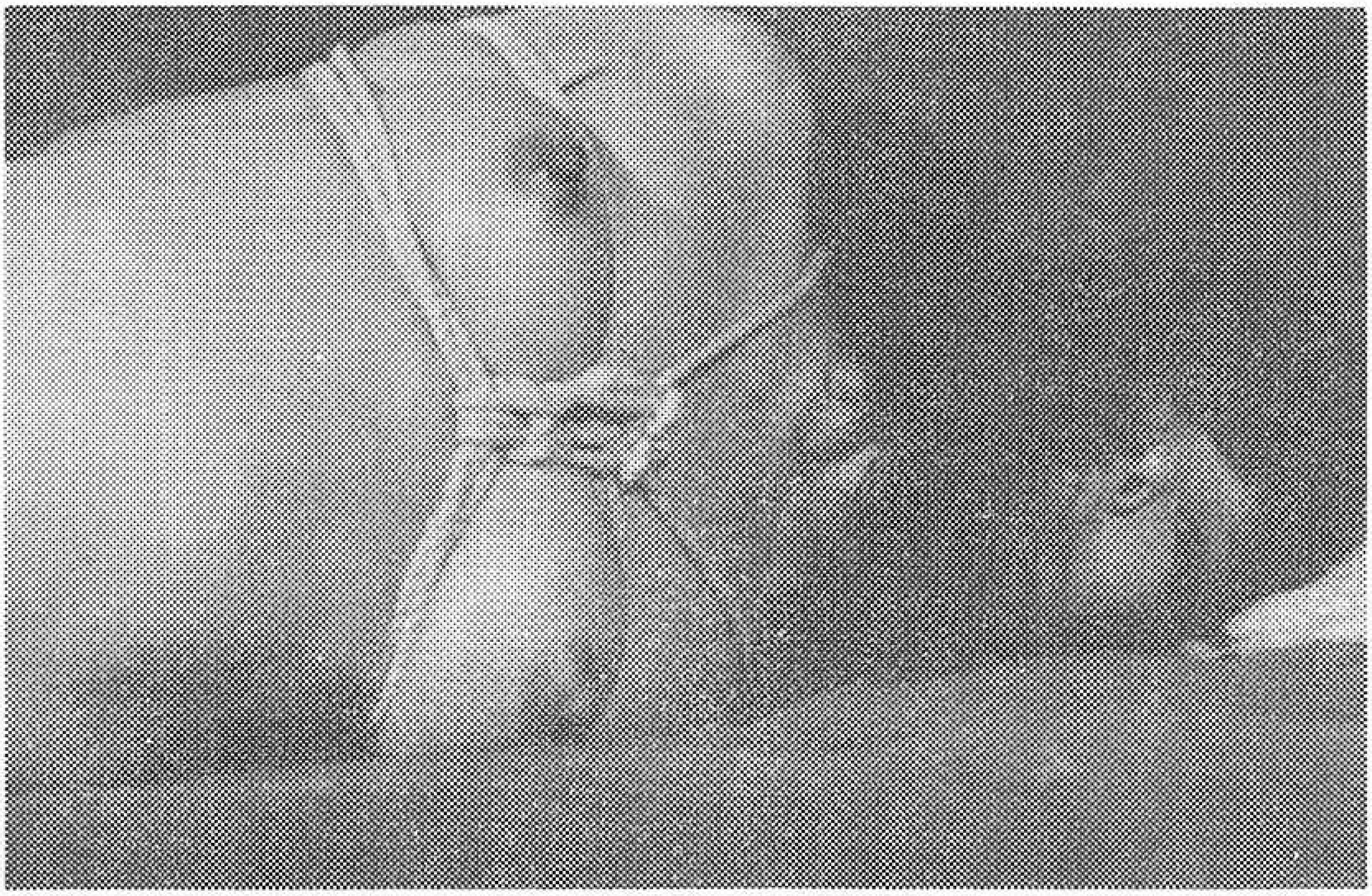
邸宅のK未亡人の声と分かって、彼は呟くようにいうと、私に小声で、

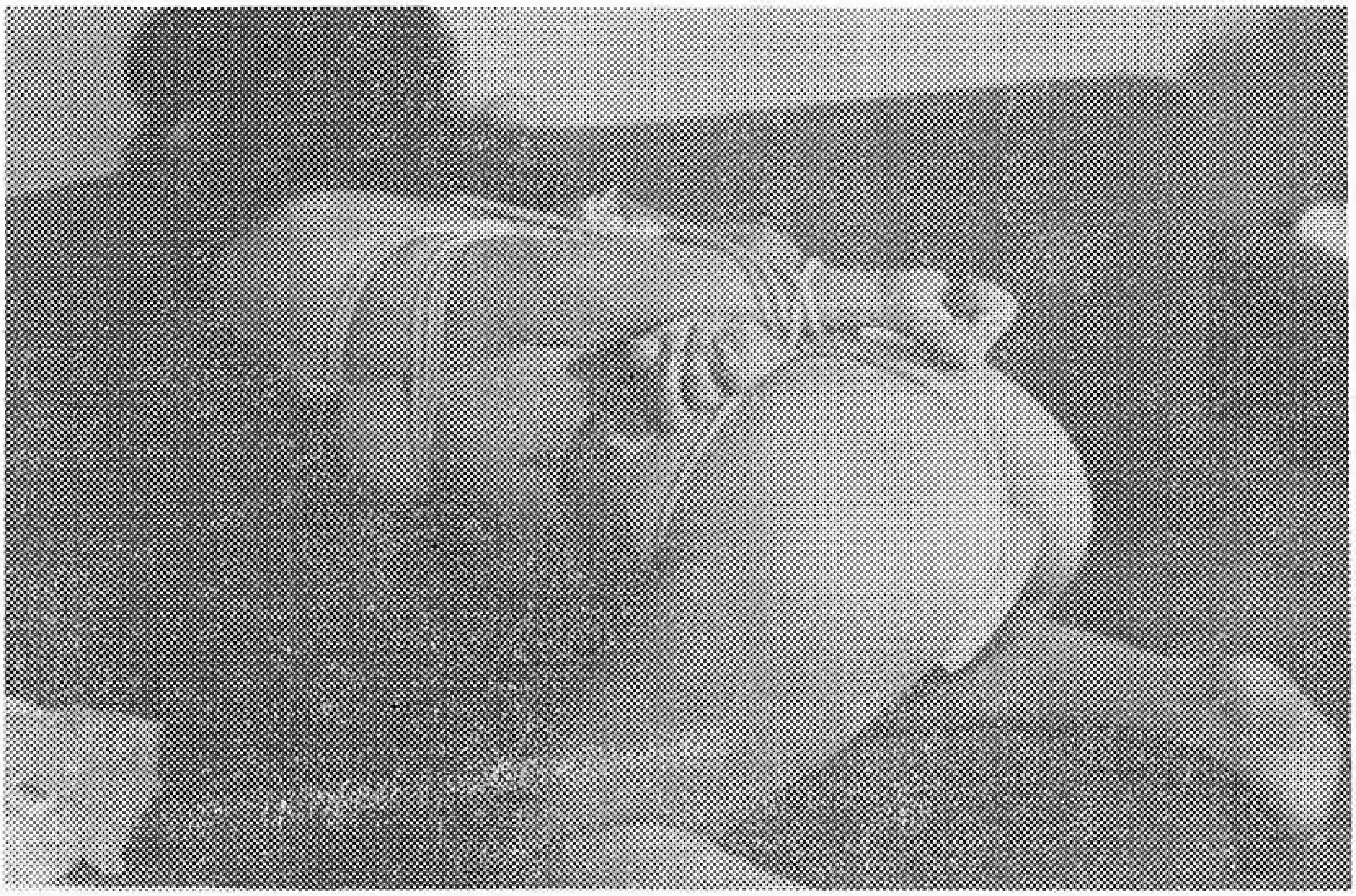
「いいですから、どうぞ、お続け下さい」

いい捨てるようにして、慌てて、表戸を開いて出て行く。やどかりの六軒、一様に未亡人宅の呼出電話を利用しているのであった。

夫が不在になって、俄に悠子夫人の表情は奇妙な強ばりをみせ、ほんの先刻までは、大胆に開いていた両腿を、ピッタリと貝殻のように堅く閉じ、困惑のかげらいが流れた。

夫が存在していてこそ、私も気が楽に、彼女の肌に、そこはかとなく触れていたが、二人きりになると、急に白けた空気が





狭い部屋を支配し始めていた。なまじ迂かつに手を出して、あらぬ誤解を招くことを懼れたのである。

「縄を解きましょうか――」

　重苦しい圧迫に耐えかねて、声をかける。

「ハイ、お願いします」

　悠子夫人は頷いた。

　スラスラと二条の縄を解き放つと彼女は羞恥に耐えぬように私に背を向けて、ワンピースをつけ、パンティを丸めて、両手で隠すようにし乍ら、ペコリと頭を下げ、遁れるように、カーテンの奥のキッチンへ消えた。

　故意か、電話が長いのか、岸英雄はなかなか戻ってこない。

　手持無沙汰の私は、詮方なくソファに腰を降ろすと、煙草に火をつけて、所在なく、部屋のただずまいを見廻していた。

　悠子夫人は息を潜めて、じっとしているのか、物音もせず、キッチンから出てくる気配もない。

　夫のいない部屋で、第三者の私と、二人きりで過ごすのを、ひたすらに恐れているかのようであった。

　表戸があく。唐紙が開く。夫が帰る――。

「オヤ、どうしたのです？　悠子は――」

「すぐに縄を解いてあげたら、キッチンへ行かれましたよ」

「なあんだ。私は又、次の緊縛にかかっているのかと思った。辻村さんらしくもありませんね」

「ダンナが不在だと、どうも遠慮しちゃって……お電話、御用じゃなかったのですか」

「ええ、頼んでいた家のことでチョイト……松戸市の方に、頃合いのマンションが空いたから、見にゆかないかといってきましたのですよ」

「じゃあ、いかなくちゃ」

「なあに、もう少し時間があります。どうぞごゆっくりしていて下さい。折角いい雰囲気になりかけたのに、水をさされちゃいましたね。強烈なのを一丁いきましょうや。呼んできますから」

　制止しようとしたが、彼は、すぐカーテンの奥へ消えた。声を殺した、ひそひその会話

が微かに聞こえる。

　数分して、困惑を泛かべて彼が現われる。

「弱ったですね。しきりに頼むのですが、頭が痛いから、もうよしてくれなんていうのですよ。どうせ仮病に決まっているんですが」

「いいですよ、私なら……緊縛も、途中でこんな風に中断してしまうと、もう乗り気にならないものですからね」

「折角いらしたのに、我侭ばかりいって――もう一度、言いきかせてきますから……」

「あッ、やめて下さい。それにもう、そろそろ、おいとまの時間ですから。恰度よかったですよ」

「そうですか――」

　岸英雄は、いかにも気の毒そうな表情を泛かべた。ホテルへでも出掛けて、一から十まで、その気になってやれば、彼女にしてもムードにとけ込めるだろうが、朝の束の間の、まして、隣家と軒を接する我が家の一室では辺りへばかり気を兼ねて、その気になれもしなかったのであろう。

「悠子――悠子、ここへ出てきなさい」

「ハイ……」

　バツ悪げにカーテンが、ゆるゆる開き、彼女はファンタをコップに注いだ盆を捧げて、やっと現われた。

「御免なさいね、我侭申しまして……」

　どちらへともなく頭を下げて、静かに行儀よく、その場に正座する。むき出しの膝小僧が、はち切れそうに、まるまると、輝いている。

　燻ぶる未練は十二分にあった。プレイと名付けるすら烏滸がましい三十分足らずの、束の間の、幻想にも等しい、あわただしい、うたかたの、ひととき――。

　悠子夫人の、輝くばかりの裸身と神秘に、じかに接しられただけでも、私は喜ばねばならないだろう。

　彼女にとっては、岸英雄だけが唯一無二のものであるに違いない。

　彼の、たっての要請なればこそ、已むを得

ず協力したのであろうが、彼以外のどんな対象にも、眼もくれない、ひたむきな熱愛の献身者であることを、私は犇々と感じた。

　夫あっての、被虐願望であり、緊縛でありSMプレイであった。二人きりなら、どんなことでも、易々として従ったであろう。

　しかし、私という第三者の面前では、これが、彼女にとっての、精一杯の協力ぶりではなかったか。

　愛すればこそ、妻は夫の嗜好に合わせて、いかようにも協力するが、それは所詮、二人だけのひめごとで、第三者にみせるべきものではない——そんな観念の、夫婦プレイが本来の在り方なのかも知れなかった。

　その観念を基点として、壁に突き当たり、飽和状態になった時、夫婦プレイは、交歓プレイとなり、混合プレイへと発展してゆくのではなかろうか——。

　岸英雄は、この愛の棲家での、二人きりの強烈なSMプレイのフォトを、私に次々と開陳してくれた。

　そのどれを眺めても、先刻、現実に行なわれた緊縛よりは激しく、生々しく、時にはセルフタイマーを使って、夫婦の繋がりを、あからさまに、しめしていた。

　彼女はその間、凝っと坐ったきりで、恥かしげに首を垂れ、細くしなやかな両の指を絡み合わせて、消えも入りたげな風情で、座に耐えていた。

　赤裸々な自分のフォトが、咫尺の間で、不躾けに私にみられている——その気愧かしさを、じっとこらえていること自体、針のむしろに坐する思いであったろう。

　疼くような嗜虐の昂ぶりを、じっと押え、表面さりげなくフォトを眺め乍ら、内心のハイド氏は、この艶麗きわまりなき悠子夫人をわが手で思いのままに緊縛と苛責の限りをつくし、悦楽と陶酔の愛戯を思うさまふるって存分に歓喜の呻きを挙げさせてみたい幻想に膨れ上がっていた。逞しい妄想を制御して、現実の私は、チラリと腕時計に眼をやり、彼の厚意を謝して静かに立ち上がる。

「そろそろ、時間ですから」

「本当に残念です。もっと、ゆっくりしてもらいたかったのに。ねえ、悠子」

　英雄は、共鳴を求めるように妻に声をかける。

「ハイ、もっと、どうぞごゆっくりなさって下さいまし」

　釣られたように悠子夫人も引き留める。社交辞令は分かっていた。

「ええ、有難う。そのうち、本当に旅行にいらっしゃいよ。関西方面を車で御案内しますから」

「そのうちに是非——」

　と彼は答えて、表情にホッとした安堵の色が流れた。

　手足に、ありありと縄痕を残した肌をむき出しにして、妻は、そっと夫に寄りそった。

　K邸宅の入口まで夫は送って出たが、悠子夫人は表戸を出る私に、深々と頭を下げ、自ら戸を閉ざした。縄目の痕を気にしていることは瞭らかであった。

　杉並区の高円寺へ行く道程を聞いて、手を振って別れる。

　既に私の脳裡には、吉川修のつれてくる、SMメイト、篠原レイ子の、可愛いい悪女めいた容貌が、はっきり一つの形をとって占めはじめていた。

× × ×

　高円寺駅に降り立ったのは約束の午後一時を十分ばかり過ぎていた。

　指定された喫茶は駅前にあって、すぐに分かった。

　私は吉川修の顔を、はっきり知らない。文

通は、もう二年近く続いているが、会うのは今日が始めてである。

　私達同好者仲間のうちでは若い方で、未婚である。二十七、八才で、商店街に化粧品、アクセサリー、服飾品の店を出していて、母親と妹の三人で経営している。

　家族と離れて、高円寺に、こじんまりしたコーポの一室を借りて気楽に青春を謳歌し、SMプレイを愉しんでいる。結婚を対象としない、不特定の女性との交際はかなり派手らしく、コーポは、そのSMやSEXのプレイの密室でもあるらしかった。

　彼の方は、奇クや映画を通じて、私の顔を充分、承知しているらしいが、近頃は、こうして、私の方に面識がなく、先方で一方的に知っているということが多かった。

　喫茶に入って、一応それらしき人物を求めて、辺りを見渡したが、見当もつかず、とも角、入口に近いテーブルに席を占めると、コーヒーを注文する。

　奥まったテーブルから、一人の青年が立ち上がるとみるや、つかつかと私の方に近づいてくる。

「辻村先生でしょうか?」

「ええ、吉川さん?」

「ハイ、すぐ分かりました。本当に、よく出てこられました。とうとう、お目にかかる光栄に浴しましたですね」

「いや、どうも――」

　彼、吉川修は、派手なチェックのセーターに、変わり型の、薄く色づいた眼鏡をかけ、もみ上げは長く、鼻下に、かなり濃い髭を蓄えていた。背もスラリと高い方で、メンズウエアーの、モデルばりのスタイルである。

「ホテルへ御連絡したのですが、先生の方から、全然お返事がないので、キャンセルかなと、半ばあきらめかけていたのですよ。でも本当によく思い出していただいたですね」

「助平根性が旺盛ですからネ。是非、彼女の顔も一目みたいと思いまして――。何しろ映画の節は、無断拝借になってしまいまして。御迷惑、かけなかったでしょうか」

「世間は広いですからネ。別段どうってこともなかったようです。映画はみせてもらいましたが、ほんの一瞬でしたからね。あッ、うつったなと思ったら、もうおしまいです。彼女もみたようですが、気にしていませんよ」

　映画中のスチールに使用した、篠原レイ子のことについて、彼は恬淡としていた。

「そうきいて安心しましたよ。今日は、ひとつ御厄介かけますかな」

「いずれコーポの方へ御案内するつもりでしたので、彼女は、向こうに待たせてあるのですよ。昼飯の準備をさせておきましたから」

　現代青年の彼は、テキパキとしている。要件を先に話して、雑談に入った。

　篠原レイ子と彼とは、もう二年越しのつきあいらしくレイ子を通じて知り合った彼女の友達とも、やっと、最近プレイ出来るところまでコトを運んだのだと、幾分、私を意識しての自己顕示欲をみせて、平然と語るのであった。彼自身、若いだけに、対象の、プレイする女性は、文句なく若いひとばかり、物色しているようであった。

　最近の、私のハント女性には、余り若い人がいませんねと言い切り、いつか折あらば、奇クのM女性、高村浩子か、前田真知子を、編集部を通じて紹介してもらえるよう、奇クの方へ頼んで欲しいなどと、ヌケヌケというのであった。殊に前田真知子は、東京在住だから、奇クの東京駐在員になって、彼女の緊縛フォトを撮り、奇クへ送って、協力するからと、なかなか積極的である。

　一応、箕田氏に話すことを約し、私は彼に東京でのSMプレイの、現在の近況などを訊

ね、これからも協力してもらえるよう頼むのであった。

　コーヒーを呑み終わると彼は伝票を摑んでそそくさと立ち上がる。

「歩いて、十分足らずです。駅に比較的近いのですよ。今頃、彼女待ち兼ねているでしょう。ボツボツ、アジトへ出掛けましょうか」と、喫茶を出ると先に立つ。

　彼も比較的、自由のきく職業で、時に応じて気軽にプレイ出来る強味があった。

　大東京都も、ここまでくると、幾分喧噪も少なく、空気も綺麗であった。

　駅前の商店街から少し出外れると、かなり大きな邸宅が並んでいる。

　彼のアジトにするコーポは三階建で、こじんまりしていた。

　二階まで上がると、とある一室を開く。

　プーンと油の焦げた、腹の虫を擽る、いい匂いが流れてくる。

　部屋は、近代設備を整えてあって、岸英雄の愛の棲家に較べて、かなり広い。

　洋間の壁に、ヌードのカラーパネルが数枚かけてあり、篠原レイ子の全裸のヌードが、微笑んでいる。おそらく、彼自慢のパネルなのであろう。

「いらっしゃいませ。お待ちしましたわ。お噂は、かねがね、吉川さんから聞いております。私、レイ子です。どうぞよろしく……」

　出迎えたレイ子は、ハキハキした物腰で、好感が持てる。

　ピンクのカッター風の長袖のブラウスの上から、黒地の半袖のセーターをきて、ジーパンスタイル――。昔なら奇妙なこの服装も、近頃は若い娘に流行らしい。

　又、その服装を最近みなれているせいか、躍動していてレイ子によく似合っていた。

「どうも……辻村です」

　軽く頭を下げて、ソファに坐る。

「念願叶って、ベテランの辻村先生のお越しだぞ。今日はガンバラなくちゃ。なあ、レイ子」

　吉川修は、薄色のサングラスを外すと、ニヤリと笑って、レイ子に声をかけた。

「ウーン、いや、辻村先生の前で――。あたし、恥かしいわ」

　一寸照れて、ペロリと舌を出し、レイ子は甲斐々々しく、手作りの料理を運び始める。

　マカロニ・グラタン、海老、カキのフライカニサラダなど、眼も鮮かに、なかなか御馳走である。

「レイ子の下手な手料理ですが、どうぞ」

　葡萄酒をグラスに、なみなみとついで彼はすすめる。

　篠原レイ子は、終始にこやかに、イソイソと応待し、運び終わって自分も座を占めた。

　彼の飼育が行き届いているのか――。それとも彼女を、かくまで献身的にさせる、物心両面の配慮が充分なのか、いずれにせよ、彼女は奴隷的な甲斐々々しさで動き、時偶、彼の露骨な女体への言葉や、ＳＭのプレイの赤裸々な挑発的な言辞にも、むしろ媚を含んで、柔らかく受け流していた。例えば、

「こいつはね、プリプリした尻を引っぱたいてやると、すごく歓ぶんですよ。あの時の声がバカに高くてヒヤヒヤですが」とか、

「デートは、いつもノーパンティに、きめてあるんです。映画館でバイブを使ったのですが、声は立てられず、失神してるんですよ。なあ、そうだろう」とか、

「全裸に革の拘束帯をつけて、その上から、じかにレインコートをきせ、雨の銀座を歩いたのですが、最高に陶酔したそうです」

　など、むしろそれは、レイ子のＭ性を、殊更に昂揚させようと、わざと、聞こえよがしに喋っているように感じるのであった。

彼女が、私と向かい合ってチェアーに坐ろうとした時、吉川修は、かねての計画か、

「レイ子、例のものを着てくるのだ」

と、命じる。

「あッ、そうだった」

ポンと片手で頭を叩いて、ヒョイと立ち上がると、レイ子は隣室へ消える。

ほどなく現われた彼女は、これでいいかと彼に示すように、両手を水平に挙げて、私達の前に、その姿を曝した。

薄い薄い、透き通ったピンクのネグリジェを素肌に、じかに纏い、豊かな若々しい女体の、すべてはスケスケで、あってなきが如き遮蔽である。

「いいだろう。さあ、先生にワインを、おつぎしなさい」

如何にも近代青年らしい感覚で、彼は内心やや得意然と、私にレイ子を誇示していた。

確かに素晴しいディナーであった。

街のレストランでは到底、味わえぬ桃色の雰囲気に浸って、のむワインも、うまい。

レイ子にすすめると、彼女も快く受けて、よく飲んだ。

陶然となった頃、彼はステレオに洋盤をかける。

サンバのリズムが騒然と部屋に充満する。立ち上がった彼はリズムをとって腰を振る。それに合わせて、レイ子も、スケスケのネグリジェを天女の羽衣さながらに舞わせて、軽やかにステップを踏んだ。

二人の手が絡む。彼の巧みなリードで、レイ子は右に左に廻る。

クルクルと、たぐり寄せられ、彼の胸の中に凭れ込んだレイ子が、突き離されて、さっと離れた時、彼の手にネグリジェが残り、見事な全裸が、しなやかに、私の咫尺の間で、躍り狂っていた。

彼は、しきりに私を招く――。一緒に踊ろうと、すすめるのである。

悲しい哉、ソシアルダンスなら、つきあい程度に踊れても、この激しいリズムには、ついてゆけない。

私は無念そうに首を振り苦笑を泛かべる。むき出しの裸身が、足を挙げ両膝を割り、腰をグラインドさせて、無心に舞い踊る。そこに羞恥のかげは、かけらもなく、若さを誇示するかのようにレイ子は、腰を突き出してこれみよがしにゆさぶり、けたたましい笑いを弾ませて、乱舞した。

ストリッパーのように、男の好色心を、そそるような、わざとらしさもない。陰湿のかげりもない。

潑溂とした、健康そのものの裸体が、無心に、快い酔いを発散させて、逞しく放恣に、フロアを踏みならしていた。

吉川修の洒落た歓迎の宴である。

激しく昂ぶる心を押え、私は息を嚥んで、若さに溢れた、肉感的なレイ子の裸身を、じっと見守っていた。

もう私の時代は過ぎたのだ――。そんな感懐が、否応なく胸を、よぎってゆくのであった。

×　×　×

「どうですか、このポーズに覚えがあるでしょう」

「ああ、送って戴いた、あの時のフォトそのままだね」

「これを嵌めて、女体を翻弄してやると、すごく欲ぶのですよ」

彼はそういって、レイ子の乳首をギュッ、ギュッと、ひねった。

「ああ……い、いたい。いたいわよう。あーん」

派手に鼻を鳴らして、レイ子は喚く。

首と両手が、一つの枷によって嵌められ、

金具を台材に、ビスで締めつけてあるから、どんなに暴れてももがいても絶対、外れない。

更に、縄をかけるボールトなどが、とりつけてあり、チーク材も厚く、かなりの重量であった。

踊り終わったあと、彼はレイ子を追い立てるようにして、隣室へ消え、やがて唐紙を開いて私を呼んだ。

胸躍らせて這入ってゆくと、そこに、首と両手を枷で固定されたレイ子が、両足を投げ出して、神妙に坐っていたのであった。

チラリと私に視線を投げて、軽い愧らいが微かに泛かべた笑顔に流れる。

既にこれまでに幾度、いや幾十度となく、彼女はこの枷を嵌められて、被虐の悦楽に悶え、歓喜の呻きをあげたに違いなかった。

彼女にとって、この枷を嵌められる時は、愉しい悦楽のタイムであったことだろう。

既に、これからのSMプレイを予知してレイ子の顔に猥らな歓びのかげが走っていた。

しばらくは、吉川修のプレイ振りを拝見すべく、私はカメラを構えて、静観していた。

彼は、自分の過去の、飼育と調教ぶりを私に展示するハラであった。

「人、それぞれに、皆違ったプレイのやり方があります。女の感じるポイントだって、多種多様です。レイ子の歓ぶポイントを、先生に知っておいてもらう意味で、一寸、見本を示して御覧に入れますから」

吉川修は、先刻、そんな言葉を、小声で私の耳に囁いていた。

渡部光雄の、あの巧みな針捌きが私に出来ない如く、確かに女体の、被虐の歓びは、飼育者によって開眼されてゆく。

彼は、眼も鮮かな孔雀の羽根をとり出してくると、枷によって両手の自由を奪われたレイ子の腋の下から脇腹にかけて、巧みに操り始めた。

「あッ、あッ、擽ったい。いや……よして。あーっ、いやーン」

枷で首と両手を固定された女体が、巧みに

撫でる羽根先によって、両脚をジタバタさせてくねり、そのあらがいの声に、甘い、ねっとりとした媚が感じられた。

くすぐり責めに、早くも体が火照るのか、うっすら桃色づいた若やいだ裸身が、妖しく息づいて、放恣なポーズに乱れてゆき、果ては、こらえきれず、仰向けに、ゆらりと倒れ枷を首枕に、蠱惑の肢体が、官能の昂ぶりに任せて、のたうち廻っていた。

レイ子は、うっとりと笑みを、たたえた表情で、彼の翻弄を快く受け止め、愉しくてたまらぬかの様に、時には、声を忍ばせて笑いを、こらえていた。

吉川修にも、真剣な表情はない。悪戯してたわむれる子供のように、ニヤニヤしながら執拗に羽根先で、くすぐっている。

二人のSMプレイをみていると、はっきり遊びを感じるのであって、陰湿さや、苦悶は全然なく、陽気そのものであった。

ジタバタするレイ子の両脚を、のしかかるように押えつけると、彼は縄をとり出して、足首を縛って、それを首枷のボールトに掛けて、ぐいぐいと引き絞る。

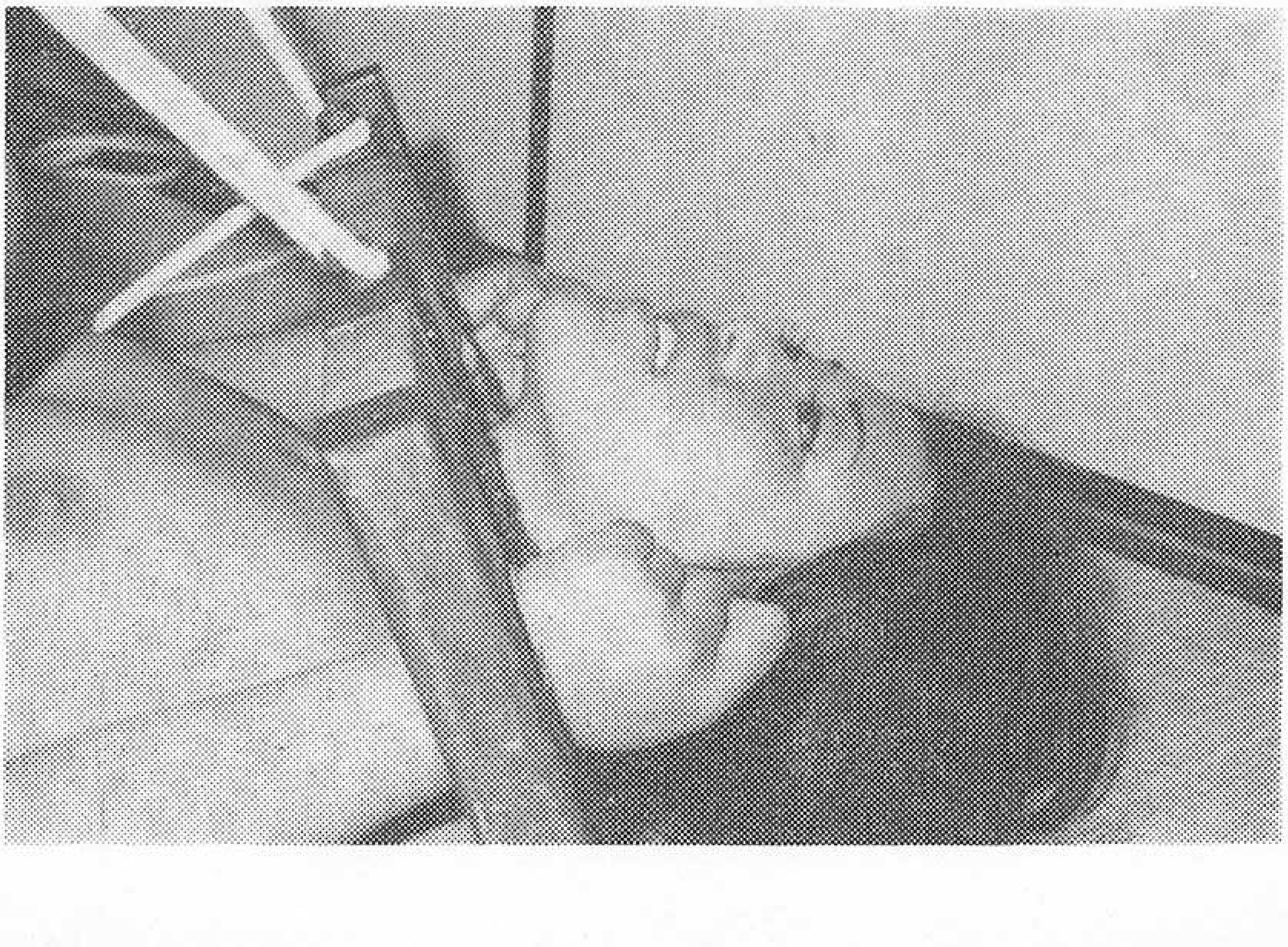
両脚を浮き上がらせて開股した猥らな恰好は、甘い蜜の味を求めるには、最適のポーズであった。

彼の指先が、敏感なポイントを刺激する度にレイ子は、ククククと声を殺して、笑いを噛みしめ、いかにも現代っ娘らしく、若し私がいなければ、憚らく、キャッキャッと、声を立てて、歓びに、はしゃいでいたことであろう。

深刻げな呻きや、斟酌した喜悦からは、およそ縁遠い、カラッとした明るさがあった。

吉川修のSMプレイは、カメラは所詮、従のもので、本命は何といっても、レイ子との心ゆくまでのプレイの耽溺にあったことは論を俟たない。時間をかけて女体を、さまざまに、いたぶり、羞恥責めして、悦虐のきわみに、恍惚と陶酔を繰り返すレイ子と共に、彼の嗜虐の昂ぶりも弥増して、興趣のつきるところ、深い深い快楽の渕に沈んでゆくのであった。

第三者の私を交えての、真の



悦楽の探究は流石にやりかねて、嘗ての彼からの文面で、細密に書きしたためてあった、女性の羞恥責めの敢行は憚っているようであった。

羞恥のポーズをつくることはつくったが、それから先へ進まない。むしろこうみた場合女性の方が大胆である。彼のするままに、易々として羞恥を露呈させて、笑みをこぼしてレイ子は、いつもの彼の手練を心待ちしている態度であった。

興到れば、私の面前も憚らず、喜悦にのたうち廻り、高らかに歓喜の讃歌をうたい上げて、恍惚の境を逍遥することは、推測に難くなかった。意気込んではいても、いざとなると、男性の方が何となく躊躇してしまう。

首枷の前に腰を下ろすと、彼は一方の手で乳房をまさぐり、一方の手で、レイ子の鼻を摘んで、鼻腔を塞いだり、押し上げたり、指を挿し込んだりして、さまざまに鼻いじめをする。そして、肝腎の味わいを湛えた泉へは何故か手を差しのべようとはしなかった。

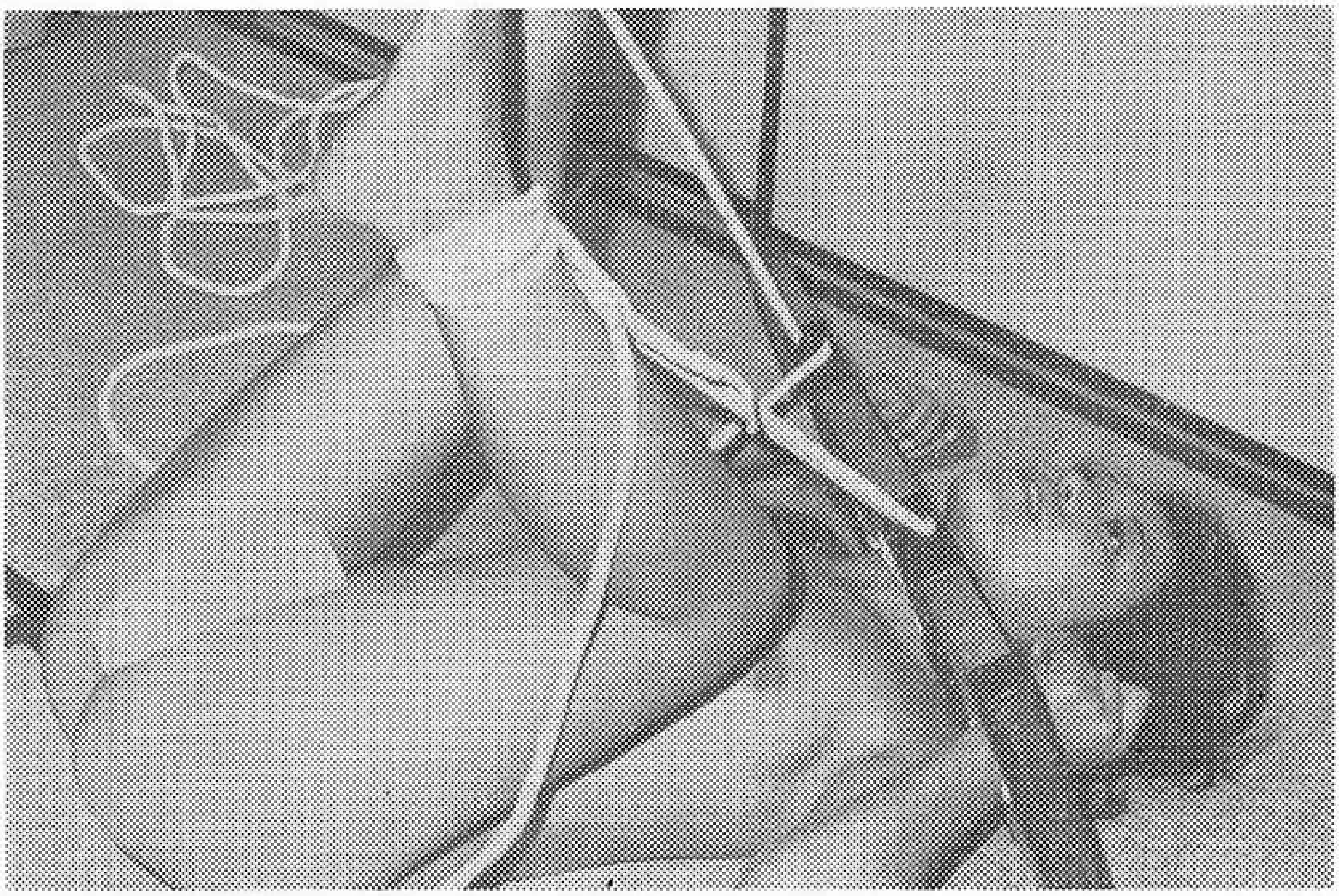
今日始めて出会った私に対し、文通では充分、意気投合しながらも、実戦となると、尚且、一抹の危惧を覚えて、愛する女性の最後の一線を、無意識に、私から拒んでいたのかも知れない。

自ら秘泉を求めて、ガタガタと崩れゆく自分自身の心を懼れてのことか。或は又、それに刺激されて、若し不躾にも、私がレイ子を求めたら、断わりきれぬと気を廻したのだろうか——。

如何に好色心が旺盛の私でも、それは、わきまえている。しかし彼は、私の書くカメラ・ハントから想像して、女には油断のならないプレイボーイと受け取っていたかも知れなかった。

勿論これは、私の一瞬の推察に過ぎない。手始めに鼻や乳房——そして、興到れば、そこへ当然ゆきつく手筈であったのか。

とあれ、私はそれにカメラを構え、レイ子の、無邪気にプレイを愉しんでいる様相をフ



ィルムに刻んでいった。

　彼はカメラを取り出さなかった。同じようなプレイが、過去幾度となく繰り返されていて今更、物珍しくもなかったのであろう。

　懼らく彼は、日頃の、二人きりのプレイの十分の一も発揮していないに違いない。それは、レイ子の眉がフトかげり、あきらかに不満げな色がチラリと流れたのを認めたからであった。

　私をベテランだと思い込んでいる彼は、目の前に私をおいて非常にやりづらそうであった。ひとかどSMプレイボーイめかしても、やはり三十才未満の独身の青年では、どこかに未熟と憚りと、経験の浅さが、滲み出ていた。人前で大胆に振舞えるだけの度胸がないといえばそれ迄だが、始めて第三者を交じえてのプレイとあらば、外見は、いかにも同好者めかしても、内心、拘泥としているさまが、ありありと窺え、その空回りの努力に私は気の毒さと苦笑を交えて見守っていたのである。何か私から声をかけてアドバイスすれば、彼の緊張もほぐれたのであろう。しかし私は私で、故意でもないが、彼のプレイ振りを寡黙にみつめていたのであった。

　いつもに似げない、歯掻ゆいプレイ振りに失望したかのように、レイ子は急に、

「ねえ、枷が首に当たって、いたいの。もう我慢、出来ないわ。外して、ねえ……」

と、平静な口調で彼にいう。笑みは表情から消えて、やり切れなさが滲み出ていた。

「いつも、もっと我慢するじゃないか――」

「いつもは、いつも。今日は痛いのよう」

「そうか――」

　一寸、白けた様子で、彼は首枷のネジを戻して、金具を外す。

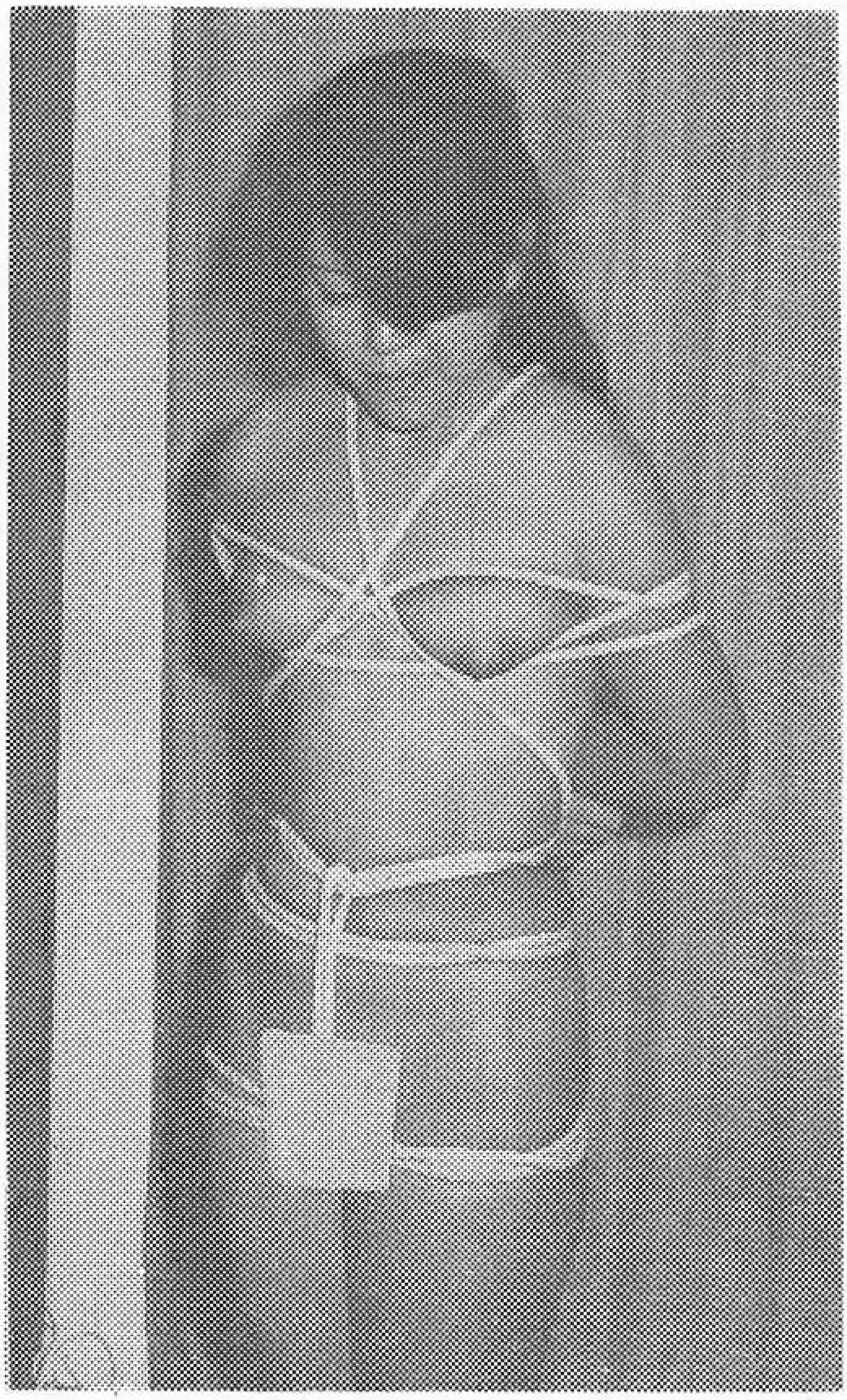
「ああ、苦しかった。ウーン、オサム。もっと調子、出してよう」

　私の観念を裏書きする、なじる様なレイ子の言葉である。

「先生にみられていちゃ、どうも、やりづらいよなあ」

　投げやりな調子で、彼は呟く。

「私を、気にするからですよ。遠慮しなさん



な。何なら、しばらく応接間へでも消えましょうか、気分ののるまで……」

「いや、そんなつもりでいったんじゃないんです。やはり未熟なんだなあ、ボクって男は――」

裸身を投げ出したままで、レイ子は私達のやりとりを黙ってきいていた。

私という虚像が、余りにも大きくのしかかるのだろうか。それとも年令の隔たりに、どことなく違和感を覚えるのか――。

私は立ち上がって、凝ったように首をぐるぐる廻し、しばし彼等に時間を与えるべく、応接間に消えようとした。

あわてて彼が、

「あっ、待って下さい。今度は先生にレイ子を縛っていただこうと思っているんですよ。いいだろう。なあ、レイ子」

と、私を呼び止め、彼女に共鳴を求める。

彼女は黙って、うなずいた。私は立ち去りかけた足をとめ、彼の差し出した、長い縄束を無意識に受け取っていた。

「構いませんか」

レイ子に声をかけると、

「ハイ」

と、うなずいて、慌てて立ち上がる。微かな緊張の色が彼女の表情を、かすめた。

吉川修の、喰い入るようにみつめる視線を背に感じて、私は無雑作にレイ子に縄をかけてゆく。両の乳房を強調して、胸で八文字にしめて、手早く両手を背後に縛り、胴から股縄かけ、両腿で数回、廻して背後で結びとめる。

別段これといった新味もないが、その手早さに、彼は感心したように見守っていた。

いつしか、レイ子も笑いを潜めて、真剣な表情をつくっていた。

「ウーン、早いですねえ。一分半でしたよ」

「その代り、平凡、到ってオーソドックスですよ」

「いえ、いえ。オッパイがギュッと盛り上がって、いただけますよ」

「誰が縛っても同じですよ。他人のやったのは、よく見えるのでしょ」

「こりゃ、カメラに撮らなくちゃ」

彼は、そそくさとカメラをとり出してくると、早くも、レイ子に焦点を合わせていた。

ポックリと盛り上がった、若々しい、たるみのない乳房は、しゃぶりつきたいような魅力を湛えていた。

彼は何と思ったか、手拭いでレイ子に眼隠しすると、矢庭に押し倒した。

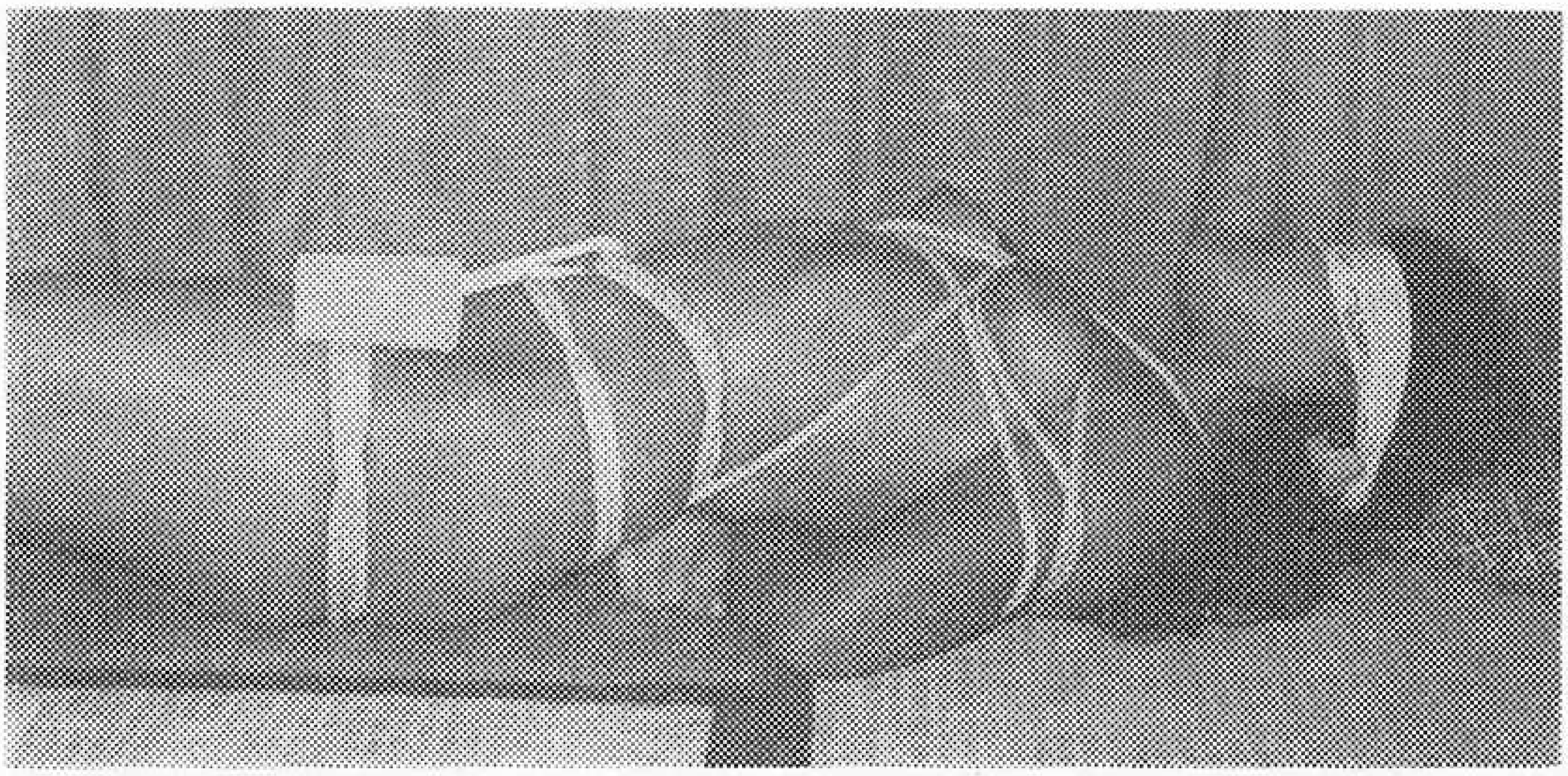
後手縛りがタタミにつかえて、彼女は軽い呻きを洩らして、納まるように身体を、にじらせ、やがて静止する。

吉川修の唇が、桜桃のようなレイ子の乳頭に吸いついてゆく。微かに反撥したが、体臭と習性を肌で感じたらしく、俄に甦生したように、彼女は華やかに、悦びのハーモニーを奏でだした。

眼隠しが、私という第三者の虚像を眼前から抹消して、全身をつらぬく歓びのショックを乳頭から受け入れて、彼女の官能の昂まりは須臾にしてリラックスさせていった。

彼は、そっと唇を離す。

私に近附くと、手真似と口吻りで、レイ子の乳房を吸うように奨め、彼はマッサージ用の、器具の交換出来る電器メーカー市販のバイブレーターを取り出してきて、カーテンを背にして坐り込んだ。



唇とバイブによる、乳房への攻撃は、レイ子を狂喜させ、囈言めいた、きわまりの言葉が、きれぎれに吐き出された。

私と彼と、二人の攻撃を知ってか知らずか女体を顫わせキリキリと奥歯を噛みならして高らかに愛欲を謳歌する。

股縄と、しっかりしめた腿縄が、吉川修の指の攻撃を皮肉にも防いでいた。

虚飾と隔意を、かなぐり捨てて、いつしか彼は本来の自分を取り戻しつつあった。

今は、私という先輩の存在が、むしろ彼の嗜虐の炎を一層かきたて、欲望の虜と化しつつあった。

「縛り直していいですか？」

「ああ、どうぞ、どうぞ」

彼は意気込んで、私の縄を解くと、未だ興奮のさめやらぬレイ子をテーブルに横たえ、休む間もなく、テーブルごと、犇々と縄をかけてゆき、両腕をテーブルの足につないで、腋をむき出しにし、両脚も開いてテーブルの脚に固定していった。

剃りとった腋毛の毛根から、一ミリにも足りぬ新芽が、まばらに芽生えている。

鼻柱を親指で圧して押しあげてゆく。かた

ちよい鼻腔が拡大して、美しく整然と生え揃った鼻毛に蔽われた鼻腔の奥が、ほんのり桃色に色づき、微かな呼吸が、鼻毛をそよがせて、スースーと洩れてくる。

レイ子は観念したように眼を瞑り、彼の鼻いじめに静かに耐えていた。

むき出しの腋窩に、くすぐりを誘うように指先がサヤサヤと撫で動く。

大型の電動バイブの先に、皮膚の小皺をとる目的という、円形の扁平な器具がとりつけられ、彼は当然のように近づけていった。

×　×　×

奇妙な前手縛りの雁字搦目の女体が、そこにある。

あぐらに組んだ両足を、腿から踵の先まで縄をかけ、首に掛けた縄を、両手の前で引き絞って、海老縛りめいたポーズである。

勢いにのった彼が、既にエクスタシーの稜線を彷徨する彼女を、容赦なく、がむしゃらに縛り上げたのであった。

両腕を抱えて、うずくまる姿で、レイ子は荒い息を吐いて、余韻は尚さめやらず、恍惚の境を低迷しているようであった。

吉川修は、レイ子の背に馬乗りになると、押し潰すように、弾みをつけて、ぐいぐいとおさえつける。

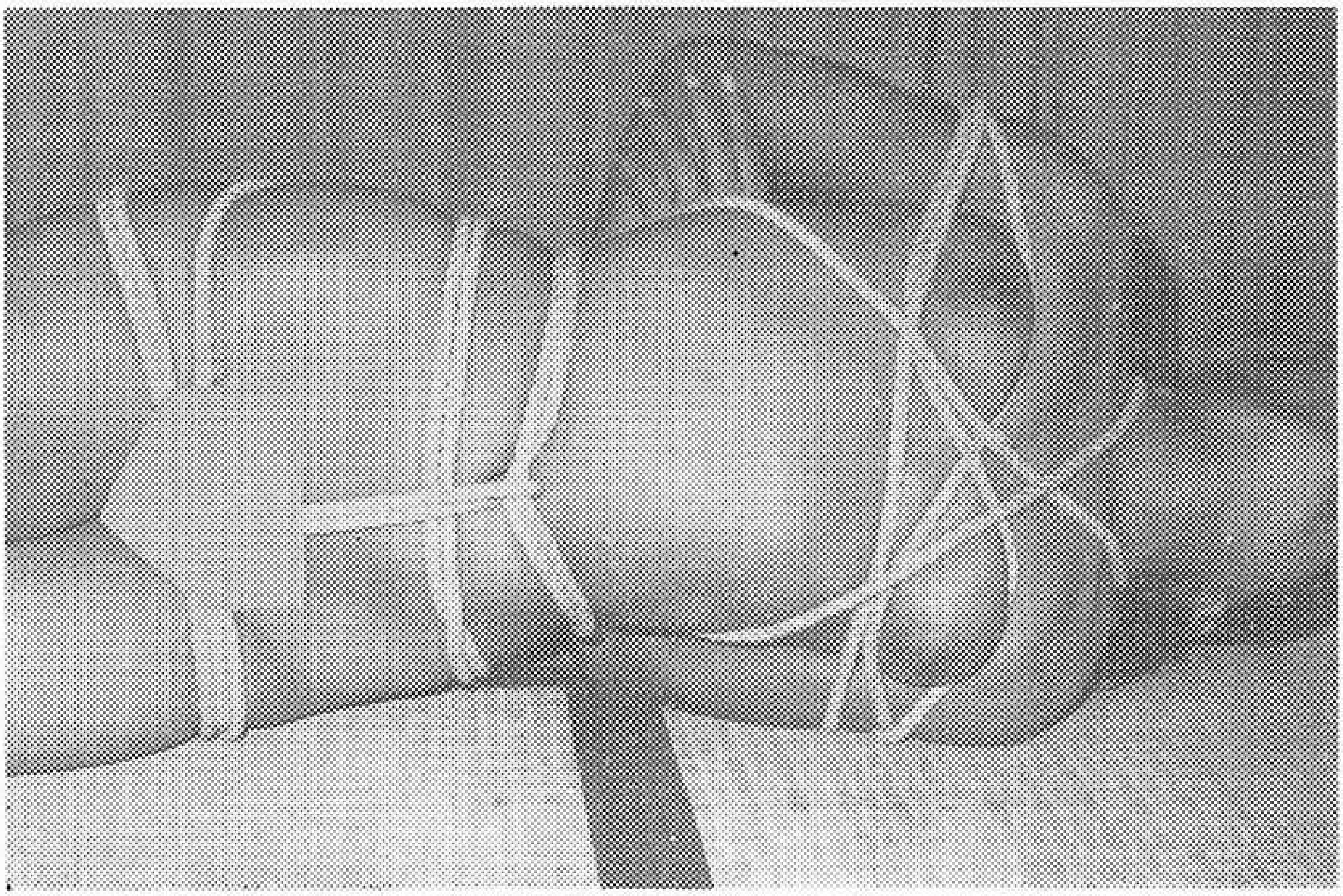
呼吸が切迫して、ウンウンいい乍らも、彼女の顔が深々と埋まり、交叉した足首の縄に接する。

やっと腰を上げると彼は肩を蹴り上げた。起き上がり小法師の達磨さながらに、手足の自由をもがれたレイ子は、苦もなくゴロンと、うしろに転がる。

髪を摑んで引き起こす。ぐいぐいゆすぶっておいて再びドンと突き放すと、彼女は高々と臀部を上にして仰向けに輾転とした。

起き上がり小法師なら、転んでも転んでも起き上がれるが、レイ子は、転がされたら、自力では起き上がれない。

シミ一つない、つややかな双臀を屹立させて、転がされたまま、みじろぎもしない。成程こうして転倒させる場合、後手縛りなら、かなりの苦痛を伴うが結びめ一つない背後は、転倒の



場合にも、さして痛さは感じなかったであろう。

　惜しげもなく、鮮烈な桃源がむき出しに曝され、私の視線を否応なく灼きつけてゆく。

　それは、吉川修との、過去の数々のSMプレイの経験にもかかわらず、瑞々しく、古墳は盗掘されていなかった。

　しっとりと光る墳墓の地に、私は、ぬかずく。思いがけず、不思議な現象であった。

　乳暈も、匂うが如く桃李さながらに色づいて、尖端はぐいみの実に似た、あでやかさを保っている。

（まさかバージンでもあるまいに、どうして？　今、眼下に悶えるレイ子は正しく被虐の歓びを、かみしめている筈なのに）

　何か、レイ子と彼との間に、SMプレイの暗契があるのではなかろうか。

　SMプレイ、イコール、セックスにつながると思い込んでいるのは、好色心旺盛な私の独り合点なのだろうか。

　彼は、私の手前、触れることを避けているのではなく、努めて触れぬよう気を配っているのだろうか。

　先刻、机上に長々と横たえて縛った時、彼はYの接点に焦点を絞って、扁平の円形を振動させていったが、それ以上の埋没はなかった。ペッティングのゆきつくところを、バイブレーターでマッサージしたに過ぎない。

　私を憚っているのではなく、レイ子に対して、私の知らぬ何かを憚って、それ以上は、自己を懸命に制御して窘めているのではなかろうか。

　レイ子の、清らかな神秘の扉を垣間みて、私は自分の思い上がりに、ハッと自覚させられたのであった。

　SMプレイは結構エスカレートしている。レイ子は華々しく歓声を挙げ、被虐の陶酔に浸っている。

　にもかかわらず、彼女の肌、象徴、すべては、娘らしい初々しさを充分に留めていた。

　私は大きな錯覚か、感違いをしているようである。

　吉川修と、篠原レイ子は、SMのプレイメ

ートとして、当然、プレイの果ての肉体のつながりを、極く当然の様に考え、内心、歯搔ゆく思っていたのが、根本的な私の、大きな誤りであるように思えて来たのであった。

　可愛いい悪女――ＳＭプレイに割り切った近代娘というイメージは、この刹那、大きな転換をして、改めて私は、篠原レイ子の、すべすべした、シミひとつない柔肌に、驚異の眼を向けたのであった。

　激しい屈辱のポーズで、羞恥をすべて露呈したレイ子が、意外に明るい表情で、恬淡として転がっている。

　汗をにじませ、カメラを構えて、嗜虐の虜になっているのは吉川修であり、好色の眼でみつめていたのは外ならぬ私であった。

　彼は、漸くにしてレイ子を抱き起こした。

「ああ、切ない。息が、つまりそう」

　大きく吐息をして、レイ子は呟く。

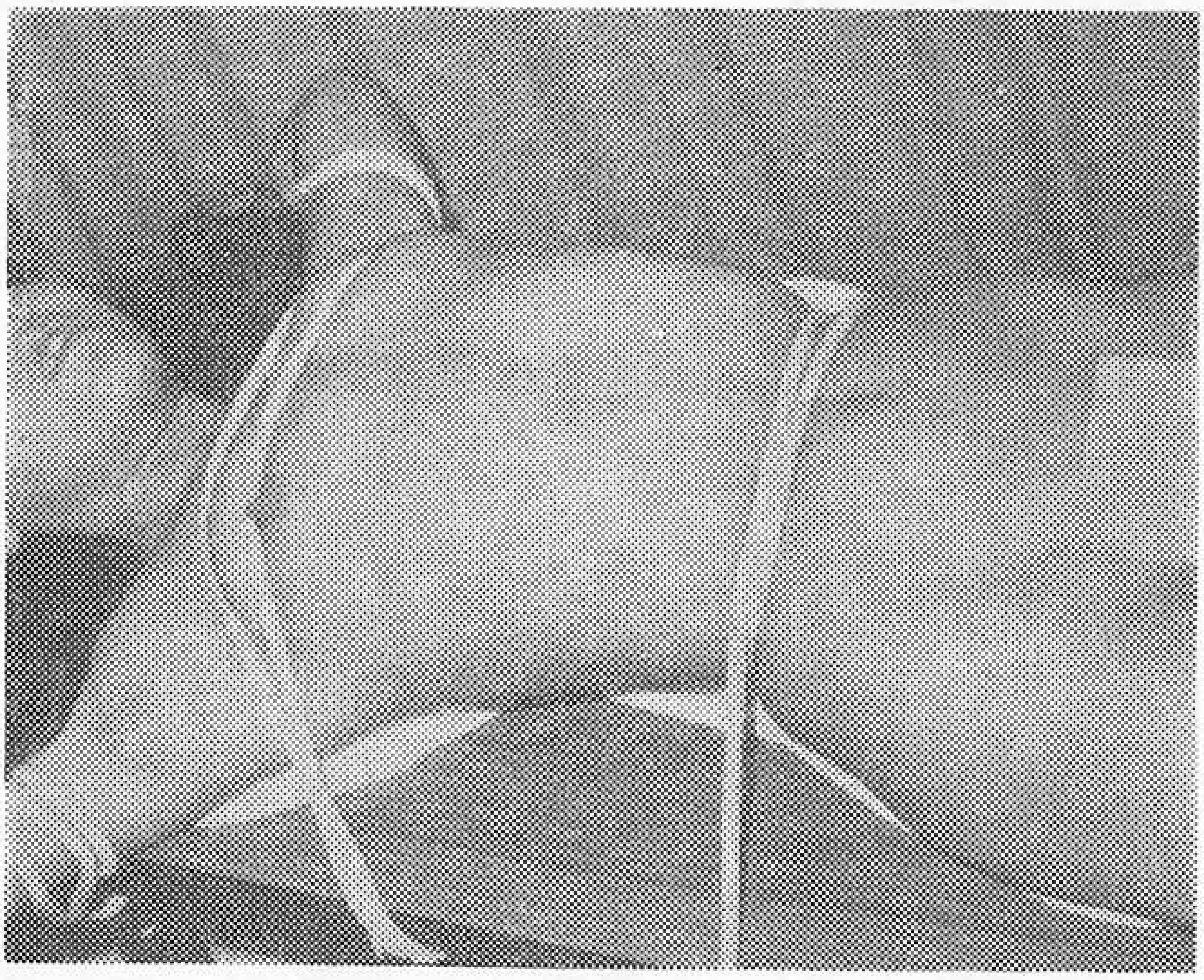
「縄をといて欲しいか」

「ウン、解いて欲しい」

「よしよし」

　案外あっさりと引き下がった彼は、縄尻も分かりかねる雁字搦目の縄を、フウフウいい乍ら解きほぐしていった。

「ああ、首が痛い」



「少しは、こたえたか――」

「ええ、すごく、こたえたわ」

「でも、結構、喜んでいたぞ」

「そうかしら……」

　レイ子は微かな笑みを泛かべたが、恬然として、一向に羞恥のかげらいはなかった。

「まだ、やるの?」

「ああ、例の大の字縛りだ」

「いいわ――」

　狎れ合いめいた会話の中に、何かを探ろうとしたが、結局、何も浮かんではこない。レイ子は欣然として快く協力し、自分自身も、被虐の想念に陶酔している風であった。

　太いビニールパイプを二本、とり出してきた彼は、仰向けになったレイ子を大の字にして、パイプに縛りつける。

「これの時は、いつも声が高くなるから、猿轡を嵌めてやるよ」

「聞こえはしないわよ」

「でも、ヒヤヒヤするんだ」

　カラッとした雰囲気で、プレイの準備が進められてゆく。

　何が始まるのか固唾をのんで私は見守り、数発、この大の字縛りに、早くも私の閃光はきらめく。

「あのう、先生。ペッティングしたいんですけど、どうも……」

「ウン、分かったよ」

彼は一対一で、心から有終の美を飾りたい意向を洩らし、私は心得て、応接間へ移動した。正直いって、一対一のペッティングが、どの程度なのか、覗いてみたい欲望に激しくかられたが、冷静にこらえて、私は耳に神経を集中させて、どっかりとソファに凭れ込み静かに煙草を、くゆらせていた。

その為に猿轡を嵌めて、少しでも私に聞こえるのを防ごうという意図であったらしい。

彼等には、彼等のプライバシーがある。そこまでノコノコ立ち入るのは不粋というものであった。

若い彼と彼女の、心おきないプレイには、やはり遠慮すべきであろう。

彼は精一杯、私に協力してくれた。レイ子も又、私を忌避、嫌悪する風もなく、在りのままに振舞ってくれた。

最後という愉しみには、介入すべきではない。そんな達観の念を抱きつつも、好色心が全神経に集めて働いていた。

彼女の呻きと歓喜に悶えるくぐもり声――かすかな振動音――。

何か囁く、彼の低音の愛撫の声――。

途切れ途切れに入るが、意外に物静かであった。次第にレイ子の歓声が高まるにつれて吉川修の荒々しい息使いが、襖ごしに耳を打った。

想像力を逞しくして、私は、矢張りレイ子と彼は肉体で結ばれていたのかと、失望と安堵の織り交じった複雑な感情で、息を殺して隣室の気配を窺うのであった。

静寂が戻る――。

終わったのか――。

縄を解く気配と共に、ククと忍び笑いが洩れて、しばらくして、バツの悪そうな表情で、彼だけが姿を現わした。

「どうも、すみませんねえ。先生に、まったく申し訳けのないことしちゃいまして……」

彼は恐縮して、向かい合って坐ったが、空虚な飽和状態を全身に漂わせていた。

「彼女、午後三時までに家に帰らなくちゃなりませんので、勝手に終わっちゃって御免なさい」

「いや、いいんだよ。私も少し、疲れたのでね、もうおしまいにしたかったところだ」

「本当ですか。何だか折角、わざわざいらっしゃったのに、悪いですね。まあ、どうぞワインでも――」

彼は気がついたように立ち上がって、洋酒棚からグラスとブランデーを、とり出してくると、なみなみと、ついで私にすすめる。

「彼女は？」

「一寸、顔を直して、帰り支度しているのですが、間もなく顔を出すでしょう」

「いい子だね。卒直で、純真で……。あんたが手紙に書いていた、可愛いい悪女というイメージがないでもないが、少なくとも悪女には見えないよ。可愛いい素直なお嬢さんだよ」

「そう見えますか」

吉川修は嬉しそうに笑った。

「あんたに少し聞きたいことあるんだけど」

ハッとしたように、彼は私をみつめ、

「何でしょうか」

と改まる。

「いや、別に大したことじゃないんです。唯一寸、不審に思ったことがあってね」

「いいです。じゃあ、彼女を帰してから」

「ああ、それがいい」

その時、レイ子の声がする。

「入っていいかしら」

「ああ、いいよ。支度、出来た？」

襖が開いて、微かに愧らいの笑みを泛かべたレイ子が入ってくる。私に軽く会釈すると彼の傍へ、寄り添うようにして坐った。

「もう帰る？」と彼はレイ子にきく。

「ええ、悪いわね。帰っていいかしら」

私に気を使って、彼女は遠慮している。

「ああ、先生にも、いっておいたよ。心配しないで……」

吉川修の口調は、プレイとは、うって変わって優しく、いたわりが篭っていた。

「御免なさいね。じゃあ、センセ、さようなら」

私と彼とに等分に挨拶して、篠原レイ子はペロッと赤い可愛いい舌を出して、バイバイという風に手を振って、応接間の扉から消える。私の手前、遠慮したのか、彼は見送りに立たなかった。

「お気に入りましたか？」

ホッとした表情で、彼は訊ねる。

「ああ、とても――。すごく協力的じゃないの。それにSMプレイを理解しているのかあの子のM性が、そうさせるのか、ちっとも羞かしがったり照れたりしないのがいいね」

「そうでしょう。マイペットなんですよ、彼女――」

「羨ましいね。でも、あんたとは、綺麗な仲なんじゃない？　私は、てっきり相当、深い関係だと思っていたのだが、そうでもないらしいね。私の直感だけど」

「どうして、そんなことが……」

　彼は絶句する。

「直感だよ、単なる……。でも、沢山の女性をカメラ・ハントして経験で分かるのだけどあの人の体は、全然、崩れていないんだネ。バージンとも思えないけど、少なくとも、余り男性遍歴はないと思うが、どう」

「……」

「とは思うものの、大の字縛りのプレイは見ていないので、何ともいえないが、何か二人の間に取り交わされた約束でもあるんじゃない？」

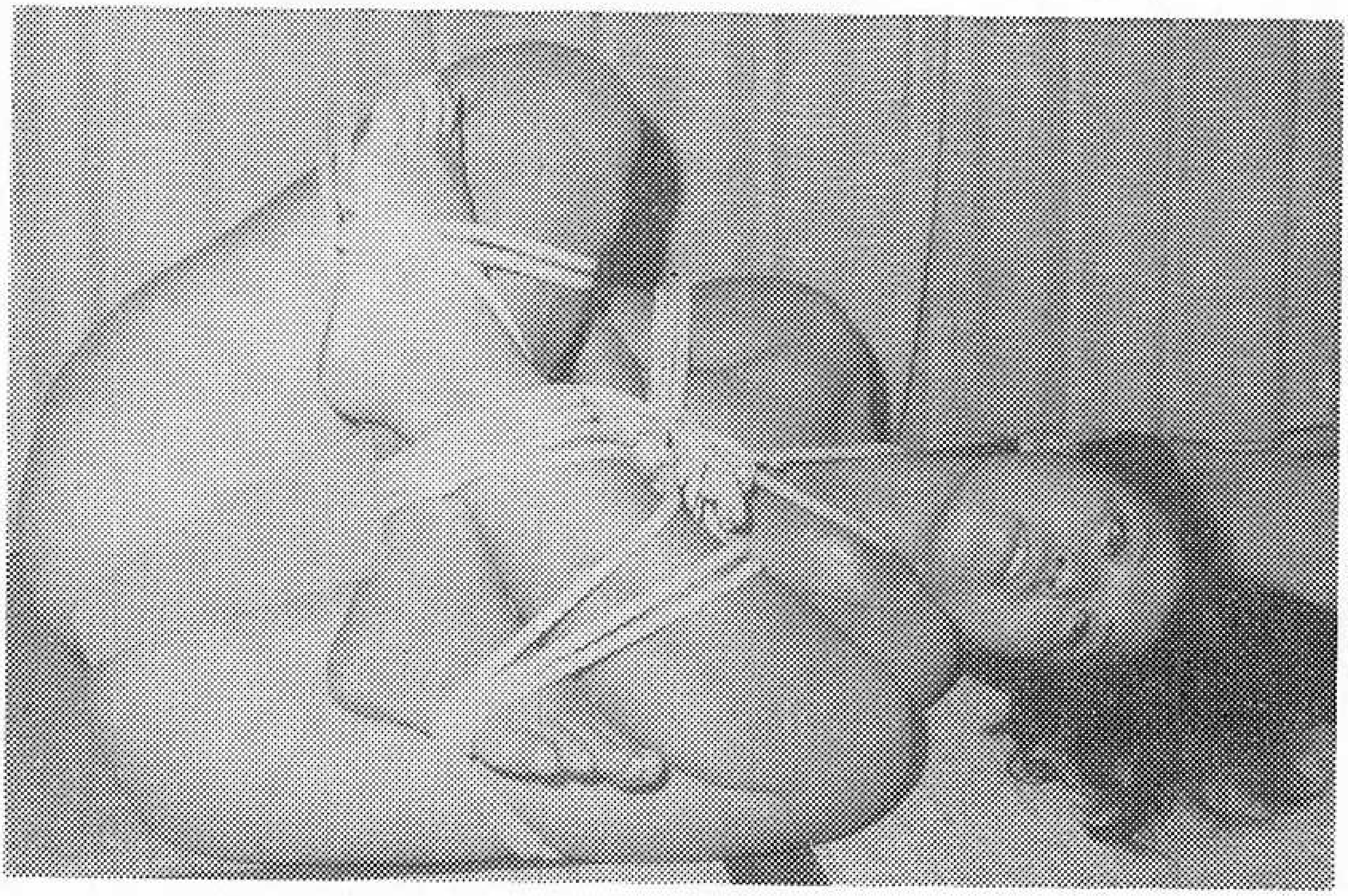
　吉川修は、言おうか、言うまいか、かなり迷っているようであった。

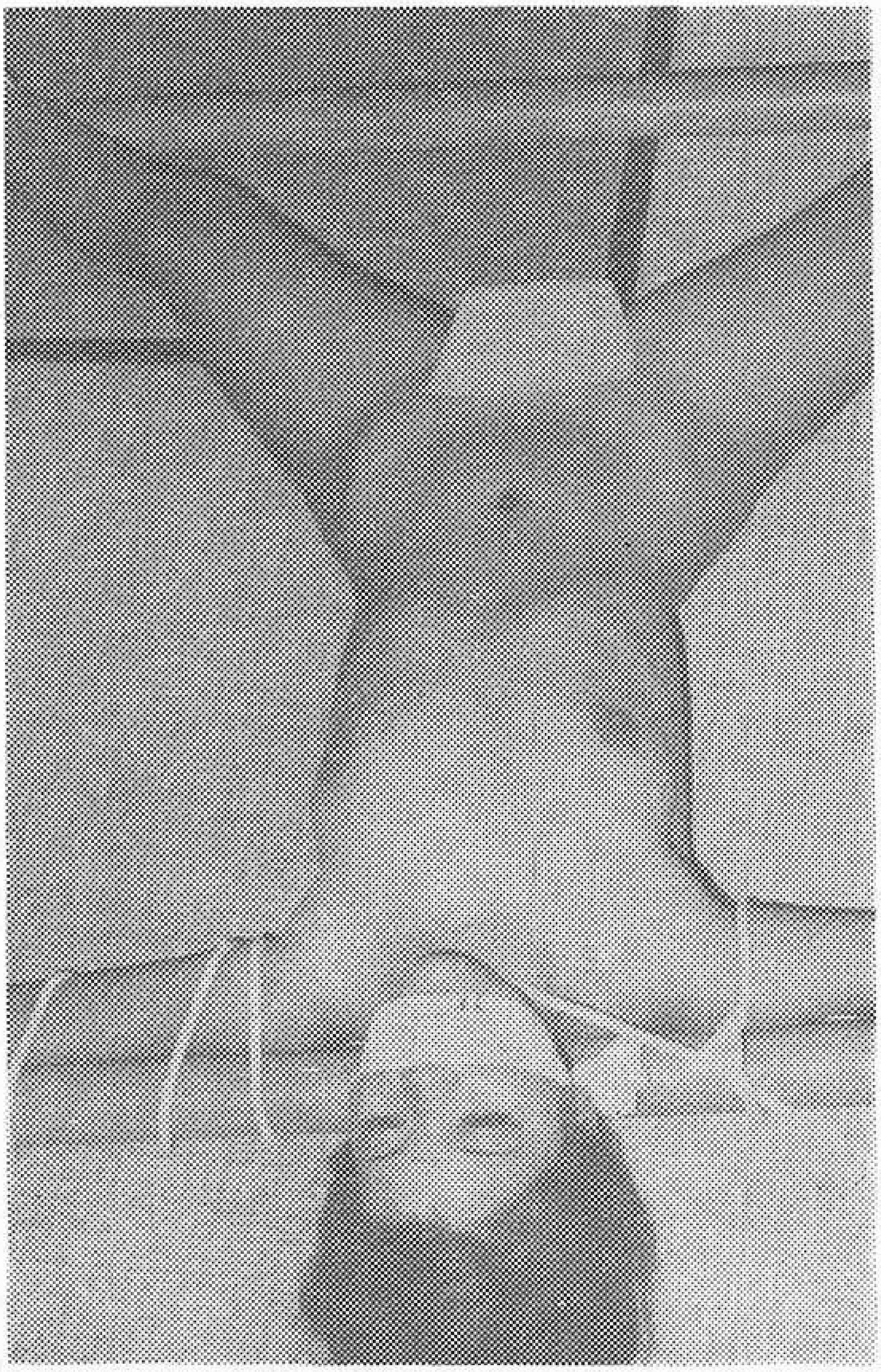
　脂汗を滲ませて彼は、やっと口をきった。

「私は、あの娘の家庭教師だったのです一昨年の春まで……。家庭教師として、あの娘の家を訪れるうち、親しくなり、彼女の被虐性を知り、秘かに交際を始めたのです。SM的な交際でした。でも、そのせいかどうか彼女は大学の試験に不合格でした。家庭教師の役目は、果たせずに終わりました。その責任の大半は私にあるのです。彼女は今、習いごとや、家事を手伝っていますが、SMプレイの仲は続いています、一つの条件を守る約束で」

「それは肉体を求めないこと」

「その通りです。彼女の在学中矢も楯もたまらず求めて、二度ばかり彼女は、許しました。でも大学をしくじって、半年ばかり音信が途絶え、私も気まずくて近寄りませんでした。偶然が私と彼女を、新宿で邂逅させたのです。私は求めましたが、彼女は拒み、その代り、肉体を求





めなかったら、又、SM的なプレイはしてもいいといってくれました。キスやヘビィペッティングは許してくれます。彼女自身の被虐性も満足するからです。

　正直いって私には、余り強烈なS性は、ありませんでしたが、彼女の求めに応じて、プレイを行なううち、欲ばせてやる為に、いつしか仮性のS性が、真性に近づいていったのです。奇クや風奇を買い求め、SMの実態を知り、先生に御連絡して、ひたすらに、Sの自分になろうとしたのも、その頃です。

　彼女の求める、くすぐり責め、羞恥責めなど、どちらかといえば、彼女の求めに応じてプレイをしていたようです。若し緊縛の状態で私がその気になれば遂行出来るでしょう。

　しかし、一度のその違約で、彼女を失うことが怖いのです。矢も楯も堪まらぬ気持を精一杯、押えていますが、どうにもならぬ時もあります。そんな時……」

　真摯な告白に撃たれて、私は合の手も挟まず、彼の次の言葉を待つ。彼の眸は、愁いを帯びて、真剣そのものであった。

「そんな時、どう処理するとお考えですか。今日も先生に遠慮していただいた最大の原因は、私の欲望を私自身、処理しているからです。彼女に喜びを与えつつ、私も又、自分を処理しているのです。そんな、ぶざまな私をみられたくなかったのです。SMのプレイメイトなどと、偉そうにいっていましても、本当は、彼女の被虐性を満たしてやる、奉仕的な存在に過ぎないのかも知れません。やはり先生は誤魔化せなかった——。何もかも喋ってスッとしましたよ」

　美髭がふるえ、吉川修は、およそ風体からは考えられぬ、純粋さを持っていた。

「彼女を好きなんでしょう」

「ええ、愛しています。でも懼らく結婚は無理でしょう。家族の方が許しませんよ」

「いつか、分かる日も来ますよ。あなたのこの年令で、結婚しない気持が分かるような気もしますよ」

「彼女をおいて、他にその気にはなれないのです。誘えば、すぐついて来るOLや、バー、キャバレーのホステス、そんな女性を相手に、しばしの戯れのプレイもしましたが、所詮は、その場限りです。彼女の占めている比重が、余りにも大きいせいでしょうね」

　私は愁然とした気持で、思わず彼の肩を叩いてやりたくなった。

（頑張れ！　矢も楯もたまらぬ時、そのまま押すもよし、守るもよし。レイ子自身の気持が、彼にすべてを許していることをこの純粋な青年は気づかないのであろうか）

　口では拒否しつつも、彼女は内心、それを望み、期待しているのかも知れない。そして、馬鹿正直に、一線を守る彼を、或は歯搔ゆく思っているのではなかろうか。

　彼女がプレイに欣然と笑みをこぼし、軽やかに振舞い、恬淡としている原因が、そこにあったのか――。

　いつまでも引き留めていたげな彼に、別れを告げて、彼の交歓のアジトを出たのは、午後四時であった。

　東京駅まで見送るという彼の好意を謝しながら、強いて押し止め、私は高円寺駅で彼と別れた。

　この次、出会う時には、結婚しているかも知れない。

　仄々とした二人の仲を想像している内に、そうなるのが本筋のように思われてきて、将来に幸多かれと祈りたくなるのであった。

　マルゴで出会った紳士の紹介した、ハプニングプレイの奥村マリ――。

　愛の棲家で、慌しい、ひとときに、宿願の人、岸悠子の裸身に接した感激――。

　被虐願望の、若く明るい、篠原レイ子とダンディ、吉川修の奇妙な仲――。

　そんな想い出を、めまぐるしく回想し乍ら私は、満員の新幹線に揺られていた。

―(了)―

私のマゾ点描

ある春宵の幸運

小谷竜三

カット・岡　たかし

新宿二丁目界隈は、もとの遊廓地帯。

〃おなつかしや……〃

まだ夕陽の明るい時刻だったが、足のヤツが勝手にトコトコと踏み込んでいた。

横丁に並ぶ二階建ての家が、昔のままであるのかどうかは覚えていないが、たしかに思い出させてくれるタタズマイが嬉しい。おまけに、門毎に出張っている女が「ねえ、おにいさん、寄ってらっしゃいよ」とくるんだから、若がえらせてくれる。ただ、タイムマシンで昔に戻ったのではない証拠は、ズラリと並んだ軒並の看板〈ヌード・スタジオ〉だ。

「ねえったら！」

三人並んで、三様のポーズで獲物を待ち受けていたらしい女の一人が、私をカモと見定めたのか、一際高く、呼びかけの矢を放ってきた。私の足が、その矢に射すくめられてヒョロリと止まる。

「寄ってってよ、ねえ」

相当なボリューム感が、ぐっと、すり寄ってきた。吸いつけられそうな気がして、私はタタラを踏んで後じさる。私より背が高い。

「きょうは駄目なんだ。ノーマネーでね」

私は口の中でボソボソと言った。

「え？　なんてったの？」

「ノーマネェ」

私は、尚もすり寄ってきた付けマツゲとヌメヌメした感じの朱唇に、たいしたことはないと思いながら、伝え得る発音をした。

「なんだって？　あんた、アチャラ人かい」

「い、いや。これでも日本人さ」

「だったら日本語、知ってるんでしょ」

「そ、そりゃあ……」

「知らないの？」

「知ってるさ」

「じゃあ、カネがないって、はっきり言やあいいじゃない、日本語でさ」

「カ、カネがないんだ」

「カネもないのに気取るナイ。コン畜生」

彼女は、私の腰の辺りを蹴るような仕草をして、プイと元の場所に戻った。私は胸の中にメラメラと燃え上がるものを覚えた。

フラフラと歩き始めたものの、一旦、燃えだした火の手は激しくなる一方で、どうにも鎮まってくれそうにない。目の前に、最初はたいしたことはないと思えた彼女の顔が、理想のＳ女性のそれに変わってチラチラする。あの付けマツゲも、ヌメヌメした朱唇も、又蹴り上げる仕草をした時にチラリと覗けた太腿の艶かしさも、威圧されるようなボリューム感がありながらスラリとした容姿も、総てが得難いサディスティンのものであるような

気になってしまっていたのだ。

「ちょいと、おにいさん。ヌードよう。寄って……、アラ、あんたは、さっきのノーマネーさんじゃない」

いつの間にか引っ返してきていた私に、声をかけて来たのは例の彼女ではなく、一緒にいた三人の内の一人らしかった。

「あたしじゃどう？　やっぱしノーマネーなの？　好みが合えば、どこかからマネーが出てくるんでしょ。ねえ」

この女は、いやにベタベタムードである。同じように寄りそってきても、彼女より更に背丈は高いが威圧感は受けない。マネーが出てくるどころか、ますます引っこむクチだ。

「さっき、蹴りかけたヒトは？」

「あらッ、あたしはお呼びじゃないの？」

ベタベタ女は口惜しそうに私を睨んだ。

そこへ、お目当ての彼女が出てきた。手に写真額とハタキを持っていた。額の掛け替えでも始めたらしい。彼女はチラッと私に視線を走らせた。私はドキドキしてしまう。

「マキちゃん。このヒト、蹴られたいらしいわよ、あんたに……」

ベタベタ女は彼女にそういってツンとそっぽ向いた。彼女は〃マキ〃様というらしい。

そのマキ様は、向き直った私を無視したように、クルリと手の額を裏返した。額のガラス面が私の目の前になった。正しく彼女のヌードであった。カラーも鮮かなそれは、貴婦人の憩いを偲ばす芸術写真のように、私の目を眩しく奪った。思わず顔を突き出す。

と、その私の鼻先でパッとホコリが舞い上がった。パッ、パッと引続いてハタキが振られ、どうやら済んだ気配に目を開くと、じっと私を見詰めているマキ様の眸があった。

「蹴られたいんだって？」

マキ様は、ヌメヌメ唇に笑みを漂わせながらそう言って、顎で〃オイデ〃の合図をして家の中へ入った。私はフラフラと従う。

入口のすぐ横のフロアとも言えぬ狭いフロアの、ソファともいえぬようなソファに、マキ様が腰を降ろして、ゆっくりと、たばこを吸いつけてから、まだ、つっ立っている私を眺めあげた。他には誰も居ない。

「引っ返してきたとこをみると、蹴られ料ぐらいは持ってたらしいわね、カネなしさん」

上等ではなさそうだが、空いたセット椅子があるのに、坐れとも言ってくれない。

私は、使い残りのカネを全部摑み出した。小ゼニまで入れて八百二十円しかなかった。

「あら、これだけ？　もうないの？」

テーブルに並べた五百円札一枚と小ゼニを見て、マキ様は疑いの眼差し。私はポケットを全部、ひっくり返して見せた。

「フーン、あんたって意外に正直なのね」

マジマジと私を見直すマキ様は、ほんとに感心した顔付きだった。

「まあ、とにかく坐ったら？」

たばこを揉み消しながら、やっと気付いたようにマキ様が言ってくれた。

〃ここだ！〃

私は、さっきから考えていたことを実行に移す時だと思った。それで、すぐにマキ様の前にあるテーブルを少し押してずらし、ペタンと床に正坐したのだった。

「あらッ、そんなとこに？……」

マキ様は驚いた様子だったが、すぐに思い直してくれたようだ。

「フフン、まあいいわ」

そういいながら、私の目の真前辺りになった膝を、ちょっと右側へずらし、ゆっくりと右足を挙げて左足の膝にのせた。ファッと匂う体臭と共に、生々しい内腿の白さと、真赤（と思えた）なパンティが覗けて、いくぶん下火になっていた私のM情火を煽りたてる。

ゴクリと、私の喉を通る生唾が鳴った。

「脱がしてよ、靴を……」

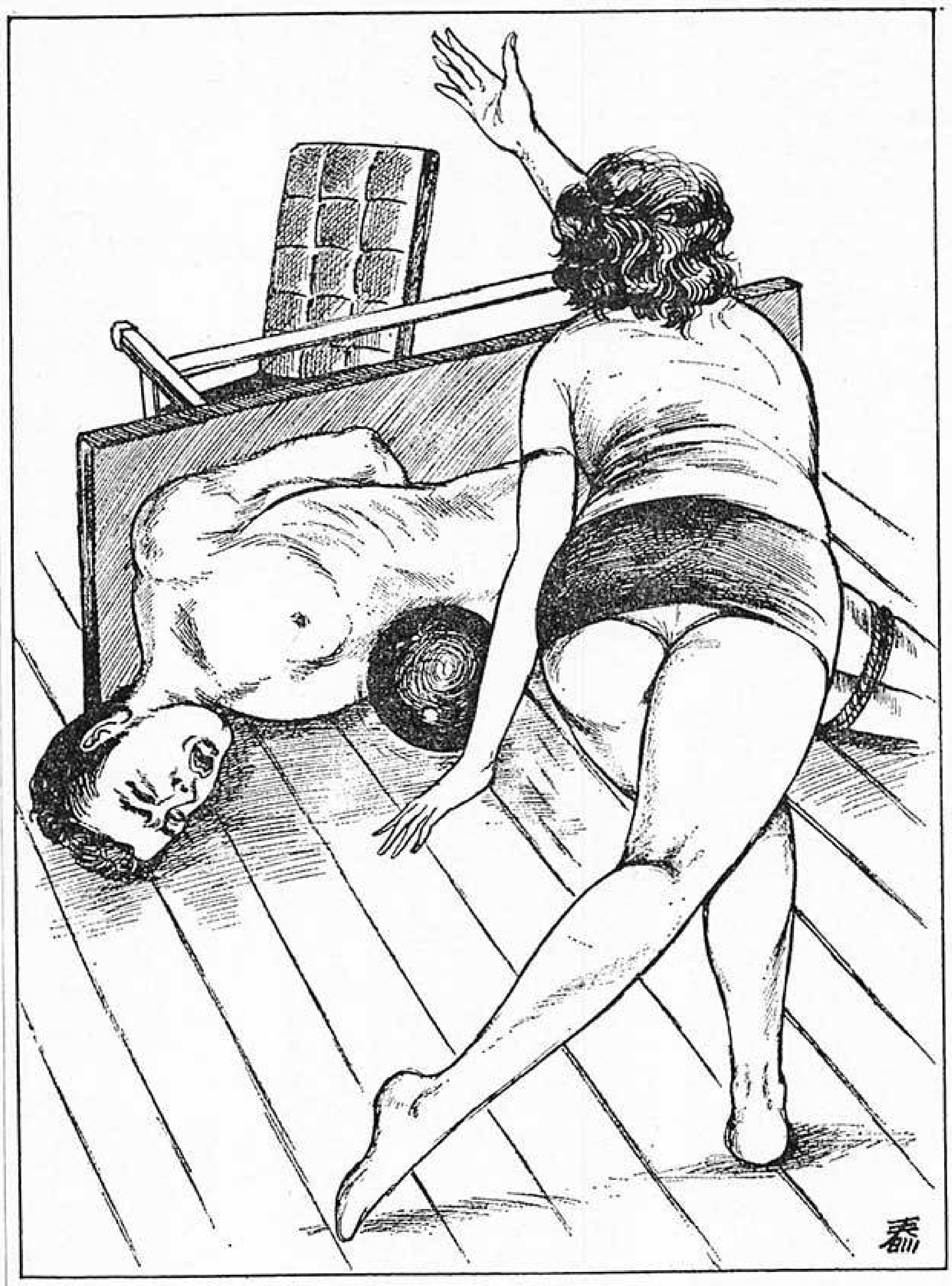
私の鼻を小突かんばかりに、マキ様のサンダル式？　ハイヒールがブラブラした。青い色のそれは、ほんの少し汚れていた。

私は、わくわくしながら、両手で捧げ受けるように靴底を掌にのせて脱がし取った。さすがに、すんなりとした感じながら、私より大きいのではないかと思うぐらいの、たくま

しい足が、少し剝げかかった赤いペデキュアの指をピクピクさせながら現われ出た。

私は、キュウッと胸が痛くなる思いがして思わず、その小指辺りに接吻した。少々むれたような、汗臭い芳臭であった。

と、その足がスッと動いた。ハッと顔を上げた私の右頰に、その足裏が当てられて、軽くヒタヒタと叩くように蠢き始めた。私は、むしょうに上気してしまい、その柔らかい足裏を有難く思ってM気分に浸った。



ナミオM画廊　『ホーム・セット』　春川ナミオ

「フフフ。ますます正直なのねえ」

おかしそうに言われるマキ様のお声は、その時の私には女神の玉声だった。が、瞬間、下腹部に感じた痛さに、とび上がった。

「あら、ごめん。軽くやったつもりだのに」

マキ様の手には、先程のハタキが逆に持たれていた。

「いいえ、突然だったからびっくりしただけです。お好きなようにどうぞ」

私は急いでお願いして、再び目を閉じ、恍惚の世界を求めようとした。

ハタキの柄によるいたぶりは、極端にゆるやかなものとなり、私は、不用意に痛さを表現してしまったことを悔い、ズボンのあることを呪わなければならなくなった。

その代り、顔に受ける足責めのほうは活発になり、頰に往復ビンタような足裏と甲による擦り打ち、足指による鼻挟み、唇をコジ開けての足指の乱入……等々、首に力を入れて享受する〝足のいたぶり〟は、私の夢想する世界のほんの一部ながら、確かな触覚を持って、うっとりさせてくれた。

「だめよ。いくらそんなことしたって、縛ってまではあげられないわよ」

女王様のお声に、ふっと我に返った私は、ポカンとした。マキ様の言われる事が、どういう意味か分からなかったのだ。

「フフフ。これよ、これ」

ハタキの柄がすっと伸びてきて、私の二の腕をピタピタと打った。私はハッとなった。いつの間にか、両手を背中で組み合わしていたのだった。無意識に、縛られた自分を演出していたらしい。

「ありがと。よく分かったわ」

　私は、又もポカンとしなければならなかった。マキ様にお礼を言われる筋合いではないし、何もお教えした覚えはない。？の気持で振り仰ぐマキ様のお顔には、女王様らしからぬ優しい笑みがあった。が、次の瞬間、私は、鼻柱から眉間にかけて、吸いつかれるような柔らかさを感じたと思うと、グーンと強い力で押し倒されていた。ガツンとくる衝撃を後頭部に受けて一瞬クラクラッとした。

「ごめんなさい、痛かった?」

　頭を振って起き上がった私を覗きこむマキ様は、本当に心配しているようだった。

「軽く蹴ったつもりなのよ、お礼の意味で」

　といっても、床はセメント張りであることには、お気配りがなかったらしい。

「あまり派手にやらないでよう」

　入口から、女の顔が二つ、覗きこんで、先程のベタベタ女が、イーッと口をひんまげてみせた。この調子だと、私の恍惚状態は何度か覗き見られていたに違いない。私は今更のように顔の火照るのがわかった。

「実はねえ……」

　マキ様が、声を落として話しかけてきた。

「あたいの、いいお客の一人に、あんたみたいなへんなのが居るのよ。ワリカシ気前がいいから放したくないんだけど、あたい、どうすりゃひっぱとけるか分からなかったのよ。お店のネエさんが、ふん縛って踏みつけてやりゃあいいって教えてくれたけど、あんたのさっきの様子を見るまでは、まさかって気持だったわ。でもホントなのね。おかげで自信がついたわ。ありがとね」

　マキ様のいう「お礼」の意味はわかったのだが、私は複雑な気持に追いこまれた。

「ボツボツ、本気で客を拾わなきゃなんない時間だから、あんた、もうお帰りよ。又、カネのある時においでね。カメラなんかなくってもいいからさ」

　そう言って、マキ様はすっと立ち上がられた。目の前に、近々と立ったフックラした足が艶かしく動いて、私がお脱がせした靴を穿いてしまった。穿かせろ、と言ってくれればいいのに……と、私は恨めしく思っているうちに、たまらなくなり、思いきって、その膝小僧辺りに接吻してしまった。

「あらッ!」

　という声と同時に、二、三枚の硬貨が落ちてきて私の頭に当たった。

「バカ、びっくりするじゃない」

　見上げると、マキ様が両手に、最初に私がさらけ出した金を持って見下ろしていた。

「ようし。これ、返してやろうと思ってたけど、へんなことしたから、やらないわ。さあ早くお帰り!」

　それが最後のサービス?　だったのか、青い靴が、私の正座したままの太腿をぎゅっと一踏みしてくれて、さっと遠のいて行った。私は、ズボンにウッスラと残った靴底の残り砂? を、ボンヤリと眺めていた。

「あんた、のいてよ。お客さんだから……」

　ツンツンした声が降ってきた。ベタベタ女が、カメラをブラ下げた中年男の腕にしがみついて見下ろしている。私は、ノソノソと立ち上がらざるを得なかった。

　表へ出ると、すっかり暗くなっていた。無意識にキョロキョロ、マキ様を目で捜す。その視線の中に、いやにヒョロ長い感じの男と向かい合って話しているマキ様を認めた時、私の胸の奥から、思いもかけなかった嫉妬の情が吹き出した。

　ブルブルと慄える手足を、どうしようもない。私の鼻先を、腕を組み合ったマキ様と男が通り過ぎた。マキ様は私にウインクを投げかけてくれた。それがその男に摑みかかりたいほどの衝動を制御してくれた。私は、しおしおと、歩き始めた。

——（おわり）——

第四十七回

前号まで＝独裁主、**有明**は、世界中から誘拐蒐集した数千の美女に君臨している。彼女等は五段七階級に厳然と分かれ夫々の地位で隷属畜従している。長年、東の館の責任者として仕えてきた一品の年寄、**柏木の局**は予備役に編入される事を嫌って、有明に死を給うことを願い出た。この申し出は、一等扱いで大切に保護されている美女、**山本百合子**に対して微妙な彰響を与えずにはいなかった。彼女は、有明の正妻である**貴和**、金のクラスにランクされる準后、**サラ**や**星恵美子**等、いわゆる貴妃たちの中に加えられるべく予定されている。

秋扇賦

死を急ぐ柏木の局が、文字通り必死で迫る懇請に、有明が遂に折れてしまったのは山本百合子、初お目見得から、それでも三日、経ってからのことであった。その間、有明は手をかえ、品をかえて柏木の翻意を求めたけれど、彼女にリタイアを求めるという前提が、くつがえされない以上、如何しようもなかったのである。彼女は、自らの願意が聞き届けられなければ、自ら禁を破って自殺するとまで、言い切っていた。前述のように、有明に身も心も捧げると誓った以上、この国の女たちには自殺する権利はなかった。いや、自殺は第一級の反抗であり、犯罪であった。自殺者は、厳しく罰せられなければならない。といっても、それは屍体の凌辱を意味する。柏木の決意は自分の死骸が辱かしめられ、切り刻まれても惜しくないという程、強固なものであった。

それなのに一旦、死を決した彼女の日常はかえって爽かな落ち着きを取り戻していた。

山本百合子には、それが最も切実に感じられた。

百合子には、あの晩、何故お局が、あのよ

うな行動をとったか、今漸く、理解出来た。あのとき、お局は最も苦しみ、最も悩んでいたのだと知った。

「百合子さま」

お局は、急にコンナ呼び方を、するようになった。

「わたくしの心は、あなたに留まっていたいわ。あなたが、マスターの、おいつくしみを受ける間も、あなたのどこかにいて、そのお裾わけをいただきたいの。でも、それも私の思いあがりだわね。あなたも、わたしのことなんか振りすてて、全身全霊で、お仕えしなければならないのですもの」

大の字に手足を固定された百合子の、すぐ脇に坐ったお局は、やさしくその滑かな、お腹をさすりながら、こう言ったものである。

わけもなく悲しくて、百合子は滂沱とした涙を流しつづけていた。

次の日、東の館では柏木の後任者となった明石の局、伊原直子の着任式があった。式後の酒宴には貴和を始め星、サラの両貴妃、さらに夕霧、若紫など、お手付の親授官が、思い思いの小紋に綺羅を飾って出席した。山本百合子も異例のことだったが、その末席に、つらなることを許されたのである。

お針子が徹夜して縫いあげた絹の白無垢を着けた柏木の局は、当然のことながら、その夜の中心であった。又、それにふさわしい貫禄と余裕を示していた。何よりも一同をホッとさせたのは、彼女が、おそろしく明朗だったことである。とても死を決意した人間だとは、思われない程であった。

すばらしい器に盛られた懐石料理を、お美味しそうに喰べ、且、盃を重ねた。

この夜は不思議な機縁が披露されることになった。

若紫の局（佐瀬直美）と山本百合子とが同級生だったことである。片や実業家のお嬢さん、片や時めく政界の大立物を父に持ったこの二人の娘は、先ずは最も幸せな少女時代を過ごしたといってよいであろう。かつては華族しか入れなかった学習院も、戦後は私立となって一応は誰でも入学出来るようになったとはいっても、その古い伝統と貴族趣味は依然として特殊なものであった。そして、それは女子部程、顕著だった。初等科を終えてから、男女は別々になる。戸山町にある女子部は男子禁制の花園であり、ハイソサイティの匂いをプンプンさせていたのである。

二人は、ここで高等科一年まで「ご親友」として過ごしてきた。高等科一年までといったのは、佐瀬直美、そのとき十六才だったが忽然として行方不明になってしまったからである。もっとも一度だけ、ロンドンの消印のある航空便が佐瀬家に届いた。事情があって急に国外へ出たこと。そして、死んだと思って捜さないで欲しいという意味のことが簡単に記してあったのを百合子も見せられた。それは確かに直美の筆跡だった。

その佐瀬直美は四年間、この国で暮してきた。そして努力の甲斐あって累進し、親授官の高位を獲得したばかりである。

一方、一旦は取り残されていた山本百合子の方も、天性の麗質が次第に顕われるにつれて、有明の情報網のキャッチするところとなり、おくればせながら有明のコレクションに加えられる運命になったという次第。まことに数奇な天の星運は、ここに二人の美女を再会せしめたのである。

二人は手をとりあって人前も、はばからず声をはなって泣いた。

「ほんとにナオミさんなのね。まるで夢のようだわ」

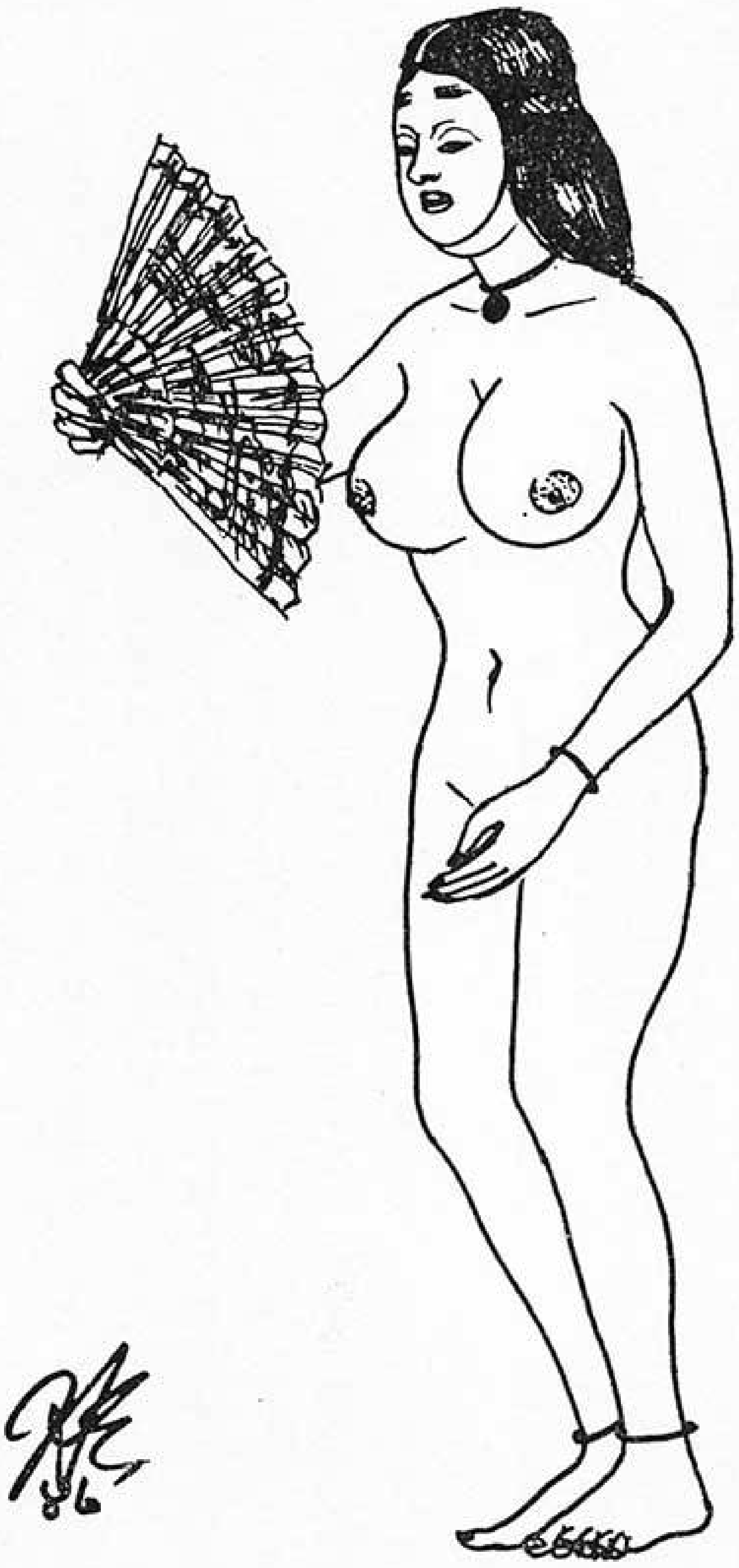
「百合さん。お綺麗になったわねえ」

「あなたこそ——あのオデブちゃんがねえ」

「まあ、百合さんったら、ホホホホ……」

　と涙も、これは嬉し泣きだったから、濡れた顔を見合わせながら、笑い声が出たのである。そして、その泣き笑いの顔に、まぎれもない女子部時代の友情を確認し合ったのである。その頃、どちらかといえば太りじしだった直美は、愛嬌こそ、類稀だったとしても、どう見ても決して美少女とは言えなかった。それなのに今は、どうだ。四年間の厳しい生活は、彼女の肉体を芸術品といってもよい程に磨きあげている。しかも一夜、有明の愛に濡れて、尚更、耀くばかり、今をときめく若紫の局ではないか。

　百合子は舌を巻く思いで、嘗てのクラスメートを見つめた。その佐瀬直美は、忽然と出現した旧友が、自分を追い越して行く本命馬となるであろうということを、早くも予知している。もちろん、ジェラシーがないといえば嘘になる。しかし、それを表に出すことは絶対に許されない。むしろ反対に、不安に戦いている百合子の味方になってやることこそ、自らの義務であり、有明への最大の贈りものになるのだと、健気にも思い定める。



　有明もニコニコして、

「さあ、二人ばかりでなつかしがっていないで、私にもオスソわけをしてくれないか」

　はっと気をとりなおした若紫の局。

「もうしわけございません。さあ、百合ちゃん、マスターのお盃を……」

　と、うながされた百合子は、作法正しく高官たちが居並んでいるのに圧倒され、多少ドギマギしてはいるけれども、それは多年、躾けられた茶道の経験が身についているから、つつましくも楚々とした、しぐさで有明の前にニジリ寄り「おひとつ、どうぞ」と、さし出すのだった。紫に染めた小紋の袖が、ハラリとして、絵から抜き出て来たような美しさだった。

「嬉しかったろう？　そうさ、この国に来て昔の友達に会えるチャンスなんか、万に一つもないことだよ。君はラッキーだった。さあ一杯、飲みたまえ」

　と、有明が自分の飲み干した盃を差し出すのに、そんな習慣になれていない百合子は、

「アノいただけませんわ」

　と、あわてて小声で拒もうとする。有明の左に寄り添っていた柏木の局が、

「いけませんわ。お盃をいただくのはトッテモ光栄なことなのですよ。有難く頂戴なさいませ」

　と、たしなめた。他の人だったら反抗したかも知れ

なかったが、死のうとする人の言葉には自然と頭が下がってしまう。

　たてつづけに三杯も重ねて、胸の中が火のようになった。はじめての酒は苦く、ただ不快なばかりだった。

　皆がホロ酔い加減になった頃、あたらしい東対の責任者、明石の局が立って万歳楽を舞った。彼女は地唄舞の名取だった。それに応えるかのように立ち上がった柏木は、スルスルと帯を解いて全裸となった。

　今宵限りの美女は、その残んの肉体を満座の人々の記憶に灼き付けておこうとでもするかのように、ひたすらに舞った。

　柏木の右手にした金色の舞扇がヒラヒラと動き、その動きを追うかのように白い裸身が律動した。

　曲は女郎花（おみなえし）だった。

　頼風が恋しい女を追って自殺するくだり、

〽ただとむらいてたび給え。

　と合掌する仕種は、彼女の実感がこもって有明をはじめ、目に涙をうかべていた。

　それがすぐ、ツヨに変わり、激しい調子で

〽邪婬の悪鬼は、身を責めて、その念力の、上に恋しき、人は見えたり、嬉しやとて、行き登れば、剣は身を通し磐石は骨を砕く。

　と地獄の描写。恋しい人が見えたので、駈け寄ろうとするのに、身を責める刃や巨岩が邪魔をして、ズタズタにされてしまう。そのもどかしさ、口惜しさに、足を踏みならして裸女は舞い狂った。もはや、頼風が柏木なのか、柏木こそ頼風なのか、完全な憑依の状態になって、鬼気迫るような仕舞となった。

　始めは、柏木の舞に合わせて地謡を吟じていた有明も、その心情の哀れさを思いやって次第に声もトギレトギレになって、遂には滂沱と泪を噴き出させて絶句してしまう。有明でさえ、こうなのだから、あとの貴妃たちだって、皆が紅涙をしぼったのも当然のことであろう。

　舞い終わってグッタリと平伏し、肩を慄わせて嗚咽している裸の肩に、有明は自ら立って行って打かけを、やさしくかけてやった。

　そして、

「柏木、おまえの気持は、よくわかるけれどここのところは、どうかこらえて、リタイアしてくれないか。たのむから……」

　と言いかけるのを、はげしく、さえぎるように、キッと顔をあげた柏木は、

「マスター。そのお言葉は、いっそ情のうございます。柏木はマスターのお情けをいただいたことだけで仕合わせなのです。その幸福を永遠のものにするために柏木は、どうしても死なせていただきたいのです。何度も何度も、しつっこく、お願い申し上げます罪は万死にも値すると存じますけれど、これだけはこれぱっかしは、どうか、どうか柏木を、いささかでも愛しいと思って下さいますなら、わたくしの我侭を、お聞き届け願います」

　と、すがりつくように哀願するので、さすがの有明も、それを押し返して、強権を発動することが出来ない。

　他の貴妃たちも、言葉を喪って、一座はシーンと静まりかえった。わずかに、すすりなく声が、あちこちから聞こえるばかり。ややあって、われに返った有明が、

「今夜は柏木と東対に泊まる。皆、ひきとっていいぞ」

　と命令したので、このシメッポイ宴は、ここで、お開きとなった。

　山本百合子も、ご前を退出すると、例の離れに戻って、又もや、赤裸、大の字縛りで寝なければならなかった。

安楽死

百合子にとって、今夜の出来事は、あまりにも強烈だった。第一に親友の佐瀬直美と対面したこと。第二に、強い意思で自分の愛を守り、自ら命を断とうとする柏木の局の個性である。そして、無理強いされた酒の酔いが不快感となって加わっている。

百合子は眠ろうとしても、なかなか寝つかれなかった。転々と寝返りをうちたくても、四肢を開いて固定されているので、仰向いたまま、わずかに顔を左右に振る程度しか出来ない。そして、だまって、ただ涙を流しつづけていた。

不寝番で下座に控えているお三も、今日の宴会の、異様な雰囲気を素肌に感じているかのように、裸身を小さく、石のように、だまり込んでいる。

それでも、気疲れの故か、いつかウトウトまどろみかけたところへ、血相をかえた明石の局が飛び込んできた。

「早く。急のお召しですよ。さあ、そのままで……」

四肢をくくった白絹を、お三に手伝わしてもどかしげに解き、ひきたてるようにして母屋へ導いた。

あまり唐突なので百合子には、自分の全裸を恥じる気持すら、飛んで行ってしまっているのだ。事実、彼女は裸で母屋を訪れたことなど、一度もなかったのである。

一段と高い有明の寝所には、同じく非常呼集をかけられた貴妃たちが、何事が起こるのだろうと、いぶかしそうな表情で集まってきていた。

時間は真夜中であった。

十五畳ほどの広い寝所の中央に幅広の蒲団が延べられ、キッチリと白絹で包み込んである。その上に添い伏している一対の男女。いうまでもなく、有明と柏木だった。

二人とも、今は余すところもなく赤裸の身をシッカリと抱き合っている。

少し頭をあげた有明は、目を真赤にしていた。そして、

「皆、近くへ寄ってくれ。さ、早く」

美しい裸女たちは、おそるおそる上段にあがって、有明の蒲団を囲むように、人垣をつくって正座した。

「私は、柏木の願いを聞きとげてやったぞ」

はきすてるような調子だった。そのくせ余計、有明の切ない気持を露わにしている。

「柏木は今、ここで命を終える。君たちは、それに立ち会って貰いたい」

「………」

だれも、ひとことも言わなかった。いや、口はさむ余地は全くなかったといっていい。二人の間で、どんなことが話し合われたか知らないけれども、何か有明に異常な決心をさせる結果になったのは明らかだった。

「この女は、どうせ死ぬなら、私の手で果てたいと願い出た。贅沢な奴だ。私に、タッタ一度しか与えることの出来ない悦楽を、死の代償に、くれるというんだよ」

普段は容易なことで心を動かさない専制君主が、このときは顔をクシャクシャにして周囲に、うったえたものである。

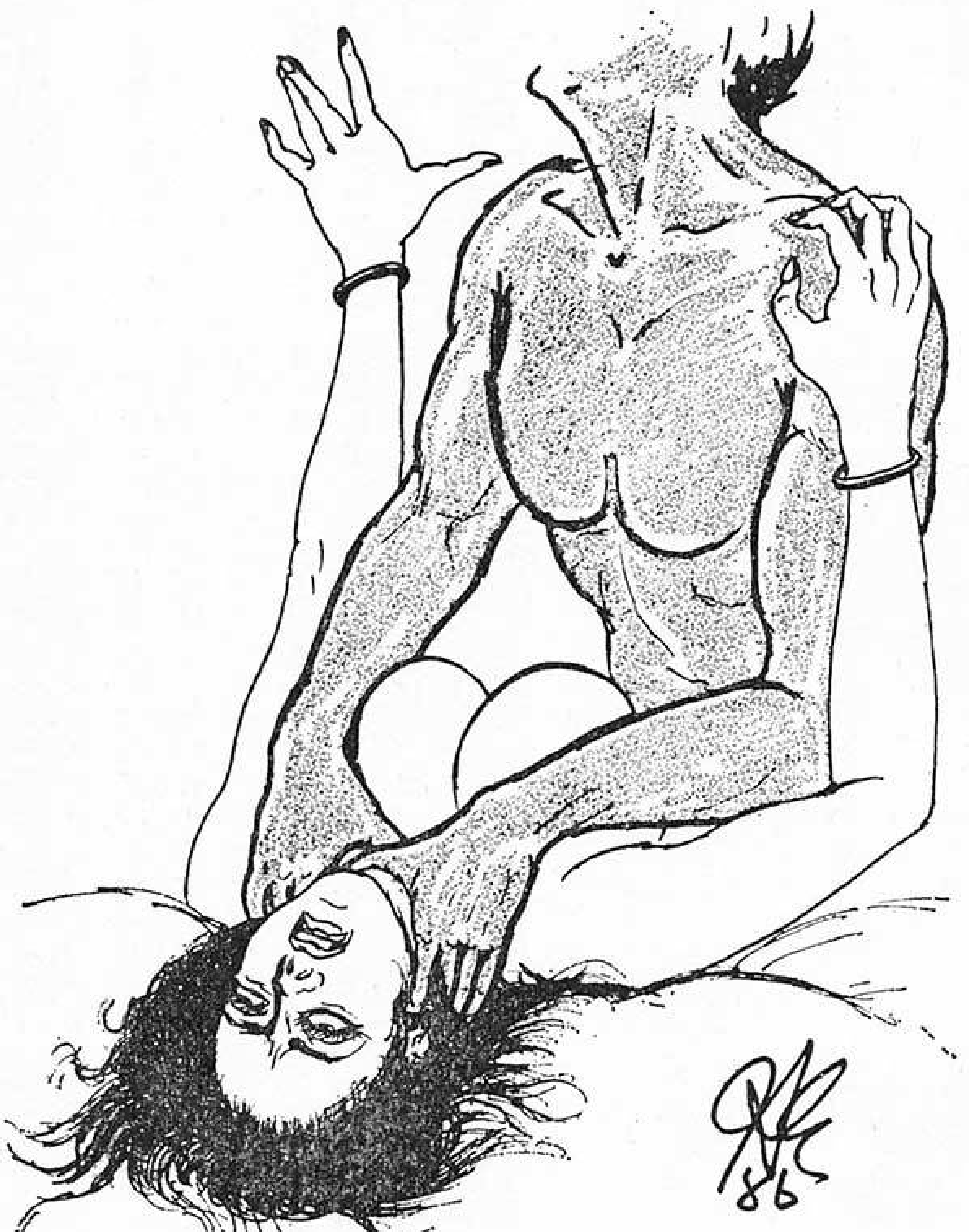
たちまち、裸の人垣は動揺した。特に末席に坐っていた百合子などは、あまりのことに気が遠くなってしまった。もし、隣にいた佐瀬直美が気づいて支えてくれなかったら、有明と柏木の、四つ並んだ足の上に倒れ伏してしまったであろう。

　ところが、当の柏木の局は、思い定めたあとの清々しさを表情に示して案外、落ちついている。そして、とりまく貴妃たち、貴和を始めとして、一人一人に「今まで大変お世話になった。これからも自分の分まで、マスターに忠勤をはげんでくれ」と、繰り返し繰り返し、頼んで行った。

　最後に、佐瀬直美に抱かれ、真青になって慄えている山本百合子にヒタと視線を落として

「百合子さま。あなたはきっとマスターの大切なお慰み相手になられますよ。あなたは、万に一人の恵まれた方なのです。どうか、わたくしの期待を裏切らないよう、一生けんめい努力して下さいね。あなたが貴位におつきになる日を見ることが出来ないのは、ほんとうに残念なのですけれど、すこしの間でも、あなたのお世話をさせていただいた柏木は本当に幸せだったと思います。私が死んで、あなたに生まれ変わったと考えたい位ですわ。でもわたくしごときが、あなたに生まれ変わるなんて、そんな大それたことは失礼ですわよ、ねえ。ホホホホ……」

と、淋しく微笑んでみせる。



　今まで厳しく、しつけられて、時には柏木の局を恨んでさえいた山本百合子も、今は些細な憎しみなど、どこへやら吹きとんでしまったような気持になって、ただ、この柏木の局の心根が哀れで悲しくて、ワッと泣き伏してしまう。

　それを見て、ものうげに起き上がった柏木の局は、

「どうか、お泣きにならないで。柏木はマスターに最後のプレゼントを差し上げながら死んで行くのです。ホントウに、心から喜んでいるのですよ。サア、これで、涙を拭いてシャンと、お坐りなさいませ」

　やさしく肩口をさすりながら、真白なハンケチを差し出すのを受けとった百合子は、子供のように泣きじゃくりながら、それでも漸く顔をあげ柏木を見つめる。

「さあ、死んで行く私の最後のお願いを聞いて下さい。あなたは、まだ正規のレセプションを、お受けになっていらっしゃいません。おそらく、貴位を受けられる、あなたのため

にマスター自ら、それをとり行なって下さるでしょう。とっても、辛い苦しいことです。しかし、どうか立派に、それを、やり遂げてマスターのおなさけを頂くのに充分な資格をおつけになって下さい。何よりも、マスターを愛して差し上げるのですよ。いいですね。お約束して下さいますね」

　いつか柏木は百合子の細い両手をシッカリと握って、口説いていた。

　夢中ではあったけれども、百合子は、その事の重大さを覚っていた。

　それはコペルニクス的な転回であった。しかも、それは異常な場面において行なわれたのだから、きわめて宗教的だったといえよう百合子にとって、有明は憎むべき略奪者だった。その上、いずれは彼によって、すべてを奪われてしまうのは明らかであった。誘拐され、はずかしめられ、奴隷のように屈従させられて、どうして尊敬したり、愛したり出来るだろうか。今の今まで百合子が、おとなしくしていたのは、単に力に逆らっても仕方がないと判断していたからである。悲しく諦めていたと言ってもよかった。したがって、地上的に見て、この悪の機構を絶対に容認することはないと信じていた。

　ところが、柏木の局を見て、百合子は心から感動してしまっているではないか。死の瞬間にのみ起こる異常な痙攣は、男に最大の悦びを与えると言われている。だが、それだけのために、タッタ一回の快楽のために柏木の局は自らの命を差し出そうとしている。数千の美女たちが、有明への愛一筋にヒシメキ合っている、この異常な環境の中でも、とりわけ異常な奉仕だと言わなければならない。それは全くの忘我の愛だ。それまでに愛される有明という男は、何という人物だろう。そう思いながら、百合子は有明に対する怖れが不思議に消え、それが淡い憧憬にスリ変わっていることを知って愕然となった。

　こう書いていると、百合子の心理状態が、随分、迷い抜いて変わって行ったように見えるけれども、実際は僅か数秒のうちに、コンピューターにかけた程の早さで行なわれたものである。

　百合子が返事を、とても出来なかったものの、シッカリ頷くのを見た柏木の局は、明るい表情で

「ありがとう。ほんとうに、ありがとう。これで何もかも、心残りがなくなりました。安心して死んで行けます」

　そして、もう一ぺん、一人一人を見回してから、

「さあ、マスターのご恩寵にお応えするにはあまりにも愚かな柏木の、身にかえて差し上げる最後のご奉公を、皆さん方でシッカリ見届けて下さいましな」

　と大分、芝居がかったセリフを吐いて、再び仰向けになった。

　その間、だまって目をつぶっていた有明も漸く決心がついたといった風で、いつもの快活な様子に戻って柏木の脇に坐り直すと、

「白鳥のあたらこの世に黙せしは、ただ臨終の一声を唱わんがため――というが、死に行こうとする柏木は、山本君の心を私に靡かせるという贈り物をつけ加えてくれたようだ」

　といって、ジッと百合子に眼を当てるのであった。有明に見られて、はじめて自分が裸であることを意識した百合子は、それこそ全身を紅に染めて、佐瀬直美のうしろに、かくれるように小さく縮んでしまう。

「ハハハハ、もうそんなに羞かしがらなくても、いい頃じゃないかな」

　と言い棄てた有明は、今はそれどころじゃ

ないという風に柏木の方に向き直った。

　百合子にとって始めて見たそれは、生やさしいショックではなかった。しかも今、目前で行なわれようとしているものは、正に死を賭けた情事だった。

　もう、二人は周囲に凝然と坐っている美女の人垣を全く無視し去っていた。

　不思議なことに、ひとつも嫌らしくないのを発見して、今更ながら吃驚してしまった。自分が、いつの間にか、この国の人間らしく洗脳されてしまったのだろうか。いや、そうではない。自然のいとなみ、それ自体、恥じることも罪悪視することもないのが真実だということを、はじめて体験的に確認したからに相違ない。

〔伝言板〕〇本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。〇如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。〇編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

　こうして、百合子は女に目覚めた。そしてその熱情の奔流が、今は有明に向かって突進し始めたのをハッキリと自覚したのである。これこれ、彼女にとってコペルニクス的な転回が終わったことの証しだった。

――もう苦しみ悩むことはないわ。

　百合子は胸の中で、何回も何回も、そう言いつづけていた。

　徐々に二人の情感が嵩ぶりを増して行くのが、百合子にすら、ハッキリと察しられた。死の時、それが最高の瞬間たり得るであろうか。信じ難い思いで百合子は手に汗を握っていた。

「アッ、早く、早く。サア」

うわずった声で、柏木が叫んだ。

　有明が、淋漓と汗を散らせながら起き上がった。百合子の口の中はカラカラになってしまった。

「早く。おねがいです、早く」

　切なそうに柏木が、くり返した。

　逞しい有明の手が、柏木の細首にガッシリと喰い込んで行った。

「イーッ」

　と、うめいて柏木がのけぞるのと殆ど同時に有明も、

「ウッ」

　声高に叫んで、ガックリと力を抜き、柏木の上に重なってしまった。

　大きな有明の身体が、かぶさってしまったので、殆どかくれてしまったような柏木の肢体が最後の痙攣をしているのが、よくわかった。

　柏木は、もちろん、有明も死んでしまったように動かなかった。

　彫刻のような有明の背中に噴き出す汗が、流れる音さえ、聞こえるくらいの静けさだった。

　突然、誰かがワーッと泣き伏した。すると誰も彼も堰を切ったように慟哭し始めた。しかし、百合子だけは、ブルブル慄えながら必死に目前の男女を、にらみつけている。

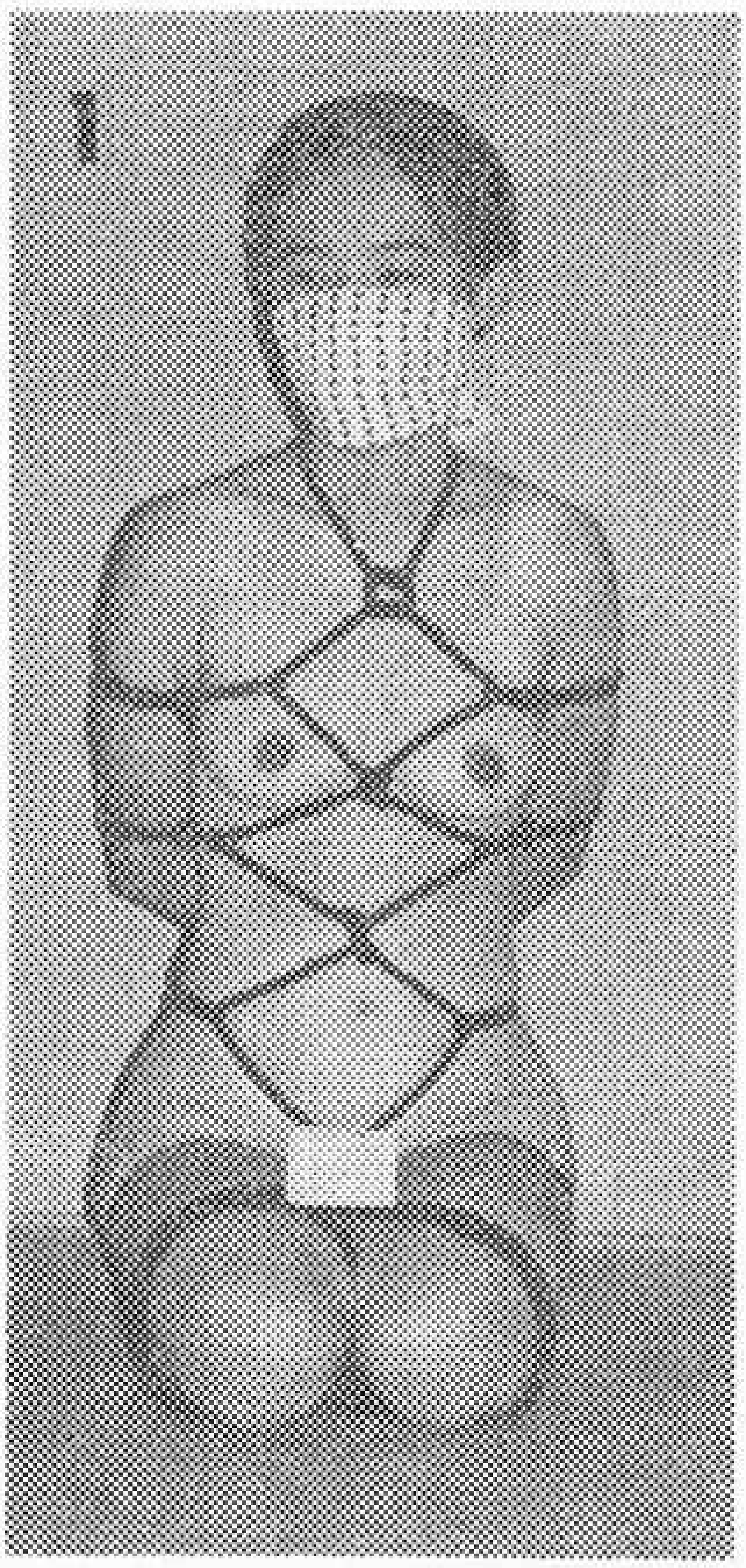
　柏木の死が、百合子にあたえた衝撃は、女らしく泣くことすら許さない程、強烈だったのである。

――（未完）――

那津子緊縛撮影行

雛（ひな）祭（まつり）の夜（よる）

城　章夫



「どこかへ行きたいわ、遠いところへ」

夕暮、約束のレストランで落ち合うと、那津子は、いかにも思い屈したような口調で、いいだした。

まだ日が暮れたばかりで、ふだんからそう混み合うというほどでもないこの地下室のレストランは、いっそうひっそりとして、ぼくらのほかにはもう一と組、若いカップルが、いるばかり。まわりのしんとしたたたずまいに気圧されたのか、そのふたりづれも静かにフォークやスプーンを動かしながら、何やら小声で語りあっている。

薄暗い照明のなかで、ボーイも猫のように音をひそめて立ち動き、ホカホカと湯気のたつスープを運んだり、パン皿を持ってくる。

何もかもが静かで、そしてどこか、もの憂くいかにも春浅い曇り日の宵といった情感が、あたりに、けだるく立ちこめている。

そんな雰囲気に反撥するように、那津子は目をキラキラ光らせて言葉を続けた。

「空気がピーンと張りつめて、雪の山が近くに見えるようなところへ、行きたいわ。それから、あったかい温泉が湧いていて。そんなところ、無いかしら」

那津子のことばを聞いているうちに、ぼくの瞼のうらには、ひとつの風景が、鮮かに立ち現われた。一面に、まっ黄色な菜の花畑。その果てに、こんもりと黒い森。そして、その上に白々と雪におおわれた山なみ。それは

春の安曇野の風景だった。どこでそれを見たのだろう。多分エハガキかカレンダーの写真で見たのだ。むろん、いまは二月の末。まだ菜の花の季節には、だいぶ間がある。しかし暖冬異変といわれる今年のことだ。安曇野には、もう雪はないだろう。爛漫たる春の野よりは、蕭々と枯れた冬野のほうがこの微温的な都会生活からの脱出を夢みる那津子には、いっそう、似つかわしいだろう。

こうばしい香りをたてているフランス・パンをちぎりながら、ぼくは答えた。

「よし、出かけるか、アルプスの麓へ」

それからは食事もそっちのけで、ぼくらは信濃路への旅のプラン作りに熱中し始めた。ぼくらの心は、もう冬枯れの安曇野に飛んでいた——。

それから数日後、ぼくらは、新宿から松本へ向かう特急『あづさ』の座席に、肩をならべていた。中野、高円寺と列車は国電の駅々を走り抜け、やがて三鷹にさしかかると、ようやく家並みが、ところどころ途切れ、畑や空き地があらわれ始める。武蔵野のおもかげが、そうしたところに切れっぱしのように残っているのだ。

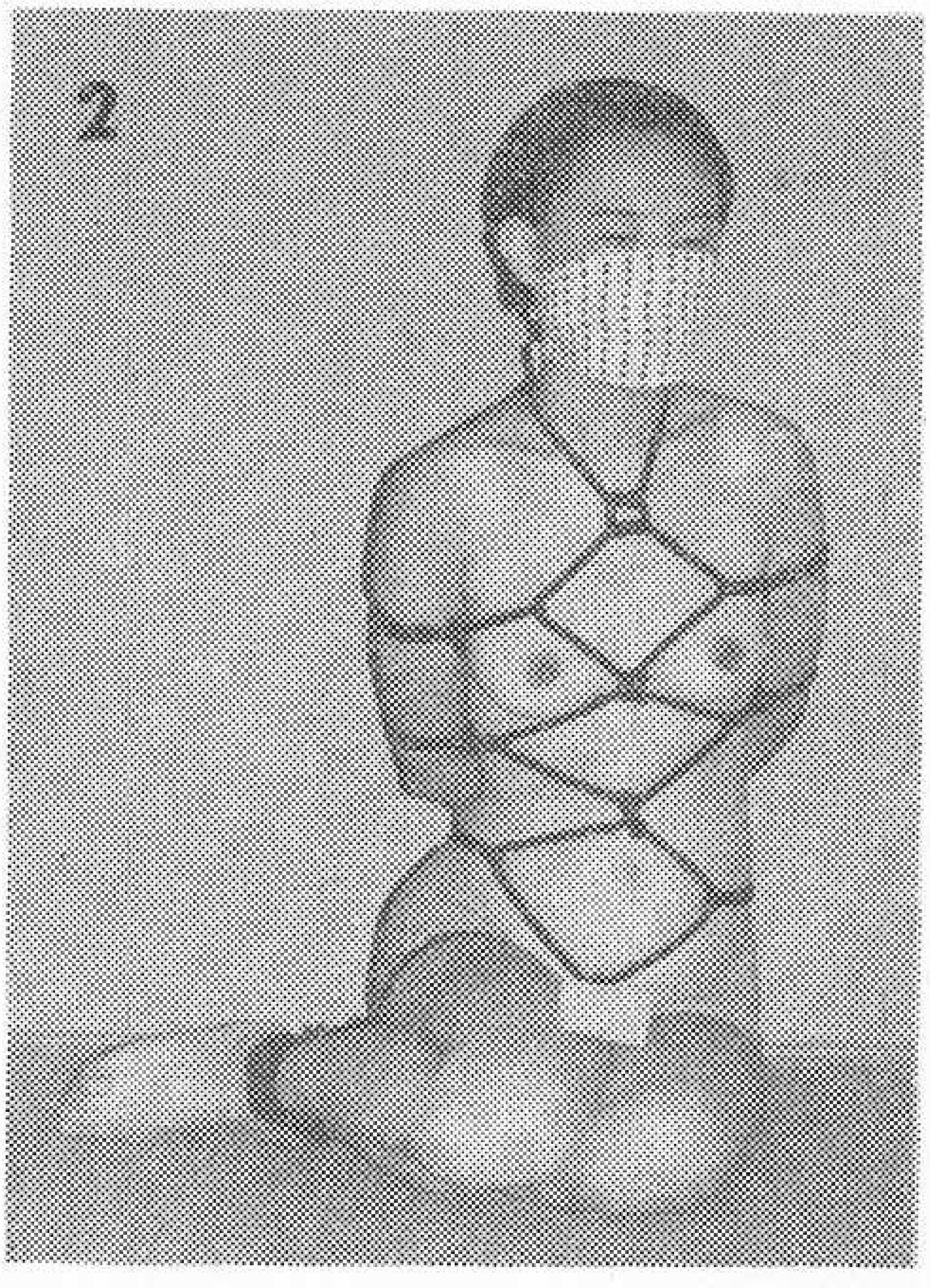
ぼくは、となりの那津子を見返ってニッと笑う。那津子もニッと笑いかえす。言葉は不用だった。相手の目のなかに見入るだけで、何も言わなくとも、お互いの気持はよく通じ合っていた。（これで、やっと都を脱けだしたね）（そうよ、うんざりするようなあそこの生活とも、しばらくお別れだわ）ふたりの目が、そう語りあっているのだった。

そして、ぼくらは夫々シートに頭をもたせかけ、窓外を流れる風景を眺めるともなしに眺めながら、おのおのの想念のなかに沈んでいった。その時ぼくの頭を占めていたのは、ぼくらをこうして旅へ駆りたてるものは一体なんだろうという想いだった。

むかし読んだ『奥の細道』の記憶が、おぼろげに、よみがえってくる。

『去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を払いて、やや年も暮れ、春立てるかすみの空に白川の関越えんと、そぞろ神の物に憑きて心を狂はせ、道祖神の招きにあいて取るものも手につかず——』

一生涯を旅にすごしたこの俳人を、絶えることなく旅へ旅へと駆り立てたのは、『取るものも手につか』ぬほど彼の心を掻き乱す魔神的な力であった。彼は、それを仮に『道祖神の招き』と呼ぶ。その招きに応えて芭蕉がたどる旅のみちは、彼の日記の表題がいみじくも示すように、きびしく細い道


2

だった。

　だが、今、ぼくらを日常生活の凡庸な絆から脱けださせ、見知らぬ土地へ誘うものは、『奥の細道』の詩人のような宗教的、求道的なあこがれではない。それは快楽と陶酔への渇きなのだ。

　そこで当然のことながら、ぼくの想念は禁欲的な東洋の詩人を離れ、ほしいままに豪奢華麗な夢を開かせた西欧の詩人へと移って行く。

　　わが児　わが妹（いも）
　　夢に見よ、かの
国に行き　ふたりして住む心地よさ。
　長閑（のどか）に愛し
　愛して死なむ、
君にさも似し　かの国に。

かしこには　ただ序次（ととのい）と　美と
　栄耀（えよう）と　静寂（しじま）と　快楽（けらく）。

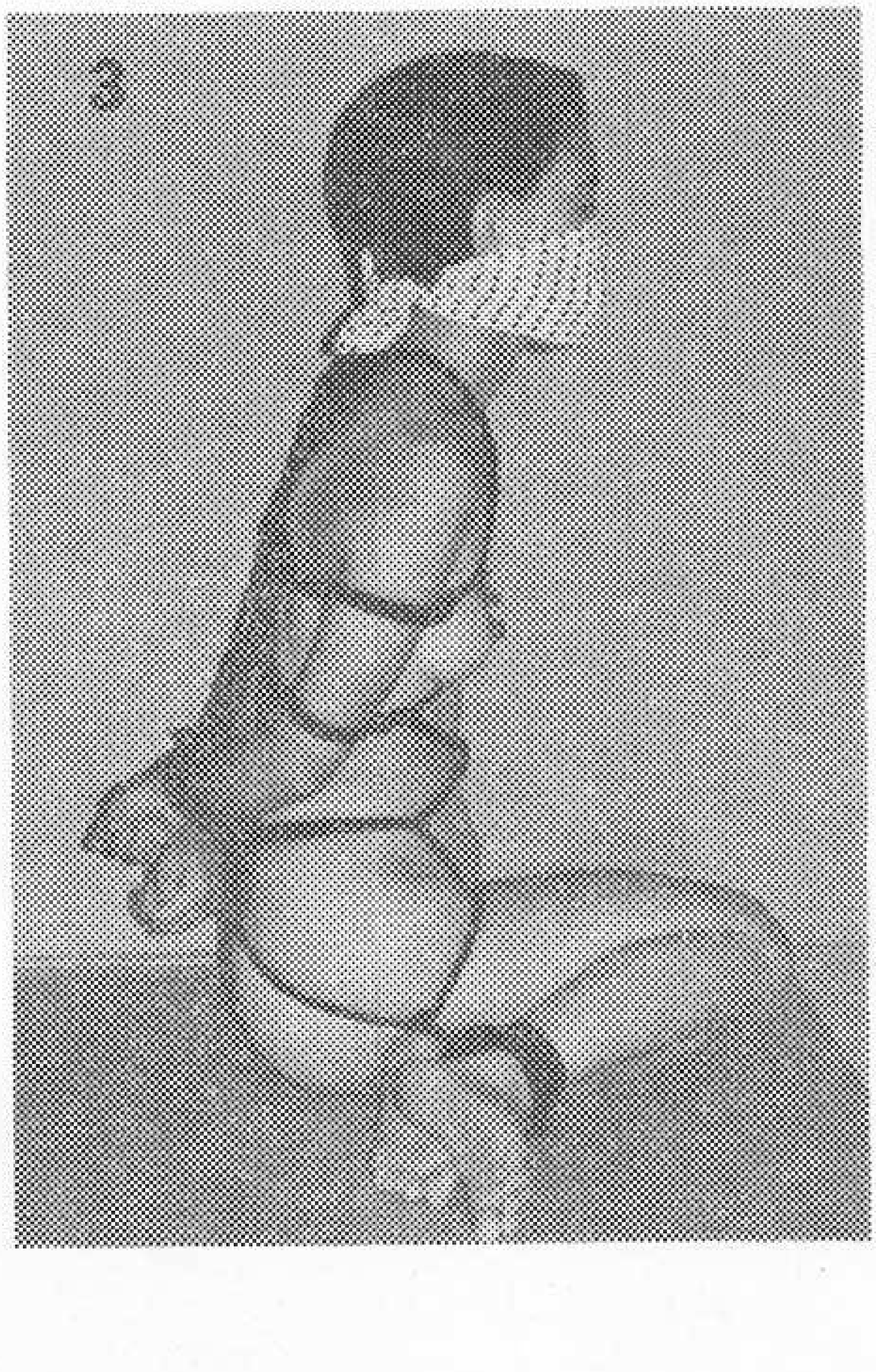
　見よ、この入江に
　眠りたる船。
漂泊（さすらい）の旅の心を　乗せたりな。
　そは　君がかそけき
　欲望（のぞみ）を　満たすため、
この世の涯より　船ぞ来し。

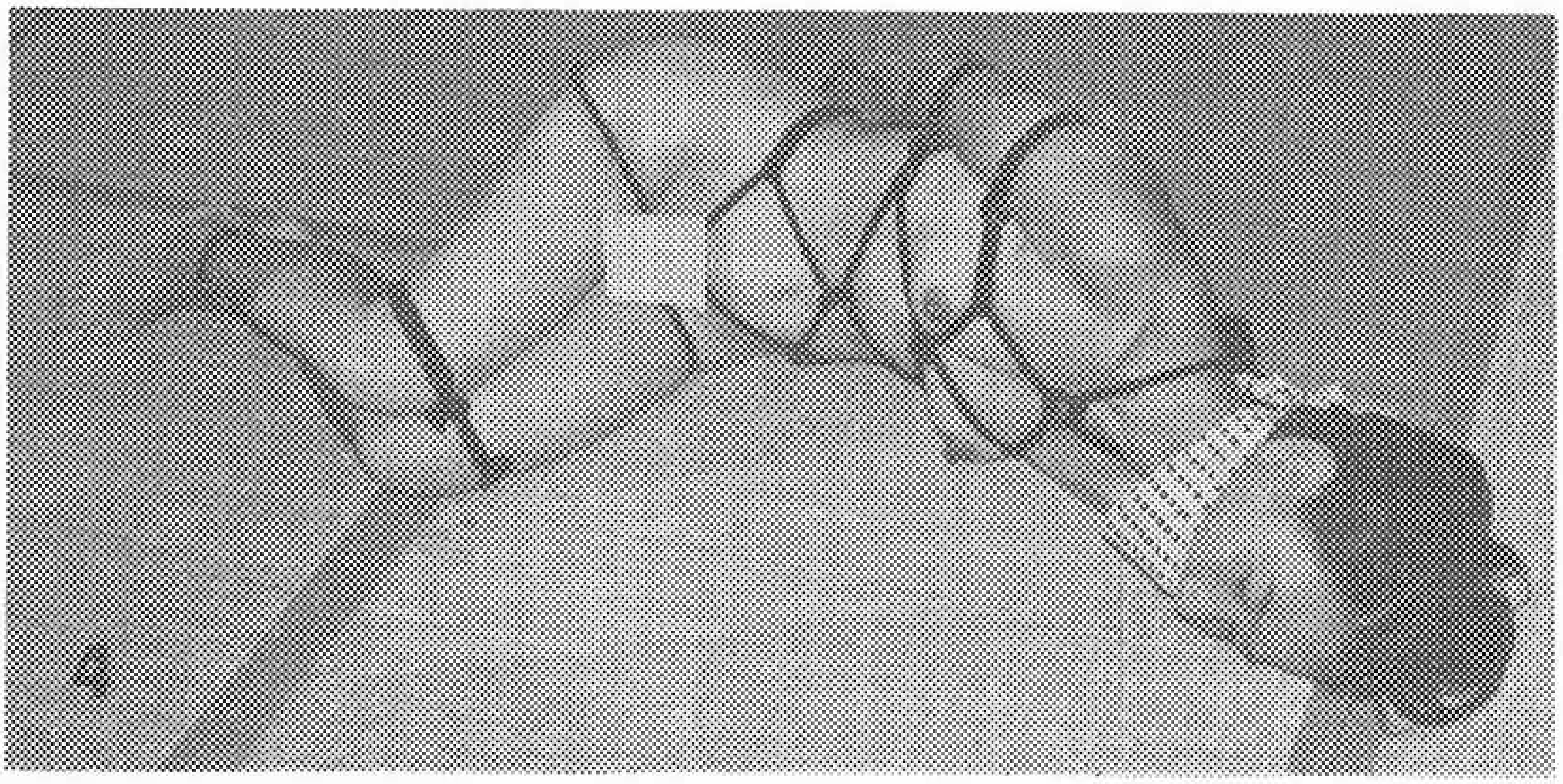
かしこにはただ序次（ととのい）と　美と
　栄耀（えよう）と　静寂（しじま）と　快楽（けらく）。

　各節の終わりにおかれた繰返し『かしこにはただ序次と美と——』という詩句を何とはなしく繰りかえし口ずさんでいるうちに、ぼくは、ふと或ことに思い当たった。

　なんだ、この詩句はとりも直さず、ぼくの緊縛の美学そのものではないか。ぼくが那津子のからだに縄をかけるとき、ぼくは美の創造者になるのだった。ぼくは那津子のからだという白いカンバスの上に、黒い縄で美しい模様を描きだす画家になるのだ。そしてその模様は——これはもう年来のぼくの持論なのだが——なによりもまず、均斉と平衡を基本理念として組み立てられなければならないのだ。雑然と目茶々にかけられた縄目に、ぼくは、なんの魅力も感じない。だからこそ『かしこにはただ序次（ととのい）と、美と』が生まれるのだ。

　そしてボードレールは『栄耀』とうたう。白く輝くつややかな女のからだに、シンメトリカルな線を描いてまといつく黒い縄。この単純にして、しかも豊麗なコントラストの美しさ、見事さ。嗜虐的な男のこころを魅惑してやまぬ、この世ならぬ異常の美がそこに生





れる。

さらに『静寂（しじま）』　軽やかに動く女の口を堅く封じる猿轡。女のお喋りは、ときに可愛くそしてお喋りは、まさしく女の愉しみの一つだが、猿轡は、それを冷ややかに奪い去り、静寂、優艶の世界をつくりだす。

かくて、最後に深く激しい『快楽（けらく）』が訪れる――。

『かしこにはただ序次（ととのい）と美と』この見事なルフランを、ぼくが繰り返し口ずさんでいると隣で、うつらうつらしていた那津子が、ふいに目をひらいて言った。

「何をぶつぶつ、いってるの?」

「うん、いやなに。なんでもないんだよ」

ぼくは照れながら答える。「ふっと、ボードレールの詩を思いだしてね。〝旅のいざない〟っていうんだ。いまの、ぼくらに、ぴったりの詩なのさ」

「ふうん、ボードレールの詩?　しゃれたものを思いだしたのね」

那津子は、あんまり興味なさそうに、またシートの背に頭をもたせかけて目を閉じる。

そんな那津子の横顔を見つめながら、ぼくの思いは早くも、こよい、ぼくと那津子の間に繰り拡げられる筈の、緊縛プレイへと飛んでいった。そう――こんやは、どんな縛り方で行こうか。いつもなら、詳しい撮影コンテを作ってくるのだが、こんどの旅は、ふいに思いたって、慌しく出てきたので、それを作るひまもなかった。

しかし今『旅のいざない』のルフランを口にのせて呟いているうちに、ぼくのプランははっきりとした形を、とってきた。『かしこにはただ序次（ととのい）と――』。そのととのい――均衡と秩序と均斉とを最もよく表現する縛りとなれば、菱縄をおいて外にあるまい。よし、今夜は、これで行こう。去年の春、林檎の花の咲く山の湯で、試みた三重菱縄は、どうもうまく行かなかったが、今度こそ、那津子の白い肌の上に、三つの黒い菱形を綺麗に描きだしてみよう。頭のなかで練りに練った構想もきまり、まだ何も描かれていないカンバスを前にした画家が感じるであろう胸のおののき――と言えば、いささか大げさだが、目を閉じて、うつらうつらしている那津子の横顔を眺めながら、ぼくは、そんな心のたかぶりを抑えかねていた。

× × ×

宿の女中に案内され、よく拭きこまれた渡り廊下を通って部屋に入ると、まず目にとび

こんできたのが、床の間に生けられた桃と菜の花だった。

「あらぁ、今日はお節句だったんだわ。すっかり忘れていた」

と、那津子が叫ぶ。

そういえば、ぼくもとんと失念していたが今日は三月三日、雛祭の日だった。俗事に追われ雑事にせかれて、そんな古風で雅びやかな風習は、ともすれば、われわれの生活からずり落ち、はみ出してしまう。

「そうだったね。今夜は二人で桃の節句を祝おうじゃないか。白酒はないけれども、白ブドー酒なら、ここにあるからね」

ぼくは旅行鞄のなかから、ブドー酒の瓶をひっぱりだして那津子に示した。

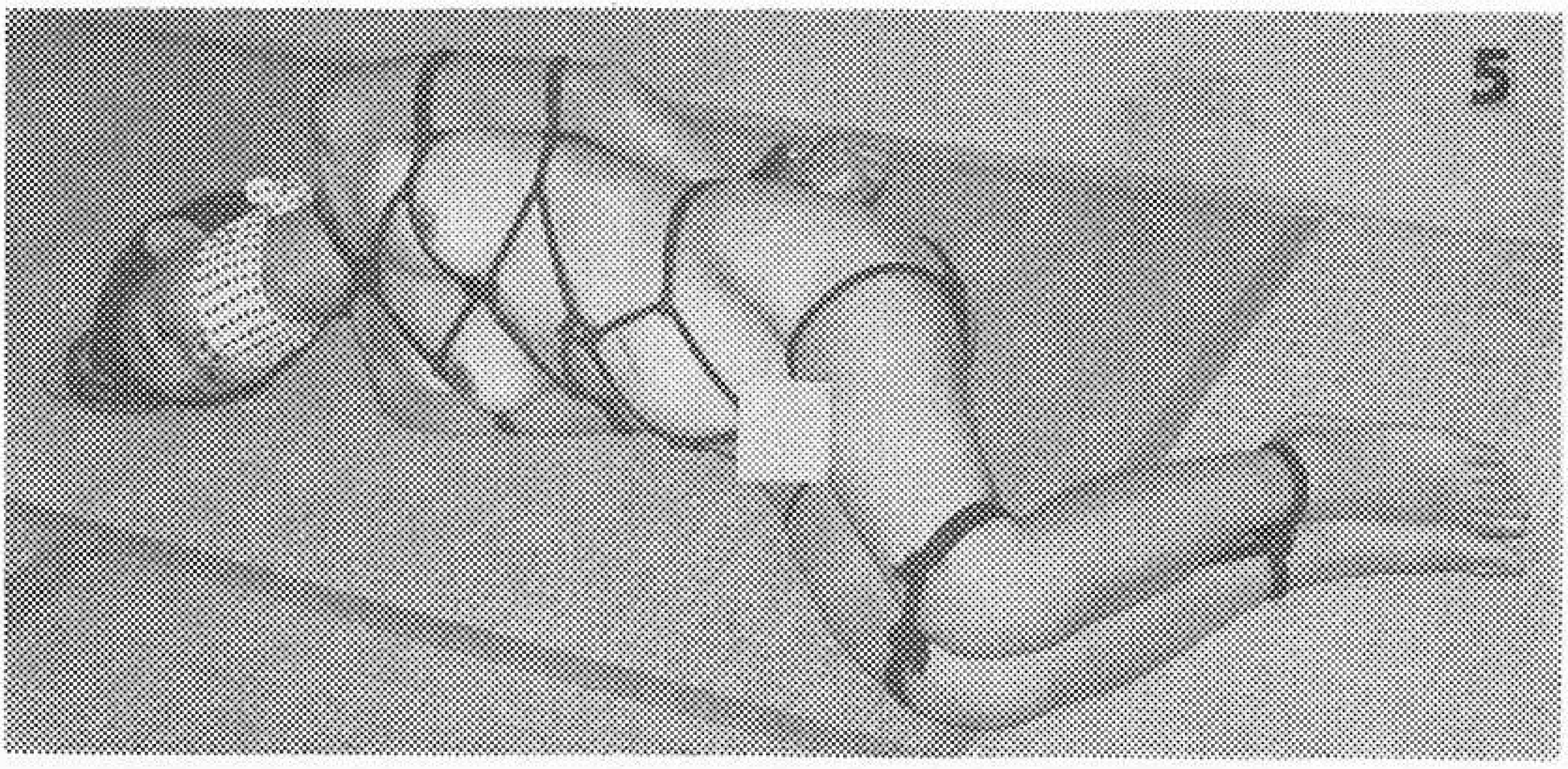
あたたかい鍋料理が済み、女中さんが膳をさげ、床をとって引き下がる。せっかく敷いてくれた布団だが、これから部屋一杯を使って撮影をしようという、ぼくらにとっては有難迷惑。手早くたたんで押入れにいれてしまうと、もうあとは、誰にも煩わされない、ぼくと那津子の二人だけの世界だ。春にはまだ遠い山国の、それもウイーク・ディとあって泊まり客は殆どいないらしく、まだ宵の口だというのに、広い宿のなかは、ひっそり閑としずまり返っている。

「さあ、もう一度、お湯を浴びてこよう」

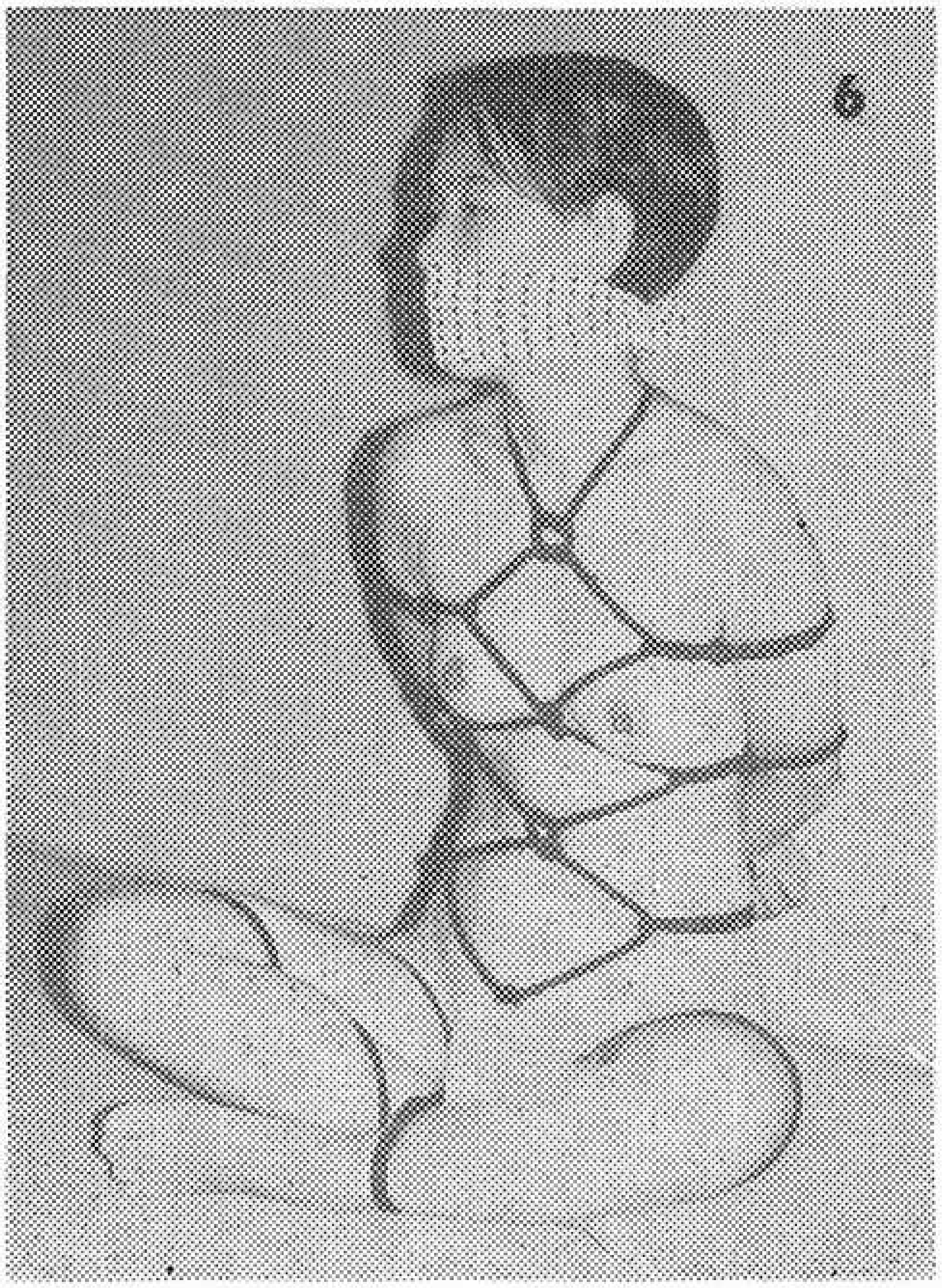
おなかがいっぱいになって、那津子は何やら、けだるそう。思いは、ぼくとて同じだがこれからの撮影のことを考えると、そうのんびりもしていられない。腰の重い那津子を促して、先ほど宿に着くなり早速、入ってきたこの宿自慢のお風呂へ、タオルを手に、また降りて行く。

この浴室は、洗い場も羽目板も全部、木の香も新しい桧で張ってあるのだ。浴槽は、まんまるで、磨きこんだ銅張りだ。その底にはこれまた桧作りの簀の子が沈めてあって、そのあいだから透きとおった出で湯が滾々と湧きあがってくる。名づけて桧風呂というのだが、何とも素敵なお風呂である。

その桧張りの洗い場、絶えず浴槽から溢れでるお湯に洗われて、まるで女の肌のようにあたたかく艶々した桧板のうえに、例によって那津子を正座させる。キチンと膝を折って坐った那津子は目を軽く閉じ、首を伸ばし気味にして、ぼくのシャワーを待つ。その肩めがけて、ぼくのからだから熱いシャワーが迸り出て、首筋を濡らし、胸の谷間を流れ落ちる――ぼくらのプレイの夜を開く神聖なる儀



5



式の第一幕、『洗礼の場』の上演である。

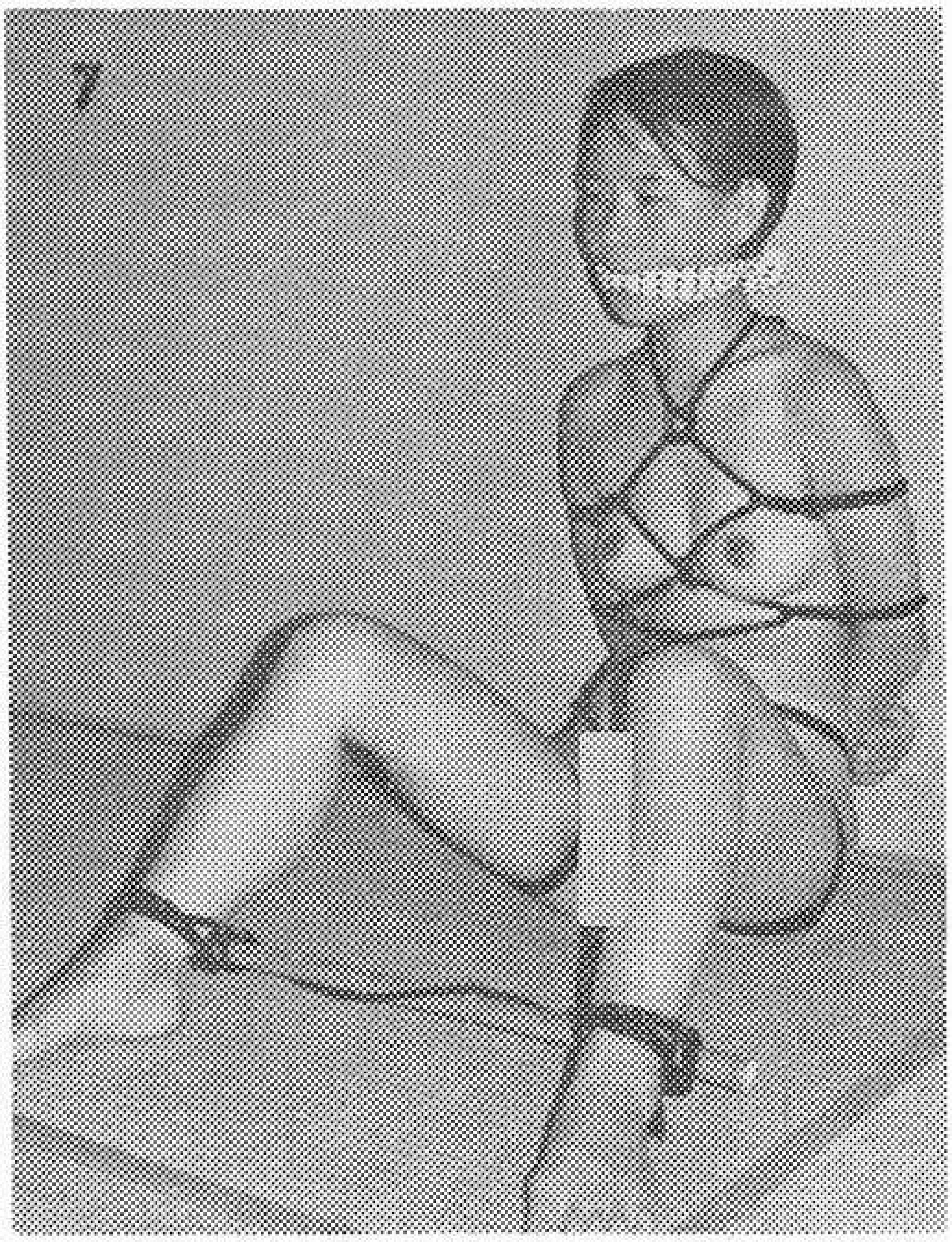
　部屋にもどると、ぼくも那津子も上に羽織っていた浴衣を脱ぎすてて素裸になる。むきだしの肌に、あたたかな空気が快く触れる。さて、これからいよいよ、われらの神聖儀式第二幕、『手拭いくわえの場』の幕があがるのだ。

　部屋の片隅にうずたかく積まれた長短四本の黒い縄。そのなかの長い方の一本を手にしごきながら、ぼくが立ちあがると、那津子はもう心得て両手を背中で交叉させて立っている。その両手首に縄をからませ、ぎっちり縛り合わせると、それは一応そのままにして、ぼくはもう一本の長い縄を取り上げる。それを二つ折りにして那津子の首に掛けのどぼとけの下あたりで第一の結び目を作る。さらに縄を下へさげ、ちょうど乳房の谷間のまん中へんに二番目の結び目、臍のすこし上あたりで三番目の結び目、最後に、デルタの上辺りに四番目の結び目をつくる。二条の縄は、そのまま股間をくぐり抜けて尻をさかのぼり、腰のうしろ、交叉して縛り合わせた手首の下のへんで、ひとつに結びあわせる。縄はそこから左右にわかれて前へまわり、からだの前面を縦に走る縄の三番目と四番目の結び目の中間あたりで、それぞれ手前の縄をくぐらせてうしろへ引き絞ると、臍を中心に第三の菱形模様が描き出される。

　こんどは、手首を縛ったままにしておいた縄を五糎ほど上にひっぱりあげる。縄はそこで左右にわかれて前にまわり、からだの前面を走る二条の縦縄の二番目と三番目の結び目のまん中で、夫々、手前の縄にくぐらせて引絞る――さっきと同じ手順で、乳房と臍のあいだに第二の菱形ができあがる。それからまた同じ手順を繰り返して、第一の菱形を乳房の上に描き終わると、これでやっと三重菱縄のできあがりだ。

　ある処では縄をゆるめ、またある処では縄を緊め、あれやこれやと調整して三つの菱形模様の形をととのえる。その間、那津子に向かって、「こっちを向いて」とか、「ホラ、こんどは向こうへからだを回して」などと注文をつけると、那津子は、いわれた通りに動いてくれる。縛られるほうのこうした協力がなければ、三重菱縄などという、手のこんだ縛りかたは、到底できないだろう。

　長いほうの縄を二本とも使いきってしまったぼくは、こんどは短いほうの縄を一本とりあげ、それで尻の双丘を斜めに横切る線を描きだし、余った部分を太腿のつけ根に巻きつ



けた。そのまま那津子を立たせておき、最後に残った一本で、那津子の両足首を、およそ十五糎幅に連結する。

これでやっと『手拭いくわえの場』上演の準備がととのった。暖房がきいてポカポカと暖かい一室で、三重菱縄という、七面倒な縄掛け作業に一心不乱で従事していたぼくは、ほっと一と息。部屋のひと隅に片寄せてあったテーブルの横にどっかり胡座をかくと、濡れたタオルをとって額の汗を押し拭った。つめたい感触が、ほてった皮膚にこころよい。

首から胸、腹から股間とぎっちり縛りあげられ、足首まで縄につながれてそこにつっ立っている那津子に手で合図して、ぼくと差し向かいに正座させると、ぼくは、おごそかに命令をくだす。

「サァ、手拭いとハンカチをくわえて持ってくるんだ」

手の使えない那津子にとっては、正座の姿勢から立ちあがるだけでもひと苦労だ。やっと立ちあがると、部屋の反対側の隅に置かれたハンカチと手拭いに向かって、黒い縄が縦に斜めに喰いこんだ尻を、ぼくのほうに向けながら、ヨチヨチと歩きだす。歩くにつれて尻が揺れ、尻が揺れるにつれて縄が揺れる。

いつ見ても見飽きぬ嗜虐的な眺めだが、この神聖な儀式も近ごろは、どうやらマンネリになってきたようだ。これから自分の口にかまされる猿轡を、自ら取りに行かされるという被虐感――その心理的効果をこそ狙って演出されるべきこの一と幕が、慣れるにしたがって本来の意義を失ってきつつあるようだ。

現に那津子は今もヨチヨチ歩きながら、

「今夜の縛り方は歩きいいわ。とても楽に足を動かせるの」

などと、呑気そうに言っている。

「よおし、この次は、うんと歩きにくいように縛ってやるからな。だが、今はムダロなんか叩いていないで、さっさとくわえて持ってこい」

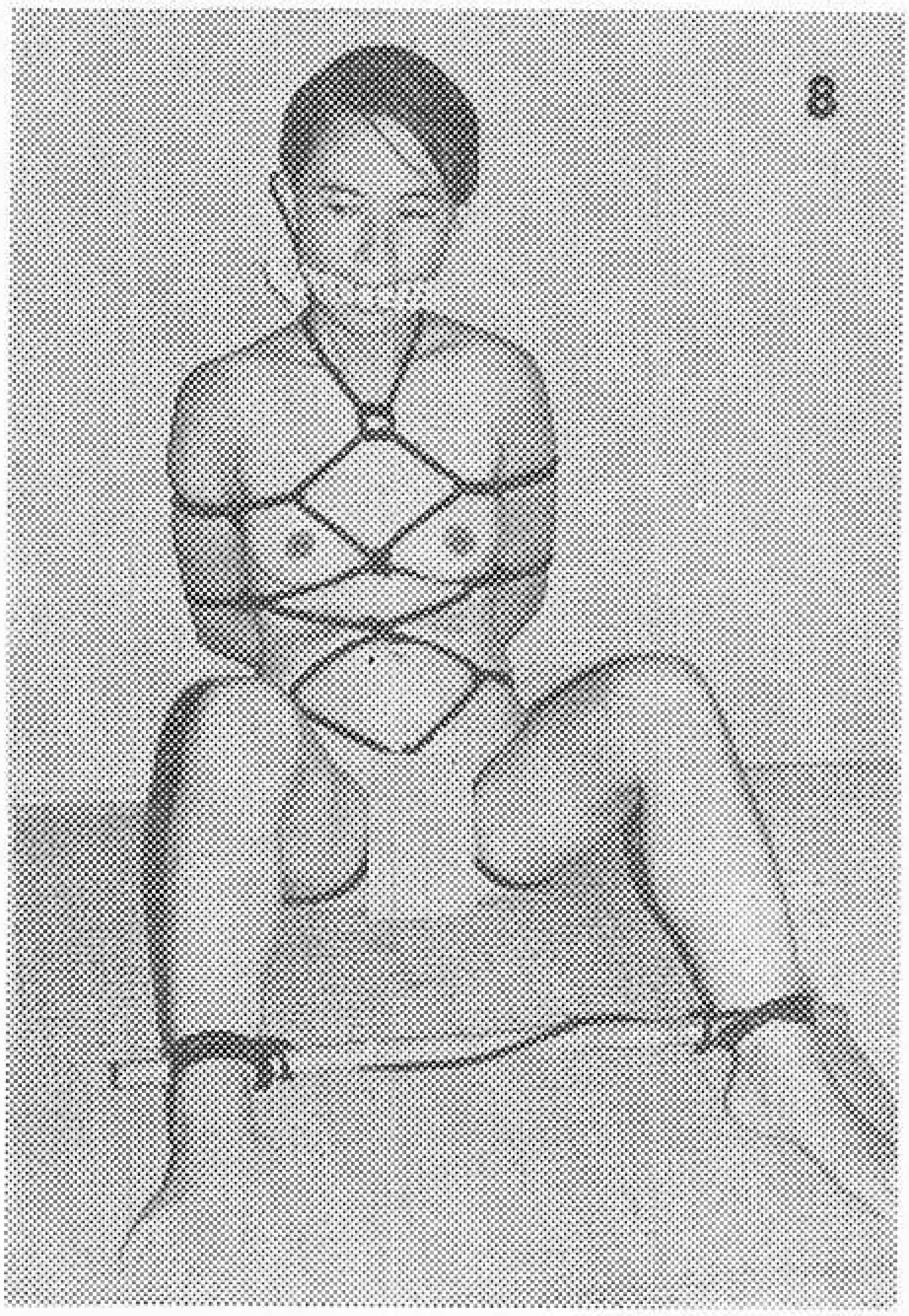
そう応酬しながら、ぼくは心の中で（こんどは、もっと歩幅が狭くなるように、きつく縛ってやろう。それに時間も制限しなくちゃ駄目だな。きめた時間――たとえば一〇秒以内にもどってこなかったら罰を加えるとか何とか、新しい刺戟的要素を加えないと効果がないな。うん、そうだ。一秒遅れたら鞭ひとつとでもしようか）などと考える。

やがて那津子はハンカチをくわえて戻ってくる。ぼくの前に正座する。からだを前にか

がめて、ぼくの手にポトリとハンカチを落とす。また立ちあがる。そして今度は手拭いを――こうした手順が済むと、いつもならすぐに那津子の口を割ってハンカチを押し込み、その上から手拭いで覆って猿轡をはめる事になるのだが、なにせ今宵は古式床しい雛祭の夜だ。その前にささやかなお祝いをしなければならない。ぼくは横のテーブルからコップをとると、白ブドー酒を、いっぱい口に含み那津子の顔をやや仰向き加減にさせて、押しつけた唇のあいだからワインをほんの少し押し出し那津子の口へ流しこむ。那津子は、ごくんとノドを鳴らせて飲みこむ。少しずつ少しずつワインを口移しにのませるとお酒に弱い那津子は、もうホンノリと目のふちを紅らませる。

酔わせてしまっては次に控えた撮影に差し支えるので、ひと口分のワインを飲ませ終わるとまだ豊かな香りのただよう那津子の口へ丸めたハンカチをつめこみ、目のすぐ下まで手拭いで覆う厳しい猿轡をはめる。それから那津子を立ちあがらせ、足首の縄を解いて、部屋の向こう側の渋茶色の壁の前、あらかじめ撮影位置と決めた場所へ追いやる。

まず最初は正座のポーズだ。この前のルポにも書いたことだが、これは、ぼくのもっとも好むポーズのひとつだ。しかし、こういうポーズでは動的な感じの写真は撮れっこない――縄でぎっちり括られて行動の自由を奪われた女をモデルとして写す写真に「動的な」ポーズというのもおかしな話だが、やはりこうした条件のもとでも、例えば、束縛から脱しよう、迫りくる、いたぶりの手から逃がれようとする、といったような、動感にみちた写真をとることも、優れたカメラマンなら可能だろう。しかしぼくの場合、少なくとも今の時点では緊縛ポーズの標本写真をとろうという欲求のほうが強く、どうしても静的な写真になってしまうのは止むを得ない。いわばみずから承知の上で生命感に乏しい標本写真をとっているのだ――いや、これはどうやら自己弁解に随したようだ。



ともあれ、さっき足首から解いた縄を拾いあげると、畳の上に正座した那津子の両膝を揃えて縛る。きつく緊めようとすると、まるっこい膝から、つるんと縄が抜けてしまう。やっとのことで何とか縛りあげると、ぼくはカメラの位置にもどってレンズを那津子のほうに向ける。さっきブドー酒を飲ませたときに、ほつれた髪を二筋三筋と額に重ならせ、視線をやや右にそらせながら、那津子は何もかも任せきったような表情を見せている（第1図）。

こうして、正座のポーズを正面、斜め前、横、斜め後、そして背面と

さまざまな角度からカメラに収める――むろん、そのたびに、ぼくはカメラを置いて那津子のところへ行き、うしろから抱きかかえては向きを変えさせなければならない。

　膝の縄を解いて、こんどは横坐りにすわらせ、揃えた足首を縛り合わせる。背筋をしゃんと伸ばした正座のときと違って、横坐りのポーズでは、からだの線になんとなくやわらかみができるようだ。腰をやや捻り気味にした那津子は、顔の半分を覆う猿轡の上にのぞかせた目を伏せて、二米ほど前の畳のうえをぼんやりと見つめている（第2図）。

　続いて真横から。第一と第二の菱縛にせかれてピョコンと飛び出した小さな二つの乳首が、いじらしい。那津子は手をかたく握りしめて、おのが裸身をくまなく写しとられる恥ずかしさに耐えているようだ（第3図）。

　このポーズで何枚か角度を変えて撮り終わると、変化をつけるために那津子の猿轡をかけ直すことにする。目の下までスッポリ覆っていた手拭いをといて口の上だけに手拭いをかける。ついでに瞼に、そおっと口をつけて軽く吸ってやると那津子はうっとりと目を閉じて上体をすり寄せてくる。その上体を両手で支えながら畳の上に横たえ、足首を縛り合わせていた縄の余りを、さらに延ばして大腿部をも縛りあわせる。足をくの字に曲げてころがされた那津子は、髪をパラリと畳の上に乱したまま、まだ瞼へのくちづけに酔ったような――いや、これはぼくのうぬぼれで、本当はブドー酒の酔いかもしれない――表情で、身じろぎもせず、そこに横たわっている。そんな姿態をパチパチとカメラに収めながら（第4図および第5図）ふと、ぼくは、その作者の名前も忘れてしまったほど遠い昔に読んだ歌を、思いだしていた。

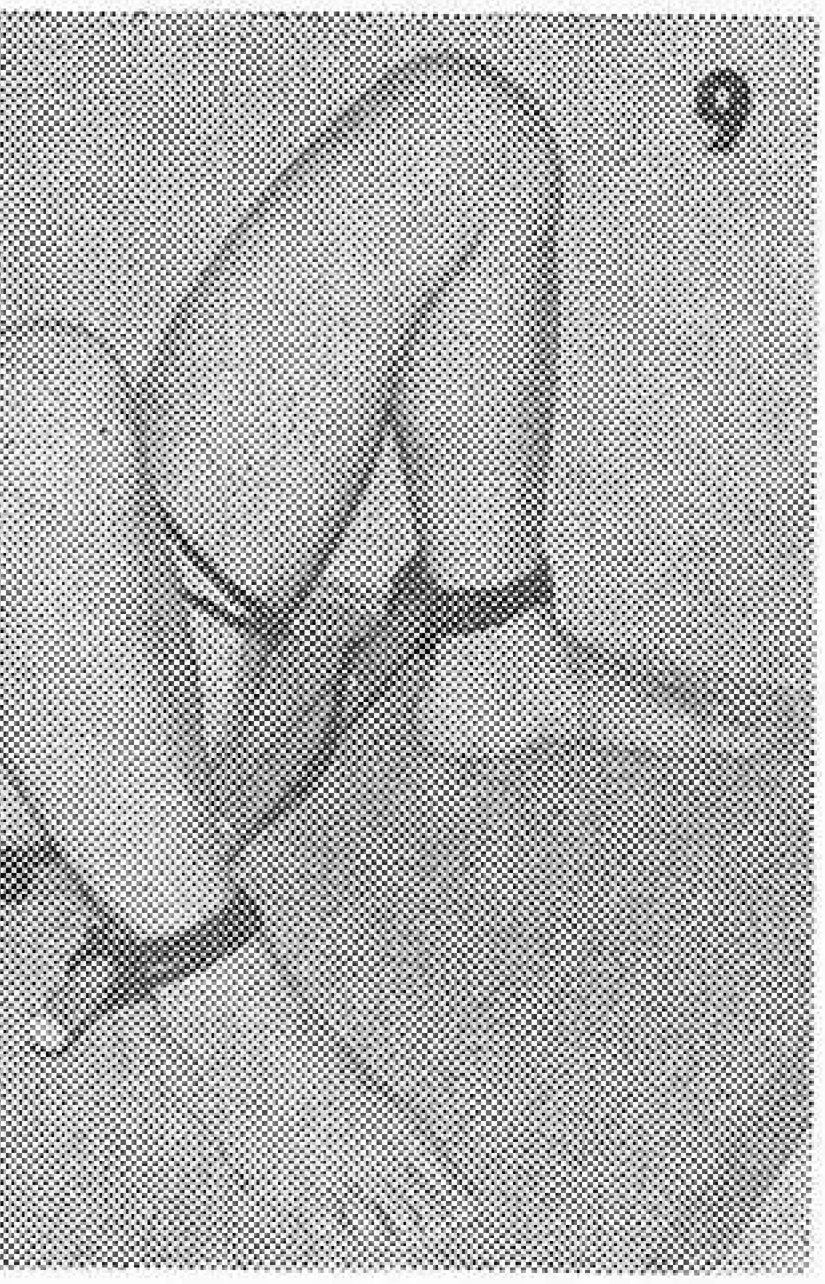
股（もも）ながに　しどろと寝（な）して疑わぬ
　娘（こ）ろの眠りし　見れば愛（かな）しも

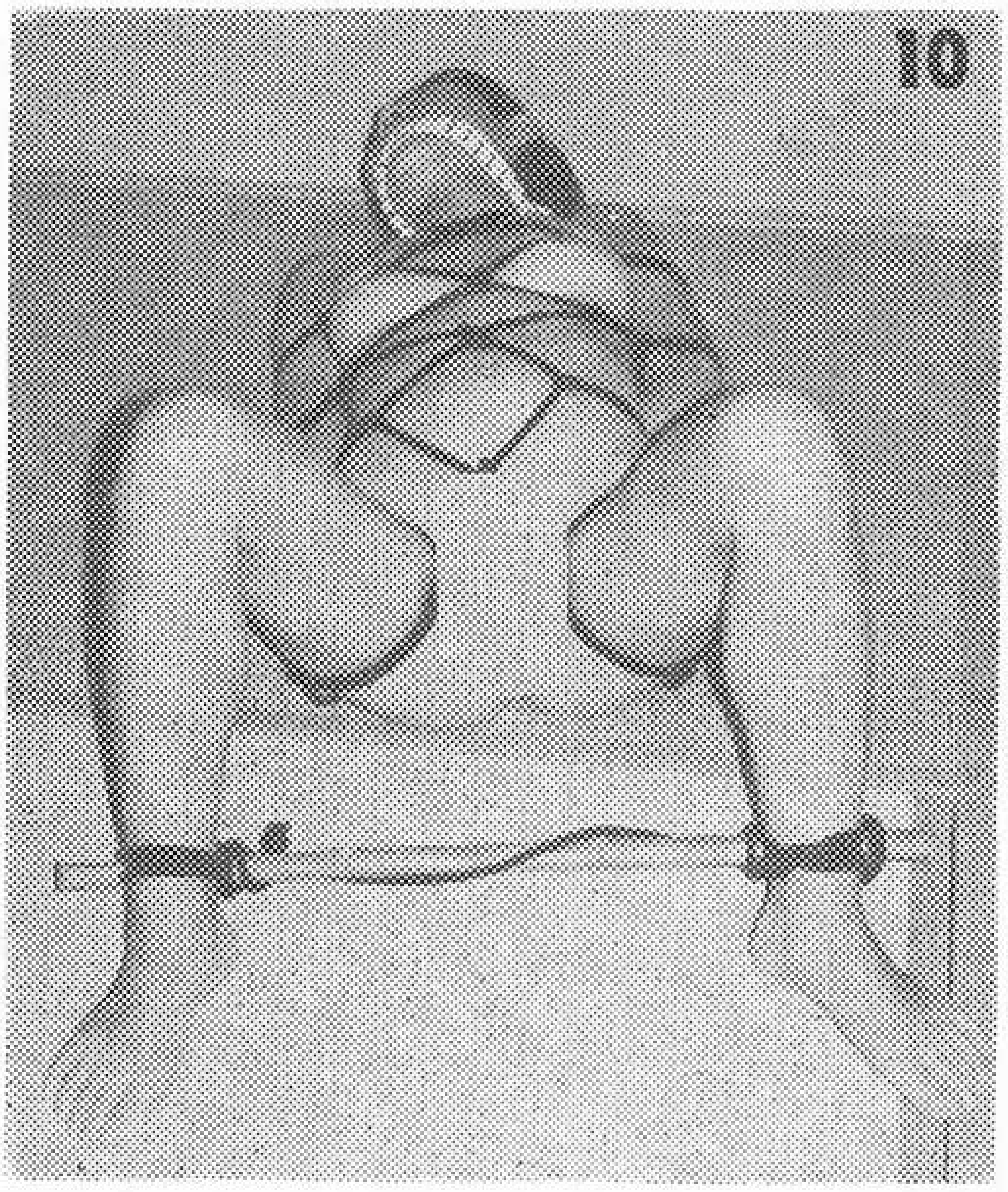
　こうして長い歳月ののちに卒然と記憶がよみがえるほどだから、昔はよほど愛唱した歌に違いないのだが、それにしても、『股（もも）ながにしどろと寝（な）して』か――なるほど、うまい表現だなと改めて感じ入るのだった。

　そうこうしている中に、どうやら小一時間は、たったようだ。

「疲れたかい？」

　と聞くと、那津子は、ううんという風に首をふりながら、猿轡の下から何やらモゾモゾ




10

言う。

「えっ、何だって?」

　手拭いを解いて、口のなかから唾でグショグショに濡れたハンカチを引っぱりだしてやると、

「口がカラカラになっちゃったの。なにか飲みたいわ」

「そうだね、ぼくも咽喉がかわいたよ。紅茶でも淹れようか」

　ぼくが那津子の足の縄だけ解いてテーブルのほうに行こうとすると、那津子は物問いたげにぼくを見上げる。上半身の縄も解いてくれないの?

　とでもいうような表情で。

「駄目だよ、そっちの縄は解かないよ。この縛り方は難しいからね。今夜の撮影は、これで押し通すつもりなんだから、そのままだ」

　そう言い捨てて、ぼくはテーブルの前に胡座をかき、ティー・バッグをコップにほうりこんでジャーのお湯をそそぐと、綺麗な紅い色がお湯のなかにパッとひろがる。その間に、那津子も身をもがくようにして、ひとりで起きあがり、ぼくの、かたわらに歩いてきた。

「そこへ胡座をかいて」

　と指図すると、那津子は言われたとおり素直に坐る。ぼくは組み合わせた那津子の足首を縛り、余った縄を左右にわけて太腿にぐるぐると巻きつけて、厳重な胡座縛りにしてしまう。

　まず、ぼくが紅茶を一と口すすってみる。

「ああ、ちょうど、いい加減にはいった」

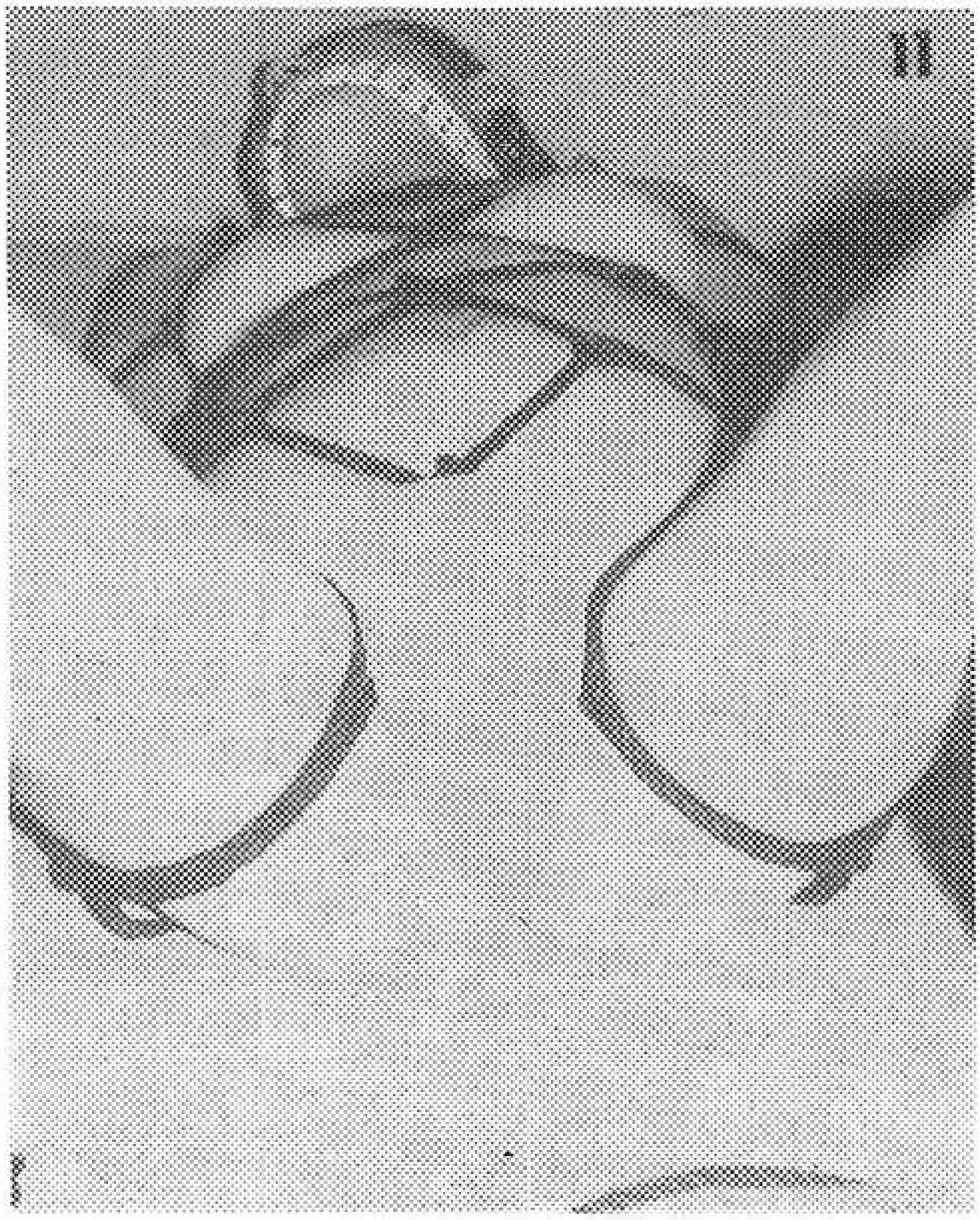
　といいながら、那津子の口にコップをあてがうと、おいしそうに咽喉を鳴らせて飲む。東京から、はるばる持ってきたケーキの箱をあけ、一と片切って那津子の口に入れてやりそれからぼくも一と口。飲ませて飲んで、喰べさせて喰べて、ぼくも、なかなか忙しい。二人でケーキを、もぐもぐやっていると、どこかで泉水の音がする。その幽かな音が夜の更けたのを知らせるようだ。

　お茶とお菓子で、ひと息いれると、早速、つぎの撮影にかかる。

　胡座縛りにした那津子を後ろから少し抱き上げ気味にかかえて、そのまま、ずるずると撮影位置に引きずって行く。猿轡は、また口だけを覆うスタイル。さっき畳にころがして撮影したとき乱れた髪を、手でなでつけてはやったものの、それでも幾筋か、ほつれた髪が額に乱れかかり、それが却って、ある種のムードを醸しだしている（第6図）。

　続いて那津子の上体を前に押し倒し、太腿に巻きつけた縄をといて首にかけ、海老縛り

の真似事をする。からだを二つに折り畳むような本格的な海老縛りには程遠いが、それでも三、四枚撮り終わって首にかけた縄を外してやると那津子はホッとしたような顔をする。よく物の本に、骨がギシギシ鳴るような海老縛りの話がでてくるが、本当に罪人を拷問にかけるならともかく、あくまでも楽しみとして行なう、ぼくらの緊縛プレイでは、このへんが限度だろう。


11

　さて猿轡をとって那津子に、ひと息させるあいだ、ぼくは次にはどんなポーズで行こうかと想を練る。そして、折角用意しておきながら今まで一度も使わなかった竹棒を、足枷として活用しようと思いつく。

　まず那津子を立ちあがらせ、股間を緊めあげていた縄を、いったん、解き放した。股間を縛る二筋の縄は、那津子の羞恥心を刺戟する役割を果たす一方、また、覆い隠す役目をも果たしている。いま、那津子の足を思いきり拡げさせて足枷をつけ、開股縛りにしようとすれば、この二筋の縄は、邪魔になるだけだ。そこで四番目の結び目のところで、縄を左右に分け、太腿のつけ根だけを、それぞれひと巻きまいて背中の縄に連結、そのまま壁によりかかるようにして腰をおろさせる。

　それから猿轡。変化を狙って、今度は手拭いを口に噛ませるスタイル。さすがに那津子は恥ずかしいらしく、カメラを向けると伏し目になったり、あらぬ方に視線を向けたりしている（第7図および第8図）。

　夢中になってシャッターを押していたぼくは、ふとインディケイターを見ると残りのフィルムは幾枚もないのに気づいた。

「おや、もういくらも残っていないよ。急いで撮ってしまおう。那津子はそこでゆっくり寝ていろよ。もっぱら、ぼくの方が動きまわるから」

　ぼくは那津子の上体を抱き、壁際に仰向けに横たわらせる。大分つかれたと見え、そうやって畳の上に寝かされると、那津子はもう身動きもせず、ぼんやりと焦点の定まらぬ視線を天井のあたりにさまよわせている。そうして足枷をつけられ、押し拡げられた脚をすぼめることもならず、切なげに横たわっている那津子のあわれな姿態を、ぼくはカメラを手に片膝をついたり、畳に腹ばいになったり、或は、頭のほうから、或は、足もとのほうからと、残り少ないフィルムに焼きつけていった（第9、10図）。

　やっと三六枚撮りのフィルム一本を撮り終わると時計の針は、もう一〇時をまわっている。これだけ撮るのに、およそ三時間はかかったわけだ。那津子も疲れたようだが、ぼくも疲れた。

「ご苦労様、これで済んだよ。さあ、寝る前

に、もうひと風呂浴びて汗を流してこよう」

猿轡を外し、足枷を取り除き、那津子を立ちあがらせると、ぼくは背後にまわって縄尻をつかんだ。そういうぼくを肩越しに振りかえりながら、那津子が言う。

「あら、縄を解いてくれないの?」

「そうさ。このまま、お湯に入るんだ」

ぼくは澄まして答える。

「さあ、歩け」

那津子は、もう何もいわないで、この部屋についているバス・ルームのほうへ歩きだした。バス・ルームに入ると、那津子は一瞬ためらったが、すぐ思いきったように浴槽のふちをまたいで、お湯に身を沈めた。ぼくも縄尻を取ったまま、湯舟に入る。二人いっしょに入ったので、澄みきったお湯がザァーッと音をたてて溢れこぼれる。

「わあ、なんだかヘンな気持。着物をきてお湯に入ったみたいだわ」

那津子が頓狂な声をあげる。

だが、そのひと言は、ぼくの心に泌みた。ああ、いじらしい女ごころよ。それではお前は、自分のからだを括りあげた縄をさえ、着物の一種とみなしているのか。肉に喰いこむ幾筋もの縄があるからこそ、自分は「一糸まとわぬ素裸」ではないと思いなして、羞恥のおもいを幾らかなりとも、やわらげようとしているのか。

おのが股間を緊めあげる縄ですら、覆隠してくれるものとして、むしろ喜んで受けているのか。そのいじらしい心根に、思わず那津子を抱きよせる。そうでなくてさえ軽いからだは、お湯のなかでふわりと浮き、＜アルキメデスの原理！＞を実証して、ぼくの膝のうえに、ふわりと落ちる。後ろ手に縛られて自分でバランスをとることのできない那津子は、そのまま肩をぼくの胸に押しつけ、頭をぼくの肩に、もたせかける。

そんな那津子をしっかりと抱きしめ、威勢よく流れおちる湯の音に聞き入りながら、ぼくは心のなかで呟いていた。

かしこには　ただ序次（ととのい）と　美と
栄耀と　静寂（しじま）と　快楽（けらく）——と。

——（完）——

新発足　懸賞＜告白、手記、体験＞原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	弐万円
佳作	一篇につき	壱万円
可作	一篇につき	五千円

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

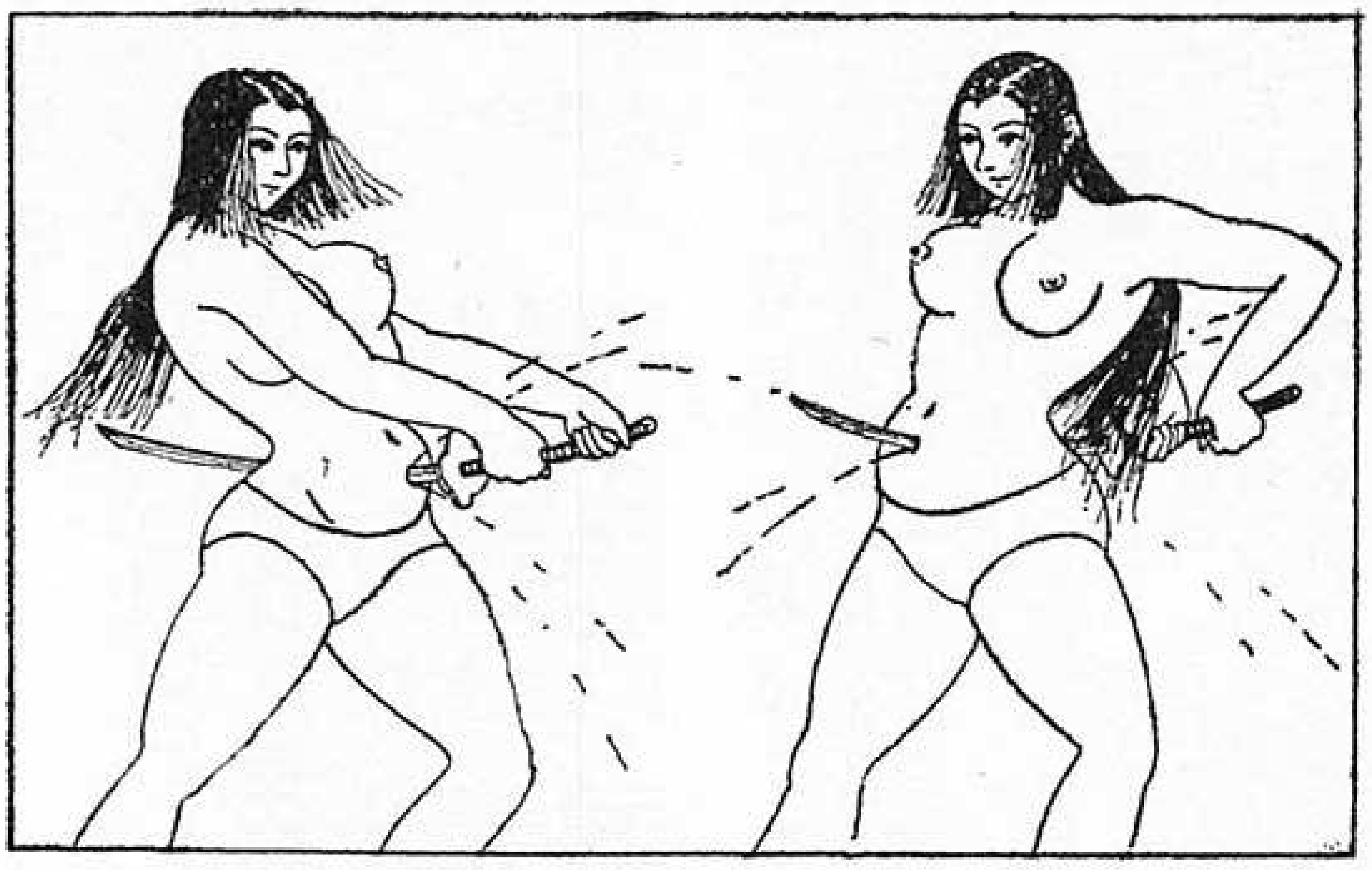
一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。



カット・桐原紫門

＜女性切腹史＞

花の墓碑銘

—（三）—

中康弘通

前回に引続き、内地で起こった疎開者の悲劇をとりあげてみよう。

農村では当時、道義心の頽廃が被爆地である都市部にもまして、甚だしかったとも言える。都市では大空襲による罹災者のあいだに奇妙な連帯感があって、昨日は人の身の上も明日はわが身にふりかかると悟っていなければ、生きて行けぬ状態にあった。従って、焼け残っている者は親戚知人に被災者があれば、有無相通じようという気持も皆無ではなかった。たとえば、乏しい食糧の配給に対して、何かと伝手を求めての特別な入手法を講じることはあっても、反面また、当時としては珍しい魚介肉類の手に入るときは、夜陰ひそかに知人と頒かちあって、貧しい互いの食膳を賑わすことも見られたのである。

しかし、農山村、殊に山間僻地にあってはなおさら都市生活者の思いがけない風俗習慣の相違が作り出す違和感と、同時に、いわゆる他所者へのひがみのようなものが、僻地ほど根強いものがあったと言える。

子守り唄や音頭で戦後は名が知られたM県に、東京からの罹災者として梅村美奈子が疎開して来たのは、昭和二十年の六月である。

東京の下町を焼き尽くした三月の大空襲では助かった山の手も、五月末には焼き払われた。学徒出陣で征った兄はすでに特別攻撃隊員として沖縄の空に散華し、父母を、明治神宮前の広い参道をさえ一瞬に火がなめたと言われる熾烈な猛炎のなかに見失った奈美子は全くの着のみ着のままで、永らく音信もとだえていた遠い縁者を頼って、罹災証明書一枚を拠りどころに、東京の焦土を去ったのである。

「こんげなとこさ来たっち、ひろみの者がどうならすや」

村では都会のことをひろみと呼ぶ。彼女が紺絣のモンペ一枚の着たきりで、わずかな戦災者特別配給券や衣料切符を納めた布のバッグ片手に、訪ねあてた縁先で、この家の主婦

――その人が父方のまたいとこだとか言うのだが――四十すぎた女にありがちな、値踏みするような眼つきで見られたとき、美奈子は東京を離れてこんな辺ぴなところへ来てしまったことを後悔しはじめていた。

　その奈美子に唯ひとつの救いは、少しおくれて疎開して来た、東京の学生であった。学生といっても医科を卒えて胸をわずらい、地方へ戦火を避けに来たのである。

「肺病やみじゃなか?」

「そうともな。今どきええ若いもんが、田舎にくすぶっとるなんて、兵隊のがれもええとこじゃ」

　かげ口が村のそこここで交わされていた。美奈子は東京から来た青年と思っただけで、親近感がわいた。戸村というその青年に、奈美子は身の上を打ちあけると、青年もまた、医科大学を終えるなり結核のために静養すべく離京、縁辺を頼ってこの村へ落ちついた経緯を話して聞かせた。

　山の夕暮れは早いけれども、頭の上の空は長く明るくて、その夕明りの中で小暗くなってくる家々を見ながら、美奈子は戸村とよく立話しをした。

「戦争さえすめばいい。そうすれば、もっとみんなも平和で明るく生活するよ。戦争が歪ませているんだ。この村の人たちだって、根から悪い人じゃないだろう」

「そりゃ戸村さんは、村でも有力者のご親戚だから……でも、そうかも知れないわね。ただ一つ、たしかなことは、戦争に勝っても、父も母も兄も、もう二度と、あたしの前に立ってはくれない、それだけだわ。今のあたしにとっては……」

　少女らしく束ねた美奈子の髪を、夕風が冷えて吹いている山のなかの村であった。戸村はしかし、そのときの奈美子よりも、もっと鮮烈な美奈子の印象を、病んでいる胸に刻み込むときが来た。

　八月十五日、戦争がおわった。それはごく当り前の日本人には虚脱以外の何ものでもない衝撃であった。六月末に玉砕した沖縄のように、軍官民こぞって戦うのだと信じて来た美奈子にとって、終戦が本当は敗戦なのだと自分で自分に納得させたとき、戦災死した父も母も、また特攻隊員として沖縄に突入した兄も、すべてがむなしく報われぬ死であり、山村で馴れぬ農事に青春の身をすりへらす自分もまた虚しい存在にすぎないと、感じていた。彼女はそのとき、かつて兄の書斎に発見し、今も遺品として一冊持ち続けている日記帳をとり出していた。

　狭い、土とかびの臭いのむれてこもっている納屋の、くり抜いたような、板壁から押し上げた明かりとりからの光で、彼女は心覚えのページを繰った。そこには本からの切り抜きがはり込んであった。高山彦九郎の最期を描く一節である。そこには惨烈な幕末志士の割腹、そう、切腹というよりは割腹と呼ぶにふさわしい腹の切りようが記されていた。黄ばんでいるページ、美奈子がもう暗記しているほどのそのページに、窓の外の笹葉を引きちぎってはさむと、東京から来た医大出の青年――戸村を訪ねた。

「戸村先生、これを見てください」

　思いつめたように黒い瞳を光らせて言う少女を、青白い頬に少し血の気のさした戸村は並んで縁に腰かけさせながら、その日記帳のひらかれたページに眼をとめた。

　戸村の部屋は村の有力者の隠居、つまり、母屋に対して離れの通り名であるが、そんな部屋にいたので、庭から母屋を避けて入って来やすいのであった。

　黄ばんだ切り抜きには次のように書かれている。

寛政五年六月二十七日未明、高山彦九郎は筑後久留米の友人・森嘉膳宅で切腹した。嘉膳がほんの少し席をはずした間の出来ごとである。彦九郎は腹を十文字にかき切り、まだ刃を手にしたままであった。後刻医師を呼んで手当したが、大小腸、膀胱が流出し、殊に大小腸ともに破れていた。ついに翌二十八日朝絶命したのである。

何ごとかと戸村が思わず、読みおえた眼を美奈子に向けると、思いつめた、鋭い眼つきで戸村を見て、

「あの、お芝居などでやる切腹と、この切腹とは、どちらが本式なのでしょうか」

息をはずませて尋ねるので、戸村も

「そりゃ、自分ひとりで人手を借りないで死のうと思えば、つまり介錯なしに切腹するのなら、彦九郎のように深く切って、大出血しないと駄目だね」

と応えた。美奈子の真意を計りかねたが、医学的な常識から言って、切腹という方法はもっとも困難な自殺形式で、腹を切っても、大出血を起こさないと即死しないのである。

美奈子は、しいんと考えていたが、

「私も、その方法で自決したいんです」

と言った。

「何を言うんだ。戦争がすんで、もう生きるだけ生きられる世の中に、何も死ぬことはないじゃないか」

「いいえ、兄は体当りして死にました。切腹するよりも苦しかったかも知れません。その妹の私です。せめて切腹ぐらいのことはしたいのです」

一応秩序の保たれていた戦時中も、この娘が、親戚で惨めに虐待されていたようすを人伝てに聞いている戸村は、考えてみると、戦争が終わった途端に緊張し切っていた国民の心のたががゆるんで、きっとひどい混乱が利己主義的、個人主義的な表われ方を見せ、そこへ外国の軍隊が占領軍として進入して来ることゆえ、美奈子の将来に光明があるとは思えなかった。

結局その夜、村はずれの神社の物おきで決行することになった。その物置には十一月の秋祭まで入る者がいないからである。ところが夕方触れが廻って、村民の集会が神社の境内で開かれた。やむなく、一夜を引き延ばした。

十六日の夜半をすぎて、神社のうしろの丘にある雑木林へ、二人で匕首をたずさえて行った。うすあかるくなった午前四時ごろ、いよいよ最期の支度にかかった美奈子は、汚れた絣のモンペに下着だけ、という姿である。

「先生、裸で自決しては変でしょうか」

美奈子の問いに、

「普通ではそんなことは考えられないが…」

戸村が言葉を探していると、

「今の下着、あまり汚れていて見られるとかえって恥ずかしい。いっそ裸の方が思い切りがいいわ」

言いつつモンペをぬいだところを見ると、腰のものは、すり切れていた。あまりにもみじめなので、

「思う通りにしなさい」

戸村が言うと、美奈子は頬を染めながら腰のものをとった。顔と腕こそ日やけしているが、体は白く引きしまっている。見るからに清潔な、娘らしい肢体であった。

「どの辺を切るのですか?」

余りにも淡々と訊ねられて戸村は、やはり冷静に、美奈子の臍の少し下を指で触れ、二の刃を鳩尾に刺して切り下げるように指示し

「苦しかったら一文字でやめなさい、介錯してあげる」

しかし美奈子は戸村の言葉に、ほほえんで

「あまり苦しんで大声を立てるようでしたらおねがいしますが、なるべく手を出さないで下さい。刀の深さは？」

　そして切先から二寸くらいのところを示されるままに、手拭いをキリキリと刀身に巻きつけた美奈子は、夏草の茂みに正座し、しばらく眼を閉じたまま、刀を左の脇壷にあてがった。

　突き立てるというより、スッと切り込んだので「違う」と戸村が言おうとしたが、言葉をはさむひまもないあいだに、次第に刀を立てながら、右まで一気に一尺近くも引き廻した。体質が堅太りなので腹皮も薄いのか、引き廻すあとから傷口が割れ、臍の右下から深く切れているのが、戸村には見てとれた。

　美奈子はもう真ッ青に血の気の引いた顔で戸村を見た。体を前屈みにしながら左手で切り口に探り入れようとするので、見かねて、

「早く鳩尾に突き立てないと苦しくなる」

　戸村が、そう言うと、美奈子はうなずいて左手で切先を持ち、一度は突き損じて左乳を突いたが、二度めにプッツリ見ごとに三寸近くも突き立てると「ウーム」と呻きながら刀を押し下げた。刃の方向が右に振れていたので、臍のかなり右を通って横一文字の切り口まで切り下げていた。血が音を立てて青草に飛散した。

　さすがに耐えかねてカッと眼をひらいたまま左横に倒れ、刀を腹に刺したまま静かになった。

　戸村が脈を検したが、もう瞳孔が開いており、脈もかすかになっていた。遺志どおり戸村は帰った。

　時に梅村美奈子十七才。誰ひとり彼女の行方を探す人もなく、発見されたときは九月中旬で、彼女が切腹した痕跡は判然としなかった。後年、結核が昂じて戸村が没する前に、死期を知って、その友人X氏にこの悲話を伝えたものである。

　こうした疎開者の悲劇は、この一件だけではない。年月日、場所ともに不明であるが、沢村幸子という娘の例がある。

　彼女は疎開地で野荒らしの汚名を着せられた。当時、疎開者も含め非農家の者は食糧の入手に苦しみ、実際、非農家の主婦が野菜を畠から盗んだ例も筆者は聞いているし、また反対に農家の者が金銭欲から、他の農家の畠から野菜を盗んで売った、という人間性の悲惨を極限まで示す事件も聞いている。

　幸子も妹と二人きりで農家の納屋ぐらしをしていた。汚名を雪ぐすべもなく、とうとう刃の薄い草刈り鎌の刃のつけ根から柄にかけて手拭いを巻きつけると、モンペを腰の下までぬぎ下げ、上衣をくつろげて胸から腹へと開いた。土間に敷いたむしろの上でである。

　刃のつけ根に近いところで柄を右手に握りしめ、臍の真下を左から右へ真一文字にかき切った。それでも死ねないので、正中線の左がわから、やや斜めに右がわへかけて、下から上へ縦に切り上げた。

　妹が泣きながら疎開仲間の大学生に知らせに来たので、彼がかけつけたときは、もはや幸子はT字形の鎌腹をとげ、腹の切り口を押えて断末魔の苦悶のさなかであった。ついに一言ももらすことなく絶命したのであるが、無実の汚名ゆえに、二十才で世を短こうする幸子の無念きわまる胸中は如何であったろうか。察するに余りあるものがある。

（付記）

　毎回ご愛読を深謝しますと共に、すでに二十七年を経過した終戦前後、あるいは戦時中の、軍官民たると、男女を問わず、切腹して自決をとげ、あるいは幸いにして生命をとりとめられた方を、ご存知の向きは何卒拙稿にご協力下さいますよう、お願いします。

体験記

底辺に生きる人々

黄　好夫

カット・室井亜砂路

○

母一人子一人の家庭で育てられたせいか、長い間、私は母と一緒に風呂へ入ったことを覚えている。もちろん内風呂を持てるような身分ではなかったから銭湯である。小学校も二、三年まではまだそれでも良かったが、次第に羞恥心が芽生えるにつれて、男である自分が女風呂へ入ることに対する罪悪感を抱き始めた。そんな頃、たまたま同じクラスの女の子と脱衣場で、ばったり出喰わした。

「いやぁ、A君いうたら、まだ女風呂へ入ってやるわ！」

この一言で、辛じて支えてきた私の小さな自尊心は、木端微塵に打砕かれた。私は真赤になって母の後に隠れたものだ。

甘やかされて育ったせいか、私はまるで意気地がなかった。夜になると恐ろしくて便所へも一人では行けなかった。母に附添ってもらい、用便が終わるまで、しっかりと母の手を握りしめていたものである。ましてや数十メートルも先の風呂屋へ一人で入りにゆくことなど、どうしてできようか。

ところが七月も終わりに近いある夜、ミシッ、ミシッという不気味な音で目がさめた。

黒い大きな人影が私を覗き込んでいた。母は、母はいなかった！　普段の私からは想像もできないことなのだが、私はその男に飛び掛かっていったのである。

「泥棒！　泥棒！」と、叫びながら。

近所の人達が男を取り押えた時、私は男の二の腕にガッチリと食いつき、殴られても、蹴られても放さなかったそうである。母は、寝間着の上から両腕を縛られ、猿轡をかまされていたという。幸いにして母には怪我もなく、私も一週間ほどの打撲症だけですんだものの、今考えても、私のどこに、あんな勇気が有ったのかと不思議である。

子供というものは不思議なもので、タイミングよく周囲の大人達から誉められると、妙に確固とした自信を持つものである。

「坊は強いんやなあ！」

「泥棒摑まえるんやから、ごついなあ！」

様々の賞讃を浴びて、私は俄然、男の子らしい男の子になった。もちろん便所へも一人で行くようになったし、一人で男風呂へ入る

ようにもなった。

○

私が中学二年の夏、二軒先に、風変わりな一家が越してきた。

いかつい顔の大男がこの家の主人らしい。ところがこの男、道を歩いていても、風呂へ入っても、だれかに語りかけるように、ぶつぶつ口の中でつぶやいているのである。時には涙を流したりケラケラ笑ってみせたりもした。私たち悪童連は『キチガイ親父』と叫んで怖わがった。なんでも数年前に妻をなくしてからアル中になり、昔のことを思い出してはつぶやいているのだという。

この家の住人は、もう一人、女の子が居たが、一目みてそれと判る極度の精薄児であった。かわいそうに施設へ入れる金もないままに、家内療養させているらしかった。

ところで小学校六年にもなるその少女を、親父は、いつも男風呂へ連れてきていた。

すでにハッキリと胸の脹みが目立ち、若草の微かな翳りがみられるのに、一人では服一つ満足に脱ぐことができないようであった。口をポカンと開けて涎を垂らし、目はどこを見ているのか判らないほど虚ろであった。

男物の下着を着せられ、うす汚い身なりの少女は、いつも男たちの好奇の的であった。

もちろん風呂屋のおばさんは、ことある毎に文句を言った。いいかげんに女風呂へ入れろとか、だれか世話する人はいないのかとか他人にいたずらされても知らないとか……。だが、親父は米つきバッタみたいにペコペコと頭をさげ、ただ「すみません」と、くり返すばかりであった。

親父は、まるで赤ン坊でも扱うように女の子を両腕に抱きかかえて湯に入れた。体中が真赤になるまで暖まってから、自分の膝に少女を乗せて体の隅々まで丁寧に洗うのが習慣であった。

私たち悪童連は、争って親父の横に席をとった。頭を洗うふりをしながらチラチラと盗み見しては、仲間どうしで報告しあったものである。

親父の洗いぶりは、正に隅から隅まであった。

指に石鹸を擦りつけ、鼻の穴や耳の穴は言うにおよばず、肛門にまで指を挿入し、腸の中をぐりぐり、かきまわしたのである。

太いタバコの脂（やに）に汚れた武骨な指がピッタリと締まった少女の肛門にズブズブと吸い込まれるように消えた時、思わず、そこに釘づけになる自分の目を、どうすることもできなかった。

若草に囲まれて、むっちりとした白い肉が見事な谷間を構成する柔らかな部分にも、親父の指は滑った。石鹸が粘膜にしみるのか、少女は時々うめき声をあげた。親父は何度も何度も湯で洗い流したものだ。どうかすると白い肉が、指で押し広げられ、谷間の間隙にちらりとのぞくピンクの深奥が女体の神秘を私の心に植えつけた。

私たち悪童連は、いや他の大人達さえも、親父が行くを見計らって風呂屋へ殺到した。その時間だけ満員になって困る、と風呂屋のおばさんは、こぼしたものだ。

親父は又、少女のほのかな胸の脹みを執拗に洗った。洗うというよりも愛撫した。

両手の親指と人さし指とで輪を作り、すそ野から淡いピンクの山頂までを丁寧に丁寧に揉みあげた。それは、日に日に脹みを増していくように思われた。

一年ほどが過ぎた。

「少女が妊娠した」

「相手は、どうやら父親らしい」

という噂が流れ、その一家は逃げるようにどこかへ引っ越していった。

高校を目指して受験勉強に励んでいた頃のことであった。少女の名前は陽子と言った。

　高校へ、そして大学へと、激しい受験勉強の中で私の脳裡から、その風変わりな一家のことは、あとかたもなく、過ぎさった昔の思い出として消え去って行くように思われた。

〇

　大学へ入った頃、私は抜擢されて、青少年保護委員会の一員になった。文字通り、繁華街に転落してゆく少年少女の非行を防止するための仕事である。四～五人でチームを作り心斎橋、千日前、新世界の周辺を警戒して回ったものである。大学四年間に保護した子供たちの数は数百人にものぼる。その中には、わずか十二才で春を売っていた少女も含まれる。

「底辺に生きる人々」という主題で取材を依頼された私は、通称『釜ケ崎』、あいりん地区に足を踏み入れた。阪堺線霞町から南海本線新今宮近辺に広がるこの区域は大阪の恥部と言われ貧民の集積地として知られている。

　朝八時ともなれば、表通りに労務者があふれ、その日の仕事にありつこうと群れをなしている。やがて十時を回ると職にあぶれた数十人を除いて釜ケ崎はガランと人気のない死の町にかわる。一歩裏通りに入ると、うす汚い木賃宿や飯屋の続く、文字通りの貧民窟である。汚れたボロ布がところせましと干された、トタンぶきの粗末なバラックがひしめいている。だがどの家にも、申しあわせたようにテレビのアンテナが乱立している。奇妙な風景である。

　と、私は数人の小さな女の子の手を引いて角を曲って現われた女に目を止めた。陽子である。まちがいない。顔形こそ成人した女のそれであるが、頭脳は、その子供たちと少しも変わるところはないのであろう。

　つぎはぎだらけのワンピースからは、異様に大きな胸の脹らみが見てとれた。ブラジャーなどというものは知らないのであろう。歩く度に、ゆさゆさとゆれた。

　私は陽子に取材を試みた。かわいそうに、この子は昔と少しも変わっていない。頭の発達は、とうの昔に止まってしまったのだろうか。ガムをくれてやると喜んで家に案内してくれた。子供たちが、ぞろぞろついてくる。

　ぼろぼろに朽ちかかった小屋とでもいいたいような建物に、陽子は私を案内した。

「父ちゃんは？」

「いま、しごとやねん」

「この子たちは？」

「うん、うちのこどもや」

「あんた、結婚してるんか？」

「けっこんて、なんや？」

「いや………ともかく家には、あんたと父ちゃんだけかい？」

「そうや」

　これだけの会話を身振り手振りを加えて、ようやく済ませた。小屋の中には異様な悪臭が立ちこめ、道具一つない。ただ直径一センチばかりの長いゴム管が、あちらこちらに散在していた。

「このゴム管は何するんや？」

「とうちゃんが、これでなぐるんや」

「かえってきたら、いっつもや」

「みてみ、ほれ」

　陽子はサッとワンピースを捲くりあげた。全く何の躊躇（ためら）いもなかった。

　驚いたことに下着は何もつけていない。ただ体中に紫色に黒ずんだ打擲の跡が無数についていた。豊かな胸と太腿のつけ根に、そして臀部に、その印形は集中していた。

「なんで殴ったりするんやろ？」

「しらん。かえってきたらわけものう、なぐるんや」

「めちゃめちゃやねん。はらすいた、いうてはなぐり、こどもがうるさい、いうてはなぐり……。そやけど、もうなれてしもうたわ」

「けどな、なぐってばっかりとちがう。やさしいとこもあるんやで。はようにかえってくるときは、タコヤキこうてくれるし、それにまいばん、カンチョウしてくれるしなあ」

「浣腸?」

「そや、うちはカンチョウがだいすきや」

「いつでも、このゴムかんでみずをいれてくれるんや」

「おなかが、こんなにふくれて、はれつしそうになる。くるしいけど、とうちゃんがおさえてくれる。でそうになってもさしてくれへん。だいぶまたされて、それからや」

「ええきもちやで。うちはカンチョウが、だいすきや」

「おなかのなかがカラッポになってしもうたみたいで、なにかいれてほしいなあとおもうねん。そしたらとうちゃんがだいてくれる。あさになってごはんたべるまで、なんかいでもいれてくれる。とうちゃんも、ええぐあいやゆうてよろこんでくれるし、なぐられることもない。カンチョウしてたら、とうちゃんも、ごっつうきげんええんや」

何ということであろう。この子は浣腸に、うつつをぬかし、父親とセックスをして毎日を送っている。これこそ、犬畜生にもおとる最低の生活だろうと私は思った。

もう日は暮れていた。私はいいようのない重苦しさから逃がれて大学へ帰った。

その後、二、三回、私はその家を訪ねた。その度に陽子は得意気に浣腸の話をしてくれた。

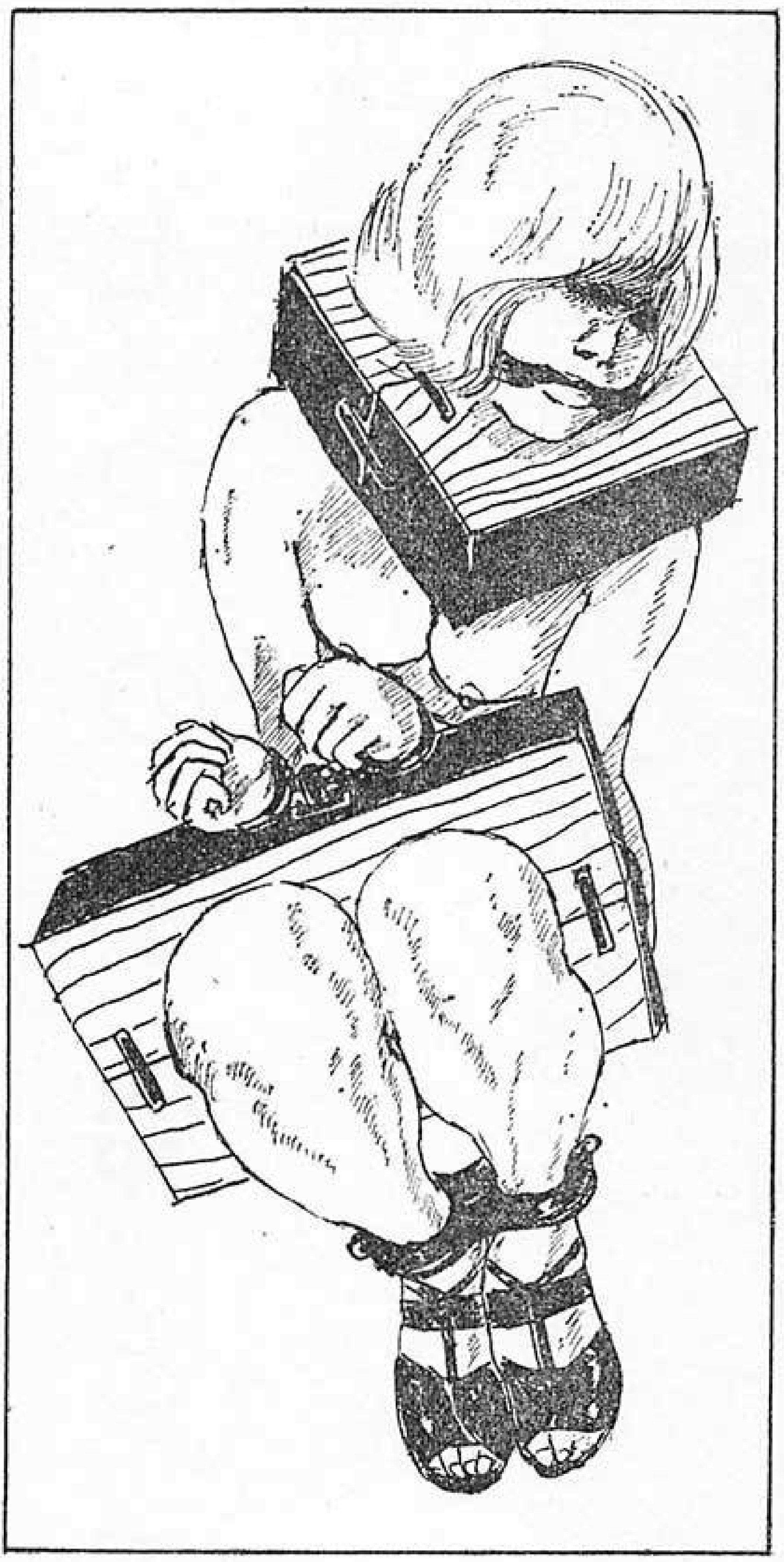
それから半年後、陽子が死んだという噂を聞いた。精薄児をいつまでも衆目に晒しておくような残酷さは神にはなかった。いや、それにしても、遅すぎたのかもしれない。短いなりに一つの人生が終わったのであろう。

○

あのキチガイ親父が実の娘に生ませた孫娘たちがどうなったのかを私は知らない。

機会があれば、今一度、釜ケ崎を訪ねてみたいと思っている。

——（おわり）——

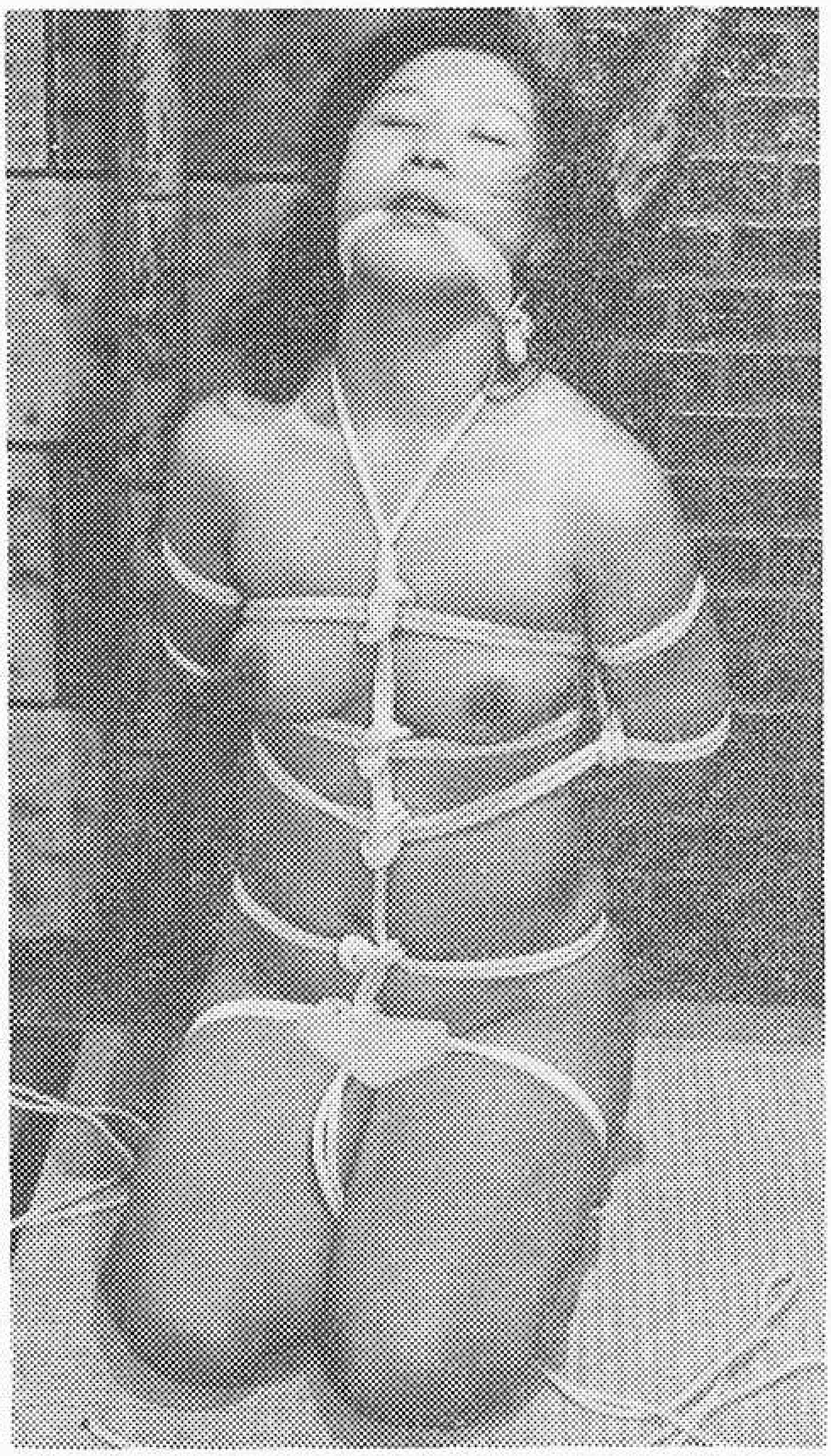


::::: イメージギャラリー :::::『枷の重さ』::::: 志羽利也 :::::

奈保子の自由日記帳より

七（なな）つの土（す）鈴（ず）と玉（たま）手（て）箱（ばこ）

笠井奈保子



＜編集部注＞

塚本鉄三氏を介して笠井奈保子嬢の自由日記帳の一部を提供してもらい、七月号では編集部で取捨選択の上、アレンジして「私の玉手箱」と題して掲載しました。それ以後の分は、恥かしいから、とかまだ書いていないからと言って中々見せてもらえなかったのですが、見本として早い目に作成した七月号を持っていって見せたところ、やっとのことで約一月分の自由日記を貸して呉れました。例に依って、彼女の希望によって、日付を伏せ、特にプライバシーを侵すような個所は、ぼかしたり削除したりしました。

〈笠井奈保子の自由日記抜粋〉

四月×日

寝ていて、ふと目がさめたとき、あら、自分はどこで眠っていたのかしら、と思うときがある。とくに昼寝とか、うたた寝なんかしていて目がさめたときなんかは、よくそんなとまどいを感ずる。

今朝は寿亭の二階の部屋で寝ていて、朝目がさめたのに、ここはどこだったのかしら、と一瞬不審に思った。やはり、自分にきちんとしたきまった住居がないためなのか。頭が重くって、鉛を背おったような気持。ねむくて仕方がないのに、なんだか目だけが冴えて口がねばねばしていて気分がわるい。

ゆうべ、無理に飲まされたビールのせいかしら。ビールといっても、コップに、たった一杯だったんだけど。

起き上がって鏡に向かってみる。自分の顔がなんだか自分の顔でないようで、はれぼったいマブタが、つけ豆みたいに、ふくれている。ルージュを塗ってみるが、唇がかさかさして伸びがよくない。洗面所へ行って冷たい水で顔を洗い、ルージュも落としてしまう。

お酒だなんて、どこがいいのかしら。高いお金を出して、あんなの飲む人の気がしれないわ。日本酒は盃に一杯口にしただけで、顔が真赤になって胸がドキドキして、とても苦しい。それに、あとで身体中にジンマシンが出てから、一ぺんに嫌いになった。

ビールって、あんな苦いもの、どこがいいのかしら。工場の寮にいた頃、お友達のみんなが、おいしいわ——といって飲むので、私も一口飲んで、わぁ苦い、と思わず吐きだしてしまって笑われた。煙草もその頃、みんなが吸っているので真似して、こっそり、どんなにおいしいものかと吸ってみた。口の中がいがらっぽくて、唾まで苦くなり、それに舌がざらざらして、気持が悪く、こりごりして

しまった。

ゆうべは人手が足りなくて、宴会の席へお膳を運んでいたら、酔っぱらったお客さんに「一杯飲め」とすすめられ、そばにいた義母（はは）も、「ナオちゃん、あんたも成人式がすんだんだから、ちょっとお稽古したらどうなの」と言ったら、まわりにいた人達が、「そうだそうだ。コップに一杯ぐらい、ぐっとあけてしまいな」とはやしたてるので、ついでくれたコップに、ちょっと口をつけた。

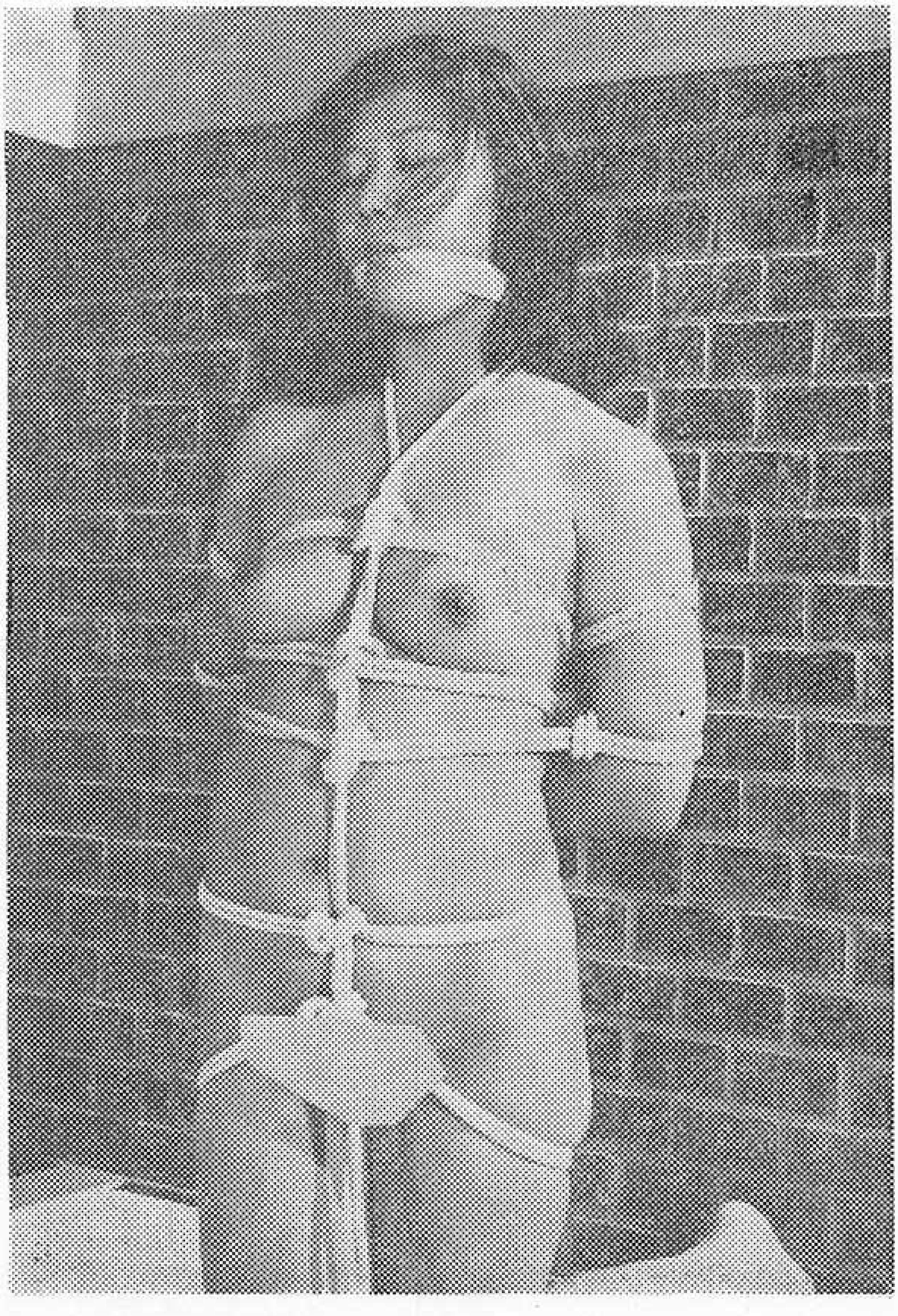
そのままコップを置いて帰ろうとしたら、「こら、飲まんか、飲まんか」と、ミニスカートから出ている私の素足をつかんで放さない。酔っぱらいって、ほんとうに嫌。仕方がないので苦いのを我慢して、目をつぶって、やっとのことで飲んだだけど、スカートの中へ手を入れたり、いやらしいことをするので、すぐに洗場の方へ逃げてきた。

しばらくして、義母がきて「ナオちゃん。みんなが、あんたを呼んでるんよ、ちょっと顔を出してくれない。大切な、お客さんなんだから」と誘いにきたけれど、「でも、わたし、お客さんの前に出るのイヤなもの」と言って断わった。私はやはり、洗い物やお掃除をしている方が好き。酔っぱらいのお相手なんか、マッピラだわ。

一日中、頭が痛くてノーシンを飲む。

四月××日

夕方、エイコから電話。近くの喫茶店で待合わせて逢う。エイコから、四月から役付きとなったので寮を出られないという。一緒にアパートを借りる話はオジャンか？



二日の休みに、会社の同僚と京都へ遊びに行ったお土産にと、かわいいコッポリの土鈴（どれい）をもらう。私にとっては、何よりも、うれしいオミヤゲである。汗かきのエイコが鼻の頭に汗の玉をうかべて、いそいで持ってきてくれた好意は、うれしい。

私が土鈴（どれい）を集めだしたのは、昨年の夏ごろ

からだから、まだ一年にもならない。六月だったか七月だったか、はっきり忘れたけれどたしか雨が降っていたから、梅雨の頃だったかもしれない。法隆寺へ観光バスで行っての帰り。門前町の曲がりくねった狭い町通りの片隅の小さなミヤゲ物店で七つの鈴を買い求めたのが始めてだった。

ふればカラコロと可愛いい音を立てる鈴に大変気にいって買ったのが七つの鈴だった。天平時代花鳥文様鈴、正倉院唐草文様鈴、法隆寺唐草古代文様鈴、唐招提寺光背唐草文様鈴、薬師寺竜文様鈴、縄文土器文様鈴、唐招提寺古瓦文様鈴の七つの土鈴だった。

　女の私にとって、この土の鈴の音も魅力的で好きだったが、このなんともいえない模様の美しさと手ざわりの快さが気にいった。

　私の秘密の玉手箱に、先ずおさめられたのが、この七つの鈴だった。今では塚本さまのご好意で、縛られた女の人の写真アルバムが二冊にもなって、カギのかかる箱も少し手ぜまになってきたけれど、あちらこちらと、泊り歩く私なので仕方がない。アパートの一室でもよいから落ち着ける部屋が早くほしい。

　でも、エイコの都合がわるくなったので、二人でマンションを一緒に借りることは、ちょっとダメになったようだ。ここ当分は、今まで通りの宿かりのような生活をつづけるよりほか仕方がない。この間、部屋を探しに自転車に乗って行って、ころんだとき膝小僧をすりむいたあとが痛い。あのときは、張りきって行ったのだけど、見せてもらった、あの部屋も、この部屋も、すべて夢なのか。

　いっそのこと、彦根に住む父のところへ帰ろうかと、思ったりする。

四月××日

　つつじの花が赤く咲いている。

　今日は私の誕生日。これで二十一才になったのだわ、と思う。誰も祝ってくれる人もない淋しい誕生日だった。

しきりに亡き母のことが思い出される。こんなとき、母がいてくれたらなぁと思う。

お店は忙しくって休むひまもない。

やっとお風呂をすまして、自分の身体になったのは十二時が過ぎてからだった。

疲れていたけど、玉手箱からシャシンを出して眺める。なぜ自分はこんなシャシンを見るのが好きなのだろうか、と反省する。どんなものでも、集めだすと、いくらでも、次から次へと欲しくなる。土鈴だってそうだし、このシャシンだって、もっともっと変わったのが欲しいと思う。欲ばりな私。

お金だって、一万円や二万円のときは、貯める気持もなく、パッパッと使っていたけど二十万、三十万と貯金通帳の額がふえてゆくと、額をもっと増やしたいと思って、買いたいものを倹約するから不思議である。深夜放送のラジオをつけたまま、フトンの中にもぐり込む。冷たいフトンの感触が快い。

四月××日

今日は雨。

それも風が強くて、横なぐりの雨が吹きつけてくるので、レインシューズの上の方にかかってストッキングを、じっとりと濡らす。

舗道にたまった水たまりの上に風が吹いてくるたびに水面にちぢみのような小波が立っている。雨の日の外出はイヤなのだけど、今日は約束の日だから仕方がない。と、そんなに思っているのに、朝から、いそいそ、うきうき、なんとなく心がはずんでくるのは、どうしたわけなのだろう。

自分のハダカを縛られて写真をうつされるのが、なぜ、このように楽しいのだろうか、と、そう思っただけで、急に顔が真赤になってしまう。今、一人だからいいようなもののこれが人の前だったら、どうしよう。耳たぶから頬っぺたにかけて、かっかとほてってくるのが、自分でもよくわかる。

こんなに、きれいに撮れるのなら、もっと

写してほしい。もっと、もっと、いろんなポーズや縛り方で——。

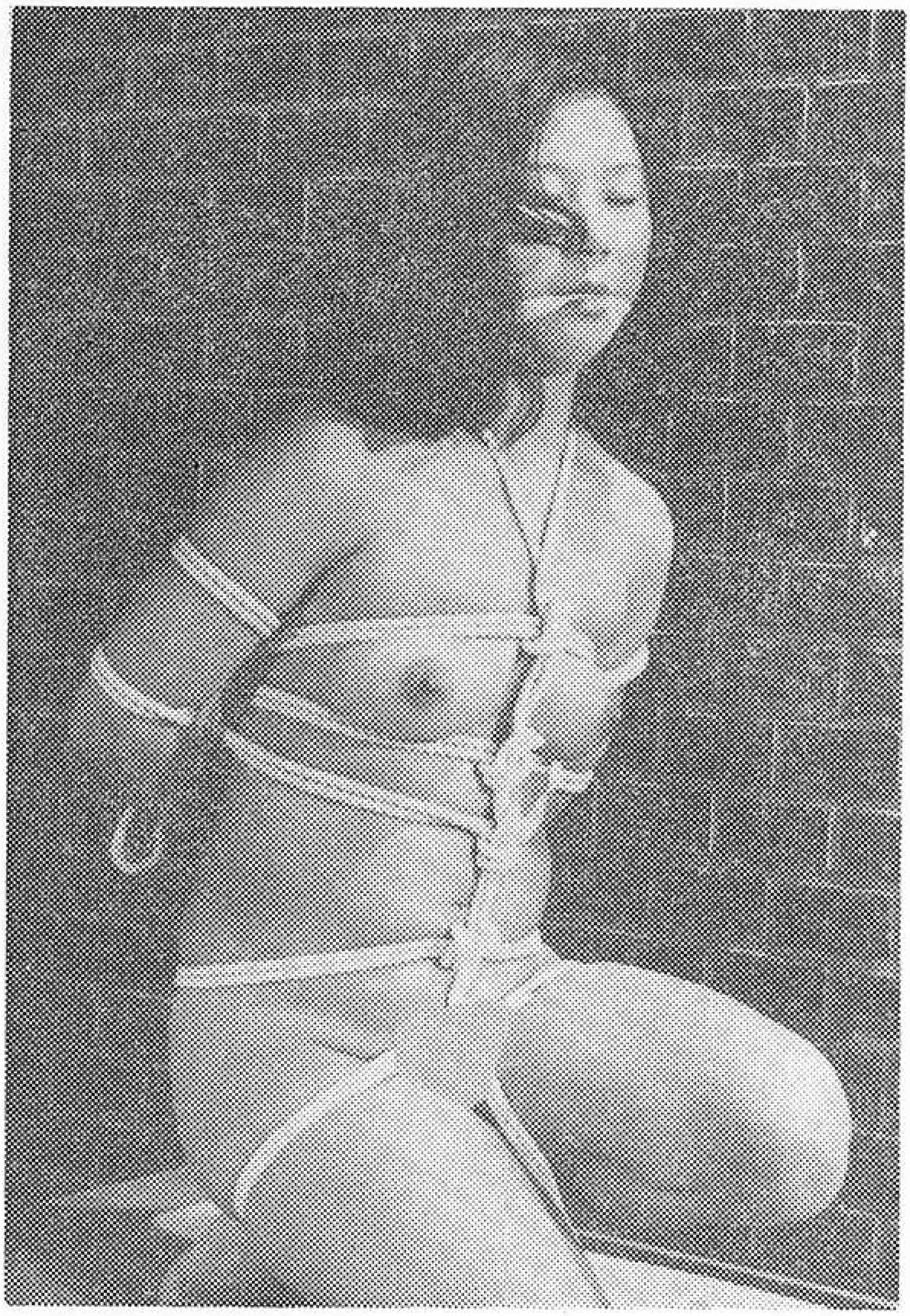
　そんな気持が強くして、なんとなく心が楽しい。この前、三回目に縛られたときは、胸がドキドキばかりで、まるでなにもわからなかった。夢中で時間が過ぎていったようで、「今日は私は用があるので、このくらいにしておきましょう」と、塚本さまに言われたときは、ほっとする気持と、なんだか物足りない気持とが入り混じって、自分でも、おかしかった。

　初めて縛られた女の人のシャシンを見たときの驚き。あの身体がしびれるようで、全身がほてって、真赤になったような気持は、恥かしいけれど、今でも、もう一度、味わってみたい。そして初めて自身のカラダに、じかにロープをかけられたときの、あのジーンとした気持は、なんと言ったらよいでしょう。

　先ず、背中の方で組み合わされて縄でくくられたとき、「ああ、自分もあのシャシンのように縛られるのだわ」と、思っただけ、じっとこらえているのに、身体中がぞくぞくとしてきた。耳や頬が赤くなりませんように、肌に変化が起こりませんように——と、私は必死に祈っていました。

わきたつような心を押さえて、平静に、平静にと、自分の心に言いきかせていた。それなのに、両手首に掛けられた縄がひき上げられて、二の腕にぐっと力が入っただけで、私の顔は、もう人に見せられないほど赤くなっているのが、自分でもよくわかった。

　その縄が、胸へ一巻き、二巻き、かけられてゆくと、私は心の中で、「もうカンニンして。もうこれ以上、縛らないで——」と叫んでいた。それは決して痛いからではなくて、こんな風にして、どんどん縛られてゆくと、自分の身体がどのように変わってゆくのか、それを見られるのが、たまらなくて、縛るのは、この辺でやめて——と思った。



だけど、心の中は、そんな思いでわきたっていながら、私の顔の方は必死の抑制がきいたのか、紅を散らしたようには、なっていなかったようだ。前に縄を回されるたびに、うつむいた顔を何度も、のぞき込まれたが二の腕から乳房の上と下にかけて、きっちりと縛られた頃は、逆に顔の血の気が引いてゆくようで、額には汗が、じっとり浮いてきた。

　両手の自由がもう完全にきかない状態で、二つの乳房がむっくりと盛り上がるように、きつく縛られた快さは、下半身からジーンと、しびれてくるようである。

　後手首はもっと、もっと高く引き上げてほしい。乳房はもっと、もっときつく締めつけて、乳首がうんと前へつき出るようにしてほしい。と、そんなことを考えていた。ピンと緊張している乳首に縄が触れると、とても痛い。それでいて、乳首が高く、高く、天まで届くくらい、突き出てほしいと願っているへんな私。全く私って、へんなのだわ。

　激しい雨足を眺めながら、私はこの前の日のことを、ぼんやりと思い浮かべていた。

　甘ずっぱくて、やるせない気持。

　これから、いよいよ、本当に責められるのかしら——と思っていたとき、時間がなくて中途半端で終わってしまった、あのときのSMプレイ。でも、あれが、SMプレイっていえるのかしら。私の方は只、言われるまま、されるがままになっていて、それでただ満足していただけ。自分の方からは、積極的に何一つ、働きかけなかったのだから、きっと塚本さまも不満に思っておられたことだろう。

　オシボリで指を何度も拭き、コーヒーも、お水も飲み干して手持ちぶさたにしているとき、

「いや、お待たせしました。雨で道がこんでいましてね。晩くなってすみません」

　と、彼が現われたので、私はほっとして、思わず椅子から立っていた。

「いや、いや、そうあわてなくてもいいんです。今日は、ゆっくり出来るんでしょ」

「ええ、姉の家を出るとき義母（はは）の所で泊まるって言ってきましたけど、義母には、そのことは話してませんの。だから私……」

「そうですか。じゃ晩くなったら、お家（うち）までお送りしましょう。今日ね・六月号の見本が

出来たんですよ。私の書いた貴女のことが載ってるんで、貰ってきました。これはあげておきますから、そのかわり、貴女の日記帳を借りて来いって頼まれましてね」

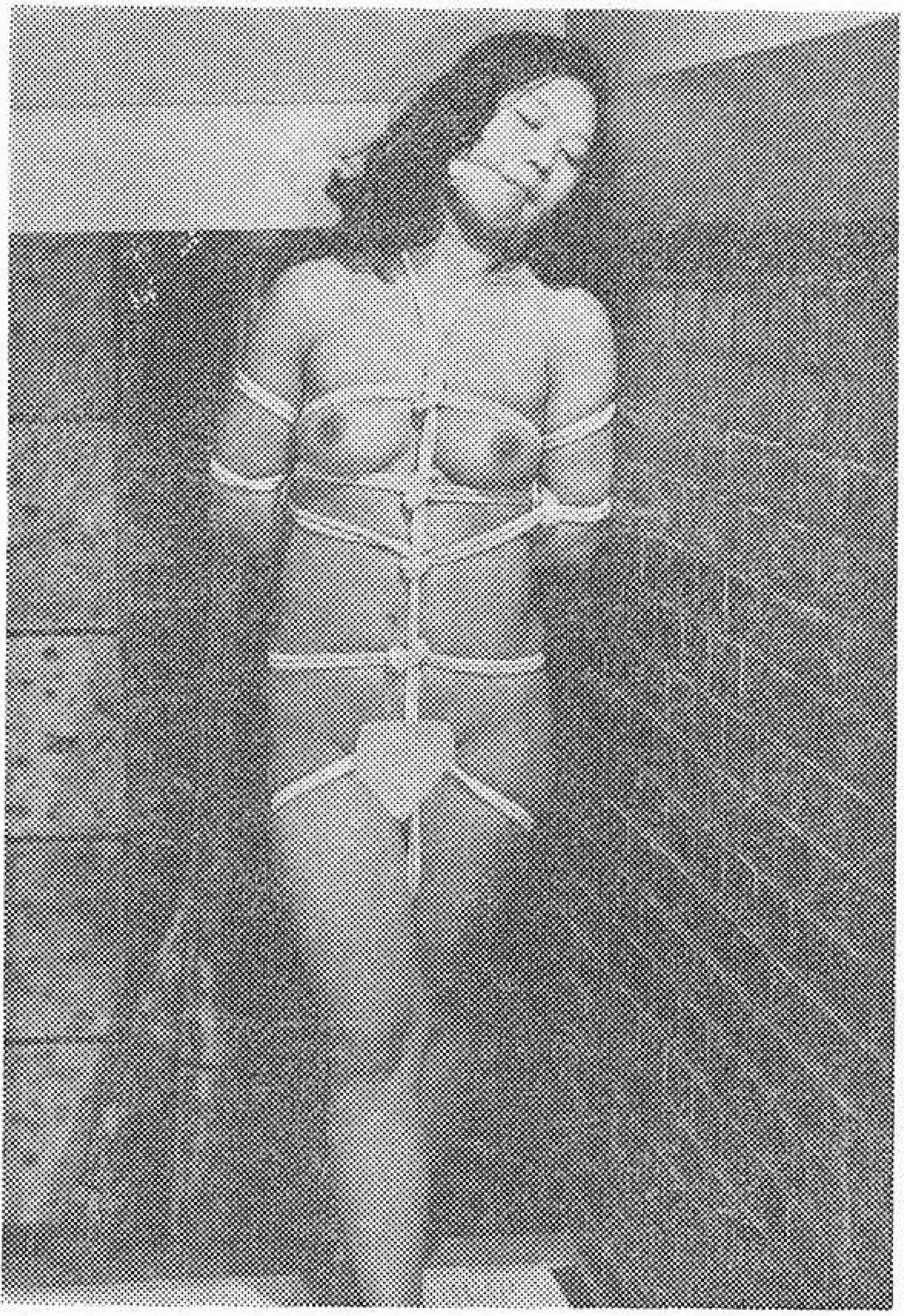
テーブルの上にとり出された袋入りの雑誌が今にも私の目の前でひろげられるのではないかと、ひやひやした。

どんなことが書いてあるのか見たい——という気持は、やまやまだけど、自分のことが書いてあると聞いただけで、胸のなかが波立ってくる。早く見たい。でも怖い。ましてやこんな人中で、とても開ける勇気はない。

私は、その雑誌をしっかりと胸に抱いて、席を立っていた。外は相変わらず激しい横なぐりの雨が降っている。白いしぶきが窓の外側であがっているので見通しがよくない。

道を走っているのかと思ったら、両側に建物のある広い道のようなところに停まったらそこがホテルの駐車場だった。屋根はあるのだが、下は濡れているので鞄を置くことが出来ない。私は力があるので、鞄一個と三脚を持ってあげる。もう一個ぐらいの鞄だったら持つことが出来たが、案内の人が来て持ち上げ、「まぁ重い」といって両手で引きずるようにして提げていった。私は高校時代はバレーの選手をしていて鍛えられたので、このくらいの重さのものだったら平気である。

エレベーターで昇って部屋へ来てみて気づいたことは、今まで、今日で四回目だけど、いつも違うホテルなのに、部屋の造りは、なんとよく似ていることなのか。なんとなく、どことなく、似通っているのである。



珍しいので、そこら中を、歩きまわってみる。窓を開けると遥か下の道路では歩いている人が傘をさしているのが見える。ああ、外は雨が降っているのだなぁと思ったが、部屋のなかにいると、そんなことは少しもわからない。外へ出ても雨が降っているのだと思うと、なんだか、落着いた気がする。

痩せたい痩せたいと思って、三度の食事も手加減しているのに、ぶくぶくと肥ってくる自分のハダカをさらすのは恥かしい。もっと痩せたいと思う。せめて四キロでも、二キロでも、痩せてくれたらなぁと思う。特にウエストとヒップは肉がつきすぎていると思う。

縛られた女の人のシャシンを見るのは大好きだといっても、それはきれいに写されたシャシンを見るのが好きなのであって、ほかの女の人が縛られているところを実際に見たら私は逃げだしてしまうかもしれない。

また自分が実際に縄で縛られるということについても、余り経験がないので、こわいような気持がする反面、手とか腕とかを括られることで自分の自由が奪われるのだから、少し変な気持になってくるのは押さえようとしても押さえることが出来ない。

私は顔や身体に、すぐそんな気持の動きが出てしまうので恥かしくて仕方がない。恥かしいから尚一層、顔が赤くなってしまうので困る。顔ばかりかハダカにされているので肌の色まで変わるのがよくわかる。ジンマシンにすぐなるタチなので、肌の変化が敏感なのだろうか。ビールだったら、そうでもないのだが、お酒だったら少し飲んでも翌朝はジンマシンが出て、かゆくて弱る。

いよいよ、これから縛られるというとき、ポーズの参考にと、二十枚ばかりのシャシンを見せてもらう。どれもこれも、スゴイ縛りのシャシンばかり。私なんか、とても真似も出来ないと思う。ピンと片足だけを挙げて縛られたのや、両足を一本の棒のようにひろげて縛られたのなんか、見ているうち、思わず身体中があつくなって、くたくたと、くずれるように畳の上に、うつ伏してしまう。

「どうしたの?」と尋ねられても、とても答えられない。私の心の中の変化までは気づかれないだろうけど、身体の変わりようを知られるのは、死んでもイヤ。知られたくない。

それが、とうとう知られてしまって、穴があれば入りたいほどの恥かしさ。それにも増して、しびれるようなスリルと未知の快感。

私は本に書いてあるようなマゾなのか。そんな不審の気持をいだきながらも、現実の私の身体の方は、私の意志にさからって、どんどんと走りだしてしまう。

こんなシャシンを見たから、いけないのだわ――と思う心と、もっともっと、変わったシャシンを見たいと思う心が激しい火花を散らして、それが一層、私の気持をたかめた。

自分の下半身の変化を、はっきりと知られてしまった私は、自分のハダカが縛られてシャシンをとられる前に、自分の身体にしてほしいことを態度ではっきりと示してしまったのである。自分がジカに縛られるよりも、縛られたほかの女の人のシャシンの方が、このように私を燃えあがらせてしまうのか。

シャシンの方は余りとられなかった。

四月××日

昨日もらって帰った奇クの六月号をゆっくりと見る。まっ先に、なんといっても、「カメラ」と「ペン」のルポルタージュの『春宵一刻値千金』のとこを開いたが、自分のシャシンがチラッと目に入ったので、あわててページをとじる。でも、見たい見たいという気持が強いので、また、こわごわ、そっと開いてみる。あたりには誰もいないのに、見まわしておいてから、シャシンを見た。

一枚、二枚、三枚と、数えてゆくと二十六枚ものっている。縛られた女の人のシャシンを見るのが好きな私でも、自分のシャシンを見るのは面はゆくて好きではない。じっと見ている気はしない。自分のカラダの自分で気にいらないところが、余りにも、はっきりとよく出ているので、見るのはイヤである。

それなのに文章よりも先に、どうしてもシャシンを見てしまう。それにしても、塚本さまのルポの文章は、なんとうまく書いている

ことだろう。あまりにも、いきいきと書いてあるので、こわいような気がする。私の日記帳なんか、ほんの大学ノートに鉛筆の走り書きで、お恥かしいもの。見せろ、見せろといわれたって、自慢して見せられるようなものではない。でも、毎日の日記だけは忘れずに一生けん命、書いておこうと思う。下手クソでも、人に見せるものじゃないのだから。

　六月号で気にいって読んだのは、高村浩子さんの〈M女通信〉で「浩子の近況のことなど」という文章。すらすらと書いていて大変読み易い文章なのに、書いてある内容は、私の心にもピンと響いてくるように感じられてなんとなく親しみがもてる。小柄のように見受けられる浩子さんの縛られたポーズは、印画紙に焼付けたものでも見せていただいたけど、じっと、いつまで見つづけていても見倦きないシャシンである。

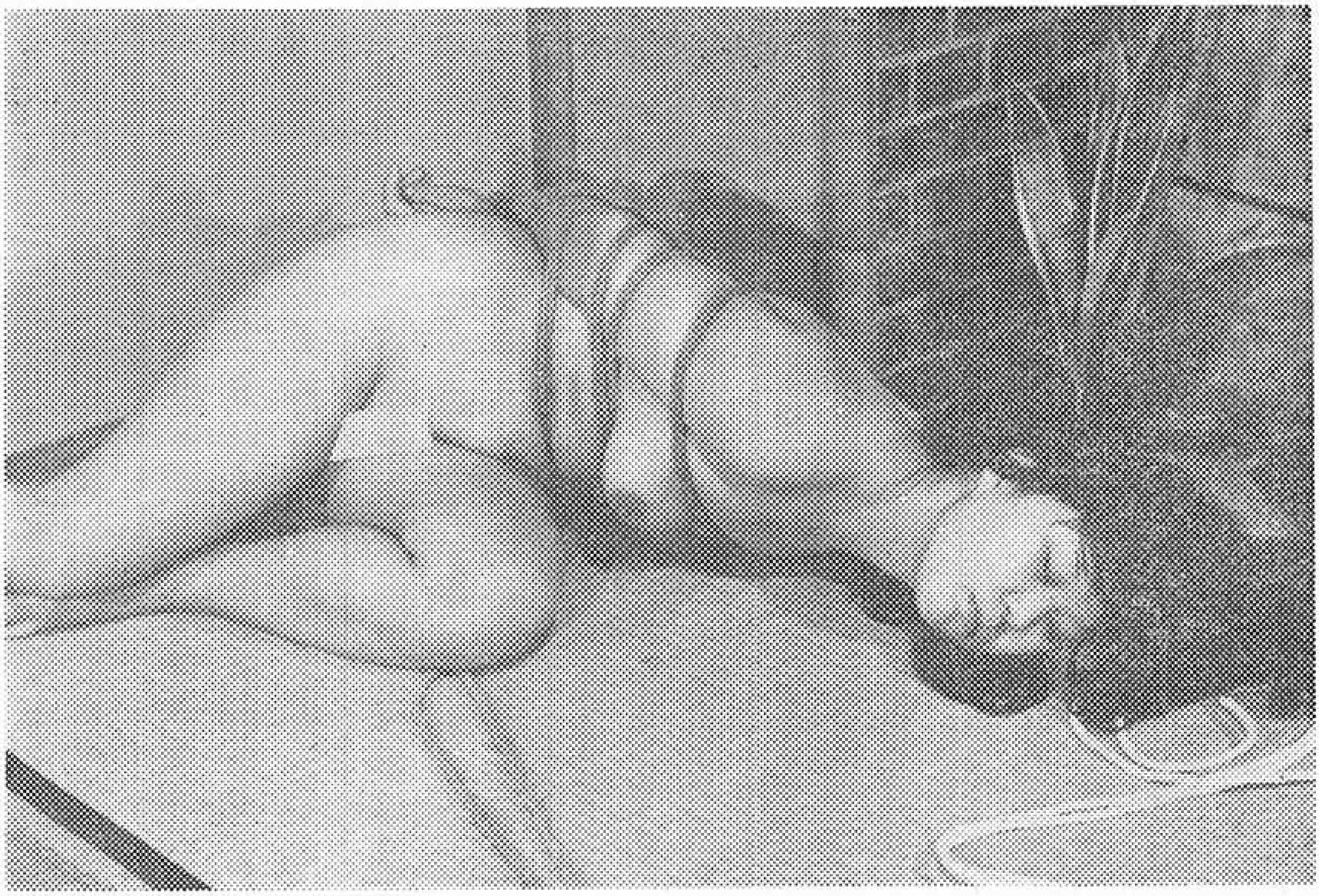
　私なんかより一年も前から縛りを経験していられる先輩のベテランなので、教えられることも多いけど、やはり人それぞれ、顔や体格も違うように、SM（この言葉の意味は私には十分わからないのだけれど）についての感じ方も、浩子さんと私とでは大変へだたりがあるように思う。でも、この方の文章は、もっともっと読みたい。

　奇ク六月号のページを、ぱらぱらとめくっていると、すぐに自分のシャシンの載っているところが目について離れない。見るのは恥かしいと思っていながら、いつの間にやら、そこのページを開いている私。

　ゴールデンウィークのお休みは、私にとっては別に関係ないんだけど、やはり会社に勤めているお友達が連休だと騒いでいるので一緒に琵琶湖へ遊びに行こうと約束する。

　姉は久方ぶりの休みなので家中で一泊旅行をするため、私に留守番をしてほしいと言っていたので夜だけ姉の家で寝る事にする。琵琶湖へ行った帰りは、彦根の父のところを訪ねたいと考えていたのだけど、日帰りなので無理かもしれない。

五月×日



先日、塚本さまにうつしてもらったシャシンを送っていただく。短い手紙が入っていたので礼状をかねて返事を書く。

シャシンを見ていると、あの日のことが、まざまざと目に浮かんでくる。カンジンのときはシャシンはうつされなかったけど、私の心のなかには、あのときのことが、はっきりと今でも思い出されるほど灼付いて離れないでいる。あれが、本当のＳＭプレイというものなのだろうか。私には、よくはわからないけど、そうとしか思えない。

今日送ってもらったシャシンで何回目になるのか。あの日、私はＳＭプレイの最中、思わず知らず、「私にも浣腸して！」と叫んでしまって、自分と自分の言葉で顔を真赤にしてしまった。浣腸って、どんなものか、浣腸されたらどんなことになるのか、そんなことは何も知らないで、あんな恥かしい言葉を、だしてしまった私。それだけ、あのときの私って、狂ってしまっていたのかしら。

「次に道具を準備してきたときに、浣腸はやりましょうネ」と、真面目に答えて下さったけれど、私は別に〔浣腸〕にこだわっていたわけではなかった。あのときは、何かしら、思いっきりエッチな言葉を自分の口から吐きだしたくって、〔浣腸〕という言葉がとびだしてきてしまったのだった。

だから、もし、浣腸の道具の準備がしてあって、「浣腸してあげよう」と、言われたら私は逃げだしていたかもしれない。

それとも、あのときの、あのムードだったら、恥かしくってたまらないけど、浣腸液をいっぱいお腹のなかへ入れられてたかしら。

玉手箱の中へシャシンをしまおうとしたら先日、琵琶湖へ行った時に買ってきた土鈴が二つ、ちょこんとのっていた。チリンチリンと可愛いい音を立てて、手のなかにかくれてしまいそうになる小さな鈴。赤い房が白い陶器の肌にこぼれて美しい。私は、ひとり淋しいときは、時折、鈴を出して、その音色と手ざわりを楽しむ。

私の大切な玉手箱の主（あるじ）は、この土鈴とシャシン。シャシンは私の心をゆさぶって火のように熱く燃えたたせる。鈴は私の心を静かに沈めて暖かく慰めてくれる。

　この頃は入れるものが大分増えて、カギのかかるこの玉手箱も手ぜまになってきた。

　土鈴を並べておける自分の部屋がほしいと切に思う今日この頃。でも、寿亭や姉の家へ手伝いに行っている間は、二重生活になって生活費もかさんでいることも考えなければならない。彦根の父は「ナオ子だけには、僅かでも遺産を残しておいてやりたい」と言ってくれるけど、今の父は事業の失敗で借金を背負っている身なので、私としても無理な要求は決して言えない。

　二人の姉は、父がまだ盛んに商売していた頃に結婚したので十分に結婚仕度もしてもらっているし、母も生存中だったので盛大な結婚式に両親揃って出席してもらい、幸福な人生の門出をしている。私だけが取り残されたような格好だけれど、父が気の毒がって下さるほど私はつまらないとは思っていない。

　久しぶりに父へ手紙を書く。

五月×日

　この間、連休の一日、琵琶湖へ行ったときエイコをさそわなかったと、エイコから電話で文句を言われる。だって、エイコはボーイフレンドと一緒に志摩の方へ行くとかいっていたので、気をきかしたつもりなんだけど、やはりさそった方がよかったかな。よし断わられたとしても。

　六月号をとりだして読む。

　何度も何度もページをめくったりするので雑誌がくたくたになった感じ。一月号から六月号までの間で、この六月号だけが、いちばん手垢によごれてしまった。

　五月に入ってから、まだ一度もシャシンはとられない。なんだか身体がむずむずするような心持がする。最初、あれほど膝がガクガクするくらい、身も心も緊縛してお腹がいたくなったほどなのに、この頃では、シャシンをとられるのを心待ちにしているヘンな私。

早く、七月号が出ないかなぁ――と思う。

六月号が出て、まだ日がいくらも経っていないというのに、もう七月号が出ないかなぁと思うのは、おかしい。そう思うのだけど、七月号には、私の『日記帳』とシャシンがのるのだと思うと、早く見たい。どんなシャシンがのるのだろうか。日記もシャシンも、どちらも雑誌に出るのは大変恥かしい。それでいて、心待ちにして、見たいと思う私。

　思いきって、塚本さまにお電話して、次の日をきめていただく。電話しているだけで、胸がわくわくして耳が赤くなってくるのが、自分でもよくわかる。

「ええ、ええ」と受け答えしているだけで、何を喋ったのか、よく自分でも、わからないけど、彼には縛られて思いのままにされるという習性が、こんな電話しているときにも出てくるのかしら。おかしな私。

　縛られるという次の日がきまったというだけで、なんとなく心がうきうきしてくるのはどういうことだろう。

　次には、どんな縛り方をされるのかと思うだけで胸があつくなる。私って、感受性に富んでいるのかしら。もしも、この前のようにいろんなシャシンを沢山見せられたら、一体どうしよう。私はもうそれだけで身体全体がくたくたに、なってしまいそう。とても、それからの縛りには耐えられそうにもないわ。

　それでいて、そんな場面を空想している私って、本当にエッチなのかもしれない。いけない奈保子。二十一才の奈保子の青春って、悲しいものだわ。

　夕方、アルバムにシャシンを貼る糊を買いに行ったついでに、住宅街をひとりで散歩する。家庭を持ったら、こんな家に住みたいなぁ、と思う屋敷の塀に、真白い蔓バラの花が夕闇のなかに浮かんで、たわわに咲いているのが見事だった。

　帰ってからアルバムにシャシンを貼る。自

分のシャシンだけは今までの分とは別に新しいアルバムに貼る。このアルバムは私の玉手箱の中でも一番大切な宝物にしたいと思っている。なんといっても、自分のシャシンを見るのは恥かしい。だから、貼っていても誰もいないのに顔が思わず知らず赤くなってきて変な気持がする。髪の毛で顔をかくしているシャシンが割合と沢山にある。私って恥かしがっているのだわ……と、思ったりするけどここは、もう少し脚を曲げた方がよかったのに、と思うようなシャシンもあった。ピカピカと光ってきれいで、何もかも、はっきりと写ってしまっているのは、何とも恥かしい。

五月×日

いよいよ明日が約束の日。どんな縛り方でどんなシャシンをうつされるのかと思うと、みぞおちのあたりが、きゅっと締めつけられるような気持になるのだけど、それでいて、なんとなく楽しい。日記帳を、日記帳を、とやかましく言われるので、今日までの分を書いて明日は持ってゆこうと思う。高村浩子さんのように上手に文章が書ければいいのだけど、私なんか、好きなように書いているだけでとても他人には見せられたものではない。字も沢山間違っているし、雑誌にのせられるのかしら。それに、人に見られるということを意識すると、今までのように平静な気持では書けなくなってくる。これだけは書いておきたいということをノートに書きなぐっていたのだけど、これからは、そんなわけにもゆかない。こんなことを書いたら変に思われはしないかという気持が、どうしても先に立ってくるし、ペンもすすまなくなる。「今まで通りに書いて下さい」と、よく言われるけど果して今まで通りに書けるかしら。

私の心の中をすっかりのぞかれてしまうようで、とても書きにくいんだけど、とにかく書いてみることにする。私のこんな日記帳がもし役に立つのであったら。

団鬼六作

花と蛇

決定版

◎瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

＝畧号『花決定版』＝定価一、〇〇〇円（送200円）＝

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚『奇譚クラブ』誌上に連載中でありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となった訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

＜内容主要見出し一覧＞

第一章 発端
第二章 恐ろしい陥穽
第三章 美人探偵登場
第四章 華麗な浣腸図
第五章 救援者来たる
第六章 救援の失敗
第七章 餓狼への好餌
第八章 悪魔の哄笑
第九章 恐怖の地下室
第十章 翻弄される美女
第十一章 淫蛇の執念
第十二章 美姉妹危し
第十三章 色事調教師
第十四章 美津子受難
第十五章 落花微塵
第十六章 密室の秘密ショー
第十七章 脱走の失敗
第十八章 華やかな饗宴
第十九章 地獄屋敷へ新顔
第二十章 翻弄されるカップル
第二十一章 一千万円の身代金
第二十二章 身代金奪取の失敗
第二十三章 涙の宣誓文
第二十四章 運命の逆転劇
第二十五章 奇妙な三々九度
第二十六章 飼育される白い動物
第二十七章 悪魔と悪女の悪業
第二十八章 屈辱の地獄図絵
第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末
第三十章 悪鬼達の残忍な所業
第三十一章 落花無残の修羅場
第三十二章 淫らな美女の調教
第三十三章 すさまじいショーの展開
第三十四章 汚水にまみれた宝石
第三十五章 華々しき美女の屈伏
第三十六章 対峙する美女と美女
第三十七章 あくどい陥穽
第三十八章 羞恥図絵の展開
第三十九章 清純な令嬢の屈服
第四十章 人身御供の令夫人
第四十一章 深窓の美少女とズベ公
第四十二章 小夜子への執拗な調教
第四十三章 変性色事師の登場
第四十四章 生れかわるスター京子
第四十五章 激しいスターへの訓練
第四十六章 低脳男と令夫人の結婚
第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人
第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊
第四十九章 悪魔たちの哄笑
第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄
第五十一章 珍芸を開陳する令夫人
第五十二章 淫靡な時代劇ショー
第五十三章 華々しきショーの展開
第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり
第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め
第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち
第五十七章 悪党の執拗ないたぶり
第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面
第五十九章 勝ち誇る悪党一味
第六十章 中国伝来の秘法
第六十一章 緊縛された美女の涕泣
第六十二章 新しい餌食への触手
第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄
第六十四章 恐怖の責め続く
第六十五章 結末なき責めの結末
第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人
第六十七章 新しい犠牲の到来と静子の狂態
第六十八章 あくなき汚辱に泣く美女
第六十九章 ニューフェイスに飼育開始
第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女
第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演
第七十二章 女盛りの妖美な肉体
第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊
第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。
〒558 暁出版株式会社宛

カット・黄　泉鳥

懸賞〔告白、手記、体験〕入選作品発表

映画館のトイレ——でのSMプレイ

閑居善人

＜告　白＞

私は二十八才、独身時代からの奇クの愛読者である。妻は二十四才、結婚して二年、まだ子供はない。私の会社の帰り、妻としめし合わして喫茶店で待ち合わすのを楽しみにしている。約束した時間に、約束した場所で落ち合うなんて、恋人時代のようで、とても楽しい。夕食を妻と一緒にとってから映画を見るのも楽しみの一つである。

でも、今日の映画館行きは、一つの変わった目的を持っていた。この計画は前から妻にも話して聞かせ、協力を約束させていた。

「面白そうだわ、やってみるわ」

妻も乗り気で私の計画に賛成してくれたので、かねてからの打ち合せ通り、勝手のわかった、この映画館を選んで入った。定評のあるラストシーンを見逃がすのは惜しかったのだが、私達夫婦は一足先に見切りをつけると婦人便所へと急いだ。

先に入った妻が、誰もいないのを知らせると、周囲に目をくばって、人のいないのを見はからって、妻に従って中へ入った。

両側に十宛並んでいるボックスの四番目のやつへ、妻の手を引いて飛び込んだ。

これだけの事をするのさえ、私の心臓は早鐘のように高鳴っている。妻は——？と見れば、彼女も息を殺して、じっと私の顔を見返している。お互いに、思わず、おかしさがこみあげてきてしまった。

どうやら映画も終わったらしく、外がざわめき始めるのに、首を捻ってドアを見れば鍵を掛け忘れている。たったこれだけの事にも気が動顛してしまっていたのだ。

妻があわてて鍵を締める。荷物を棚に置き

責め具をとり出した時には、もうどやどやとなだれ込んでくる足音、足音……。

忽ち私達の入っているボックスをノックする。妻がノックを返すと、隣のボックスへ入っていった。両隣から、かさかさと衣服をずり降ろす音、それに続いてザアーという音。これらは私達の耳にリズミカルに響き、快い楽音であった。

暫くは淑女たちの奏でる音楽に聞き惚れていたが、又もやノックの音。そういえば、今日の映画館は満員であった。この調子では、こんかぎりノックされるに違いない。

私達の気持も大分、落ちついてきた。

さあ、プレイ開始だ。目と手真似だけが、二人の間の言葉なのだ。ノックを返すのは妻の役目ときめた。ここまでは意を決して、私を導いた妻も、一瞬、気おくれがしたのか、自分の胸を抱きしめて後ずさる。

便所の中で四つの足が交錯すれば当然怪しまれる。妻の腕を摑んで引き寄せる。

抱きかかえながら、その腕を強引に後へねじ曲げて重ね合わし、口にくわえた扱帯で括りつける。

指は曲がって虚空をつかんでいる。

「アイタタッ」

妻のヤツ、私の胸に顔を埋めて叫ぶ。思わず冷汗が背筋を走った。

気をしずめ、外の気配をうかがっても、どうやら、どやどやという足音に、その叫び声は、かき消されたらしい。それとも、私の耳にだけ大きく響いたのであろうか。

妻の目が、（ごめんなさい。もう声を立てないわ）と謝っている。（許すものか。お前は今日、その罰を受けねばならんのだ）と、私は目で答える。

実は私は今日、妻には内緒で、ある趣向の責めを考えていたのだ。いくら理解のある妻とはいえ、どうやって切りだそうかと思っていたのだが、どうやら、これで口実が見つかった。私は、ほくそ笑んだ。

小さくふるえている妻の服のボタンを外した。（妻はその時、ツーピースを着ており、服のボタンは前についていた）スカートを上にあげて首にかけようか、下へおろして膝へとめようか、大分、考えたが、結局、後者にきめた。妻に股を開かせ、スカートの裾を、一旦、上にあげてからチャックをはずし、巻きながら膝まで、ずり降ろした。

上服を、ぐっと開いて、スリップを捲くりあげると、その裾から手を入れ、ブラジャーを取り出し、妻の口にくわえさせる。次にパンティであるが、これは秘かに用意してきた鋏で切りとってしまった。

妻の顔に、さっと不安が横切るが、お構いなしに、これも妻の口にくわえさせた。男と違い女性の装備は中々厳重である。その下にまだアンネが当てがってある。こう書くと如何にもスムーズに事が運んでいるようだが、実際は、こうはいかぬ。ひっきりなしにノックされるドアに応えねばならない。この際は先を急いでいたから妻の代りに、私がノックを返している。妻をまとめあげてから、妻に代らせることにした。

アンネをとると、その中央に赤く血がにじんでいる。イヤイヤをして首を振る妻の口をこじあけると、赤く血のにじんだ所を口へ挿し込んだ。（落としでもしたら今夜は竹ヤブの中へ一晩中、野晒しにしてやるぞ。お前のその白肌は藪蚊にさされて、赤く膨れあがってしまうのだぞ）

ちょっと体を引いて妻の姿を鑑賞する。スリップだけが体を覆っている。黒とはいえ殆ど透きとおって見える、そのスリップでは、覆っているとは言い難い。胸には乳房が浮かび上がり、下腹は一段と、こんもりと盛り上

がっている。羞恥に耐えている妻を見ると、我慢できなくなり、スリップの前に鋏で一条線を引いた。往々にして私は、衝動に負けて損ばかりする。妻にパンティとスリップを新調してやらねばならない。

　甘えて私を操じゅうすることのうまい妻はそんな時は大抵、他のものまでねだって、私に買わせてしまうのだ。うるさくノックする外の人々。ひょっとすると三、四人は、このボックスの前に並んでいるかもしれぬ。（この人、長いわねえ）なんて私語しているかもしれぬ。ノックの音も、だんだん荒々しくなって、どんどんとドアが、きしむ程である。

　最初から、このボックスの前に並んで、このボックスが今に開くに違いないと期待し、他のボックスに行きかねているのかもしれない。妻にノックをしかえすように命じて、タバコに火をつけた。

　よく考えたもので、私に自分の体をもたせかけて左足で蹴って合図を返す。これじゃ全く面白くない。そこで私も考え直した。

　五十CCの浣腸器の雄型の細くなっているところを、布をより合わせて作った細い縄でしっかりと結んで、十CC程グリセリンを注入し、排泄の姿勢をとらせると、その雄型を妻のアヌスへ挿し込んだ。

　もう既に妻は尻をもぞもぞさせていたが、私は雄型が抜け落ちぬように、その細縄を股間縛りの要領で妻の尻に括りつけた。

　足音をたてぬように妻の側へにじり寄り、その腹を抱いてかかえあげてドアを背にして例の姿勢で立たせた。長く伸ばした妻の髪、ひろげた両足の三方から引いた綱を、私の左側、即ちドアの向かいの壁の前にある把手に縛りつけて、首と両足は、もうドアの方へは近づけないようにした。

　かなりの便意があるのか、妻は怨めしげに私を見ながら腹に力を入れている様子だ。

　ドアを叩く音。妻がどうやって応答するかと私は目をみひらく。上半身を前に倒し、尻を突き出して、やっとその浣腸器の雄型をドアに当てる。カチッという金属音――。ノックにしては少しおかしい。怪しまれるか？と思ったが、もし誰か外で、「何かあったんですか、大丈夫なんですか？」と尋ねたら、妻の口を自由にしてやって、答えさせればよい。

　それでも、ドアをこじあける奴はいまい。広い日本、二十分や三十分、トイレに入っていて何が悪い。そんな考えが私にはあった。

不規則な金属音の返事――。

　それでも妻は一生懸命にやっているのか、歯をくいしばり、額に汗をうかべている。（妻のあとでの述懐によれば、相当苦しかったらしい。手で叩くような調子に尻を振ろうとしても便意がそれを邪魔して、どうしても尻がふらついてリズムが狂うのだそうだ。それに勢いよくぶつかったりすると、それが腸を圧して思わず声をあげそうになるそうだ）

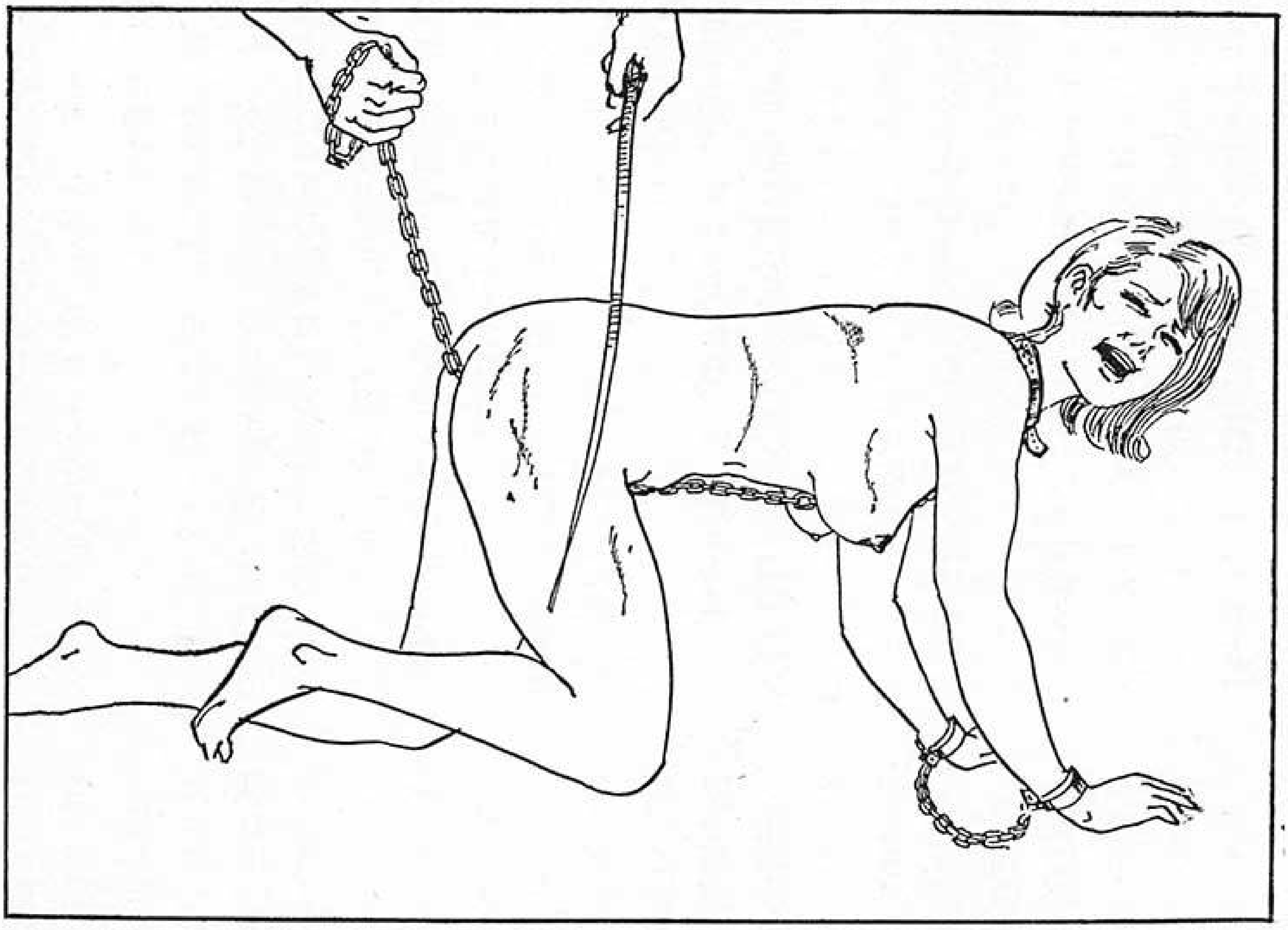
　外も大分まばらになったようだ。私も妻も汗びっしょりだ。額の汗をやさしく拭ってやってから、縛っている紐を解いて、それを抜き取る。二人一緒に一つのボックスに入っているのだから仕方がない。

　妻はその姿で、どうっと排便する。

　汚れぬようにスカートだけ持ち上げていた私は、やりようによっては、スカートを離しても汚さずに済むと判断し、妻の顔をこづいて、それを知らせる。

「そんなこと、出来ないわ」と、かぶりを振る妻にかまわずスカートを離すと、出来ぬと言っていたくせに、妻は一杯に股を開き、足を両側のドアと壁に届く位にし、上半身を倒して胸を前に押しつけている。

　膝が今にも下につきそうに、ガクッガクッ



イメージギャラリー……『鎖』……須坂　旭

としている。微かに尻を上下しながら、徐々に便を噴き出している。その上に腰をおろしたくなり、背に素足をかけてみた。股が、すうっとひろがって、尻が落ちる……。

これは鍛えようによっては、腰を掛けられるようになるかもしれないと思いながらも、それ位で許してやって後始末をしてやる。

可憐にも妻は、すすり泣いている。すずしい、まつ毛は涙に濡れていた。

妻の腕の縛しめを解き終えると、隣のボックスへ婦人が勢いよく飛び込んできた。引き続いて起こる派手なB音とP音の連続。五分もそれが続いた頃、妻は、くすくすと笑って、私の耳に口を寄せて囁いた。

「あの音はね、きっと、あれの始末をしているのよ」

聞いていた私に、（あれ）という言葉が強く耳に残った。思うに、この婦人は女性の排泄を全部、同時にやったらしい。流石に我が女房、よくその微妙な違いを聞き分けて教えてくれたものである。本当に飼育の、し甲斐があったというものだ。急に可愛いくなって、熱い口づけを交わす。

ブラジャーとパンティは、くるんで妻のハンドバッグへ、アンネは汚物入れに捨てた。

妻は初めて、身につけるパンティのない事に気づいたらしく、（どうしよう？）という風に、私を顧っている。（お前が最初に声を挙げて、私のキモを冷やした罰だよ）我ながら、立派だと思えるほど、冷ややかに言うことが出来た。

直径三十センチ程の輪を二重にし、スリップの下から首にかけ、胸から股間を通して背へ回し、後の輪へ括りつけてみたが、何かもう一つ物足りない。荷造りするように、そのタテの紐に絡ませて引き締めながら、横の線を乳房の上下に入れてみると、乳房がくびれて、いい感じである。

一息ついて、ポケットに手を入れてみるとコイルがあった。これはいい具合だとばかり妻の突きだした乳首を、出来るだけ引つぱっておいて括り合わせた。妻は顔をしかめてい

る。胸にばかり集中して全体の調和がとれないものだから、骨盤の上を二巻きし、その左右から股間を通して後の輪にゆわえる。

　スリップを下ろしスカートを上げ、ボタンを、はめてやる。

　黒い髪に黒い服、黒いスカート、黒いストッキング、黒い靴、手袋も黒。唯、黒い服の胸に白いバラの刺繍があるだけ。勿論、私の用いた紐も黒である。（但しパンティだけは常に、純白のを使用し、ピンクなどの色物は一切、使用したことがない）

　次の切りの上映が始まったらしく、足音はと絶えている。じっと耳をすましてみるが何も聞こえてこない。

「どうだ、もうそろそろ、いいだろう」

　小さく妻に声をかけて促してみるが、パンティをつけていないのが余程、羞かしいらしく尻込みをしている。私が先に出て、もし人がいたら大変である。この時ばかりは妻に主導権があった。

　おずおずと扉を開けて出て行った妻は中々帰ってこない。じっとボックスで一人、待っている私は、だんだんと不安になってくる。やっと速足で戻ってきた妻が、「大丈夫よ」と合図する。

　外へ出ると、妻には目もくれず一目散に洗面所へ駈け込んで、フゥーッと大きく溜息をつき、腕をぐるぐると回してみる。妻も、あちらで顔を直している。

　僅か間中（まなか）四方のボックスの中で、外界とはたった一枚のドアで仕切られた密室の中での戯れは、今にも人目につきそうで、つかず、そのスリルは、激しく、妖しく私の心を刺戟した。妻も恐らく、この異様な興奮に浸っている事だろう。

　時々尻を左右に振り、胸をくねらせて、ゆっくりと歩く妻の姿……。いつになく、私に身を寄せて、腕にすがりつくようにしている妻。この妻を一皮むけば、その縄で縛られた姿を満座の中に晒さねばならないのだ。

　私の手を引いては時々、立ちどまる。動くたびに、じりじりと加わってくる縄の刺戟に耐えきれないであろう。

　徐々に妻の顔に紅がさし、目がうっとりとして顔の表情も恍惚としてくる。人の行き交う雑踏の中で歓喜と困惑の表情をあらわすのが羞かしいらしく、歩調は乱れて次第に、ゆるくなってくる。

　私は追いたてるように妻を、せかした。必死になって耐えている妻を伴って、やっとのことで郊外の家に帰ってきた。

　玄関をくぐるや否や、「あなたッ」と叫んで、妻は私の腕にしがみついたまま、動かなくなってしまった。

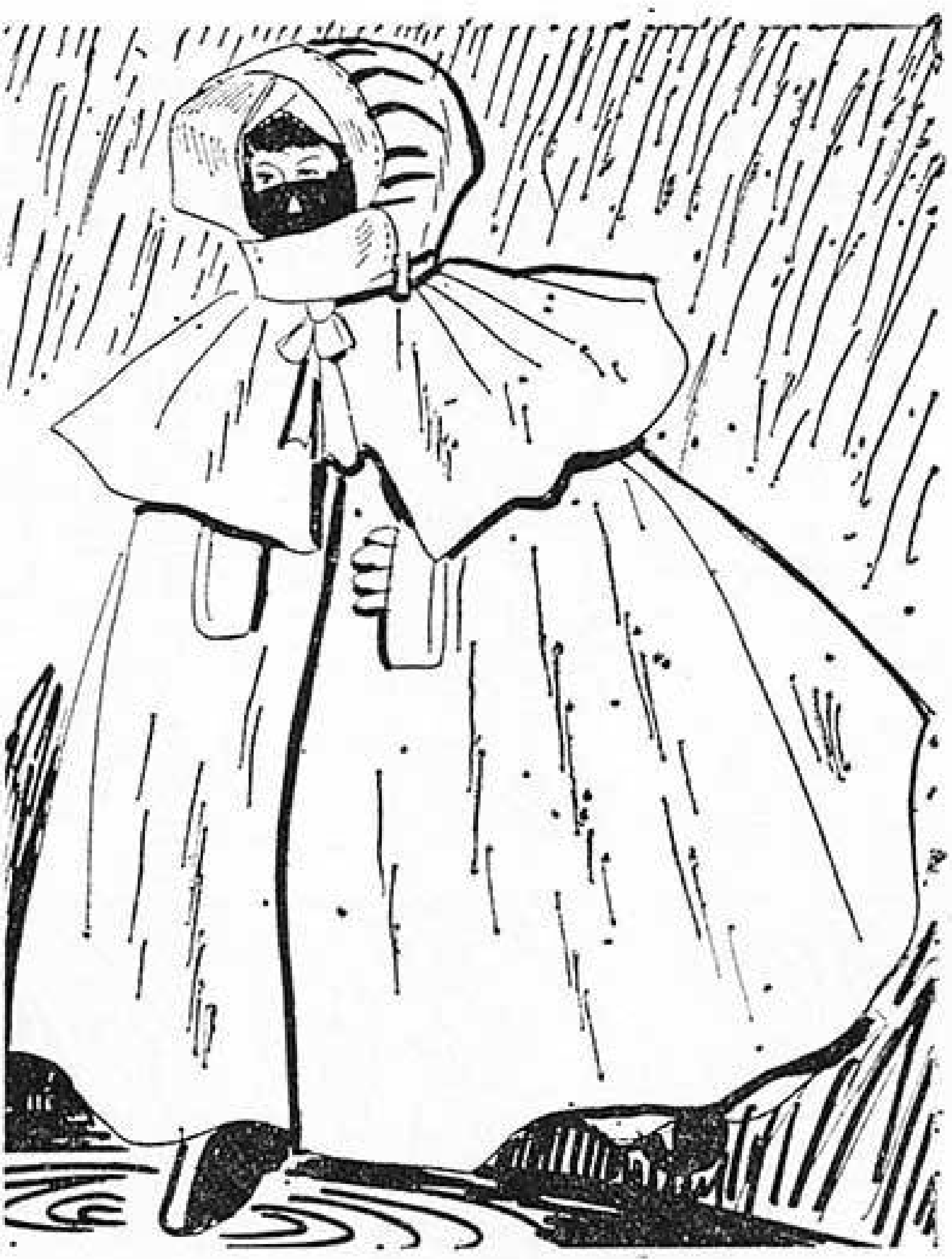
　一度だけでは不満足なのか、その夜の妻の要求は今までになく激しかった。

　結婚当初の妻は、SMについては全く関心がなく、只私の言うこと為すことに素直に従っているといった風だったが、結婚二周年を迎える此の頃では、相当SMに理解を持ち、むしろ積極的にさえなってきた。奇クを見せたところ、「貴方と二人だけのプレイじゃなくて、第三者の人がいたら面白いわねえ」とさえ言い出すようになった。

　夫婦プレイを実践しておられる方、例えば渡部ご夫妻とか、三浦ご夫妻とかいった方々或はS傾向の男性の方を混じえて、複数のSMプレイを実施したら楽しいと思う。

　妻は寝物語の中でも、しきりとそうした話をしたがり「一度、貴方以外の男性の手で縛られてみたいわ」などと言ったりして、私をやきもきさせている。子供が生まれるまで、是非そうした会合を持ちたいものだと思っている。

――（おわり）――



〈告白〉

悩ましいゴムマント・プレイの手記

── 文と絵 ──

梅川幸子

私がゴムマントに対して、あくことのない執着を持っていますことは、今まで幾度となく発表させて頂きましたが、今日は特別に変わった私の『ゴムマント・プレイ』の一つを告白させて頂こうと思います。

私はついさっきから、はめていたオレンジ色のゴム手袋をぬぎすてると、いそいそとタンスからゴム衣裳をとりだし、身仕度にとりかかります。まず、私のひそかな悩ましい欲望を満たすときの服装にかかります。

真紅の艶々しさを見せる婦人用ゴム引レインコートの上から、黒い男物の総ゴム合羽、そして黒い男物ゴムマントを着るというのが私の基本スタイルなのです。

このゴム合羽は、表が黒、裏が茶色の総ゴム製のボッテリしたもので、かなり重く、しかも、漁師の人が着る水産用に作られたもので、フードも格別大きく顔をかくすマスクが二つのボタンでとめるようになっており、袖口には茶色いアメゴムで手首を固く締めつけ水が入らないようになっているものです。おまけに一着だけは特大サイズの一メートル二十五センチという、お化けのように大きなもので、私がこれを着ると、どんな姿になるか皆さん想像して下さいませ。

固く締めつけた腰の幅広いベルトを境に、ウエストが、ぼってり盛り上がり、引きずるような裾はゴム長のつま先もかくれるようでそれに袖も、まるでエプロンのように、ふくれ、フードから、眼がやっと、のぞいているといった有様です。更に両手には、肩まで届くゴム手袋をはめ、両方をゴムひもでゆわえて、脱げ落ちないよう、首のうしろに掛けてぶらさげます。

この上から、やはり特大（着丈一メートル二十五センチ）の男物のゴムマントを、すっぽり羽織り、フードのベルトをしめ、きちんとボタンをはめて出来上がりです。

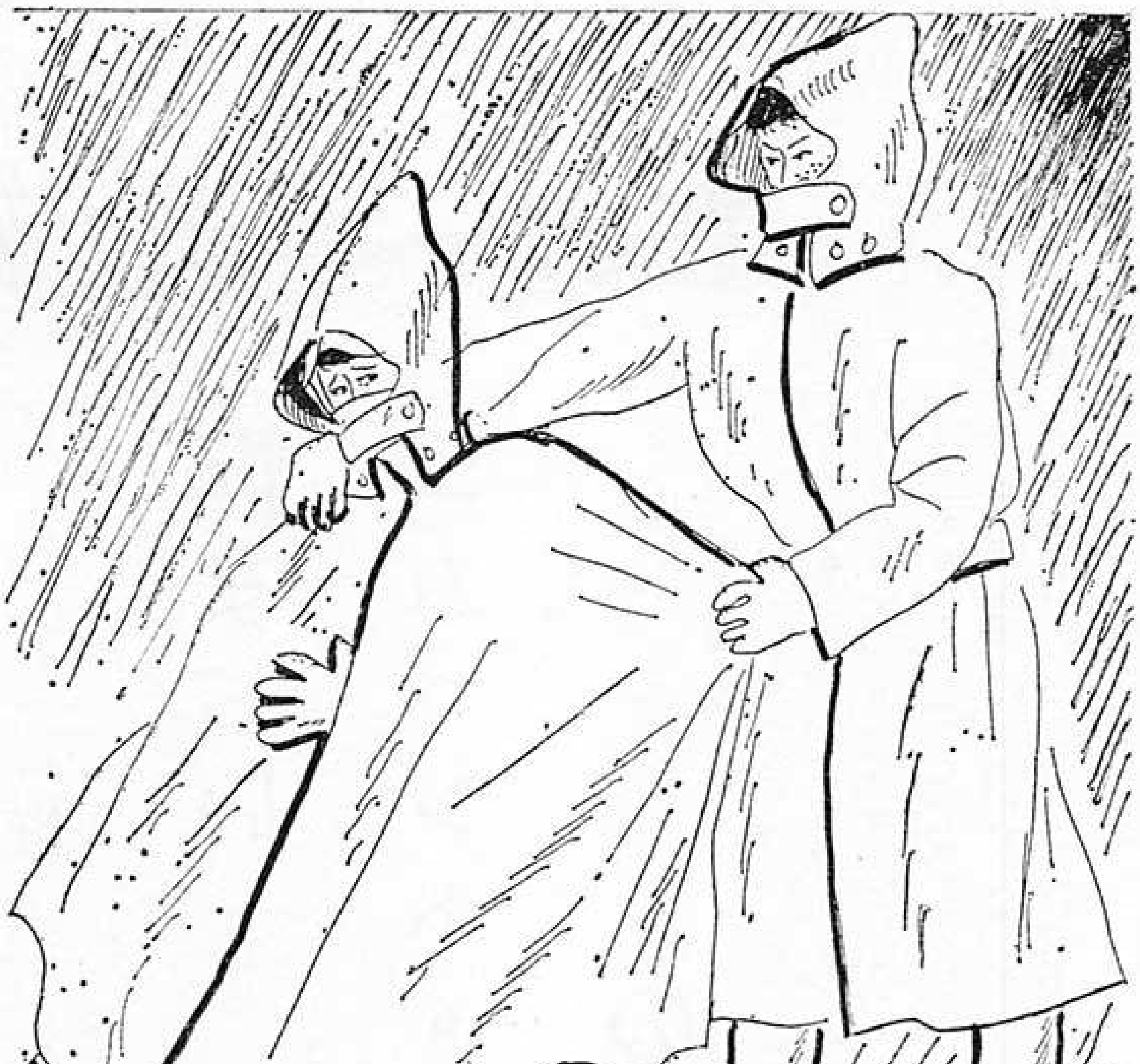
女性のマントスタイルは、外国映画に出てくるお姫様や女王様、尼さんなど、いろいろございますが、皆さんは、どうお考えになりますか。私は、いかにも女らしいスタイルは引きずるようなマントにくるまった姿が最高と思うのですけれども。

ガサガサ、ゴワゴワと動けば音のするゴム

装束に身を固めた私は三面鏡の前に向かいアヌス責めを同時に楽しむ準備にとりかかりました。用います責具を説明しますと、なるべく太い心持ち反り気味のキュウリ一本を用意して、それにコンドームをかぶせ、肥後ずいきを巻きつけます。肥後ずいきの効用は、好事家の方なら、すでにご存知のことと思いますが、水分を含みますと膨張して太くなり、おまけに強烈な痒みを生じますので、女性を泣かせる責具として知られています。

今まではゴムの手袋の指先をクリームでまぶして使っていましたが、先日思いきって大人のおもちゃコーナーで求めた肥後ずいきを使ってみましたところ、えもいわれない快美感で、それからは肥後ずいきの虜になってしまいました。アヌス責め用としては、ウィスキーの角瓶、サントリーレッドの大瓶が適当で、なるべくビンの底面積の広いものが安定がよろしいです。

さて、お化粧をするとき坐る小さな椅子の真中に角ビンを置き、その上から椅子全体をかくすように裾をひろげて中腰になります。鏡を見ますとゴムマント姿の私が中腰になってゴムマントの裾を畳に引きずらせています。動くたびに、ゴムマントがガサガサと前後に揺れているところを見ますと、私は何かしているようです。



ゴム衣裳をまとっただけで、もう身体中が燃えあがるように感ずる私ですが、それだけではあき足りなくて、角ビンとキュウリが責具として、それに加わっているのです。私は汗びっしょりになりながら、マスクの下であらぬ聞くにたえないたわごとを口走り、ゴムマントを前後左右にうちふるわせ、身も心も天国に遊びながら、快楽の深い深い淵に沈んでゆきました。

激情のひとときが終わると、急にぐったりとなり、畳の上に、横臥します。気がつくと全身、汗びっしょり。素肌にまとったゴム引きレインコートは、ベトベトにまつわりつきその上に着た総ゴム合羽は、汗とゴムの臭いにむせかえるようです。ゴム長にも、ゴム手袋の中にも汗がぬるぬるとたまり、マスクのゴム生地には顔と唾液と涙が、いっしょになって濡らしています。

それから次は浣腸プレイです。ゴムマント・スタイルのまま、トイレ（洋式）に入り便器にまたがり、浣腸プレイに耽溺しました。これが終わるとお風呂へ行きシャワーの下に立ってシャワーを浴びました。ゴムマントを打つ強い水の音、とめどなくしたたり落ちるしずく。ゴムマントはテカテカと光り、やがて水がしみ込んで重く肩にのしかかり、裏地まで濡れて雑巾のようになってゴム合羽を、べっとり肌にまつわりつかせました。

ああ、ゴムマントにくるまったまま、いつまでも雨に打たれていたい——。この楽しみは今更くどくど申し上げるほどでもないでしょう。このシャワープレイが終わると今度は

入浴です。適度にわいたお湯の中に、ザバザバと入り体を沈めました。太股のツケ根まで届くゴム長をはいた足をお湯が浸し、ゴム長にお湯が流れ込み、腰、胸、と次第にお湯につかってゆくのです。

　ゴムマントを着てお湯（あるいは水中）に入るとき、ゴムマントが、まるで落下傘が開いたように水面に出て拡がり、なかなか沈みませんが、中から、しっかり体に巻きつけて静かに体を沈めますとラクに首までつかる事が出来ます。口にお湯が入るスレスレのところまで、お湯に浸った私は、またお湯の中でゴム手袋の指先を器用に動かします。やがて襲ってくる快感は、私を身もだえさせ、お湯を波立たせます。うっとりと私は目をとじ、夢うつつになりました。

　あれは、丁度、二年前のことでした。

　むしむしとする暑さにこたえられない梅雨の頃でした。身体の内から湧き上がってくる欲望にたえきれなくなった私は今のように婦人用ゴム引きレインコートをまとい、その上から男物ゴム合羽を着て、更に男物ゴムマントにくるまり、両手にはゴム手袋、両足にはゴム長をはき、ゴム生地のマスクをして外に出ました。

　ゴムマントを打つ雨の音と汗びっしょりの体を楽しみながら、背高い草むらをかき分けて小川に入り、ザブザブと音をたてて流れに体を浸しました。川の真中の一番深いところ（立って首が出る程度）のところに立ちはだかって水中ダンスをしたり、わざとブクブクと沈んで流されてみたり〈水中に躍るゴムマントプレイ〉を楽しみ、水から上がり帰ろうとしたときでした。いきなり暗がりの中から

「オイ、ネエちゃん、なにしてるんや」

　という太い男の声がしました。私がびっくりして、ふりかえりますと、川上でダム工事をしている飯場の土工でしょうか、私と同じ黒い総ゴム合羽に、同じゴム長をはいて立っています。私は身の凍るような恐怖と、今の秘密プレイを見られたという恥かしさで、思わず逃げようとしましたが、身体の自由がききません。ゴムマントの裾を踏みつけて、ころんでしまいました。男は近寄ってきて、

「ネエちゃん、面白いことするのが好きなんやな。ひとに見られたら困るんとちがうか。誰にも言えへん。黙っとってやるさかい、そのかわり、わいの言う通りならんかい」

　そう言って男は、草むらにころがっている私に近づき、荒々しく私のゴムマントのフードを脱がせて顔を近づけ、むさぼるように唇を吸いました。私はふりほどこうとしましたが水に濡れたゴムマントをまとっているので「ムムムムッ」と、もがくだけで、口中いっぱい、ぬるぬるした舌を押し込まれてしまいました。雨は、まだ盛んに降っています。

　私は全身の力が抜けきって、ぐったりとしていました。男は私を草むらに、うつぶせに寝かせゴムマントの裾をまくりあげようとしました。次に何が起こるかと考えると、

「それだけはイヤ、イヤ、カンニンして」

　私は、あわてて寝がえりを打とうとしましたが、力強い男の手は小柄な私を片手でひっくり返し、自分も合羽の裾をからげてズボンをおろし、汗くさい身体を、おおいかぶさるように私に近づけてきました。

　屈辱と快感の交錯……。

　筆舌につくしがたい数分間でした。

　ゴム装束の男女が、深夜の雨の中の草むらの中で交わる――。なんと、奇妙な光景でしょうか。私にとっては、名も住所も、年令さえもわからない、見ず知らずの男でした。

　お湯の中で追憶に浸っていた私は、夢から目がさめると、着ていたものを全部、脱ぎすてて乾いた布で身体中を拭き、それからズラリとゴム衣裳をぶら下げて乾かしました。

　読者の皆さん、特に女性の方でゴム雨具、ゴムマントに興味をお持ちの方は、是非とも告白を発表して下さいませ。私も次には、ゴム装束を着れるだけ着た泥沼の中での『泥責めプレイ』のことを書きたいと思っておりますので、その節はよろしく。

――（おわり）――

連載・時代S小説

暴虐の責め手　翻弄の魔手十本
のたうつ裸身を見詰めるは想い人
これ女にとりて無上の快楽ならずや

紫蘭の門

(12)

風流極道軒

―― カット・岡　たかし ――

天津乙女

江戸城白書院の間で、勅使の役目を無事終えた押小路中納言高明と副使葉室邦行は、小石川の老中領田下野の中屋敷で山海の珍味をまえにして、どこから箸をつけたらよいのか途まどっていた。

今度の勅使は、恒例のそれとは、いささか異なったおもむきの含みをもっていた。と云うのは、一昨年来の大飢饉について「天下万民飢渇のとき、よろしく政事をとり行なわれたい」との一行が、綸旨のなかにつけ加えられていたのだ。

いつものような、もんきり型できまりきった綸旨にくらべて、これは全く異例の御沙汰であった。

が――

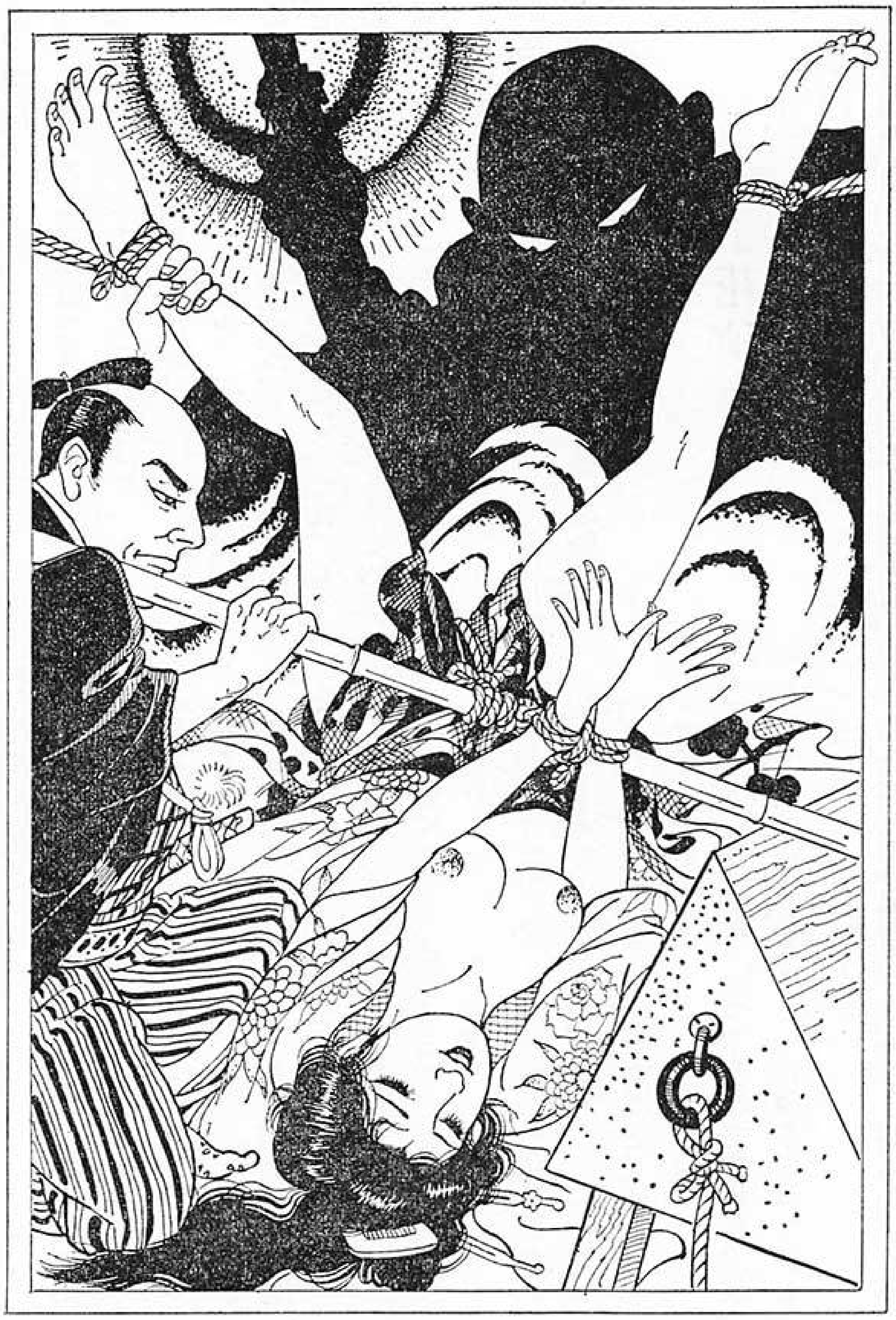
天下を治めることすでに四十七年。世情人心に対する敏感な反応も、政治に対する新鮮な魅力も失って、天下破ラバ破レヨ、世間ハ滅ババ滅ビヨ、人ハトモアレ我ガサエ富貴ナラバという心境におちいっている家斉にとっては、その異例の綸旨も何の痛痒をも感じさせるものではなかった。側妾すでに百十二人。つい先月五十一人目の娘を、その中の一人に妊ませて諸大名の祝福をうけたばかりではないのか。

前号まで――豊太閤五夜のロザリオをめぐって、江戸の豪商元禄屋の手に陥ちている菊亭貴子には、忘れられぬ人がいた。**押小路中納言高明**。貴子の侍女久我**雅子**にも、**葉室邦行**というニクい男がいた。この二人が勅使として江戸に下向してくることを知った元禄屋は、その眼前で、貴子と雅子を責め嬲ろうとたくらんでいる。

さて――、

東北各地で人肉を喰い合う修羅地獄が展開されている反面、鎖国中の日本の沿岸へ、しばしば異国人が姿を見せていた。北からオロシャ人、東からアメリカ人、九州をはじめ南国各地にはエゲレス人が上陸し、薪や水を求め牛を殺して喰い女に乱暴狼藉を働く。まさしく内憂外患こもごも至るという国情の天保三年夏六月。

さすがに、将軍のお膝元の大江戸だけは、伝馬町山王祭りも盛大にその幕を閉じ、町々



には、素焼の鉢に、紅白、るり、しぼり、浅黄と色とりどりの大輪の花を咲かせた朝顔売りが「朝顔ェ！　アサガオッ」と、のどかな声をひびかせていた。

「中納言殿。こよいは、ちと珍しいものをお目にかけようと存じ、格別の趣向をこらしての用意を整えてござれば、存分にお楽しみ下されい」

勅使の役がすめば、ただの貧乏公卿。老中領田下野は、眼のまえに所せましと並べられた切台盤の大皿小皿へ、おろおろしながら見よう見まねで箸をつけている押小路中納言にぞんざいな口調でよびかけると、

「葉室殿は、蔵宿をつとめておりまする利倉屋庄右衛門が別に引出物をさしあげたいと張りきっておりまするゆえ、小梅のほうへ案内申しあげまする」

「私に引出物を……」

「いかにも。特別この上なき引出物でござっての。例年の勅使殿には、さらさらお目にかけなかったものゆえ、十分に賞味あそばされるようにとの伝言でござる」

自分たちだけが特別の饗応をうける——あわててのみくだしたあつものが、のどにつかえて葉室が目を白黒させた。

引出物とは何か、二人が別々に饗応をうけるのはなぜか——わからぬまま、日頃、口にしたこともない極上の酒に酔って、いくらか元気づいた二人は、あとはもう、前後の見さかいもなく次々と珍味を、たらふくむさぼりつづけるのであった。

やがて、江戸の町に夕のとばりがおりようとする酉の刻、思いもかけぬ厚遇に興奮した面持ちの葉室を、早駕篭で小梅へとおくり出した領田は、

「では、高明殿。あとは、この男どもが差配いたしてくれるでござろう。お気楽にお過ごしなされますように……」

ニタッと笑って、合図と同時に進み出てき

た、ひぐまのように手の甲にまで毛の生えている大男を、追剝の美女衛門と紹介すると、先頭に立って部屋をでる。

　長い廊下をすぎ、銅張りの扉が押し開かれると、なかは闇。いくつかの階段を手燭をたよりにおりながら高明は、ここが牢獄らしいということを知ると、肌に粟だつものをおぼえ、つい、

「老中殿。ここは牢獄ではないのか！　なにゆえに、このようなところへ……」

　と、おびえた声をあげた。

「まさしく牢獄。されど、そのおくには、この上なく美しい天津乙女が、勅使殿のお越しを待っておりましょうぞ。それ、それ、もう始まっておりますわい、天津乙女（あまつおとめ）への責め折檻がのう」

　女のひくい悲鳴と幾人もの男たちの野卑な叫びがきこえ、行手に、あかあかと照らし出された牢格子が見える。一瞬、高明の胸を黒くよぎる影があった。

貴子花ひらく

　はじめ、高明の眼にうつったのは、十人をこえる男たち――。牢のまえ、俗に外鞘とよばれるサヤ（格子）のそとの五間に三間ほどの土間に、円形に畳が敷かれ、その上で、武士、商人、やくざ風の男たちが、てんでに酒をのんでいた。その円陣のまんなかに、荒筵が二枚――女がいた。七尺近い黒髪におおわれた背を見せて、腰から下を目もさめるような緋色の湯文字にくるんで、がっくりと首うなだれている。

　なにかをいいたげな高明を、目顔で制した領田は、どっかと腰をおろすと脇息により、そばに高明を坐らせて、浮らな笑いをうかべながら盃をさした。

　落着けぬ気持をまぎらそうと、ぐうーっとその盃をうけて返す。と、

「ど、どのようにでもなされて下さいませ、どのようになりと種彦さま」

　高明の耳にせまる女の声――。

「どのようにでも――ではわからぬではないか、はっきりと申されい、姫」

「またここでも、あのようなことを口にせねばなりませぬのか」

「もちろんですよ。いつ、どこでなりと、私たちの要求するときにおっしゃるのが、姫のつとめ」

　為永種彦の言葉に、はらりと頬にかかる黒髪をはらいあげた女は、しずかに、ふっくらした双つの腕を背中に回して交差させると、

「どうか、妾をお縛りになって下さいませ。そして思うがままに、お、お嬲りを……」

　その声に、ききおぼえが、たしかにある！

　ひとひざ、のりだした高明の不審気な、おももちを、ジロッと眺めた領田の鉤鼻が心地よげに、ひくひくと蠢く。

「もそっと、顔をあげて、胸をはって！」

　種彦の命ずるままに、右膝をたて上半身をもたげた女の横顔！

「貴……」

　高明の手から盃が、ポトッと落ちる。

「貴……」

（貴子姫！　貴子……ど、どうして、こ、このような！）

　雷にでもうたれたような衝撃を、必死で、こぶしをにぎり、膝を震わせて忍ぶ高明。

　叫び声をたててはならなかった。もし、貴子！　と叫べば、十数人の客たちの注目をあびる。このような場所で、従三位中納言高明ともあろうものが、ましてや、勅使ともあろう身が、はしたない真似をしてはならない。

　貴子ではない、貴子であるはずがない。いや、どうか貴子ではありませんように！

祈るように見つめる高明の眼の前で、美男の槍助と獄門の牢助が、女谷流六角の縄目をたけなす黒髪をかきわけながら犇々と燦めくような裸身にほどこして行く。

　ほとんど反抗らしいそぶりも見せず縄目をうけおわった女が、

「み、みなさまがた。ど、どうかお躰改めをなさって下さいませ、貴子の躰のすみずみまで、どうぞお調べになって下さいませ」

　瞬間！　高明の唇が、わなないた。

　貴子にまぎれもない！　三年前まで自分の妻であった女！　愛し愛されながら子なきがゆえに心ならずも離縁した妻……それ以後、高明は、まだ正式の妻をめとってはいなかった。

　その妻が、眼前で、多くの男たちの嬲りものにされている！

　救いにとびだすか、やめろっ！　と大声で叫ぶか、それとも黙って、勅使の身分を考えて、そしらぬ振りを、しとおすか――。

（もしや、老中たちは、貴子が自分のかつての妻であることを知りながら、ここへひきだしてきたのではなかろうか……）

　ふり向いた高明の疑惑の視線を、がっちりとうけとめた領田は、

「天津乙女とは申したが、実は、すでに人妻でござっての」

「な、なんと！」

「それ、あそこにおる男、公儀金銀為替御用をつとめる元禄屋の御内儀でござる。勅使殿をお慰め申すために自分の女房を、ほれこのようにさし出しましたわ。ハッハッハ」

　高明の血走った眼が、領田の指さした七尺ちかい巨漢に、そそがれる。

（こ、これが、元禄屋か。日本で一、二を争う豪商。禁裏をはじめ摂関家や公卿たちに、ここ一年あまりに亘り、しばしば金銀米穀を献上し何事かを企んでいる男。そして、貴子のほかならぬ現在の夫！）

　貴子の周りにすすみでた三人の男が、丈なす黒髪をかきあげてお躰改めに興じ始めた。が、領田の言いはなったとおり、三年前はともあれ、現在は、人の妻――。

「由緒正しき高貴の家の生まれで、さる公卿に輿入れしたが、子なきがゆえに離縁されたとか。この天女のような女を手離すとは、よほど、たわけた男でござることよのう、ハッハッハッ……押小路殿」

「な、なんと申さるる！」

　声を、たかぶらせる高明に、

「おや、いかがなされた。押小路殿には貴子の前夫を、ご存知か。ご存知なら京へ戻られてお伝えあれい。こどもの生まれないのは男のせいであろうに、それを女のせいにして離縁するとは日本一の大たわけ者よ、とのう」

　再びあがる高笑いに、憤怒とも、失望ともつかぬ衝動に駆られて高明が、思わずたちあがった。と、

「勅使殿には、私の家内に、ご不満でもあられてか！」

　元禄屋の太い声が、部屋中に響いた途端、種彦たちの思うがままにされていた貴子の眸が、ハッとみひらかれる。

　なぶられつづけていた貴子は、新しく入ってきた二人の男が誰であるのか、今まで気付いてはいなかった。それが領田の高笑いと元禄屋の声で、いま、はっきりと知る！

　客は、まぎれもない押小路中納言高明！

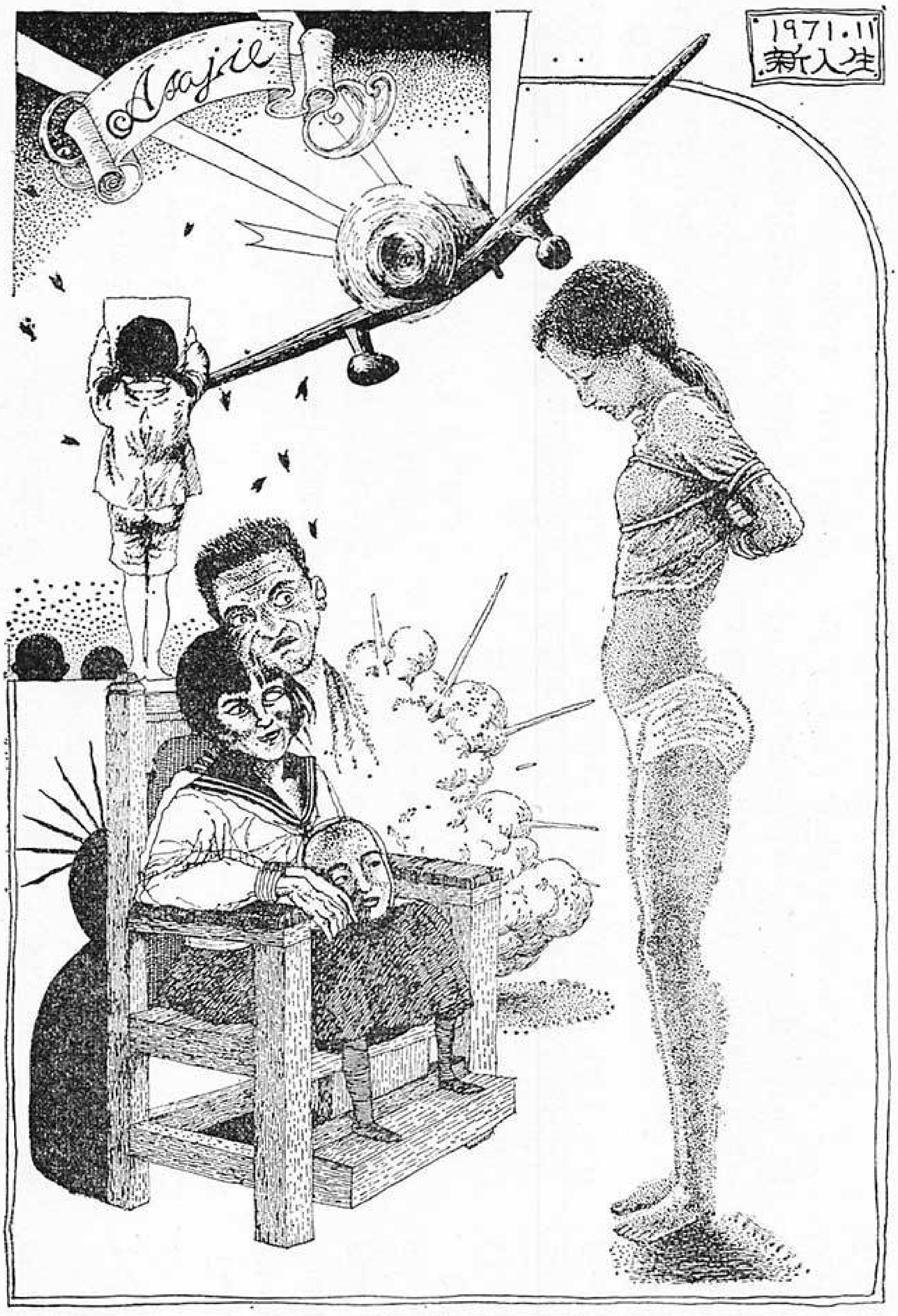
「あ、あ、あ……」

（あなた！）と叫ぼうとするのを貴子は必死で耐えた。なぜ耐えたのか、貴子にも、はっきりとは、わからなかった。あれほど愛し続けてきた夫が眼の前にいる。それだのに何故！　自分を恥じての事か。それとも、このように惨めな女が、勅使のかつての妻であった

僕のイメージ画集

『滑川那津子さんに想う』

室井　亜砂路



ことを一同の前にさらけ出すことは、高明の恥になると、とっさに判断したのか——ともかくも貴子は、五体を激しく痙攣させて高明への呼びかけを咽喉のおくで押し殺す。

高明も、また、耐えた。

ここで、やめろ！　と叫んで貴子を救出することができるだろうか。否、否！　まずは不可能。もしそれができたとしても現在は、れっきとした元禄屋の妻。どうしようもない。

なれば、徒らに呼びかけても何になる。ただ並みいる男たちの好奇の視線にさらされるだけのことではないのか。

たち去るのが一番よかった。だが

「勅使殿への私の寸志、おうけいただけませぬのかな」

と元禄屋においうちをかけられては、立ちさることも、かえって人目をそばだたせる。

いたたまれないままの直衣の裾を領田にひかれた高明は、放心したように坐りこむほかとてはなかった。

ことのなりゆきを興味深く見守っていた種彦は、主客が坐りこむのを見てとると、

「さあさあ、皆さまがた。元禄屋さんのせっかくの御芳志、つづけましょう、つづけましょう。お躰改めはこのくらいにして、いよいよこのお湯文字をぬがせましょう」

貴子の顔が、白蝋のように白くなる。

（出ていって下さりませ！　高明さま。これからの、妾のあわれな姿をごらんになるなんて、あ、あまりにも……むごい……）

　骨と肉をバラバラにきりきざまれるような苦悶のなかで、情容赦なくことはすすむ。

　湯文字をはぎとるために種彦や笠倉屋たちが、浮世絵師鳥尾芳年の意見を入れて、貴子を、女がいちばん恥かしがる姿態に縛りなおしはじめたのである。槍助がたんぽ槍を二本交差させて両肩へ、丁度、前面でXになるように固定すると、種彦と牢助が貴子の両膝を立てて、その膝を槍の柄にしっかりと縛りつける。

（恥かしい！　死、死んでしまいたい！）

　江戸にきて以来、数々の責め苦をうけたものの、いまの心境に較べれば、ものの数ではなかった。

「ア！　ア……お、お止めくださりませ！」

　肺腑から、しぼり出すような貴子の訴えをききながら領田は、ほくそ笑む。

（女は、愛する男のまえで責め嬲るに限るか……フッフッフ、元禄屋め、よいことを申すわ）

　どこを眺めているのか、うつろに眼をひらき両膝をガクガクさせている押小路をチラチラッと盗み見しながら、この上ない愉悦に浸る領田下野であった。

「アッ！　た、たねひこさま。ほんとにお許し下さりませッ！」

　種彦が緋の湯文字をはずしにかかると、貴子の必死の反抗を示すかのように白絹のその紐は、なかなか解けそうにもない。

「ハッハッハ……。こうしますじゃ」

　よこから、にじり出た美女衛門。馬を逆剝ぎにするほどの腕力でプツンと、こともなげにその紐をたちきると、

「御開帳、御開帳！」

　とひぐまのように吼えて、緋色の湯文字を大きく空へと投げあげる。

　大輪の花のように湯文字が舞いちり、高明は、その瞬間、懐かしい貴子の香り、蘭麝の匂いを確実に鼻にかぐ。

　そして、焦点のあわぬうつろな眼が、貴子の裸身へと向けられるのであった。

　幽かに艶めくその肉体——一糸まとわぬその姿態は、毒蜘蛛の巣にからまる白蘭の花を思わせた。

「女谷流女縄のうち両鎌——大きく開いた双つの鎌のように脚をひろげて、ほれ、このように」

　棒助の手にした六尺棒が、満座の視線を集めて突き出される。

「ア、アッ！　ヒイッ！」

　黒髪を乱してのけぞった貴子は、その一瞬に、高明のまえであることを忘れて、たけなす黒髪の一端を烈しく噛みしめた。が、すぐ我に返って「お、おやめ下さりませ！」と叫んだが、棒助はやめるどころではなかった。

「アッ！　アッ！　アッ！……」

　肉体的苦痛もさりながら、それをうわまわって襲ってくる被虐感が、次第に貴子の脳裡から高明の存在を忘れさせる一瞬一瞬を、つみかさねていく。

　女は、肉体で思考する——。

　棒助の六尺棒の上に槍助のたんぽ槍が加わり、しかも種彦と笠倉屋に両側から、にじりよられて、いたぶられては、貴子のけなげな抵抗も、ながく続くはずがない。

　甘ずっぱい蜂蜜と麝香のかおりを、のけぞらせた咽喉もとや、手や足の指からも匂いださせながら、

「アッ、アッ、アッ！」

　継続的な喘ぎを、乾いた唇から洩らしていた貴子は、遂に、夢見心地で叫んでいた。

「た、た、たかあき、たかあきさまあ！」

その声に、いままで手を出すのをためらっていた勘定奉行肥田若狭と北町奉行所の与力工頭監物の手が、同時にのびる。

「お、お、おやめくださいませ！」

この絶叫が、潮が満ちてくるように襲ってくる被虐の疼きへの、貴子の最後の叫びであった。

あとは、完全に、高明の存在も、十数人の男たちに嬲られている身であることも忘れはてたように貴子は狂ったように吼え始めた。

久我雅子に較べると、はるかにおそいと思われていた被虐反応現象を、貴子がこんなに早くしめすのは、はじめてであり、元禄屋たちが目のあたりにするのも、また初めて。

（女は、愛する男の眼前で責められるとき、尋常一様でない至極の快楽を味わう――元禄屋め、ういことを云いおったわ）

領田は、もうこのあたりでよかろうと、ニヤリッと笑い、元禄屋に合図をおくった。もうこのあたりで抱かせろと云うのである。

が、まだまだというように、元禄屋は首をよこに、ふるだけ。

元禄屋は、この世でこの上ない男の快楽を満喫していたのだ。即ち、女をその愛人の前で嬲りものにするという快楽を！

「次は女谷流女縄黒蝋にかけい。儂の女房だとて遠慮するな、美女衛門！」

元禄屋の命令がとぶと、槍助、棒助が、六尺棒と、たんぽ槍を種彦の手に渡すと、あざやかな手なみで縄を、いったん解いていく。

自分をいましめていた縄をとかれて、自由になった刹那にとった貴子の動作は、尋常の女では決して、とりえない姿態であった。あれほど錯乱の嵐にまきこまれていたにも拘らず反射的とも云える素早さで膝を閉じ、乳房をかくす。

そのいじらしいまでに女らしい動作が、架助と牢助の嗜虐欲に新しい油をそそいだ。

「ウオッ！」

と吼えた二人は、黒い縄をもつと貴子の胸もとを蹴りあげてバランスをくずし、ひっくりかえされた亀のようにバタつかせる手首足首にそれを絡ませ、美女衛門のさし出した脇息のうえに仰向けによこたえると、四肢を縛った四本の黒縄を牢格子に結びつける。

「大」の字――いやむしろ「工」の字形と云おうか。両手を左右一直線にひろげ、白い両脚も、ほとんど真一文字になるくらい、ギリギリと押しひらいていくのであった。

しかも、腰の下には脇息がある。

その一尺高い脇息のうえに、あるかなきかのすすり哭きを洩らしている貴子の体は、領田の云う天津乙女、この世のものでない妖しい美しさに溢れていた。

放心状態から、うつろな焦点の合わない眼差し。そして、いつのまにか愛する女の、あまりの痴態にひきずりこまれた押小路高明のなにか憑かれたような血走った眼が、十幾人の男たちの視線と同じく灼けつくように熱くなっている。

「黒蝋！」と叫んだ美女衛門が、燭台から火を受けたのは、直径一寸五分はあろう、黒くて巨大な裸蝋燭であった。

それを二本、両手ににぎった美女衛門は、青白い焔でことさら、貴子のみやびやかな横顔をてらし出したのち、フワッと最初の一滴を紅真珠のような乳首めがけ、落下させる。

「ヒ、ヒイッ！」

たまぎる悲鳴が牢獄内にひびきわたった。

つづいて右の乳首に一滴、

「キイッ！　ヒ、ヒャアッ！　アッア……」

黒い蝋燭が、さらに貴子の乳房の上で、何度か傾けられ、それにつれて、蒼いまでに白い乳房の谷に、四つ、五つと黒い花が咲く。

「六つ、七つ、八つ……」

　数をかぞえながら美女衛門が、蝋燭を傾けるにつれて、「工」の字型にひらかれた貴子の天女のような裸身が、ピク、ピクッと、岩場に釣りあげられたばかりの新鮮なサクラエビのように躍り、跳ね、蠢く。

　まさに、この世で、このうえないみもの！

　画紙にむかい画筆を走らせつづけている鳥尾芳年のそばから、和蘭わたりの拡大鏡をとりあげた種彦は、ツツウ——と貴子に、にじりよる。

「わ、わしにも」

　よこからその拡大鏡を奪いとった笠倉屋は一瞬、どうしたものかと迷っていたが、すぐレンズのピントを合わせて、ゴクンと生唾を呑みこみ、

「こ、こりゃあ、こりゃ凄え」

　と相手が勘定奉行であることも忘れたように肥田若狭の肩をつつく。

「どれ、どれ」

　もうこうなれば武士のほこりもなにもあったものではない。拡大鏡をうけとった肥田はため息をまじえながら観察していく。

「アッ！　アッ！　ア……」

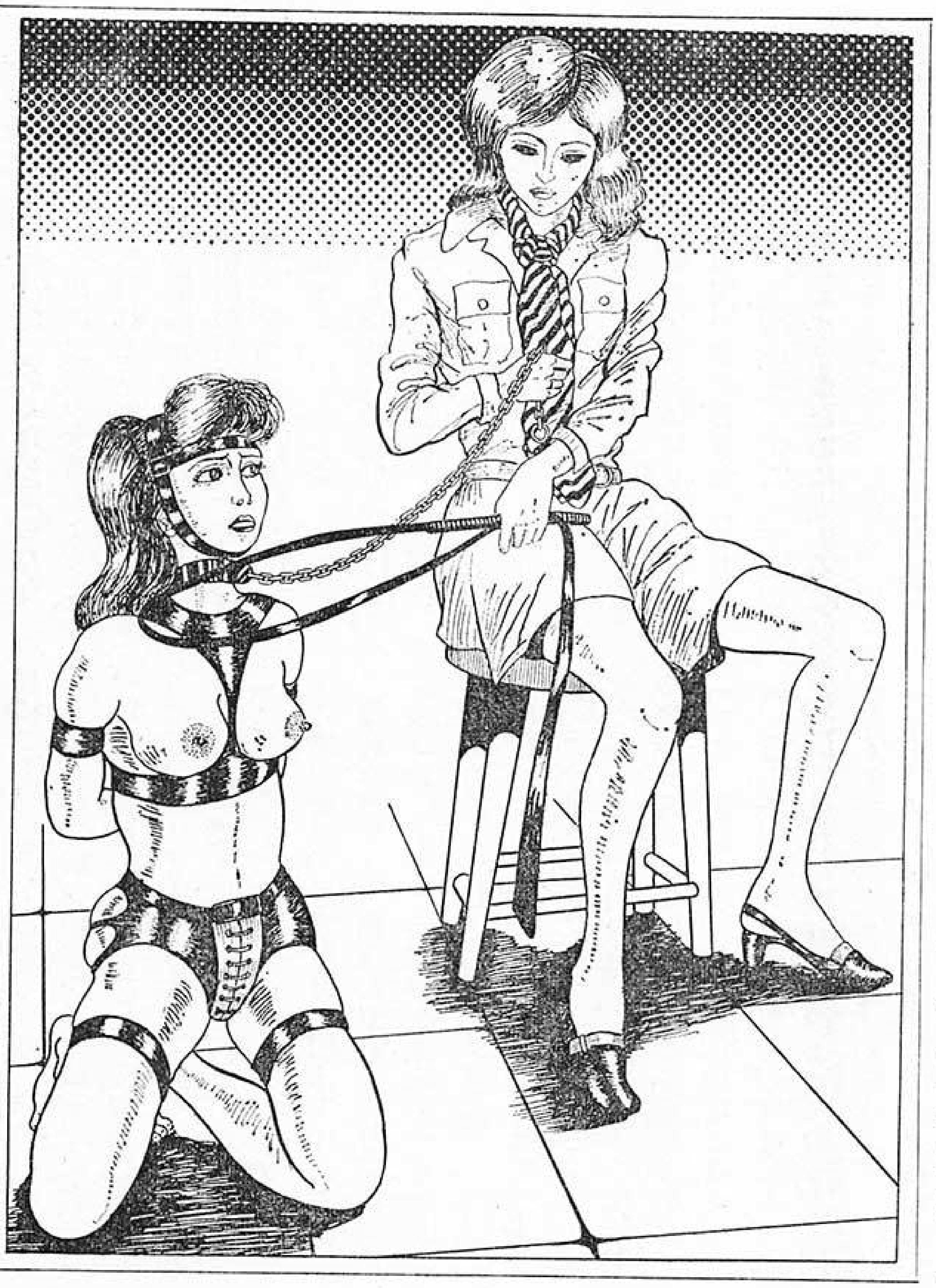
　美女衛門の黒蝋責めは、正確に貴子の肌に黒い花を咲かせつづけ、肥田にかわった工頭が、肥田よりも、さらに執念ぶかい観察を繰り返す。

　その間——、

　槍助たちは、貴子の両手と両膝、それに額の上に、黒い蝋燭をたてていたが、

「女谷流女縄黒蝋の極意！」

　という美女衛門の叫びとともに、いままで



……イメージギャラリー……『レディのペット』……飯田ひろくに……

背後からこの宴を照らしていた、いくつかの燭台が一時に消えた。

　パアッと貴子の裸身だけが暗黒の闇のなかにうかび上がり、それが白木の大弓のようにのけぞったかとおもわれた次の一瞬――

　貴子の胸もとから腹にかけて、ゆっくりと移動していた美女衛門の手にする径一寸五分の二本の黒い蝋燭が、さっと這い下がる。

「キャアアアウ！」

　この世のものとも思われぬ絶叫がほとばしったかと思うと、高々と二本の柱が立ち、青白い双つの焰をひとつにして、こうこうと輝きわたっていたではないか！

「女谷流の極意、とくとみられたか！　二本の蝋燭を、ななめにではなく、よこにでももちろんなく仰向けになった女体に立てる！」

　美女衛門の得意満面の声が響きわたった。

　まさしくこれは、至妙の技。よこにするのならば誰にでもできよう。ななめに立てることもたやすい。が、まっすぐに、しかも、いつまでも、蝋燭の燃えつきるまでたてておくことは至難のわざ。

　拡大鏡でそのわざを見抜くことも忘れたように男たち、まんじりともしないで、貴子の天女のような裸身を照らす七本の黒い蝋燭を息をつめて、みつめているだけであった。

　くらやみのなか、ひときわ、貴子の香りが鼻につく。

　ふくよかな匂いのなかに気品を湛えた、その蘭麝の香りを吸いながら、その香りに男たちが、ただ、ぼんやりとしているなかで、元禄屋の声が凛として、ひびいた。

「老中領田さま。もう、よろしかろう。ここらで儂が女房、思う存分、慰んで下されい」

　蘭麝の香りは、蘭花と麝香の入りまじった得難い匂い――その匂いを産毛の一筋一筋から発散させる女は、何千万人のなかに一人。

　はじめは、豊太閤五夜のロザリオのうち丙夜のロザリオを手に入れるため、誘いよせた女であったが、元禄屋、この頃、とみに、菊亭貴子に五人の妾以上の関心を示していた。

「さあ、領田さま。誰にご遠慮なさるでもない、儂の女房でござる。思うがままになされませい。ほれ、ほれ、あのように貴子も、嬲られるのを待っておりますわい」

　もう、押小路中納言高明のでる幕はおろか座して待つ場所とてもない。

　元禄屋の勝ち誇った声と、これみよがしに仙台平の袴をぬぐ領田を、激しい焦立たしさと自己嫌悪のなかでみとめた高明が、絶望とも憤激ともつかぬ思いで、たちあがる。

　と、元禄屋の精悍な叫び――。

「京への、よい土産話にもなりましょうぞ、勅使殿。よおく、人生一度のこの快楽を味わわれるがおよろしかろう。自分の愛している女が、よその男の嬲りものになるのを眺めるという快楽。これは、またとない、えがたいものでござるでのう。ハッハッハッハハ……のう、押小路中納言高明殿！」

　高明の心の底を見抜いた元禄屋の言葉に、よろよろっとたち上がった高明は、そのまま直衣の裾を乱して坐りこむと、三年前まで我が妻であり、いまもなお愛している貴子が、醜い鉤鼻の男に、嬲り抜かれて呻きを洩らすのを、ただだまって見守るほかとてはなかった。

　種彦の大きな、ため息が何度か洩れる。

　すぐそばで絵筆をうごかせている芳年までが筆をとめ、眼を絵皿のように、みひらいて息をのむ小半刻――。

　十幾人もの男たちに眺められているのも意に介しないように、縛られている手足をもどかしげに踏んばって貴子は、領田の思うがままに翻弄され、歯を喰いしばり、嗚咽し、すすり泣き、はては号泣するのであった。

「老中さま、いかがでござりましたか」

「絶妙じゃ、まことに絶品。元禄屋、今宵ほど満足したことはないわ……」

　いまにもつかみかかりそうな気合を見せながら、じいっと見守っている高明の失望と屈辱のいりまじった端正な顔をニタッと蝋燭のあかりのなかで、みやった領田は、

「元禄屋、そちの番じゃ。この女なら一夜に十人、二十人は楽しませてくれるじゃろう」

「それはそうでござりまするが、やはり、私の妻でござりますれば、そこまでは」

「考えてはおらぬとか」

「フッフッフ……肥田若狭さまがたには申し訳なき次第なれど、今宵は、殿と私の二人のみ」

　お召平の袴をとりながら元禄屋は、がっかりする若狭以下の男たちに、

「いつかおりをみまして、この埋め合わせは致しまするによって、今夜は、眺めるだけにして頂きまする。勅使殿も、ほれあのように我慢してござれば」

　と平然といい、大島紬のひとえの裾をはねあげ、貴子の裸身に、にじりよっていく。

　もう貴子はなにひとつ抵抗の気配を示さなかった。それどころか、舌をまろばせて元禄屋の唇を求め、しっとりと汗ばんだ内腿をヒクヒクとふるわせ、凄艶な裸身を、されるがままになるのであった。

　巨大な黒い蝋燭が陰惨な牢格子を照らし出し、ひきつったように貴子の足の指が、荒筵のけばをいくつかあたりに舞いあがらせ、もろこしの雲南にすむ牝鹿の香嚢（こうのう）からとれる麝香の匂いが、むんむんと壁にかけられたさすまた、突棒、そでがらみ、熊手などの拷問道具にまで、しみこんでいく――。

酒宴の嬲られもの

その頃――、

　小梅の利倉屋の別邸では、二人の男、葉室邦行と利倉屋庄右衛門に責めぬかれた久我雅子が、無惨な姿を奥庭にさらしていた。

　五尺の間隔をおいて玉砂利に打ちこまれた棒杭が二本、それに大きくひらいた足首を縛りつけられ、両手は左右に青竹を背負わされて真一文字に、のばされていた。

　篝火が四つ、あたりをま昼のように照らし出す。

「雅子さま。葉室さまの色責めを受けたお気持は、いかがでしたの」

「何とか云いなよ、そんなにすました顔しないで」

　昭吉、和吉の二人の香頭が、雅子の左右から寄りそうようにして、琥珀色にかがやく裸身のあちこちを、撫で廻す。

　軒端から垂れた太目の縄に、青竹の中央をつながれただけの雅子は、そのたびに上半身をくねらせて身悶えるだけ。

「フッフッフ、悪かろうはずはなかろうぜ。何年ぶりかの男の匂い。しかもそれが、何度か懸想文をもらいながら袖にしつづけたお方とあっちゃあ、格別の思いがあったろうよ」

　すぐ前に敷きつめられた緋毛氈に坐って酒をくみかわす、いくつかの人影の、なかから羅卒の鞭兵衛が声をあげると、利倉屋も、

「女の愛憎は紙一重と申しますからのう、葉室さま。もしかするとあなたが好きで、ことさら振っておったのやも知れませぬ。その証拠に、あなたの腕に抱かれたおりの、あの悦びにみちた、うっとりした表情」

「フッフッフ……」

　葉室邦行、ただ、無性に笑いがこみあげてくる。鞭兵衛の云うとおり、さきの大蔵大輔柳原宗忠の正室であった久我雅子に懸想文をおくること、五度や六度には、とどまらなか

った。そのたびに無視されて、可愛さあまって憎さが百倍と思いつめていたものを、今宵苦もなく手に入れることができたのである。

「姫、いかがじゃ。もう一度、うれし泣きの涙を流させてやろうか」

ぐっと盃をほした葉室が、一歩二歩、玉砂利をきしませてちかよると、

「アッ！　ア、アアウ。葉、葉室さま！　ご無体な、なされかた！」

むっちりと凝脂ののった肩をふるわせ、乳房まであかく染めながら、雅子が唇をわななかせる。

「フッフッフ。夢みたとおりの、よい肌じゃったわ」

遠慮も会釈もない葉室の指が、ぶるぶると慄える乳房を、まさぐる。

「あまりにも、ご無体な！　お、おやめくださりませい！」

「なにを申す、姫。もう私と姫とは他人ではのうてめおとなのじゃ。夫が、妻の躰をなぶるに何の不思議がある」

「お許しを！　お許し下さりませ」

雅子に何度も叫び声をあげさせて、この上ない快楽に酔い痴れるのであった。

男にとって、憎い女を脆かせ、憐れみを請わせる快楽は、得難いもの。

一方、雅子にしてみれば、憎い憎い男にもてあそばれる屈辱感に、身を灼かねばならない。しかし、女の愛憎は紙一重と利倉屋がいう。数年ぶりの男の暴力をうけて、憎さよりも、こみあげてくる愉悦に、次第に雅子がさそいこまれていくのは女の性の業であろう。

まして雅子は、被虐に敏感な女であり、すぐ反応を示す。

その反応が、責める男にとっては、また、たまらない魅力となる。

葉室の攻撃にあわせるように、昭吉と和吉が、脇腹や水蜜桃のような乳房を狙う。

「ア、アッ！　ア、アアアア……」

潤んだ、おおきな瞳を、うっとりさせて、極上の美酒にも似た琥珀色の肌を、湿らせていくのであった。

雅子が日本橋四丁目の元禄屋の本宅から、ここに駕篭でおくりこまれて、すでに二刻以上の時が、ながれている。

見知らぬ場所でこれからどうされるのかと恐れおののいていた彼女の前に、まったく思いもかけなかった人物―葉室邦行が姿をあらわすと、羅卒の鞭兵衛たちに、スッ裸にむきあげられ、あとは葉室の思うがままに弄ばれてしまったのである。

そして、そのあと、利倉屋が嬲りものにして、こうして晒しものにされている。

「どうなの？　こうすると」

例によって女言葉をつかいながら和吉が、御所風の長い黒髪をかきあげ、肩から背中へと、撓む肌に厚い唇を這わせていく。

「ア、アッ！　和吉さん！」

雅子が喘ぐ。

「とってもいい気分のはずよ。ね、そうでしょう。なんとか云ってよ、ね、雅子さま」

和吉の唇は、ねばっこく這い回っていく。

目前には、葉室の十本の指が、数年来たまりにたまった溜飲をさげるのはここぞとばかり執念深い攻撃をくり返すべく迫ってくる。

「アッ、アッ、アッ！」

しりあがりの喘ぎが、せっなく朱唇からほとばしり、棒杭に縛られた両脚が自然と小刻みに慄える。

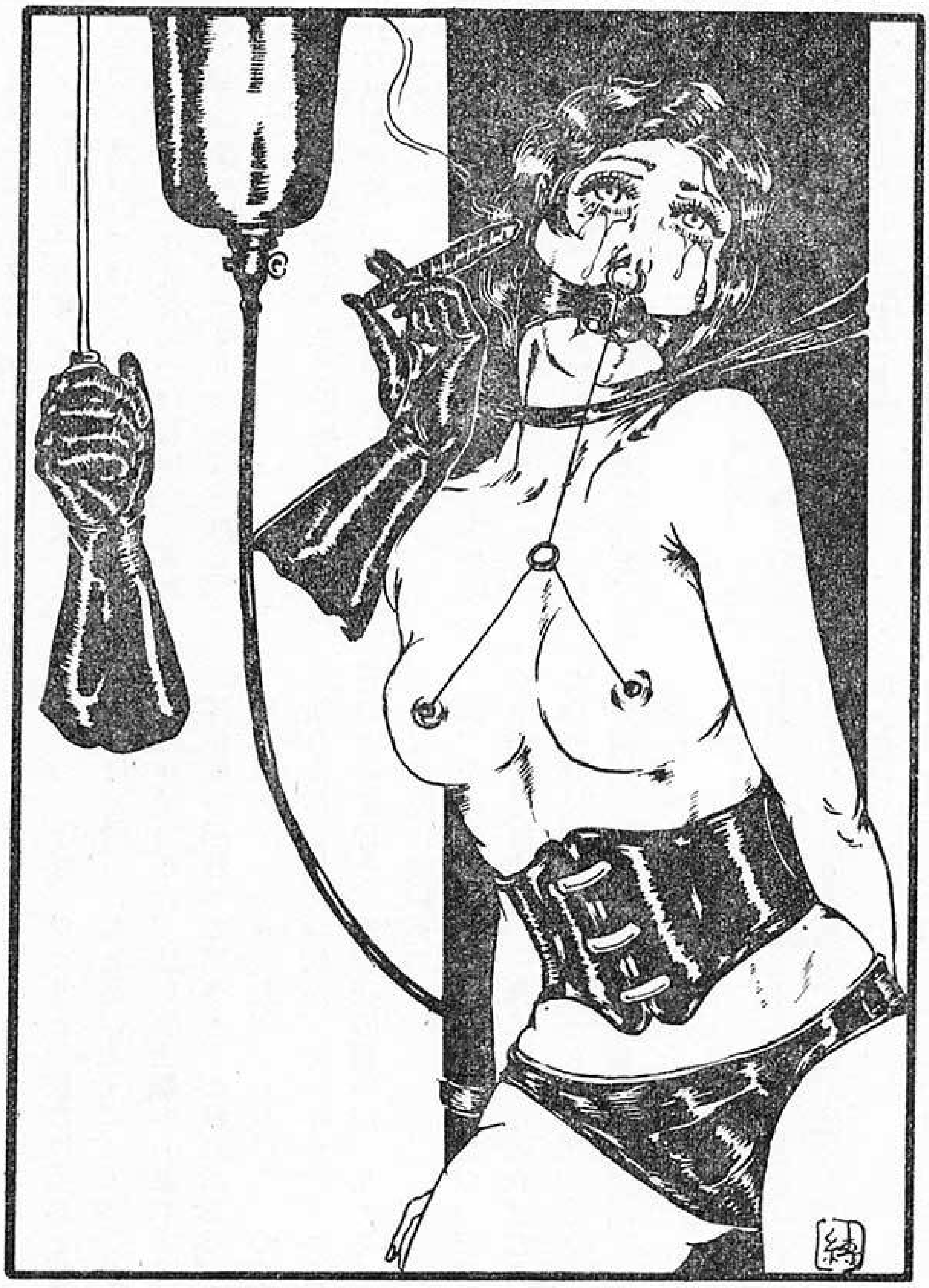
「いつみても、惚れ惚れする乳房だよなあ」

ほおづきの小さな実のような朱い乳首に、昭吉の指が、すいと伸びる。

「アッ！　昭、昭吉までも。い、いやです、そ、そのようなおいたをなさっちゃあ！」

うっすらと見開かれた瞳には、もう、妖し

いまでの被虐の炎が、やどっている。
「まったく美しい女だなあ、雅子。おめえという女は上玉も上玉。江戸にも、ざらにゃあいねえぜ」
「いや。そ、そのように見つめられては。雅子、雅子は、は、はずかしくって、アッ！　アワアア！」
　葉室が何をしたのか、急に焼鏝でもあてられたように、裸身をのけぞらせる雅子――。



イメージギャラリー　『皮革のキシミ』　黒田縛

　ギイィ、ギイ、軒端から垂れている縄が、女体のうごきにつれて悲しく鳴りつづける。
「どうじゃ、降参したか。雅子姫、この葉室に、ぞっこん惚れたであろうが！」
「大」の字に縛られた女体を烈しくのけぞらせた雅子は、ぐったりと、すべての筋肉の抵抗を解いた。
　今夜、三度目の陥落であった。
「おや、おや、今度はもう降参したのかい」
　酒を飲んでいた鞭兵衛たちがたち上がると我がもの顔に棒杭と青竹をとり外していく。
「つぎは穴沢流緊縛術淫酒縄だ。神妙にお受けすることだな。さあ、胸をはって！」
　玉砂利に崩折れて雅子が厳重な縛りから自由になったのもつかのまのこと、ぶよぶよに肥えた白縄の白豚が、波うっている肩をポンとたたくと、斑猿と二人で、猿廻し縄をかけていく。一方、赤狐は、雅子の黒髪を十本ばかり抜きとると、二筋ずつ縒り合わせて五条の糸を巧みにつくった。
「もっと泣かせてやるぜ」
「静かにしてなよ。微妙な縄掛けだからな」
「すぐすむ。少しも痛くはねえってこと」
「フッフッフ……」

「さあ！」

四人が、それぞれ勝手なことを、ほざきながら、雅子を仰向けに押し倒す。

ピョンと赤狐が、馬乗りになる。黒髪の糸が、豊かに息づいている、双つの隆起の頂の珊瑚樹の実のような乳首のつけねに、手ぎわよくまきつけられて、キリリッと搾られる。

「ウッ！」

女性にとっての急所。そこを縛る——いや自分の黒髪の糸で括りつけられたのでは、たまらない。

しかも、その間に、もがきまわる下半身の両脚を白豚と斑猿が大きく開き、その「八」の字のあいだに陣取った青蛇が、ヒョイ、ヒョイと、巧みな手付で摘みあげた三カ所を、乳首と同じように括りあげた。

「ウ、ウッ！　ウ、ウッ！」——ツウーンとこみあげてくる鋭い痛みに雅子が、身をのけぞらせるのを、四人がかりで押えこみ、

「とどめだぜ！　落とすなよ」

青蛇の手にしたのは二合徳利だった。中の酒がピチャ、ピチャと音を立てている。

「さあ、あぐらを組むんだ。おっとっとと。しっかりしねえか」

徳利が消えたあと、縄尻をひかれて、身をおこし、玉砂利の上に大あぐらを組まされた久我雅子の裸身は、妖艶きわまるものといえよう。

針でつつけば、ツルリと一皮むけるかと思われるほど滑らかな乳房の上下に、ガッチリと荒縄が喰いこみ、広い富士額から流れる玉の汗が頰を伝わって肩へと、こぼれおちる。

篝火のあかりを前後左右からうけて、◇型に組み合わされた両脚が、アレキサンドル宝石のように輝き、沈丁花の匂いが、男たちを淫らな沈黙に誘い込む。

が、その沈黙——まんじりともしないで多くの淫らな視線を、一身に浴びなければならない沈黙は、女である雅子にとって、逆さ吊りの拷問にもまさる羞恥地獄と云えた。

（誰か、何でもいい、何か云って頂戴）

無惨にひらかれた自分の膝、下腹、へそ、脇腹、肩、鼻……どこもかしこも眺められているのだという苦痛が、遂に、雅子の口をひらかせた。

「和、和吉さん。いや！　いつまでもそんなに見つめてばかりいては！」

細く長い肩をあげてそう叫んだものの、ハッと自分がいま、何を叫んだかを考えて、桜貝のような耳朶を、いっそう紅く染めると、肩を激しく上下させて、こどもがだだをこねるときのような風情を示す雅子であった。

「見つめられるのがイヤなら、早く嬲られたい、拷問されたいとでもいうのかな」

利倉屋が、からかうようにいうと、

「イヤ！　そのようなことを……」

消え入るような雅子の声——。

「フッフッフ、姫。お願いした酒は、まだ温まってはおりませんじゃろう。それまでの間この徳利で酌でもして頂きましょう」

黙って見つめられるより遥かに楽である。

徳利を手にする利倉屋に、軽く頷いた雅子は、バランスをとって左膝をたて、つづいて右膝と、よろよろとたち上がろうとしたが、途端にピチャピチャという音——。

「ア、アッ……」

一瞬、夜空を振り仰ぎ、ブルブルッと雅子は裸身をふるわせたが、

「早くついで廻らんかい！」

という鞭兵衛の声に、怨ずるような瞳を挙げると、そろそろっと歩きだす。

ピチャ、ピチャと、酒のゆれる微かな音。

二歩、三歩、玉砂利から、やっと緋毛氈へと素足を踏み入れはしたものの、そこでよろよろと崩折れてしまう。

「よし、よし」

　と、その肩を抱きおこす利倉屋を見て、鼻先で、せせら笑った葉室は、乳首から垂れている黒髪の糸を、クルクルと指にまきつけ、グッ、グッと、ひきよせる。

　乳首を、ねもとからひきちぎられるような苦痛が、ツーンと頭のてっぺんまでつきあげてきて、思わず雅子が悲鳴をあげた。

「フッフッフ、いい声で鳴いてくれるじゃあねえか」

　よこからしゃしゃり出たのは番頭の昭吉、

「スッ裸で、縛りあげられた姿で、お酌をして廻ろうとは、いい心掛けだぜ、姫君。さあしっかりと注いで廻りな。こぼすんじゃあねえぜ」

　不自由この上ない立て膝の姿勢でいる雅子の凝脂ののった脇腹辺りを、遠慮もなく撫でたあと、

「それそれ、利倉屋の旦那さまの盃は、もっと右だ、右だっていうのによう」

　後手に縛られた手に、無理矢理、握られた徳利から、利倉屋のさし出している空の盃に酒を注ぐのは容易なことではない。

　湯文字ひとつも、許されていない裸身を、「く」の字に曲げたり、「コ」の字に曲げたりしながら、ともかくも、利倉屋のまえに、背中を見せて雅子が、中腰になる。

「よし、よし、もうちょっと。二寸、いや、一寸。よおし、あと、三分……」

　そのときどきの雅子のあられもない姿態をたのしみながら昭吉が、雅子の裸身を、操作していく。今様の言葉でいえば、リモート・コントロールしていく。

「よし、傾けろ！　おっとっとっと。こぼしっちまったじゃあねえか！」

　この遊戯――二十世紀の今日でも、花柳の巷で、よく行なわれるプレイである。芸者を後手に縛って、その手に徳利を持たせて酒をつがせ、こぼすたびに、一枚ずつ着物をぬがせていく。せめて湯文字ひとつは護ろうと、真剣な表情をうかべる半玉の顔は、ちょっと乙なものである。いやなに相手は芸者・半玉とばかりは、かぎりますまい。ご当人にとっては、この世で一番の美人の奥さまをお相手に、この遊戯をたのしまれている人もあるとか。日本人は働き過ぎだといわれる昨今、まず奥さま相手のプレイの一時、誰はばかることもありますまい。

　さて――、

　やっと、利倉屋の盃に酒をつぎ終わってホッとしたのもつかのま、「今度は俺だ、次は俺だ」と、青蛇以下が口々に申し出て、あちらからこちらへ、こっちからあっちへと、雅子は、やすむひまもなく、身をひねり、腰をずらせ、膝を割って、野良犬にもてあそばれる白兎のように、たらい廻しにされていく。

　その間、青蛇に摘まみ縛りされた五本の黒髪の糸を、男たちは勝手気侭に、ひっぱり、たぐり寄せ、ねじまわす。

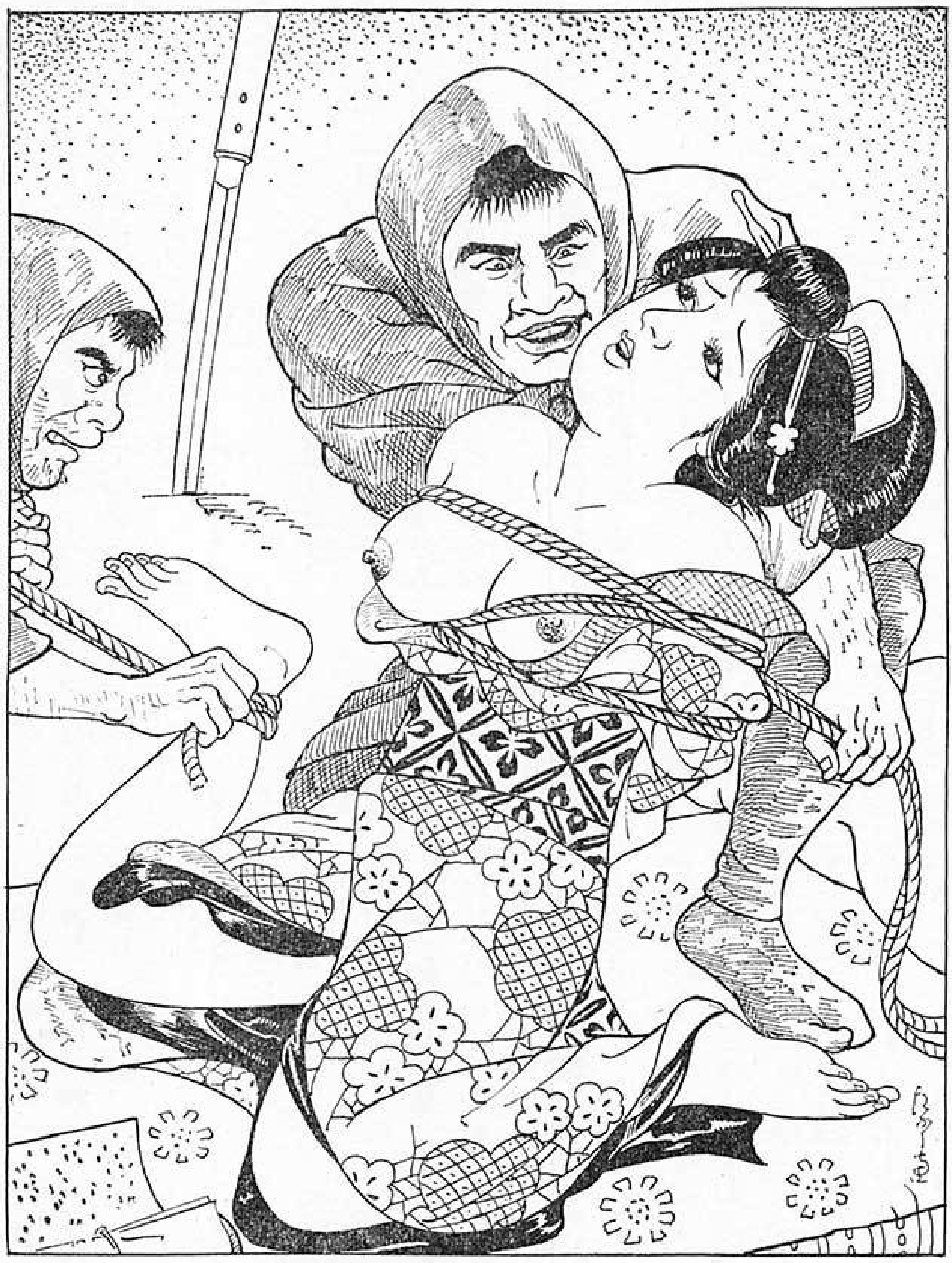
　全裸の肢体を男たちに見つめられるだけで女は興奮するもの。まして、ただ、見つめられるだけでなく、谷や、丘の頂を、黒髪の糸で括られた挙句、触られ撫でられるとあっては、雅子ならずとも、不可思議な疼きが、全身を、かけめぐるに違いない。

（どうしたのよ、雅子！　嬲られているというのに、いけないわ！　そんな淫らな！）

　自分自身を叱りつけてはみるものの、自然と艶麗な腰が、次第に妖しい律動を示し始めるのは当然の成り行きといえよう。

「それ、もう、出してみな。酒のかんは肌のあたたかさという、丁度、よいころだろう」

　利倉屋の言葉で、十本の手、百本の指が同時に、襲いかかる。もう、見栄も外聞も雅子にはなかった。



イメージギャラリー　『落花無残』　岡　たかし

「ヒイイッ！　ヒャアッ！　キャアッ！」
　あられもない金切声をあげて、のたうち廻る雅子の、馥郁と沈丁花の花の移り香をまき散らせながら、とり出された徳利の酒は、まず今夜の主客、薬室邦行の盃に満たされる。
「女酒と申しますのじゃ。京への土産話になされますよう」
　まだ、ほのかに湯気のたちのぼっているその徳利が、手から手へと回されていく。
　篝火が、はぜて、火の粉が、緋毛氈の上に仰向けになってひとりうごめいている雅子の白く匂う裸身に、ハラハラと降りかかり、鳴りを静めていた鈴虫の音が、急に、かまびすしく奥庭に、ひびかってくるのであった。

尿意

「薬室さま。いまひとつ面白いものを、おめにかけましょうぞ」
　ひとわたり、女酒がいきわたったあと、利倉屋が、仰向けから、いまは、「く」の字に裸身をまげた雅子の下腹のあたりをジロッと眺めながら、いいだした。
　利倉屋の視線をうけるまでもなく雅子の下腹は、たっぷりと脂肪ののった年増女のように、いつのまにか、膨らんでいた。
　この別邸につれこまれるや否や、薬室のはげしい抱擁をうけ、つづいて利倉屋に犯されて、咽喉のかわくまま、むさぼるように飲んだ水が、いま、尿意となって、雅子を苦しめていたのであった。

「ご覧じあれ。いまに必ず」

利倉屋は、つと手をさしのばすと、その膨満した腹を撫でおろし撫であげた。ピチャピチャと、さきほどまで、もの悲しい音をたてていた二合徳利はとりさられたが、その容積をはるかにうわまわるものが、雅子を、いよいよ、屈辱の極限へと追いこんでいるのであろう。

「利、利倉屋さま!」

雅子が、すがるような瞳で訴えた。

「なんだえ、姫さま」

そしらぬ顔の利倉屋に向けられた雅子の顔は、すごいばかりの美しさを溢えていた。

「利、利、利倉屋さま!」

もう一度、雅子は叫んだが、それを無視した利倉屋は、脇腹から腰へと、ゆっくりと琥珀色の肌を、なでおろす。

「なんでも聞いてあげまするぞ、姫さま。儂で役に立つことがあれば……」

猫を撫でるような利倉屋の声よりも、青蛇たちのとった動作のほうが、単刀直入であった。「く」の字型に身をちぢめている雅子を四人がかりで抱えあげ、

「利倉屋の旦那。こうして、一番、よく見えるように、曝しものにしてやりましょう」

イヤもオウもあったものではない。

「穴沢流には、こんなときのために、鞦韆という極意がありまさあな」

と、四人がかり、八本の手で、またたくまに雅子を、鞦韆——つまり、ブランコに乗った形に縛りあげてしまう。

ブランコには、腰をのせる板がある。

が、いま雅子にはそれがない。四尺もひらかれた両膝の内側に青竹を横にあてがわれただけ。が、軒端から垂れた五本の縄に五カ所を吊りさげられている、即ち、その八尺はあろう青竹の両端、後手にされた手首、そして「W」型になった双つの足首。

「フッフッフフフ。さすがは、穴沢流。女哭かせにかけては、水も洩らさずというところだな、羅卒の鞭兵衛」

「なにをなにを。これから水を洩らすところでしょうぜ、利倉屋の旦那!」

のっそりとたち上がった鞭兵衛の油ぎった右手には、まんまんと水のたたえられた杯盤があった。

「青蛇、口を割れ」

「へい、親分! フッフッフッ……こいつは面白えや。それ、それ、いくぜ、姫御前」

蒼白な顔をゆがめた青蛇の指が、雅子のふっくらした鼻を、物干ばさみのように、つまみあげる。

「ウッ!」

と、御所風の黒髪が波立ち、ブランコが、ふうらり、ふうらりと揺れる。

その揺れを白豚と赤狐が青竹に手をかけて止め、黒馬が背後から脇腹を抱きかかえて、双臀の凹みに膝をあてて上半身を上へ持ちあげる。

「ウ、ウッ、ウウ!」

雅子が、せつなくも喘ぐのを見おろした青蛇が、

「さあ、流しこんでおくんなせえ、親分」

言われるまでもなく鞭兵衛が、杯盤を、朱く乾いた唇へと傾ける。

声にならない奇妙な呻き——。

額から頬へかけて、さらに肩から乳房の谷へとこぼれる水滴を、弾力のある肌ではじき返しながら雅子は、ゴクッ、ゴクンと、流しこまれる水を咽喉もとへとおくりこむ。

「今度は、酒だ!」

女酒に、さきほど使用したばかりの二合徳利に、冷酒を満たした鞭兵衛は、

「上の唇から注ぎこむこの酒を、下から威勢よく、ほとばしらせることよ」

「イヤ、イヤ！　イヤ……」

　せっなく喘ぐ雅子の唇に、情容赦なく、ながしこむ。

　一糸まとわぬ裸身をあやつり人形のように五本の太縄で宙に吊られて、五人の男たちに無理矢理、酒をのまされる雅子の妖しいまでの美しさに、じいーっと見とれていた葉室邦行が、ゴクンと生唾をのみこんだ。

「葉室さま。ハッハッハ、どうやらお気に召しましたようで。なあにこのような遊びは私たちにとりましては日常茶飯事。毎夜のように芸者どもにやらせておりましてな。ただこのように高貴な姫を責めますのは、私も始めて。さて、どのようになりますことやら」

　次々と酒や水を、どのくらい飲まされたであろう。

　鞭兵衛たちが座にもどり、あとは、ひとり二尺高い空間に、ブラリブラリと揺れている雅子の一糸まとわぬ肉体――。

　御所風の五尺近い黒髪が、艶やかにひかり長い睫毛にやどった水滴が、キラキラと星のように輝く。

　それにしても、M字型にひらかれた瑞々しい弾力にとんだ太股のあだっぽさといったらなかった。

　深山にひっそりと咲きほこる紫蘭の花――酒の香りよりも高く、あまずっぱい匂いが漂い、男たちの淫ら心を、いやがうえにも煽りたてる。

　やがて――

「姫、どうじゃな、もうぼつぼつ」

　利倉屋がひと膝のりだすと、白魚のように可憐な足の指のまたをひとつひとつ開かせていきながら、声をかけた。

「利、利倉屋さま……」

　それを持っていたように、雅子が、うっすらと瞳をひらく。

「なんじゃな、姫」

「雅子は……雅子にお、お願いが」

「なんでも、云ってみなされ。姫の願いならなにごとでもきいてさしあげましょうぞ」

　男達の企みは、これまでの言葉のはしばしで知ってはいた。が、穴沢流鞦韆にかけられている苦痛のために、よそごとのような気がしていたのだが、いよいよ尿意がこみあげてくるに従って、あらためて羞恥がこみあげ、

「利倉屋さま。どうか、妾を……妾を」

「妾を、妾をではわかかぬ。どうしてさしあげるのかえ」

「妾を、妾を！　アッ……」

　じれったそうに唇の端をかむ雅子に、

「雅子、小用がしたくなったのだろうが。おい、そうだろ」

　わかりきったことなのに、昭吉がことさら大きな声を出して雅子の顔をまっかに染めさせ、掌で、ふくらんだ下腹を押してみせる。

「フッフッフ、厠所には、つれていっちゃあやらねえよ。ここでするのさ、ここで」

　昭吉が、抱え出したのは、四本の足のついた大きな角盥であった。

「あまり我慢すると躰に悪いぜ。かまうこたあねえ、早く出しなよ」

　白豚が親切ごかしにいい、和吉までが、

「そうですとも。白豚さんのおっしゃるとおりよ、雅子さま。そりゃあ、とっても恥かしいことだけど、もうこんなにされているのだもの。思いきって、ひとおもいに洩らしっちゃいなさいよ、すっきりするわ」

　と、しなやかな指を、昭吉といっしょに這わせ始める。

「アッ！　お、おやめになって下さい！　アッ、アッ！　ほ、ほんとに、もうこれ以上、いじめないで。どうか席を、お席をお外しになって下さいませ！　利、利倉屋さまあ！」

　黒髪が、なかばかぶさっている富士額から

たらたらと脂汗をにじませながら訴える雅子の姿は、女の羞らいの極限を示すといってよかった。

「フッフッフ、雅子姫。大蔵大輔の正室ともあろうお方が、これはまた、はしたないお姿を見せられまするなあ」

いつのまにか、M字型のまんなかに坐りこんだ葉室は、沈丁花のふくいくとした香りを鼻いっぱいに嗅ぎながら、大きな筆の穂さきを巧妙にあつかっていく。

「フッフッフ」

これで八人の男たちが総て、雅子の裸身にむらがったことになる。

利倉屋が右足首を、白豚と赤狐が両側から黒馬が背中を、昭吉と和吉が左右から下腹、青蛇は双の乳房を、そして葉室が真正面から堂々と攻撃を続行する。

女は一人の男では決して満足しないものではあるまいか。

満足と思っている世の健全な夫婦たちは、まだ性の快楽の低次元にあるのであって、もしもその貞淑な奥さまが、一度でも複数の男に同時に愛されたならば、以後、夫ひとりが相手では、まことに味気なく砂を噛むのにも似た、こどもだましに過ぎないことを必ずや悟ることであろうと思う。

性の饗宴の奥深さは、じつに限りがない。

いま、雅子は、その奥深い花園を、きらびやかな羞恥の衣裳をまとって、歩みつづけていくのであった。

――（つづく）――

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売！

一月分	1冊	四〇〇円	（送32円）
三月分	3冊	一二〇〇円	（送共）
半年分	6冊	二四〇〇円	（送共）
一年分	12冊	四八〇〇円	（送共）

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛（郵便番号五五八）表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、（切手代用は一割増）振替（大阪四二七八三番）』のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、必ず〝現金書留〟にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料四三二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添附致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に〈本号にて前金切〉の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局（特定郵便局でも結構です）と受取人のお名前とをお知らせ下されば、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

〔女体緊縛の撮影と実際〕

私の縛った思い出のM女たち

塚本鉄三（つかもとてつぞう）

今年の三月は忙しかった。笠井奈保子を二回に亘って撮影したし、それに、突然来阪してきた松本たえの撮影とルポの執筆臨月腹の大きなお腹をかかえた福井桃子の撮影とかさなってきたので、これを本職の傍、こなすということは如何にタフな私にも容易なことではなかった。

そんなとき、沖縄在住の読者でモデルになりたいという女性があるので取材に行ってくれないかと依頼されたが、流石の私もこれは御免蒙った。沖縄には三回行ったことがあるから、大体の様子はわかっていたし、今度はその女性読者の方が、空港まで出迎えて案内してくれるということになっていたそうで、いささか食指が動いたが、時間的にどうしてもヒマがとれず残念だった。そして、深田菊子、高村浩子の二嬢からの誘いも断わらざるを得ない状態であった。

四月に入ってからは笠井奈保子を縛って撮影したり、出産の終わった福井桃子のお喋りを聞いたりしているうち、花見も落着いて出来ないまま、四月の末からゴールデン・ウィークに入ってしまった。

三月末に突然、訪ねてきた松本たえとは、もう、ここ当分は逢えないだろうと思っていたのに、五月一日の午後五時前に、松山から長距離電話が掛かってきた。

「今日、急にお休みになったんだけど、お願

い出来ますかしら?」

　松本たえのカン高い声が受話器から響いてきた。私はなつかしさよりも前に、彼女の所在を、たしかめたかった。

「だって、今、まだ松山なんだろう?」

「ええ、今、道後から掛けてるの、でも、これから飛行場へかけつけたら六時半ぐらいのに乗れると思うわ。そしたら、七時半にはそちらへ着くのよ。それに間に合わなかっても、最終の七時というのがある筈だわ。それだったら、そちらは、八時ね」

「うん、そうだな。今はゴールデン・ウイークの最中だから、中々座席がとれないんじゃないかな。今日は、そう無理せずに、次の休みにしたらどうだい」

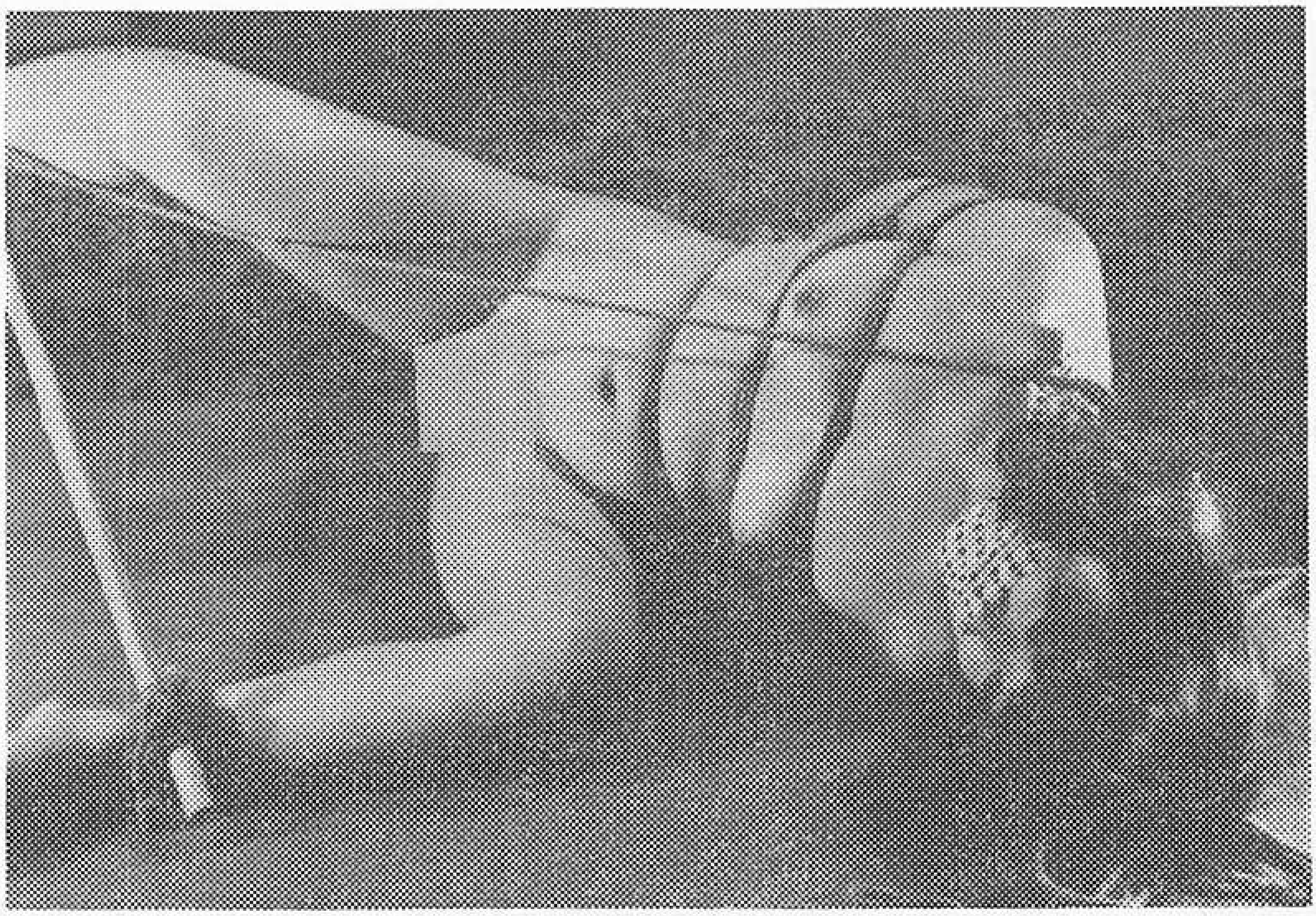
「そうお」

　松本たえは未練気な生返事をしている。私がOKの返事をしたら、直ちに行動を開始して、出発してくるに違いない。だが、私にとっては五月一日、二日は、いわば連休の谷間であって、片づけておかなければならない仕事が山のようにあった。夜通しSMプレイに耽ったとなれば、当然、二日の仕事に差支えてくる。心残りだったが涙をのんで断わった。

―中河恵子―

　五月十四日から三日間、鈴木千鶴子が名古屋へ来るので行ってくれないか、と言われたが、「名古屋か――」と二の足を踏んだ。これを取材すれば当然、八月号に載るルポを書くことになるのだが、この方も私は次の機会にして貰うよう頼んだ。六月になったら、再び来るということになったので そのときを待つことにしよう。

　それで今回は、私が従来書きたいと思っていた〈今までに扱った緊縛女性群〉のことを書き綴ってみようと思う。これは、臨時増刊号〔女体緊縛写真集〕に「女体緊縛の醍醐味を語る」と題して書いた一文の『M願望の女たち』『飼育済みの女』『モデル志願の女』『M女性の種々相』『モデル探し』などの項目の次に書こうと、私がアタタメていた素材であった。手持ちの緊縛写真を掲載出来る限り極力提供したいと思うので、それをごらんになりながら放談としてお読み流し頂きたい。



―中河恵子―

露出好きのM女たち

この頃は〈羞恥責め〉という言葉が本誌でも、よく出てくるがM傾向の女性と一概にいっても、縄で縛られることを殊に喜ぶ女と、羞恥責めを好む女とがあるように思う。

『花と蛇』なんかに出てくる、〈羞恥責め〉には、よく〔浣腸責め〕が用いられているが、これはA感覚並にアヌスに対して一般の女性が特に羞恥心が強いということを逆に利用したものであろう。

勿論、露出されることに対して、最も強く羞恥を感ずるのはV感覚であることは想像にかたくない。従って〔羞恥責め〕の目標も当然そこに集中されるのは論を俟たない。

然し、中には素足を露出され足指を眺められることに、強い羞恥を感ずる女性もあったが、羞恥を感ずるということは、裏返して考えれば、それだけ強い性感を覚えるということであって、彼女の羞恥に反して、無理に露出を強行すれば、当然そこに、歴然とした興奮をその女体に見ることが出来た。

痛いことは嫌。肌に傷のつくようなことも嫌。というようなM女の読者通信なんかには必ずといってよい位、〈羞恥責め〉を求めているものが多い。

前回にも書いたが、中河恵子さんなんかは露出症ではないかと思う位、性器の露出に対しては判然とした反応を示し、それが緊縛による無防備、無抵抗感によって一層昂進し、カメラによる写真撮影という決定的瞬間に際し、爆発的な衝動を引き起こした。

自称M女と称する女性は、初期の川端多奈子にしても、露出されることについて、非常な反応を示したことを自ら告白している。同様に中河恵子も、告白文を書き、自分の環境が許しさえすれば、ストリッパーになって多くの観客の前で開陳したかったとさえ言っているのである。また、私の比較的多く撮影した関谷富佐子さんも、笞打ちによる苦痛を期待しながらも、一面、そうした責められた末の慟哭の姿を、人目に晒すことに強い羞恥を

感ずると共に、反面、力強いS男性によって自分の裸身が思いのままに弄ばれることに、大きな感動を持っていたのである。

二人きりでプレイをしていると直ぐマンネリに陥るばかりでなく、最初は強い刺戟だと感じていたことも、次には、それほど感じなくなり、遂には何らの感興を覚えなくなることは、マニアのよく経験されることだろうと思う。それが一旦、第三者が介在すると、急に同じプレイでも薔薇色に輝き、いきいきと活気を帯びてくるから不思議である。

第三者の介在——それは一に写真撮影という一つの方便が、その役を果してくれる。

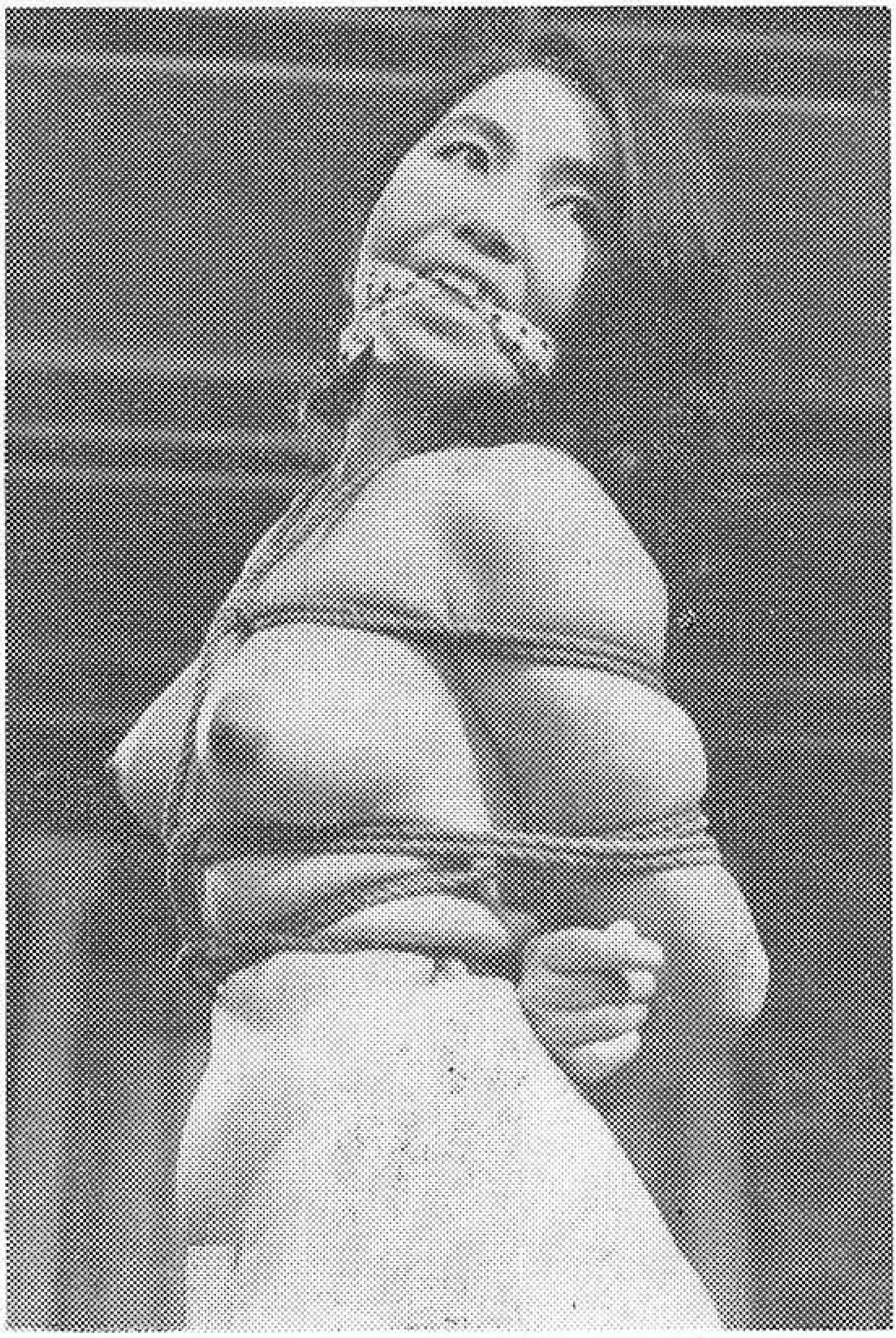
写真撮影の伴わないSMプレイの急速なるマンネリ化の進行度は、経験のある人だったら、きっと同感されることと思う。

写真撮影をやらずに、二人っきりでSMプレイに専念していると、すぐに倦きがきて、つまらなくなってくる。それは二人のプレイに対して第三者の介入する余地がないからであって、このマンネリ化を打破するためには、よいSM写真を撮影するに限る。

私の経験によると、毎月雑誌にプレイ写真を発表していると、対象は同じ女性であっても、次々と変わったアイデアを研究してゆくので倦きるどころか、次はどういったものを次はどうしたものを——と、胸もわくわくするような楽しみが湧いてきて、緊縛プレイも写真撮影も興味が増す一方だった。

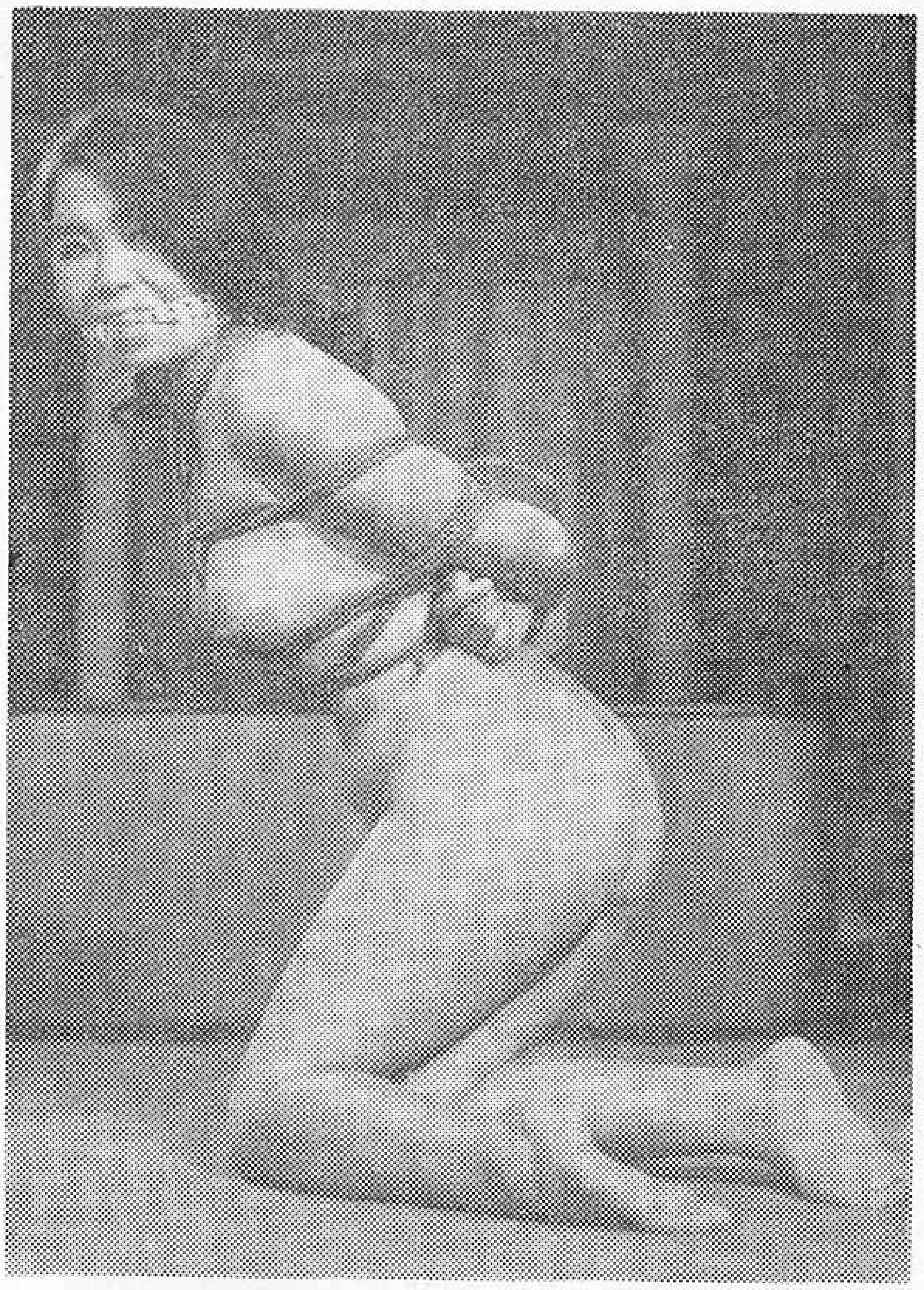
従って、M女性モデルの方も、発表する枚数が少ないから、もっと多くしてほしいとか写真を大きくしてくれないと張り合いがないとか言ってくるようになるし、やがて自分で髪型や衣裳を考えたり、小道具を買ってきたりするようになる。そうして、緊縛プレイや羞恥責めも一層、激しくなってくる。

最近、夫婦プレイの緊縛フォトが多く誌上を賑わしているが、誌上に提供されている、こうしたプレイ実践の御夫婦の方たちも、きっと、マンネリ化を写真撮影と誌上発表によって打破されていることと思う。



——左近麻里子——

── 左近　麻里子 ──



縛られて愛されたい女

左近麻里子という女性は、嘗て熱海で団鬼六氏と辻村隆氏に箕田京二氏が対談という形で姿を現わした人だが、この人については、辻村氏が精しく度々書いておられるので、その点に関しては触れないでおく。

私も比較的、多く彼女の写真を撮影し、未発表のネガも相当枚数、保有しているので、それらの一部を紹介しながら、私なりの彼女に対する感想を書いてみよう。

縛られることが好きだ──と左近麻里子は自分の口から言っていた。

何故か？　という問いを仮に発したとしても、専門の性心理学者でも、すぐさま明快に答えることは困難であろう。まして、年若き女性が、自分の性傾向の由来を答えることは先ず無理であろう。それで私は、そんな、ありふれた愚問は殊更、避けた。

M女性の中には、一見、陽気な人と、口数の少ない、大人しい人とがある。

極く最近では、深田菊子さんなんかは前者の陽気な方であり、高村浩子さんなんかは後者の大人しい方の代表であろう。

左近麻里子はどうか。控え目で大人しい、というより、私はなんとなく陰気な感じを受けた。薄倖を背負ったような、いわば昔の言葉でいえば《美人薄命》といった感じを私は彼女の全体から受けた。これは、私の彼女に対するファースト・インプレッションであって、必ずしも左近麻里子が、薄倖であるとか薄命であるとかいうのではない。

麻里子は控え目で大人しく、且、従順であった。縛られることが好きだというだけあって、相当きつい縛りに対しても、よく耐えたし苦痛に顔をゆがめていても、やめてくれということは言葉に出さなかった。

縄で縛ったままの女体を、転がしたり、折

り曲げたり、極端な姿勢にしても、それが自分に与えられた天命のように、よく耐えた。

ある日、私は緊縛ファンの助手を一人連れて彼女をモデルに写真撮影を行なった。

二階建ての家で、下が二間に浴室便所。二階は寝室と居間になっていて、いろいろに使えるので、緊縛とアイデアは、その助手氏に一任し、私は専ら写真の方を担当した。

どんな縛りをやってもよいと納得した若い全裸の女性を前にして、その助手氏は大いに張り切って縄を手にした。

最初は柱に女体を宙縛りにした。

スツールを柱の前に置いて、その上に立たせ、裸の女をぐるぐる巻きに柱に縛りつけ、そうしておいて、そのスツールを除いた。

女体の重みで、ずるずると下がったが、それでも足の裏から床まで10センチはあった。

麻里子は足の指先を伸ばして床をさぐろうとしたが、どうしても爪先が床に届かない。

私は4灯のフラッドランプを部屋の四隅からバウンズさせておいて、どのアングルからでも直ちにシャッターの切れるように構えていた。ただ手持ちでカメラを構えていたので、絞りはF4にしてシャッターは30分の1にしておいた。

目高位置のファインダーに交換したり、グリップをカメラに取りつけたりしたので、緊縛を完了してからも10分ばかり経った。そして、一枚また一枚。アングルを変えて計五枚のシャッターを切る。

左近麻里子は宙縛りのまま、足の爪先で盛んに床を探っている。胸に腹に、太股に麻縄は、ぐいぐいと喰い込んでゆくが、彼女は悲鳴一つ挙げない。

私は意地悪く、冷静に、彼女の顔面の表情を楽しげに眺め、そして、このような場合には女体がどのように変化するかを舐めるように観察した。私が無遠慮に縄でひしゃげた乳房を引きだしたり、うつむいた顎を持ち上げたりしても、じっと我慢している風であった。

次に、両手も両脚も思いきり大の字に拡げさせて、鉄の格子に縛りつけたポーズを、正面から撮影した。泣顔を見せてやりたいという嗜虐心が、なんとなく、起こってくる女性であった。

── 愛川悦子 ──

——木村洋子・田中美佐子——

この縛りは余り身体的な苦痛は伴わないようであったが、あたかも猿が両手両足を開いて檻につかまったような格好だから、若い女性としては、余り見ばえのするポーズではないが、眺めている男性にとっては面白い姿態であった。そんなところから助手氏が考えてやったのだろうが、残念ながら80ミリの標準レンズではヒケがないので全身が入らない。

あわてて広角レンズに交換する。

その間中、全裸の左近麻里子は両足を開いたまま格子にとまっていなくてはならない。

私はレンズをゆっくり交換しながら、執拗に視線を彼女の方に向けて、目でいたぶりを続ける。彼女は、如何にもバツの悪そうな顔つきで私から視線をそらして、うつむいている。シャッターは一瞬にして切れる。

もっともっと、きつく縛ってやりたい。もっともっと、いじめてやりたい。羞かしめてやりたい——。と思う。

何かしら、徹底的にいじめ抜いてやりたいという嗜虐的な意欲の起こる女だった。

無口で大人しく、何を考えているのか、わからないので、なんとか弱音を、その可愛い口から吐かしてやりたいと思った。

しかし、結局、相当にあくどい、執拗な羞恥責めを加え（但し助手氏ではあったが）、私は刻明に写真撮影をしたが、遂にその最中には、何らの意志表示も見られなかった。

帰りぎわに「今日は楽しかったワ」と一言もらした麻里子の言葉に、私は彼女の複雑な心の中を知ったように思った。

それから、数日して左近麻里子から来た便りの中に、「私は縛られて愛してほしかったの」と書いてあったが、モデルになっていたときは、あんなに澄ましていた、彼女なのに——と、私は女性の心の深渕の謎を思い知らされたように思った。

レズ好みのカップル

建売住宅を建てている工務店から完成した

住宅を撮影してほしいと依頼されて出張していた時、偶然知り合った若くて美しい女性がファッションモデルであった。

　彼女は建売住宅を買いたいと思って下見に来ていたのだが、私を住宅会社の社員かと思って支払条件などを聞いてきたので、言葉を交すようになった。三木敬子だと名乗った。

　彼女の話によると、ファッションモデルといっても彼女のように名の売れていない者はクラブに所属していても中々仕事がなくて困っているというので、私は緊縛モデルの口を一つ、かけてみた。彼女はお友達に相談してから返事をするということで別れた。

　それから五日目、喫茶店で待ち合わしたが三木敬子は友達だという二十一才になる女性を同伴していた。そして、緊縛モデルはやるが、二人一緒でという条件を出してきた。

　勿論、私はOKした。

　そこで彼女は傍の女性を浜本喜美だと紹介し、自分たちはレズ関係なので、どうしても別々だと嫌だし、彼女を縛るのは自分がやるから他の人が手出ししないでほしいと言うのである。私もその方が縛る手間が省けるので快く承諾した。

　浜本喜美は、なよなよとした如何にも責められるのにふさわしい女らしい女性で、三木敬子よりは少し小柄ではあったが、肌の色は白くて、やわらかそうだった。

　おくれ毛が耳のあたりに二、三本たれかかっているのが可憐で、緊縛モデルとしては第一級に推しても恥かしくない美女であった。

　当時、口絵のグラビア写真に美しい緊縛モデルは、いくらでも欲しい時であったから、私は彼女の条件を一も二もなく呑んだ。

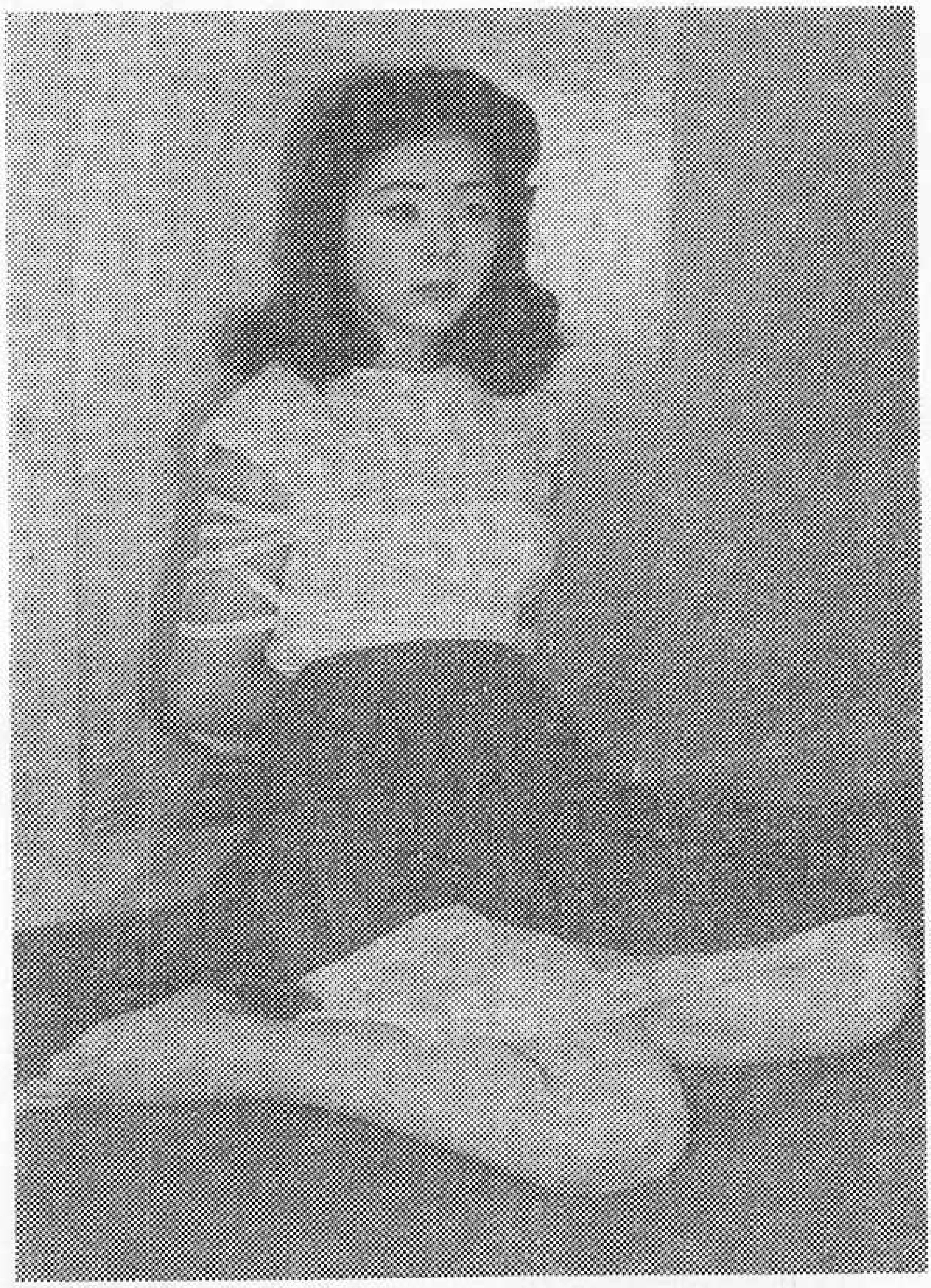
　浜本嬢を縛ったり、ポーズをつけたりするのは一切、三木敬子であった。私には指一本触れさせないのである。それだけ、二人の呼吸は、また、ぴったりと合っていた。

　被虐モデルとしての浜本喜美は素晴しい素質を持っていた。シャッターを切る私も、二人の女性の濃厚なシーンには当てられ通しで

—— 三木敬子・浜本喜美 ——

あった。しかし、浜本嬢の妖艶な肢体やポーズは私の目を、こよなく楽しませてくれた。

私はカメラのシャッターを切りながら二人の若い女性のプレイを眺めていたが、三木嬢に縛られて、いたぶられる浜本嬢の、なよなよとした肢体や、力をこめて曲がった足指が朱に染まっているのを見ると、隠された二女の秘めごとを覗き見たような気持になった。



──花本京子──

あどけない妖女群

昭和三十六年ごろに発行された本誌を見てみると、色刷口絵を巻頭に、三十数頁のグラビアフォト。単色の口絵と豊富なグラフを誇っているのは絢爛豪華でさえある。

表紙に口絵に四馬孝画伯が大活躍しているのだが、グラビアフォトの出演者としては、前本妙子、花本京子、四方清美、益田房子、加茂良子、熱海容子、愛川悦子、田中芳子、絹川文代、東浦ひかる、大塚啓子、山路ミヨ子、桜井葉子、梨花悠紀子、関谷富佐子などが華やかに登場している。

これ等の中で、私が開拓した女性も数多くいるのだが、絵を描いていた、四馬孝画伯と一緒に撮影に行ったモデルも大分ある。もっとも彼の場合は、撮影というよりも緊縛女体をモデルに絵を描くのであるが、私はカメラで彼は画用紙に鉛筆でということで、うまく分業していた。

写真撮影の場合は、縛った女体のポーズを次々と変えたり縛り変えたり、目まぐるしくやるのだが、画の場合は女を裸にして縛り上げてころがすと、デッサンをとる間、暫くそのままのポーズで放置しておくわけである。それで私はゆっくりと落ち着いてカメラアングルをいろいろと変え、ライティングや絞りシャッタースピード、モデルの表情などをよくよく考えてシャッターを切ってゆける。四馬孝画伯の方は、無心になって盛んに画用紙

に鉛筆を走らせている。

鉛筆の速さは、相当なスピードである。私がアングルを変えて三回ほどシャッターを切っている間に、殆どデッサンが出来上がっている。時には「一寸、待ってくれ」と言ってもう一度、確かめることもあるが、そのうち私は一つのことに気がついた。

女を縛ったままで放置しておくと、顔の表情は勿論のこと、肢体の各部分の表情にも微妙な変化が起こってくる事である。この瞬間的な表情の変化は、縛られた手首の指の握りしめ方一つにしても、あっと驚くほどの美しさを発揮することがある。臀部、足の指、太股、乳房、と数えあげればきりがないが、時には何百分の一秒という速さのシャッターでも、その表情の微妙な変化の最も美しい瞬間をキャッチ出来ないことがある。

四馬孝画伯は鋭い目つきで縛られた女体をじっと睨んでいるので、そうした表情の変化は、カメラよりも早く把握して自己の映像の中にしまい込んでいるのだろう。故意にじらして、ゆっくりと鉛筆を走らせて、タイミングを待っているふしもある。そんなとき、私はカメラを手にしたままモデルの周りをうろうろして、舐めるように縛られた女体を観察してみるのだ。

四馬画伯は面喰いというのか、自分の気に入った容姿でないと、中々うんと言わない。それでいて「変わったモデルはいないか」とせつくのであるから弱ってしまう。

彼のイメージに合致する理想的な女性なんて、そうザラに転がっているものではない。

それでは自分で探せばよいではないかと言えば一人ではなんだから一緒に行こうという。

人通りの多い喫茶店の入口に頑張って歩いている若い女性の品定めをやるのだから世話はない。あれは良い、これは良いと言っている間に入れ替わり立ち替わり、若い女性が現われては、また去ってゆく。

──花本京子──

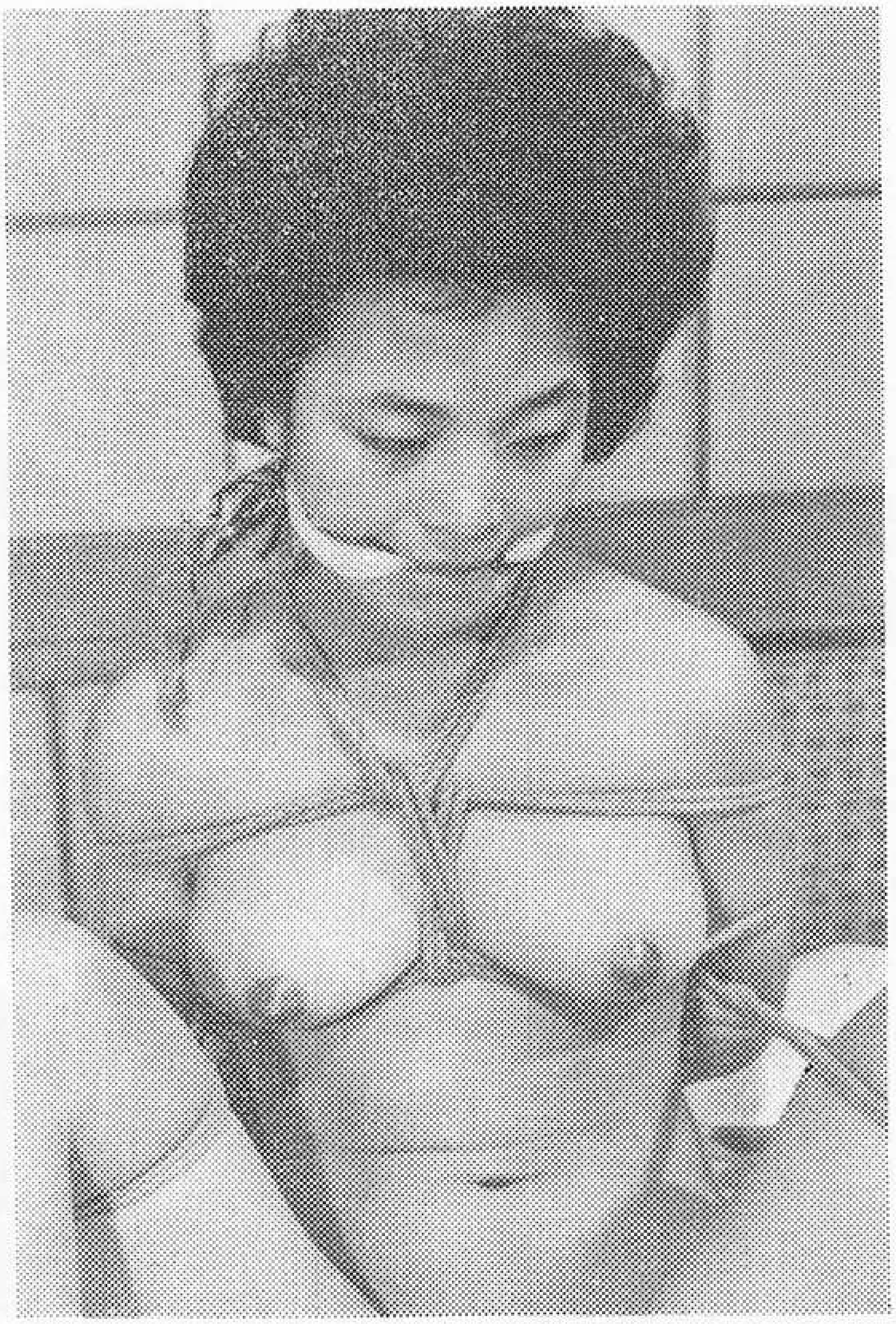
「あれはいいぞ、抜群だ」

と一人で悦に入っているが

「もしもし、失礼ですが、貴女、ひとつ緊縛モデルになって頂けませんか」

なんて言葉をかけたら、ドヤされるか狂人扱いされるのがオチであろう。但し大久保清のような巧妙なテクニックがあれば別であろうが——。いや、大久保のように嘘をつく男は結局、自分を窮地に追い込んで破滅してしまう。女に嘘をつくのは絶対に禁物である。一万円持っていても千円ぐらいしか持っていないふりをしているのが確実で安全であるがそのかわり女の方では、ついて来ないことも確実である。

そのうち、四馬画伯が、「あの女なら交渉すれば必ず応ずるだろう」という保証付きの若い女性が現われた。といって自分から交渉するというのではない。「絶対に間違いないから、君が話をしてくれ」というのであるから馬鹿気ている。すらりと痩せ型でプロポーションのよいエキゾチックな顔立ちで、ミニスカートから出ている足も細くて、如何にも彼好みの女である。勿論、私が彼の尻馬にのって、のこのこと出てゆくような馬鹿なことをする筈がない。



—— 梨花　悠紀子 ——

そんな他愛もない雑踏中の女の品定めも、野郎二人きりの暇つぶしかと思ったのだが、＜待てば海路の日和かな＞という言葉の通り一人の餌物が飛び込んできたかに見えた。

四人掛けのテーブルに坐っている私達の前の椅子に、「ここ、あいてます?」と言って一人の若い女が現われたのである。見回すと他の席は殆ど、ふさがっている。流石にアベックのいる席は嫌だとみえて、私達、男ばかり二人の席に来たのだと思う。

「ここ、あいてます?」という、たった一言であるが、先方から言葉を、かけてくれたということは、黙って坐られるより、心が通じ合うものである。「さあ、どうぞどうぞ」ということから言葉を交すようになった。

可愛いい顔立ちではあるが、背は余り高く

なく、着ているツーピースも垢抜けしたものではない。まあパチンコ屋の女店員といった程度かと値ぶみしてみた。友達と待ち合わせをしているのだが、中々来ないので帰ろうかと思っていると、問わず語りに言った。まあどことなく人には馴れているといった感じの女である。

そこで四馬孝が盛んに私の脇腹をつつく。私に彼女に緊縛モデルにならないか交渉せよというのである。私は彼に絵を出せと言って縛った女のデッサンを彼女に見せた。こんな時は写真よりも絵の方がリアルでなくてよい。

「まあ凄い、これ何の絵なの？」

彼女が先ず予想した反応を示したので、やおら私は数枚の緊縛フォトを鞄から出してチラリと見せた。

「わあ、写真もあるの」

彼女は驚いている。十九か二十才か。小柄だから若く見えるのかもしれない。

——梨花悠紀子——

私達は二十分ばかりかけて彼女を口説いてみた。とどのつまり

「私、ハダカに自信がないので、服のままだったら構わないけど——」

彼女は、そんなわけでOKした。すなわち花本京子こそ、この女性である。

四馬画伯は彼女のことを白痴美といった。私は花本京子を可愛いい素直な娘さんだと思っていたが、彼の好みには合わなかったようで、僅か一回だけ着衣のままで緊縛しただけで終わった。彼女の方は、まだまだやってほしいような気配を見せていたので二回目三回目と継続しておれば花本京子の全裸緊縛フォトを撮影するチャンスは必ずあったことと思う。四馬画伯が自分の好みに合わないため余りにけなすので私もつい断わってしまった。

四馬孝氏と一緒に縛った女性に加茂良子がある。この〔加茂良子〕という名前は彼がつけたのであるが、あとで同姓同名の女優がいることを知って、彼が知っていて故意につけたものか、或はそんなイメージがあって自然に口に出たものかとにかく、私が「なんという名前にしようか」と尋ねたところ即座に彼は、「加茂良子」と答えて、その名まで示したのだから、どうも後者のような気がするのだが——。

加茂良子は小麦色の健康色の肌の持主で、彫の深い容貌、背は一六〇センチ以

上はあるだろう素晴しいプロポーションの持主。一見してヴァンプ型の性格のように見受けられ、四馬画伯の好みには稍合っていた。『快楽はどこまでも追究してゆこう』といったタイプらしく、ハダカになることや縛られること、それに二人の男性から、いろいろとポーズをつけて転がされたり眺められたり、責められたり、それに口々に冗談を言われたりすることにも楽しさを感じているような風であった。

彼は積極的に自分から縄を持って良子の裸身を縛りあげた上で、坐らしたり横にならせたりしてポーズをきめ、顔の表情も顎に手をかけて、「ああでもない、こうでもない」と神経質なくらい文句をつけた。それでいて、余り鉛筆はとらず、縛った女体をいたぶるのに専念している風であった。「おい、絵は描かなくても、いいのかい」と、私が心配するほどであった。

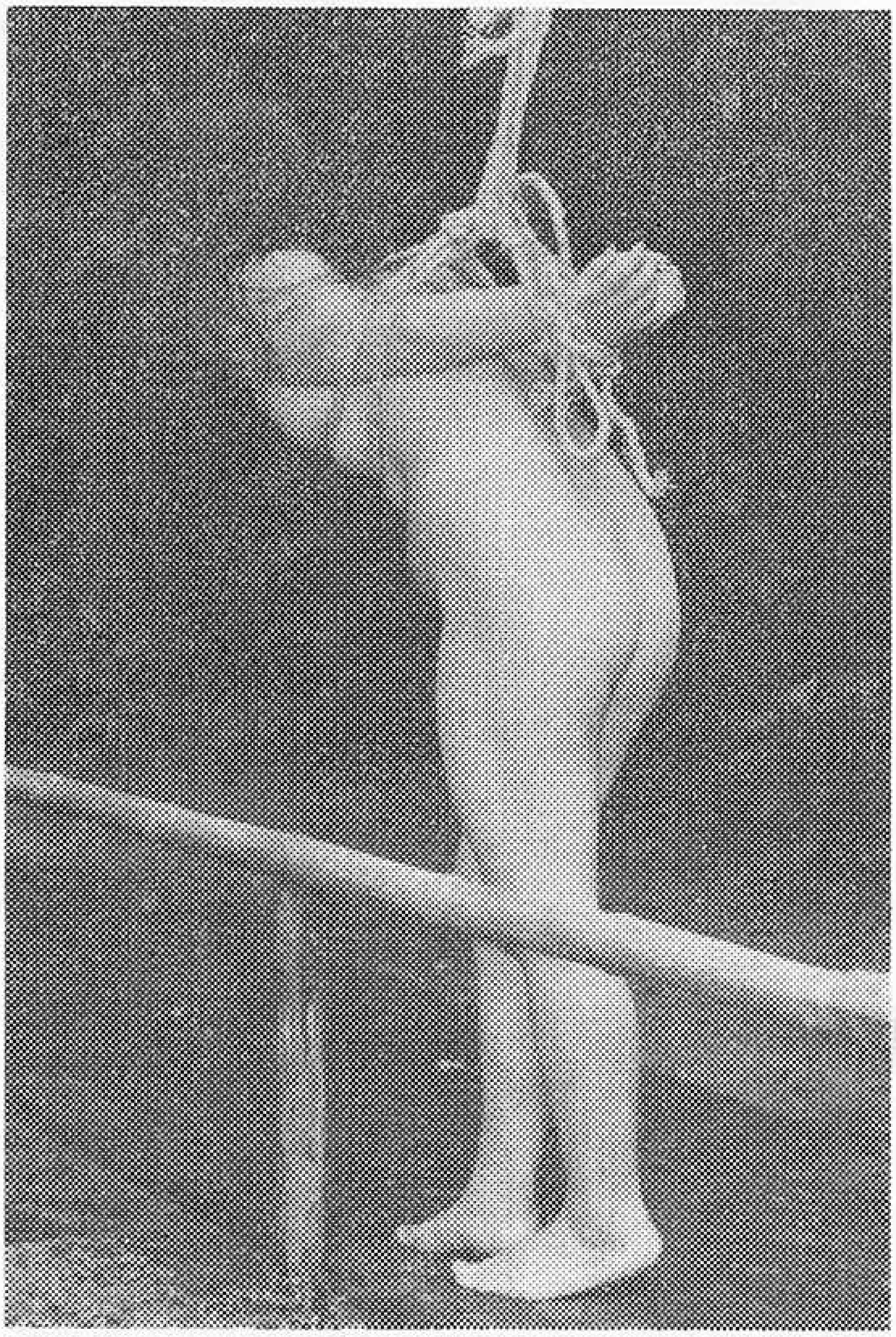
絵を描くことは従で、女を縛り、いたぶり責めることが大好きといったように見えた。

私は、縛られた上で四馬孝にポーズをつけられた加茂良子を被写体に、どんどんシャッターを切っていった。グラビアフォト向きの幾分軟調気味のネガに仕上るよう、露出オーバーにならないよう注意して十分に絞り込んだ。

四馬孝は責めることに熱中し、私は写真を撮ることに熱中していた。その時、後手縛りのまま横臥の格好で転がされた加茂良子の、その部分が私の目に入った。

加茂良子が緊縛と翻弄に満足しきった歴然とした証拠をそこに見て、彼女は彼女なりにある種のムードに浸っていたのだなあと、私は始めて、何かを発見した。

次に四馬画伯と一緒に写真撮影をした女性は梨花悠紀子と大塚啓子、それに絹川文代である。絹川文代については、彼が鼻責めに強い関心を持っているところから、絹川文代の美しい鼻を責めてみたいと自ら自分の指で、高くて格好のよい鼻をめくりあげたり、鼻孔



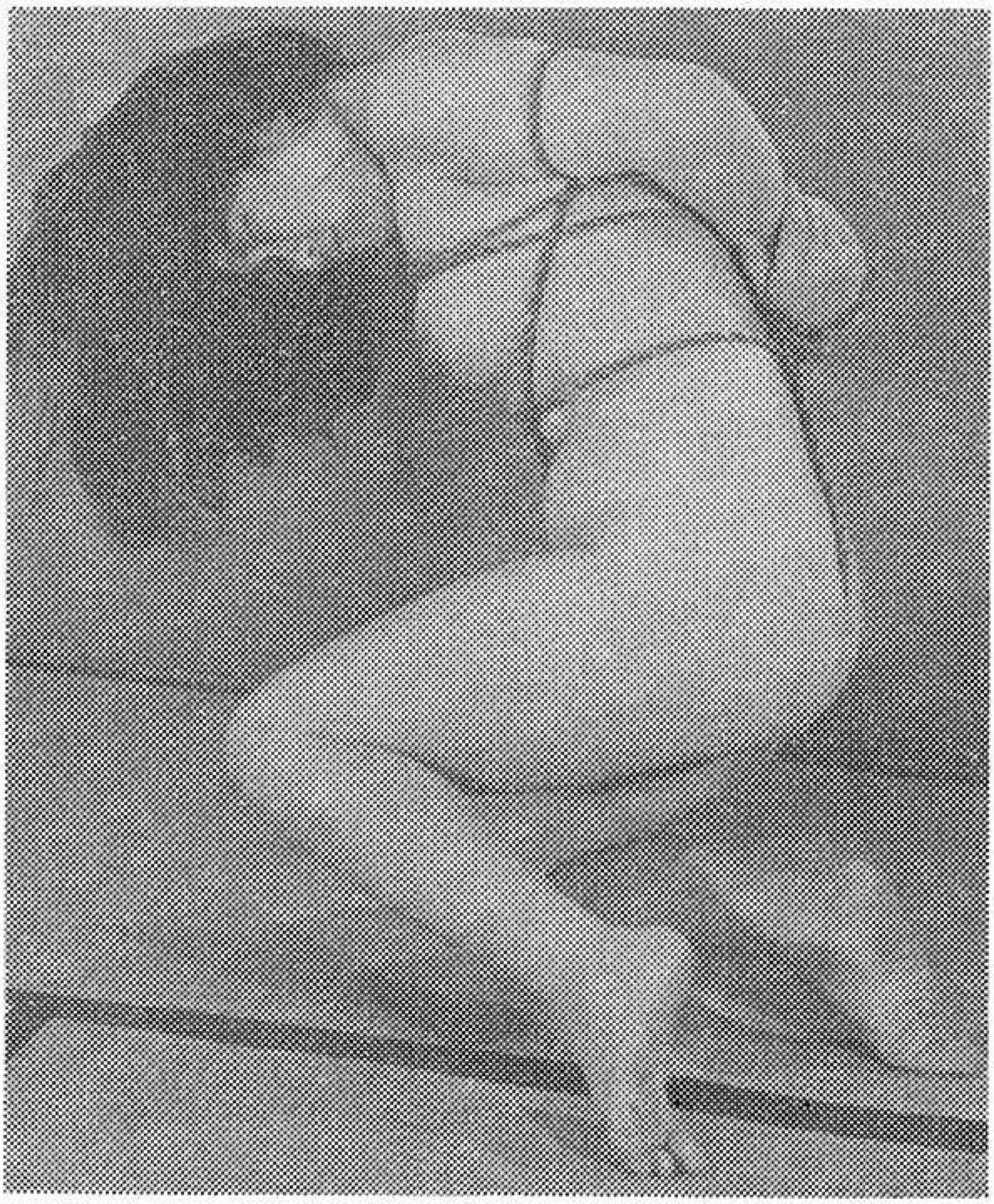
── 大塚啓子 ──

に指を突っ込んで責めたりした。

私はこれをアップで何枚も撮った。これは誌上には載せなかったが、たしか彼のコレクションとして残っている筈である。

大塚啓子は、彼の大好きな黒光りのする革具で責めようということで、大阪南部のY温泉を一日借りきって庭園や浴室、広間などを使用して撮影した。

大塚啓子は十七才ぐらいの時から奇クの緊縛モデルとして登場し、私の知っている範囲でも十年近くも活躍している非常に息の長い女性である。その割に文章としては、彼女自身の告白として、二、三度奇クに載ったくらいである。万年娘としての彼女の若々しさは貴重な緊縛モデルであったと思う。彼女のことに関しては稿を改めて書きたい。



——大塚啓子——

〝連縛〟という縛り方

今から二十年近くも以前には、春日ルミに伊吹真佐子のSMコンビのフォトを撮影したことがあるが、それ以後、二女、三女、或は四女を連縛したことは何回となくある。

古くは、杉芙美、坂口利子、村田那美子のトリオで三人連縛を試みたこともあるし、降っては、大塚啓子、東浦ひかる、木村洋子の三人連縛。山原清子、大塚啓子、東浦ひかるの三人連縛。山原清子木村洋子、東浦ひかるのトリオ。絹川文代と大塚啓子の連縛。愛川悦子と田中芳代の連縛。といったものを、やったことがある。

一人の女性を裸にして緊縛するということでも私にとっては中々の大仕事であるのに、対象が二人三人となれば、とても私の手におえない。有能なる緊縛係の助手がおれば別であるが、私だけであれば全くお手あげである。ただ山原清子を混じえたトリオの時は彼女が大のSM好みであるばかりでなく、責めることも大好きなS性格も多分に持っていたので、私も楽であったし、非常に面白い場面が数多く展開した。

私も山原清子が一枚加わったトリオの際は

—大塚啓子・絹川文代—

思わずカメラを忘れてSMプレイそのものに没入してしまったものである。

責められるのも大好き、責めるのは尚更好きという山原清子は、その背中一面に見事な刺青（いれずみ）をしていることで、一風変わった特異なSMモデルとして本誌に出現し、時にはSモデルとして男性を責め、また時にはMモデルとして、厳しい責苦を甘受した。

読者座談会の席にも二回まで同席したことがあり、その時の模様は辻村隆氏の筆で本誌上に詳細報告されたが、山原清子自身のペンによる〈告白〉は、大いに期待されながらも遂に誌上には出なかったようである。

私自身、山原清子と幾度となくプレイをやりSM写真を撮影している間、いろいろと彼女の話を聞いていると、書いてみたいという気持が、しきりに起こったのだが、そういう機会を掴まないまま、いつの間にやら日が経ってしまい、今になって至って惜しく思う。

背中一面に〔玉取姫〕の華麗な刺青を背負い、生まれながらにしてSMを理解していたような山原清子が、本誌に姿を現わしたのが彼女が二十才の時であったが、日本髪のカツラをつけて全裸の緊縛フォトを撮影しているところをみると、その時の清子の職業も自ら想像がつくものと思う。

節分の際、お化けの扮装をしたから、この姿で緊縛フォトを撮らないかと誘いを受けたことがあったが、丁度その日、私はよんどころない仕事があったため、彼女の折角の好意を受けることが出来なくて残念だった。

SM、浣腸、について強い関心があるばかりでなく、同性愛（レス）についても、興味があるらしく、いろいろと体験談を聞いた。その方は、女子同性愛という性質上、直接見たわけではないが、街頭に於いて例えば喫茶店なんかで、そういう傾向の女性にばったり逢うと無電が通ずるように、お互いにピンとくるという話から、初対面の女性二人がホテルへ向かう時のスリルと楽しさを詳しく語ってくれた。

盛り場で、やくざ者にインネンをつけられ

て困っている女の子を助けたことから、裏通りへ連れてゆかれて、寄ってたかって裸にひんむいて、背中一面に彫った刺青が現われたのだから、やくざ者達が驚いた。

「姐御、お見それいたしました。どうか、お見逃がしを――」

と、ほうほうの体で退散したという山原清子の話を聞いたこともある。

彼女のことを書けば、とても紙数を費やしてしまって書き切れないが、とにかく貴重なSM協力者であったことに相違ない。こうした二度と出現しそうにないSMのパイオニアである山原清子のことを、もう少し各角度から取り上げて、風俗文献誌としての奇クが記録しておいて呉れたらと私は願いたい。

さて、三人の連縛、トリオによるプレイ。

普通、若い女が三人も寄れば互いに索制しあって、中々スムースにプレイが進行しないものである。ましてや、全裸になって、女性として最も女性らしい部分をあからさまに晒しあうSMプレイであってみれば、羞恥もあれば疑心もあり、相手の思惑を推しはかって素直に行動できぬものである。

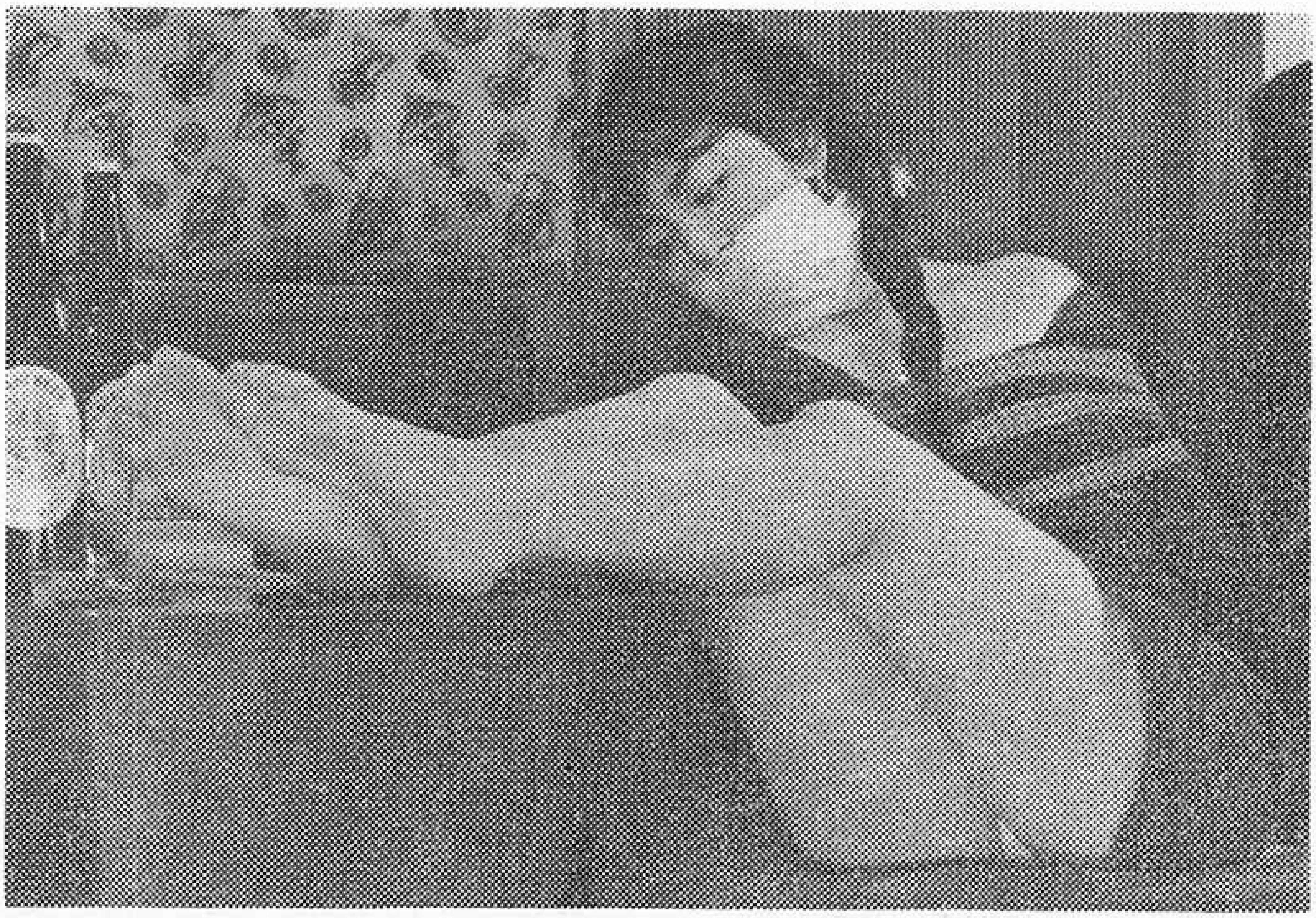
幸い、山原清子が姐御肌のタイプで積極的に自分から行動してくれたし、大塚啓子は明るい性格で協調的である。東浦ひかると木村洋子は本来、強いM性の持主で一旦、山原清子に責められると忽ち羞恥心をかなぐり捨ててプレイに没入してくる。

私は、まるでハレムの王様にでもなったような気分で三人の若い女性を相手にSMプレイに興じ、そしてSM写真を撮った。ポルノ解禁にでもなれば発表できるかもしれないが日本の法律下では、公開可能の写真は極く限られたものしか撮れなかった。ネガのまま保存して果して利用価値があるものかどうか、ポルノ的SMフォトは、徒らに筐底に陽の目を見ない不運をかこっているばかりである。

股間縛りと羞恥責め

嘗て本誌上で大活躍をされた吾妻新氏が、その作品『感情教育』『夜光島』『人生学校』などの中で、いみじくも＜股間縛り＞という語を始めて使い、私たちSMファンを一驚

――絹川文代・大塚啓子――



――絹川文代――

させたものである。

　女体をタテに真二つに割って縄を掛けるという縛り方自体、特に珍しいものであるとは、いえないが、〈股間縛り〉という語感からくるエロチシズム。それは女体の特徴から類推して男性が抱くところの陰微な想像。それらからして、私達は、一時期対象の女性を変えては、この「股間縛り」という縛り方を試みたくて仕方がなかったし、また次々と奇ク誌上に現われる口絵など（例えば、畔亭数久画伯の「股間縛りによる羞恥的な縛り方」という口絵）によって啓発されていった。

　吾妻新氏の〈股間縛り〉は、女体の下半身にピッチリと密着したスラックスの上から縦に縄を掛けるというもので、いわば股間縛りという縄そのものよりも、肌に密着して汚れたスラックス。豊かな臀部に対する叩きとか臭気を帯びた小道具による猥ぐつわとかいった汚辱責めに、ポイントがあった。

　SとかMとかいっても、それぞれ強い個性があって、それが各SMという点が繋がっているに過ぎない場合が多い。吾妻新氏の一連の作品によって、私は彼を非常に崇拝し、且評価しながらも、それでいて、各の個性については難解で、完全に理解し得ない歯がゆさを感じている。

　一世の責めの大家、伊藤晴雨氏が、日本髪の黒髪の乱れについて、強烈な執着を持っておられたことは、氏の個性であり私たちとは規を一にすることは出来ないが、しかしSMという一点に関しては完全に共通点を持っている。黒井珍平氏との『黒髪論争』も、すでに一朝の夢と化してしまっているが、私は黒井珍平氏の意見に賛同しながらも、また一面伊藤晴雨氏の言っておられることも、痛いほど胸に迫ってくるのである。

　SM＋フェチ――

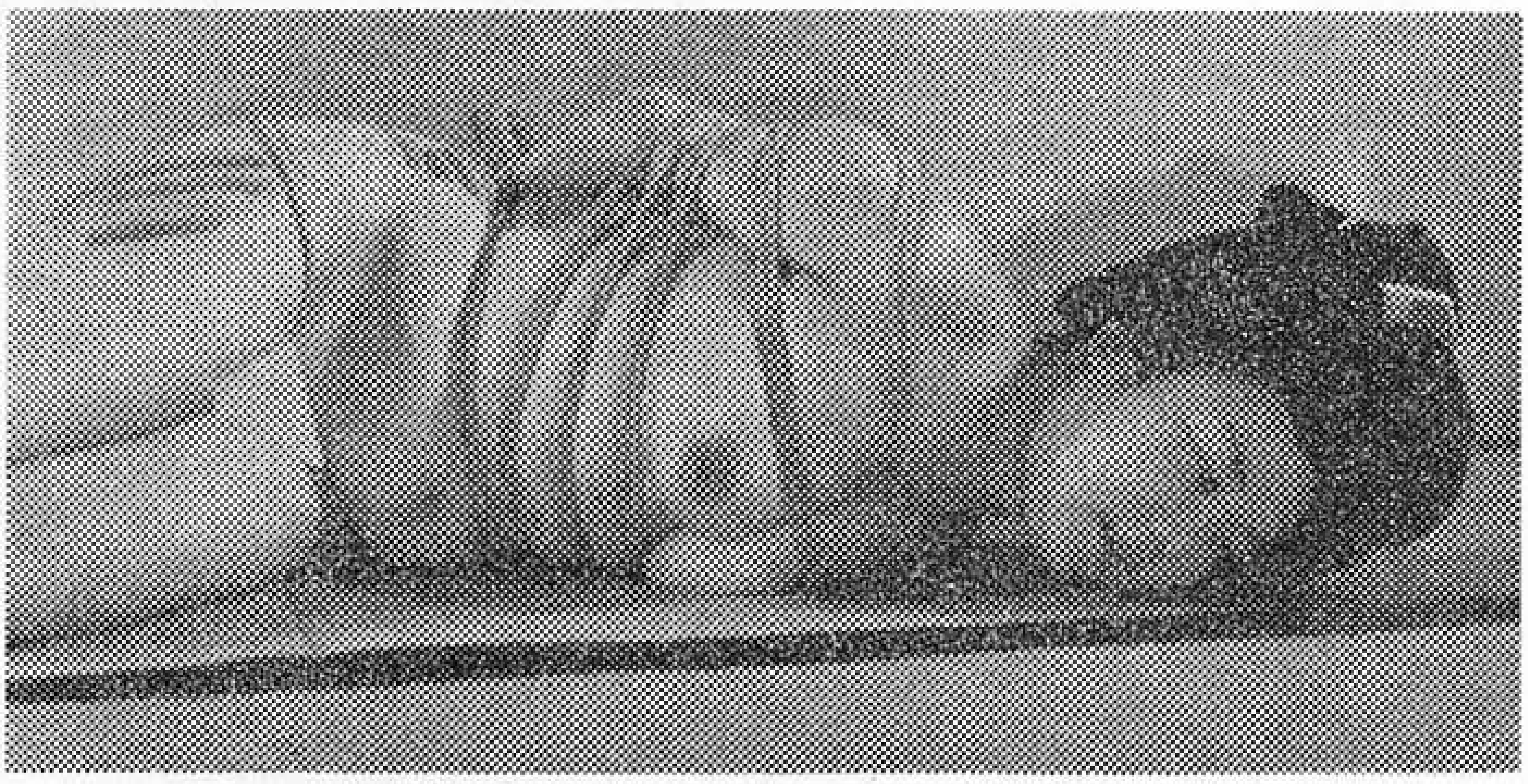
　浣腸、妊婦、オシメカバー、刺青、黒髪、革具などの他、女体各部のフェチを加えると種々雑多な好みの傾向があるに違いない。

　股間縛りについては、何となく女性の神秘を侵すようで、一脈〈羞恥責め〉に相通じて

いるように思う。連載小説『花と蛇』なんかで盛んに所謂〈羞恥責め〉が演じられて、これがファンの喝采を博した一つの理由であったろうが、アヌスに対するフェチと相俟ってここに『浣腸責め』という一分野が、SMの領域の中に確立されたことを示している。

股間縛りを試みた女性対象は数が多く、殆どといってよい位だが、中には特に股間縛りを好むM女性もあり、深々と喰い込ませたままポーズをとることもあった。股間縛りを実際にやった方なら、よくお判りのことと思うが、縦縄に対して、いろいろと横縄を掛けていると次第に締まっていって、驚くほど縄が緊張してくるものである。ましてや、立ったままで縦縛りに縄を掛けた上で横になったり屈んだりしたら、股間縄が女体に対して、どのように、むごたらしい責具になるか、想像を絶するものがある。

後手高手小手縛りにした上で厳重な股間縛りを加え、杉実美嬢を吊りあげた時は凄絶なばかりの形相で、責めとはこういうものかとの感じを強く受けた。カメラは正面から狙っているので、丁度吊り下がった女体の側面にレンズが向いているので、股間縄の中心点には無関係であったが、レリーズを握っている私の眼には、責めの中心である股間縄の喰い込み部分が、ばっちりと飛び込んできて、その凄さに一驚したものである。



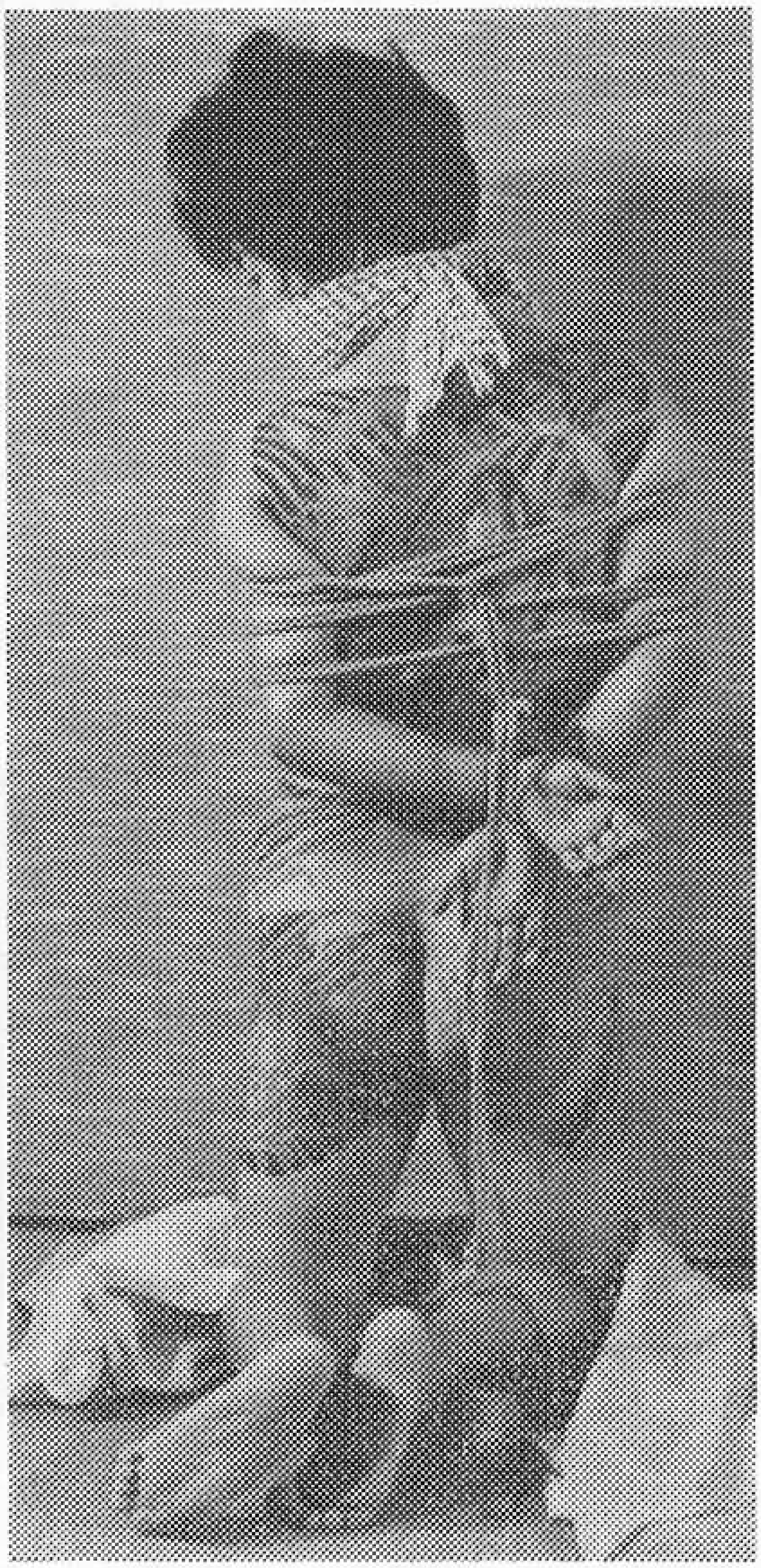
―― 山原清子 ――

〔羞恥責め〕を縄によって実施しようとすれば、先ず〈股間縛り〉と〈開股縛り〉を挙げることが出来る。こうした羞恥責めの手段として開股縛りとか、開脚責めを、よく用い、しかも反応の著しかった女性としては愛川悦子、中河恵子、木村洋子、東浦ひかるなどがあるが、最近では、荒尾慶子、深田菊子、高村浩子、前田真知子、松本たえなどがある。

極めて新しい例では、私も最近号のルポで書いた鈴木千鶴子、笠井奈保子なども数えることが出来る。只単に縄に依る身体的な拘束というだけでなく、女性の羞恥心を最高度に刺戟する、こういった縛り方は、羞恥責めの一貫として、今後ますます多く用いられるのではないかと思うが、詳細なテクニックに関しては、いずれ今後のルポ記事の中に於いて言及したいと思う。

〃剃毛責め〃について

羞恥責めに関して、忘れることの出来ないものに『剃毛責め』がある。嘗て関谷富佐子を笞打ちで責めていた頃、彼女は私の前に姿を現わすたびに青々と剃りあげてきていた。プレイに入る前に、関谷富佐子はブラジャ



――山原清子――

ーとパンツを残して、それ以外の衣服は自分で脱いで、きちんとたたんだ。ブラジャーとパンツの二つも、どうせ両手を後手に縛られてから剝ぎとられるのはわかっていても彼女は自分から絶対にとろうとしなかったし、また、時に私が縛る前に脱がそうとして手をかけても、「イヤ、イヤ、それだけはイヤ」と両手で、しっかりと押さえて脱がさせない。

大体、関谷富佐子は縄を沢山用いてゴタゴタ縛られるのは好まないタチなので、両手を背後へ回して手首だけを重ねて縛っておいて先ずブラジャーの紐をゆるめて胸からはずすと、むっくりと豊かな乳房が現われてくる。

次にパンツのゴムに手をかけて、一気に下へずりさげてしまう。両膝をすり合わせて、お尻を引いて私の手を逃がれようと恥じらっていても、何しろ両手を背後で縛られているのだから、すーっと膝頭のところまで白いズロースは下がってゆく。

「あッ」という彼女の声と、「おおッ」という私の声が、期せずして同時に出た。

そこには童女のように、すべすべとした肌が剃りあとも青々と姿を見せているではないか。私の視線がそこに注がれたとき、関谷富佐子は、顔を真赤にして、いても立ってもいられないといった風で、もじもじする。

当然そこにあるべきものがないという異常美が、私の胸をドキリとさせた。

先ず、視覚的に私は楽しい思いをした。とにかく、遮るものとて何もないのであるから女性本来の美しさを十二分に鑑賞することが出来た。私は自分の肉眼を楽しませるばかりではなく、カメラを用いて集中的に絞り込んだ鮮鋭なレンズの威力を発揮させた。

次に、すべすべとした玉の肌の触覚的な楽しさが、やがて羞恥責めへと当然エスカレートしていった。剃毛されているときの姿態や光景を想像するという楽しさが、このSMプレイに一つのバイブレイションを与えてくれた。そして、如何な羞恥や躊躇、逡巡もそのあとに起こった彼女の豊満な臀部でのムチの炸裂によって一切ふきとんでしまった。

ムチ打ちを受ける度毎に、剃毛の儀式を終えて童女の姿で訪れる淑女、関谷富佐子。彼女こそは、もし妻に迎えるならば、このような女性を――と誰しも思うほどの素晴しい女性であった。いみじくも、同じく妻に迎えたいと思う女性――荒尾慶子も剃毛責めの好き

な女性であった。

彼女の告白、『流れる雲に身を託して』によると、「私の好んだ縛り方は股間縛りであり、責め方は剃毛とかバイブ責めでした」と書いている。（四十六年七月号一七八頁）

そして、彼女が亡き主人の手によって初めて剃毛責めを受けたときのことを次のように告白の文中で語っている。

「私のジャングルは比較的濃い方なのですが夫の手にした電気カミソリがブウーンという軽快な音を立てはじめますと、端の方から綺麗に刈りとられてゆきます。彼は時間をかけて、ゆっくり楽しみながら、丹念にその剃毛の作業を続けてゆきます。

私は限りない羞かしさの中に彼の強い視線とリズミカルな振動を感じて、消えいりたいような衝動を感じたのです。

この剃毛責めの好きな美しい荒尾慶子の剃毛をやるという光栄を私は得た。私は始めて彼女に逢ったとき、とても結婚生活を経験した女性だとは思えなかった。ＯＬか未婚のお嬢さんにしか見えない若々しさなので、私は駅のホームの雑踏の中であったにも拘らず、思わずカメラのシャッターを切ってストロボの閃光を走らせていた。

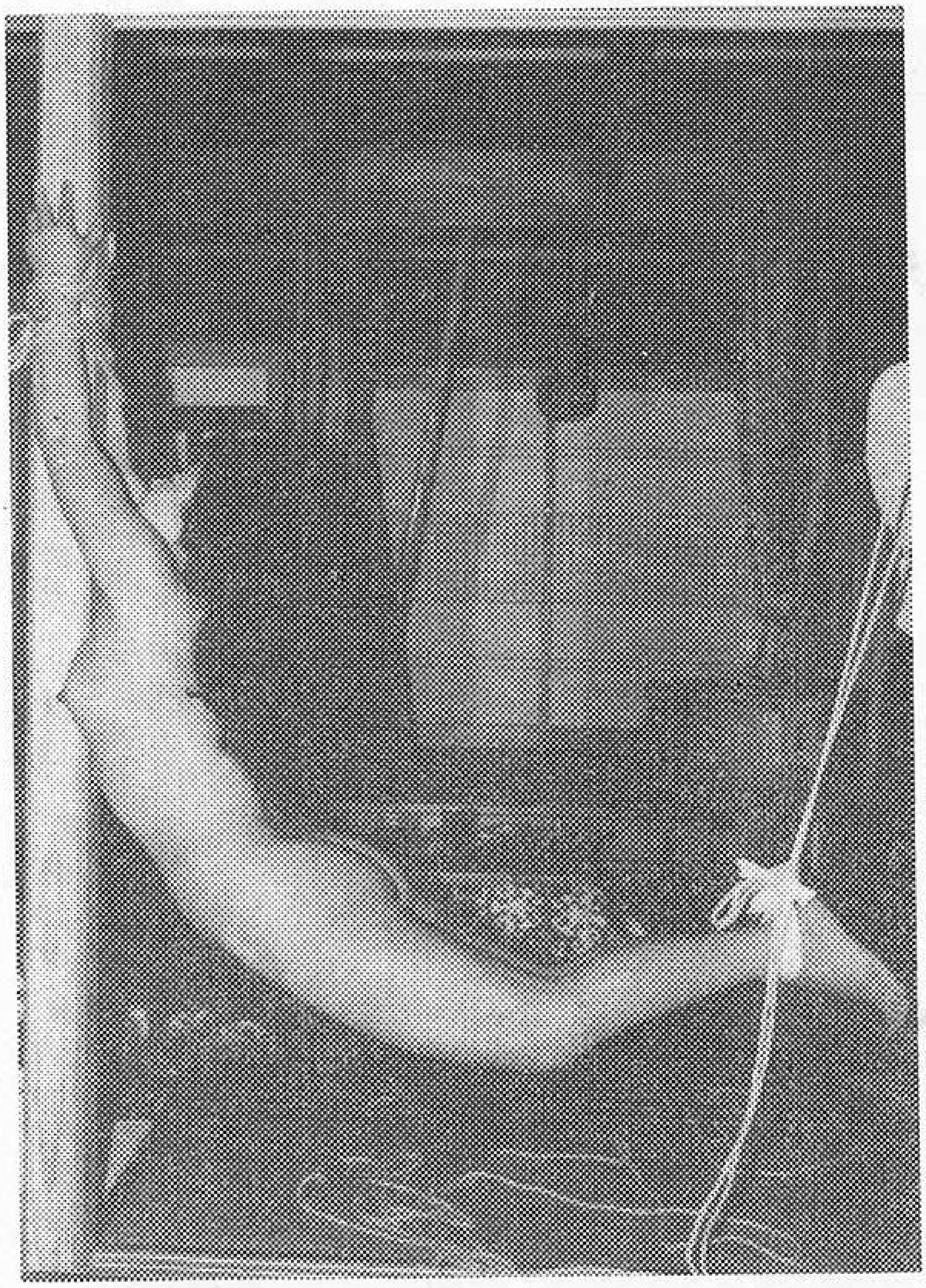
私がホテルの一室で、荒尾慶子を緊縛して剃毛やバイブ責めを加えたことは、彼女の告白としてすでに掲載されているので、再びここに繰り返す愚を避けたいが、私はこの女性とだったら、何度でもSMプレイをやってみたいという気持が、今でも強くする。

一番印象に残っているのは、やはり剃毛責めであった。剃毛の前後を比較しておきたいという気持があったので、フィルムで三本ばかり撮影してから、彼女の望む剃毛の儀式に移った。小道具として準備していったのは充電式の電気カミソリであったが、これは非常に便利でうまく成功し、思った通り丸坊主に余り時間をかけずに、することが出来た。

この時、私は荒尾慶子とは初対面であったにも拘らず、SMプレイは、まことにスムー

── 関谷　富佐子 ──

── 関谷　富佐子 ──



ズに進行したし、緊縛写真もうまく撮れた。もっとも彼女からの便りを見せてもらっていたので、凡その予備知識は掴んでいたのだがこのように順調に進行できたということは、荒尾慶子がきわめて素直で鷹揚な性格でありしかも、極めて賢明な女性だったからだと思う。このような女性を配偶者に持てる男性は幸福だと思った。

　四十六年七月号を飾った『流れる雲に身を托して』から始まって、同じく九月号の『地平線の彼方に』そして十二月号の『行く川の流れ』に至る流麗な荒尾慶子の告白文を読んでいると、なにかしら、彼女の詩情にひき込まれてゆくように思える。腎臓を悪くしたとかで、緊縛プレイの写真の撮影がお流れになって以来、ご無沙汰になっているが、是非、次のチャンスがほしいものだと思っている。

　渡部好美夫人を縛る機会が一度あったが、見事に剃毛された部分をあけっぴろげに開陳されるばかりでなく、更に責められるような風情であったが、私は主として写真撮影に熱中し、専ら責めの方は主人の光雄氏の手にまかした。部屋中が蝋骸だらけになるような激しい〈ローソク責め〉が展開されたが、SMプレイが白熱した割には、写真的には蝋燭責めというものは、もう一つ迫力のあるものにはならなかった。

　剃毛責めといえば、あの谷山久美子がモデル志願してきたとき、私はたった一回ではあるが緊縛して撮影したことがあるが、いつ、誰が剃ったのか知らないが、既にきれいに剃られたあとであった。

　二回にわたって撮影した三浦純子夫人も剃ってあったし、安井喜久子夫人、それにSMショーで有名なローズ・秋山も美しい丘陵を見せていた。こうして、列挙してみると、SMプレイの中での剃毛責めというものが、相当、広範囲に流行しているのだなあと今更のように考えさせられる。

たそがれのハイウェイ

六月号で読者通信を寄せてきている山添清子さんから連絡があって、東洋ホテルのロビーで待っているそうだから行ってくれないかと箕田氏から言われたのは、連休明けの五月上旬であった。うまくゆけば緊縛のモデルになってもらえるかもしれない――という言葉に誘われて新大阪駅の南、中津にある東洋ホテルへ車を走らせて地下駐車場へ入れる。

指定された一階ロビー、フロントの前のソファーに上品な和服姿の婦人を見つける。

「山添さんですか?」

と声を掛けると、「はい」と、待っていたとばかり気易くソファーから腰を上げる。目じるしに週刊誌をまるめて持っていてくれたので、すぐにわかる。色白の丸顔、小柄なので彼女の言う年齢よりも、うんと若く、どう見ても三十前の若奥様風である。

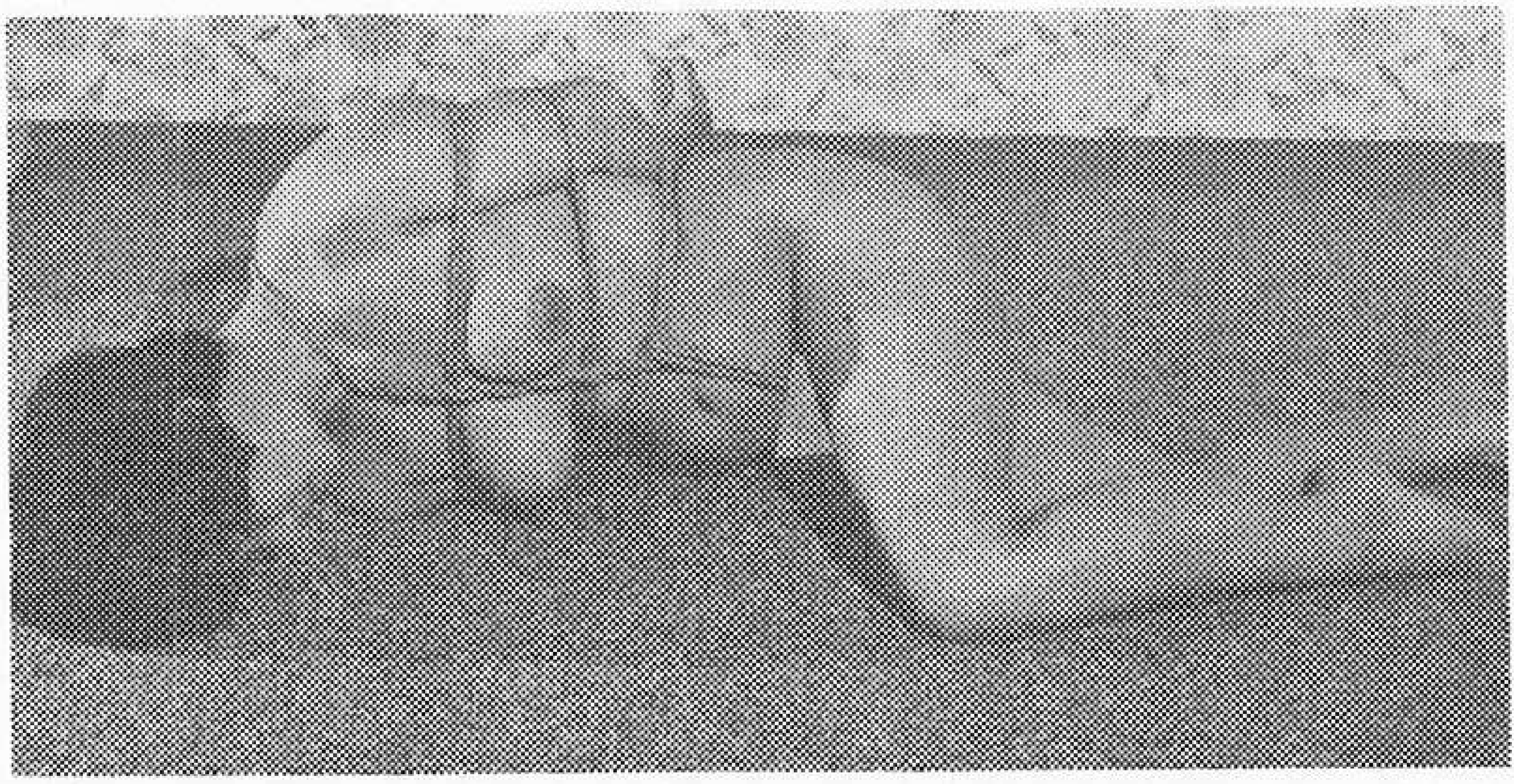
グリーン・ラウンジの庭の見えるベランダ側に席をとる。午後四時というのは夕食時には少し早いので殆どの席はあいていてガラガラなので落着いて話をすることが出来た。

ゴミゴミとした街の喫茶店なんかで待合わせるより、こうした一流ホテルのロビーで待合わす方が、ゆったりと出来てよい。車も無料で利用者に開放している地下の駐車場を使うことが出来るし便利である。

鼻にかかった甘ったるい声で語る山添清子は上品な物腰のなかに、何かしら、セクシーなものを感じるが、だが、読者通信の範囲の予備知識から考えていたよりは、ずっとしっかりしていた。いろいろ世間話を交わしている間に、これは一筋縄ではいかないゾ――という念を強くした。

ボーリング、ゴルフ、ダンス、ドライブなんかに御一緒したい――というのが彼女の希望らしかった。責めとか縛りの方へ水を向けてみたが、勿論その方の経験は皆無らしく、知識もSMに関しては余り深くないようだ。

── 荒尾慶子 ──



——荒尾慶子——

初対面の最初から、余りエッチな話もどうかと思われたが、それとなく聞きだしたところでは、ボーリングは欲求不満のはけ口としては、健康的ではないかしら——と言っていたし、ダンス、ドライブは、むしろ欲望が昂進するのじゃないかしら——と言っていた。

ゴルフはOL時代、秘書をしていて覚えたらしく、ゴルフにお伴出来たら最高だわ——と洩らしていた。

さて、肝腎の縛りと写真撮影の方はどうかというと、経験はないから恐いけど、やってみようかしら——と人ごとのように言っていたが、写真をうつすのは今はイヤと、はっきり断わった。いずれ、そのうち、気が変わったらうつして頂くかもしれないけど、と、はぐらかされてしまった。

腹ごしらえも適当に出来たので中津入口から新御堂筋線に入って北進、万博道路を池田へ向かう。すべて立体交差なので快適のハイウェイである。しかも有料道路でないのでこたえられない。但し白バイには十分注意しなければヒドイ目にあう。私はスピードアラームを六五キロにセットして警報音の鳴らない程度にセーブして走行車線を走らせる。

彼女はたそがれのハイウェイのドライブが気にいったらしく、今日は十一時頃までに帰ったらよいので、このまま海の見えるところまで走ってほしいと言う。国道一七一号線に入って西進。左折すれば大阪国際空港、直進すれば宝塚と三田方面。神戸方面へは三本道を稍々少し左へ向かうのだが、高速で進入しているだけに道路標識を見誤ると、とんでもないところへ行ってしまう。

ふと見ると、ITAMIボウルのネオンがつきはじめたところである。幸い左側の道路沿いだったので、そのままハンドルを切って駐車場へ車を寄せる。私は正直なところ、出来るだけ早く、彼女を裸にして縛れる場所へ行きたかったが、ムード作りが成功したら直行するつもりで、とにかく、そのボウルに立ち寄った。

外へ出た時は、すでに日はとっぷりと暮れていた。ネオンがまたたき道路の両側の様相もすっかり変わっている。新緑の生暖かい空気が頬にふれて汗ばんだ肌に快い。ここからは京都方面、神戸方面、宝塚有馬方面、大阪市内方向と、どちらへでも行ける分岐点である。だが、彼女は海を見たいと言う。もう夜だから海も見えないだろう。私は早く落着ける場所へ行きたいと心中願っている。車のト

ランクには撮影道具一式と緊縛用具一式を忍ばせてあるが、果して活用出来るチャンスがあるか、どうか。

車はいつしか西宮、芦屋と過ぎて神戸市内へと入る。神戸市内の地理には詳しくないしそれに夜なので、右へ行ったり左へ行ったりうろうろする。布引滝橋のところでは行きどまりになっているので新幹線の新神戸駅の灯を左手に見ながら、そのまま道路に従って右折する。このあたりの熊内橋通りに印度人の奇クの読者があって資料の交換をしたことがあって、三度ばかり来たことがある。

ネオンの広告がチラリと見えたので、そこを左折して山手へ向かって坂道を走ると、ぽっかりと大きな口を開いたような格好で駐車場が見える。私はそこへ入るのが当然のように車を乗り入れた。

「ひやーッ、私、こんなとこへ来たの、はじめてだわ」と彼女はあわててハンドバッグからサングラスを出してかける。

部屋に落着いてから、「お風呂へお入りになりませんか」と、すすめたが、「いいえ、帰ってから内で入りますから」と答えて、手を膝にしたまま固くなっている。ストッキングからズロースまで、そこら中、脱ぎちらかして浴室へとび込んでいる二十娘とは、大分様子が違っているので、一応、道具一切、運び込んではきたものの、それらをひろげていいものか、どうか迷っていた。

―― 荒尾慶子 ――

「編集部から、ことずかってきたのですが、貴女に読者通信の返事がきたら、どうしましょうか、って言っていました」

「ええ、私、局留で連絡を受けていたんですけど、今度お逢いしたとき、電話番号、申し上げますわ。それまでは、やはり局留でお願い出来たらと思いますの。実家の両親が大阪の郊外に住んでいますので、そちらの方でもかまいませんのですけど……」

真面目な話は、そこまでで済んだ。私が彼女のサングラスをはずして白い素顔を目の前に迎えたとき、火のように燃え上がっている熱い肌が着物を通して私の両腕に感じられた。

着物を脱がすというものは、まどろかしく思われるくらい時間のかかるものであるが、やっとのことで豪華な着物のすべてを足袋に至るまで脱がし終えたとき、そこに白磁のような、すぐにでも壊れ

そうな真白い裸身が身のおきどころのないような羞らいの中で横たわっていた。

二本の腰紐が、か細い手首にからんでゆくと彼女は諦観したように口を少し開けて熱い吐息を洩らし眼は軽く閉じられていた。ピンク色に染まった肌だけが、どこを触っても燃えているように熱かった。

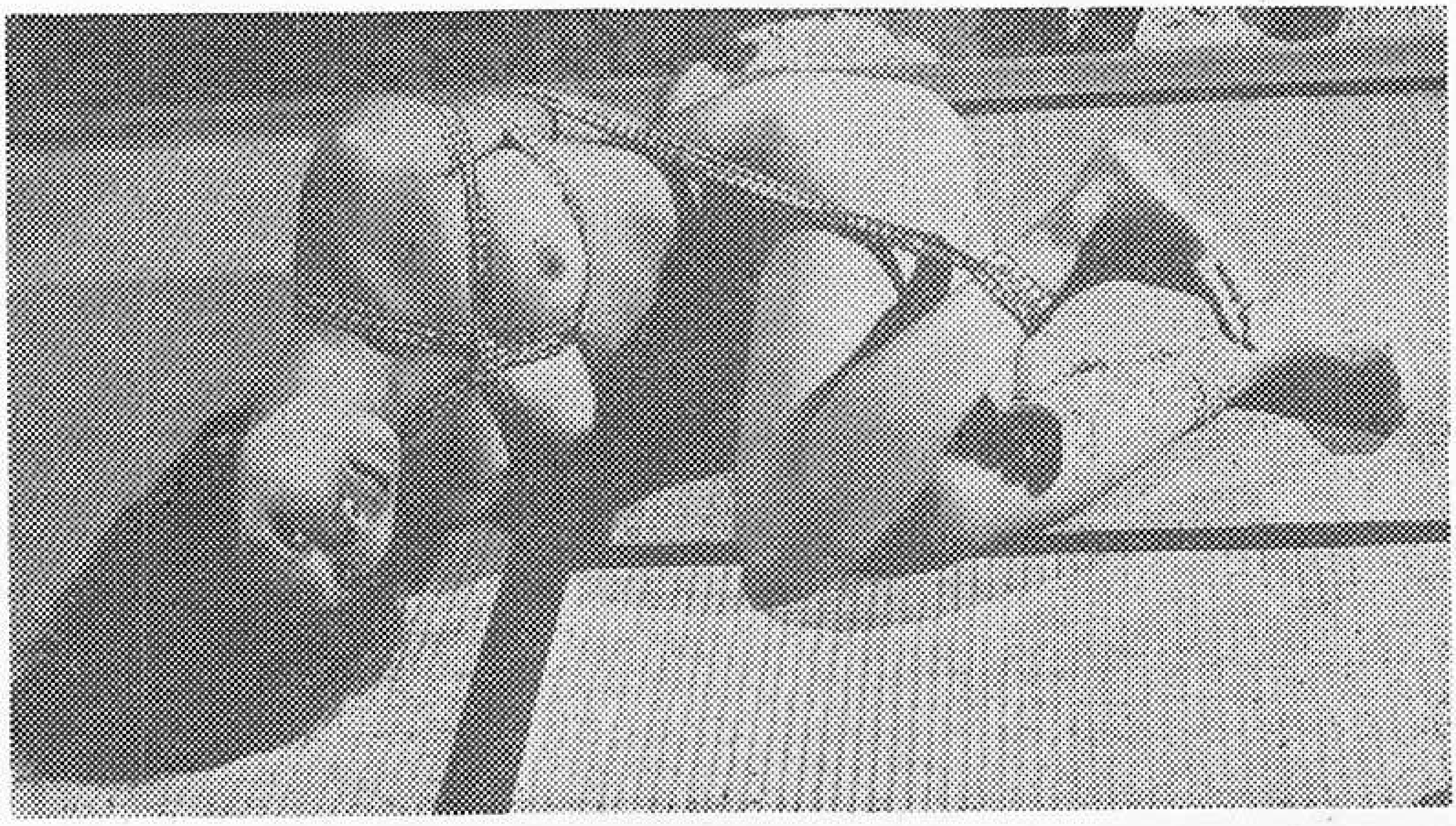
「ねえ、お願い。写真だけはとらないで。とってもいいときは、私からお願いするから」

うっすらと薄目を開けて、そう言った彼女の真意はわからなかったが、私は今更、あの重いカメラを手にする気にはなれなかった。

一風呂浴びて、ベランダへ出たとき、私達はパノラマのように展開された素晴しい神戸市内の夜景を眼下に見て、あッと感嘆の声を洩らした。赤、青、ピンク、黄、緑――と、さまざまな色が点滅し瞬き、移動してゆく。

香港の百万ドルの夜景は点滅しないが、神戸の夜景は五彩のイルミネーションが複雑な動きと変化を見せて目を楽しませてくれる。

港内に碇泊している船のものか、或は燈台のものか、サーチライトの白い帯が夜空を区切って、幾筋も幾筋も交叉している。五月の海から吹きつける潮風が快く頬をなで、夜の帳（とばり）は、昼の喧騒も汚濁も一切消し去っているかのように見えた。



――深田菊子――

ムードというものは不思議なものである。あの淑かで上品な若夫人が、何故あのように激しく燃え上がったのであろうか。闇はただそうした謎をすべて生暖かく包み込んでいるように思える。吐く息さえも、なんとなく悩ましく、なまめかしく思える新緑の宵であった。私は再び彼女をうながして、部屋の中へ招じ入れた。

「たまには写真を撮らなくったって、いいじゃないか」

そう自分に言い聞かせて、私は彼女の浴衣の紐を、ほどいていた。

この原稿をここまで書きかけたとき、笠井奈保子から電話がかかってきた。あわててペンを置いて受話器をとりあげると、自由日記帳がまとまったので、お見せしたい――ということだった。

よし、それでは、埋め合わせに笠井奈保子の、あのムチムチとした餅肌を思いっきり縛りあげて、ジャンジャン写真を撮りまくってやろう、と考えた。

肌に掌を押し当てれば、べったりと吸いついて離れなくなるような粘着力を持った、笠井奈保子の白肌に、黒ずんだ縄を埋めるよう

に締めつけたら、緊縛フォトを見ることの大好きな彼女は、どのような呻き声を、洩らすことだろうか。

縛られることも好きになって、若しM女の本性を露呈するようだったら、そのときは、若い女性の羞恥心を最も馳りたてる浣腸責めにしてやろうか。異性の手で無理矢理、施される浣腸責めほど、羞恥に満ちたものはないであろう。

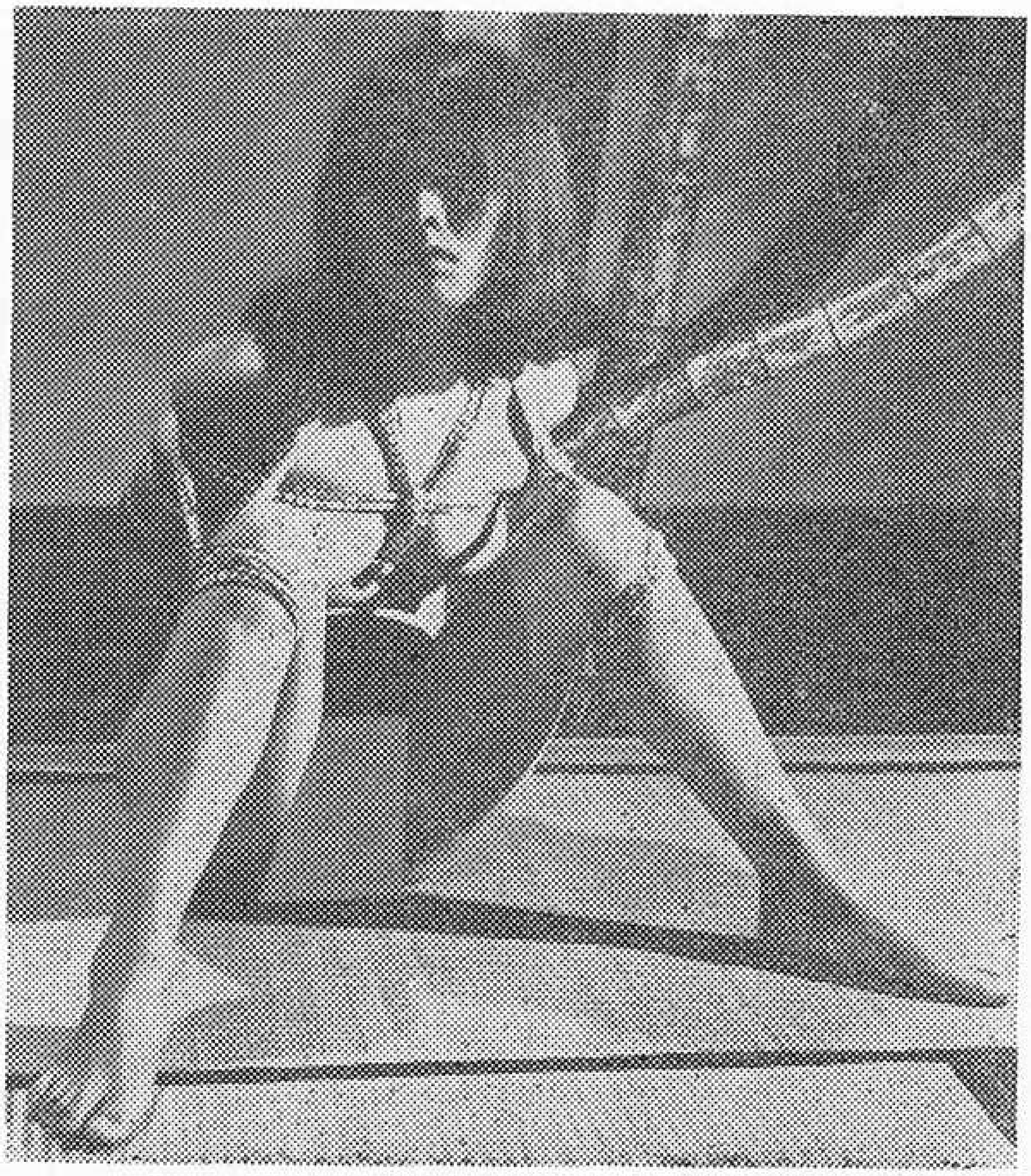
原稿を書いているところへ電話が掛かってきたり、人が訪ねてきたりしたらアウトである。なんとか書き続けようと思っても、一気にペンを滑らせていたのが、一頓挫きたして書きにくい。ペンを放りだして、そのままにしておいた。

その間、笠井奈保子と逢って日記帳を借りるついでに、SMについての講釈をしているうち、いつの間にやら、SMの解説からSMプレイの実践に移り、そして彼女の希望で写真を撮影してしまった。

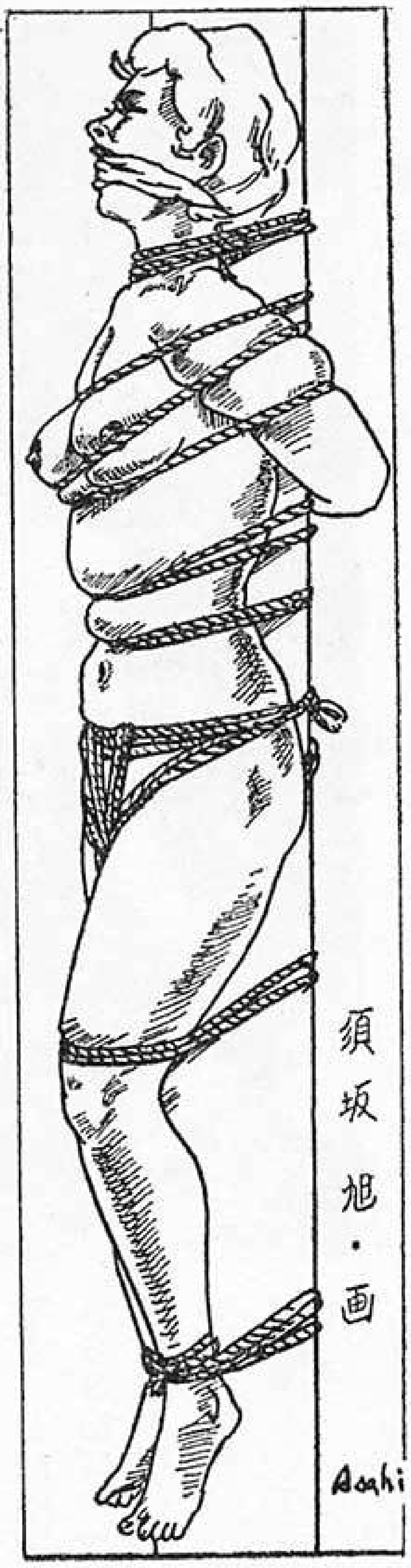
そのことは、いずれ笠井奈保子の自由日記帳で書かれることと思うので、私は私の立場からのカメラ・ルポの方へと、ペンを向けようと思う。

原稿を書き継ぐとなれば、先ず今までの部分を、読み返してみなければならない。一週間も十日も経ってからだと、あれあれ、こんなことを書いたのか……と、自分ながら、あきれ果てる個所があったりして、とうとう意欲を失ってしまった。けれど、編集部からは早く原稿を届けろと催促されるし、ええい、ままよ、このあたりでおしまいにしておいてやろうか――と考えていたとき、前田真知子上阪という報せを受けた。

六月号の巻頭で、提崎昭人氏が、「前田真知子嬢自身の告白ばかりではなく、撮影した人のルポも知りたいものである。なぜなら彼女の告白からでは、撮影の様子が、どんなものであったのか、全然見当がつかない。彼女の感度やなんかでも、やはり撮る側からでは受け取り方が違う点もあるだろうし、ぜひ知りたい。撮影されたのが、どなたかは知らないが、あるいは塚本鉄三氏ではないかと思われる。ルポを書いて撮影の雰囲気を克明に伝えて欲しいものである。」と言っている。一応これでペンを置くが次稿をご期待願いたい。



――深田菊子――



須坂旭・画

ある人妻からの手紙

大川昌弘

私は日本交通公社で出している「旅」という雑誌に昨年夏、投書したのだが、その時、三通の手紙を未知の人から貰った。その中の一通には、文通を斡旋することを目的とした交友誌『美徳』の見本と入会申込書や案内のパンフレットが入っていた。面白そうなので私は入会の申込みをすると共に、私は自分の投書を、その『美徳』という小冊子に載せて貰った。そして私は、石井恵子という一人の人妻と知り合い、文通するようになった。

石井恵子から私に対して送られてきた手紙は本誌の読者にとっても興味深いと思うのでここに紹介したと思うが、余りにも露骨すぎる個所は、私の手で適当に削っておいた。手紙としては、それでもいいが誌上に発表するとなれば穏当を欠くかもしれないと慮かったからである。

（大川昌弘・記）

I

交友誌『美徳』にて貴方様のお名前を拝見しましたので、お便りする次第です。割切って文通できる方だと思いますので、最初から思いきった事を書きますが、どうか軽蔑なさらないで下さいね。始めてですので、先ず私の事を自己紹介させて頂きます。

私は三十一才になる人妻でございます。結婚して八年になり、四才になる男の子がおります。身長一六一センチ、体重五六キロで今迄これといった病気もしたことがなく、極めて健康で、自分で云うのも何だか恥かしいのですが性に対する好奇心も人一倍、強い様でございます。今迄の性に関する体験を並べますと、オナニー、同性愛、被強姦、外人との性交、夫婦交換、SMプレイ等です。

序でに、主人の事も簡単に紹介させて頂きますと、年令三十八才、身長一七八センチ、体重七七キロ、一時肺結核を患った事がありやや精神的なサディストで、性具を蒐集したり、女性のヌードを撮影するのが趣味といったら、大体お判りでしょうか。

次に私の性体験を始めから書いてみたいと思います。でも長くなりそうなので、お便りの度に少しずつ、書く事にします。

私の実家は、福岡県遠賀郡××町です。父は弁護士で可成り裕福なほうでした。私が現

在の様な女になったのは、第一は母の影響です。母の事を書くのは少々気が引けますが、現在から考えて大変、割り切った女性で、娘の私の前で性の話を大っぴらにし、又、末っ子だったので父母と同じ部屋で寝ていた私は度々両親の性の営みを見聞きしたものです。それも父の方は私に気を使って「声が大きい恵子に聞こえるよ」等と言うのですが、母は「眠ってますよ。大丈夫よ、あなた」等と言って、時には電灯を付けたまま抱擁するのです。

或時、それは丁度期末試験の最中でした。

その日は父が旅行中で夜中に、ふと私が目を覚ましますと母がトイレに立つところでした。其の内、何か人声が聞こえるので、そっと廊下に出て見ると、母が父の書生の大場さんに後ろから羽交い締めの様にして抱かれているのです（書生の大場さんは住込みでトイレの横の部屋でした）。私はびっくりして助けに行こうとすると母の声が「大場さんダメよ、こんな所で」と聞こえたので思わずハッとしました。母の片足は縁側の低い手水鉢に掛かり、その後ろから大場さんの手が母の腰を回って前の方を弄っているらしいのです。

私はその後も何度か母の浮気を目撃しました。そして、淫乱な母を時には軽蔑しましたが、憎む気にはなれませんでした。それは母が若く美しく、又、底抜けに明るい性格だったので、罪の意識が無かった事によるのでしょう。そして、私の内部にも共通したものがあった所為だと思います。もっと色々書きたいのですが、今日は最初ですので、この位にしておきます。始めてのお便りに変な事ばかり書いてごめんなさいね。お返事、楽しみにお待ちしています。

II

早速、楽しいお返事有難うございました。殊に同封の写真は本当に興味深く拝見しました。唯、欲を申しますと、もう少しSM的であれば尚一層素晴しいと思い、多少残念に感じました。モデルの女性の年令や職業、境遇等も書いて下さいね。貴方は妊婦に興味を持つと書いてありましたので、私の妊娠時の写真同封しておきます。少し恥かしいのですけれど思い切って送ります。その他、私の写真は色々ございますが、機会を見て、其の内、お送りします。

それでは前の続きを書きましょう。中学校まで両親と一緒の部屋で寝ていた私が独立した離れの個室に移ったのは、父に大学進学を許された高校二年生の頃でした。その頃の私の家は、両親と姉、それに書生の大場さん、お手伝いの照代（三十五才の未亡人）と照代の息子の隆君（高校三年生）と私の他に六人もいました。ある時、その日は父母は不在、大場さんも外出。姉は銀行に勤めていて留守でした。私は試験勉強に疲れたので、蒲団を敷いて昼寝をしていたのです。うつらうつらしていると、照代さんの息子の隆君が「恵ちゃん」と声をかけて部屋に入って来ました。隆君は時々、私の勉強をみてくれていたのです。私は眠った振りをして、彼が何をするか暫くじっとして様子を見ていると、隆君はそれから三度程私の名を呼んで起こそうとしました。私は熟睡した振りをして、わざと寝返りを打ち、片脚を蒲団の外へ出し太腿のあたりまで剝き出しにして見せました。すると彼は黙ってしまい五分間位じっとしていましたが、今度は小声で「恵ちゃん」と呼び、尚も私が眠った振りをしていると私の足許の方に坐り蒲団をそっと捲くったのです。私が、じっとして様子を窺うと、次に私の寝巻の裾を拡げました。私はその時パンティを穿いていなかったのです（昔からの習慣で、寝る時は

いつも脱ぐのです）。だから風がスウスウと下半身に感じられ同時に彼の視線が、じっとそこへ注がれているのを感じ、変にむずむずした気持になりました。其の内、彼はいよいよ大胆になり、私の足首を摑んで股を開かせその間にしゃがみ込んで覗いているらしく、熱い息が感じられるのです。

それ以来、彼は殆ど毎日、私の所へ忍んで来る様になりました。私は彼が好きではありませんでしたが彼を拒みませんでした。そして度重なる毎に、始めに感じた焼ける様な痛みは段々薄らぎ、妙な快感を感じる様になりました。彼の場合は呆気無い程、時間が短いので物足りませんでした。私はそれが不満でもっと上手で時間的に長い人としたいと思いある時、彼に「あなたの外に、もっと経験のある人を連れて来て頂だい」と要求したのです。彼は驚いて断わりましたが、私はどうしても二人の男性に交互に抱かれたらどんなに良いだろうという考えを捨てきれず、もし言う事を聞かないなら彼とも遊ばないと言ってそれから数日間頑強に彼を拒絶したのです。

遂に彼は根負けして、ある夜二人でやって来ました。もう一人は例の大場さんでした。その夜、私は二人の間に全裸で寝かされ交互に接吻されました。私は甘いロマンチックな気分になり、そのまま体全体が溶けてゆくように恍惚とした気持になりました。腰が勝手に動き出し、体を反らしたくなるのです。

その後も同じ事を繰り返しましたが、最後には余りの快感にぼんやりしながら、頭の中で「やっぱり二人として良かったわ。でも、もっと三人四人としたら、どんなに良いかしら」等と考えていました。でも実際に二人を同時に愛したのはその時だけで、その後は大場さんと隆君が代る代る、やって来ました。

そういう事が三カ月程続きましたが、ある晩、隆君が忍んで来るのを照代さんに発見されて来なくなり、大場さんも母に見付かって姉が同じ部屋で寝る事になったので、とうとう誰も来なくなりました。

私もそんな事から学校の成績も落ち、大学進学も諦めました。そして高校を卒業すると生花や茶道を習わされて、ごく平凡な女性に戻らされました。

それから結婚迄の四年間、特に書く事は、父が脳溢血で亡くなった事、姉が同僚の人と結婚した事位で、先ず先ず平凡な生活でしたが、唯一度、次の様な事がありました、

私が北九州市の一番立派な映画館に洋画を見に行ったのです。そして途中でトイレに行ったのですが、ずっと我慢していたので、トイレの戸を閉める前にパンティをずらしてしゃがみ、それから手を伸ばして鍵を掛けようとしたところ、その戸を外から強引に開いて若い男が入って来たのです。私は驚いてオシッコも出なくなり立ち上がりました（勿論男女は別々のトイレになっています）。するとその男はナイフを出して「おい、声を出すなよ」と言って鍵を掛けました。私は恐怖感に襲われながらも、その男のナイフを持つ手がブルブル震え、又彼が未だ二十才に成らない若さなのを知りホッとしました。むしろ彼の方がオドオドしていて、それでも口だけは、「ねえちゃん、パンティを脱ぎな」と凄むのです。

その時、隣の便所に、子供連れらしい人が入るのが分かりました。だから声を上げれば良かったのかも知れませんが、何と言ってもナイフが眼前にあり、声を出して顔でも斬られたら大変です。それに私も内心では、ここ暫くの平凡な毎日に飽き足りない気持があったのでしょう。私は素直にパンティを脱ぎました。彼は片手で私のブラウスのホックを外し右の乳房を引っ張り出し、乳首を指先で弄

びました。私はどうとも成れという気持で、目を閉じると、彼はナイフを持った手を私の背後に回し私の口にキスしてくるのです。

その頃、私は彼の雰囲気からこれ以上の害意が無いのを感じ、すっかり落ち着いていました。そして、未だ少年の薫りの抜け切らない彼に一種の好意さえ感じ始めていました。隣のトイレに、人がいなくなったのを知った私は「ナイフを仕舞ってよ。声なんか出さないから、好きな様にしていいわ」と言ってやったのです。彼は私から離れて疑わしそうに見詰めていましたが、私の言葉を信じたらしくナイフを仕舞うと、今度は甘えた口調で、「俺、見たことないんだ。見せてくれよ」と言うのです。私は困りました。何といってもトイレの中です。タイル張りで清潔でしたが寝るわけにもいかないのです。そこで股を大きく開いて立ち「いいわ」と言うと、彼はしゃがんで、しげしげと眺め始めました。

観察されているという心理的な被虐意識が私の体のある部分の変化を一層早め、彼もその肉体の変化に気附いたらしくその部分を摘まんだりするのです。私はその瞬間、まるで電気に触れた様に感じました。

彼も、やっと落ち着いてきたのでしょう。十分も経過した頃「お姉さん、有難う」と礼まで言って出てゆきました。

私はホッとするより何か物足りない気持でそれまで堪えていた尿意が強まると共に便器に跨がっていました。さんざん刺激され高ぶっていた私の神経は忽ち絶頂感に達し、思わず声を漏らすと同時に、放尿してしまいました。

如何でしたか。余り面白く無かったかも知れませんが、順を追って克明に書いて行くつもりですので我慢して読んで下さいね。この手紙を書いているうちに、その当時の事を思い出して何となく昂奮してきましたので今日はもうこれ以上、書けませんので失礼しますわ。では楽しいお返事を早く下さいね。お待ちしています。

Ⅲ

大変早いお返事有難うございました。早速ですが、先日の続きに移ります。私の結婚の動機は次の通りです。

主人の父は産婦人科医で妻と早く別れ、当時看護婦だった女性と再婚し、その後数年して病没、後妻となった主人の義母は未亡人になると同時に医院を閉鎖し未生流の華道教授を始めたのです。そして私はその義母の所へお花を習いに行っていたわけです（子供は現在の主人一人で当時三十才でしたが、どういう訳か医者を嫌って役所に勤めていました）

私は、そこで主人の義母に見込まれて結婚したのです。主人に関しては可成りの二枚目で、その上、長身なので色々女性関係の噂も聞いていましたが、前述の通りの私ですのでむしろその方が望ましい位に思われ、幸い両親も賛成してくれましたので、話は順調に進みました。

唯一の心配事は私が処女でない事実を見破られはしないかという事だったのですが、さすがに母は私の秘密を見抜いて、こまごまと注意を与えてくれた上、父の知人の病院へ連れて行き処女膜再生手術を受けさせてくれました。そして総ては順調に経過し初夜も無事終えました。主人は大変優しく性的な面でも中々技巧派で理想的な男性でした。始めの間は余りの快感を堪えるのに苦労した程で、それも一週間も経たないうちに、遂に我慢出来ず声を上げてしまいました。主人は却ってその事を喜んでくれて、私も主人に満足して平凡で楽しい生活が続きました。

けれども結婚後、丁度一年余り経過した頃

に私達夫婦にとって画期的な事が起こりました。詳しく書くと余りにも長くなりますので重要でない所は省略して書きます。

　その年の夏、異常渇水で水不足のため、アパートの二階だった私達の部屋は水が出ず、一時引越す事になりました。恰好の家が見つかったのですが建築中のため一カ月後でないと入居出来ず、と言っても水無しでは一日も生活する事は不可能なので、やむを得ず一カ月程、六帖一間を間借りする事にしました。

　その家は八帖と六帖の二間に台所と便所だけで、しかも八帖には家主の左官夫婦が住んでいるのです。左官の主人は磯田というのですが、奥さんの真弓さんは何時も親方と呼ぶので私達も彼を親方と呼ぶ事にしました。親方は四十五才位で、背は余り高くありませんが、がっしりした体格で、汗の匂いのする様なタイプです。

　奥さんは三十才位で対照的に色白でほっそりした美人でした。私は真弓さんと直ぐ打ち解けて仲良くなりましたが、私達は親方夫婦に気兼ねして夜の生活も満足に出来なくなりました。なにしろ隣との境が襖一枚ですのでうっかり声も立てる事が出来ません。そして引越して数日後、私は大変なものを見せられたのです。

　主人が勤めに出た後、私が本を読んでいると隣室から真弓さんの泣き声がするのです。私が驚いて見ると何時のまにか境の襖が一寸程開いているのです。その間から思わず覗いて見ると、真弓さんが全裸で仰臥させられ、細い両腕は頭の上で縛られているのです。しかも形の良い乳房の先は洗濯バサミで挟まれており、親方は真弓さんの口を吸ったり鼻を摘まんだり耳を噛んだりして戯れているのです。親方は「おい、真弓。隣の奥さんが覗いているぞ。恥ずかしいか」等といい、「いや……いやッ。いやよ……」と、上ずった声で真弓さんは繰り返しました。

　親方は其の内、縛った両腕を引っぱって、そのままぐるぐると部屋中を引き摺りまわし足の親指を彼女の口の中へ押し込んだり、又体中を痣が出来る程抓ったり、最後には真黒な毛だらけの尻部を真弓さんの顔に乗せたりするのです。真弓さんが「ああ、もうかんにん。ゆるして……ああー」と絶え入る様な呻き声を上げるまで続きました。

　私は胸がドキドキして、そこで襖をそっと閉めました。何となく私自身が親方に責められている様に体中が熱くなり、それ以上、見ていられなかったのです。始めてみるSMプレイ。それは風俗誌など読んで一応は知っていたものでしたが、真弓さんの苦しそうな表情や声の中には、何か恍惚としたものが感じられ、私自身を彼女に置き換えてみたい様な気持に駆られてしまいました。翌日も又同様な光景を見聞させられました。襖が開いていて明らかに、私に見せつけ様としているのです。

　数日後、私は久し振りに近所の映画館へ行きました。丁度、私の見たかった洋画がリバイバル上映されていたのです。夕食後、主人を誘ったのですが、洋画は嫌いだと言うので私一人で行きました。映画館に入ってみると非常に客の入りが悪くて、中程の席に女高生が三人と若い夫婦が一組いるだけでした。私は後列の片隅に一人離れて坐り、のんびり映画を楽しんでいました。

　そして三十分も経った頃、不意に私の隣の座席に、誰かが腰を下ろしました。私は沢山空席があるのにと不愉快になって席を変え様と立ち上がりかけますと、「あ、隣の奥さんじゃないですか」という声。よく見ると親方なのでした。「こりゃ、偶然だ。私はね、これでも洋画が大好きでね。丁度、良かった、

一緒に見ましょうや。おや、旦那さんは来なかったのですかい」

彼は多分、私達の会話を聞いていて、私が一人だという事を知って来たのに違いないのです。私は覗き見したSMプレーの事が頭に浮かび何となく体が震えました。しかし今更席を変えるわけにもいかず、体を固くして画面を見詰めましたが一向に頭に入りません。

其の内、親方の手が伸びて来て、私の右手を掴むと自分の口へ持っていって指をしゃぶり始めました。私は声を出すわけにもいかずじっと我慢していますと、親方は私の耳に口を当て「旦那には内緒だよ」と言って私の手を自分の手で包んでマッサージをさせるのです。

しばらくして、不意に私の手を払いのけ、周囲を見回して人がいないのを確認しますと私の腰に手をかけ、軽々と持ち上げて膝の上に乗せました。「親方、いけませんわ。人が見ます。主人ももう直ぐ来ます」私は必死で拒絶しましたが親方は慌てず騒がず「大丈夫旦那は来やしねえよ。それに誰も見てねえから安心しな」

そう言って左手を胸へ差し込んで私の乳房を揉み、右手で私の浴衣をすっかり脱がしにかかりました。まさか客が五人しかいないといっても客席で全裸になるわけにはゆきません。

私はその時、以前、映画館のトイレで若い男に悪戯された事を思い出し「親方、ここではダメよ、トイレでね。お願い」と言ってしまいました。

親方は「フーン、奥さんはトイレで色々見て欲しいんだな」というなり、私を立ち上がらせ、横の扉から女性用のトイレへ入りました。そして私は、浴衣を剝ぎ取られ、親方の命令に、何時の間にか服従していました。

私は今迄夫にされた事もない鄙猥なポーズや言葉を平気で受け入れ、親方の言うがままに、自分の体を動かす事にマゾ的な快感を覚え始めていたのです。心の奥では教養の無い親方への軽蔑と共犯者に対する様な安心感。そして、親方の様な男に私の総てを晒すという被虐的な喜びが混合して、私は酒に酔った様に夢中で手足を動かしていました。

絶えず誰かトイレの戸を開けないかという危惧の念に駆られながら、ある時は洗面台の上に攀じ登らされ、下からアヌスを覗かれ「奥さん、浣腸された事あるかい。真弓なんかヒイヒイいって喜んでるぜ」等と、いわれたり、両脚を開いて立ち、そのまま上体を傾かせて、両手で両足首を掴むポーズを取らされ、背後からさんざん悪戯をされたりして最後にトイレのボックスへ二人で入った時は、私は興奮の余り自分から親方に縋りついて、今迄にない絶頂感を、次々と味わっていました。

その後で、私が、オシッコをするのを観察してから、

「今夜は良かった。奥さん、旦那には内緒だよ」

といって、出て行きました。私は暫くボーッとして、浴衣を身につけるのも忘れて、トイレに、しゃがんでいました。

夫婦交換から、私の体内に芽ばえたSMへの魅力、そしてSMプレイへと書くつもりでしたが、今日は長くなりましたので、後は次便に致します。

私にこんな事を詳しく書かせるなんて、あなたは悪い人ネ。

私は書いているうちに思い出してパンティが濡れそぼって来ましたわ。

では、お返事楽しみに待っています。

――（おわり）――

連載・アブ紳士行状記

M派交友録

―〈なおみの巻〉(3)―

鬼山絢策

一般的なS

私は本来、バーとかキャバレーなどというのは、あまり好きではない。

もともと、あまり飲めぬたちで、つき合いでは行ったが、一人で行ったことは一度もなかった。若い頃は、まじめで内気だったから（今でも、そうだが）女の子に傍へ寄られると、しゃべる言葉を失ってしまうのだった。

また、バーとかキャバレーそのものを軽蔑していた。何で、あんなとこで、高い酒を飲まなければならないのか。外人が日本のキャバレーやクラブは世界一、高いと言うが、全くである。たとえ、社用族といえども、何のために高い酒を食らうのか。私などはキャバレーに接待されるのは、此方で、断わっている。

それが今、渋谷恋文横町のバー「プペ」に耽溺している。

考えてみると、一週間のうち三、四日は行っている。お蔭で酒の量も、少し上がったようだ。家内や娘などは「少しは飲むようになった方が、いいわよ」と、奨励してくれる。

自分達が結構、飲むのに、親父が飲まないのでは、具合が悪いからだろう。娘は「お父さんの行くバーへ連れてってよ。酔っぱらうとこ、見たいわ。誰か、いいひと、できたんでしょう」と家内の前で親父を、ひやかすから、「じゃ今度、連れてってやるよ」とは言う。どこか違う店に、馴染みをつくっておかなければならないと思った。「酒好きな友達に引っぱられて行くんだよ」と馬場氏をダシにするが、馬場氏に会って、その話をすると「ぼくも鬼山さんをダシにしてますよ」と言うことで「共同戦線を張りましょう」と笑っ

たが、どこの家庭も同じことだ。

何で、こんなに「プペ」に入りびたるようになってしまったんだろう。

それはママの、なおみが私の好みに合った顔とスタイルをしている。後年、渥美マリが売り出してきた時、すぐ、なおみを連想したし、プロボウラーの須田開代子をテレビで見た時も、なおみに似ているな、と思った。

それと「プペ」に通って来る客層が、ちょっと変わっていて、なおみのサジスティックとも言える荒っぽい客扱いに魅かれて来ているのではないかと思う節があった。

それにも増して私を耽溺させたのは、有線放送に勤めている羽島道雄という二十五、六のやくざ風な若者と、なおみのやりとりが私を、とりこにしてしまったのである。

馴染みになってしまうと、なおみは私に何でも打ち明けてくれたし、ひょっとしたはずみで、私を誘ったことが二度ほどあったが、どうも私は変な人間で、はじめての女性との交渉は、過去に失敗が多い。行きずりの旅の宿での一夜の女性なら、どうということはないのだが、好きになった女性とは、どうも、うまく行かない。臆病な、せいであろうか。臆病であると同時に、神経質でもあり、四十を過ぎて体力が衰えると、なおさら、気になるのである。これがインポ――とまで行かなくとも老人としての自覚があれば諦めもつくのだが、まだ、そこまで行っていない。いや調子さえ良ければダブルぐらいは行けるという、うぬぼれがある。それだけに、もし、だらしのない失敗をしたら、とそれが恐いのである。で彼女の好意だけを有難く受けておくといった状態であった。

馬場氏もまた、なおみのファンであった。先夜、なおみと羽島道雄との喧嘩からエスカレートして、なおみの花蜜の洗礼を受けてからは私以上に、のぼせているようだった。

ところで羽島道雄は奇妙な男である。女のくさったような、小ずるい嫌なところがあるが、果たして彼はMであろうか。

馬場氏とも話し合ったのであるが、馬場氏は完全なMだと言う。確かに、なおみに散々殴られたり蹴られたり、小便まで飲まされて普通の男なら、堪えられない、はずである。だが私は〝完全〟というには疑問がある。

あの夜、ビールびんを叩き割って暴れ出したのは、M男性のする行為であろうか。

「イヤそれは、あり得ることですよ。女性を残虐にさせるためのデモ行為として、先ず女性を怒らせるという手は、M派が常に用いる手段の、ひとつでしょう」

それは、私も知っている。しかし、道雄の場合は、それと少し違うような気がする。

第一、なおみという女にしても、私は真からのサジスチンではないと見ている。この点も馬場氏とは大分、見解が違うので、彼は世にもすばらしいサジスチンだと言う。

確かに男を虐めたり、羞かしめたりすることに興味を持つ女性ではあるが、それだからと言って、天性のサジスチンであるとは言えないと思う。私の知っている女性を省みても倉田由紀さん、玉井ひろ美などは、ほんとうのサジスチンではないと思っている。

鷹野めぐみなどが、ほんもののS女性で、あと岐阜で、たった、ひと晩であったが、仁科雅之を責めた芸者が、その後、仁科が死んだことを思い合わせると、或は、あの芸者に責め殺されたのではないか？（もちろん、病死だから、直接ではないが）とさえ想像されその二人ぐらいではないかと思っている。

つまりサジズムというものは、男女のいかんを問わず、理由なくして人を責め羞かしめるものである。その根因はセックスにある。自分のセックスのために、理由なくして人

を責める者。また人を攻撃したり、処罰する理由があったとしても、その過程において不必要な嗜虐を試みる者。過度な罰を加える者これがサジストであろう。

　この区別の方法が絶対、正しいとは思わないが、私は、そういう風に区分して考えたいのである。

　人は誰でも、サジスチックな面をもっている。子供の頃に一番、無心に単的に発露される。昆虫の羽や肢を一本一本、引きちぎって見たり、喧嘩して負かした相手に馬乗りになって「降参か降参か」と責める。相手が降参しているのに、更に加撃し、凌辱するのがサジズムである。

　なおみの場合は、羽島道雄を責める理由があった。サジスチックな行為は、怒りの発露の一手段に、すぎない。

「そりゃ、まあそうかもしれませんが、そこまで、きびしくしないでも、彼女は現にサジスティックな行為を、やっているのだから、一般的に見てSと解釈していいでしょう」

「まあ、一般的な見方をすればね」

「まだ分かりませんよ。これから、だんだんもっと凄いSの部分が出てくるかもしれませんよ。彼女には、そういう面があるのです」

「あの羽島を責めている時の表情などは、いかにも男を虐げて楽しむ風が出ていますね」

「鬼山さんは、彼女の蜜を吸いましたか」

「いや、まだ、あなたに悪いから。ハハハ」

「実際に直面して見ると、そういうムードが感ぜられるのですよ」

「ホウ、例えば、どんな」

「こないだ、ぼくの肩に足をかけていたでしょう。あれが凄く重いんです。殊更に、あの足の方に体重をかけていたんですね。それとぼくが吸うでしょう。普通の女性なら、それだけで満足しているはずですよ。それが彼女は、それだけでは飽き足りず、ぼくの口を、ふさぐんですよ。そして鼻まで、ふさごうとしてくるんですよ。これは完全なSだと思いますね。彼女は過去に、あの経験を相当、踏んできていますよ。いや息が詰まって、苦しいの何のって」

「なるほど。しかし、あの位置では、真上からというのではないけれど、まあとにかく上からでしょう。彼女としては、もっと奥まで舌が欲しかった。そういう場合、必然的に鼻が圧迫されるのではないですか」

「イヤ違います。あれは確かに意識的にやって来られたんですよ。ぼくは実際に受けたんですからね。想像でしゃべる、あなたより、信憑性があると思いますがね」

　そう言われては、一言もなかった。

安い遊び

　人を評価する場合でも、損害を受けた人は悪人だと言い、好意を受けた人は善人だと言う。人は多かれ少なかれ、善と悪を併せ持っているもので、勇気と怯懦とが正反対のものを持っているものである。

　なおみと言う女から、私は極めて女性らしい、やさしさの現われを見出すような、いくつかのファクターを、みている。彼女からプライベートな相談を受けた中に、そうした面を感じたのであるが、それは本篇とは係わりのないことだから省略するが、立場に依って人の見かたも変わってくるのは、やむをえない。

　彼女は、もと百軒店の暴力バーに居て、毎夜のようにカモを、くわえこんで責めていたと言われる。暴力バーと言うのは不当な料金を請求して、客がそれに応じない時に暴力を振るったり、脅したりして払わせるのであるが、本来、その役目は暴力団の兄んちゃんが

やることである。もめごとになってくると女達が、さっと居なくなって、代りに兄んちゃんの出動というのが、一般的ケースなのだが「ナポリ」という、なおみの店では、なおみが或程度、兄んちゃんの役目を、代行していたのである。

　それはナポリのマスターの狡猾な作戦で、同じ荒っぽいことをやるのも、男がやると角が立つが、女がやればサツに対する申し訳も或程度、緩和されると言った営業政策と見られるが、若いなおみは、その傀儡となっていたのである。そんなことまでして客から高額な金を絞り上げても、彼女達の手に入る金は僅かであり、生活の不安定さを自覚して、彼女は、まじめな店に転向したのだった。「プペ」という、この小さな店は、彼女が普通のキャバレーに勤めて貯金して借りたものだと言う。やくざ仲間からも一応は縁が切れているが、いまはまた、地元の脇田組という、これはこの店の大家だが、それに多少のつながりはあるが、それは大家と店子程度のつながりにすぎない、つき合いはあるらしい。

　先夜のなおみは、大荒れに荒れた。

　馬場氏の舌によって刺戟されたなおみは、今度は矛先を道雄に向けてきた。

　スタンドの上にあがって腰を下ろした、なおみは、道雄を上から睨みつけ、ゆっくりと両足をあげて道雄の肩に乗せた。

　ビールびんを、ぶち割って、いまにも暴れ出しそうな勢いは消えて、道雄は、ただ目の前の毛深い肉塊に目を据えていた。

　さっきまでは後向きになっていたが、こうして目の前に、さらけ出されて見ると、なおみは男に負けないくらい毛深い。しかも一本一本の毛が、かなり太い。大体、女性の方が男性よりも剛毛であることは常識だが、艶々と濡れてひかる密生した黒林は、恐ろしい猛獣の顔のように見える。女の獰猛さを剝き出しに見せつけられたような気がする。

「この野郎。さっき、あたしのことを、ど淫売と言いやがったな。ど淫売の味を思い知らせてやるからな」

　太腿が伸びて、深く首をはさみこむ。

「この野郎。このド助平野郎」

なおみの右手が道雄の後頭部にかかり、グィと手もとへ手荒く引き寄せられた。

　ピタリと密着させておいてから、悠々と腿を動かして、首をはさみ直した。

「ナポリ時代にもそうやったことあるかい」

「うん、まあね、いろんなことやったわよ」

「ストリップみたいだな」

「あら、ストリップでもこんなことやるの」

「やるさ。好きな、お客にはね。味見させるんだよ」

「まさか。だって大勢、見てるじゃないの。サツにつかまるでしょ」

　なおみは、ジワリジワリと太股の奥で顔を締め上げて行く。

「それが、やるんだよ」

「ヘエ、スケベね。でも、やられたお客さん恥かしいでしょう」

「恥かしそうにする奴も居るし、ヘラヘラ笑ってる奴も居るよ」

「この野郎、モタモタしねえで、やること、やんなよ」

　スタンドの中に入っていた馬場氏は、またこちらへやってきた。なおみは馬場氏に笑いかけながら、

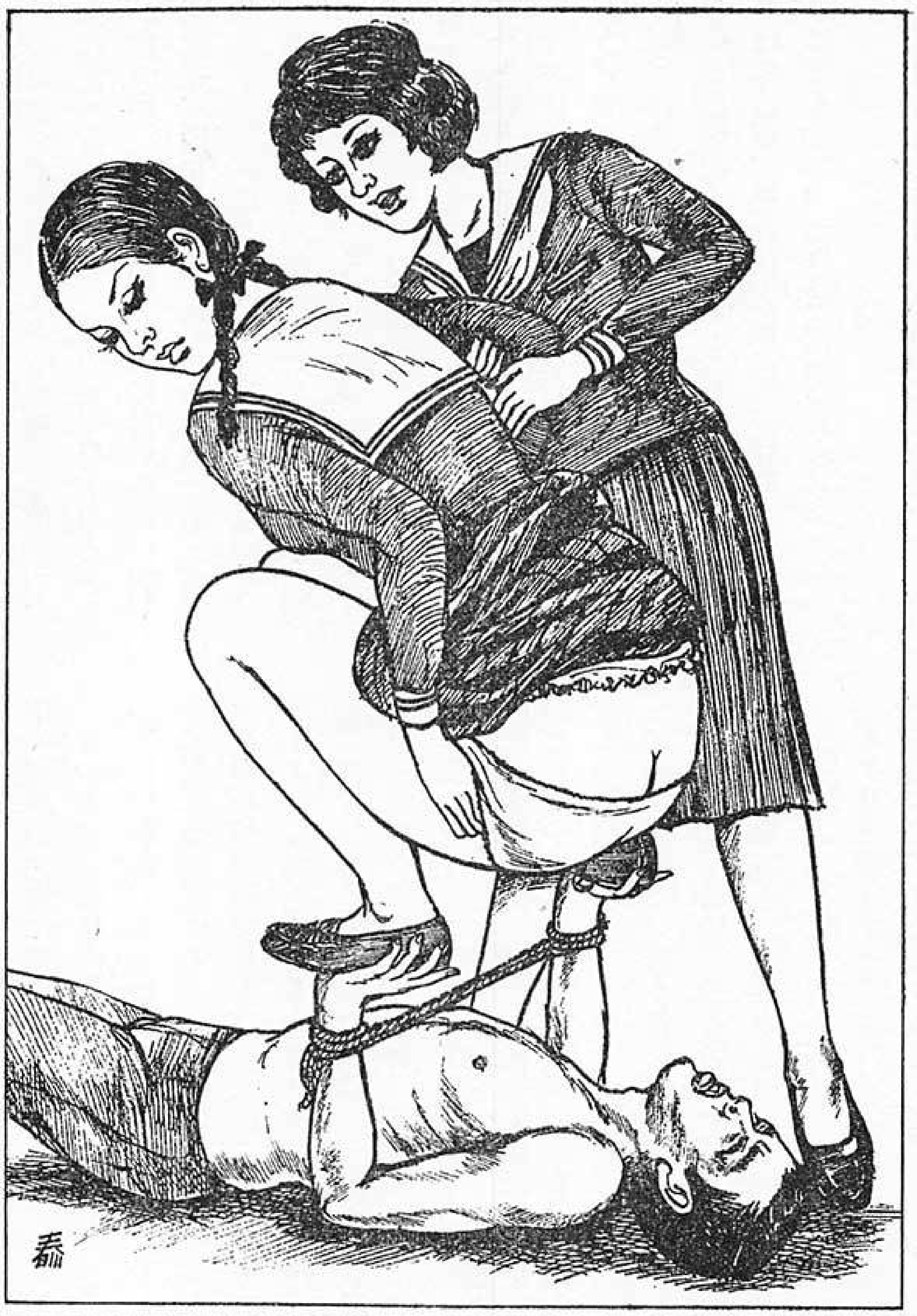
「お客さんには初もの。この乞食野郎は、お客さんの食い残した、あまりもの」

　馬場氏はテレて複雑な笑いを浮かべた。

「プロレスにこういうの、あるんでしょう」

「ヘッドシーザーと言うんです」

「あそう。あんた、委しいわね。ジャイアン



ナミオM画廊　『ホントにやる気？』　春川ナミオ

ト馬場だもんね」

なおみは裸の膝を十字に組みながら、左右に愛想を振りまいている。

とにかく四人で、ずいぶん飲んだ。お燗番はもっぱら、馬場氏がつとめ、私もいつもよりは、かなり過ごした。

二時頃になり、ようやく道雄を放免した。

道雄が帰ったあと、車を一台拾って、なおみ、私、馬場氏と、近い順に家に帰った。

その前、馬場氏がトイレに立った時、

「勘定してくれよ」

「いいわよ。遊びだもん」

「そうは行かない。これで足りる？」

私は、大一枚を出した。

「いいの？　こんなに。じゃ、頂いとくわ」

なおみは嬉しそうだった。この女が、かっては暴力バーで三万、五万と、ふんだくった女であろうか。なおみが可愛らしくなった。

銀座で、ちょっと飲んでも三、四万は取られるのに比べれば、それより、はるかに面白く、滅多に見られないショウを見せてもらって、一万円は安い遊びである。

内気な社長さん

梅雨が近づいて、ムシムシする夜だった。今夜も「プペ」は混んでいた。ムーさん、青木氏、社長さん、と常連が揃っていた。馬場氏が来ているかと思ったが、今夜は来ていなかった。

「こないだは、すみません」

バーのホステスの多くは、飯を食いに連れて行っても、次の日に礼を言うのは半分も居ない。なおみは、すさんでいるようで、締めるところは、ちゃんと締まっていた。

「きいさん、何かリクエストしない？　いまみんなのリクエストを集めてるのよ」

「そうだね」

　有線放送から流すレコードなんて、ろくなものはない。

「涙の連絡船」

「もうひとつ」

「大学数え唄」

　当時は、そんな唄が、はやっていた。

「よし！　Ｏ・Ｋ」

「大丈夫かい、そんなに余計あって」

「まかしとき。これひとつで間に合わせて見せるからね」

　なおみは十円玉ひとつ、つまんでウインクした。

「お客の中には、店の電話を使って電話料、払わない客が多くて困るのよ。何通話もかけたり市外へかけたりして払わないんだから」

「そんならピンク電話にすればいいじゃないか。あの道雄がやってくれるだろう」

　ということで最近ピンクに直したばかりである。十円玉を入れて有線を呼び出す。

「毎度すみません。誰？　タカちゃん？　道雄、居る？　ちょっと出してよ。モシモシ道雄か。何だい、眠そうな声出して。いまごろから寝呆けていて、どうするんだよ、バカ」

「乱暴だな」

　と青木氏は笑う。なおみは歌の題名を次から次へとリクエストする。

「なに？　分からなくなった？　馬鹿野郎。だから、てめえは低脳だってんだよ。分からなきゃ、メモしな。いいかい。浪曲子守唄に……」

　なおみはメモを次々に読み上げる。

「まだ、あるんだよ。電話、切ったら承知しないよ。文句言うな、この野郎。ええと、どこまで言ったっけ」

　お客達はゲラゲラ笑い出す。

「何言ってやがんだい。いいから書け。それから〝細い身体が折れるまで〟なにい？　知らないって。コレ、誰が唄ってるの」

　ムーさんに聞く。ムーさんが答える。

「竹腰博子だよ。てめえの商売もの、知らねえのか。だから、馬鹿だって言うんだよ。無い？　無いわけ、ないだろ。ようく探して見な。無けりゃ、レコード屋へ行って買って来い。馬鹿野郎」

「そりゃ、無理だよ」

　と、社長さんが笑い出す。

　なおみは笑いながら片手に受話器を持ち、片手で社長さんに酌をしながら、

「いいか、分かったか。ひとつも落とすんじゃないよ。ひとつでも落としやがったら、ひどいめにあわしてやるからな。ナニ恐い？　あったりまえだよ。プペのなおみあねごの御命令だぞ。いいか、他のリクエストは後まわしにして、うちのを、すぐ掛けるんだぞ」

「えらい顔が、きくんやな」

　青木君が感心する。

「ナニ今晩、来る？　来なくってもいいよ。てめえなんかに飲ます酒はないんだから。うるせえ。小便でも飲ましてやらあ」

「凄げえな」

　なおみは、天井を向いてアハハと笑う。誰もまさか、ほんとに小便を飲ますと思う客は居ないだろう。冗談のように言っていることが、実は、ほんとうなのである。

「え、うん、来てるよ」

　なおみは、チラと私の方を見た。

「何言ってやんだ、バカ。そんなに来たきゃ来てもいいが、お客さんのあまりものでも食わしてやるからな。よしよし、じゃいいか、すぐ掛けるんだよ」

　なおみは得意そうに長い電話を切った。

「リクエストは一通話で一曲なのよ。それも

なかなか掛からないのよ、順番があるから。だけど、あたしのリクエストは、一発で掛かるから、見てらっしゃい。聞いててごらん」

「それにしてもえらく乱暴な頼みようだな」

「ひと晩中、うちのリクエスト曲で埋めちゃおうかな。他のお店が怒るだろうな。アッハハハ」

　相手が羽島道雄では、何が何でも、なおみの言うことをきくはずである。

「ホラ、もう掛かった。逃げたァ女房にゃァ未練はなあいがァー」

　と、なおみは、はしゃいで唄い出す。羽島道雄みたいな、つまらない男でも利用価値はあるものだと思った。

「それにしても驚いたな。あんなにポンポン言って、よく怒らないねえ」

　社長さんがニヤニヤしながら言う。

「よく馴らしてありますからね。あたしのおつゆ舐めさせてやると、尻尾を振って何でも言うこと、きくんですよ」

「おつゆって、何のおつゆなの」

「フフ、しらばっくれないで、社長さん。よく知ってるくせに！」

　なおみは、ちょっと睨む、まねをした。社長さんは、この時、ちょっと赤くなったようである。

　私はオヤ！　と思った。この社長さんなる人物は、いつも隅の方で黙ってニコニコ飲んでいる。とかく中年の男は若い者の中へ入ると、いばりたがるものだが、この人は、おとなしいのでいままで意識しなかった。だが、いまのなおみの言葉は聞き捨てにならない。冗談のようにして、なおみは、よくほんとのことを素破抜くからである。

　私は社長の風采を観察した。

　年は五十ぐらいだろうか。頭は、かなり薄くなって禿げている。小肥りに肥ってチョビひげを生やし、身だしなみのいい洋服を着ている。一見おとなしく見えるが、その目は、かなり、きついところがあり、内面は剛気と見た。

　この社長さんが、なおみの前に這いつくばって犬の真似をする図を想像すると、かなり滑稽である。果たして、ありうるだろうか。

　社長さんが赤くなって絶句してしまったところが、気になる。

「ね、きいさん。この社長さんは、えらい方なのよ。職工から身を起こして、今は建材の会社をつくって、えらく、お金儲けしてるのよ」

「ハハ、冗談じゃない。借金で首が廻らないよ」

「社長さん。こちら、きやまさんて小説家なのよ。何の小説、書くの。エロ小説？」

「きやま」と聞くと、この社長さんの目が光った。

「どうぞ、よろしく——」

「よろしく」

　名刺を、くれた。

　　宮下建材株式会社
　　　代表取締役　宮下秀世

　私はバーでは名刺を出さない主義なので、

「生憎、持っていませんので、失礼します」

と詫びた。

「先生のお名前は、きやまとは、どう書くのですか」

「樹木の木に、山ですよ」

　どうしたはずみか私はでたらめを言った。

　宮下氏はジッと私を見つめている。ことによると、奇クの読者かもしれないと思った。

「ここのママは、ちょっと変わってますね」

「そうですね」

「まあ、こういう荒っぽいのが、いまの人には受けるんでしょう。女性上位時代ですからね」

ウーマンリブなどという言葉は、まだ当時は、はやらなかった。

「ハハハ、そうですね」

　私が社長さんの相手をしている間、なおみは若い人の方に話しかけていた。

「おい、てめえ達。もっと、飲めよ。酒ならいくらでも、あるぞう」

「当たり前じゃないか、バーだもん」

「今夜、誰とつき合おうかな。一番、飲んだ奴とやるかな」

　だが私は、この社長さんを、もてあましていた。何を話しかけても「そうですね」の一点張りで反応がない。Mがかったことを言って気をひいて見ても、サッパリ乗ってこないのである。

　こういう所で仕事の話は禁物である。相手の仕事に対し質問すれば当然、こっちの仕事に質問が返ってくる。それが、いやだった。

　竹越博子の「東京の流れ者」や「細い身体が折れるまで」が流れ出した。

「あっ、野郎。一生懸命、探してみつけやがったんだよ。これ、いい唄じゃない」

「あのデブが、細い身体が折れるまでなんて唄うのヘンだよ。だが竹越博子、好きだな」

　リクエストしたムーさんは、さかんにほめる。

「私も好きですよ。唄もいいが、ああいうグラマーが好きでね」

「あら、あんなデブが好きなの」

「いいぜ。オッパイなんか凄いボリュームだよ」

「あたしだって、あの位あるわよ。ホラ」

　なおみはセーターをクルッとまくって、張りきったオッパイをペロンと出した。

「ブラジャー、してないんだね」

「あんな、きゅうくつなもの、しないわよ」

「じゃ、パンティもしてないのかい」

「してます。シャネル5番」

「存外、きれいなオッパイだね。乳首が、あかいじゃないの。まるで処女みたいだ」

「この野郎ッ」

　光ちゃんの頭を殴ろうとすると、光ちゃんは素早く乳房にとびついてキスした。

「舐めるな、この野郎」

　なおみは、軽く頭を叩いた。

「やっぱり若い人は、バイタリティーがあるわね。すぐ飛びついてくるもん」

「中年のオッサンは意気地がねえか。指を、しゃぶって見てるだけだからな」

　言われないうちに私は言った。なおみはサッとセーターを下ろして、

「社長さん、おひとつ、いかが？」

　とシナをつくって徳利を持ち上げた。

「ママのガラに合わねえよ」

「うるせえ、黙ってろ、この野郎」

「その方がピッタリだよ」

　ワイワイ言ってるうちにカンバン近くなってきた。いつも早く帰る社長さんが、今夜は遅くまで粘っている。私は帰ろうかと思ったが、道雄が来るらしいのに興味があった。

　だが一応、指でテーブルに数字を書いて勘定のサインを送った。

「いいじゃないの、まだ。今晩また、あいつが来るからさ」

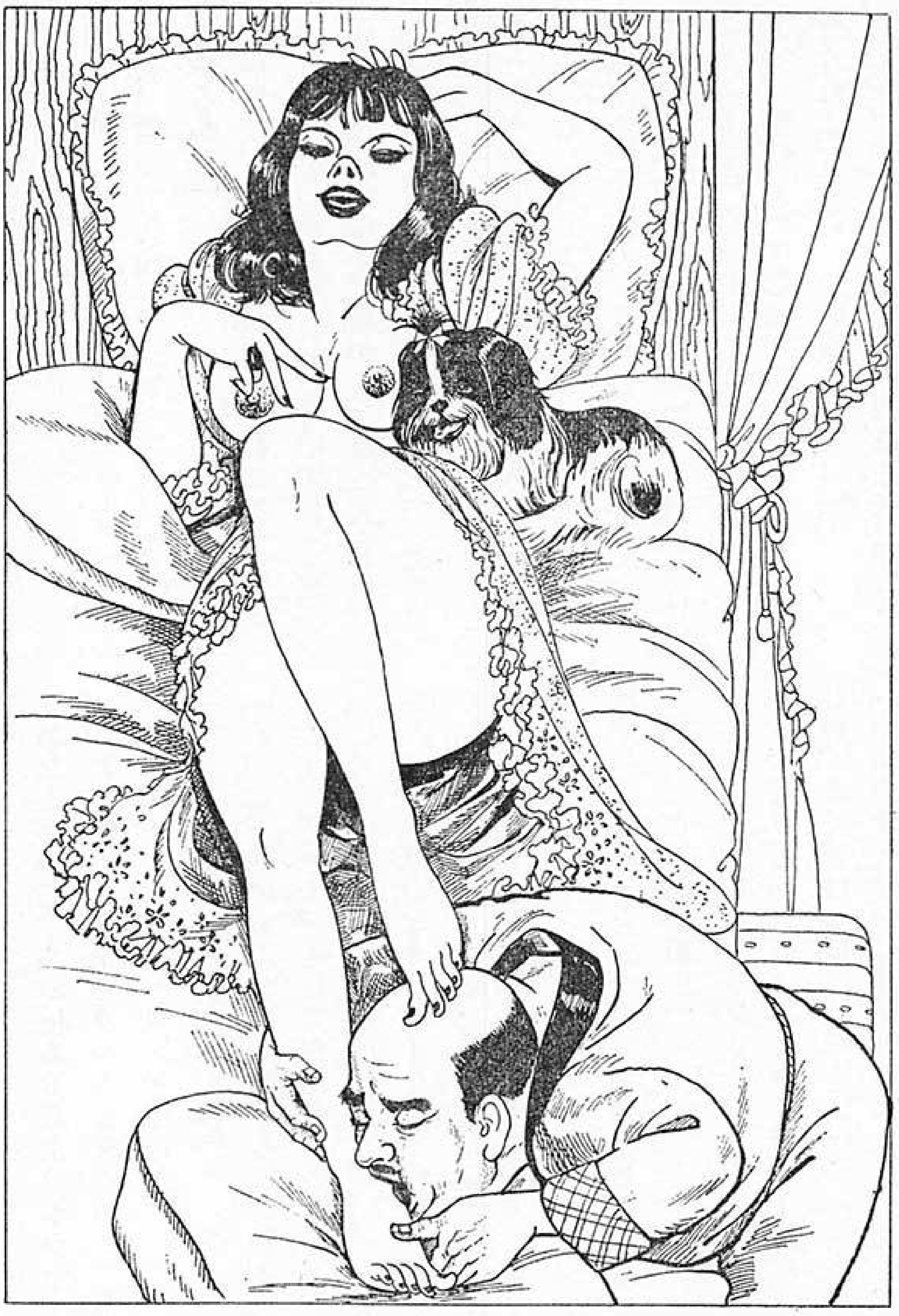
　社長さんがトイレに立った。

　間もなく電話が鳴った。

「ハイ、プペでございます。あ、なんだ、どうしたの。フフ、そんなんじゃないわよ。だけど、今晩はダメよ。え、ちょっとね。でもまだ居たっていいわよ。いまに面白い奴が来るからさ。えっ、きらい？　大丈夫よ。この頃は、おとなしいんだからさ。御機嫌、悪いのね。フフ、どうでもいいわ」

　私は、この電話の主は宮下氏だと思った。

　電話が切れると間もなく宮下氏が戻ってき



イメージギャラリー　『村長のおつとめ』　岡　たかし

て「帰るよ」と、そそくさと出て行った。

「毎度、有難うございます。また、どうぞ」

なおみは、よそ行きの声を出した。

「送らなくていいのかい」

「いいのよ。フフ、どうして、こうみんな気を廻すんだろうね」

私は、なおみの耳に口を寄せて、

「いまの電話、社長さんだろ」

「フフフ、勘がいいのね」

光ちゃんが、

「あ、内緒話してる。イヤーだな。俺、帰ろうっと」

光ちゃんと青木君が帰って、ムーさんだけが残った。

黄色いカプセル

十二時半頃になっても、道雄は現われなかった。

「勘定、頼むよ。終電車がなくなるからな」

「勘定は、いいわよ。この前、たくさん頂いたから」

「そうは行かない」

「じゃ、もう一本だけ飲んでって。サービスするわ」

「サービスは有難いが終電車に乗らないと車が拾えないんだよ、いまごろの時間は」

「あたしが拾ってあげるわ」

そこへ羽島道雄が現われた。

「よッ、旦那」

私を見てニヤッと笑った。いつも私を睨みつけていたのが、どういう風の吹き廻しか今夜は、いやらしい愛想笑いをしてきた。その代りムーさんを睨みつけた。不愉快そうにムーさんは出て行った。

「あの魚屋の伜も、しつこい野郎だな。勘定ためてんじゃねえのか」

「余計な心配しなくたっていいよ。魚を安くまけてもらってるんだから」

「ヘェ、あの人、魚屋さん。そうは見えないな。文学青年みたいだが」

「店へは出てないのよ。女房に逃げられて、今ブラブラしてんのよ。家は金持だけど」

ここへ来ると客の正体が、みんな分かってしまう。村越留雄といって、かみさんにスナックをやらせていたが、女房が男と逃げてからはクサって遊んでるのだと言う。

「妹さんが、しっかり者でね、店を切り廻してるのよ。兄さんの勘定なんか払ってくれるのよ」

「ママ、あんまりリクエスト、よけいすんなよ。方々断わったり、あやまったり大変だったぜ」

「フフフ、ざまみろ」

「冗談じゃねえや。今度、掛けなきゃ、有線断わるなんて言ってきた店もあるんだぜ。それをよ、あやまって御機嫌とって大変なんだぜ」

「お前はね、そんな些細なことを、すぐ恩に着せて、しゃべる。そういうとこが可愛い気がないんだよ。黙ってりゃ、こっちも済まないと思うものを、つべこべ吐かしゃがるからこの野郎って気になっちゃうんだよ」

「ヘイヘイ、どうもすみませんでしたね。あ、いやんなっちゃうよ。ここんとこ残業々々で、身体がもたねえや。今日だって夜は休みなのを働いてるんだぜ。残業しなきゃ食ってけねえもん。月給半分じゃな」

「ふふふ、ざまあ見やがれっ。不義理するとどういうめにあうか、身にしみて分かったろう。まだ二万五千円、残ってんだからな」

「それなのに、こうしてまた来ると借金が殖えちゃう。女郎みたいなもんだな」

「おとこ女郎だよ。男郎だよ、お前は」

「よし、今晩、俺の身体、ママに売ったよ」

「馬鹿野郎。そんなケチな乞食野郎、ハナもひっかけてやらねえよ」

そうは言っても、なおみは道雄にビールを抜き、おつまみもつけて出している。前は顔を見るなり「出て行け」とどなったのが、また風向きが変わっている。その時その時で変わるのが「酒場人間」の常なのであろう。

いったん立ちかけた私も、道雄の顔を見ると腰をおちつけてしまった。もう何時に帰っても構わないと肚を決めてしまった。このへんが、この「プペ」という小さな店の魔力であろう。

「ねえ、この薬、飲んで見ない？」

なおみは、黄色いカプセルを一つ、出してきた。

「何だい、これ。麻薬か」

「麻薬じゃないけど、凄く効くのよ」

「そんな、えたいの知れないものイヤだよ」

「信用しないのね」

「俺が飲むよ」

「バカ。てめえなんかに飲ましたら狒々みたいになっちゃって、どうしようもねえや。じゃ、いいわ。あたしが飲む」

なおみはパクッと飲んで水を流しこんだ。

「船員の人から、もらった、向こうの薬よ。なんてったか、忘れちゃったけどさ」

「その船員野郎と試したのか」

「うるせえ。てめえは直ぐ気を廻しやがる。この薬、あたしが飲んだからにゃ今夜は二人とも帰さないからね」

なおみは私と道雄をジッと見すえた。その顔は妖しく美しかった。

赤いひかりの中で

なおみは、ラーメンを食べたい、と言い出した。道雄が、すぐ賛成した。もう一時を過ぎている。

　なおみが扉を少し開けて外を見廻し「大丈夫よ」と人気のないのを見すまして、コソコソと三人は外へ出た。すぐ五、六軒先にラーメン屋があった。客は、かなり入っていたがやっと三人、坐れた。

　なおみと道雄は五目そばと、ぎょうざを食べた。私は大して腹は空いてなかったが、たんめんを、つき合った。二人は焼酎をコップに一ぱいずつ、飲んだ。

「ああ、うめえ。このところ酒の気が切れちゃってね。もう一ぱい、いいだろ」

　道雄は、ぎょうざで二杯目を飲んだ。

「サ、酒も飲めたし、腹もくちくなったろ。それで、お前は、お帰り」

「おいおい、冗談じゃねえ。さっき二人共、帰さねえと言ったじゃねえか」

「大きな声で言うんじゃないよ、バカ。それじゃ、早く飲んでしまいなよ」

　ラーメン屋を出ると、また、なおみは

「道雄。お前、帰れ」

「そりゃ、殺生だよ。ママんとこの酒を、少し飲ましてくれよ」

「それじゃ、あたしの言うことは何でも、きくか」

「きくよ、きくよ」

「途中でイヤだと言ったって承知しないよ」

「いいよ、いいよ。ママの言うこと、なんでもするよ」

　なおみは店の前で、あたりを見廻し、人気の絶えたところで、泥棒みたいに扉をあけてすばやく店に逆戻りした。店へ入るなり、

「道雄。この椅子を全部、そっちの隅に片づけちまいな」

「よしきた」

　スタンドに六つばかり並んだ椅子を奥の方に積み上げた。私も何が何だか分からなかったが手伝った。その間に、なおみは花ゴザを二枚出して来て、狭い土間に敷いた。

「サァ皆、靴を脱いで。腰かけてばかりいたから、今度は坐って飲もうじゃないの」

「こりゃ面白れえや。ママ、俺、あのウィスキーが飲みてえよ」

　棚のサントリーの角びんを指さした。

「ぜいたく、言うない。あまい顔見せると、すぐ、つけ上がりやがって」

　スタンドへ入って、なおみは流しで口を、うがいした。

「サ、みんな口をうがいすんのよ。ぎょうざ食べたでしょ。エチケットだよ」

　なるほどと私も、うがいした。狭いスタンドの入口を潜って次に道雄が、うがいした。

　その間に、なおみは私を抱いて、いきなりキスしてきた。

「くさくないでしょ」

「ああ、大丈夫だよ」

　道雄は、やかんに酒を入れ、ガスにかけてお燗をし、冷蔵庫からサラミや、かまぼこだの、しょうさい、ふぐのひものだのを出してスタンドの上に並べ、ビールの栓をポンポンと抜いた。

「おい。勝手に、かき廻すんじゃないよ」

　なおみは薄いセーターを脱ぎ、スカートも脱いで、パンティ一枚の裸になった。

「暑いわね。脱ぎなさいよ」

　クーラーは音がするというので止めてしまったし、換気扇もストップさせたので、かなり暑かった。私もワイシャツとズボンを脱いだ。

「ああ、効いてきた、効いてきた。おい、ガスを止めなよ。暑くてしょうがないよ」

「ヘイ、お待ち遠さま」

　道雄は、やかんの酒を徳利に注いで並べる

と、スタンドを潜って出てきた。

「ワァ、凄え！」

　後から、なおみの腰に抱きついていった。

「何すんだよ。バカ！」

　なおみが腰をひと振りすると道雄は羽目板にドスンと身体をぶっつけて転がった。

「大きな音、たてるんじゃないよッ」

　仰向けに倒れた道雄の胸へ足をかけて踏みつけ、

「おとなしくしてろと言ったろ。今度、手を出したら承知しないよッ」

　ドスンと胸の上に跨がったなおみは両膝で道雄の顔をはさみ、手をのばしてスタンドから徳利と盃をとって私に酌をした。

「どう？　この趣向。遊び馴れた、きいさんでも、こんなの、初めてでしょ」

「用意がいいね。始終こんなこと、やってんのかい」

「あーら、冗談じゃないわ。あたしだって始めてよ。このゴザは家へ敷こうと思って買っといたのよ。イヤな、きいさん。暑いでしょ裸になんなさいよ」

　とうとうアンダーシャツも脱がされてしまった。なおみは道雄の顔を太股ではさんで、私の胸に乳房をおしつけてきた。

「とうとう、つかまえたわよ、きいさん」

　なおみの手が私の背中に回り、頬をおしつけてきた。そうしながら二人は、股の間の道雄の顔を見下ろした。道雄は泣き出しそうな顔で私達を見上げていた。

「何だい、そのツラ。見るんじゃないよ」

　なおみが、ひと膝乗り出して道雄の顔へ尻をのせて顔を、ふさいでしまった。

　なおみの手が私の股間にのびて、状態を確かめた。

　酔っている時は、だめだと言う先入観があったのだが、そんなものを、ふきとばして脈打ち出していた。

　なおみはニッコリ笑うと、スッと立ち上がった。

　目の前でパンティを脱いだ。

「電気、消すわね」

　菱形の逞しい女の正体が見えたと思った瞬間、あたりは暗黒になった。

　だが上を見ると、隅の天井に近いところに赤い豆電球がポッツリと点いていて、赤い光を淡く、ただよわしていた。

　それは、現像する時の暗室のようなムードだった。この光に私は弱い。多くの写真を現像した時が一度に想い出され、私は息苦しいくらい昂奮した。

「痛てテッ」

　暗やみで道雄の悲鳴が上がった。と同時になおみがドスンと私に体当りしてきた。なおみが道雄の身体を踏み越えて突進してきたのだ。甘い女の体臭が、突風のように私の顔に吹きつけてきた。

　それにしても、なおみは、どうしてこうも私の好むことを心得ているのだろうか。

　なおみに対して、馬場氏の性向についてはある程度、話したことがある。馬場氏と、なおみを結びつけるために話したのだが、私自身のことは話さなかったつもりだ。だが酔ったまぎれに、私のことを言ったのかもしれない。それとも今夜のこの趣向は、偶然の一致であろうか。

　私は仰向けに倒された。赤い豆電球が目の上に見える。

　ここでもし、なおみが私の顔の上に跨がってきたら私は、どんな奉仕でもするつもりでいた。とっさに、覚悟を決めたのである。なおみの黒い顔が、シルエットのように私の顔の上に、かぶさってきた。

　プリンと弾力のある乳房が胸に潰れる程に圧しつけられてきた。

私は立てていた膝を、のばした。足の先に柔らかい肉塊が触れた。道雄の肩のあたりであろう。

なおみの膝が、私の足の間を割って入ってきた。すべすべした肌だった。その膝を外側へ出して、両膝で私の足を、はさんだ。

なおみは片手で私を摑むと、上から押し包むように、かぶせてきた。

なおみは全身を私に、ゆだねてきた。

激しい鼻息をモロに吹っかけてきた。

擦れ合う乳房のあたりが汗でヌラヌラしてきた。

なおみは押し殺した声を上げて、私の上で荒れ狂った。

私は、できるだけ抑えるようにつとめた。

なおみは私を抱えたまま横にころがった。位置は逆転して私が上になった。

一度、膝をついて上になり、その足をスーッと伸ばした時、私の足が、また道雄の頭から肩のあたりに触れた。その瞬間、道雄が私の足首を摑んできた。

ハッとしたが、そのままにしていると、足の裏に柔らかいフニャフニャしたものが触れてきた。それは道雄の唇だった。道雄は舌を出して私の足の裏を舐め始めた。

どうやら、なおみの足と勘違いしたのではなかろうか。私の足は柔らかいし、毛深くない。だが、そのくすぐったい刺戟が、私にまた一層、力を与えてくれた。

なおみは力一ぱい下から私を抱きしめる。

この原始的な無限の繰り返しが、何で動物を堪能させるのであろうか。

なおみは遠慮のない声をあげ、私を締めては弛め、締めては放した。その声はソプラノに近い高音で、ふだんの男のような野太い声とは、まるで違っていた。

なおみは私の肩に強く嚙みついてきた。

「あ痛うう……」

痛苦は、更に私を奮い立たせた。

地の底に引きずりこまれるような失落感が私の全身の力を抜きとって行った。

こうなると男と女の体力の差は歴然としてきた。なおみは赤児のように両足を曲げて上にあげ、私の腰を締めつけていた。

気がついてみると、私は両足で道雄の頭をはさんで力一ぱい締めつけていたようだ。力が抜けた時、そこを意識した。私は両足を開いた。

暗闇の中で、いままで何かしら音がしていたのが、ピッタリと静止して水底のような静寂な、ひとときが続いた。

「電気、つけてくれよう」

道雄が、下の方から声をかけた。

「こう暗くっちゃ、酒も飲めねえや」

「待ってな。酒より、いいもの飲ましてやるから」

「いいよ、いいよ。酒の方が、いいよ」

「ちき生、うるせえな」

なおみが立ってパチンと明かりをつけた。

道雄が、あぐらをかいていて、チラと、なおみの裸身を見、すぐこっちを向いて、私の顔を見つめた。それは嫉妬でも憎悪でもない何かを観察するような、まなざしだった。

「失礼……」

なおみがダスターを投げてよこした。そして私を見て、

「だめよ!……まだ」

ちょっと睨んだあと、白い歯を見せた。

道雄はスタンドの上のウイスキーとグラスをとって、手酌で飲んでいた。

〝だめよとは、どう言う意味だろう……〟

私としては、よく出来たと思った。最近にない力演だったと思うのだが、それでも私の拙さを言ったのだろうか。あるいは、まだ解放しないという意味であろうか。

「まあ一杯、やんなよ。お疲れさん」

　道雄は手酌で大きな顔をして飲んでいる。

　なおみが歩いてきて、いきなり大きく足を上げ、道雄の頭の上から跨いて、股を脳天に乗せたところで、ウンとお尻に力を入れた。

　道雄はグラスを落とし、両手をついて、おじぎするような恰好になった。

「でけえツラして、酒飲むな、この野郎」

　跨ぎ越して私に肌を、すり寄せて坐った。

「一ぱい、飲まない？」

「ああ、腹がすいてきたよ」

「でしょう。だから、さっき食べとけば、いいのよ」

「経験者は語る、か」

「フフ、何言ってんのよ。卵があるから目玉焼つくってあげようか。ハムもあるし」

「お前さんの家でやりゃ、よかったな」

「ダメよ。安アパートだから音が隣へ聞こえるのよ。それに家へは男の人を連れて来ない主義なのよ」

　なおみは裸でスタンドに入り、ジージーとフライパンをならしていた。

「俺も頼むよ」

「バカヤロ、野良犬みたいにガツガツしやがって。よく食うね」

　なおみと言う女は、いろいろな面をもっている女だ。いま、牝獣のようにジャレついたかと思うと、いまは目玉焼を焼いてパセリを切って、そえているところなどは、極めて女性的だった。

　目玉焼を食べながら、喉がかわいたので燗のさめた酒を口にした。

　道雄はアッという間に目玉焼を食べて、またウイスキーを飲み始めた。

「あんまり飲むんじゃないよ」

　ウイスキーのびんを、ひったくって、なおみも飲んだ。

　なおみがスタンドの中から、こちらへ出てくると、道雄が足へ抱きついた。

「ママ、今度は俺の番だろ」

　なおみはスタンドに手をついて腕の中から片足を引き抜き道雄の額に当てて蹴倒した。

「うぬぼれるんじゃないよ、豚野郎！」

　起き上がろうとする道雄の肩を踏んで、なおみは、いきなり顔の上に跨がった。

「イヤだよ、イヤ……」

　次の言葉は、口をふさがれて途切れた。

　道雄は首を横に捻じろうとしたが、巨大な太股が両方からピッタリとそれを妨げた。

「てめえ、お里のママをコマしたろう。何であんな婆ぁとやるんだよ」

　あらがっていた道雄の動きが、とまった。

「おまけに金を借り倒したろう。汚ねえ野郎だ。この豚野郎ッ。チャンと知ってんだぞ。てめえのような野郎は、こうしてやる。豚は豚のつとめをしてりゃ、いいんだよ」

「ウッ、ウッ」

　全身の重味が、のしかかってきて、みるみる道雄の顔は、まっ赤になった。

　なおみが、ちょっと尻を浮かした時、

「もういいだろ。やめてくれ」

「だめだよッ。これからだよ。お前を締め上げるてやるのは」

「じゃ電気、消してくれ」

「アハハ、何言ってやがんだい、バカ。その泣きっ面を、きいさんと二人で見てやるんだよ」

　なおみは私をチラと見て、笑った。

　牝猫は牝虎と変わった。

　やはり、なおみはサジスチンだったのであろうか。

――（この項終）――

　なおみの項は一応、終わるが、「プペ」を舞台として、次は「社長さん」をゲストとして迎えることにしよう。

マダム芙美代の饒舌

美しい五月の黒髪に

福井桃子

つやつやとした緑の若葉の美しい季節となってまいりましたわね。昨年から、何度、私の気ままなお喋りを、雑誌に載せていただきましたかしら。途中で私の妊娠、出産というハプニングが起こり、とんだ大きなお腹、そうなの、蛙腹とかいう、不格好なお腹やお尻を見せてしまいましたわね。

今日は本当に久しぶりで、出産後の、こんな平べったいお腹をお見せするんです。ええそういいますでしょう？ 子供を二人ぐらい産んだ女の味は一番いいんだって――。

そうなんですのよ。だから一つ、この三十前の熟れきった芙美代の肉体を賞味してみられませんか。私しゃね、ここ何十日か、男なしの生活を続けておりますんですからね。二

人目の子供を産んでからは、正真正銘のバージンなんですのよ。

今日もテープとカメラは持ってきてるんでしょう。だったら、その二つを十分に活用して、脱皮した芙美代のありのままの姿を、たっぷりと記録して下さいましね。お願いしましてよ。こう見えても、私しゃ情熱家なんですから、もう今日の日が待ちきれなくて、じりじりしてましたんですのよ。

じゃ、例によって冷たいところを、ぐっと一杯頂戴しましょうか。長い間、妊娠中は禁酒禁煙を守ってきましたからネ、今日あたりはハメをはずして、貴方の費用負担で、たっぷりと酔わしていただきたいですわ。あら、そんなに飲んじゃ、取材が出来ないってですか。それだったら、いっそのこと、奇クの読者を集めて、SMプレイ会っていうのを、やったら、どうですの？　きっと受けますわ。

私は出席された全員の方に、一人一人、縛られてあげますわよ。Sの方にはね。そうですわ、もしMの方だったら、私が思いっきり責めてあげるということでどうですか。

SとMとは裏表って、よく言うでしょう。それにね、奇クを読んでいると、読者通信なんかに、S何%M何%とか、自分のことを分析している人があって面白いですわね。

私はSとMと、どのくらいの割であるかって、自分でもよくはわからないけど、そのどちらも何割かの割合であることは確かネ。

だから、そのときの雰囲気で、どちらをやってもいいことよ。ムード次第っていうわけなのよ。みんなで、寄ってたかって、私を素裸にしてさ、縛り上げるっていうのも面白いじゃない。座談会とかSM懇談会とかいうのを催したそのあとで、余興の一つに、そんなのをやってみてはどうなのよオ。

今はやりの、SMポルノってのも面白そうじゃない？　一度考えてみてよ。私、今、身体を持て余してんの。こんなに身体は元気だし、それに、なんていうの。五月で、新芽の出る季節でしょう。なんだか、こう、身体が燃えてくるようなの。あらそんな色きちがいって、いうんじゃないのよ。なんていうのかな、むしょうに刺戟を求めたくって、刺戟を受け入れる下ごしらえ十分っていうところかな。特にSMについてのよ。

　だって、出産直後は、少し痩せたようなみたいだったんだけど、すぐに、こんなにむくむくと肥ってきてしまって、ホラ、ここんとこなんか、こんなに肉がついてきて、休養十分、スタミナ十分っていうところなの。一人の殿御だったら一晩中寝かさないわよ。

　それで――今日は、また私を縛っていじめようっていうの？　だったら、出産後、変身した芙美代の最初の日だから、遠慮しないで、いじめて下さいネ。二十六才、二児の母としての芙美代のハダカがどんだけの責めに耐えることが出来るか、また肢体が、まだまだ、どんだけの縛りと無茶なポーズに耐えることが出来るか、それを試してほしいの。

　そうそう、今度、私、小さなスナックだけど、お店を一軒持つことにしたの。座して喰らえば山をも空しっていう言葉があるでしょう。貯金で居喰いしてたら好きなお酒も気ままに飲めないってわけなので、決心して、財布の底をはたいて、お店を借りたの。

　Mの人で、私のお店の使用人になりたい人があったら、この際名乗りでてよ。マダム芙美代の椅子がわりに使ってやってもいいわ。

　そうなの、お店にいる間は、私の椅子がわりをずっと勤めるのよ。私しゃ、そりゃ人使いは荒いから、普通の人だったら、とても勤まらないと思うけど、M傾向の人だったら、案外、居心地のよい勤め場所かもよ。

　なにしろ、マダム芙美代は、こんなにお俠（き）ゃんな女でしょ。外に若い子を二人ばかり置くことにして、ちゃんと当りはつけてあるんだけど、今どきの若い子だから、そりゃ、自分勝手で、男をいじめてもいいって言ったら何を、やらかすか、わかったもんじゃないわよ。そんなのを選んでるってわけ。

　ええッ？　Sのお客にはってですか？　そりゃ相手次第よ、女ってものはネ。貴方のように金ばなれがよくて、万事理解のあるS好みの人にだったら、それこそ、とろりとろりと、とろけそうになってしまうのが、私の妹分の娘ってわけよ。なんですって、その子も奇クに登場させろって、ですか？　そりゃ勿論OKしますでしょうね。条件と心意気の次

第によってはね。

それよりも、私達女三人の世話をやいたり店の下働きをしてくれるM男性の奴隷が一匹ほしいわね。そしたら、交換条件に奇クにこの女の子二人を登場させてもいいわ。だから使いよくて、面倒見甲斐のあるM男を探して下さいナ。先ず手始めに、私がいじめてみてこの男だったら使えるナと思ったら、店へ出してやってもいいわ。

どんなにして、いじめるかってですか？ それは秘中の秘なんだけど、まず正統派のM男だったら、ズイキのおツユをこぼして喜ぶと思うナ。そりゃ痛めつけることもあるわ。だけど、根本的には恥かしめるっていうのか弄ぶっていうのか、おもちゃにするっていうのか、女の一番きたならしいところで、顔や口や、目や鼻をふさいでしまうわけね。これだけ言えばわかるでしょう、ねえ。

ええ、そりゃいいですヨ。そんなM男がいたら、私が思いっきりいじめてるところを、写真にとって下さって、いいですヨ。その上で、私の店で使うM男をきめても——って、いうんでしょ。今だったらネ、私しゃ、泊りがけででも出かけられますから、そんな男があったら、早く呼んで下さいナ。温泉旅館か観光地へ旅行して、遊びがてら、見物がてらSMプレイをする、ってのは如何？

そりゃ、お店が開いてからも、出れないわけはないけど今度は少し大きいお店にするつもりだし、それに開店した当座は、なんといっても忙しいと思うの、SMプレイは大好きだけど、そうも言っておれないと思うわ。

だからサ、今のうちにたっぷりと楽しんでおきたいと思うのよ。店はどこだっていうんですか？

そりゃ、私も探すときは大阪も考えましたヨ。でも、やはり土地カンのある地方の中都市の方が私のような小っちゃな資本の者には似合いと思ってね、やはり、前と余り離れてない町なの。開店したら、お呼びしますから、是非来て頂戴ネ。

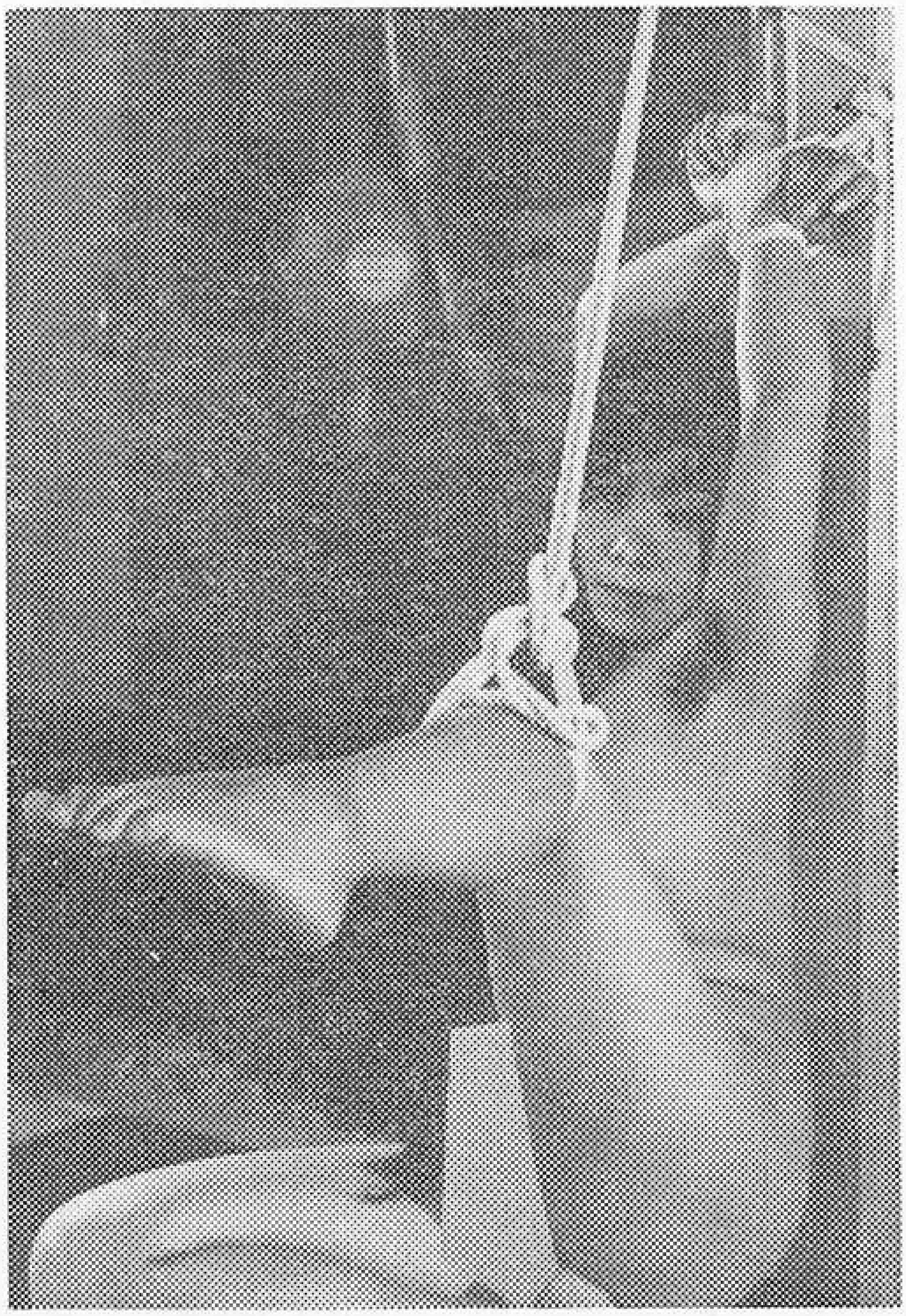
あら、私ばっかり飲んでしまって、今日は少しもおあがりにならないのネ。いいじゃありませんか、少しぐらいお飲みになったっ

て。

そうなの、私って、遊ぶときも徹底して遊ぶタチなの。中途半端はキライなのね。だから、精力のお弱い方だったら、きっと、しつこいって困られるかもね。たしかに――。

その点、あなたって実に頼もしいわ。こんな私を、とことん、いじめて楽しませて下さるんですもの。放さないわヨ。にくらしいわね。そんなに平気な顔して、テープを回してるんだもの。いつになったら、そのカメラを使おうっていうの。ねえったら。

あら、私が酔ってきたっていうの冗談じゃないわ。こう見えても、マダム芙美代なんですヨ、これっぽっちのビールで酔っぱらいますかって、言いたいんだけど、ちょっと待っててネ、おトイレへ行かせて。まあ、ついてきちゃダメよ。私のトイレを使っているところなんか写したって、そんなのなんか、写真にならないわヨ。もっと、広々とした野っ原かなんかで、やらかしているところだったら、私も気持よく撮ってもらうわよ。



ごめんなさいね。お手間をとらして。

あら、もう縛るっていうの？　今日はそうたくさんはうつせないわヨ。私の小さくなったお腹の記念にうんと足を挙げたところを責めて責めて、責め抜いているところを、とってもらおうかしらね。そうね、お腹の大きいときは、あれだけ挙がっていた脚が、ちっとも挙がらなくなったから、不思議なものね。

今はって？　そりゃ、お腹に宿っていた赤ン坊が外へ出てしまったんだから、ホレ、この通り、立ったままで頭の上まで挙がりますわヨ。縄を使ってだったら、立ったままで両方の脚が一直線になりますわ、きっと。

私が踊っていたじぶんは、こんなに肥っていなかったから、自分で振り上げただけで頭の上まで挙げられたしその挙げた脚を手で持って立っていたものヨ今のように、こんなにゼイ肉がついてしまったら、もうダメだわねせいぜい、縄で縛って、思いっきり私の身体をいじめて下さいナ。少しはやせるかもしれないワ。私も、じゃんじゃん責められるのって、大好き。遠慮しなくてもいいの、この間までのように、お腹の大きいときは、私も赤チャンのことが心配だったし、第一、ボテが入ってちゃ、身体の自由がきかないものネ。今は、この通り身軽だから、その点は平っち

ゃら、じゃんじゃんとやって——。

縄はどんだけ締めつけてもいいわ。なにしろ、肌は若いときから潮風できたえた赤銅色とまではゆかないけど、まあ、生白いのとは違うわね。まあ、縄ですり切れることは、まずまずないわ。

わあーツ、よく挙がったわね。この脚を柱にとめるっていうの。反動で、ヒョイと脚を挙げるのはいいけど、こうして挙げっ放しで縄で縛られるっていうのは、案外きついものなのね。あら、そんなとこ、じろじろと眺めないで——。いやーン恥かしいじゃないのヨ私だって、やはり淑女なんのよ。

いたずらするのはヤメテ。ヘンな気持になってくるじゃないの。そんなことしたら、これからあとの写真は、とれないようにしちゃうから。それでもよかったら、SMプレイに打ち込んでもいいわ。

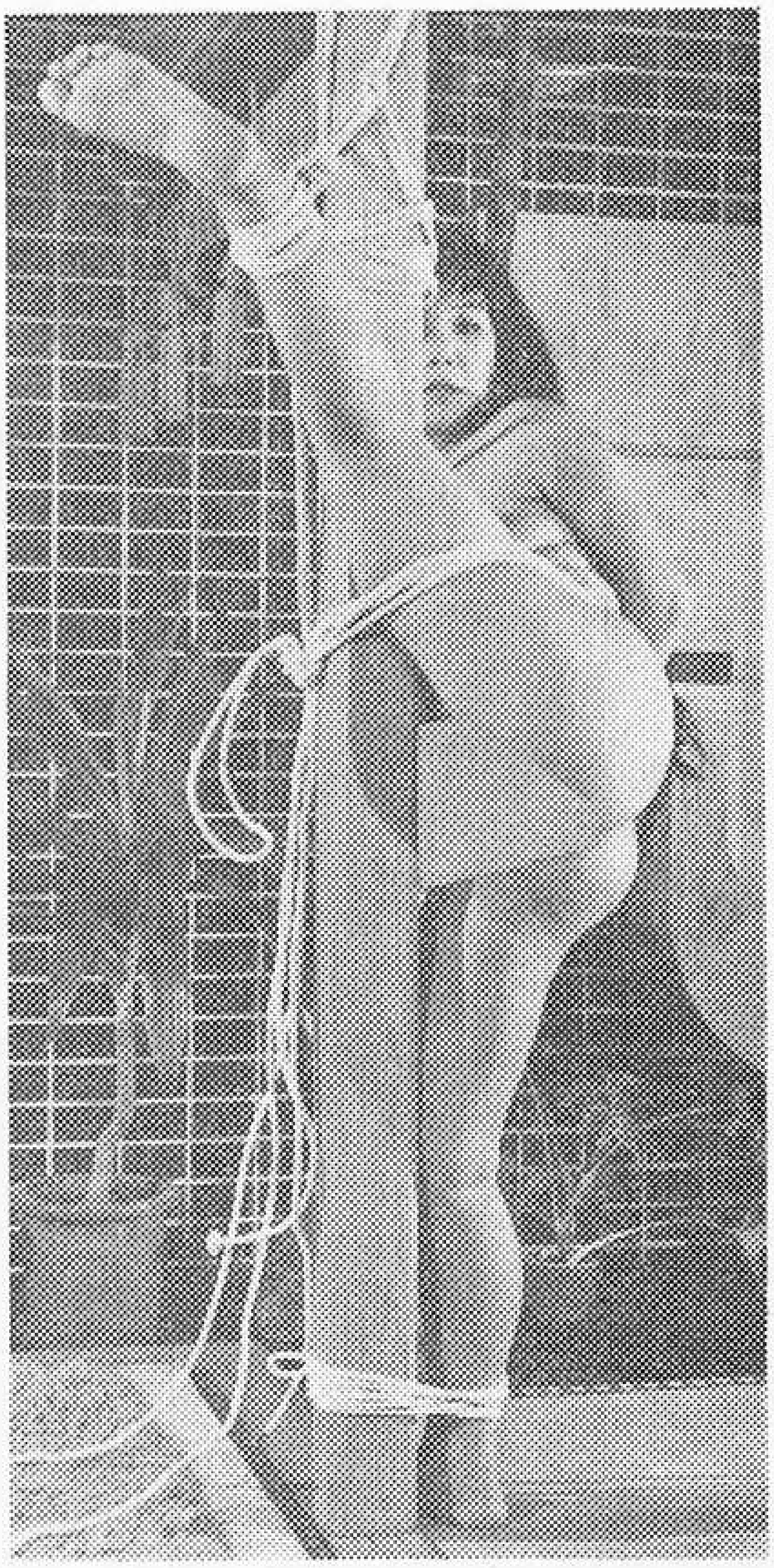
ねえ、いつまで、こんな格好で放っておくつもり？　もう、それだけ、あっちから、こっちから写真をとったら、いいじゃないの。あら、大写しも、とりはるの。いやな方ネ。

足をこんなに挙げると、どんなになるかと思っていらっしゃるんでしょう？　私に、これ以上、エッチな言葉を吐かせるつもり？

そのテープ、ちょっと止めておいてヨ。そうしたら、いくらでも喋ってあげるわ。

次はどんなポーズをとるの？　どんなんでも、言われた通りやりますわ。縄が痛くないかって？　ゼンゼン。今のところ痺れちゃって、痛さなんか感じないのよ。せいぜい、今のうちに縛って、いじめて責めておいて下さいナ。これでも、マダムって言われるようになって、着物を着て、しゃなりしゃなりとお店へ出たら、ちょっとや、そっとでは縛られませんからね。もとはといえば、あんたが私を、こんなにSM好きにしてしまったのがいけないのよオ。

あら、えらそうな口を叩いた罰に今度は脚をそんなに逆に曲げようっていうの。いいわよ、どうせ腹いせに、私をいじめて、どんなに変化するかってジロジロ眺めようって魂胆なんでしょ。わかってるわよ。男の人ってみんな、大なり小なりエッチなのよ。お店に飲みにくる人なんか



そんな目的でお金を使ってくれるお客さんだから、そりゃネ、適当に満足させてあげるわよ。だけど、頭にくるのは、電車やバスの中なんかで、ロハで楽しもうっていう男よ。こんなのは最低ネ。

この間も地下鉄でネ、お尻をさわったり、髪をいじったりする男がいるのよ、私って、わりかし、ラフな服装してるでしょ。目立つのかもしれないわネ。だけど、私なんかだったら、じっと、されっ放しになっていないから、大声を立てられたりして、結局、恥をかいて逃げだすのが関の山よ。

あら、痛いじゃないの。私がこんな話をしたからって、親の仇を討つみたいに、きつく縛らないでよ。痛く縛られるのが好きじゃないのかって？　そう言われると弱いけど、なんというのかしら。愛情をもって縛られると私も女の子だから、つい、ほろりほろりと協力っていうの、同情っていうの、なんだか言葉は知らないけど、この人にだったら、縛られても、いじめられても、どんなことをされても、いいっていう気持になってしまうの。

だからネ、女の子を縛るときに、そう、むやみやたらに、きつく責めるのがいいって、いうもんじゃないのよ。ゆるくてもいいときもあるし、きつかった方がいいときもあるってわけなの。ええ、そうなの、縄をチラッと見せられただけでも、ズーン——とくるときだってあるものネ。

よく雑誌を見てたら、気違いみたいに、なんでもかんでも、きつく縛ったり、ひどくいじめたりしさえすれば、M女性は喜ぶものだと考えてる人があるけど、あれは誤りだと思うナ。先ず相手の心をつかむことが第一。責めたり縛ったりするのは、二の次、三の次というところじゃない。誠意を示しさえすればSMに対する愛情というものも、理解されてくると思うのよ。私なんか、お酒さえ飲んでいりゃ、ごきげんなんだから、その点は扱いよいんじゃない？

誠意を示すって、どんなことって？　そりゃ、やはり、命から二番目に大事なものを差し出すことネ。問題は簡単じゃない。

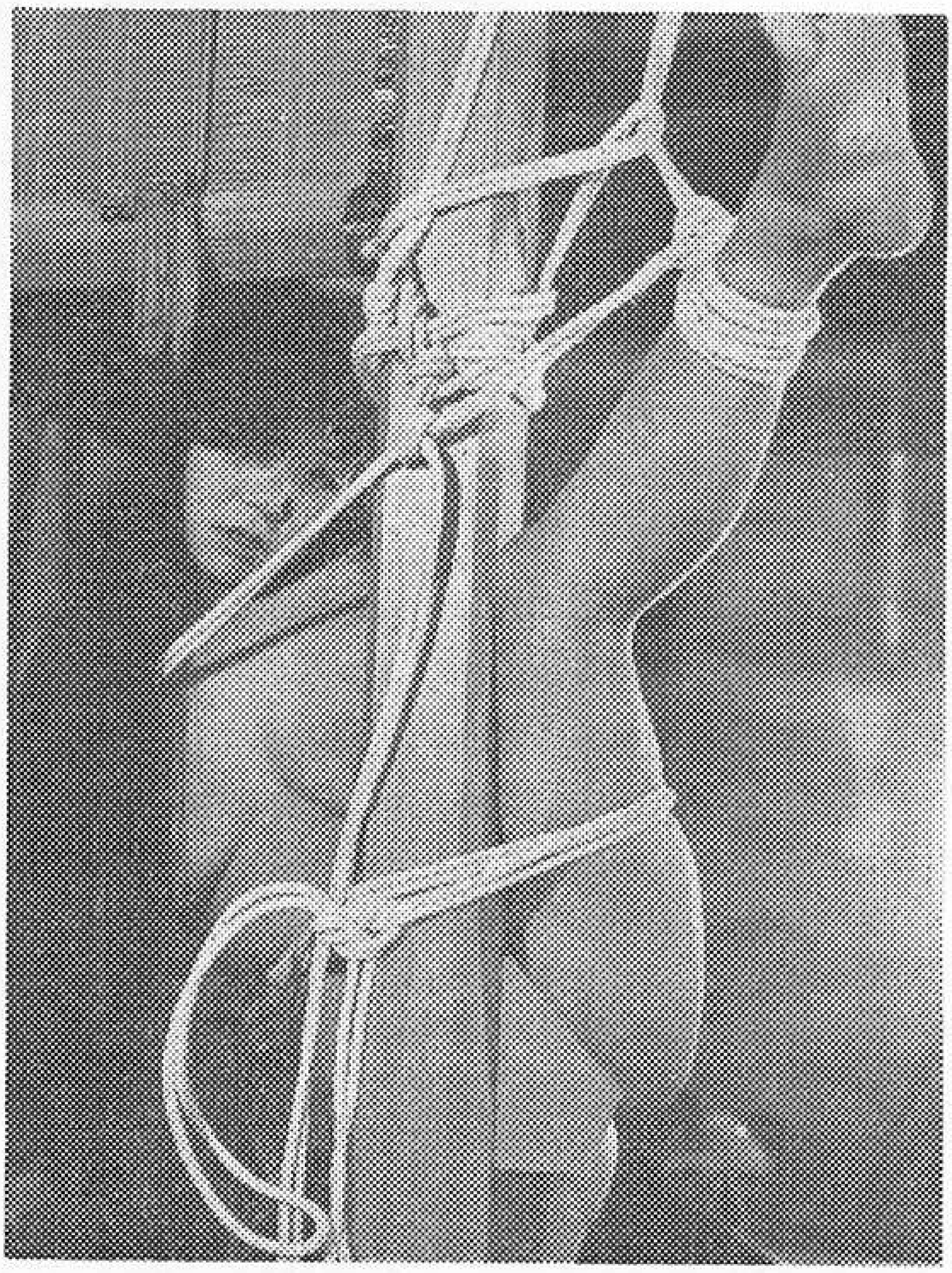
あら、あら、こんな、つまらないお喋りをしていて、お写真とれまして？　三台分、全部とってしまいなさいナ。私からは、決して自分からやめにして——なんて言いませんからね。やめさせたいときは、いつも、とっておきの奥の手を使いますのよ。あんたがね、

写しかけであろうが、なんであろうが、写真をやめさせてしまうコツを、私は知っているんですからね。

縛るのに、長い髪が邪魔になるって？ そりゃ仕方がありませんわよ。私も暑いのをガマンして写真をとるときには、こうして垂らしてきてるんだもん。平常は、まるめてアップにしたときが多いの。ええ、私って長くするときは自分の髪で、短い髪にするときはカズラにするのよ。だから、カズラは、和服だとか洋装だとか、いろいろ、そのときに応じて、六つばかり持ってるのよ。

ええ、もちろん切らないわよ。あんた、私のあの方も切りたがってるのと違う？ 油断もスキもないんだからとにかく、縛るときぐらいは辛抱してョ。縄に髪の毛がからまって抜けるってですか。私はかまいませんよ。少しぐらい抜けたって、すぐ生えてきますからネ。こんなに多いんだもん。そうなの、私を縛ったあとは、縄と髪の毛がごっちゃになってるって？ それ本当？ じゃあ、引っぱられて抜けた髪の毛をまとめておいたら、相当なカサになるわけネ。

これでも、私、一時から見たら、大分、先の方を揃えて切ったから、もっと長かったかもしれないわ。髪の毛をつかんで引きずりまわしてもいいわよ。女の髪の毛は象をもつなぐって言いますから、それぐらいだったら、平ちゃらでしょうね。



今年の夏、私を海へ連れていってくれないかしら。私、素裸で、髪の毛を流しながら泳いでみせるわ。和船でも、モーターボートでも、ついてきてくれたらいいわ。そうね、志摩の海岸だったら、尚いいわね。写真もとってもいいわ。和船を漕ぎだして、船の中での縛り写真をとっても面白いじゃない。船を漕いだり泳ぐことだったら、私にまかしといて——。潜るのも平気よ。これで五本撮ったの。いつもより少ないけど仕方がないわね。でも、あんな大写しばっかり撮って、SMポルノっていうの、あれなんか、私、ぞくっとしちゃったわ。テープ切っといたからいいようなものの、廻したままだったら、大変だったじゃない？ フフフ、そんなこと言って、私をそそのかそうったって、その手にのらないワ。そのうち、また変わった話題を仕込んでおきますから、この辺で。

☆小説「拷問クラブ」シリーズ＜最終回＞☆

復讐の処刑

鶴見浩一

カット・岩波大介

一

地下室は反響がよい。コツコツと、信次の歩き回る靴音だけが、やけに高く響いた。

「信次、助けてくれッ」

不気味な沈黙に耐えられなくなった松山老人は、悲鳴をあげた。こういう状態が、すでに数時間は続いている。

「頼むッ。何でも言う事を聞くから……」

ふふ、と口を歪めて、信次は松山老人を見下ろした。老人は、その年老いた身体を大の字にして特殊ベッドに縛られていた。醜い裸を、あおむけに横たえている。不気味な不安と恐怖に、枯れた肌は粟立っていた。

信次は、手にした針金で、老人の顔をつつきながら、冷たく口を開いた。

「助けてくれ？　ふん、俺の、ただ一つの宝物であった明子も、何回も、いや何十回も、そう言った筈だ……」

「悪かったッ。私が悪かった！」

信次は、ふん、と鼻で笑うと、老人の耳に針金を刺し込んだ。

「痛い！　や、やめてくれえ！」

「自分が考案し、何十人もの女がのたうち回った、その特殊ベッドの寝ごこちは、いかがです……」

信次は、復讐の快感に酔っていた。永年に亘って待ち続け、完全なる計算と忍耐の末に得た快感である。

――この親娘を、どの様な拷問で責め痛ぶってやろう……。

そう考えると、信次の胸は、ゾクゾクと高鳴った。責めの限度はないのだ。発狂しようが、絶命しようが、信次には構わなかった。常識的なモラルとか、罪の意識は、とっくの

昔に捨て去っている。信次に残っているものは、ギラギラした憎悪と、無意識の内に養われた残酷追求のサディズムだけであった。

「娘は、美佐は何処にいるッ」

「ほほう……サドの権化みたいな貴方でも、自分の娘は可愛いいと見える……」

「答えてくれッ、無事か！」

　必死の形相の松山老人を見下ろして、信次は皮肉っぽく笑った。

「無事でいる訳がないでしょう。貴方が、すさまじい責めを与えたあとですから……」

「ああッ、やめろッ。言うなッ」

　松山老人は、横に激しく首を振った。

「ふふ……悪魔の様な貴方でも、自分の娘を虐める事は苦痛ですか……。娘さんはね、今別の部屋にいる」

「別の部屋？」

　松山老人は不安そうな表情をした。

「貴方が考案した部屋で、地獄の苦しみに耐えている筈です……。神経拷問〈赤い部屋〉の中で……」

　ヒイッ、と松山老人は、悲鳴をあげた。

「信次！　頼むから出してきてくれッ。非道い責めの後に、あんな所へ入れられたら悶死してしまうッ」

「そうですか、悶死ねえ……。よろしい、娘さんを出してきましょう。あんまり簡単に死んで貰っては、面白味がなくなる……」

　信次は、素直に松山老人の言葉を聞くと、数分して美佐を引きずってきた。

「美佐！」

　松山老人は、ぐったりと肩で息をしている娘を見て、呻き声をあげた。

　一糸纏わぬ美佐の白い肌は、無情な赤色に染まっていた。鞭と針責めと赤い部屋の苦しみに、血の汗を噴いている様な裸身だった。

「美佐！　大丈夫かッ。お父さんだッ」

「ウウ……」

　美佐は、充血して潰れかかった目で、父を認めた。

——ああッ、お父さんッ。助けてえ！

　美佐は、絶叫した。が、口枷は取り除かれていても、声は出ない。極度の苦痛と疲労で口すらも開く力がなかった。

「さて、そろそろ始めますか……」

「な、何をする気だッ」

　松山老人は、血の出るような声を出した。

「決まっているでしょう……」

　と信次は、針金の先で美佐の乳房をつつきながら言った。

　アッ、と美佐は、身体をねじる。

「貴方が、私の恋人の明子を虐待したようにお嬢さんにも、地獄の拷問を味わって貰うのです。まず、軽く虐めてみますか……」

「やめろ！　信次。やめてくれえ！」

　鎖を激しく鳴らし、ベッド上で叫ぶ松山老人に構わず、信次は責めを開始した。

——さて……

　と信次は、ぐったりと動かない美佐の裸体を見下ろして、責めの方法を考えた。

——責めは、無限にある……。この針金一本でも……。

　信次は、美佐の頭を片手で押さえつけると可愛いらしく尖った鼻の中へ、針金を差し入れた。

「ギャッ……」

　鋭い衝撃に、美佐の裸体が躍った。

　信次はグイグイと針金をねじ込んでいく。

「……」

　美佐の四肢が、激しくケイレンした。血が静かに鼻を流れる。

　獣のような美佐の絶叫を聞いて信次は、やっと針金を抜いた。

　が、許した訳ではない。今度は、鋭い針金を、美佐の耳の中に突っ込んだのである。

「ウアッ！」

美佐の頭が、激しく動いた。四肢が、ピクンピクンと突っ張る。

それでも信次は、針金をねじ入れていく。

「ウアア――ッ！」

鼓膜が破れる苦痛に、美佐の絶叫が地下室を覆った。

「ああッ、やめてくれッ。美佐を虐めないでくれえ！」

松山老人は、自分が責められているような声を張り上げた。信次は、身体を起こすと、冷たい声で松山老人に言った。

「それでは本格的な責めに移りましょう……木馬責めで、丸一晩かかって股裂きを行ないます」

「馬鹿！　やめろ！」

信次は、薄笑いを浮かべると、地下室の中央に、木馬を引き出した。四十度の鋭い角を持つ木馬には、責められて泣き叫んだであろう娘達の血が、黒く附着していた。

信次は、ぐったりと動かない美佐の裸身を抱きかかえながら、冷たく言った。

「木馬責めは、普通であれば途中でやめますな。そのまま責め続けると、股から真二つに身体が裂けるからです」

信次は、松山老人の趣味である言語的拷問を楽しみながら、木馬に向かって美佐の両足を開いた。昨日の出産拷問で責められた美佐は、無残に肉が露出していた。

「さて、お嬢さんに跨がって貰います」

「やめろ、信次！　やめてくれえ！」

「やめません……。股から裂けて、腹が真二つになるまで、やめません……」

松山老人の顔色が変わった。

「ば、馬鹿なッ。そんな事をすれば美佐は死んでしまうではないか！」

「そう……。苦しみにのたうち回りながら、少しずつ死んで貰うつもりです……」

信次は、美佐の開いた両足を、木馬の上に跨がらせて、ささえていた手を離した。

「ギャアッ！」

瞬間、仮死状態で目を閉じていた美佐は鋭い悲鳴をあげた。

「い、痛いッ。ああッ、やめてえ！」

鋭い木馬の角に触れている柔らかい肉に、全体重がのしかかる。その肉は、昨日拷問ショウで、潰れ、裂け、神経が剝き出しになっていた。

美佐は激痛に歯を喰い縛り、狂ったように身悶えした。が、動くたびに木馬の鋭い角は柔肉に喰い込んでいく。

血が、木馬の斜面を流れ落ちた。

「やめてくれえ！」

しぼり出すような悲鳴を、老人はあげた。

「お願いだ！　娘だけは責めないでくれ！」

老人の必死の哀願を、信次は鼻で笑った。

「やめる訳にはいきません……。さて、もう少し娘さんに苦しんで貰いましょう……」

信次は、車がついている木馬を、コロコロと引っ張り廻した。

「キャッ……ギァウ――！」

木馬が動くたびに、美佐の裸体から激しい悲鳴が洩れた。鋭い角が情容赦なく喰い込むのだ。

木馬が動いた跡には、真赤な血が、点々と軌道を描いた。

信次が激しく木馬を揺すぶると、美佐は電気に打たれたように、大きなケイレンを繰り返し、木馬の上に、うつぶした。両足の間から、潰れた赤い肉片が、切れそうになって顔を覗かせている。

「ウウッ！」

美佐は、発狂する程の苦悶に、失神した。

信次は、強心剤を打ちながら、松山老人にニヤリと笑いかけた。

「苦しそうですね、娘さんは……」

「……」

松山老人は、絶句して信次を睨んでいる。

信次は、楽しそうに作業を続けた。

「ウアッ……」

恐ろしい激痛の感覚を呼び戻された美佐は脂汗に裸体を光らせ、顔を歪めた。すでに、哀願する気力もない。

信次は、美佐の細い両足首に、鉄の重しを取りつけ始めた。まず、一個を、各々の足にぶら下げる。

「グアッツ！」

美佐の両目が、カッと見開かれた。

それでも、信次は容赦しなかった。ヒクヒクとケイレンを繰り返す美佐の足首を撫でながら、しゃがみ込んだ。目の前の可愛いい足指は、流れ落ちる血潮のために、真っ赤に染まっている。その足に、もう一個ずつの鉄の重しを固定したのである。

「……」

形容し難い絶叫をあげた美佐は、ガクンと上体を、のけぞらせた。

イメージギャラリー『耐久実験』志羽利也

顔中の筋肉が異様に歪み、苦悶の激しさをあらわす如く、口唇を伝って血と粘液が流出した。

二

仮死状態になった美佐に、多量の強心剤を打ちながら、信次は松山老人に、冷たく笑いかけた。

「どうですか、娘さんの苦悶の表情は……」

「……」

松山老人は、絶句して絶望の色を浮かべている。

信次の全身に勝者の喜びが快く貫ぬいた。

「因果の報酬は、正しい哲学である、とあなたは大学で教えてくれましたね……。まさしく正しい言葉です」

松山老人は、ピクンと顔を歪めると、あえぐように叫んだ。

「信次、君は一体、私達をどうするつもりなんだッ」

「何度も言ったじゃありませんか。明子に与えられた苦しみを、あなた方にも味わって貰うのです……」

「ああ、やめてくれ……。私は、まだいい。

しかし娘の美佐だけは……」

　ふん、と信次は鼻で笑った。

「そうもいきません。親娘、仲良く責苦の波にのたうち回りながら、じっくりと時間をかけて死んでいただきます」

「ああ！」

　松山老人は、絶望の溜息をついた。

「さて……」

　と信次は、身体を起こした。

「いよいよ、娘さんの腹を、真っ二つに裂いてみましょう……」

「やめろ！」

　絶叫する松山老人を無視すると、信次は美佐に向かった。

　美佐の朱に染まった両足は、激しく突っ張りケイレンしている。その足首に信次は、あるだけの重しを用意した。

　五キロの鉄が、六個ずつ、両足首から下げられた。

「……」

　異様な呻きとともに、シャアーッと鮮血が噴き出した。激しい勢いで、柔肉を木馬の角がえぐり、切り裂き、喰い込んでいった。

　両足に下がった三十キロの重しは、尚もジリジリと、可能の限界まで女体を引き下ろす。

「グェーッ！」

　断末魔にも似た悲鳴が地下室を覆い、美佐は地獄の底へと意識を失っていった。

　何度も強心剤が打たれたが、すでに美佐の意識は正常に戻らなかった。想像を絶する苦悶の連続に、美佐の脳神経は、ズタズタに破壊されたのである。

　美佐は、発狂したまま、子供のような声と態度で、苦痛を訴え続けた。

「お父ちゃん、痛いよお……お腹が痛いよお……。ああ、お父ちゃん……死んじゃうよお……。痛いよお……」

「美佐、大丈夫か！　美佐――！」

　血を吐くような声で松山老人は絶叫した。

　が、いかに叫ぼうと動こうと、特殊ベッドに固定された老人の自由は利かない。

「さて、松山老人……。今度は、あなたの番です……」

　信次は、キッキッキキ……と不気味な声をあげて、木馬責めにのたうつ発狂した美佐を見ながら、松山老人に宣言した。

「……」

　松山老人は、絶望に歪められた顔で、信次を見た。言葉は、出ない。

「最後の目的であるあなたには、最高の処刑方法で、悶死して貰います……」

「……」

　信次は、抵抗する力を失くした松山老人の口に、素早く口枷を固定した。

「……？」

　今更、何を……という表情の松山老人に、信次は口を歪めた。

「これから行使する刑罰は、想像を絶するものです。だから、苦痛から逃げようとされては困りますので、自殺防止のために……」

　信次は、小さな箱を持ってきた。それを、ポンポンと叩きながら、薄く笑った。

「この中に、何が入っていると思います」

「……」

「……ネズミです。ネズミ……」

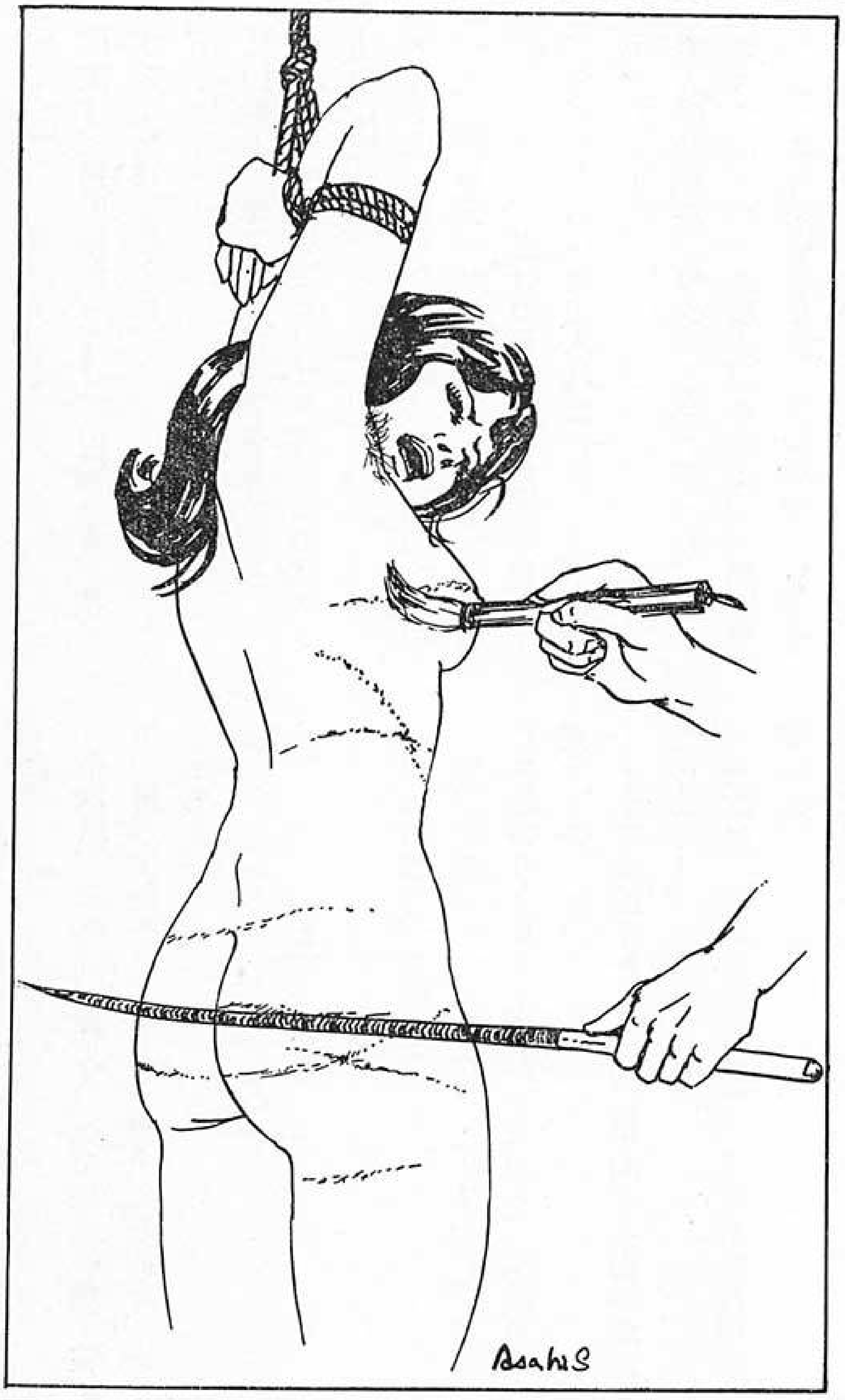
「……」

　松山老人の目が、カッと見開かれた。その顔は、恐怖のために大きく歪む。

「ほう、やはり、サドの大家ですな……。老人は、このネズミの使用法を知っていると見える……」

　信次は、満足そうに笑った。

「ネズミを使用するこの処刑方法は、あなたも御存知のように、人類の刑罰史上、最高に残酷なものとされています……」



……イメージギャラリー……『悦楽の苦鳴』……須坂旭……

信次は、言語拷問を始めながら、ガラスの箱を、老人の腹の上に固定し始めた。

「ウウッ……」

恐怖のために、松山老人の肌に、無数の粟が立った。

「腹を空かしたネズミを、処刑者の裸の身体に乗せ、外部へ逃げられないようにフタをする……。そうすれば、どうなるか、言わなくても、あなたには分かるでしょう……」

「ウ……ウアッ……」

「ネズミは逃げ場所がない事を知ると、柔らかい人間の肌を喰い千切る……。そして、腹の中の臓物を食べながら、二日がかりで身体に穴をあけ、脱出する……。あなたは、腸や胃を喰い千切られながら、苦しみ、のたうち回って悶死となる……。人類刑罰史上、最高に苦しい処刑方法です……」

「ウッ……ウオッ……ウアッ！」

松山老人は、蒼白な顔色になって、激しく身悶えした。

が、信次は簡単に、ガラスの箱を取りつける。固い革のバンドが腹を巻き、ガラスの箱は、松山老人のヘソを中心とした場所に固定された。脇腹の隙間には薄い金属のテープが張りめぐらされる。

「さて……」

と信次は立ち上がった。

「松山老人……。覚悟はいいですか……」

「ウッ……ウウッ！」

「永い間、待ちに待った瞬間です。私は、私のたった一つの宝物であった明子を、メチャメチャに破壊したあなたに、どんな方法で復讐してやろうか、と四六時中、考えていました……。その結論が、この処刑方法です」

「ウアッ……アアッ！」

「娘さんへの責めは終わりました。恐らく、あのまま身体を二つに引き裂かれて、彼女は悶絶するでしょう……」

血だらけになり、奇声をあげている美佐を

見て、信次は満足そうに言った。

「残るは、あなたへの、死のプレゼントだけです……」

信次は、箱の中からガラスの箱へと、痩せたネズミを移し替えた。

「……」

松山老人の悲鳴が、地下室を覆う。

信次は、冷静な目で、ガラスの箱のネズミを注視し続けた。

ネズミは、狂ったように、一尺四方の箱の中を飛び跳ねていたが、ガラスに歯が立たないのを知ると、自分の足元――老人の腹――に、ガブリと鋭い歯を入れた。

「ギァウ――！」

老人の身体が、ガクンと突っ張った。

ネズミは、パッと噴き出た血に、一瞬、驚いたように身を引いたが、次の瞬間、狂ったように足元の肉を喰い始めた。

「……」

形容し難い絶叫が、地下室に充満した。

信次は、ゆっくりと立ち上がった。首を回して美佐を見ると、すでに彼女は動かない。おびただしい血色に囲まれて死体の如く、うつぶしていた。

信次は、静かに歩き始めた。チラリと老人を見たその目の奥に、真赤な腸が飛び出している絵が、走馬灯のように走った。

信次は、三年間、住みついた地獄の地下室に、静かに錠を下ろすと、廊下に石油を、まき始めた。

三

夕方の街は、混雑している。

黙然と歩いている信次と逆の方向に、けたたましいサイレンを響かせながら、消防車が走っていった。

――全てが燃えた……。三年間の空白が燃えたのだ……。

信次は、清々しい表情で、その音を背中に聞いた。

「さて……」

信次は立ち止まった。その前を、若々しい美に囲まれた娘達が、三々五々歩いている。清純そうな一人の娘の前に、信次は近づいた。

「あの、ちょっと……」

「……？」

立ち止まった娘の顔に、信次は、笑いかけた。

「私は写真家ですが、あなたの写真を撮らせてくれませんか」

「……」

半年間の約束で借りている友人の別荘は、今日からでも使用できる。拷問クラブの会場には、もってこいの場所にあった。

――松山老人の代りに、もっと凄い拷問クラブを作って見せる……。

信次の性格は、すでに危険な方向へと侵されていた。

これからの人生に、女体加虐の刺激は必要不可欠なものとして、信次の胸の中に養われているのである。

ミイラ取りが自ら好んでミイラになったのである。

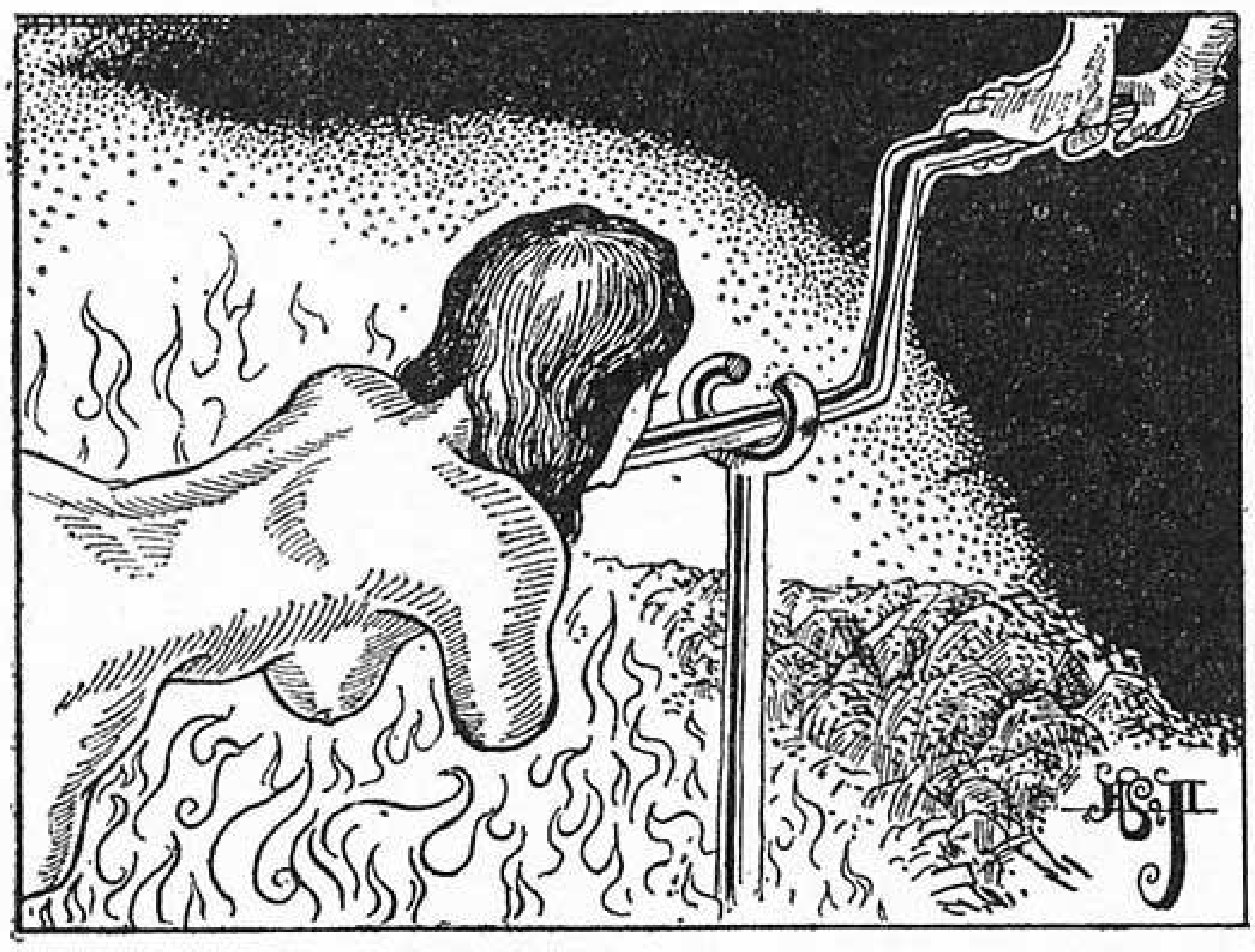
プレイを超え、犯罪といえるサディズムの果てしなき追求というミイラに……。

信次は、精一杯、娘に笑いかけた。

娘は、思わずコックリと頷いた。この若者の瞳が、秋空のように碧く、美しく澄んでいたからである。

街には、消防車のサイレンが、けたたましく響き渡っていた。

――（終）――



カット・室井亜砂路

美人魔女の最期

うらめしや ッタラ うらめしや

小倉幸男

「うらめしやー」

　無気味な声に目をさますと、枕もとに、まるはだかの美しい女性が立っていた。

　ハッとなったが、すぐに、わたしの直感がはたらいた。

「あら、ユーレイさんね。こんばんわ」

　わたしがおどろかないので、ユーレイのほうでおどろいたらしい。

「こ、こんば……いや、うらめしやー」

「あなたは殺人魔女でしょう。わたしは、よく知ってるんだから」

　最近話題の、若き美女を次々と誘拐し、無惨な死体としてしまう殺人魔女。犯人は絶世の美女で、もちろん死刑をうけ、晒し首、晒し胴となるが、翌日には次の魔女が出現、同じような犯行がくりかえされ、このため自称美女たちの間で大恐慌がおこっている。

　わたしは察している。若い女性共通の、自分より美しいものに対する反感が、殺人にまで発展したのだ。死刑により生命を失えば、ユーレイとなってほかの美女にのりうつり、己れの果し得なかった夢をつづけ、あわせてその美女をも死刑台に送るのだと（五月号、うらめしやー）

「なんだか調子が、くるっちゃったわ。うらめしやー」

「だめよ、いくらうらめしがっても……。わたしは、あんたの先輩だもの」

　何をかくそう、わたしは絞首刑をうけ、地獄におもむき、エンマ大王の侍女になりながら、あまり美しかったため王妃にヤかれ、絞め生かされた女だ。こんな後輩におどろくわけはない（一月号、冥府よりの帰還）

「でもそんな話、きかなかったわ」

　ユーレイは、わたしの自己紹介に、信じられないといった顔付きだ。

「それはね、死の確認後、五分以上も吊るしたのにイキをふきかえしたので、所長以下、みんながオロオロしちゃって急いでもう一度絞首台に追いあげたのに、ロープが切れたりゆるんだりで、わたしは死ななかったのよ。

ギロチンにかければ斧が途中でとまる。電気イスに縛れば停電。ガスは品切れ。銃殺柱に立たせても命中せず、とうとう、わたしを釈放したってわけよ。かわりに、どこからか若い女をつかまえてきて、絞首台に吊るして員数をあわし、外部には、もらさないようにしたらしいのよ」

「じゃあ、あなたは不死身なのね。死刑になっても死ぬことがないのね」

ユーレイがあまりしよげているので、ちょっと気の毒になり、なぐさめてあげる意味で彼女の話をきいてあげることにした。

「私は、こんなに若く美しいでしょう。いままで殺されなかったのが不思議よ。でも、いつか、きっと殺られる。なぶり殺しでね。それなら殺すほうにまわろうと思ったの。死刑は斬首ですむし、ユメも満足できるもの」

「そう、たしかにその通り。賢明だわ」

「それで、友達をノバし、おっぱいをそぎ、おヘソをえぐり、ひと晩、苦しめてから首を斬りとってやった。でも、もうひとりの友達に密告されて、簡単に捕ってギロチンにかけられたのよ。うらめしやー」

「それでユーレイになったのね。すると、あんたは世襲でなく、新しいユーレイね」

この調子では、まだまだ多くのユーレイが出現するに違いない。ユーレイ世襲者にとって殺人とは、最高のビジネス。しかも、こんな面白いことはほかにない。そのため死刑という代償を払うわけだが……。

わたしは死刑をおそれる必要がないから、この仕事の最適任者だ。いったい、今まで何をしていたのか、もったいない話だった。

わたしは決心して、ユーレイに云い聞かせて帰らせた。

それからのわたしの働きは、われながらめざましかった。かのユーレイも、ほかの美女にのりうつて活躍し始めたようだった。また思った通り、多くの魔女、ユーレイが続出したようで、死刑をうけたもの三十人、犠牲者は四百人を越え、誰が誰をやったのかもわからぬ有様。殺し方も種々雑多。どれもわたしには興味あるものばかりだが、例をひとつだけ、あげてみよう。

滑車を通してロープをたらし、両端に美女をひとりずつ後手に吊るすと、体重の重いほうが先ずさがる。その足もとから火をたけば

「熱つ！　アツイ！　あついわあー」

悲鳴と共に身をくねらすも、火からのがれ得ず、ジリジリと焼かれる。焼けた分だけ軽くなって、もうひとりのほうがさがる。

「アチチ、たすけて！　アチチ……」

悲鳴って、どうしてこうおんなじなんだろう。こうしてふたりは、あがったり、さがったりしながら、膝、腰、腹と焦げてゆき、とうとう、くたばった。クビだけは焼かずに、かんべんしてやった。

ところで、わたしがパトロールの婦警にふみこまれたのは、十三人目の美女を絞殺し、血を浴びぬようオールヌードになって、四肢をバラバラにしているところだった。

熱心だったので侵入者に気付かず、最後にノコギリを細首にあて、ゴリゴリひいているところで声をかけられた。

まだ新米らしい。拳銃を両手で握り、前につきだすも、いかんながら銃口がふるえており、わたしは、せせら笑ってやった。

「アンタ。この状況だから、射つても正当行為よ。でも、そんな恰好でだいじょうぶ?」

婦警は、緊張に蒼ざめながら、指を引金にかける。本気で射つつもりだ。わたしが不死身のオンナとも知らずに。まだ、はたち位のかわいい顔の婦警さん。お気の毒に、この近距離から射ってあたらなかったら、さぞおどろくだろう。それとも弾丸がでなくてあわて

るか、そこをねらって拳銃を奪いとり、逆に射ちとめてやろう。十四人目にカウントする価値はありそうだ。

婦警は右膝をつき、最も確実な膝射ちの構え。わたしは、わざと前にでた。銃口が、おヘソにふれる。更に一歩、すすむ。柔らかい皮膚に銃口がめりこみ、冷たくていい気持。

「さあ、射ってごらん。射って下腹の皮膚がぱっと裂け、真赤な血汐がピューと流れなかったら、おなぐさみよ」

わたしはタンカを、きった。

婦警は引金をひいた。

にぶい銃声が、ひびいた。

死を宣告する、すさまじい激痛が、わたしの身体を貫ぬいた。

わたしは、弾丸の命中した箇所をみた。

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る
団鬼六作『花と蛇』特集第四弾
本誌S42／1よりS44／4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫がありますので、未入手の向はお早いめに是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号　暁出版株式会社へ。
略号『花』　定価五〇〇円(送共)

下腹の皮膚が、ぱっと裂け、真赤な血汐がほとばしり、でていた。

こんな、はずはない。わたしは死なないはずだ。それとも前のように、いったん死んでまた地獄で射ち生かされるのかしら。

耐えがたい苦痛に、わたしはドオとたおれた。婦警は、ほっとした表情で額の汗をぬぐいつつ第二弾をわたしの心臓に射ちこんだ。

〇

この道は、いつかきた道。地獄への道。

あたりは、まっくらだが、そろそろ前方に灯が見え、赤オニ、青オニが門番をしているはずだ。

途中、手さぐりでウロウロしていた、絞首刑になったという美女を追いぬき、ようやく地獄への入口についた。

「また一匹、きゃがった」

おや、この前の時は〃美しいお嬢さん、いらっしゃい〃と、愛想よくむかえてくれたのに、ひどくサービスが低下したものだ。

「あたしよ、ホラ。大王の侍女になりながら王妃のジエラシーから、あなたたちに締め生かされた、わたしよ。忘れたの？」

鬼たちは、やっと思いだしてくれた。

「ああ、あの時の女がお前か。あれから、若くて美しいオンナが続々やってきてね、王妃はヒステリーが、こうじて入院。大王は、よりどりみどりのゴキゲンでいるよ。おかげでおれたちは、女たちの世話においまくられ、たまったもんじゃないよ」

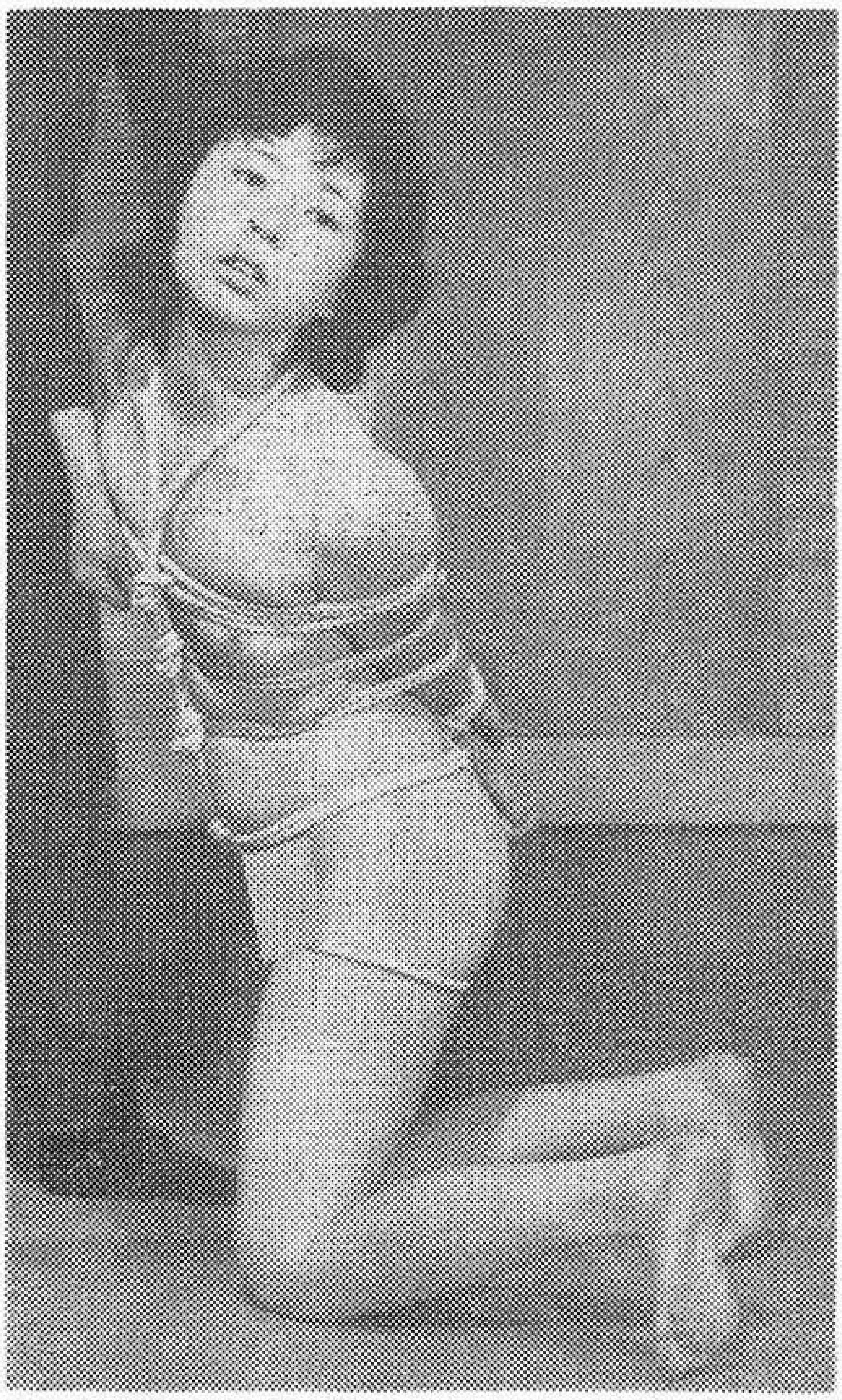
わたしは笑いだした。これで死んだわけがわかった。きっと地獄で大王が呼んだのだ。すると、もう前のように俗世に送り帰されることはないだろう。今度こそ侍女になれる。ようし。あわよくば、入院中の王妃にとってかわり……と思った。

だが、現実はキビシイ！　わたしの黙算はみごとに外れた。あまりにも若く美しい女たちがあふれすぎたため、わたしは面接だけでかるく落とされ、なんと下女にされてしまったのだった。

毎日毎日、針の山の針みがき。長さ五十センチ、巾一センチの太いものが十万本。一本でも輝きの悪いものがあれば、それはわたしの身体の、おヘソや乳首など、鋭敏なところをえらんで突き刺さるのだ。その痛いことったら！

いつまでこの責苦が続くのか。もちろん、死ぬまでだ。？？？

うらめしやー



＜告白＞

夢遠き日頃

前田真知子

私が四月号に＜京都慕情＞という文章を発表させてもらってから、多くの方々からの反響を頂き、うれしく思っておりますが、あんな拙い文章だったのに、これほどまで、熱心に続んで下さって、と自分ながら、とまどいをさえ感じています。六月号では、提崎昭人さんが私のことを詳しく書いておられますがよくもまあ、これほどまで、細かく分折して下さったものだと、内心こそばゆく感じました。

当たっているところもあり、的はずれのところもありましたが、提崎昭人さんは、大変カンの鋭い洞察力のある方だと、少し怖い気がしました。

私は自分の縛られた裸身と、告白の文章を毎月誌上に載せてもらいたい――とは思いま

せん。第一、それほど、皆さんが感心するくらい毎月文章が書ける自信がないし、それに東京と大阪との五〇〇キロの空間の距りが、私をして思ってはいても、大阪へとは近づけさせてくれないからです。

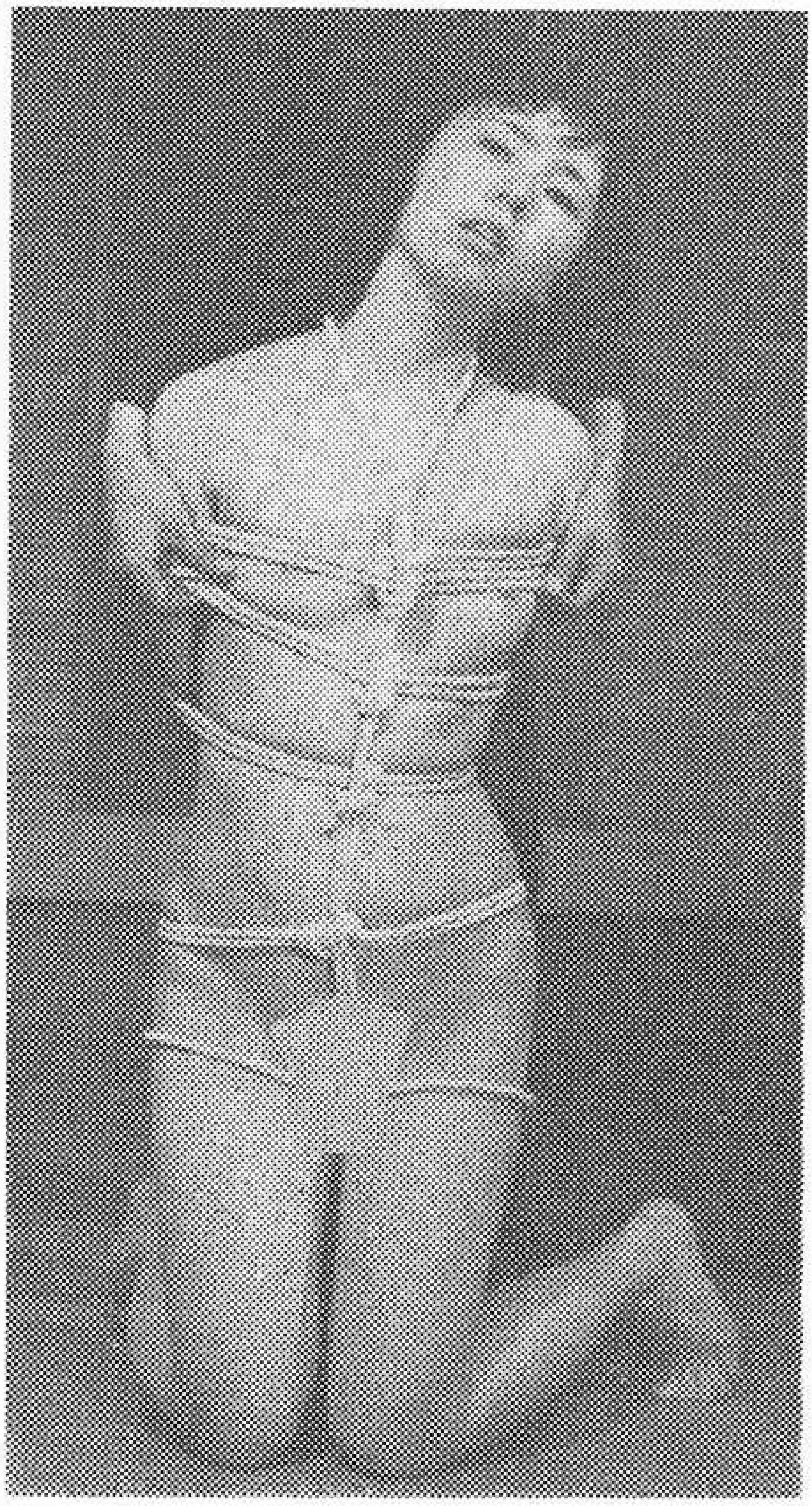
大阪といえば、私が奇クのモデルになるきつかけを作ってくれたボーイフレンドの方から先日、手紙がきました。私が転宅していましたので私の友人から新しい住所を聞いたといって、本当に久しぶりに手紙をくれたのです。まるで英文か数字でも書くように横書きの罫紙に、右上がりの斜めに傾いた読みにくい文字が、ぎっしりと詰まっていました。

やはり私の書いた四月号の『京都慕情』を読んでくれていたのです。「そんなに京都がいいのだったら、連れて行ってやるヨ。今、京都と大阪の中間にある枚方という町に住んでいる」と、書いてありましたので、ひょいと封筒を見ますと、枚方市の〇〇電機研究所気付とあります。

名古屋へ出向していると聞いていましたのに、いつの間にやら、枚方へ移ってしまったのか。エレクトニクス・エンジニアの彼のことだから、やはり本社へ帰らないと出世はしないのでしょうか。五月の連休に遊びにきたら、京都の隅から隅まで案内してやる——と書いてありましたが、その連休も、家族連れや同僚などと小旅行を試みたりしましたのでとても京都まで足をのばすことは出来ませんでした。

そして私は、奇ク七月号を手にして、利根川五郎さんの〈前田真知子恋唄〉という一文に接しました。六月号の提崎昭人さんの「思う様の記」によって、自分の身体の隅々までを、撫でさすられたように感じた私は、利根川五郎さんの文章には、あらあら、どうしましょう——と、あわてさせられました。でももう一度、告白文を書いてみようという勇気も与えてくれました。

私は彼の言っておられるように、つとめて熱心に、正確に自分のことを文章にしようと私なりに努力しました。しかし、それは自分の今の筆力をもってしては到底及びもつかないことであるということが、よくわかりました。書かれてしまったものは、既に一人歩きして、私の書いた時の気持など見向きもしないで行ってしまうのです。



私は学生時代、至って真面目に勉強しました。それが、その時点で、私に与えられた最大の使命だと考えていたからです。昨年の四月、社会人としての第一歩を踏みだした時も自分に与えられた仕事を自分の使命だと考え最高の能力を発揮して敏速正確に、その処理に当たりました。

レジャーにしても、私は幾分そんな気持を持っていました。与えられた或は可能な範囲の時間と経費を、最も有効に活用したいと思って、プランも樹て、また実行しました。

そんな私でしたので、四月号で、「京都慕情」を書いた時は、いささか気負いたった意気込みを表に出し過ぎたような嫌いがありました。なんでもかんでも、縛られに行きたい――と、いったマゾの血が騒いできたように書きましたのは、少し修飾に走り過ぎていたかもしれません。

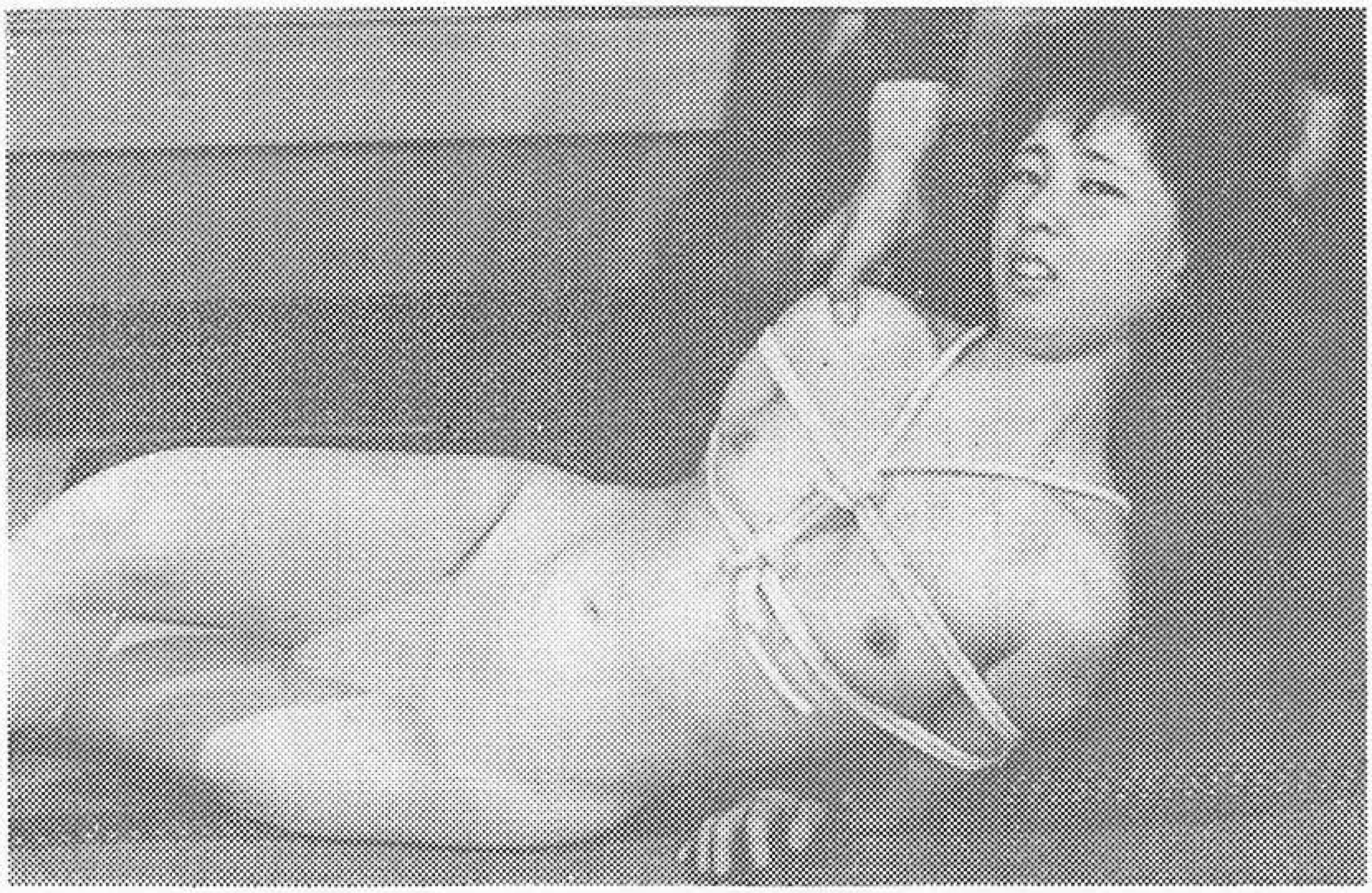
あれから何カ月、五月の生暖い新緑の薫風を頬に受けて、またまた縛られに行きたいなどと臆面もなく書きますと、私の別の本心はなんとなくツムジを曲げそうです。

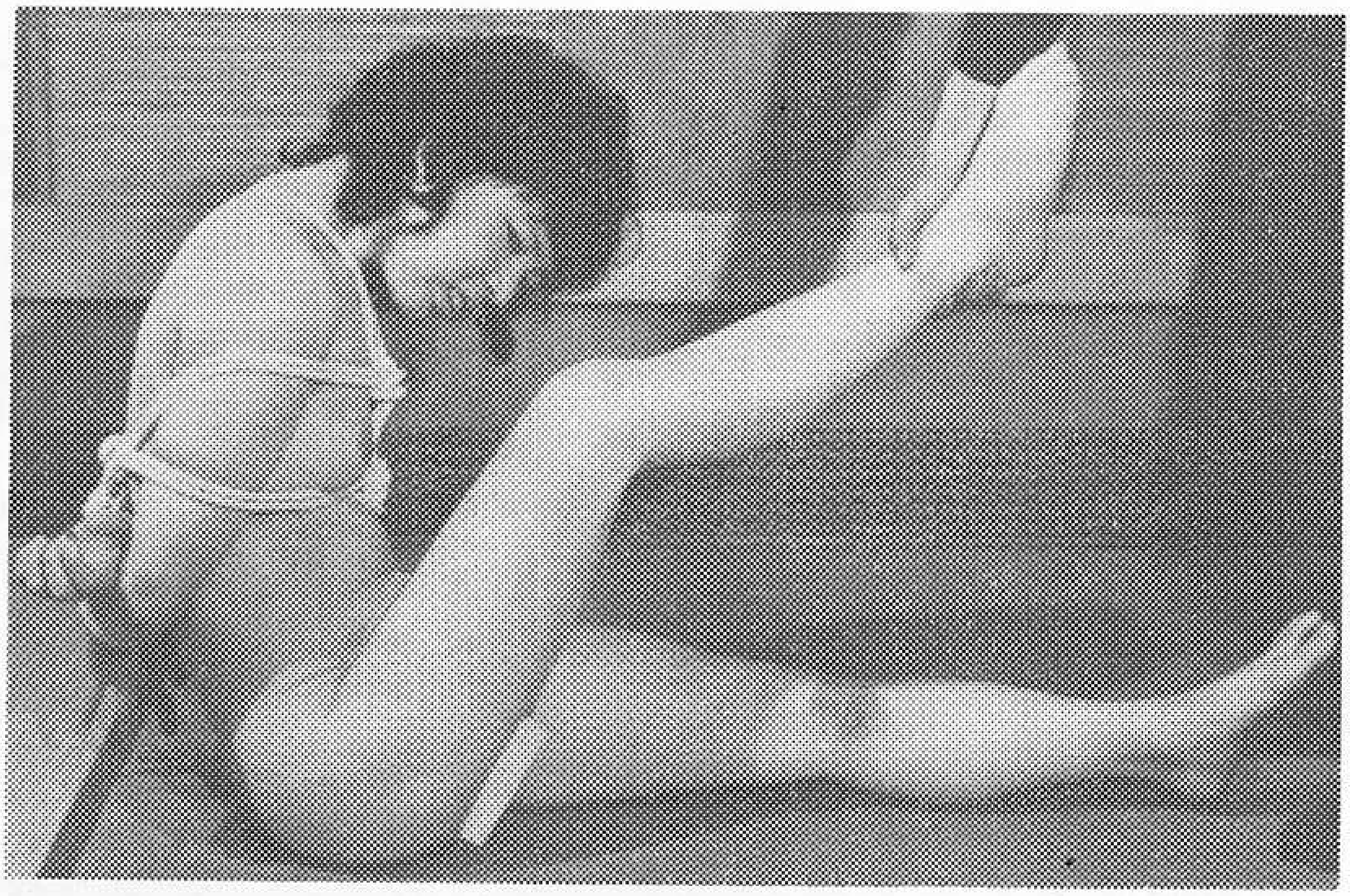
本当のところは、やはり東京から大阪まで二泊三日の旅行の出来る時間的余裕と、京都の街を歩けるという魅力が、私の心の大半を占めているのです。仕事を休んでまで、私は縛られに行きたいなどとは思いません。それほど積極的な私ではないのです。

それでいて、私は麻縄できびしく縛り上げられ、ハダカの身体のすみずみまでを、カメラの目で執拗に追いかけられるとしたら――と、今、そう考えただけでも、私の全身は熱く燃えあがってしまうのです。

だから、京都へ行ける――、そして緊縛モデルとなって縛られたハダカを写真にうつされると考えると、もう仕事のことなんかは一切、忘れてしまってSMプレイの渦中の夢幻境へ没入してしまうのです。

私は東京を発つ一週間前に、京都駅着の日時と、それからのスケジュールを詳しく奇ク編集部へ連絡しておきました。この日のこの時間と、この時間はあいていますので、是非、私を縛って写真を撮って下さい――と





私が東京から京都まで行った時、緊縛モデルにされる——という可能性は、非常に大きくなったわけです。

ちょっとしたら、縛られるかもしれない、というアヤフヤな気持より、もっと確率の高い可能性が私の前に横たわっているのです。

奇ク編集部へ連絡の手紙を出してから、私は、その思いにさいなまれ続けました。

どのような人に、どのような所で、どのように縛られ、どのように写されるのか。その場面は明らかな映像となって、私の網膜に、はっきりと映ずるのですが、それは、その都度、変わった映画のように場面が違っていました。

平常の私は、そんな空想を走らせたことは少しもないのに、何故、編集部へ手紙を出してから、このように胸さわぎがするのでしょうか。それは、やはりこの前に素裸にむかれて縄を掛けられ、鋭いカメラの目を、いくつも向けられた、あのときのことが、私の心と身体に、深く灼きついているからなのでしょう。

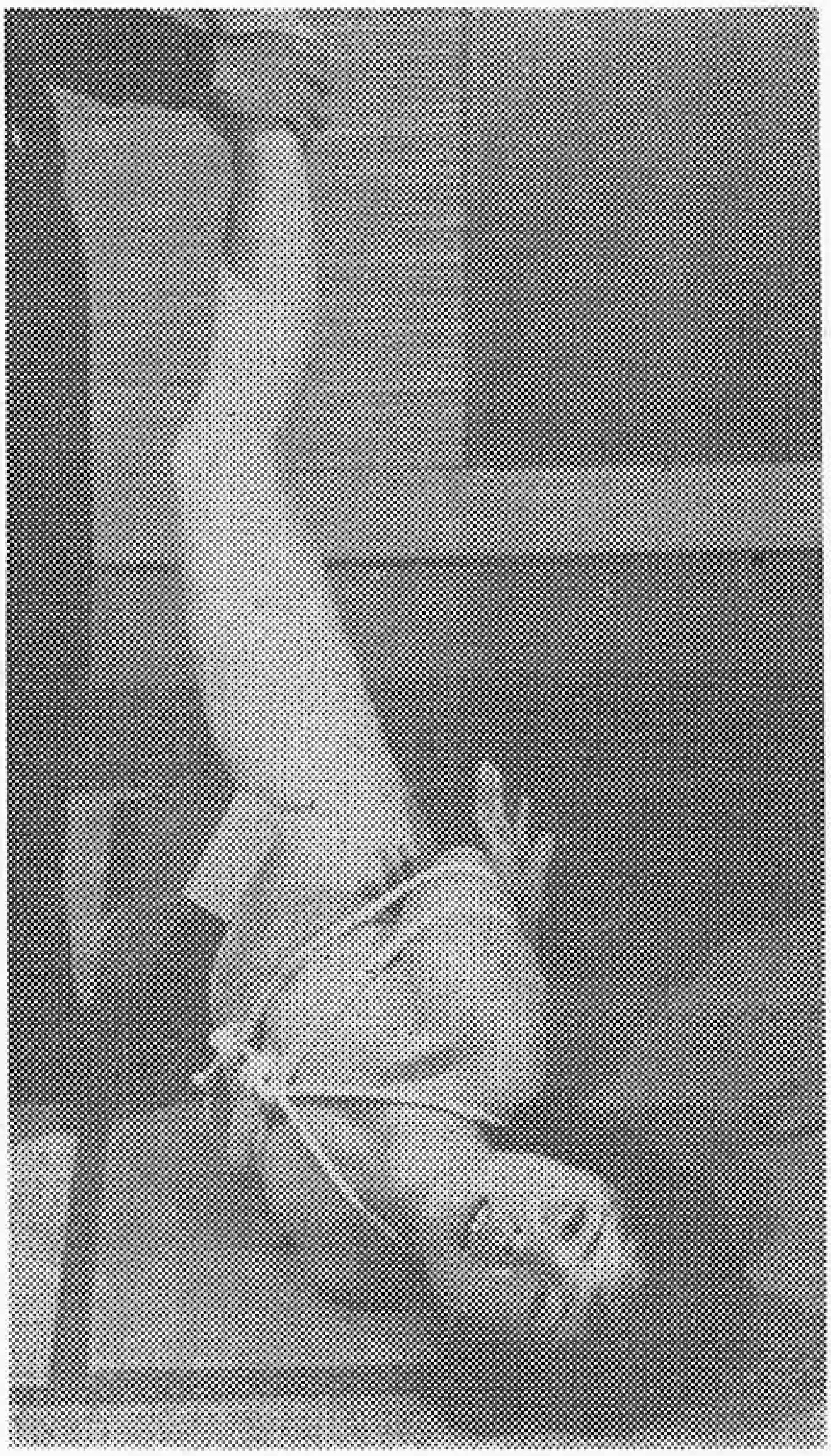
やがて編集部からOKの返事が来ると同時に、私の胸さわぎが一層ひどくなりました。昼間、勤めに出ているときは、そうでもなかったのですが、夜、自分の部屋に、ひとり落ち着いたときは、自分でも淫らなと思うほど次から次へと、あらぬ妄想が湧いてきて、それが完全な形をなさない間に消えてゆきました。

そんなはかない幻想の映像が、場面を変えては生じ、やがては消えていってしまってもいつも私の心の中に甘い残像となって、やるせないまでの思いを刻み込んでくれる一つの人間ドラマがありました。

それは、七月号で亜紀竜司さんが、＜前田真知子に贈る＞「受難論走り書き」で書かれています、第三の『胎内回帰と内臓露出』の項で、私の文章を引用されていますが、それが、そっくり私の今の気持でもあります。

〔前田真知子よ、あなたは書いている。

「私は……真正面からカメラを向けられているのに、足をすぼめるどころか、もうこれ以



上ひろげられない程、両足を思いきり左右に開いていたのである。カメラが向けられていると、そう考えただけで私は、めくるめくルツボの中で狂ったように燃えあがっていた」

　たった一つのカメラのレンズの向こうに、あなたは無数の視線を感じ無数の凌辱者を意識したのではなかったか。そしてカメラが、もっともっと近づけられることさえ、ひそかに希っていたのではなかったか。いや絶対そうであったにちがいないと、わたしは断言する。その時、あなたは恥じを仔細に検査されあげくに無数の凌辱者によって、もてあそばれる魔想に身を委ねていたと、わたしは推論する。」

　亜紀竜司さんが、断言され、そして推論されたように、私の心の奥底に深く沈潜していたマゾの血が、むくむくと頭を持ちあげてきたのは事実です。決して、平常の私は、そうではないのに、何故、このように誘発されるものを持っているのでしょうか。可燃性の何かが、私の心に巣喰っているというのでしょうか。私は自分のこの心のざわめきに対してそら恐ろしい気さえします——。

　このことは、六月号で提崎昭人さんも同じように、私の文章を、次のように引用されています。

〔それはさておき「京都慕情」のラストの告白は四月号の文章の中で、もっとも強く脳裡に灼きついたものとして、長く忘れることはないだろう。ちょいと引用させてもらう。

　〝私は自分では予想できないような行動に出てしまった。真正面からカメラを向けられているのに、足をすぼめるどころか、もうこれ以上、ひろげられない程、両足を思いきり左右に開いていたのである。カメラのレンズが向けられていると、そう考えただけで、私は目くるめくルツボの中で狂ったように燃え上がっていた。

　私の裸身はクラゲのように柔らかくなり、麻縄で、どのように厳しく縛られても、痛さを感ずるどころか、身体のすみずみまでもカメラに晒す喜びに打ちふるえていた〟

　マゾ女の本懐ここにありといったところ。しかも彼女の知性が、めったやたらのナルシシズムにおちいるのを防いでいて、清潔感が

あって好ましい。」

たしかに、私のM心が発作を起こしたときこのような昂揚した気持になりますのは、事実です。そして、今回もまた、この妖しげな昂揚が、やがて発作を起こしそうな前兆が、この胸さわぎとなって、私をさいなみ始めているのです。

もう一度、あのときのような私になってみたい――。そういう強烈な願望が、次第次第に、時間が経つにつれて、私の身も心も、しびれさせてしまうのです。

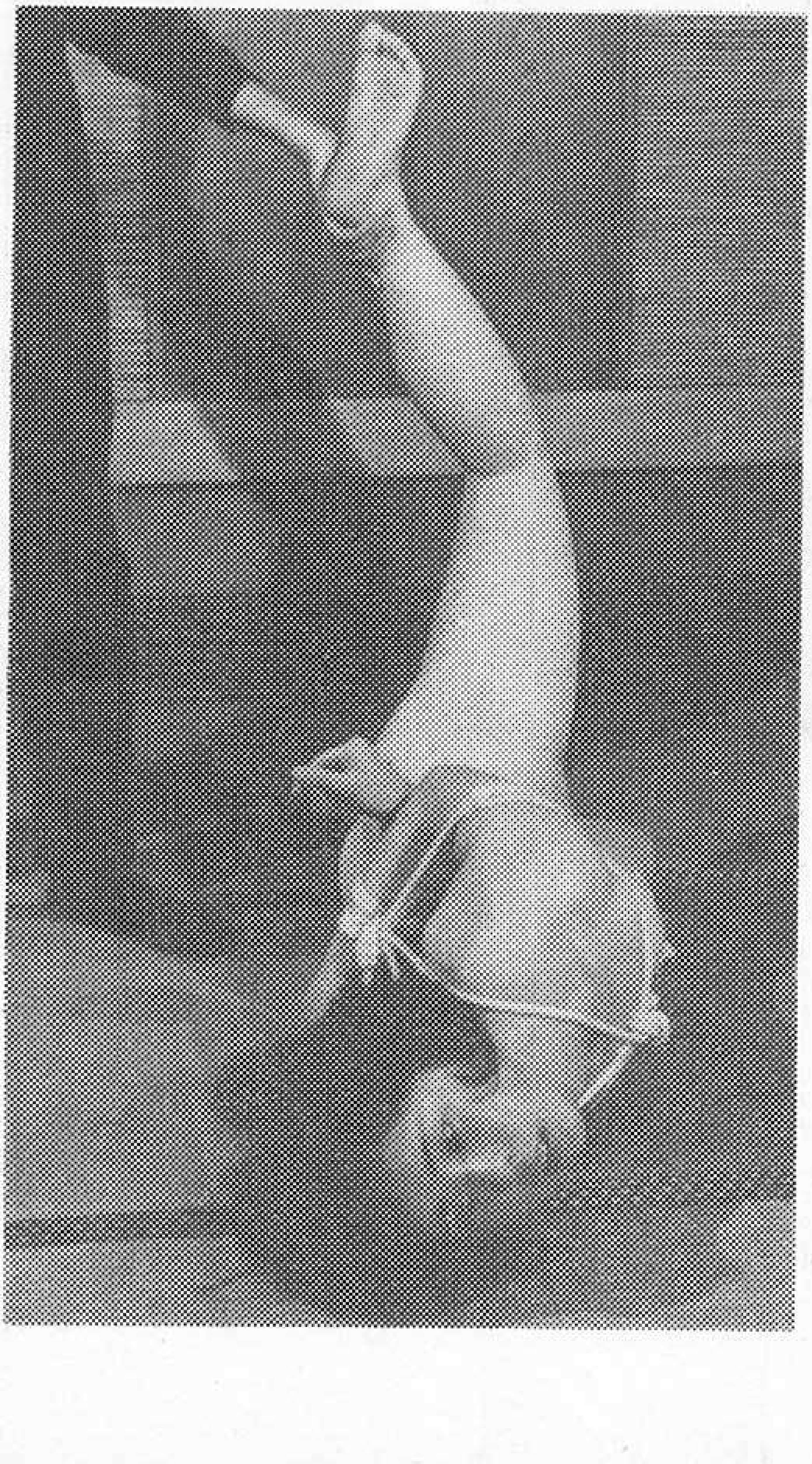
何度も言うように平常は別に変わったこともない、ごくありふれた娘である私が、何故このように変わった想念に、さいなまれるのでしょうか。もし私が奇クの緊縛モデルになるきっかけを作ってくれたボーイフレンドの方のように、私の身体に指一つ触れることなく、さらりと書き流した手紙を呉れるだけだったとしたら、私はこのように啓発されなかったでしょうに――。

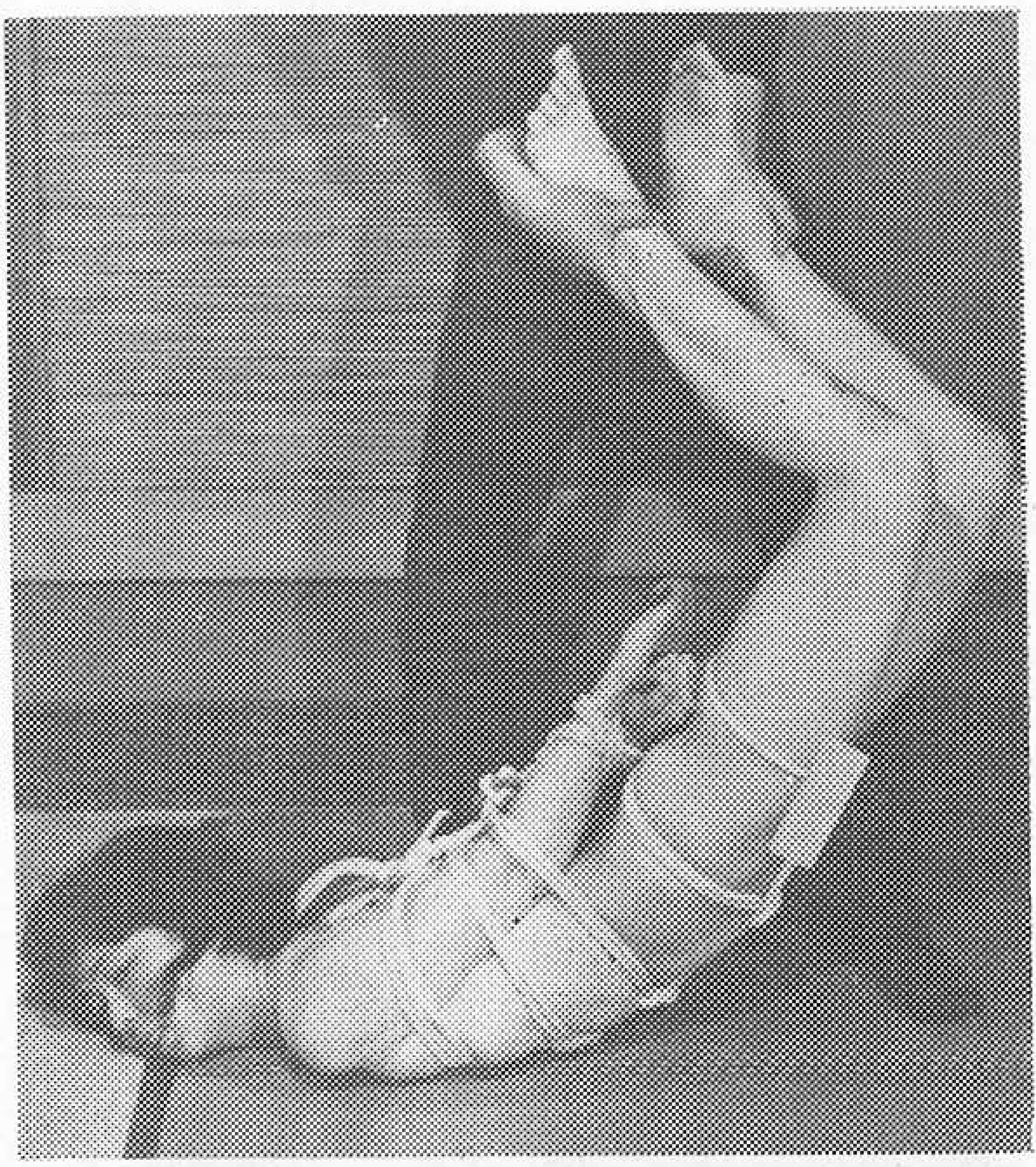
或は彼は、私のこの生長を、陰ながら期待し、傍観していたのでしょうか。今書いている、この文章も仮に誌上に載ったとしたら、きっと彼は読むに違いない――と、そう考えただけで、私のペンは前へ進まなくなってしまうのです。

ベビーブームに生まれた私。戦後最高といわれた数多い同年生まれの人たちとスシ詰め教室で小、中学を過ごし、そして激しい試験と競争の結果、高校、大学へと進学してきた私。幸い就職の方は、そう苦労はなかったものの、人生の最大の試練である結婚を前にして、やはり激甚な競争が待っているような気が、おぼろげながらしないわけではありません。私たち同年生には、こうした宿命が、最後までつきまとうのでしょうか。

だが、私がマゾの想念にさいなまれることと、このことは根本的に次元を異にしているのは当然のことですが、私に科せられた宿命という点では一脈相通じているような気がします。

七月号で亜紀竜司さんが、いみじくも喝破されました『内臓露出の願望』に因を発した





私のMの形成が、異様にとぎすまされた想像力の領域の中で辿っている私に対する拷問なのでしょうか。

内部と外部の両面から抑圧された私のマゾ性は、今ここに唯一の突破口を見つけだして噴火寸前の状態にあるのでしょうか。

編集部からOKの返事をもらってからの私の心理状態は、まさに、この噴火口の線上にあるといってよかったと思います。燃えさかるマゾの想念から逃がれようと私は机上に京都の地図をひろげてみました。京都という街は、私に対して心の沈静を与えてくれます。安らぎにも似た永遠の故郷に、いだかれているという気持にさせてくれました。

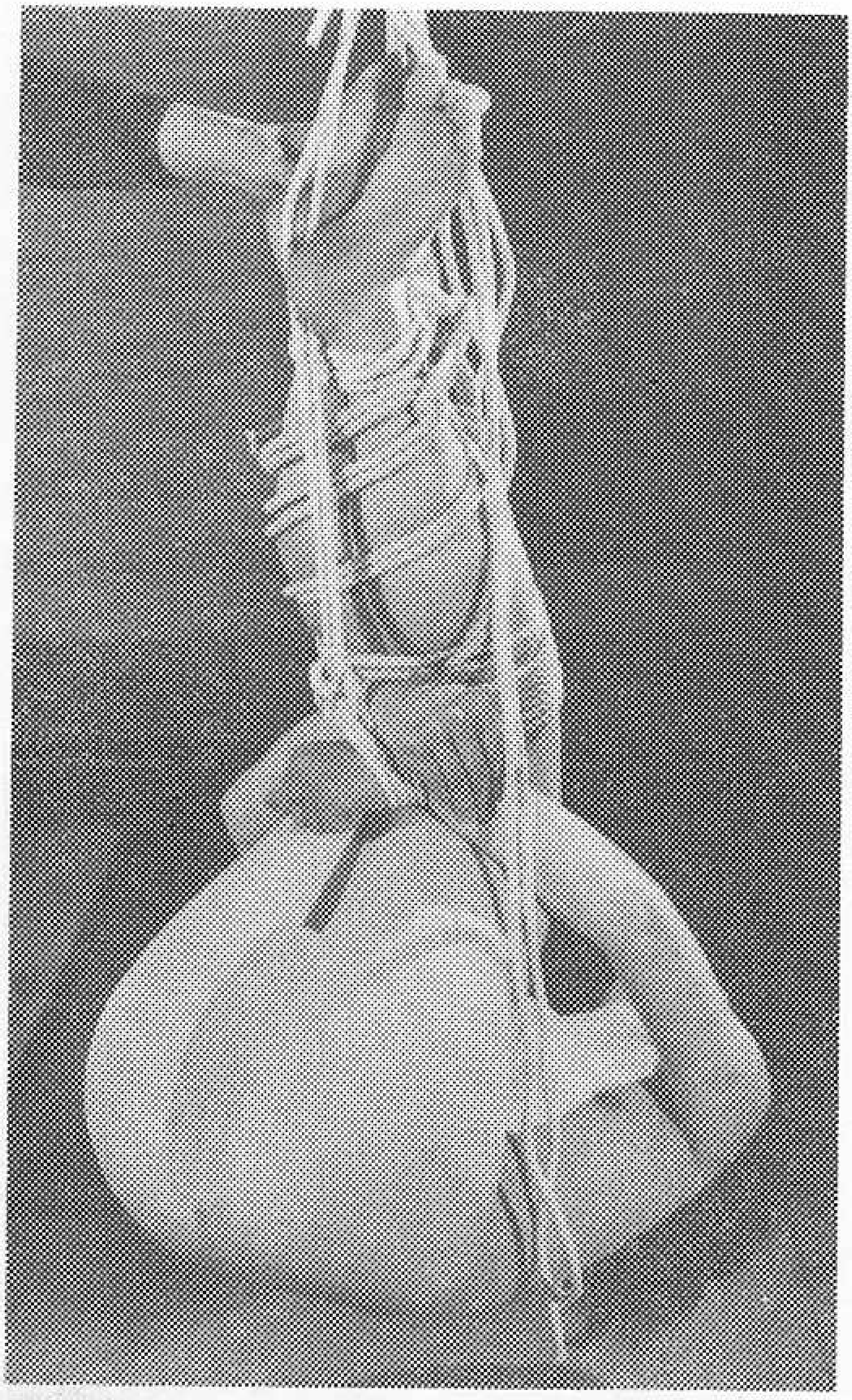
今回もまた、京都を訪ねることが出来る、と考えただけで、机上の京都の地図が、身近かな血の通ったものとして、私の胸に迫ってくるのでした。今度はどこを訪ねようか、私はスタンドの灯を近々と寄せて、その細かい地図に、じっと見入りました。

新緑の京の街は、この私をどのように迎えてくれるでしょうか。先ず地図の上で今まで自分が訪れた個所を指で辿ってゆきました。

そのとき、ふと、私は読者の方から頂いた手紙のことを思い出しました。〝京都慕情〟で書いた私の足跡と同じ所を歩いて下さったという、その私と同じ東京の方からのお便りを読んで、私はいたく心を動かされました。京都という町を憧れる心と、緊縛や羞恥責めを求める心とが、何かしら条件反射のようになって相乗効果を発揮している私にとって、切ない思いをさせてくれました。

職場では明朗で、言いたいことは、はきはきと積極的に言う私ですが、いざ、手紙で返事を書くとなると、ためらうものがありました。やはり同じ東京の空の下に住んでいるということが一つの抵抗となっているのでしょうか。それとも、余りにもこの方のお手紙の文面が、私の心を激しくゆさぶり続けた結果でしょうか。若し、お返事を差し上げるとしても、この貧しい私に、何の与えるものがあるのか——という反省も強くしました。

平常の私は、手紙なんて余り書きません。余りというより、殆どといった方がよいかもしれないのです。日常の用件でしたら電話でこと足りますし、わざわざ手紙を書かなければならないというような事情は余り多くありませんでした。奇ク編集部に対して出す連絡



の手紙でも、味もそっけもない事務的な文章だと、自分ながら、あきれているほどなので私にはとても、蜜のように甘い文章は書けそうにもありません。

　枚方市に移ったというボーイフレンドからは、まるで論文でも書くようなタッチで手紙を書いてきたので、私も葉書にヨコ書きで旅からの通信のような簡単な礼状を書いて出しただけでした。そんな自分をよく知っているので、折角、心のこもったお便りをわざわざ頂きながらも、ああだ、こうだと考えるうち徒らに日が過ぎてしまって、とうとう、出しそびれてしまいました。

　お詫びのしるしに、私が覚えている、頂いたお手紙の一節を次に書いてみましょう。

〔あなたの愛する京都という町を、さらに詳しく知るために京都へと旅立ったのです。

　まず第一日目は、あなたが「京都慕情」で紹介されていた、醍醐寺と随心院を訪れました。連休入りの土曜日にもかかわらず、意外と人が少なかったのは、大変嬉しく思いました。そして、その帰りに、やはりあなたが書いておられた、京阪三条から大将軍神社あたりの路地を歩いてみました。人一人がやっと通れる屋並みや、東京ではほとんど見られないような駄菓子屋など、あなたの文章そのままでした。二カ月前に、あなたが同じ道を歩いていたのだと思うと、感無量でした。

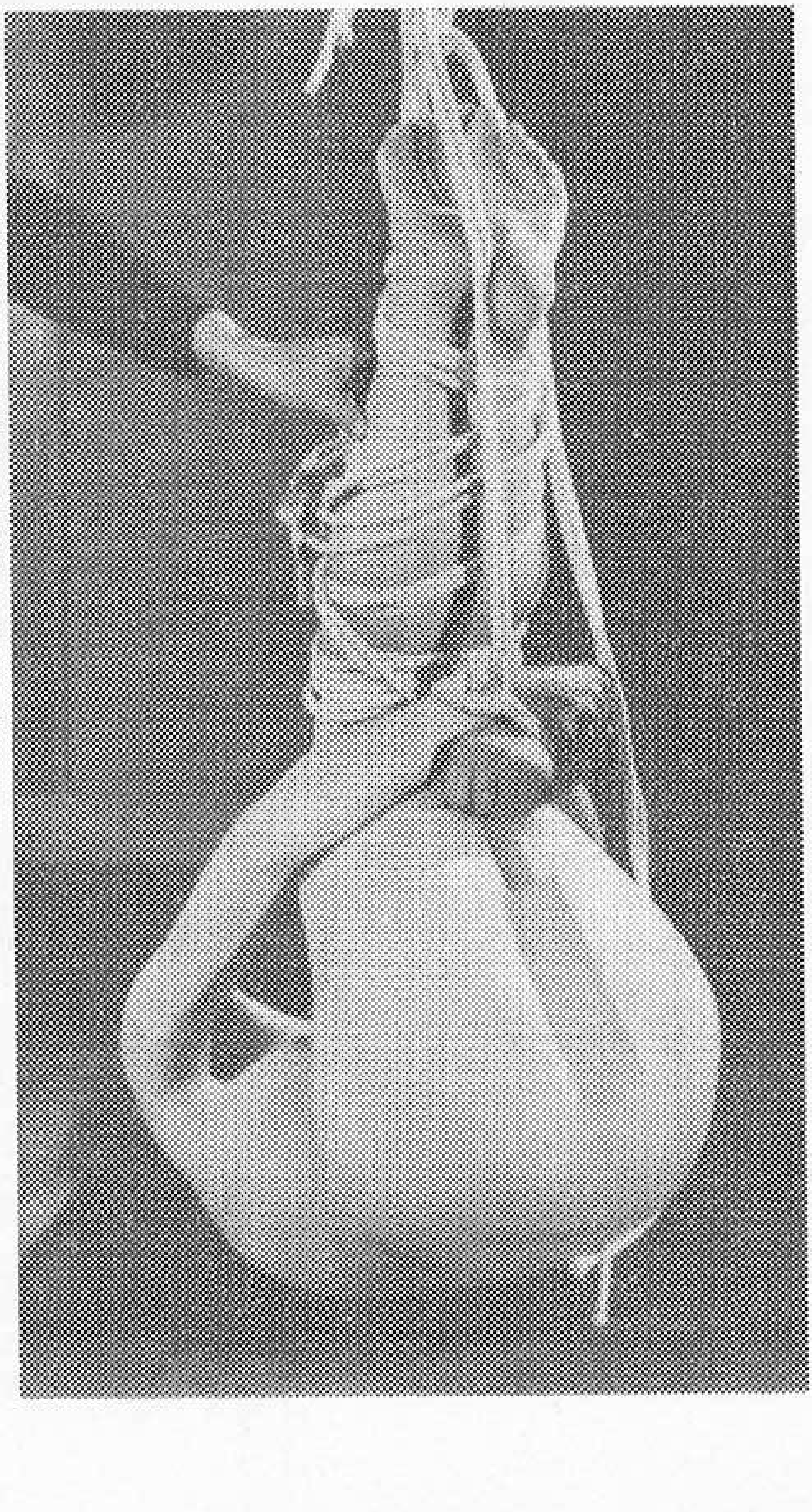
　二日目は洛北の鞍馬寺と貴船神社を訪れました。京福電鉄の出町柳の駅に着いた時、すでに電車を待つ人でホームは一杯でした。少々うんざりしましたが、鞍馬寺に着いて貴船へと山道を下りました。そこも、とても混雑していました。静かな山道を期待していたのに、がっかりしました。

　三日目は西山一帯を訪れました。光明寺から善峰寺、大原野神社、勝持寺と、訪れました。この日は富士山で数十人が遭難したという全国的な荒天の日で、京都でも大変な雨でした。そのため、私の他には人一人見あたらないのです。人がいないことを望んで訪れたのに誰一人いないと、やはり少々不安な気持になります。このあたりは嵯峨野の竹藪が荒

されてきた今、自然がそのまま保たれている所でもあります。もし、あなたがここをまだ訪れていられないのなら、今度京都に行った時には、ぜひここを訪れることをお勧めします。

　四日目は大原の三千院、寂光院を訪れました。平日にも拘らず、それこそ人の切れ間もないほどの混雑でした。「女一人」という歌のムードなど全くありませんでした。歴史や文学にうとい私は、同じ京都を見るにしてもあなたと観点が違うかも知れませんが、私なりの意義を認め、この旅を終えました。

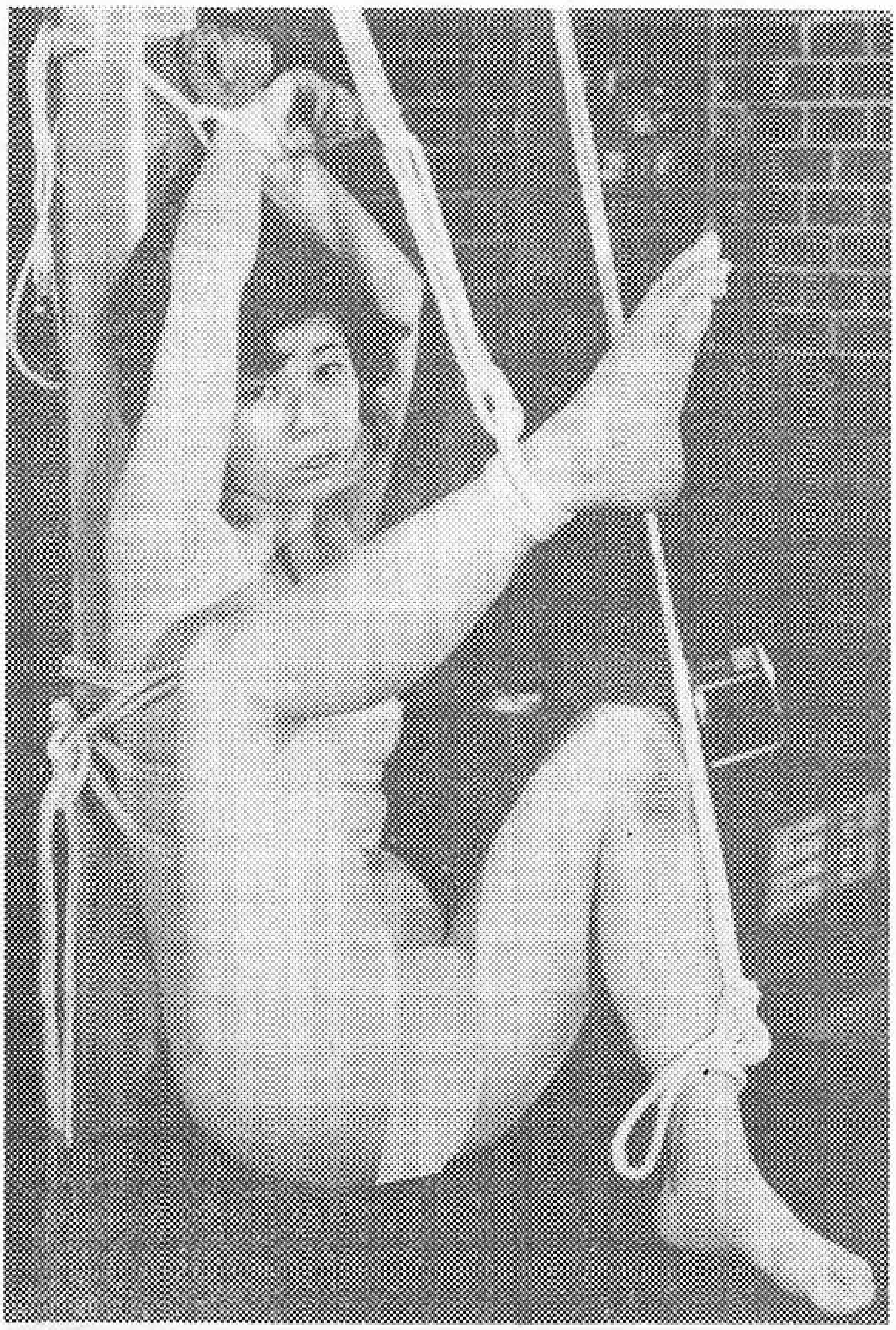
　そして帰京後、二十五日に奇ク五月号を求め、グラビアでの、あなたのお写真及び編集部だよりでの、あなたのことを読み、一度は奇クの大スターであるあなたに対するファン以上のものに近づこうとした私が間違っていたと諦めていたのですが、再びこの手紙を書く決心をしました。いつの間にか、一方的に好きになってしまったあなた。あなたの理智的な表情、教養あふれる文章。そのすべてが私の心の中に深く灼き付けられてしまったのです。あなたのことは、二度にわたる、あなたの文章で大体解りましたので、今度は私のことを少々書いてみます。」



私はこの方のお手紙には全く魅せられてしまいました。これほど、私の心を引きつけ、しっかりと摑んで放さない文章に、今まで私は接したことがありませんでした。勿論、私の大好きな京都のことを書いてくれたことにもよりますが、ただ単に観念的な文字の羅列ではなくて、実際にこの方が、ご自分の足を使って、じかに歩いてこられたという裏付けの上で書かれているのに、私はしびれるような感動を受けました。

お手紙の流暢な文章や端正な文字からして私は一見したとき、きっと年輩の方かと思ったのですが、大学を卒業して今年の四月から就職された二十三才になる青年だときいて、私は一層このお手紙の方に身近かなものを感ずるのでした。

　私にとっては勿体ないほどの理想的な男性ではないでしょうか。そう思えば、胸がわくわくして、頬がほてり、かえって、お返事を出すのが、ためらわれました。



一年浪人しているので私と同じ年ではないかとおっしゃるこの方。もしご一緒に、京都の町を散歩出来たら、どんなに楽しいことだろうと、思わず胸を、ときめかす私でした。

この方の行かれたという、鞍馬寺、貴船神社。それに三日目に行かれたという善峰寺、大原野神社から花の寺。四日目の大原の三千院、寂光院も訪ねたことがあります。

寂光院は『平家物語』の〈大原御幸〉の項を読んでなんとしても行きたく、冬のいてついた道を一人で歩いていった思い出があるのです。その頃は、今のように新平家物語ブームはなくて、訪れる人もない淋しさでした。

貴船神社を訪ねた時は、丁度雨の日で、山吹の黄色い花が濡れて光る舗道にたれかかっているのが、目のさめるように、美しかったです。赤い朱塗りの橋のきざはしが、緑一色の中に、目に鮮かだったのを覚えています。道の両側の店も客がないのか殆ど閉じていて、貴船神社の朱の楼門の傍にある茶店にも、客は一人もいませんでした。その店で食べた、手作りだというお寿司のおいしかったことは今でも忘れることが出来ません。

大原野神社から花の寺へ行ったときは、桜の花が満開だったせいもあって、大変な人出で、私の乗っていったタクシーがターン出来ないほど、マイカーの車も多かったのです。仁王門の桜の下でポーズをとって写真を撮る人がひきもきらず、石畳の急な坂道が、まるで都会の雑踏さながらの混みようでもありました。

と、私の追憶は、あとからあとから、ひきもきらず、湧いてきます。

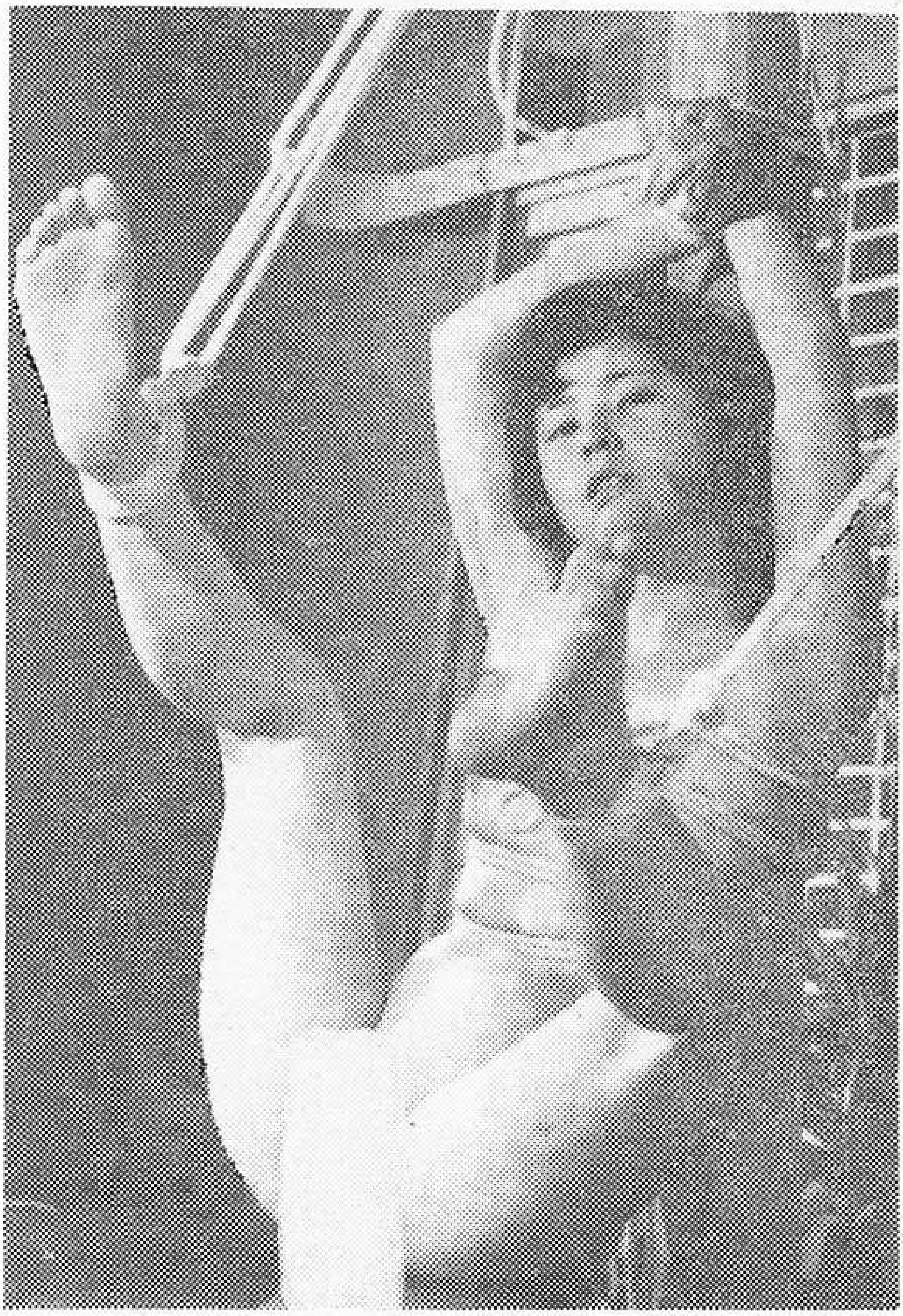
私の京都に対する深い憧れ――それが直接連動するかのように、SMへと強いつながりを持っているのは、私の沈潜した心の中で渾然と一つとなって、発酵しているのでしょうか。この方からのお便りは更に続いているのです。

「……SMに関しての傾向は、羞恥責め、特に浣腸責め、バイブ責めが好みの傾向です。とはいっても、内向的な性格のため、実際の経験は皆無で、奇クを読んでの想像だけですが、もしも、あなたにお会いできたら、あなたが今までに経験された緊縛フォトのモデルということから一歩進んだ真のSMプレイ、特に浣腸責めの味を味わっていただこうと思います。単なる緊縛モデルでない、さらに強い悦楽を味わえるものと思います。」

お手紙の後半は一転して、SMプレイのことについて言及しています。緊縛モデルの主人公としてではなく、SMプレイの主人公として責められるというのは、一体どのようなことなのでしょうか。未知なものへの憧れが私の血をさわがせ、私はこの方に責められてみたいという強い誘惑にかられるのを、どうすることも出来ませんでした。もし私が、奇クの緊縛モデルとして姿を現わさないときがあったとしたら、そのときは、私がこの方の胸に抱かれて責められているときかもしれません。

一枚の京都の地図を前にして、私の夢は際限もなく続いてゆきます。

さて、いよいよ新幹線で東京を発つ日。久しぶりによく晴れて、青空からは五月の陽がさんさんと街路に降りそそいでいました。



三時間足らずの車中、私は読もうと思って『いんなあ・とりっぷ』を持ってきたのですが、目を通しても頭に入らず膝の上に置いたままで、快い電車の振動に揺られて、いつしか夢心地に、うつらうつらとしていました。起きているでもなし、眠っているでもなく半睡半醒の状態で、私の瞼の裏に、鮮かな映像を残しているのは、やはり、京の町の静かな、たたずまいにダブって、縛られ責められて喘ぐ、自分の白い裸身でした。

瀬田川に架かる鉄橋を越したかと思うと忽ちのうちに長いトンネルに入りました。窓ガ

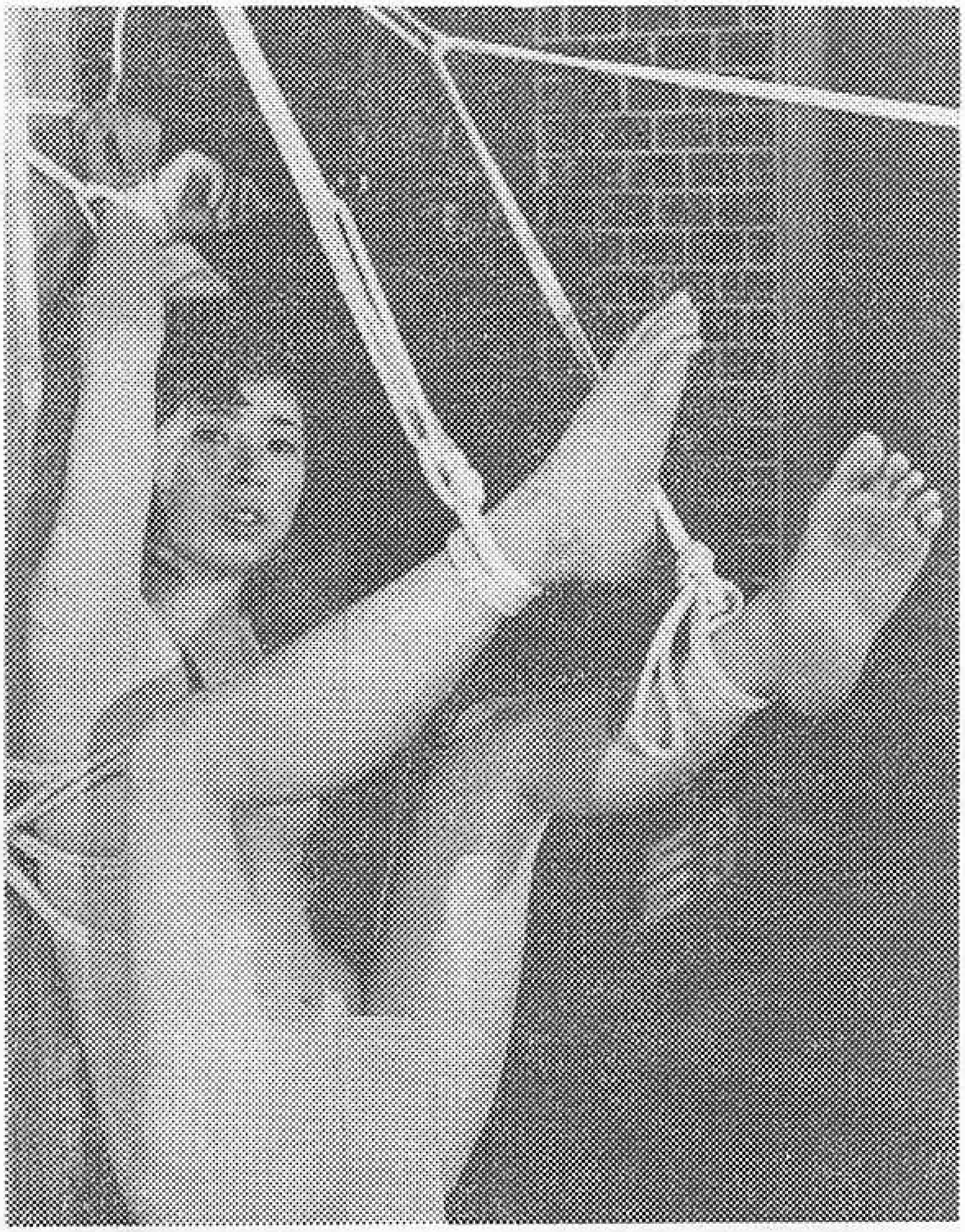
ラスにうつる自分の白い顔が、薄目を開けた瞳にとび込んできて、ハッとしました。やはり私は、さめていたのです。耳にキーンと響くような圧迫感を残してトンネルを出たかと思うと、間もなく列車は京都駅にすべり込みました。

結婚適令期を迎えて、私の服装も少し派手になったので、わかってもらえるかしら？　と少し不安だったのですけどホームに降りて十歩も歩かないうち、向こうから手を振って迎えてくれました。社会へ出て、お勤めの経験を持つようになったので私も学生時代のように、ただハイとかイイエと返事しているだけでなく、自分からも積極的に、いろいろと話しかけました。

ホテルまで送ってもらい部屋に落ちつく間もなく、昼食をとりながら打ち合わせをしました。胸がつかえていっぱいで、食欲はないのですけど、昼食時だというので無理して手をつけました。食べてみると、おいしいので自分でも、びっくりするくらい、食べてしまいました。

部屋は九階の最上階でした。エレベーターで昇るとき、パイロットランプが9の数字を示したので、ふっと火事のことを思って不安になりました。京城でのホテルの火事それにほんこの間の千日前のビルの火事なんかのことを思うと、高層ビルの火事は、いかにも恐ろしいです。いざ火事となれば、エレベーターは停まるし、階段はエントツのように煙が充満するに違いありません。

部屋に入るなり、非常口から屋上に出て、下をのぞいてみますと、道を歩いている人が、まるで蟻が這っているように小さく見えます。とてもこんな高い所から降りられそうにもありません。



さて、いよいよ、このホテル九階の密室で演じられるSMプレイのイケニエとして、カメラを通して私の身体を奇クファンの方々に捧げるときがきたのです。

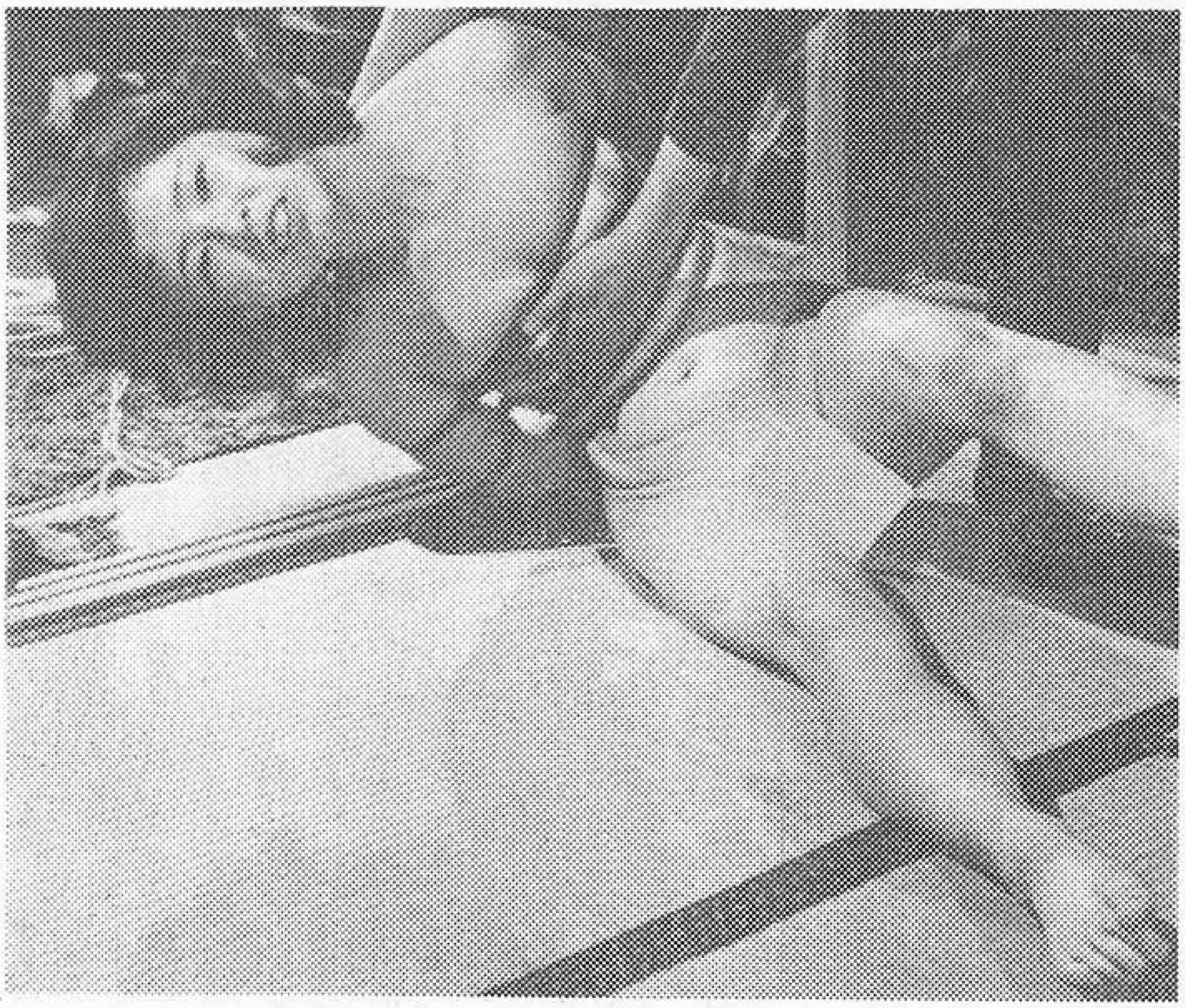
こうして縛られるのは、何カ月ぶりでしょうか。自分の身体がくびれちぎれるほど、厳しく縛られてみたいと思います。これ以上、羞かしいことはないと思えるほど、みだ

らなポーズをとらされたいと思います。いやとらされるというよりも、自分の意志で、そんな格好をしてみたい――という、自虐的な気持さえ起こってくるのです。

　もちろん、それは私の心の中の風にそよぐ葦のような動きであって、まわりの人には、いささかもわからなかったでしょう。私はといえば、ただ、なよなよと、これからハダカで縛られることに対しての羞らいで身も世もないといった風情に見えたかもしれません。

　でも、私は適当な理由や口実さえあったなら、自らすすんで、縛られた上で、いやいやいやと否定しながらも、股を開き、お尻をほり出して、すすり泣きたい気持でした。そんな自分の行為が、甘く、ロマンチックに思えるほど胸に迫ってきて、責められる悲劇の主人公になりたくて仕方がないのでした。

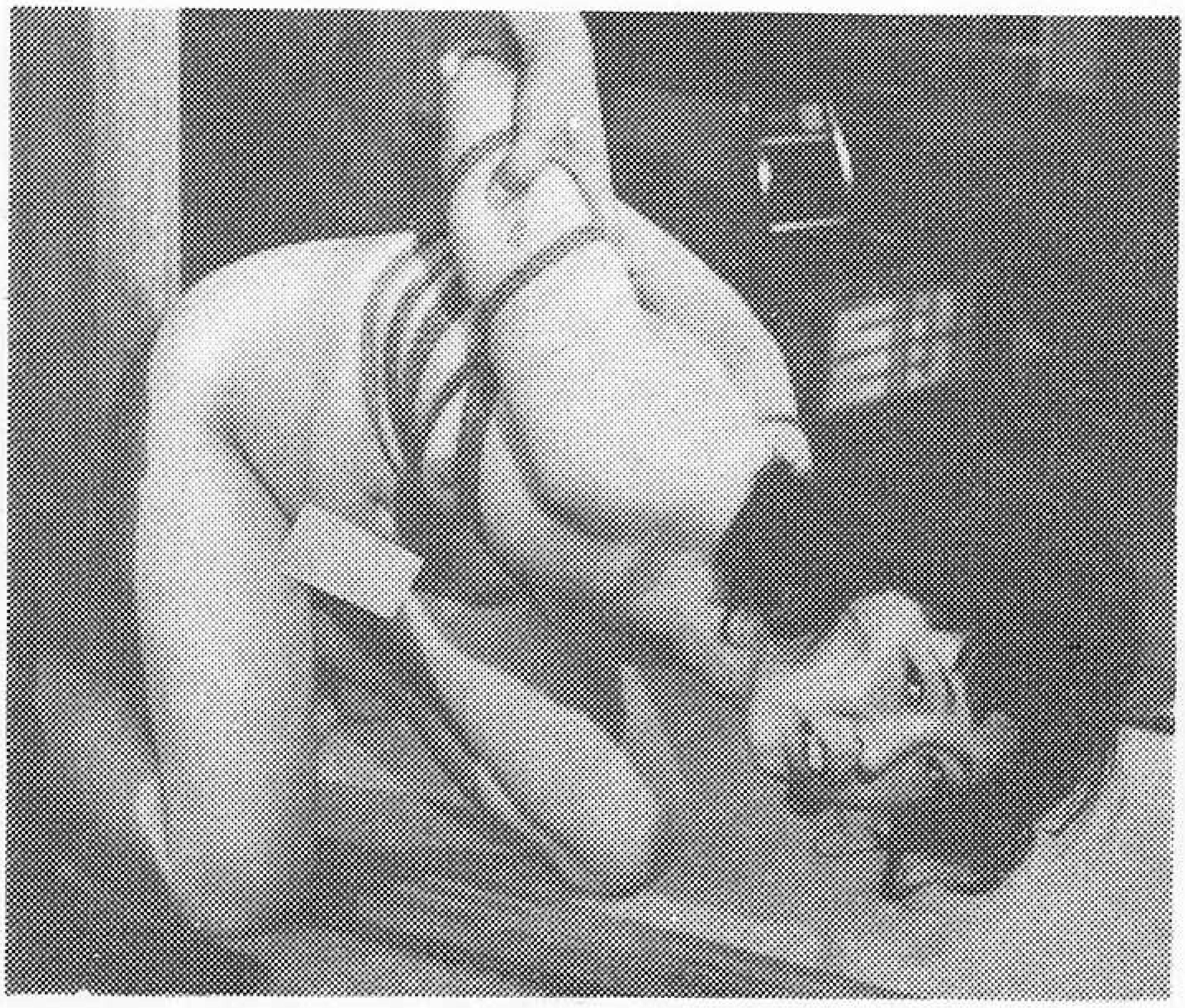
　具体的にどのようにされたい――とか、どのようにしたいとか、いうようなことは、経験の乏しい私には別にありませんでした。ただ観念的に、そう期待するだけであって、もしムチ打ち、浣腸責め、吊り責め、擽り責め或はバイブ責めとかいった具体的な責めを、この身の上に加えられたとしたら、私はそのいくつかに溺れていってしまうかもしれないのです。



　男と女の、本当の愛とは、どんなものであるのかさえ、少しも知らない私が、なぜ、このような物悲しい想念にとりつかれてしまったのでしょうか。

　私がハダカになるなり「この前よりは、幾分痩せられましたね。お乳なんか、もっと膨らんでいましたのに――」と言葉をかけられて、私は虚をつかれたようにハッとしました。たしかに、ここ二、三カ月で、私は少し体重が減っていました。それを私の胸を見るなり一目で見破られたのには驚いてしまいました。胸だけ見ていると、開きかけた乳房の頂も、かえって、蕾を固くしてしまったようです。女として成熟していると思っていたのですが、身体全体も、細っそりとして稚さを示しているのです。

　この事は、自分自身が一番よく知っていることなのですが、こうして逢うなり指摘され



てみますと、今更のようにハッと気づきました。本当だったら学生時代よりも皮下脂肪もぽってりと、つき、女の色気も出てこなければならないのに、かえって若さ、稚さへと逆行しているようなのは何故でしょう。

何の屈託もなかった学生時代から、一社会人として旅立ったための気苦労なのでしょうか。たった一年の経験が、私の身体をこのように痩せさせたとは、自分では思いたくないのですが、どうでしょうか。それとも私の縛りや責めに対する飽くなき憧憬の想念が、私の精神ばかりか、肉体までも、このように変化させたのでしょうか。

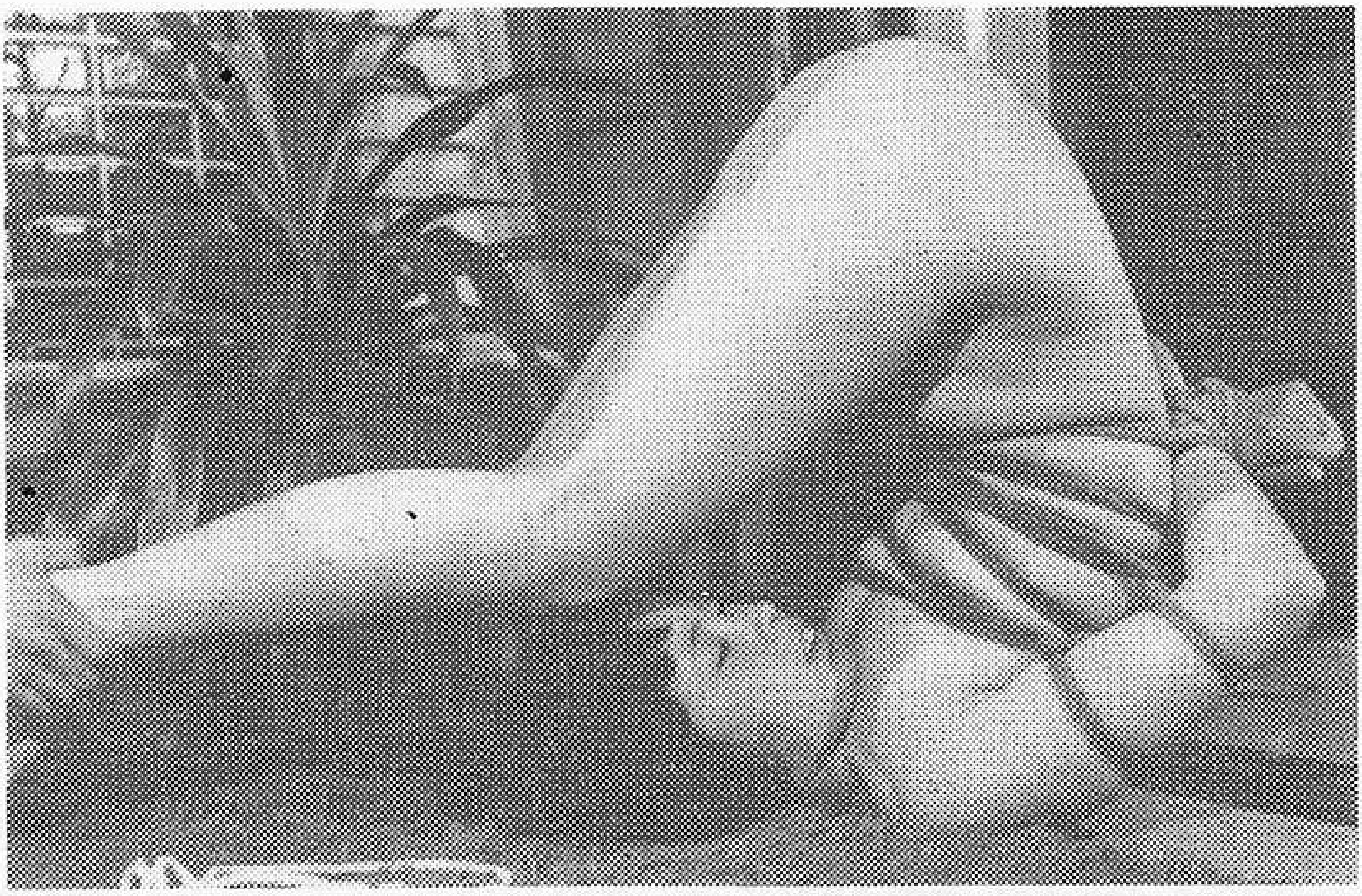
「身体全体がほっそりとしてきて、それに背が高くなったようだね。その上、肌の色が抜けるように白くなったようだけどオフィスにばかりいて陽に当たらないからじゃないの。なんだか一層清純って感じを増してきて、縄を掛けるのが、一寸ためらわれるナ」

そんな冗談を言われながらも、私の両腕を背後で捻じ曲げていました。助手の若い方が道具を配置したり、部屋の模様替えなんかをしている間に、私は、もう塚本さまに縛られはじめていたのです。二の腕の肉も少しは落ちていたのでしょう、背後に回された両方の手首は十字に交叉して、自分でもこんなによく上がるなあと思うほど、首節近く上がっているのです。

その両手首をきっちりと縄で縛り上げられてしまいますと、無防備な自分の身体の前面が何の掩うものもないまま、ひんやりとした部屋の空気にさらされているのが、いいようもなく心もとなく思われました。

そんな私の心を踏みにじるようにして縄は更に二の腕から胸へと掛かってゆきます。昨年あたりは、まだ乳房のふくらみがふっくらとあり、これからは、だんだんと大きくなってゆくと楽しみにしていましたのに、今はもうなんとしたことでしょう。縄にひしゃげて哀れにも、ぺしゃんこの乳房が、ピンク色の固い蕾をわずかに、縄と縄との間から、のぞかせているに過ぎないのです。

男性の愛を真に受け入れないことには、女



は本当の意味で、心身ともに成熟しないものなのでしょうか。

縄は更に巧みな縄捌きによって、忽ちのうちに、私のハダカの身体を、ぎっちりと縛り上げ身動き出来なくしてしまいました。ただ、両足だけは縄掛けされず自由でした。

電球に点灯され、薄暗かった部屋が急に明るくなり、その光りの束の中心に私が立たされているような格好になりました。チラッと光源に目をやった途端目がくらんでしまって、あたりのものは、すべて見えなくなってしまいました。部屋の中にハダカで縛られて立っているのは自分だけで、他の人は、どこにいて、どのような動きをしているのか、さっぱり、わかりません。真の暗闇の中に、私の肉体だけが、ぼうっと白く浮かび上がっているのです。

背後から二の腕あたりの縄のよく締まっているあたりを、誰か人の手で触れられたと思った瞬間、ピカッと閃光が四隅から私目がけて光りました。ライトの光源からは、意識的に目をそらしていた私ですが、一瞬、予測しないあたりからの閃光で、ようやく回復しだした視力を失ってしまいました。

まわりの人も、物も、すべて私には、何も見えませんでした。

「よしよし、もう少し右へ倒して——」とか「もっと、足を引き挙げて——」とか言う人の言葉だけは私の耳に入ってきます。それがなんの意味なのか、私にはわかりませんが、絶えず私の身体や縄に、背後から、或は傍から男性の力が加わり、その都度、私はその力に支配されて、ポーズを変えてゆくのです。

そのうち、次第に視力が回復してゆくと、カメラを持って右左に動く人の気配が、ぼんやりと見えてきました。そちらからはライトに浮かんだ私の一挙手一動作も、すべて、はっきりと隅々まで見えるのでしょう。いろんな指示が私を責めている助手の人に向かって飛んでいます。二十秒おきぐらいに、閃光が私に向かって集中されます。

今まで緊張で身体を石のように固くしていた私も、このあたりで、やっと、身体の固さ

がほぐれてきました。この部屋の暗闇の中に私をとり囲んで、私の動きのすみずみまでを好奇の目で眺めている見物人が潜んでいるのだ——と考えるくらいの心の余裕が出来てきました。

　まだ男の身体を知らない、この私の身体をどのようにいたぶり、弄ぼうとするのでしょうか。固い蕾のままでいたいと願う心と肉体とを、荒々しい縄を用いて、どのように無理に開花させようとするのでしょうか。

「縄は痛くないですか。痛ければ、すぐ言って下さいね」

　初めていたわりの言葉がかけられました。

「ええ、痛いけど、辛抱しますわ」

　オウム返しに私は、答えていました。こんなことで弱音を上げては、なんになるでしょう。今日は、身体中に血がにじんで、真赤に染まってしまうくらい、責められてみたい、と、覚悟してきたのですから、口がさけても痛いから解いて下さい——などとは言わないつもりです。痛さに耐えきれなくなる前に、私はむしろ失神してしまうことを望んでいます。

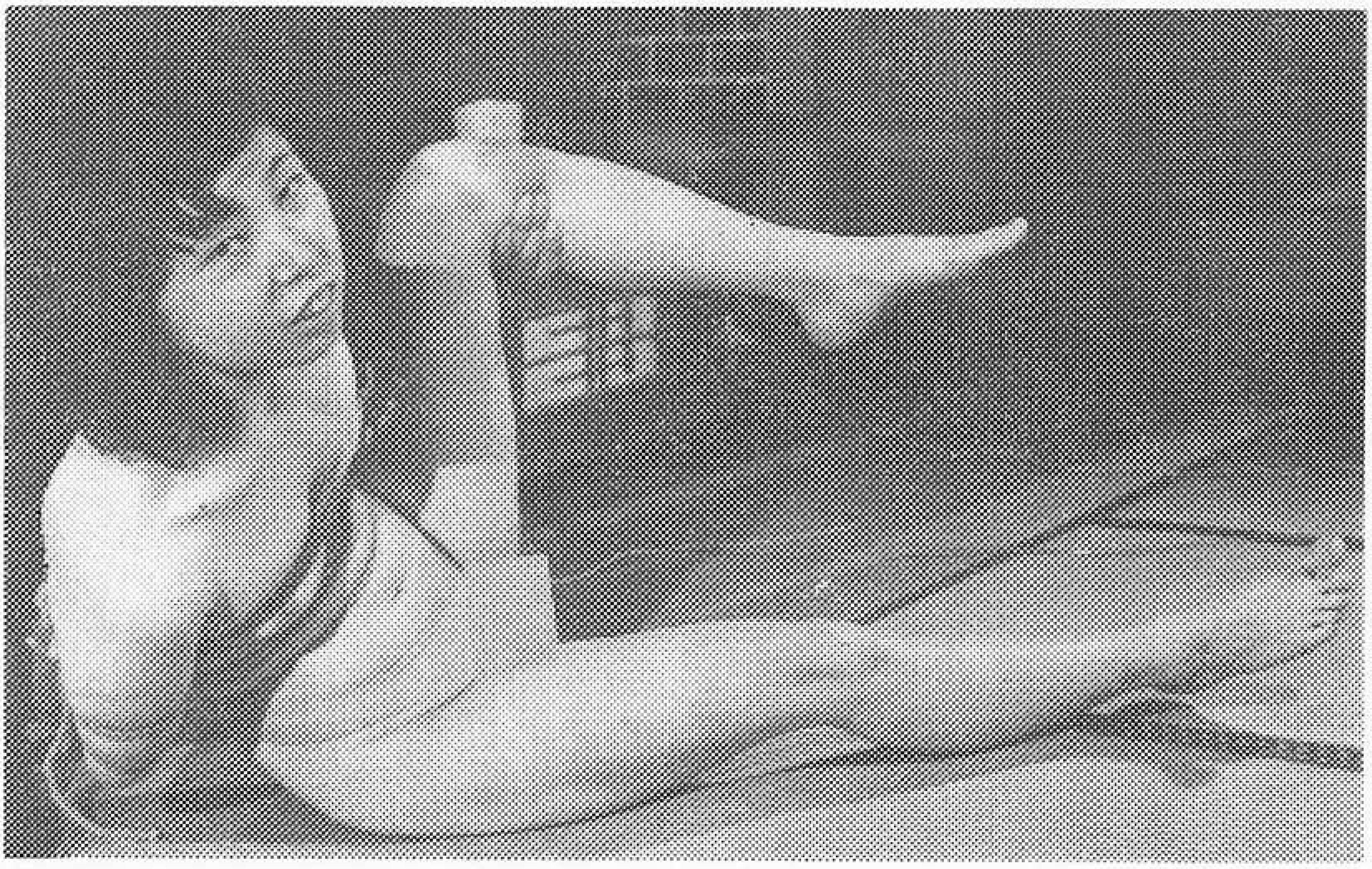
　遠慮しないで、どんどん責めて、責めて、責め抜いて——。心の中では、むしろ、そのように思っていました。でも、やはり、痛くないか、と、いたわりの言葉を掛けてもらったことを嬉しく思うのは女心です。

「ようし、それじゃ、次のをゆくぞ」

　そう言葉がかかってカメラの位置が変わりました。私の中膝のポーズから畳の上へ、ごろりと、ころがされました。いや、ころがされようとした途中で、閃光が私の身体を四方から包み込みました。一瞬、暗黒と静寂、フィルムを巻き上げる音だけが、カシャッと私の耳に響いてきます。

　それからは、畳の上に、じかに転がされて仰向けになり、うつ伏せになり、右に左に、髪の毛と縄尻を掴んで引っ張られ、引き起こされてポーズをつけられました。

　縛られた両手首が自分の背中の下敷きになったときは、さすがに痛く、「ううう」と思わず、呻きました。更に、そんなポーズで両足を引き挙げて上体を二つ折りに



されては、二の腕に喰い込んだ縄が、自分の身体を喰いちぎってしまわないかと思うほどの激痛に、「いい、いいい」と歯を、くいしばってこらえ、悲鳴を挙げませんでした。

　やっと、縄を解かれたとき、私はぐったりと畳の上にのびていましたが、抱き起こされて身体の検査をされました。

「二の腕と乳房の上と下、それに背中に凄い皮下出血のアトが出来ましたよ。ほれ、こんなに血がにじんでいます。色が白いから、よく目立ちますが、いいですか」

　心配そうに、乳房の上の指さしたところを見ますと、二筋の血のにじんだアトが、縄の目そっくりに、ついています。

「私だったら、いいんです。アトは、いくらついても――」

「そうですか。こんな綺麗な肌に傷をつけるのは、勿体ないような気がして、一寸ためらわれたものですから」

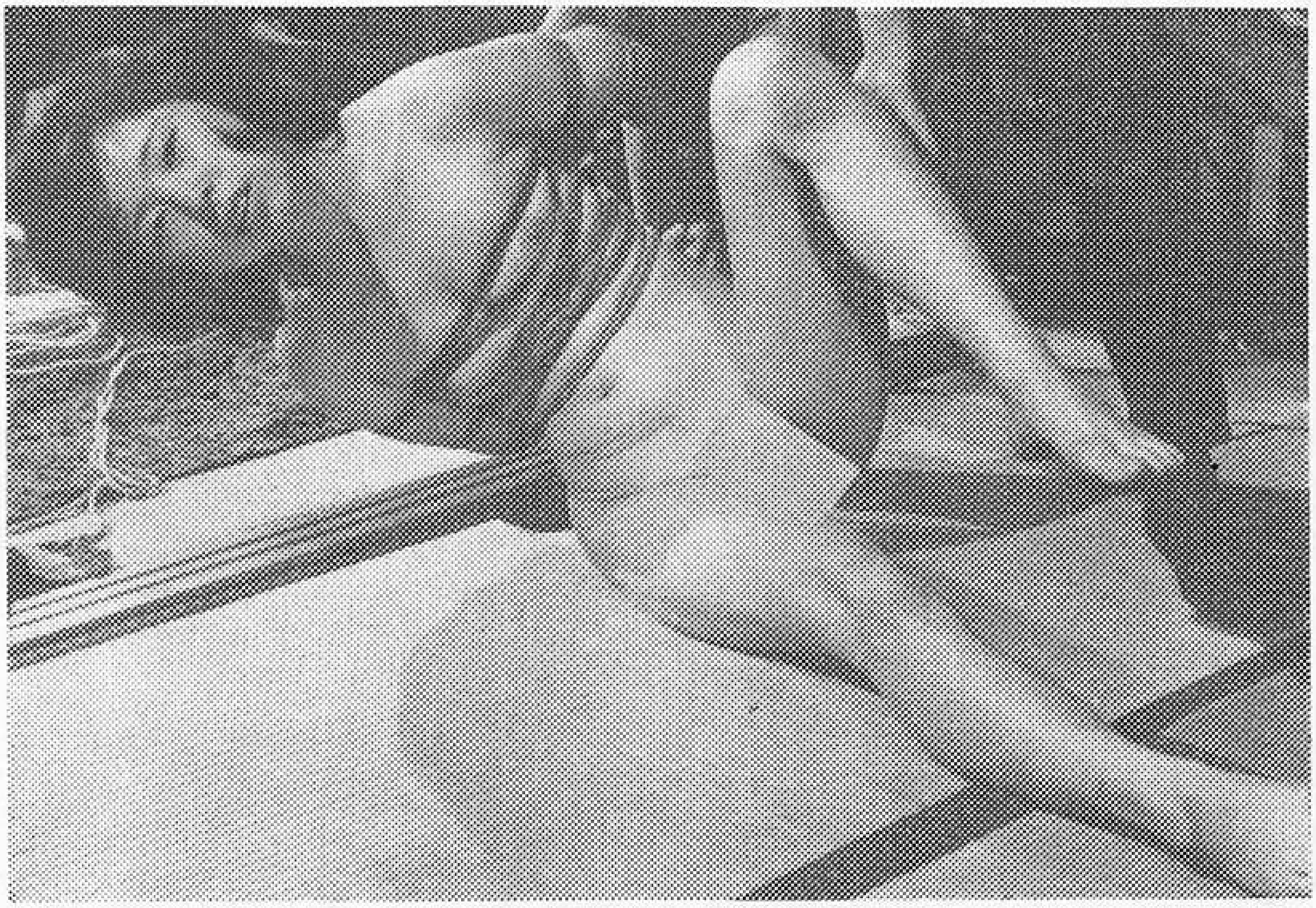
「いいえ、どうぞ、お気にかけないで。私は責められるのが本望ですから――」

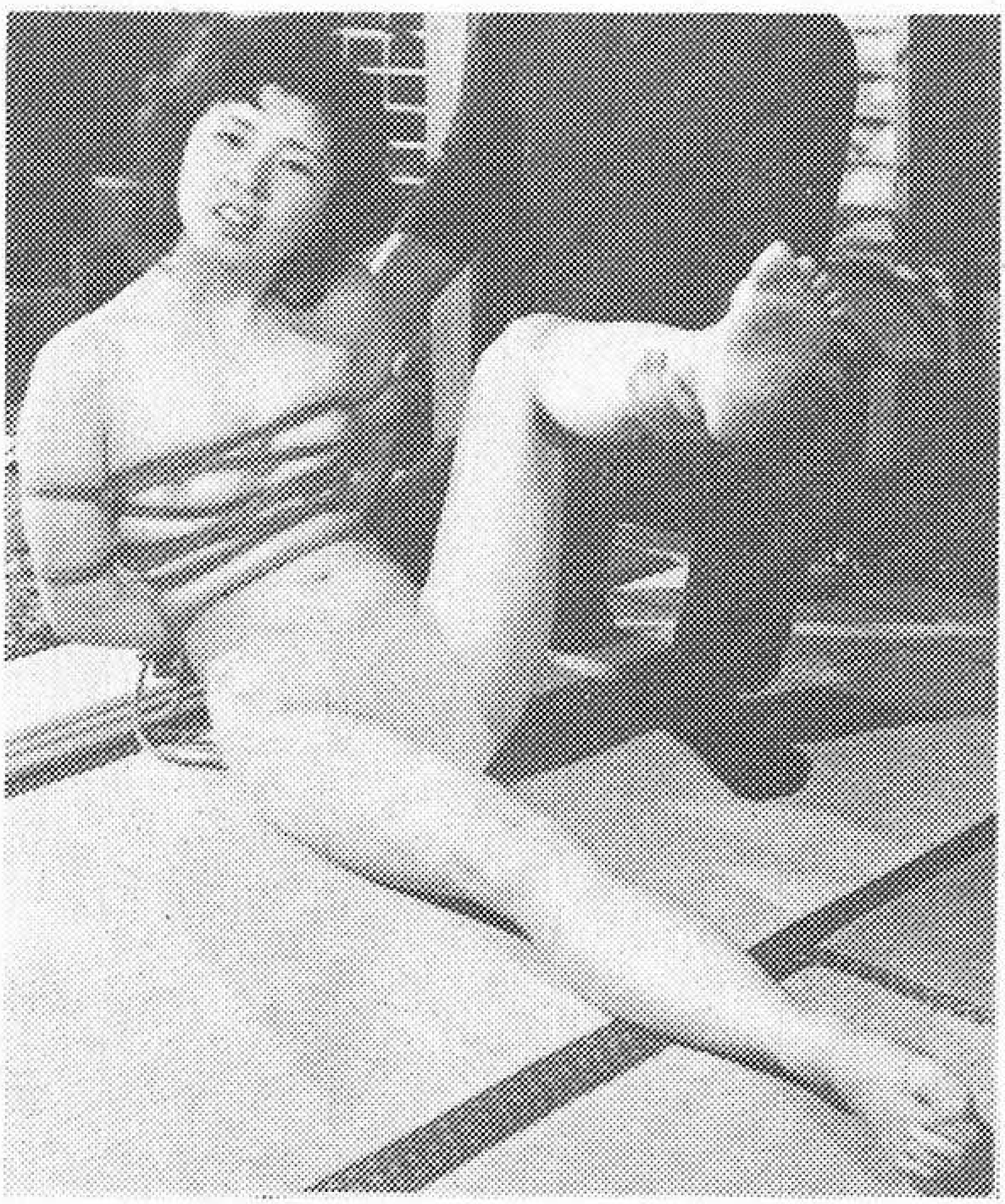
　それは、いつわりのない私の本心でした。どのように責められ、どのように縛られ、そのために、私の身体に傷がついたとしても、それは私自ら願ったことで、責める側の方は少しも気にされることはないのです。

　休む間もなく、再び縄掛けされてゆきました。後手縛りで両手の自由が奪われ、そして次第次第に上半身を縛られてゆくうち、身体全体が、きゅうと締めつけられてゆく快感。縛り上げられてからも、時間がたつにつれて、緊縛感がいよいよ増し、身体が細く細く、くびれてゆくような気持が、たまらなく快感をかり立ててゆきます。

　不自然なポーズをとらされますと、後手首や二の腕、乳房などに掛かった要所要所の縄が一層、強烈に肌を締めつけて苦痛を加えますが、それがまた私の被虐心を、いやが上にも、かりたてるのです。

　一度火がついてしまいますと、もう、とめども知らず私の心は先行してしまいます。最初の頃は、そうではなかっ





たのに、いつの間にやら、私は最も恥知らずの女に変化してしまっているのです。

　責められる方が、私に対して、ためらいの心を持たれるのは、よくわかります。でも、一旦そのように被虐心にかりたてられ、そのムードの虜となってしまった私は、全身の力が抜けきってしまって、責められる方の思い通り、少しの力にでも、大きく反応して、あられもなくポーズを、自らとってしまうようになってしまうのです。

　被虐に煮えたぎった私の妖しい血が、今日もまた、余り時間も経ないうちに発作を起こしはじめました。若い助手さんの手によって足を引き挙げられ、髪の毛をワシづかみにされて、いたぶられているうち、いつの間にやら夢心地のまま、カメラのレンズの方へレンズの方へと、思いきり身体を開いてゆく自分に気がついたのです。

　助手の方の胸に自分の頬をもたせかけたまま私はうっとりとして、カメラの狙うにまかせていました。私の女体の秘密を、あのカメラだけが知っているのかと思うと、私は身体中が燃えるように熱くなり、目の前で火花がチカチカと乱れとびました。

　長い時間のように思えましたが、それは白昼夢のような、はかない一呼吸の間のことでしかありませんでした。ふっと自分に返ったときは、私の足は上に引き上げられて、身体全体がUの字に折り曲げられていました。

　それからは幾度となく縛り直されては全身がくたくたになるまで変わったポーズに曲げ伸ばしされました。柱の前では両足が頭の上に達するまで高く引き挙げられました。そして私の始めての経験である足吊りが行なわれたときは、足首の痛さもさることながら、全体重が宙に浮き上がる心もとなさに、被虐がいやが上にも、あふられました。

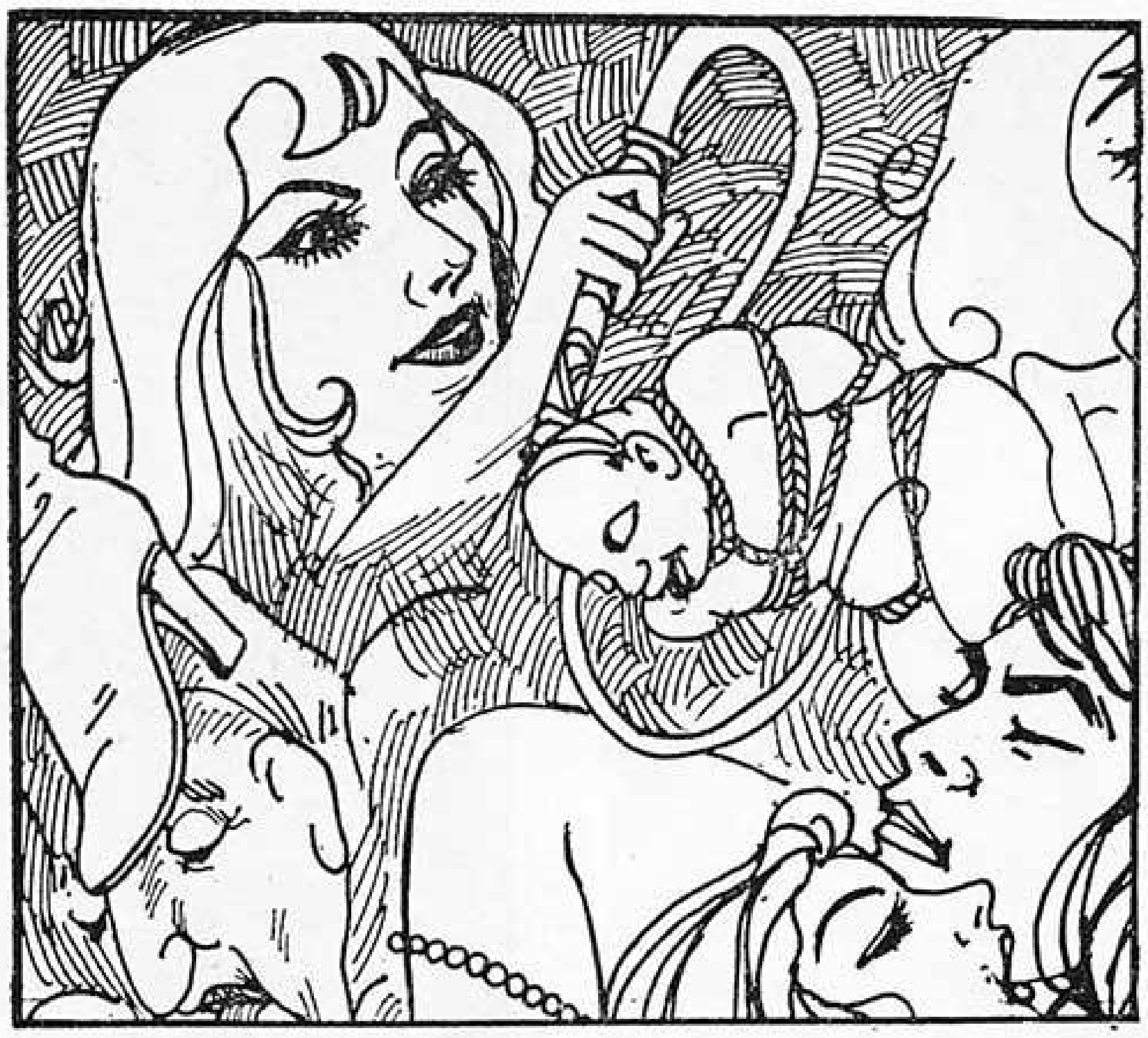
　宙に吊られてしまってから、助手の方が私の身体をくるくると廻されたのには、さすがの私も思わず、「ヤメテ！」と叫んでいました。

　面白半分にされたにしては、私も目が廻りましたし、第一写真も撮れなかったと思います。でも、これも、責めのなかの一つでしょうか。縄を解かれてからも、私はぐったりと畳の上に、のびたようになっていました。

……サディスティンの乱舞……

二つの便器

芳野眉美



カット・岡　たかし

― A ―

水島夫妻が上京して、ホテルから電話があった。以前、夫人の汚れたパンティをプレゼントされたことがあり、恩義がある。

初対面である。パンティを小包で送られたとき、夫人の写真が一枚同封してあり、それが、てがかりであった。

ホテルのティールームでくつろぐ夫妻に近づく私に、主人が気がついて笑いかけた。

「その節は有難うございました」

と私は、どちらへともなく、いった。

主人は、すぐピンときたらしく、

「ほら、お前のパンティをプレゼントしたじゃないか」

と夫人に耳打ちした。

「いやだわ」

と水島夫人が私に、ほほえみかけた。

中年の水島夫人は、年下の私に安心したのか、使用したパンティを送ったことについては、言葉ほど羞恥を感じていないように受け取れた。むしろ、汚れたパンティを受け取った私がいったい、どのように水島夫人のパンティをとりあつかったのか、そのほうに興味があるようであった。

「けっこうな香りと味でした」

と私は、お礼をいった。

「えっ？」

と夫人が私の顔を見た。もっとくわしく聞きたいのだと私は判断した。

「奥様のパンティをいただいた夜、奥様の使用したパンティを顔にかぶり、奥様のお写真を顔にのせて寝ました」

「まあ」

「汚れたところを、ちょうど口にあてるようにして、奥様の美しい香りと味をかみしめながら、夢の世界を、さまよいました」

水島夫人が、じっと私を見つめ、

「それは、いい」

と、拍手せんばかりに、主人がいった。

水島氏が、人口五万ぐらいの小都市の市会議員に当選したこともあることぐらいは知っていた。従業員は少なくても、立派な社長であり、この東京の一流ホテルにいても、堂々として、サマになっていた。

使用済みの汚れたパンティを、いくら夫の命令だからとはいえ、見知らぬ男に送るぐらいだから、かなり派手な水商売あがりの夫人かと思っていたが、水島夫人に対しては完全に、はずれていた。

中年の少し肥った夫人は、白っぽい、おとなしいスーツも上品で、元市会議員夫人の、かんろく十分であった。

「で、それ、どうしました?」

と、主人が、夫人の顔に面白そうに流し目をしながら私にいった。

「記念に、大切に保存してあります」

夫人が驚いたように私を見た。

その時、黒エナメルのストレッチブーツの女が、つかつかと水島夫妻に近寄って来た。

「御無沙汰しております、奥様」

と水島夫人に丁寧に会釈し、主人には、ただ、きらきらと輝くような目で合図しただけであった。

「妻の公認の愛人」

と主人が愉快そうに、私にいった。

「愛人だなんて、奥様に失礼ですわ」

と、その女が水島夫人を振り返った。

「ねえ奥様」

水島夫人は、にこやかに笑っているだけで何も、いわない。

「おかしいでしょう。妻と美里は、とても仲が良いんだ」

と主人が、私にいった。

「奥様のほうが好きですもの」

と美里が、いった。

「おやおや、二人は、いつのまにレスビアンになったんだ」

「あら、はじめからよね、奥様」

水島夫人とは対照的に、美里は黒づくめのミニドレスであり、黒くて長い髪が、話をするたびに、さらさらと、ゆれていた。

「この人はね、美里」

と主人が私を指さしながら美里にいった。

「妻が穿いたパンティを、宝物のように大切にしまっている人なんだ」

「奥様の崇拝者ね」

美里は、なかなか、うまいことをいう。

「美里も、お土産にあげるといい」

「ノーパンティで帰れとおっしゃるの?」

「いつも穿いていないくせに」

「失礼ね」

言葉の遊びが、そのまま前戯になっているようであった。

「美里の、ほしい?」

と、いきなりいわれて、

「えっ、ええ。それは、もちろん」

と私は、だらしのない返事をした。

「美里の崇拝者になりたいのね」

「そ、そうです」

「考えておくわ」

「お願いします」

「行こうか」

と主人が立ち上がり、三人を促した。

主人の視線は、黒エナメルストレッチブーツが、よく似合う、黒づくめのサディスティンから、はなれようとしなかった。

B

ツインベッドがある寝室と、和室の二間が続くホテルの部屋が、水島夫妻が宿泊しているところであった。

水島夫人と私は和室でくつろぎ、私は夫人のビールの相手をつとめ、寝室では、主人と美里がカップルをつくっていた。

　部屋に入るなり、主人と美里は、服を脱ぎ始めたのである。

　夫人と私は、これから始まるであろう、主人と美里の、SMプレイの観客であった。

　背広を脱ぎ、下着までとって、すっかり丸裸になった主人に、美里は黒いスリップを脱いで投げてよこした。

　主人が、その黒いスリップを、うれしそうに着たのである。

　肥満した主人には、少しきついようだったが、シースルーの薄い黒いスリップは、妙におかしな雰囲気を漂わせていた。

　美里がフリルで飾られた、小さな黒いパンティを脱いで、ちらっと私を見た。今日のお土産になるはずのパンティだが、美里は主人の顔に、その脱いだばかりのパンティを、ほうり投げたのであった。

　主人が美里の薄い小さなパンティを、すばやく穿いてしまった。

　私は夫人の顔を見た。夫人の顔には別に変化はなくだまって私にビールを注いできた。

　かくしたはずの黒いパンティが、かえって主人の興奮を目立たせていた。

　黒エナメルストレッチブーツのほかは、美里は全裸であった。

「奥様のところに行って、首輪をはめてもらっておいで」

　と美里が女の下着をつけた主人にいった。

　和室においてあったスーツケースを寄せ、水島夫人は犬の首輪をとりだした。

　美里の下着をつけ、四つ這いになって首をのばしている夫の首に、太目の犬の首輪を夫人は、はめた。鎖が派手な音をたてた。

「よし」

　と美里が主人の背中に、またがった。

　首輪の鎖を手綱にすると、ロングブーツのかかとで、主人の腹を、けとばした。

「歩け」

　水島夫人のほうに手をのばし、

「ナインテールキャットを、奥様」

　と美里は、いった。

　九本の細い鞭にわかれている新馬用の皮鞭が、夫人の手から美里にわたされた。

「ぴしっ」

　と小気味良いナインテールの鞭の音が主人の尻で鳴った。主人は悲鳴をあげた。

「よたよた、するな」

「あう」

「ぴしっ」

　人間馬の調教はポピュラーすぎるようである。美里をのせて寝室を、よたよた歩く主人を、水島夫人と私は、ビールを飲みながら見物していた。

　美里が、主人の背中をロングブーツで踏んづけて、立ち上がった。

「うう」

　と主人が呻いた。かなりの苦痛のようだ。

「ぴしっ」

　と美里のナインテールキャットは空を切り主人の尻に容赦なく振り下ろされた。

「もっと早く歩けないか」

　美しい調教師は、主人の背中の上でロングブーツを足踏みした。主人のひたいに、うっすらと油汗が、にじみでていた。

「よし、止まれ」

　主人の背中からとび下りると、美里は鞭を捨て、水島夫人にいった。

「ハンマーとローソクを、奥様」

　かなり太目のローソクが美里の手に、にぎられると、

「尻を高くあげろ」

　主人はロングブーツで尻をけとばされた。

主人の肩が、がくりと下がり、頭から、つんのめるようにして、床にうずくまった。

美里が、主人のパンティを下げた。

「もっと上に突き出せ」

乱暴な美里の言葉であった。

美里は太目のローソクを、主人のアヌスにあてがい、ハンマーを振り上げると、ローソクに向かって打ち下ろした。

「ぎゃっ」

と主人の全身が、とび上がった。

「なんだ、これしきのこと」

と平気な顔で美里がいった。

「ローソクくらいで死にはしないよ」

ぶっそうなことをいう。

また美里はハンマーを振り上げた。

「助けて」

と主人が泣き声を出した。

「許してくれ」

「おだまり」

ぐりっと、ローソクがめりこむのが、見ているだけで、わかった。

「奥様。ライターを下さい」

水島夫人は、ライターを美里に投げた。

打ち込まれた太目のローソクに、美里はライターを近づけた。

美里が再び主人の背中に、またがった。

ローソクの尾から、青い炎が、ゆらゆらと動いていた。

「美里さん」

と水島夫人が、人間馬にのっている美里に声をかけた。

「夫に目かくしをして下さらない」

夫人の手に、生ゴムの全顔式マスクがにぎられていた。

生ゴムのマスクは、口だけを除いて、ぴったりと主人の顔を包んだ。

和室からおりると、水島夫人は、美里から人間馬の鎖の手綱を受け取った。

「白豚め」

と夫人は、きたなく、ののしった。

「お前の好物を、ごちそうしてやるから、有難く思いなさい」

人間馬が人間豚に格下げになった。

首輪の鎖を引っ張り、夫人はトイレのドアをあけた。

生ゴムのマスクを、ぴったり顔にかぶされた主人は、四つ這いになったまま、トイレに上半身を入れていた。

主人は目かくしされているのである。何をされるのかわからない。

私は、いそいで立ち上がった。

夫人が白い便器をまたぎ、白っぽい上品なドレスの裾を、はしょっていた。

なんの飾りもない、シンプルな白いパンティが、ゆたかな、むっちりしたお尻を包んでいる。私にプレゼントしてくれたパンティも普通の白い品であった。

そのなんでもない白いパンティが、強烈な印象となって目に、とび込んできた。

「もう少し、頭をおだし」

と中腰の夫人が人間豚にいった。主人の頭が、夫人のお尻と、便器の中間になった。

「頭を下げて」

夫人は、お尻で主人の頭を踏んづけた。

主人の顔が、白い便器の中に埋没した。

「そのまま、じっとしておいで」

夫人は白いパンティをさげた。

ふくよかな大きな臀部が美しく現われ、私は思わず嘆息をついた。

まん丸の綺麗な、お尻であった。

水島夫人は、夫の頭の上に、しゃがんだのである。白い便器をまたぐ、ナチュラルストッキングが、また魅力的であった。

「いいかい？」

と夫人は、いった。

激しい放尿音と同時に、おびただしい尿流が、夫の頭に、どっと浴びせられた。

　生ゴムの全頭式マスクを、つたわった夫人の尿は、息をするために、あいていなければならない主人の口へ、急流となって注ぎ込まれたのである。

「あう」

　主人は白い陶器の底を舐めそうになるまで顔を突っ込んで悶えていた。

「うう」

　便器に放尿するのだから、別にえんりょはいらない。

　中年の魅力をたっぷりみせて、水島夫人は夫に小便を、ひっかけているのであった。

　主人の、シッポのようにつき出たローソクが、だんだん短くなり、青白い炎が大きくなったり小さくなったりして、ゆらいでいた。

　水島夫人が、いきなり、水を流した。

「あっぷ」

　便器の中を、どっと流れる水に急襲されて一瞬息が止まり主人は気絶しそうになった。

「見てごらん」

　と美里が、私を振り返っていった。

「奥様にああして責められるとさ、何もしなくても、気もそぞろになってるのが、わかるだろう」

「いつも御主人に目かくしをするのですか」

「そうね。御主人には排泄するところは一度も見せていないわ」

「そうすると、ぼくが奥様の排泄行為を見ることができたのは、運が良いのですね」

　と私は美里にいった。

「そう、光栄に思いなさい」

「はい。光栄に思います」

　主人が首をもたげ、長い舌で丁寧に、あと始末をしていた。

C

　美里の黒いスリップと、黒いパンティをつけ、生ゴムの全頭式マスクをかぶせられて、口だけ金魚のようにパクパクしている主人は美里と夫人の二人の女に、トイレから和室に追い立てられた。

　どうやら、ローソクのアヌス責めから解放されたらしく、尻に火傷することだけは、まぬがれたようであった。

　和室には、縛るのに、ほどよい飾りの柱があり、主人はその柱を背にして押しつけられると、首輪の鎖が巻きついて固定された。

　皮の足枷が主人にはめられ、足枷と手枷を結ぶ鎖が柱ごと、女装下着の主人を、ぐるぐる巻きにした。

「さあ、裸になるのよ」

　と美里が、不意に私にいった。

　黒エナメルストレッチブーツの美里は、ナインテールキャットを私に向けていた。

　水島夫人は、柱に縛りつけた夫の前に坐り黒いパンティを下げはじめた。

　私は、しぶしぶ立ち上がった。

　上京した水島夫妻に会うつもりが、水島氏の愛人の出現に呆気にとられて、まだかんじんの水島夫人に、自分の欲求を、かなえてもらっていなかった。初対面の夫人に、プレゼントされた使用済みのパンティの話を、くどくどとしたのは、夫人の人間便器になる欲求が、あったからに、ほかならない。

　若くてサディスティックな美里も、すばらしいが、人妻の魅力というのか、人妻の妖しいムードに、ひかれるのである。

　そんな私の思惑など知らん顔で、水島夫人は、やさしく、縛りつけた夫を愛撫しているのであった。

「早く」

　のろのろしている私に、美里の皮鞭が空を切った。

「びしっ」

「いたっ」

「まごまごしないで、早く脱ぎなさい」

肩をおさえて、私は顔をしかめた。

服を脱ぎ、下着を取る。

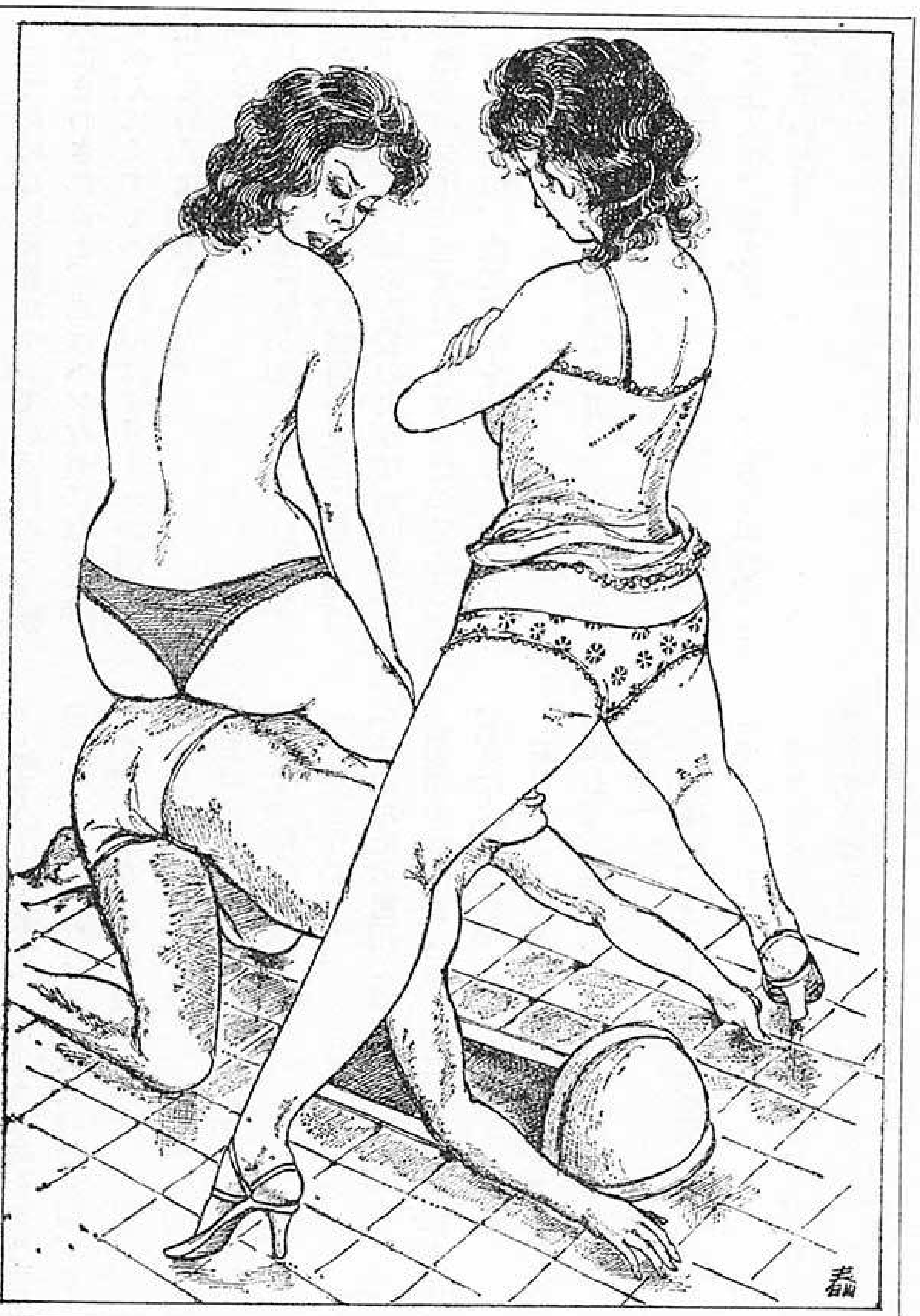
「ばしっ」

と背中をうたれ、

「ぴしっ」

と、しなやかな皮鞭は尻に、はね返った。

「うむ」



ナミオM画廊　『お恵み懇願』　春川 ナミオ

と私は、うなった。

鞭打ちに興味がないだけに、このサディスティンの責めは、かなり苦痛であった。

主人が、くくりつけられている飾り柱に、背中合わせに私は押しつけられた。

皮の足枷と手枷がはめられて、鎖の音だけが派手な金属音をたてていた。

水島夫人の夫に対する愛撫は、かなりゆっくりと、ねっちりと続けられていた。

生ゴムの全頭式マスクを、かぶされている主人は、目は見えない。

暗黒の世界の中で、妖しい指の動きと、唇と舌の感触を知るだけであろう。

主人は美里の下着を着ていたが、私は、まったくの丸裸であった。

「フン」

と、美里は鼻で笑って、スーツケースから皮のサポーターのような品を取り出した。

皮袋のような細い丸い突起物と、小さな棒状の突起物がついている皮バンドであった。

「レディの前で、丸裸でいるというのもなんだから……」

と美里は、にやりとした。

「男の貞操帯をしてあげるわ」

「なんですって」

「フフ」

と美里は笑った。

二つの妙な突起物がついている皮バンドが腰にまわされると、私はヘンな気になった。へんにくすぐったいのはクリームか何かを塗っているようであった。

「くすぐったい」

と、私は美里の手から逃げようとした。

その瞬間、アヌスに鈍痛を覚えて私は呻いた。と同時に、腰を皮袋のような丸い突起物のあるバンドに包まれてしまったのである。

水島夫人が、夫に背中を向けて、白いパンティを下げた。

まるまっちい、優雅なお尻が、微妙な動きを、みせ始めた。

「ああ」

と主人が、あえぎ、夫人も小さな叫び声をたてていた。

「痛っ」

私は下半身が急に狭窄されたような痛みを感じたのである。

「いたっ、いたた」

「フフ」

と美里は、いたずらっぽく笑っていた。

「自分で自分を責めているのだからね」

「なんだって?」

「ああ」

と主人が感きわまったような呻き声を立て白いスーツを着たままの夫人の動きが、ますます激しくなっていた。

「いたた、痛い」

私は泣きたくなって顔をしかめた。

「そりゃ痛いだろうさ」

と美里がいった。

「そのための男用の貞操帯なんだ」

男用の貞操帯なるものは、あまりにも小さすぎたようであった。

ロングブーツだけの美里が、柱ごと抱くようにして、私の顔に唇を近づけた。

「痛っ」

貞操帯が、とび上がるほど痛い。

「やめてくれ」

せっかくの美里のキスも、責めとわかれば拒否するほかはない。

「お願いだ。はずして下さい」

と私は、こにくらしいサディスティンに哀願した。

「こんな残酷な責めはない」

SMプレイに反している。

「取って下さい。お願いします」

「だめ」

「うっ」

美里の歯が舌を噛んだ。

美里も、水島夫人の中年らしい、こってりした夫婦プレイに刺激されたらしかった。

ふと、水島夫人の動きが止まり、夫のところから、そっと離れた。

「奥様」

と美里が夫人に声をかけた。

「奥様のパンティを貸して下さい」

「えっ」

「お望み通りに、奥様のパンティで猿ぐつわをしてやらないと、うるさくてしょうがないんですもの」

「まあ」

水島夫人は、背を向けると、わからないように白いパンティを脱いだ。

夫人が私に近寄った。

「口の中に入れてあげましょうか」

と笑いながら、いった。

「それとも頭から、すっぽりとかぶしてあげましょうか」

「口の中に詰めてちょうだい、奥様」

と美里が、けしかけた。

夫人は脱いだばかりのパンティを丸めると

「口を開けて」

と私にいった。

おずおずと口を開けた私の口に、夫人の体臭と、ぬくもりのさめやらぬ白いパンティがぎゅっと押し込められた。

鎖の音がしたと思うと、皮と鎖の猿ぐつわがはめられて、パンティを吐きだすわけにはいかなくなった。

「いかが？」

と美里が、いたずらっぽい目で私を見た。

「奥様の味」

「いたい、いたっ」

と私は、また叫んだつもりだったが、夫人のパンティを口中に押し込められては、声にならなかった。

「うう、うう」

と、うらめしそうに私は呻いた。

あまりにも残酷な、心理的な、男性用貞操帯の責めであった。

D

ベッドの上で、二つの白い女体が、うごめいていた。

スーツを脱ぎ、下着をとって全裸になった水島夫人は、中年を迎えたとは思われない輝くばかりの、雪のように白い肌を、おしげもなく晒していた。

こんもりと盛り上がった乳房も、豊饒とした腹部も、中年夫人の魅力をあますところなく発散させていた。

どちらかといえば細っそりしている美里は身軽そうで、黒くて長い髪が、夫人の真っ白な肌に流れ、美里の動きにつれて、さらさらと波を打っていた。

目を閉じている夫人の、半開きに潤む唇から、呻きに似た声がかすかに聞こえていた。

夫人の手がのびて、美里の黒髪を、まさぐった。

美里は黒エナメルのストレッチブーツを脱いでいない。

美里の黒いスリップと黒いパンティを着せられ、生ゴムの全頭式マスクをかぶされた主人と、貞操帯という皮袋をはめられ、夫人の脱いだばかりの白いパンティの猿ぐつわをされた私とは、二人のサディスティンに柱に背中合わせに鎖で緊縛されたまま、見つめているより仕方がなかった。

いや、生ゴムの全頭式マスクをかぶされている主人は、暗黒の世界に閉じ込められているわけで、気配で感じるより方法がないはずであった。

小さな貞操帯は、ますます私を苦しめ続けていた。

「うっ、ううっ」

と私は、パンティの猿ぐつわの奥から、せい一杯、声をあげて苦痛を訴えた。

水島夫人の豊饒な肌から顔を上げ、美里は苦しむ私を見上げて、にゃりとすると、ストレッチブーツのままで、ベッドに立ち上がった。

夫人のこんもりと盛り上がった乳房が、ストレッチブーツで踏みつけられた。

「あう」

と夫人が呻いて、両手が美里のブーツをつかまえた。

「いたい」

と夫人は甘い声でいった。

「いたいわ、美里さん」

「フン、こうされるのが好きなくせに」

黒いブーツの底から、はみだした白い乳房が妙に刺激的であった。

「はずしてくれ」

と私は叫んでいた。

「いたい」

夫人の白いパンティが舌を圧迫し、鎖と皮

の嵌口具が私から言葉を奪っている。

黒いブーツが、なだらかな起伏に従って下がり、激しく息づく、白い腹部を踏みつけ始めていた。

「ああ、美里さん」

うわごとのように夫人は叫んでいた。

夫人の悶える声を、じっと聞いているかのように、柱に縛りつけられた主人は身動きもしていなかった。

黒いロングブーツが、豊饒な腹部をまんべんなく踏みつけ、ブーツの底から、はみでて肉のかたまりは、中年女のどろっとしたセックスを象徴しているようでもあった。

踏みつけるのをやめた美里が、夫人の顔をまたいで立った。

「よくて、奥様」

と美里は、ブーツに挟まれた夫人を見下ろしていった。

「今度は美里にキスしていただきますわ」

水島夫人が、うなずいた。

黒いエナメルのロングブーツが、夫人の顔を、ぎゅっと、はさみつけた。

美里が中腰になった。

水島夫人が上体を起こして、ゆっくりと首をもたげた。

「舌をだして、奥様」

と美里は、いった。

夫人の半開きの唇から、厚い肉のかたまりが顔を出した。

「もっと」

眉をひそめ、顔をゆがめて、夫人は背一杯舌をのばしていた。

「奥様の舌は素敵よ」

と満足そうに美里がいった。

「さあ……」

夫人の顔が、美里のしなやかなストレッチブーツに包まれて、見えなくなった。

「奥様」

と美里は、叫ぶような声を出した。

「好き、奥様」

「――」

「大好き」

美里の綺麗な背中がきらきらと輝いているように見えた。

いきなり美里がベッドからとびおりると、柱に縛られている主人に向かって手を差しのべた。

「美里」

と主人が叫んだようであった。

美里のひきしまった臀部が、強靱なバネのように撥ねた。

全裸の水島夫人がベッドをおり、私に近づいた。

残酷な貞操帯がはずされた。さんざん痛めつけられていた私はホッとした。

「いたかったでしょう」

と夫人は私に、いった。

「美里の趣味なのよ」

「――」

「主人はバンドをされるのを、とても嫌がるけど」

といいながら、夫人は両手で抱きつくようにしてきた。

「だめだ」

と私は心の中で叫んだ。

「はなして下さい」

夫人が、私の前に、ひざまずいた。

背中合わせの主人に抱きついている美里のロングブーツが、私の横腹に、からんできていた。

美里のブーツは、柱ごと主人をはさんでいたようである。

私は、苦痛から一転した快楽状態に、とまどい、溺れこんだ。

柱から解き放たれた主人と私は、長々と床に、のびた。

しかし、二人とも、解放されたわけではなかった。

私の口から猿ぐつわがとられ、夫人の白いパンティが引きずりだされると、美里が私の顔に、ぺったりと坐ったのである。

生ゴムの全頭式マスクをかぶされたままの主人の顔には、全裸の夫人がドッカリという感じで坐っていた。

「綺麗に、するんだよ」

と美里は、私にいった。

「いいかい?」

といっても、いいもわるいもなかった。

いつもなら、嫌悪と嘔吐で私は、むせかえって苦しむのに違いなかった。

が、どうしたわけか、なまあたたかいものが少しずつ、私の口を潤おし始めるのを、吐き出そうとは思わなかった。

「フフ」

と美里は笑った。

美里は、私の口の中に少しずつ放尿していたのであった。

その時、隣で水島夫人も、美里と同じように、夫の口に放尿していることに、気がついた。

尿がとまり、美里が腰を浮かした。

「たべさせてあげようか」

と美里が私を見下ろしていった。

「えっ」

「たべられるかしら」

「何を」

「フフ」

と美里は笑った。

夫人も、夫の顔の上で腰を少し持ち上げていた。

美里と同じようなことを夫に強いているのかもしれなかった。

私は目かくしをされていず、一部始終がよく見えるが、主人は、あくまで見ることを許されていなかった。

「美里はね、硬いのも、軟いのも、自由にだせるわよ」

と美里は、おかしそうにいった。

「量だって、沢山だせるし、ちょっぴりだってすることができるわ」

何もいうことはなかった。

「その日によって、色が違うそうよ」

主人の顔の上で、かがんでいる夫人に、

「ねえ、奥様」

と、いった。

「だんなさまは、よく御存知よね」

一週間に、違う色がでて、それが主人を喜ばせたというのである。

「ウン」

と、美里は、いきばった。

「口をあけて」

と美里は私にいった。

「よくて?」

あわてて、顔を、そむけた私の目に水島夫人の豊臀から、ゆったりと主人の顔に落下していくものが、うつった。

――（終）――

天星社刊 《限定版グラビア写真集》 在庫案内

M写真集『女王様に飼育される日々』 一部一〇五〇円（送共） 略号「M特」

◎男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎この写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いします。

奇クサロン

M女高村浩子に捧げる唄

保利精二

＜おなじ心ならん人と、しめやかに物語して、おかしきことも、世のはかなきことも、うらなくいいなぐさまんこそ、うれしかるべきに、さる人有るまじければつゆたがわざらんとむかいるたらんはひとりあるここちやせん＞（徒然草、第十二段より）

これは世の孤独を語る、兼好法師の徒然草の一節である。

高村浩子を奇クで発見した僕の心は、この一節の「ひとりあるここち」を吹きとばす感があった。

数多くの読者の方の投稿を拝見したが真にMである女性は、浩子さん以外には、そういるものではないだろう。〔M女通信〕も毎月誌上を飾り楽しみに読ませてもらっている。数々のフォトを拝見して、只一つ不満な点は、M女浩子の表情である。まだプレイの経験も浅いようだから、そこまで望むのは酷かもしれないが、とことんまでMを追求し、羞恥責めの極致をM女浩子の肉体の上に情容赦なく展開してほしいものだ。

もっともっと縛ってほしい。もっともっと激しく責めてほしい。羞かしめてほしいと願っているM女というサガを背負う浩子よ。山の彼方にあるという被虐の理想郷に、早くたどり着かれんことを、遠く博多の地から祈っている。

ここで一つ、SMプレイのアイデアを提案しよう。

僕は浩子の肩まで届く女の誇りである髪を利用した数々の羞恥責めを行ないたい。髪といっても髪をむやみやたらに縛っても女体美をそこなうものである。要するに髪がSMプレイの一つのアクセントになればいいのだ。

伏目勝ちの浩子の顔にかかる黒髪、そして素晴しい二つの胸の隆起にかかる長い髪。こんなことを想像している僕である。昔から髪は女の命とか言われている。

浩子の瞳は遥か遠い幻でも眺めているような抒情的なところがある。その美しい瞳にかかる黒髪もまた、こよなく情趣がある。とはいうものの、やはりSMプレイの基本は、なんといっても『縛り』だと思う。羞恥でいっぱいの浩子の素晴しい身体を、荷物のように縛り上げ、数々の羞かしい責めを与えてやろう。

浩子は、羞恥も屈辱も、そして最後は女の誇りもかなぐりすてて底知れぬ陶酔の渕に身を投じて狂ったように身をくねらすだろう。でも、まだまだ、プレイは開始されたばかりなのだ。そこで浩子に強要されるのは、言葉による、いたぶりの遊びなのだ。

プレイに於いて身体又はポーズがある一定のラインをオーバーする時に示す数々の羞恥と同じように、言葉のプレイに於いても通常男と女が交す言葉以上に、Sである男とMである女が交す言葉は素晴しいと思う。羞恥に燃えた浩子が、豊満な肉体をくねらせて、口走る言葉は、Sである僕を有頂天にさせることだろう。浩子の感想を頂ければ幸いである。

菱縄マニアの独白

縛り……止められない

早木夢二

バカバカしい、といっては叱られそうだけど、ラジオ放送の朝十時からのセックスカウンセラーの時間を、ついニヤニヤしながら聞いている。

臆面もない言葉が、とび出してきて、戦前派で、自分自身としても、縛りとか責めとか、世間に兎角、はばかるような性癖を持っていて、そのため、いろいろな意味で、内心の苦しみを経験してきたものには、聞く方の図々しさ、答える方の厚かましさ。とにかく、これは、いいご時世であるわいと今更ながら、三嘆したくなる。

先日などは、四十才の主婦の、年下の夫が外国旅行から帰ってきてから異常な行為を強要して困る……こんなことをしていたら痔になるのではないか、という御質問であった。

回答者は困惑して名答がでず、うやむやに反らしていたようだがまあまあ、聞く方も聞く方だね。

こんな類の質問を、おおむね主婦や処女を失った娘さんが、するのだが、聞いていて（もっとも、真面目な顔して聞いているヤツもヤツだが）こちとらも、一つ質問してみたくなった。

「先生、お忙しい所を恐れ入りますが……」

どうして大抵の質問書は、こういって恐縮してみせるのかね。

「私は生まれつき、女を裸にして縛らないと不能なんですが、変態でしょうか」

「変態ですね、まぎれもなく」

「直るもんでしょうか」

「いや、もう貴方ぐらいになると死ぬまで直りませんね」

「じゃ、このまま続けていいのですね」

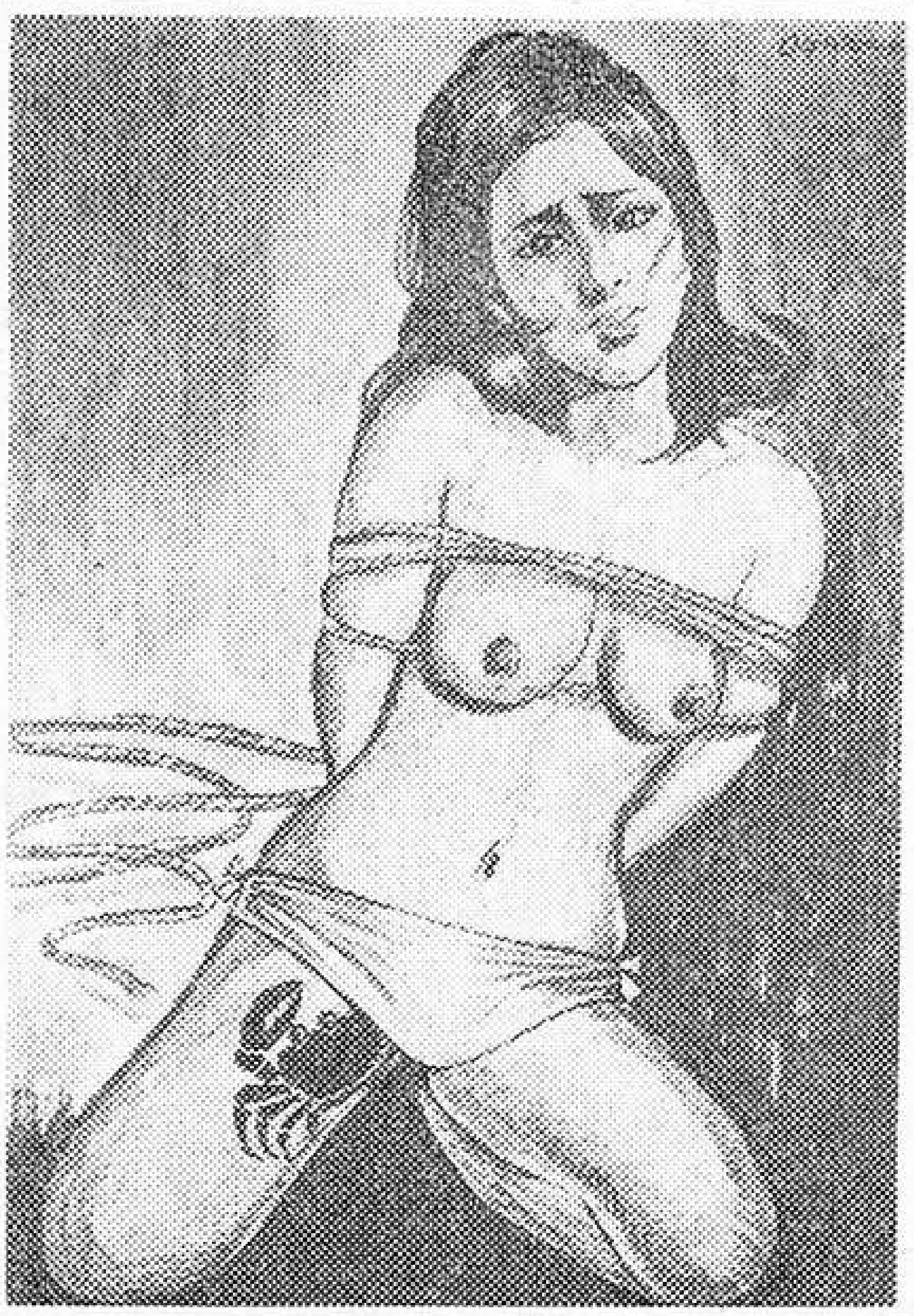
「他人に害を及ぼさない限り、仕方がないでしょう」

何をいってやがる。バカバカしくって腹も立たない。誰が止めたりするものか。愛する女を一糸まとわない全裸にして、がっちり菱縄をかけ、後手高手小手に縛っておまけに股間縄まで施して、あれやこれや、拷問プレイに、いそしんだあげく、近頃はポルノ映画などと称して、様々なラーゲを物欲しげに見せているが、そんなものなんか教えられなくても、長年に亘る修練？ のおかげで、先刻ご承知の秘術にふける。

今更、やめろと言ったって、やめられるものじゃない。また、やめる気なんか、さらさらないよ。慶子だって、そうだ。思いもかけない天与の恵みに、浸り切っている。どうかして縄なしに始めたのに、途中で「縄かけて……」なんて言われると、私たるもの、緊縛マニアの光栄これにすぎるものなしと狂喜してくる。

放送では、ここまでは言えないだろう。けど、一度こんなことを電話してみて、あのしかつめらしい回答者をドギマギさせてみたいものだ。

もっとも賢明な回答者がいて、そんなことは奇譚クラブでおやりなさい、とでも言ってくれると、私は又、一そう嬉しくなってくるに違いない。



イメージ画 『カニ紋様』 小川茂正

＝〈第九十八回〉＝

辻村隆

古いなじみの、同好者のK氏から、命拾いをしたよという電話である。わけを聞くと、彼は五月十三日の土曜日の夜、千日デパート七階のサロン、プレイタウンへ遊びに出掛け、SMレスビアンのホステス嬢二人と倶に、ゆきつけの十三のホテルへしけこむことになっていたのであった。奥さんに先立たれて、既にやもめ暮し三年。彼の土曜日の夜は、もっぱら、プレイタウン通いであったそうな。

ところが、あの忌わしい土曜日の大火の夜、彼はまったく僥倖にも、遊びにゆけぬ羽目に立ち到って、内心はプリプリしていたのであった。彼の二女の縁談のことで仲人が訪れ、婚礼の日取りや、結納のことなどで、遅くまで話し込んでゆき、彼はイライラし乍らも己むを得ず、父親の責任上、応待して、遂にゆきそびれてしまったが、事件を知るや、よきプレイ相手であった、二人の女性の安否が気掛かりで、早速タクシーを飛ばしてミナミへ走ったが、混雑で到底、近寄れない。

翌朝になって、馴染みのプレイタウンのホステス嬢も焼死したことを知り、偶々、前触れなくその日、仲人が訪れたのも、危急を救ってくれた亡妻の計らいかと日頃は無信心な彼も、背筋がゾッと冷たくなったのを覚えたという。

このプレイタウンには、初老の彼にふさわしい、年増の女性が多く、サービスも濃厚で、庶民的な雰囲気で、やもめの彼には、誠によき憩いの場であったらしい。何かの話のきっかけに、SMプレイを伴うレズ仲間の女性を知り、そのプレイは可成り強烈だったらしい。年配は三十六才と三十才ということで、彼は亡き女性達のために名前は、あかさなかったが、いつも二人がかりで、十分に彼のSM性を満足させてくれたらしい。私は初耳であったが、それはK氏の秘かな穴場でもあって月に一、二度、耽溺の夜を送っていたのをその時、知ったのであった。

縄や、小道具、女悦の器具などいつも女性が携えてきて、夜もすがらSM的な狂宴に打興じ、彼を交えて、三人で、甘い愉しい夜を送っていたらしかった。

いずれは私にも紹介しようと思っていたが、今となっては、反って紹介しないでよかったよと、彼は語尾を曇らせて結んだが、千日デパートの大火は、K氏の秘かな愉しみを、奪ったようである。

金銭には恬淡で、プレイが愉しくてたまらぬような、あんないい女性は、もう、そうおいそれとは見つからないよと淋しげであったが、若し紹介されていたら、探究心旺盛な私のこと、どう間違ってあの事件の夜、行かないとも限らない。人間の運、不運なんて、常に紙一重であることを、つくづく思い知らされたのである。

×　×　×

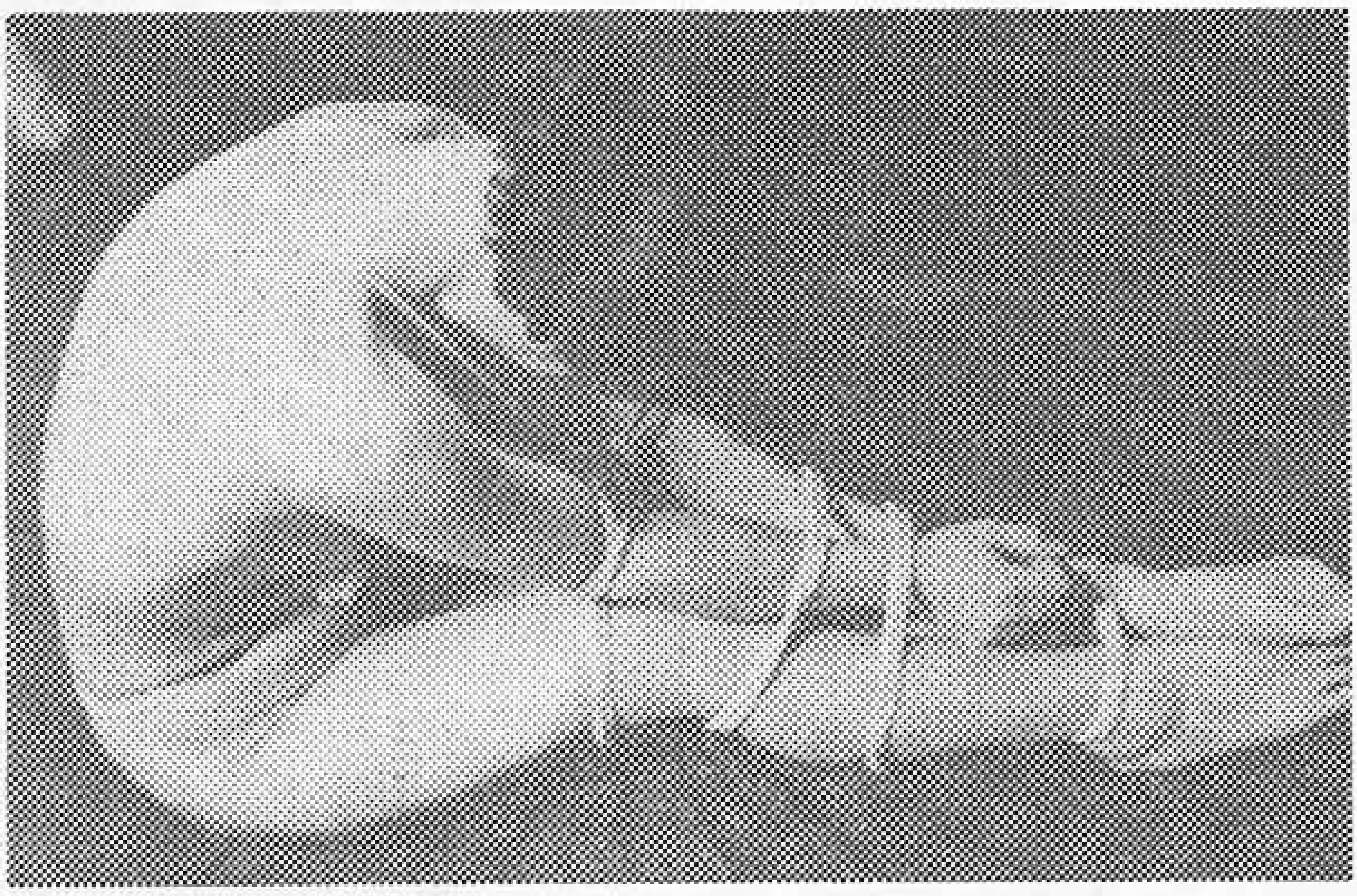
厚い壁で隔てられた高層の団地なら、いざ知らず、安ぶしんのアパート暮しでは、うかうかすると夫婦の甘い語らいや生態を盗聴される、油断のならぬ時世になってきた。

これも同好者仲間から聞いた話であるが、さもありなんと思う。夫婦プレイの傾向のあるU夫妻は、狭いアパート暮しでは、十分に堪能するSMプレイも出来ず、プレイづいてくると、時偶には、上六界隈のアベックホテルへ、昼間から、しけ込んで、存分に欝積したSMプレイの欲求を果たしてくるのが常であった。昼間サービスタイムを利用すると、ひる頃から出掛けて、午後五時頃まで、ゆっくり風呂につかり、たっぷりプレイしても、一五〇〇円ぐらいですむアベックホテルがある。一寸した食事をするよりも安くて、声を殺す気兼ねもなく、愉しめるシステムになっている。

隣室の夫婦のいとなみの声が、微かに洩れきこえるということは自分らの夢中の声も又、隣室に聞こえていることは明白であった。フト悪戯心の湧いたUは、マッチ

箱ほどの超小型の盗聴器と、それを受信する、高感度のFM放送の入る、カセットテープ付きのラジオを買い込んでくると、猫のひたいほどのキッチンの、モルタルの壁を少し破って盗聴器を据えた。隣室の夫婦の寝間とは薄いモルタル壁一重である。

プレイフォト……『愛妻純子の艶姿』……三浦敬一



そろそろ戦斗開始の模様に、FMにスイッチを入れ、カセットテープを廻す。これは一種のノゾキ趣味にも通じていて、テープの録音は、見事に隣室の一部始終を吹き込んでいた。Uの細君も似た者夫婦で、その声で結構歓びを昂めて濡れにぞ濡れしである。

ところが、U夫婦の、この秘かな愉しみも長くは続かなかった。誰かが、エッチな仕掛けをしていると、忽ちアパートの中に噂が立ったのであった。

U夫婦の左隣が例の盗聴されている結婚十カ月の夫婦。右隣が水商売に勤めに出ている未亡人と高校二年の娘という並びで近頃の女子高校生は深夜放送をきき乍らの、ながら勉強が大半である。

盗聴器はU夫婦の部屋を超えて隣室の、女子高校生のラジオにも広大無辺に電波を送っていたのであった。娘は何の気なしにFM放送のスイッチを入れる。妙なるミュージックと思いきに、豈はからんや、ナマナマしい、たえだえの声が流れたのに、吃驚仰天――汚れを知らぬ娘は、この奇怪な声の一件を未亡人なる母に告げる。

母はその声の、何たるかを知っていた。忘れていたものを抉り出されて、疼きを覚えると共に、その奇怪な電波に心は千々に乱れ、娘の手前、取繕いに懸命であったことだろう。水商売に勤めているから、かくかくしかじかと話したら、客や仲間に物知りもあろう。誰かが盗聴器を仕掛けて、FM放送で受信しているが、かなりの長距離伝播するから、懼らくキャッチしたのだろうということが分かった。

U夫妻は内心、恐懼し、匆々に盗聴器を取り払ったが、FMラジオの普及は、貴方一人ではないという、いい例である。ブームを呼ぶ盗聴器を使って、ウカウカ事件を起こしても、つまらない。お互いに心すべきである。

アベックホテルのピンク映画がある夜、突然に、近くの家の茶の間に映る時代である。

ヌードも、SMプレイフォトも自家製造出来、カセットテープを使って、悩ましい声も自由に作成出来る昨今。

子連れ奥さんや、若い娘が、堂々と、お昼のワイドショウで、自己のヌードを観賞させ、ナルシシズムに酔う近頃、私のカメラ・ハントも、段々と稀少価値がなくなってきた。変われば変わる世の中である。

× × ×

「週刊現代」の記者が、夫婦交歓プレイについての意見を、ききにきたと思ったら週刊「女性自身」のルポライターが、大阪でSMの夫婦プレイを取材して、夫婦プレイヤーの在り方について、いろいろ参考意見を、ききにくる。多忙の折、その都度、時間を割かれるのも迷惑であるが、無下に断わりも出来ず、わざわざ訪問してきたのだからと、日頃のSMプレイの理念なり、SMプレイ道についてウンチクを傾けて、一くさり喋りまくる。

さて、その成果や如何にと、当の週刊誌の発売を待って、書店で開いてみても、一向にSMらしき

M女性の美

臥竜子

私がM女性の美しさを強く感じるのは、乱れた黒髪（長目の方が美しい）。細くくびれたうなじ、特にえり足にまつわるおくれ毛、捻じ伏せられた細腕と、それに伴う肩甲骨の隆起、背中の筋肉と背骨の渓谷、細くくびれたウエストと急にもり上がる双丘（特に緊張した丘の感じ、弛緩したそれを表現できれば最高）すんなり伸びた両脚などである。

それに割に強く魅せられるのは指――特に手指である。俗にいう白魚のような指と細くのびた爪には、えもいわれぬ表情がある。指による緊張、恐怖、諦観、完全な屈服――そして羞恥を表現する事が可能であれば、M女による緊縛フォトは最高であると思うが、いかがなものであろうか。

記事もない。まさかヒヤカシだけで訪問するわけでもないが、記事の取捨選択は、編集者の自由で、文句もいえない。なまじ、ちょっぴり名前を知られ始めただけに、こうなると、体のいいニュースソースの提供者みたいであるが、私としても、いきなりの訪問には、すべてをさらけ出すわけもなく、日常性の私は、どちらかというと健全で、とっつきの悪い方であるから、或は、知名度ほどにもなく大したこともないワイと、落胆して帰ったのかも知れない。

記者は私の異常性を求めて訪問するが、私の、SMに対する非日常性は、日々のなりわいの生活からみて、その占有率は少ない。毎日の生活は、至って日常の凡人的である。私はいつもいうようにSMのプロでもなし、それに生活の総てを賭けているわけでもない。

SM同好者諸氏の殆どの方と同様に、ありきたりな日常の生活をし、その中に、SMの愉しさ、歓びを見出して、折々にSMのハントに走っているに過ぎない。

競輪、競馬、パチンコ、麻雀、その他、一切のギャンブルはせずゴルフ、ボーリングもせず、自己の意志で、アルサロ、クラブ、バーにゆくでもなく、呑みたければ愛妻相手の晩酌で、ほろ酔い気嫌になって、テレビをみたり、読書に夜の更けるのを忘れる。

私の日常は、そんな生活の連続で、社会一般から、ちっとも、はみ出していないつもりである。そんな私に、奇を好む記者諸君は、会ってみて、物足りなさを感じるのではなかろうか――。

（大した奴じゃなかった……）、そんな評価を、私は喜んで甘んじて受ける。だからこそ、既に八年になんなんとするSMカメラ・ハントが、しばしば息切れしながらも延々と続いているのである。

奇クの創始者、箕田氏にしても私と同様、家庭では、誠によき夫であり、父親で、二人の可愛いいお嬢さんも、そろそろ年頃で、日常性の生活は到って平凡である。家族をつれてハワイに遊び、休日には、日本国中を車で走り廻って家庭サービスこれつとめるよきパパである。彼はあらゆる誘いをすべて断わっている。私は断わりきれず映画、テレビに顔を出した。それだけの違いである。SMプレイは、冷静な理性と、健全な思想なくては、なり立たないと思う私の持論は、常に変わらない。

（浣キチ通信）

自称浣腸日本一

平山　連浣

奇ク七月号、辻村隆先生の久しぶりの浣腸モノ、カメラハントの「Mアニマルの華麗なる対決」は登場モデルが、これも浣腸責めでは抜群の描写をみせてくれる谷山久美子、渡部好美の組み合せだけに充実した内容であった。

ただ、両嬢を後手縛りにして四つ這いスタイルの頭を地につけ腰を思いきり高くしてエネマで浣腸する時の描写が、いささか物足りなかった。もっと浣腸する前の彼女等との「浣腸をする、しない」といった対話や、両嬢の豊満な臀部にエネマの尖端を、ググッーと差し込む時の主観的、客観的な緻密な描写がほしかった。

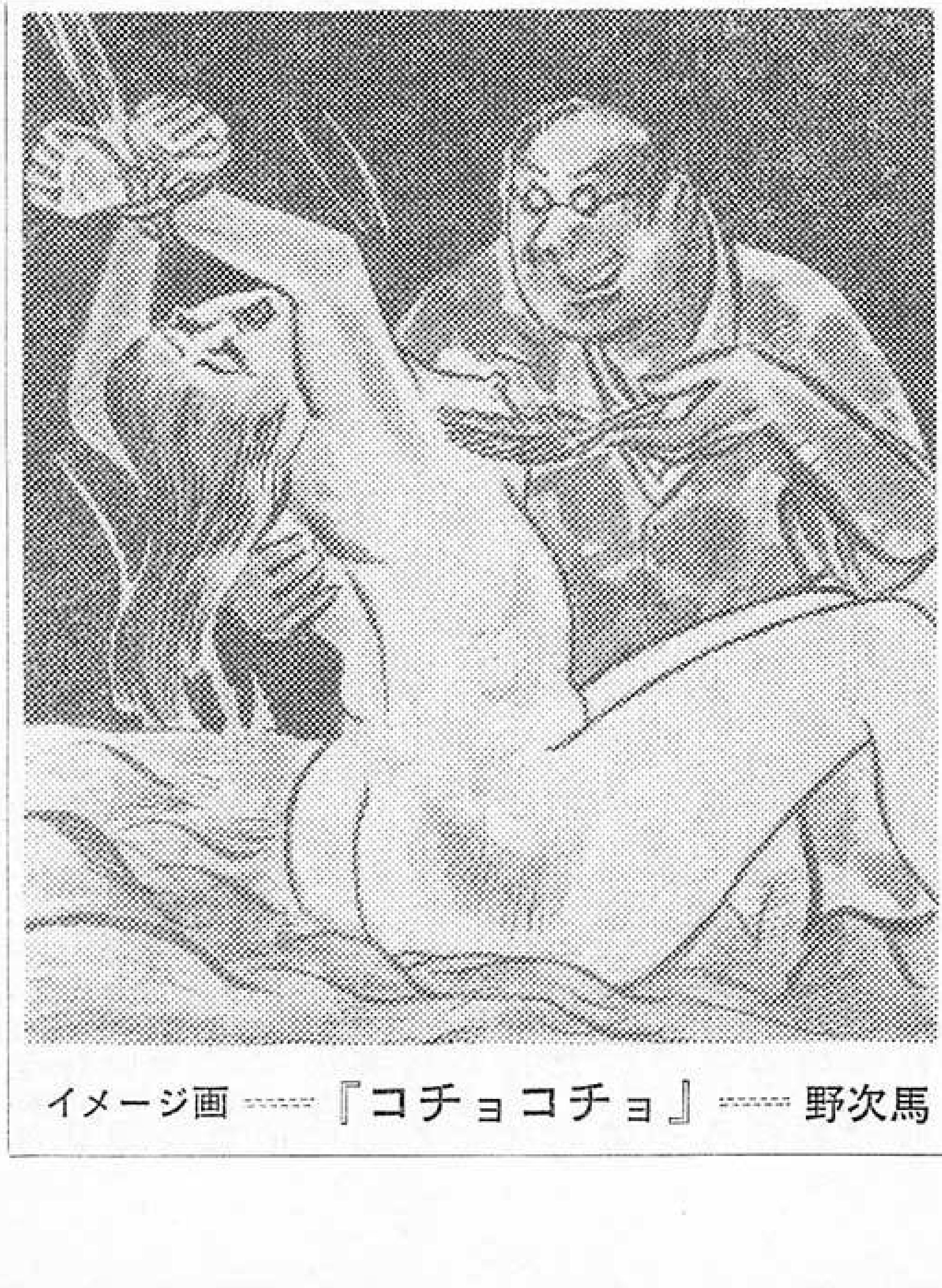
浣腸モノでは、数えきれない場かずをふんでいる辻村氏のことだから巧みなタッチで出来るハズ。恐らく取締まりの目を意識してサラリと流したのと思うが、浣腸は決してワイセツではないと思う。浣腸は全く正当な行為であって極めてノーマルな行為と思う。したがって辻村氏も、そういったわからず屋の雑音を気にすることなくもっと大胆に長年得意とする浣腸分野に取り組んでほしい。

「短信往来」の鈴木千鶴子さん。私と大いに浣腸プレイをしたいとの事、正に天にのぼる位の喜びです。浣腸好みの貴女、抜群のプロポーション、若々しい白桃のような貴女の双尻を、小生の指もて開くと、そこには茶色がかった可愛いい菊座が、浣腸を今か今かとばかり息づいているようです。

先ず下剤のヒマシ油を浣腸し、三十分位すると下剤がきき、グリセリンの時と違った腹全体がチクチクと痛み、強烈な便意が襲ってきます。便が出たら大変なのでソーセージをアヌスに半分位埋め込み栓をし、二百CC硝子浣腸器にドナンとグリセリンを半々混ぜた液を一杯入れ、便が飛び出さないように、すぐ浣腸をします。

私の浣腸プロセスは大体以上のようなものです。だが貴女は私ほか数名一緒になって浣腸責めを受けたいとの事ですが、私は浣腸仲間がほかにいては気が散るので好みません。飽くまでも貴女と二人きりで千駄谷の庭つきのホテルで朝から夜まで充分時間をかけ、浣腸をはじめベッドで、或は浴槽でテーブルを台にして炊事場で、といった具合に色々趣好を変え、小生が貴女の為に描いている数十種類の浣腸体位を駆使して浣腸の名画面を描き出したいものです。

その時、小生が持参するものはイチジク浣腸、三〇CC、五〇CC、百CC、二百CC硝子製浣腸器、二千CCイルリガートル、エネマ、膣開孔器、水道ホース（水道浣腸のため）散水用嘴管、ソーセージ、コンニャク（アヌスから逆浣腸する）バイブ、とうもろこし（アヌス責め用）食塩、酢、グリセリン、ドナン、下剤（ヒマシ油が一番よい）その他小物類等々です。是非貴女の電話番号を教えて下さい。浣腸に関しては小生は日本一だと考えています。

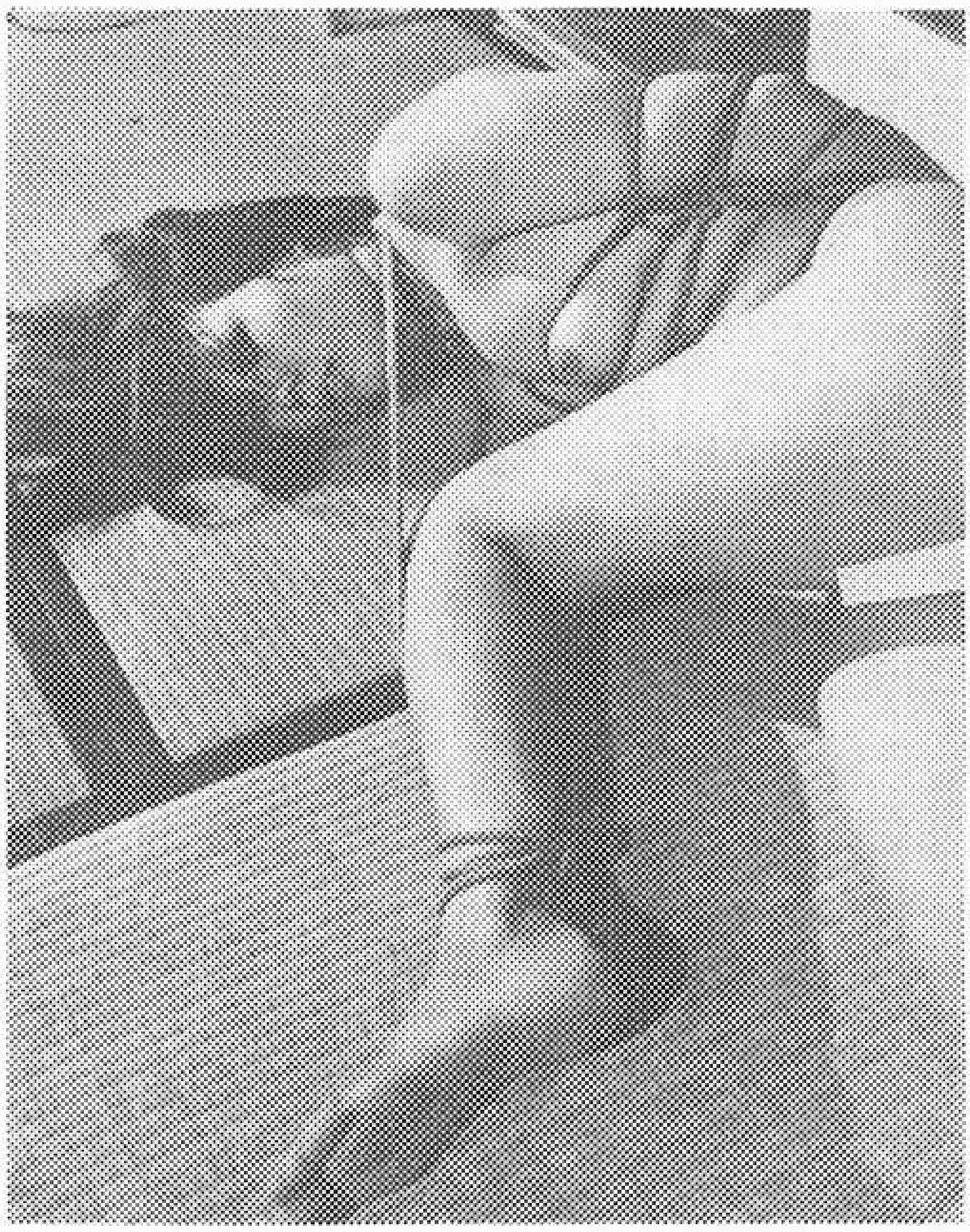


イメージ画……『コチョコチョ』……野次馬

☆愛読者の報告書☆

恋慕深田菊子嬢緊縛

益田茂夫



私は一月号でレポート〃憧れの深田菊子を縛る〃を書いた。いや書いたというよりも、書かされたといった方がよいかもしれない。

女体緊縛フォトの蒐集に心がけそれらのコレクションが私の心をしびれさせると共に、私は自分の手で実際に、若々しい女体を縛りたい、責めというものをやってみたい、SMプレイがしてみたいという気持が強くした。もし、それらの望みが果されなくとも、私たちにとっては、スターである彼女たちM女と直接逢ってみたい、話をしてみたい、という気持を押さえることが出来なかった。

それが編集部のご好意で、美女深田菊子嬢を直接この手で縛ることが出来て、本当に天にも昇る心地がした。その結果が一月号の、あの「愛読者の報告書」となったのだが、残念なことには私はカメラのシャッター位は押すことは知っていても、とても室内での撮影は無理。それで写真も塚本鉄三氏のカメラワークに依頼せざるを得なかった。文章にしても、編集部の助力でなんとか形をなしたものの、ごらんの通りの代物である。

「読者の方に折角紹介したって、殆ど写真も送ってくれず、報告書も書いてくれないのが実情です。辻村氏や塚本氏に紹介したときは必ず一〇〇％書いてくれるのですが、読者通信に出て、それっきりあと顔を出さない女性の多くは、紹介した人が書いてくれないからなのです」

と、編集部の方から言われてみると、私にしても耳の痛い話である。というのは、写真にも文章にも全く自信のない私だからだ。

それでいて、あの美しい深田菊子嬢に、もう一度逢いたい、もう一度、あのやわらかい女体を、この手で縛り上げたいという強い欲望は消すことが出来ない。塚本氏や辻村氏のように、素晴しいルポやハント記事で、幾万のファンを楽しませることが出来れば、これに越したことはないのだが、今の私にそれを求めても無理なのだ。

自分一人だけが楽しんで多くの読者ファンの方々を踏みにじることは、これはなんとしても心苦しい——と、こう考えて、罪ほろぼしの意味で拙いペンをとった。

編集部にやかましくお願いしてやっと許しを得たが、忙しくて送り迎えの世話まで出来ないということで、顔を知り合っている関係もあって深田菊子と最寄りの喫茶店で落ち合ってホテルへ向かう。

Mの天使——深田菊子という私の抱いていたイメージは、今日も少しもこわされることはなかったのは嬉しかった。この前に逢ったときと同じように明朗で陽気な彼女と話し合っていると、私の方もリラックスしてくる。

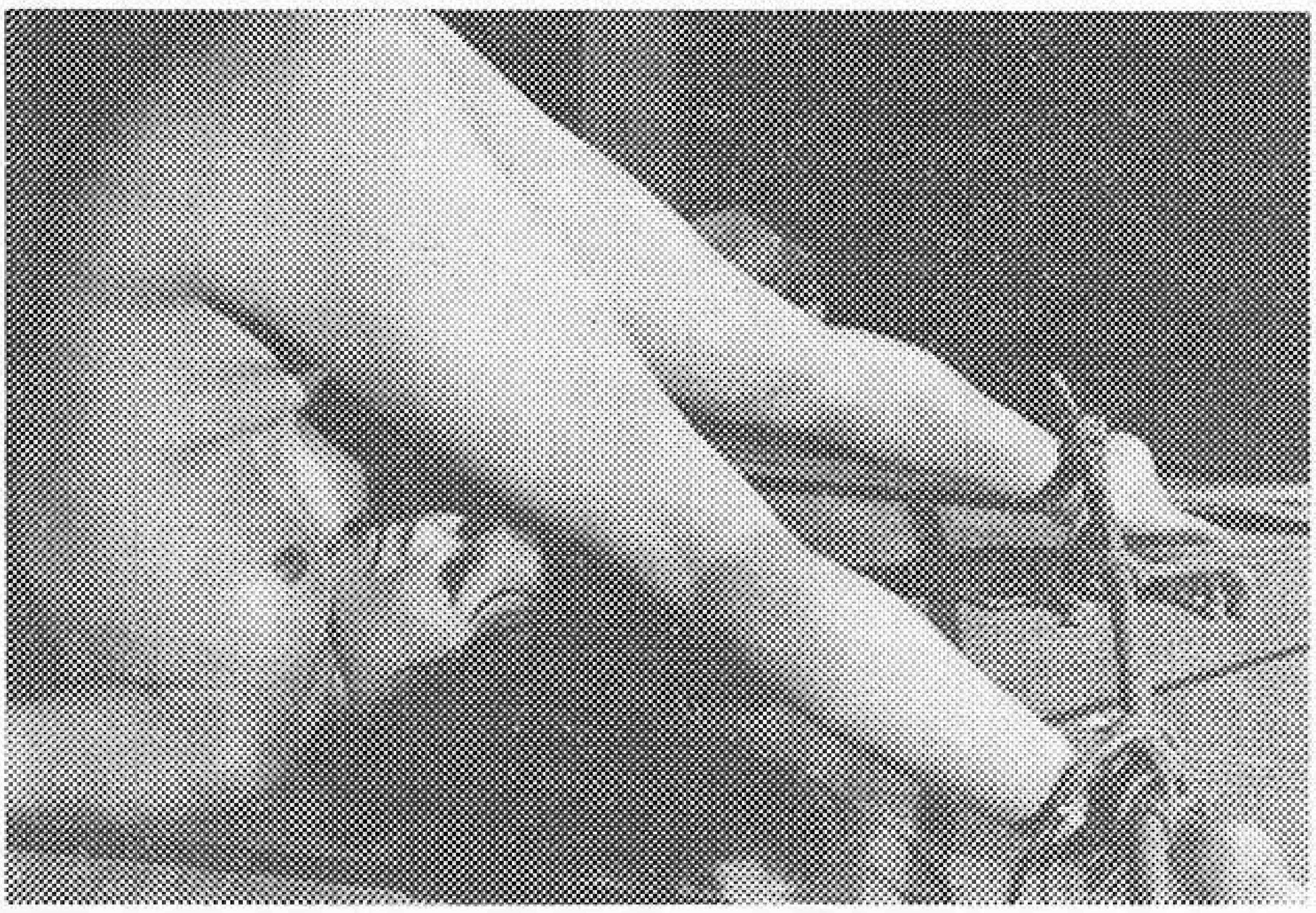
若くて美しい深田菊子のオールヌードを眺めているだけで心たのしいが、その柔肌に思いのままに縄がけして縛り上げることが出来るのだし、それによって彼女もまた喜ぶのであるから、女体緊縛フ

M女を想う詩

快虐の水先案内

霜月一

部屋に充ち満ちる甘美なる陶酔
　鏡のような鋭い悲鳴、獣の咆哮
　　そして拡がる空間と喜悦
おまえは羽根毛を毟りとられた
　鳥だ！　蝶だ！　鴎だ！
　　雨に打たれ、よるべを捜す
ようやくたどりついた快楽の館
　この部屋こそ、息吹きの部屋だ
　　おまえの飼われる場所なのだ
おまえの純白で繊細な柔肌は
　絶えずロープの味を知るだろう
　　それがただ一つの衣裳だから
黒耀石にも似たその光る瞳が
　驚き、憎み、怒り、哀訴する
　　だが遂には恋に燃えるのだ
私がおまえに愛を注いでやる時
　黒い鞭がその仲介をするのだ
　　白肌の鮮かな朱条こそ愛印だ
なにも感謝するには及ばない
　美しい裸身を持つおまえには
　　縛られて暮す権利があるのだ
見るがよい、鏡の中のその美体を
　ロープに噛まれた肌の美しさを
　　そうだ、大いに酔うがよい
おまえは美しい、だから似合う
　その後手縛りが、その猿轡が
　　そしてその羞恥の悶えぶりが
誇るべきなのだ、喜ぶべきなのだ
　私を魅了したことを、そして
　　私に縛り上げられたことを
壁を這い昇る涕泣は、羞恥と喜悦
　の真価を悟った嬉し泣きだろう
　　流すがよい、悦虐の涙を
縄を絞ろう、鞭を振り下ろそう
　おまえが被虐に悶え、しびれに
　　酔い、恍惚の雲に乗るまで
熱く火照った柔肌を、ガラスの冷
　たさが這い廻るだろう、そして
　　おまえを天国に誘うだろう
私は悪魔を粧う水先案内者なのだ
　快楽と歓喜と忘我の花園へ
　　縛ったおまえを導く奉仕者だ
済まながる必要はない、おまえが
　被虐に悶えることが、案内者に
　　対する最大の報酬なのだから
遠慮することはない、私は労を惜
　しみはしない、おまえの肌が
　　更に強い縄を求めるならば
枷もある、鎖もある、皮もある
　だが、きっとおまえは望むに違
　　いない、縄による後手緊縛を
踠け、呻け、哭け、叫べ、そして
　噛みしめろ、それがMの悦びだ
　　私なくしては得られぬ快虐だ



ォトマニアの私にとっては、まさに最高の一日であった。自分一人でこんな楽しい思いをするのは、勿体ない話だが、私は只自分の目で女体の神秘を存分に眺め、そして胸をわくわくさせるだけで、それをファンの方々に分け与える手段を持たないのを残念に思った。

　部屋へ入ってから、四時間ばかりいただろうか。私はその間、十二分すぎる位、深田菊子の女体の隅々まで縄で縛って鑑賞し、そして〈責め〉と称して、いろいろのタッチを試みた。まだまだ私の責めは、Mの天使である彼女にとっては不十分だったようだが、私は飽食する位むさぼった。

　特に深田菊子の菊花の美しさは天女というのは、こんな女性のことを言うのかと思う位だった。

「元よければ末もまたよし」という言葉があるが、深田菊子の女体は、どこをとりあげても、かぶりつきたい程、瑞々しく、新鮮で汚れというものがなかった。これは彼女に恋慕した私の、欲目であろうか。

　とにかく、深田菊子は素晴しいM女であった。

奇クを読んで

「耽美の夜」に迎えたい彼女

高松志朗

もう十数年になりますか——思えば奇クは、私が青春を迎えた頃から、心秘かに私を慰め、楽しませてくれた唯一のブックでした。

暫く仕事の関係で読んでいなかったので、出張の帰り途、大阪市内の書店で五冊も購入し、久しぶりにむさぼる様に読みふけった私でした。暫く振りに手にした奇クで三月号の豊中市の千里守子様、五月号の東京の大山俊江様、京都市の藤田尭子の投稿を読み、私の長年望み憧れていた人が、ここにいると直感し、矢もたてもたまらず、少年の様に胸をときめかせ乍らペンを取りました。

耽美の夜に憧れ——ムードとスリルを、こよなく愛し、SMを理解できる女性。本当に心から讃美をささげつつ、生涯に想い出を残す愛のSMプレイを貴女達に許して頂きたいものです。

勿論、お互いの社会的な立場、地位、秘密等を充分守り合い、傷つけたりする様なことのない様、真面目な交友を希うことは当然なことでありましょう。

今から七年程前、ふとしたことで知り得た人でしたが——二年程の間、時々会っては、お互いの喜びを交していましたが、そのすばらしいプレイの想い出の数々も、彼女の再婚という門出に、今迄の記録スナップもネガも手紙も、すべて彼女の前で、二人で焼却し、一切を忘却の彼方に捨て去ることにしたのです。いい人でした。

こんな想い出もあり、美しい耽美のSMに憧れを持ちつづける小生は本年38才、柔道三段、タフな体に自信はあり行動的で一寸涙モロイ感動派でもあります。只今ある会社を経営している者です。

貴女の様な女性に巡り合うことは、たとえ、それがどんなに困難でも巡り合えた時点こそ、余計にその喜びとスリルも大きいし、自分達だけの魅惑の世界に耽溺する楽しさが湧いてくると存じます。

心の底から貴女が狂喜し、悶絶する程の愛のプレイを捧げましょう。ハレンチなプレイがお望みなら大の字縛り、股割り、恥部の化粧責め、恥毛責め、股割り、ローソク立て責め、十字磔股裂き責め、ネクタールプレイなど。

プレイフォト『雪子の縛り』伊達一也

甘美なプレイがお好きなら、剃毛露出責め、羽毛くすぐり責め、毛筆責め、乳首責め、舌責め、バイブ股割り責め、アヌスワギナ二所責め、三方アクメ責めなど、いくらでもアイデアがわいて参ります。まだ見ぬ貴女が、この責めにあえぎ、うめき、泣き、遂に恍惚として全身をケイレンさせつつ、樹液に、しとど濡れながら、頂めがけて登りつめてゆく——。

燃え上がれば冷やかに、さめかけると甘美な誘いで悶えさせつつ身体の奥底まで、快感とSMの耽美を極めさせた挙句、最後に——

幸いに仕事の関係上、東京、大阪には、よく出かける私です。又公害に汚されぬ美しいブルーとグリーンの当地に御招待も致しましょう。私の作品のフォトや、もっと詳しい自己紹介も申し上げる機会を与えて頂いて、安心出来る人間と思われたら御交友下さい。

誌上での御連絡をお待ちしています。同好の諸氏諸兄姉もお呼びかけ下さい。（四国・高松志朗）

高村浩子さんを責める

責苦与之助

人、それぞれ顔が違うように、M女性を責めるにもポイントがある。ここでは小生の考えた……むしろ直感的……範囲で責めてみたい。高村浩子さんと言えば、もう奇クではおなじみのM的女性の代表者である事は論を待たない。高村さんは勿論M的とは言え、現在のところは、多分に夢想的な部分が多い。従って、その責めへの導入部が、かなり、むずかしい。同時に先天的潜在型M性に近く、単なる通常の欲望の変形とは異なるので、責めへの姿勢も、純粋に考えねばならないと思う。小道具類（大人のおもちゃ）は浩子さんのM性を引きずり出さないだろう。むしろ責めの正統派（こんなものがあるか？）の常道を歩む事が大切だ。「最初にセックス有りき」ではなく、「最初に責めありき」である。

　全体的に縛りを中心とし、あらゆる角度から息も出来ない位に緊縛する事である。縛りには麻縄、荒縄、紐、ロープ、ゴム紐等々などがあり、それらを、場所、時間とか、その場の雰囲気に合わせて使用しなければならない。雰囲気（ムード）は浩子さんにとって非常に重要だろうと小生は考える。

　さて、縛りは非常にバラエティーに富んでいる。簡単に例挙すれば立縛り、股間縛り、亀甲縛り、開股縛り、エビ縛り、逆エビ縛り柱宙縛り、後手縛り、高手小手縛りなどがある。特筆したい事は浩子さんは特に乳房強調縛りを必ず行なうとよい。浩子さんが意識すると否とに拘らず乳房はポイントであると思う。見事に張切った豊満な乳房を上下からはさみつけるようにして一層強調させればさせる程、彼女の魅力は一段と増すだろう。直感によれば浩子さんは縛りに対しては非常に柔軟性と耐久性とを兼ね備えていると見る。彼女の柔肌に縄が陥没してくびれる程に責めたい。このように浩子さんの場合には臀部、太腿も乳房をいかに縛りあげ、強調するかである。いたずらに、だらだらと全身を縛るよりも急所をキューと締め上げた方が迫力もあり喜ぶでしょう。あられもない姿態に縛りあげて、じっと被虐にかすかに悶える柔肌を見つめる。全身のうぶ毛が逆立ち、打震えて次第に昂揚してくると浩子さんはドップリとマゾの境地に達する。

　縛りの次は、言葉による暴虐であろう。夢想的傾向の強い浩子さんには、言葉による被虐が相当にこたえるだろう。

「マゾめ！」「思いっ切り苛めてやる！」「メス犬のかっこうをしろ！」「責められて嬉しいか！」「奴隷のように扱ってやるぞ！」「よくも羞かしくないな」等々。

　縛られた上での言葉は、もはや単語の羅列ではなく、その言葉自体が浩子さんを更に苛め、精神に突き刺さるだろう。ここに言葉の暴虐の意義がある。鞭打ちに類する軽度の打擲、は背中と臀部だけに止めたい。スパンクは特に浩子さんの被虐による悦虐の深浅に応じて変化させねばならない。その為には浩子さんの目を見る事が必要であり、その表情との対比において行ないたい。まだこの部門では経験が浅いが故に……。

　総じて、被虐のムードを大切にし、縛りを中心とした責めによって行なうならば必ずや浩子さんは悦虐の喜びを全身で表現し、更に一層、高次元への精神と肉体との統一的昂まりにまで到達するであろう。最初は、これでよしとすべし。しかる後に、あなたの責めのすべてを浩子さんは許すだろう。

編集部だより

○本誌＜奇クサロン＞に、「愛妻弘美の緊縛フォト」を度々発表して下さった井上浩氏から編集部に連絡があり、本誌の取材に愛妻の弘美さんを提供して下さるとのお申出を頂きました。いずれ誌上を飾る機会もあることと思います。

○夫婦プレイといえば、七月号で三浦純子さんの便りを載せたところ多くの方から関心を寄せられました。一部転送しておきましたので、プレイのレポートが編集部に届けば幸いだと思っています。他の夫婦プレイ実践者の方々からのお便りもお待ちしております。

○前田真知子さん、いよいよ東京から京都まで出てこられました。筆の立つ方なので編集部でも、彼女の告白文に大いに期待していました。塚本氏の取材で相当変わった写真も撮影されたようなので、それらのフォトを紹介する意味でもカメラルポの力作も書いて頂きたいと願っております。

○ここのところ人気上昇中の鈴木千鶴子さんは、第一回のプライベートの来阪に引き続いて、仕事に

〜我がプレイレポ〜

ゆう子を＝責める

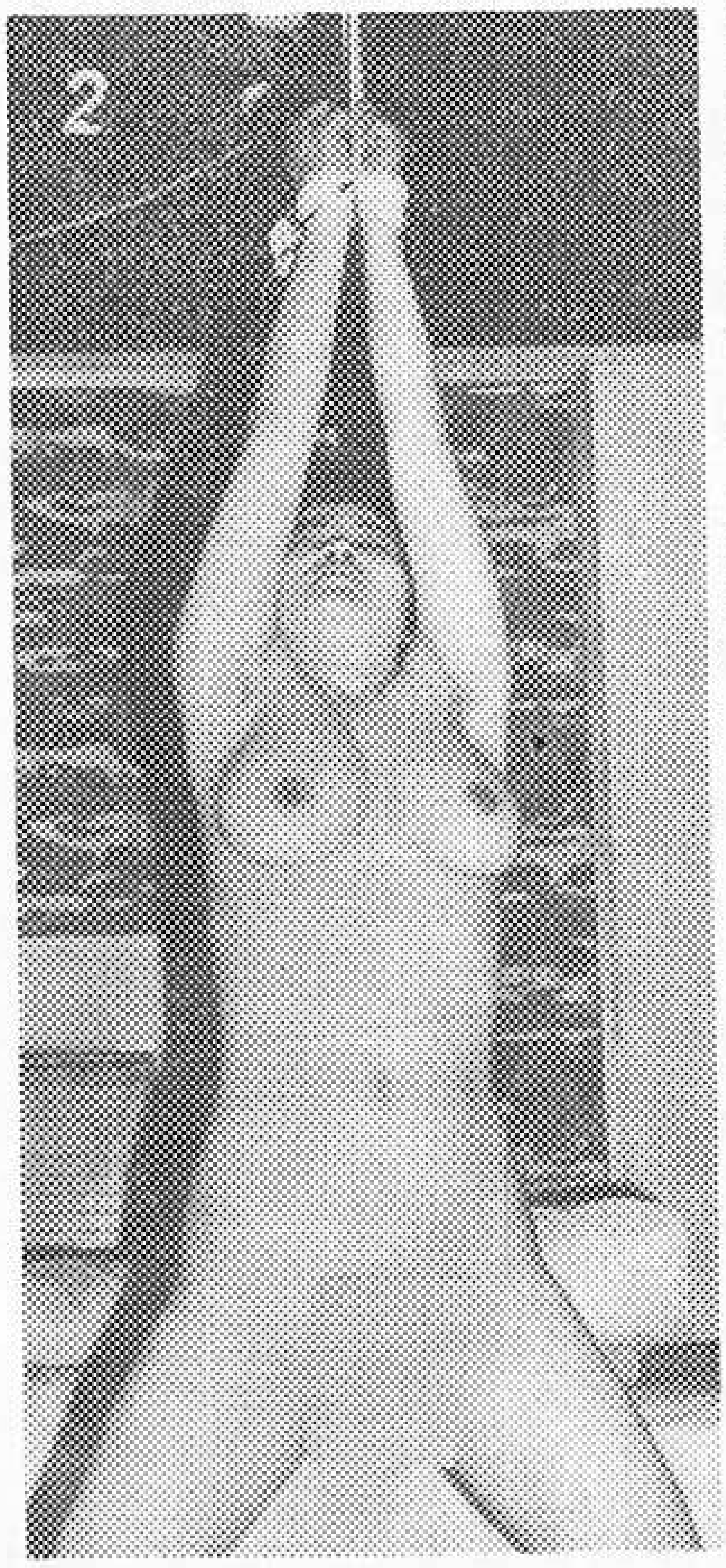
山形　最上卓也

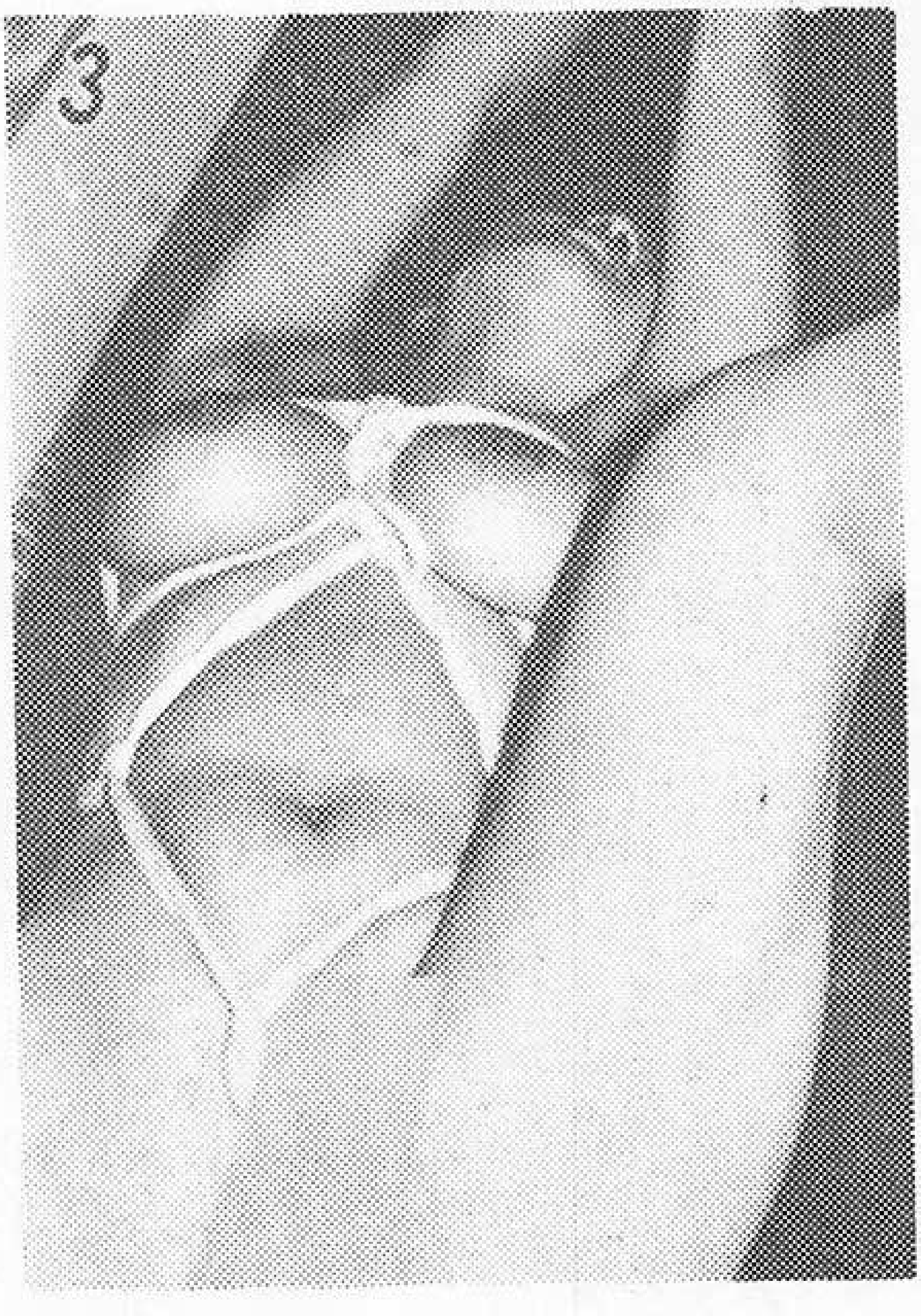
今回のプレイ場所は福島市郊外のモーテル。

つい数カ月前頃には、股間しばり、ロープでの打擲等に、すぐネをあげていた、ゆう子だが、最近は幸か不幸か、顔をしかめ涙を浮かべはするものの非常に我慢強くなり、羞恥責めを主としていた我々のプレイも、新段階に入りつつあると思う。

しかし私の、羞恥責めに惹かれることは変わらず、ＯＬ服を除々に脱がし、恥かしさに慄える肌から、ブラジャーやパンティを引き剝ぐ瞬間には、全身がカッカと燃え上がるのを覚える。

だが最近は、いつも同じ相手のためか、あまり羞恥感を表わさなくなったと思える、ゆう子に、やや物足りなさを感じ反動的に責めに強烈さが加わり、エスカレートして行くのは、やはり自然の成りゆきなのだろうか？　又、責めながら、羞恥に慄える別な女性を求める気持を、どうしようもない私自身の欲望も……。


2

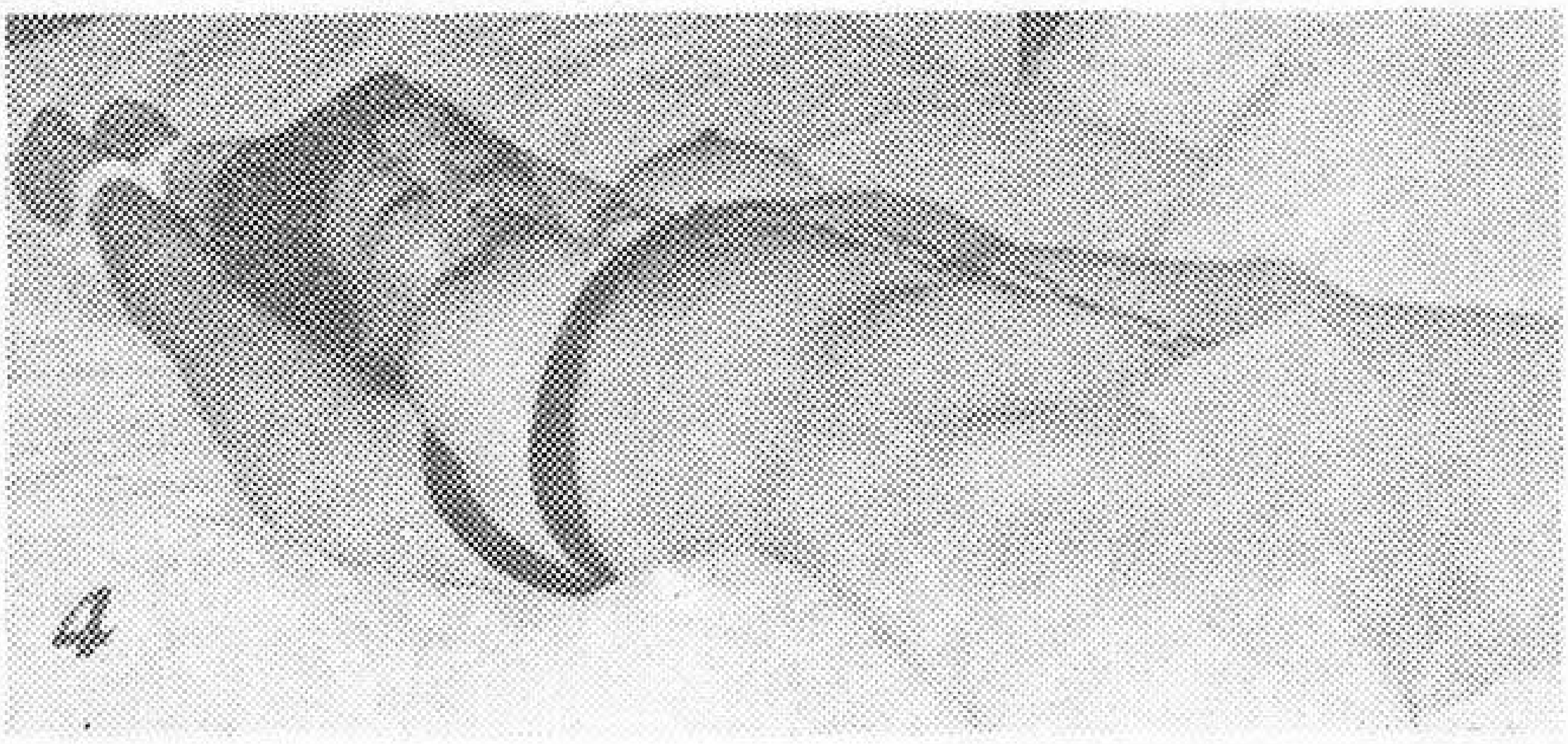

3

て名古屋まで来られたのですが、遂に取材を果たさず在京の取材記者に一任していますが、誌上に掲載可能のレポートが出来るかどうか今のところはっきりしません。次回に関西まで見えた時、塚本鉄三氏を煩わす予定をしています。

○投稿の原稿、読者通信を含めて相変わらず横書きのものが多い様です。必ずタテ書きにてお願いします。尚、読者通信に限り葉書でも結構ですが、この場合もタテ書きにてお書き願います。

○先月号のこの欄にて紹介しましたモデル嬢着用済みの下着類は忽ちのうちに在庫品がなくなってしまいました。旧式替ゴム付きの月経帯の着古したもの、この方はまだ若干の在庫がありますので、送料と寸志謝礼を同封下さった方々に第一種便、又は小包にて、お送いたします。色はご希望通りのもりのが揃うかどうか不明ですが、一応希望の色を添記して下さい。

○『稚妻の妊娠腹責め』で十九才の太鼓腹を責められ辻村氏のカメラハントにも登場した富田由美子さんから、その後の夫婦プレイの成果を誌上に紹介したいと言ってこられました。いずれ写真撮影が出来次第、掲載したく思います。



他人のプレイぶりを見てみたいという、ゆう子も、内心は私だけとのプレイに物足りなさを感じ始めているのでないだろうか。

そのマンネリ傾向をカバーする意味でも、何か新鮮さを覚えさせる責めを……と思いながら敢行したプレイの記録が、同封の写真である。

（1）＝剃毛作業中のもの。ローション類一切を使わなかったセイか、かなり痛がった。

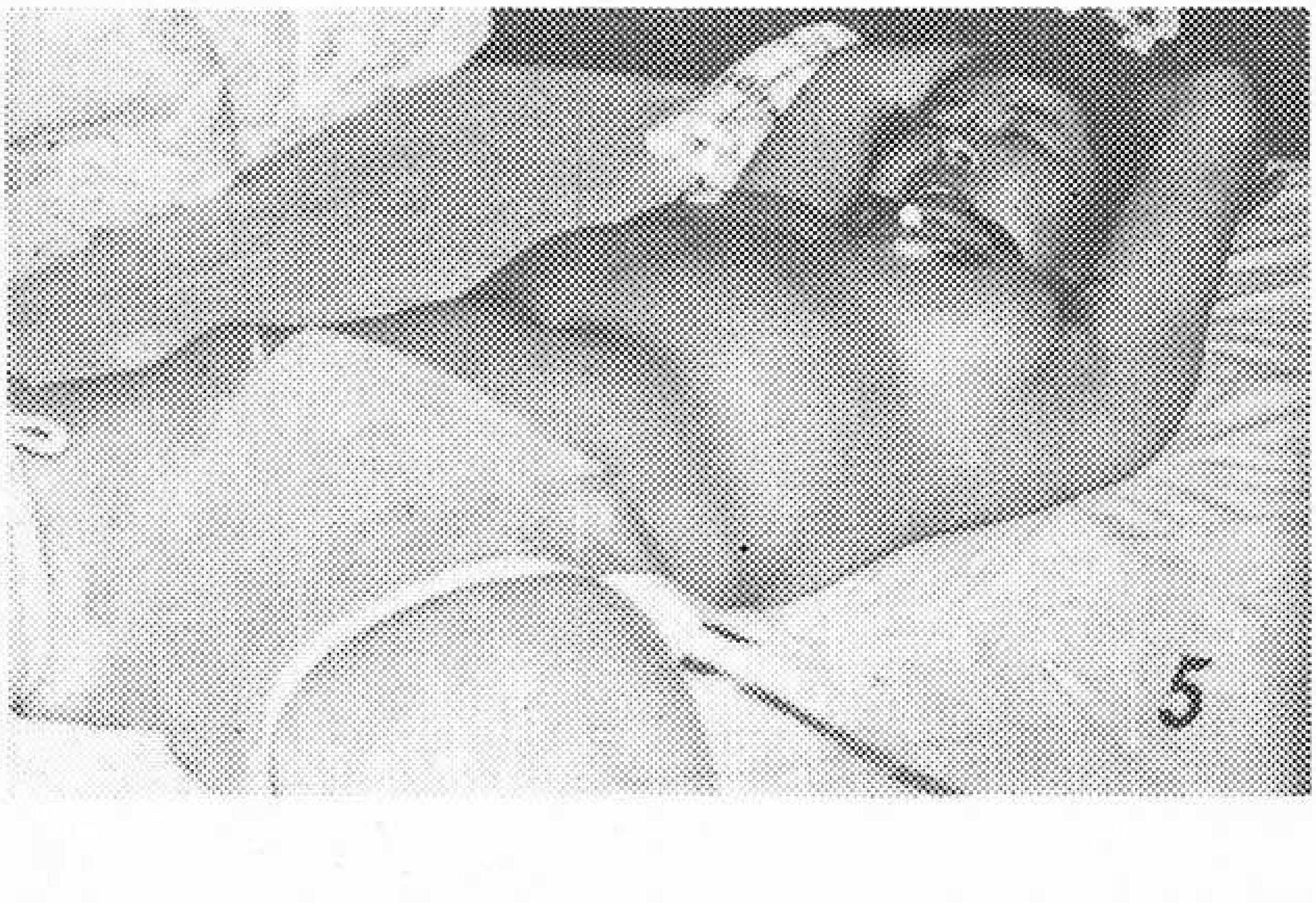
（2）＝ゆう子は体重50キロだが、完全に宙吊りにしてムチ打ちを行なった時のもの。

（3）＝ムチ打ち後、宙吊りのまま縛り縄を増やし、股縄、片足吊り上げに仕上げたもの。

（4）＝吊りから解放した後、ベッドに引き伸ばし縛りにし、尻の下に枕をあてがって弓反り気味にさせて、クサリによるタテ締めで責め上げてやったもの。

（5）＝胸締めとクサリを外してやった代りに太腿絞りにかけ、急所の三カ所を同時にローソクで責めたもの。この時には、太腿を絞りすぎて泣かれたし、短いローソクの火が消えるまで、放置したので、さすがのゆう子も悲鳴の挙げ通しだった。

その他のフォトでは、デルタの中心に大きな灸を据えているところのものがあるが、誌上向きではないように思う。同好の方と、プレイフォトの交換などしたいものだと願う次第。更に出来得れば、合同プレイが願わしいのだが、プレイ実践者の方々、いかが？



マゾヒストの述懐

マゾのこころ

小山郁夫

野坂昭如氏が以前、オール読物だったかに、本誌の「家畜人ヤプー」の著者と対談され、マゾヒストの根本原理は、「女性の驕慢への渇仰」であると書かれていましたが、至言であると思いました。

マゾヒストは女性の中の驕慢さに最高の美を認め、その驕慢さを無限の高みに昂揚するために、自らを低くし、女性にかしずく道具となり、奴隷となり、便器やビデまた家畜、獣類への変身をはかるものです。そして、女性の驕慢さの、すなわち、その美の最高を認める事は、そのお小水その他が自分に向かって放たれる瞬間です。

女性もオシッコをひっかけることによって、最も男を奴隷的に扱ったという実感を享有し、だからこそ、マゾヒストは深い陶酔に浸ることが出来るのだということでした。

私は東京市谷の外濠を見下ろす高台のマンションの八階の部屋であるママ様に飼われています。この部屋からは遠く東京タワー、霞ガ関、新宿の高層ビルを望見し、夜は眼下にネオンの美しい街を見下ろし春は市谷外濠の土手の桜をお花見し、さながら、お城の天守閣にいる気持です。ママ様はこのお城の城主様であり、私は絶対に服従する忠実なる家臣として、お仕えしております。

私にとって、ママ様が少しでもお気持よく楽しくあられるなら、どんな苦痛もいといません。椅子の代りに、四つ這いになった私の背中に腰掛けられ、永い時間、お化粧直しをされることも、夜、ベッドで正体なくおやすみになってしまわれた、その〝おみあし〟を膝の上に抱きかかえて按摩をして差し上げ、あげく、うるさげに、「もうよい」と、足で蹴られて寝返りされてしまわれても、また、トイレにお供をし、後から両掌でお尻を支えて差し上げ、後始末をすることも、犬の様に首輪をつけられて鎖で引き回されることも、馬にされ、また、パンティを頭からかぶされて『猫のカン袋だ』と興じられることも、それがママ様のお気晴しになれば、それでよろ

佐藤満代様にご理解を乞う

水野信二

私は二十八才になるM男性ですが、先日、二カ月間の海外旅行から帰国して、四月号で佐藤満代様が「女王即位」を宣言されたのを始めて知りました。

佐藤様が以前から奴隷募集をなさっていることは知っておりましたが、なんだかついて行けないような点を感じて応募をためらっていたものです。しかし、一度プレイしてみたくなり、とりあえず私の気持を伝えたいと思います。

というのは、私なりに想像する佐藤様が、私の生活環境とは、あまりにもかけ離れた、下品で知性も教養もない、脂ぎり、肥え太った白豚のような女性だと思えるからなのです。

現在、私の周囲におります数人の女性は皆、知性と教養を兼ね備えた気品高き美貌の女性ばかりです。しかし、私のマゾヒスチックな欲望は、このような名実共の美女相手では満たされないのです。余り気品高き美女故に、マゾヒズムも自然な感情に近づき、屈辱感が薄れるからだと思われます。

その点から考えて、気高い精神と、最高の知性と教養、及び美しい容姿を持つ私が、下品な白豚た

しいのです。

でも、私がママ様の驕慢さを最も強く感ずるのは、高価なクリスタル・グラスの花器を跪いて両手で前に捧げる時です。それは用を足すのに適当な切り込みのあるものを、ご自身でデパートから購めてこられたものです。

ゆっくりと裾を開いて、これに跨がられて、前に跪いている私のことなど眼中になく、平気でお小水をなさいます。おわると黙ってすっと身を起こされますので、私は口と舌でペーパーの代りをいたします。この様な何万円もする高価な尿瓶をお使いになることに、貴婦人として深い尊敬の念さえ感ずるのです。

それから、最も愉悦を感ずるのは、浴室へお供をし、シャワーの下のタイルに跪いて正座し、上体を弓のようにのけぞらせ、首を水平にし、口を大きく開けると、その顔の上に跨がられます。そして蔑む様な笑みを口許に浮かべながら私を見下ろし、次の瞬間、激しい勢いで液体を排泄なさいます。

生温い液体は忽ち私の口に溢れ顔を濡らし、全身に、ほとばしり流れます。そして私をして、なんともいえぬ恍惚感に浸らせます。

終わるとママ様は手を伸ばしてシャワーのコックを引かれます。シャワーの湯はママ様の肩から胸下腹へと伝わって私の上に落ち、すべてのものを流し去ります。私の口の中に入った以外は……。

この様な生活が三年つづきました。ご機嫌のよい時、ママ様は、「お前は私のなんだろうね。三助按摩、小間使、下男、そこまでが人間で、馬、犬、猫、それから、椅子、足拭き、痰壺、尿瓶、トイレットペーパー、便器かしらね」

なんでもよろしいのです。いまもベッドに寝そべっておられるママ様のお尻に顔を埋め、一生懸命アナルを舐めて差し上げております。私は楽しく幸せです。

る佐藤様に、さいなまれることにこそ、強い屈辱感が得られる状態のように思えるのです。

しかし、佐藤様の「宣言」にあったような、「全てを捧げての隷属」は出来ません。空想の世界では非常に私のマゾヒズムを昂めてくれますが、現実には出来得ることではないからです。

私は現在、前記のような美女数人との交渉があり、今後も続くことは間違いありませんし、所有資産も簡単に動かし得るような性質のものではないのです。

私のプレイは、あくまでも社会的な私を離れた、マゾの一面のみにおいて楽しむものでなくてはなりません。この点が、佐藤様との大きな違いです。

それを諒承の上でなら、私は是非一度、佐藤様にさいなまれ、弄ばれてみたいと思うのです。もちろん、捧げ物というより「弄んでもらう代償」は差し上げるつもりでおります。私のマゾヒズムを満たして下さるなら豪華な邸宅と、美容師としては恐らく一生かかっても蓄え得られないだろうほどの金額を即座に差し上げます。その程度のことなら私の社会的な一面に、何らの影響も及ぼさずに済むからです。

「女王」佐藤満代様、もしこの小文がお目に止まり、私の希望がお分かり頂けましたら、是非一度、奴隷としておさいなみ下さい。

短信往来

小杉千恵子様へ

北摂の石田生

早速ご返事くださってありがとうございます。貴女に喜んでいただき又共鳴くださいまして光栄のいたりです。貴女は今ご妊娠中とか、すばらしいことですね。貴女にとって、この上ない喜びだと思います。さて、今回のプレイプラン。貴女は浣腸も鞭打ちも存分にやってくれとのことですが、貴女が妊娠中であることを考慮して、こんなプレイプランは如何です。

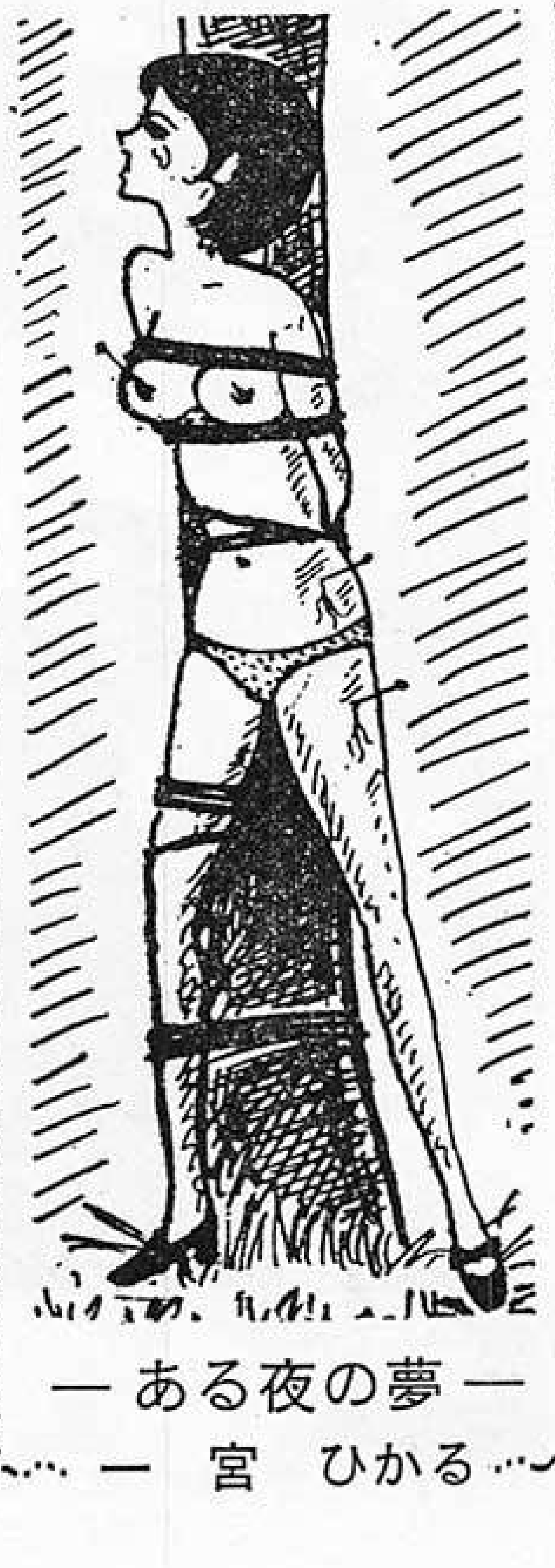
千恵を返上して静子夫人になるのです。組ではやっきになって静子に妊娠さすため、あらゆる手段を使って努力してきたが、ここにやっと、その目的が達成される日がきたのです。この妊娠した静子を柱に、SMの地上最大ショウを開催するため再訓練するのです。訓練には着衣は一切ありません。まず、ふっくらとした腹部を中心に縛り、体をならすために筆、羽毛等で全身くまなく操り責めを行ないます。次に浣腸責め。両足を一杯ひろげ、高く吊り上げ、私の眼前に可愛いいエクボが、これからの責めを静かに待っています。

この可愛いいエクボに百CC硝子浣腸器が近づき、液がゆっくりと体内に注入されてゆくのです。それから十数分間、貴女は体内の悪魔の跳梁と戦いながら、遂に私の目の前で排泄するのです。更に体内を清めるためにイルリによる大量浣腸。清めたエクボにエネマが注入され、今回は液体でなく気体です。静子に名演奏家になってもらいます。演奏会が終了すればA責め、バイブ、卵、バナナ等で貴女のAを存分に責めあげます。

もちろんVの方もバイブで弱く強く責め、どんな責めをされても耐えるために必要なのです。

このようなプランは如何です。もし貴女とプレイできる日が来ても、これだけのプレイが出来るかどうかわかりませんが、しかし貴女が満足されるだけのプレイを心がけることを誓います。

最後に妊娠ゆえ、十分お体を大切にし、立派な二世をおつくりになると同時に、妊娠中のフォトを奇クに掲載されるよう、神に祈りつつペンをおきます。



―ある夜の夢―

一宮　ひかる

高村浩子様へ

奈良秀夫

高村浩子様、七月号のM女通信で、当方に対するご返事をいただき、感激しました。やはり読んで下さっていたのですね。

当方のことを「もっと、詳しく……」との一言に勇を得て少々書かせてもらいますと、住いは奈良で、勤めは大阪。美男子ではない平凡な男です。ただ、思いついた時にブラリと旅に出ることと、SMに関しては目の色が変わるのが取得？　と自認しています。

貴女は、自分の欠点ばかりを書いていられるようですが、僕には信じられず、立派なM女としか思われません。そのM女を、白い馬ならぬポンコツ車（友人の）に乗った騎士たる僕が、スッ裸に剝き上げて手足を縛り、いろいろな責めを加え、剃毛、浣腸まで動員して、悶え喘がせる夢は、この世の何物にも勝るものです。

貴女が連れこまれる場所は、ご希望のような豪華な部屋の時もありましょうし、今にも崩れそうな荒れ部屋の場合もあるでしょう。だが、どこにしろ、貴女の肌に縄がくいこみ、悦虐の呻きが部屋に充満するだろうことは間違いのないところです。

貴女と一緒に旅行が出来たら、どんなに幸せなことでしょう。「浩子はいつでも、どこへでも、羞恥責めにしていただくために喜んで参ります」……貴女のこの言葉を、ぜひぜひ、実現させたいものと、居ても立ってもいられない気持です。ご返事下さい。

鈴木千鶴子さんへ

「女体浣腸論」

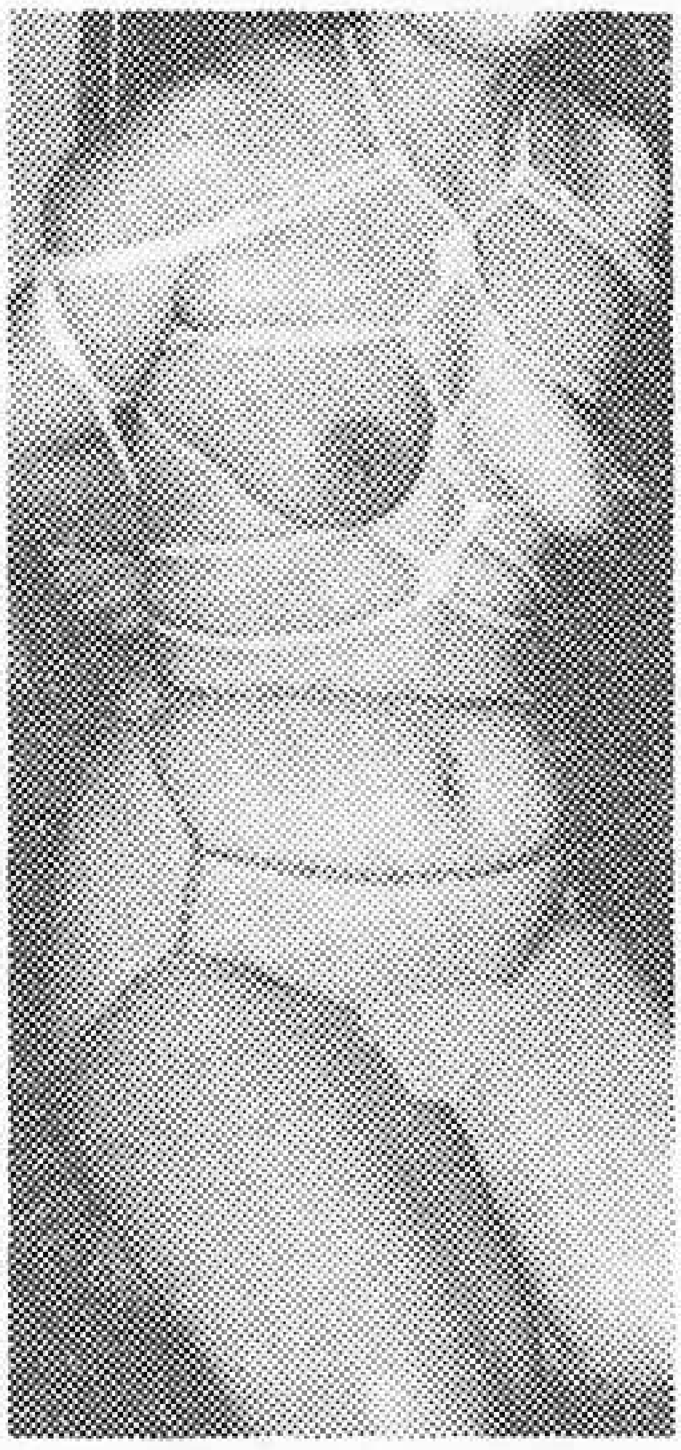
＜アナル・セックスについての一考察＞

平山連浣

小生の浣腸責めを受けたいといわれる鈴木千鶴子さん。貴女のバイタリティには感心します。そこで小生の事を少しでも理解して戴くために小生の浣腸論を知って下さい。（注ー小生の浣腸論とは終局的にはアヌス責めです）

最近アナルセックスという言葉が色んな週刊誌でとりあげられています。そこで一般的にアナルセックスといえば、すぐにホモ同志のセックスを想像されがちですがホモセックスとアナルセックスとは、飽く迄も明確に一線を画すべきと思います。かりにこの両者を混同してゆけば近き将来のアナルセックスブームに大きな汚点を残すことはいうまでもありません。

単純にセックスという言葉を考えると少なくとも男女の交合が正常な考え方であり、男同志或は女同志のそれは異常でありセックスの異端児なのです。したがってアナルセックスは当然男女の交合の一種であり、女性のアヌスを利用するのがアナルセックスの正しい方法なのです。では、このアナルセックスは、どういった時点から起こり得るか、小生の平面的考えとしては、浣腸責めが昇華したものではないかと思います。いわば浣腸責めの終点がアナルセックスだと信じています。



— わが妻の下着 —

紀川正信

この順当な発展過程は浣腸責めから始まりアヌス責めへとエスカレートしてアナルセックスになるわけですが浣腸からいきなりアナルセックスにゆくのもあれば、浣腸を抜きにしてアヌス責めから始まってアナルセックスに到達する場合もあります。では、アナルセックスのスタートでもある浣腸はどういった発想から生まれたのでしょうか。

小生の歩んできた過程を参考にしながら述べましょう。街を歩くミニスタイルの女性は小生にとってたまらない魅力を覚えます。なる程、彼女等の胸のふくらみにセクシーさを覚え、セーターを脱がせブラジャーをはぎとり、息づく乳房を静かに撫でながら呼鈴にも似た可愛い乳首を舌で弄びたいといった空想にふけるのですが、結局空想はそれどまりとなり、消化不良的な後味の悪さを残すだけとなります。従って小生の場合、やはり女性の後姿に女としての色っぽさと女を犯したいという果てしない欲望が、うずまくのは、かくせません。

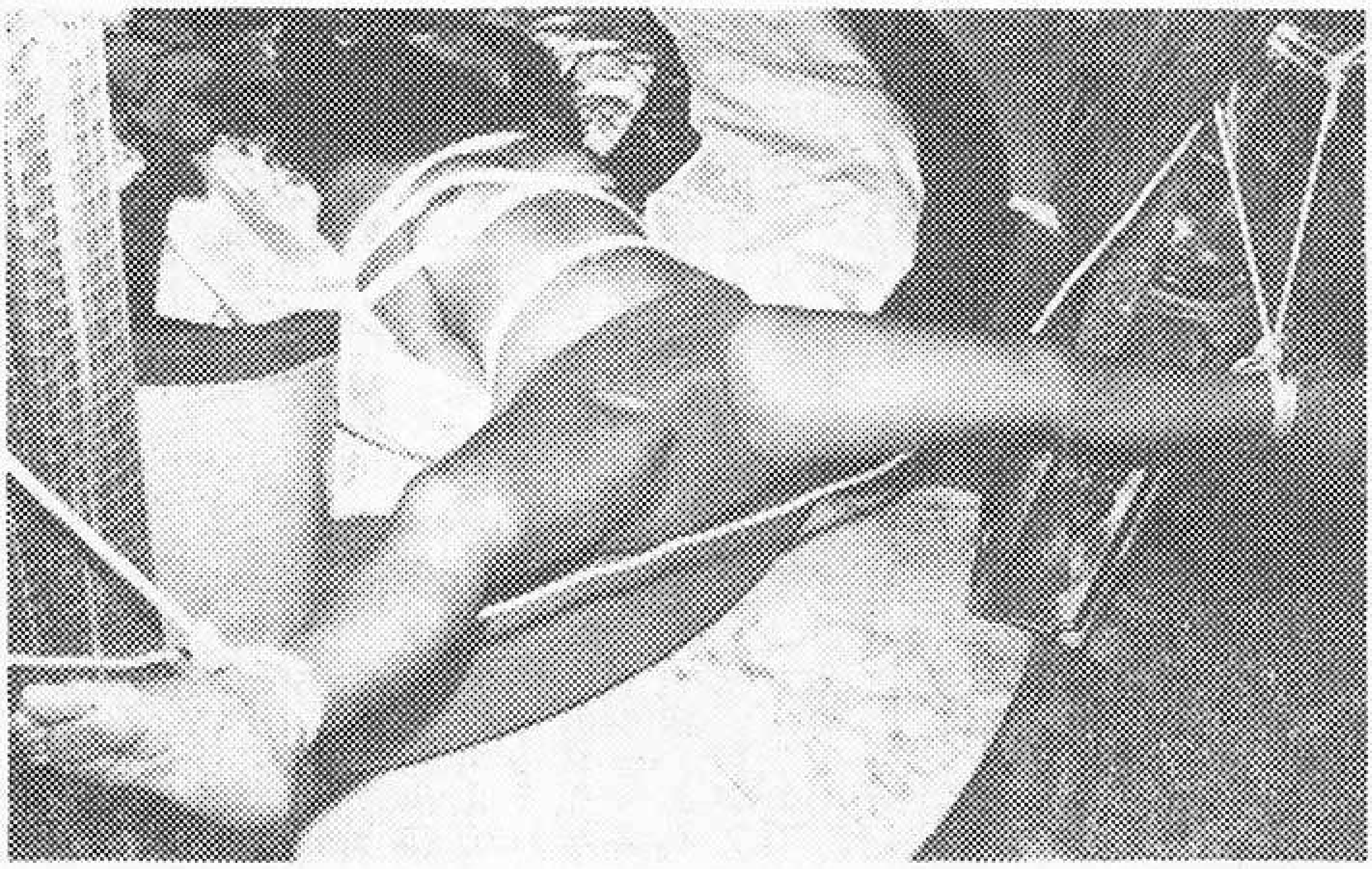
ミニスカートに包まれたふくよかな臀部。その中心に秘密の菊花がかすかに息づいています。この菊の蕾へ30ＣＣ入りの大人用いちじく浣腸を……と、果てしない空想が小生を楽しませてくれます。

街々を颯爽と歩く若い女性を浣腸責めにしたら、どんなに――と思うのは小生の独りよがりでしょうか。女の体は誠に不思議なもので当初、大部分の女は浣腸を嫌いますが徐々に馴らしてゆけば浣腸時の一種独特な苦しさは、やがて快感と変化してゆきます。当初あれほど浣腸を嫌がっていたのに、次には浣腸だけでは飽き足りなくなってアヌスを色々な方法でいたぶることを何の抵抗もなく受け入れるようになります。もうこうなれば完全なアヌス党であって、いわゆるアナルセックスに喜びを感ずる下地が出来上がったも同然ということが出来ます。

小生が鈴木千鶴子さんに願いたいことは、今の浣腸の女王ではなく時代を先取りしたアナルセックスの女王にまで成長してほしいことです。この遠大な目標達成まで気の合った小生と、あくまでマンツーマンで貴女をアナルセックスの女王として、脚光を浴びせたいものです。

愛妻弘美との夫婦プレイ

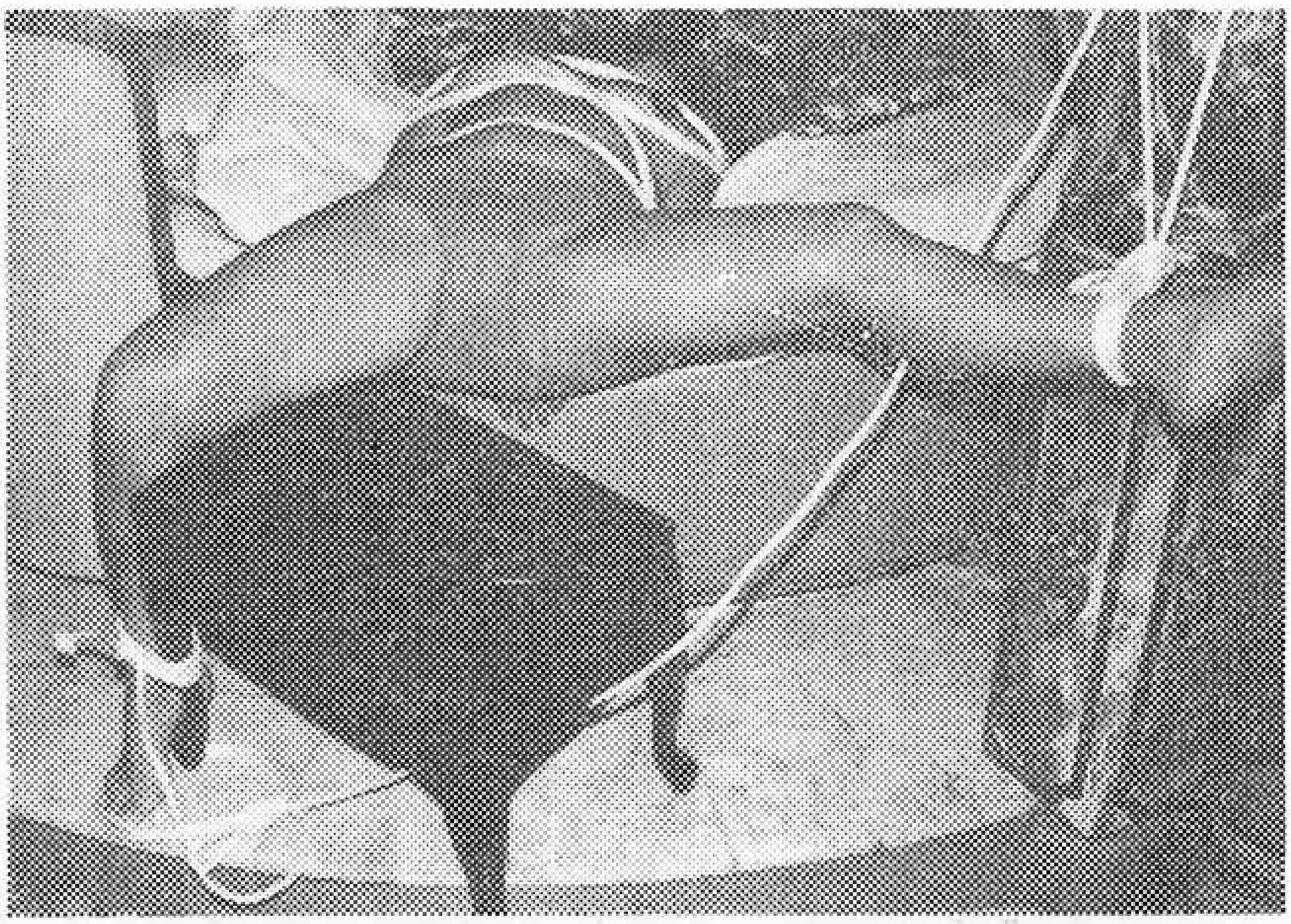
井上　浩



　毎月、奇クを楽しく愛読していますが特に読者の方々の投稿される「夫婦プレイ」の告白や写真には大変興味を以て拝見しております。渡部好美ご夫妻や三浦純子ご夫妻には、私達の先輩として敬意を払っております。三月号では私の拙い告白「夫婦プレイ雑感」と三枚の写真を載せていただいておりますが、その同じ三月号に、早坂信治氏が、夫婦プレイの経歴として『私たちの場合』という珠玉ともいうべき文章を載せておられ、私達夫婦にとって大いに参考になりました。

　しばらく其の後載りませんでしたのでどうしておられるのかと思っていましたところ、六月号では待望の早坂信治氏の文章と写真が出ていて、思わず雀躍りして喜びました。夫婦プレイの活路『家内のフォトを誌上に見て』という告白は、何と素晴しい文章でしょうか。なんだか私達のことを代弁して下さっているようで、とても、身近に感じました。たしかに、私も早坂信治氏のように、自分の妻の緊縛フォトを誌上に載せてもらって、新しい夫婦生活の活路を見出したような気持でした。

　拙い文章や写真を恥かしげもなく皆様の目の前にさらしたのもそれが大きな一つの理由でした。



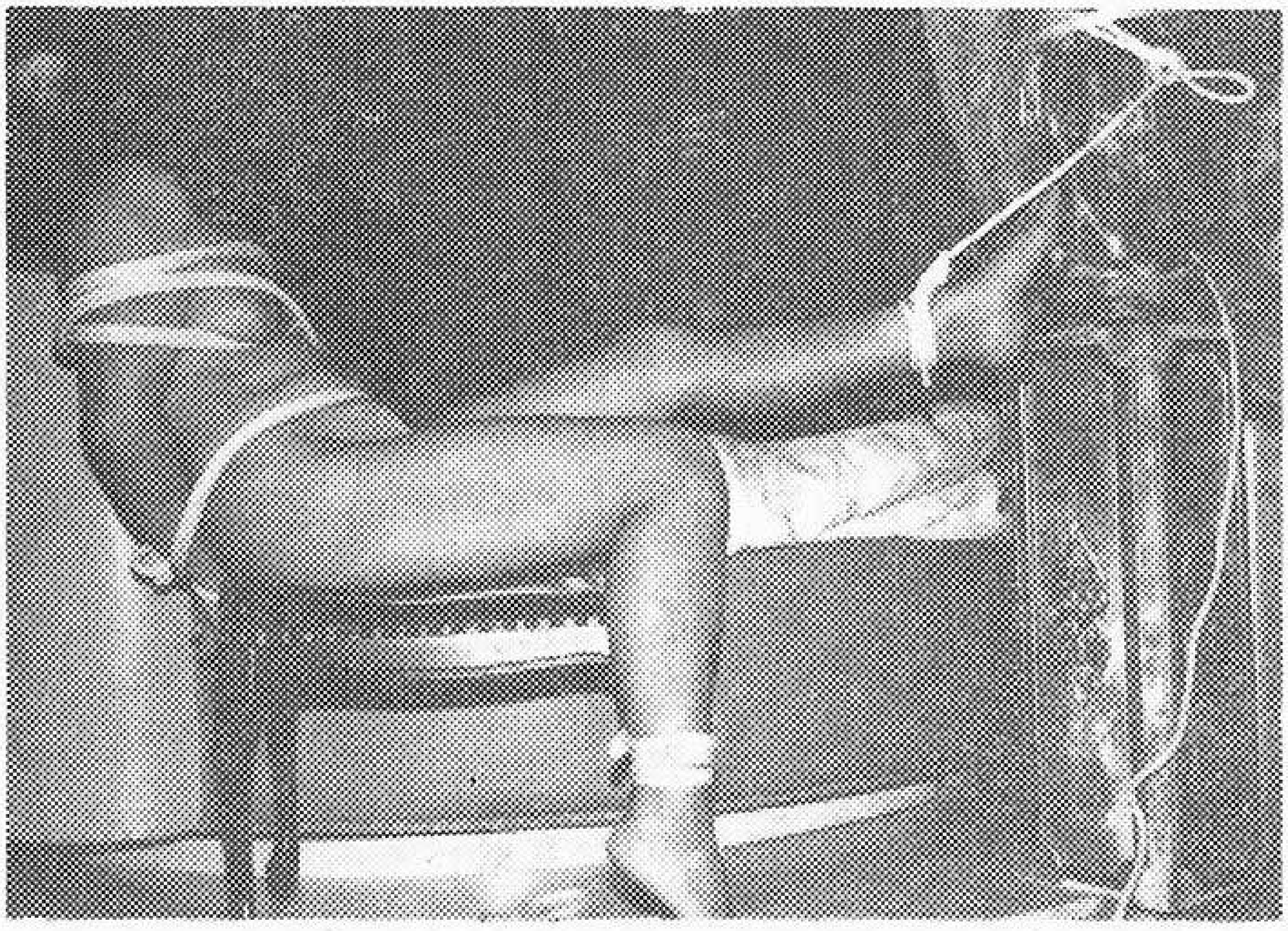
　早坂信治氏は文章も巧みだし、それに写真技術の巧みさ、それにもまして緊縛の仕方もお見事というより外ありません。それに引きかえ、私は文章、写真は勿論拙いし、縛りといっても心ばかり、はやってしまって、いつも実際には頭と手が空回りばかりしてしまって、思っている事の十分の一も出

被虐の妻

深夜のプレイ

比佐　まそえ

縛られてもてあそばれる艶夢に
目醒めてみれば、後ろ手のまま
かたえなる夫を肩で揺すれども
願いはむなし高いびきのみ
全裸のわが身に夜気の冷え、突
き上げ来たる尿意ぞ悲しき
せめてもに、足のみにてもと思
えども固き縄目に痛む足首
じりじりと、くの字描いて這い
進むイモ虫女は必死なりけり
肌刺すタイルの冷たさも、たど
り着きたる、うれしさに消ゆ
やれやれと思う気持をあざ笑う
太腿噛み縄ぞ恨めし
浴槽に、うしろ手預けて上体を
起こしてみれど、膝は開けず
未練気に、力を入れる太腿の、
深き縄目に我ながら驚く
さし迫る尿意の解消図れども、
思うにまかせぬじれったさ
緊縛の身をくねらせて息を詰め
出てよと願う、ただひたすらに
じわじわと、苦痛うすらぐ嬉し
さに、糸の流れを愛おしく見る
ホッとせし我が耳擽る笑い声
済んだ？　と顔出す夫ぞニクらし



来ない始末です。実際に歯がゆい限りです。それで、今度、編集部の方に一度お逢いして、愛妻弘美の身体を提供した上で、この私達のマンネリを打破していただこうかと思っております。

かねてから、自分の愛妻を他人の手によって思いきり責めてもらえたら――と考えておりましたが編集部の方々に妻を縛っていただいた結果によっては、同好の夫婦プレイのファンの方々或はSマニアの方々に弘美を提供したいと思案しております。

早坂信治氏のアイデアによるボディペインティングの刺青や天狗の面の小道具など、まことに見事で感心しました。

私にも、こうした積極性があったらと思うのですが、大いに学ばねばならないところだと反省しています。こうした夫婦プレイのアイデアを、どしどし誌上に載せて下さったら私達多くの夫婦プレイ信奉者を喜ばせることだろうと考えます。

六月号の二三五頁に載った写真なんか、縛り方といいポーズといい、全く見事です。それに天狗の鼻をくわえたところなど、意味深で夫婦プレイフォトの圧巻ともいうべきでしょう。早坂夫人は若くて美人、それに身体がいいです。こんな美しい奥さんを思いのままに責めることの出来る早坂氏は幸せな方です。

また、このように、熱愛を一身に受けられる夫人も幸福だと思いますが……。

夫婦生活の倦怠期を訴えられる方々は、是非、夫婦SMプレイを試みられませんか。必ずや新しい魅力を、そこに発見されると思います。

これからも、夫婦プレイの体験談は、どんどんと誌上に発表されるようお願いしたいもので、心からお待ちしています。

美しきSとMの世界

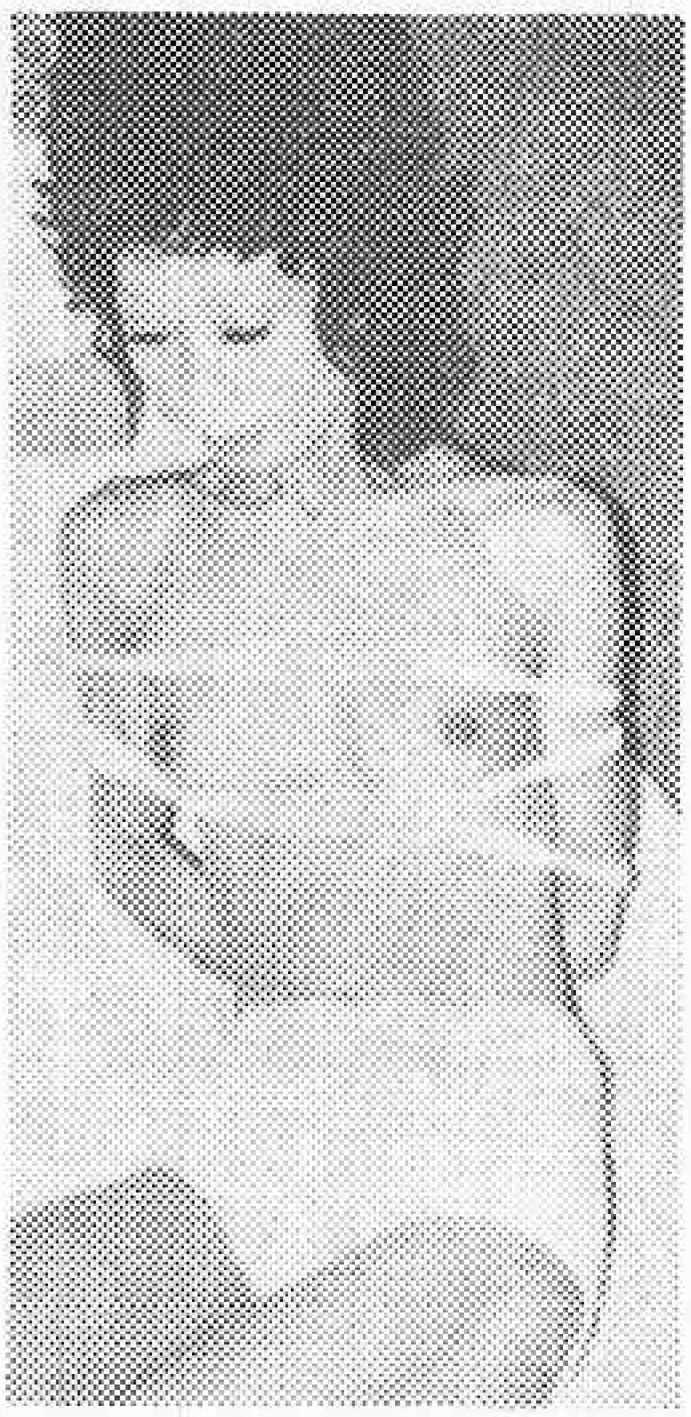
女性のM度とプレイ

山手　玲

縛られている女性は美しい。彼女の若さと美が、羞恥を加えて更に引き立つのだ。しなやかな足、桃色に染まった肢体。そのどれもが私を魅了する。

肌に食い込むロープ、散乱した下着類、不安と期待に潤む彼女の眸。憐憫を乞うように、わななく唇は、私の口づけを待っている。

私と彼女のプレイは、数年前の初秋頃が最初だった。「縛ってもいいわ。どういうふうにするの?」彼女はバレーのタイツに着替えた体を、私の腕に投げかけてきた。



私のかけた縄が、彼女の乳房を締め上げ、後手の手首を固定し終わった時の彼女の激しい息使いに私は意外さと共に躍り上がりたいほどの喜びを覚えたものだった。勿論以後のデートには縄が欠かせないものとなったが、私はどうしても彼女の緊縛写真を撮る気にならなかったのだ。余りにも従順で素直すぎたからかも知れない。

同封の写真は、最近に知り合ったR子のものである。R子のM気がどの程度か疑問だが、とにかく緊縛撮影交渉には、苦もなく応じてくれたのである。プレイも拒否はしないが、注文とか条件がつくのだ。「あまりキツクしないで」「浣腸は三十ccまでよ」「股間縛りはダメ」「アヌス責めはイヤ」……などというように……。

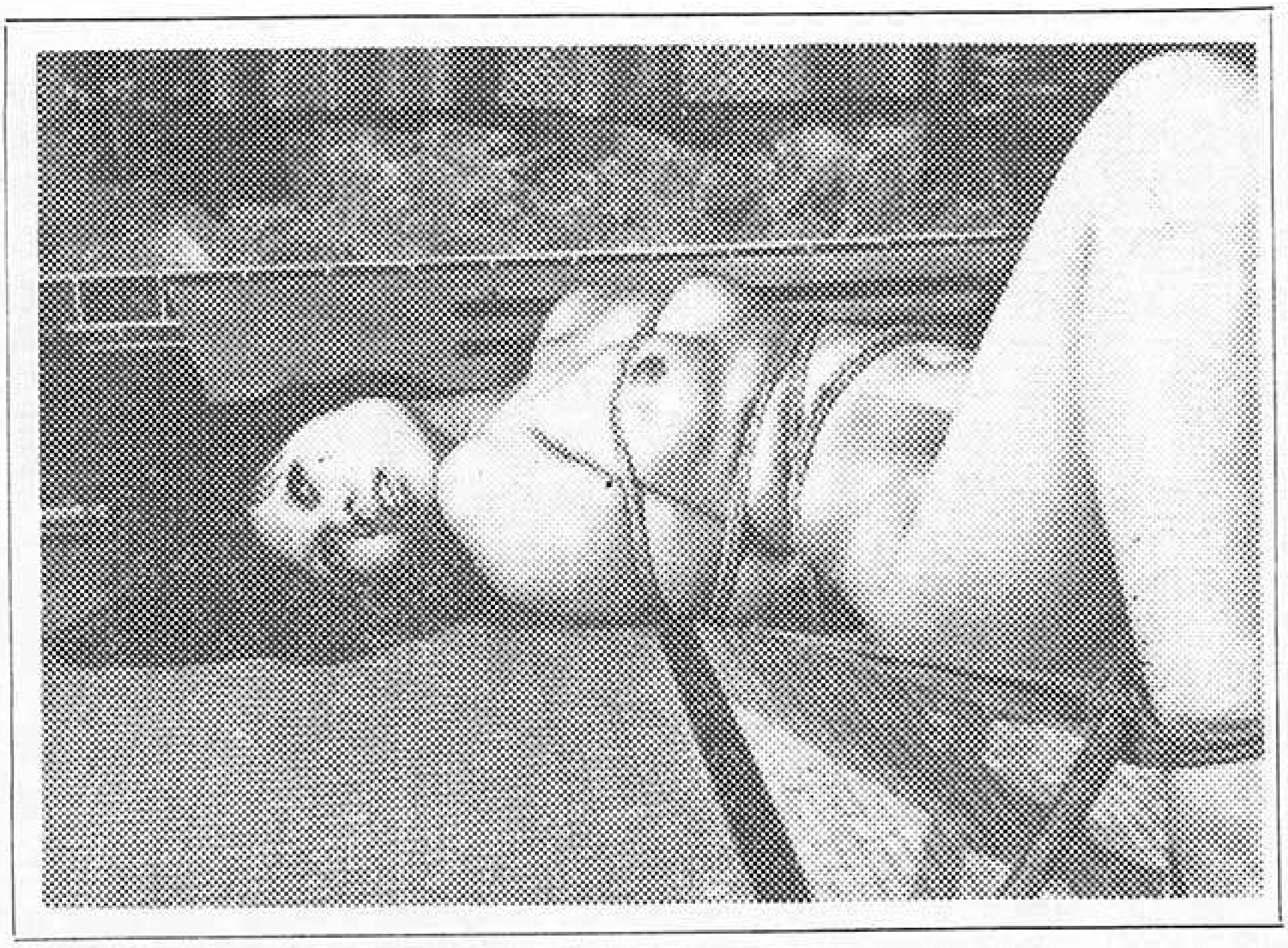
R子の文句の多いのはMではないセイかも知れない。だが、縛りを受けつけないというのではないのだから、M気皆無というわけでもないのだろう。

私のプレイ経験は、前記二人だけではないが、SMプレイの相手を得ることは容易ではなく、単なるガールハントなら楽だのに、と再三、思ったものである。金銭で話のつくプロ女性でも何か弱身を握られる思いがして切り出し難いし、法外な値を要求された苦い経験もあるのだ。やはりSMプレイは、愛する者同志の、程度をわきまえた遊びなのだろうか。

深田菊子嬢に憧れて

チャンスを待つの弁

国川栄一



二度にも亘って、わが憧れのM女深田菊子嬢とSMプレイを実行されたらしい乃美対造氏の発表文を拝見するにつけ、胸が騒いで仕方ありません。

心の中に燃えさかる業火ともいうべき執念に耐えかね、もしやの想いをこめて書き送った「菊子羞恥責め仕様書」なる駄文。採用はされたものの、数カ月を経る今日に至るもいまだにお呼びでない空しさは淋しい限りです。しかし私は、希望を捨てたわけではなく、いつかはチャンス到来の日がくるだろうと思っています。

もしも、わが悲願が実を結ぶ時来たらば……と想い始めると、次から次へと湧き出てくる妄想に、眠れない夜を過ごすことも、珍しくありませんが、いつも最後に思うことは、SMを通して自分を確立せしめ、美しい菊子嬢を媒体として、いまだに見聞していない女性美の発見に全力を注ぎたい、ということです。

プレイ経験豊かな菊子嬢に対して、私如きの責めがどれほど奏効するものかは疑問ですが、苛酷な言語責め、全裸縛りの身体検査などに依って、私なりに、心理面の剔出が出来るのではないかと希望をつないでいるわけです。

プレイである以上は、Sの立場に固執する必要はないと思いますので、菊子嬢を縛るのは当然ながら、その神酒を奉戴したり、彼女にオシメをあてて、大小共に済まさせた後に、私が犬となってその後始末をするという計画も持っております。

深田菊子さん有難とう

三輪久緒

僕の彼女はヨシエといいますが、奇クのモデル嬢、深田菊子さんに少し似ています。もっとも、目のへんだけで、深田さんほど美人ではないし、体もずっと見劣りしますが、僕にとってはたった一人の彼女です。

十日に一度ぐらいデートしますが、一度、縛らせてくれといって泣き出されたことがあって弱ったのでしたが、ふと思いついて、先日のデートの時に深田さんの緊縛フォトを見せてやりました。

こんなフォトを見せると、別れるといい出されはしないかと心配でしたが、あくまで嫌がるようなら、結婚してもつまらないので決心して、見せたのでした。

ヨシエはびっくりしたらしいのですが、僕が「キミが縛らせてくれないから、キミとそっくりの美人の縛られている写真で我慢することにしたんだ」といってやりますと、改めて、しみじみと眺めていましたが、「キレイな人ネ」と一言だけいって僕に返すと、黙って帰り支度を始めたのです。

僕は『しまった』と思いましたが決心していたので我慢して引き止めませんでした。ところが一旦部屋を出たヨシエが、しばらくして又、帰ってきたのでした。僕はとび上がる思いでした。深田さんにお礼をいいます。有難とう。

浣腸責め地獄の妊産婦	大手札四枚一組	六〇〇円	増田みゆき	略号〈ほな〉
浣腸責めの甘い恐怖	大手札三枚一組	五〇〇円	中河　恵子	略号〈とか〉
浣腸液注入直後の状況	大手札三枚一組	五〇〇円	中河　恵子	略号〈とま〉
強制浣腸の各美姿態	大手札三枚一組	五〇〇円	中河　恵子	略号〈とみ〉
浣腸責めの美態開陳	大手札三枚一組	五〇〇円	中河　恵子	略号〈とめ〉
浣腸を待つポーズ	大手札三枚一組	五〇〇円	中河　恵子	略号〈とも〉
エネマと縛りの恐怖	大手札三枚一組	五〇〇円	長井葉津子	略号〈よて〉
エネマ責めの恐怖	大手札三枚一組	五〇〇円	長井葉津子	略号〈よる〉
浣腸器を弄び愛撫する女	大手札三枚一組	五〇〇円	長井葉津子	略号〈よろ〉
イルリガートルの浣腸責め	大手札三枚一組	五〇〇円	長井葉津子	略号〈よた〉
浣腸にむせび泣く女	大手札四枚一組	六〇〇円	大島　照代	略号〈つゆ〉
身動き出来る浣腸地獄	大手札四枚一組	六〇〇円	大島　照代	略号〈つえ〉
浣腸とオシメ装着	大手札四枚一組	六〇〇円	大塚　啓子	略号〈ひそ〉
強制浣腸責めの序曲	大手札三枚一組	五〇〇円	長井葉津子	略号〈よか〉
襲いくる浣腸器嘴管の先	大手札三枚一組	五〇〇円	長井葉津子	略号〈より〉
鼻孔の奥を探る魔手	大手札三枚一組	五〇〇円	中河　恵子	略号〈はむ〉
開孔器にてひらく鼻孔	大手札三枚一組	五〇〇円	中河　恵子	略号〈はら〉
なぶられる拘束裸身の鼻	大手札三枚一組	五〇〇円	中河　恵子	略号〈はれ〉
仰臥した緊縛女体の鼻なぶり	大手札三枚一組	五〇〇円	中河　恵子	略号〈はに〉
美女の鼻をもてあそぶ	大手札三枚一組	五〇〇円	左近麻里子	略号〈ちる〉
美女の鼻孔を観賞する	大手札三枚一組	五〇〇円	左近麻里子	略号〈ちれ〉
開孔器で検査する鼻孔	大手札三枚一組	五〇〇円	左近麻里子	略号〈ちき〉
鼻孔に煙草挿し込み責め	大手札三枚一組	五〇〇円	美木乃々子	略号〈ぬと〉
可愛いい鼻責めのアップ	大手札五枚一組	七〇〇円	美木乃々子	略号〈ぬは〉
強烈縛りで顔面翻弄	大手札八枚一組	一二〇〇円	美木乃々子	略号〈ぬほ〉
可憐乙女の鼻をいたぶる	大手札四枚一組	六〇〇円	一宮百合子	略号〈るえ〉
鼻責めと鼻孔のアップ	大手札三枚一組	五〇〇円	中河　恵子	略号〈ねけ〉
鼻責めの陶酔境	大手札三枚一組	五〇〇円	大塚　啓子	略号〈なは〉
淫虐鼻なぶりの形相	大手札三枚一組	五〇〇円	大塚　啓子	略号〈ない〉
鼻の穴を責める	大手札三枚一組	五〇〇円	大塚　啓子	略号〈なく〉
夫婦連縛にて鼻責め	大手札十枚一組	一五〇〇円	増田みゆき	略号〈らか〉
鼻責めに悶える女	大手札七枚一組	九〇〇円	木村　洋子	略号〈むる〉
顔面を凌辱される女	大手札四枚一組	六〇〇円	木村　洋子	略号〈むよ〉
鼻責めと緊縛	大手札五枚一組	七〇〇円	大塚　啓子	略号〈うい〉
鼻責めによる悦楽	大手札二枚一組	四〇〇円	東浦・大塚	略号〈きな〉
美しき鼻をいたぶる	大手札三枚一組	五〇〇円	遠藤百合子	略号〈ゆは〉
乳房いじめの責め	大手札二枚一組	四〇〇円	大塚　啓子	略号〈とお〉
豊かな乳房を責める	大手札三枚一組	五〇〇円	東浦ひかる	略号〈とき〉
逆エビ吊り責め	大手札六枚一組	一〇〇〇円	梨花悠紀子	略号〈りつ1〉
逆胴吊り責め	大手札六枚一組	一〇〇〇円	梨花悠紀子	略号〈りつ2〉
大の字逆さ吊り	大手札二枚一組	四〇〇円	増田みゆき	略号〈むの〉
豊満乳房しばり責め	大手札三枚一組	五〇〇円	長野　良子	略号〈うは〉
吊り打ち責め	大手札三枚一組	五〇〇円	関谷富佐子	略号〈やり〉
腰元の吊り責め	大手札二枚一組	四〇〇円	村井知可子	略号〈こり〉
乳房強調膨隆責め	大手札三枚一組	五〇〇円	佐々木真弓	略号〈こわ〉
エネマシリンジ挿入責め	大手札三枚一組	五〇〇円	大塚　啓子	略号〈えね〉
ワシづかみ責めの乳房	大手札三枚一組	五〇〇円	大塚・東浦	略号〈えう〉
強烈乳房責め五態	大手札五枚一組	七〇〇円	山原　清子	略号〈てら〉

バイブ責めに呻めく女
大手札三枚一組　五〇〇円
松本　たえ　略号〈きわ〉

両足挙げ柱宙縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
松本　たえ　略号〈きろ〉

強烈黒縄縛り悦虐地獄
大手札三枚一組　五〇〇円
松本　たえ　略号〈きる〉

羞恥責めに陶酔する女
大手札三枚一組　五〇〇円
松本　たえ　略号〈きは〉

猿轡と縄に涕泣する瞬間
大手札三枚一組　五〇〇円
松本　たえ　略号〈きへ〉

柱宙縛りと逆さ縛り責め
大手札三枚一組　五〇〇円
松本　たえ　略号〈きた〉

足を吊られた悦虐に泣く
大手札三枚一組　五〇〇円
松本　たえ　略号〈きほ〉

浣腸溶液を圧入される
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号〈みは〉

全裸で受ける三種の浣腸
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号〈みふ〉

イルリの嘴管挿入浣腸
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号〈みほ〉

突き刺さる浣腸器の恐怖
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号〈みち〉

自ら施す浣腸の悦楽
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号〈みそ〉

体内に奔流する浣腸溶液
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号〈みや〉

浣腸プレイを楽しむ美女
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号〈みぬ〉

オシメから生ゴムカバーへ
大手札12枚一組　二〇〇〇円
深田　菊子　略号〈みめ〉

おムツに排便する乙女
大手札12枚一組　二〇〇〇円
深田　菊子　略号〈みし〉

生ゴム製のオムツカバー着用
大手札10枚一組　一八〇〇円
深田　菊子　略号〈みせ〉

メロン腹白縄縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号〈えす〉

正面柱縛りの蛙腹
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号〈えき〉

開脚縛り妊娠腹
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号〈えけ〉

蛙腹を晒す開股責め
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号〈えこ〉

太鼓腹強調片足吊り
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号〈えさ〉

妊孕緊縛美の極致
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号〈えあ〉

美しき妊孕腹緊縛
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号〈えか〉

八カ月の妊婦裸身開陳
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号〈えせ〉

柱縛りの九カ月腹妊婦
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号〈さて〉

引き回された妊婦腹
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号〈さり〉

膨隆妊婦腹の股間縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号〈され〉

鏡に映る太鼓腹縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号〈さえ〉

蛙腹誇張の緊縛美
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号〈さう〉

足挙げ縛り蛙腹妊婦
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号〈さた〉

卓の脚に縛った蛙腹妊婦
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号〈さつ〉

九カ月妊娠腹の緊縛美
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号〈さゆ〉

豆絞りの猿ぐつわ哀情
大手札三枚一組　五〇〇円
前田　真知子　略号〈ぬも〉

逆エビ地獄の美女
大手札三枚一組　五〇〇円
前田　真知子　略号〈ぬや〉

麻縄亀甲菱縄縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
前田　真知子　略号〈ぬむ〉

後手高手小手縛り三態
大手札三枚一組　五〇〇円
鈴木　千鶴子　略号〈ぬみ〉

卓上の緊縛悦虐姿態
大手札三枚一組　五〇〇円
鈴木　千鶴子　略号〈ぬろ〉

全裸浴室での股間縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
鈴木　千鶴子　略号〈ぬひ〉

悶える踊子の欲情処理
大手札三枚一組　五〇〇円
鈴木　千鶴子　略号〈ぬま〉

美しき全裸の縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
鈴木　千鶴子　略号〈ぬふ〉

柱縛りと脚挙げ縛り
カラー三枚一組　一〇〇〇円
前田　真知子　略号〈すき〉

麻縄高手小手首縄縛り
カラー三枚一組　一〇〇〇円
前田　真知子　略号〈すめ〉

荒縄強烈エビ縛り
カラー三枚一組　一〇〇〇円
前田　真知子　略号〈すけ〉

荒縄悦虐羞恥責め
カラー三枚一組　一〇〇〇円
前田　真知子　略号〈すら〉

悶える強烈海老責め
カラー三枚一組　一〇〇〇円
前田　真知子　略号〈すへ〉

柔肌をくびる厳しき縄目
カラー三枚一組　一〇〇〇円
前田　真知子　略号〈すれ〉

緊縛の全裸女体をいびる
カラー三枚一組　一〇〇〇円
前田　真知子　略号〈すろ〉

両足首括り逆さ吊り
大手札五枚一組　八〇〇円
梨花悠紀子　略号〈さか〉

手足逆さ宙吊り
大手札五枚一組　八〇〇円
梨花悠紀子　略号〈さと〉

逆さ吊りの女体を折檻
大手札五枚一組　八〇〇円
梨花悠紀子　略号〈させ〉

メンスバンド着用替ゴム見せ
大手札五枚一組　七〇〇円
東浦ひかる　略号〈へみ〉

股に喰い込む黒フンドシ
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈とし〉

股を開いた黒フンドシ姿
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈とひ〉

開股逆さ吊り姿態
大手札三枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号〈ちて〉

褌美・表と裏の二態
大手札二枚一組　四〇〇円
左近麻里子　略号〈ちけ〉

強烈責め被虐の果て
大手札五枚一組　八〇〇円
梨花悠紀子　略号〈りお〉

踊り子の美しき緊縛
大手札三枚一組　五〇〇円
絹川文代　略号〈りこ〉

股間縛りの法悦境
大手札三枚一組　五〇〇円
絹川文代　略号〈ぬこ〉

相撲褌着用の艶姿
大手札12枚一組　一八〇〇円
美木乃々子　略号〈ぬわ〉

六尺褌着用の艶姿
大手札七枚一組　一〇〇〇円
美木乃々子　略号〈ぬお〉

パリスSSバンド着用
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈おこ〉

サカエメンスバンド着用
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈おえ〉

サカエ軽便型バンド着用
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈おた〉

パリスメンスバンド前開き
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈おい〉

携帯用白色メンスバンド着用
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈おか〉

パリスバンド着用縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈おは〉

パピアメンスバンド着用
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈おし〉

相撲褌を締めた女
大手札五枚一組　七〇〇円
東浦ひかる　略号〈そい〉

メンスバンド着用開股ポーズ
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈つん〉

黒ゴム衣後手縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
木村洋子　略号〈なほ〉

ゴム衣緊縛悶悦姿態
大手札五枚一組　七〇〇円
木村洋子　略号〈なへ〉

ゴム衣とゴムの猿ぐつわ
大手札三枚一組　五〇〇円
木村洋子　略号〈なと〉

甘美なる椅子プレイ
大手札四枚一組　六〇〇円
中河恵子　略号〈なあ〉

開股拷問椅子の正面責め
大手札四枚一組　六〇〇円
中河恵子　略号〈なた〉

オムツ着用の股間縛り
大手札四枚一組　六〇〇円
東浦ひかる　略号〈むく〉

オムツ着用フェチフォト
大手札七枚一組　一〇〇〇円
大塚啓子　略号〈むね〉

オシメをつける二人プレイ
大手札六枚一組　一〇〇〇円
山原・東浦　略号〈むし〉

ゴムのオムツカバー強制着用
大手札六枚一組　一〇〇〇円
山原・東浦　略号〈むに〉

生ゴムの猿ぐつわ責め
大手札四枚一組　五〇〇円
木村洋子　略号〈むこ〉

オシメ着用と女学生
大手札七枚一組　一〇〇〇円
大塚啓子　略号〈うえ〉

六尺フンドシの女性像
大手札四枚一組　六〇〇円
関谷富佐子　略号〈くろ〉

黒フンドシを着用した女
大手札四枚一組　六〇〇円
大塚啓子　略号〈くふ〉

黒フンドシの女（背面）
大手札三枚一組　五〇〇円
遠藤百合子　略号〈くう〉

黒フンドシの女（正面）
大手札三枚一組　五〇〇円
遠藤百合子　略号〈くま〉

黒フンドシを誇る姿
大手札三枚一組　五〇〇円
遠藤百合子　略号〈くり〉

黒フンドシ背面刺青模様
大手札三枚一組　五〇〇円
山原清子　略号〈くこ〉

黒フンドシ入墨姿
大手札三枚一組　五〇〇円
山原清子　略号〈くの〉

黒ふんどし媚態の魅力
大手札五枚一組　七〇〇円
山原清子　略号〈くな〉

白晒六尺フンドシの姿態
大手札五枚一組　七〇〇円
刑部典子　略号〈けす〉

黒六尺フンドシを締めた女
大手札五枚一組　七〇〇円
刑部典子　略号〈けせ〉

フンドシ姿の羞らい
大手札三枚一組　五〇〇円
栗本ミチ　略号〈ふへ〉

フンドシ姿の女の魅力
大手札三枚一組　五〇〇円
栗本ミチ　略号〈ふの〉

六尺褌の羞じらい
大手札五枚一組　七〇〇円
横尾峯子　略号〈ふけ〉

双臂に喰い込む褌
大手札五枚一組　七〇〇円
横尾峯子　略号〈ふく〉

褌美に羞じらう女
大手札六枚一組　八〇〇円
玉田美佐子　略号〈こん〉

血紅女体切腹絶命ポーズ
大手札四枚一組　六〇〇円
梨花悠紀子　略号〈せん〉

女体切腹シリーズ
大手札12枚一組　一八〇〇円
大塚啓子　略号〈せい12〉

血紅切腹祭壇に果てる女体
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚啓子　略号〈せぬ〉

首桶に落ちる女の首
大手札三枚一組　五〇〇円
水野加代子　略号〈せへ〉

愛妻の切腹を介添えする
大手札三枚一組　五〇〇円
水野加代子　略号〈せほ〉

切腹する女体を介錯する
大手札三枚一組　五〇〇円
水野加代子　略号〈せは〉

血紅使用介添え切腹
大手札五枚一組　八〇〇円
大塚・東浦　略号〈きつ〉

介添え切腹の女
大手札四枚一組　六〇〇円
甘木春子　略号〈あか〉

自刃した血まみれ屍体
大手札10枚一組　一五〇〇円
山原清子　略号〈えし〉

自らの腹を切り裂く女
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚啓子　略号〈やい〉

自ら柔肌を切り裂く場面
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚啓子　略号〈やえ〉

自らの下腹に突き刺す刃
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚啓子　略号〈やお〉

血紅女体切腹苦悶悦楽表情
大手札五枚一組　七〇〇円
大塚啓子　略号〈くえ〉

哀婉美女の血紅切腹
大手札五枚一組　七〇〇円
大塚啓子　略号〈るな〉

絞首刑に果てる女体
大手札二枚一組　四〇〇円
新宮夫人　略号〈るく〉

引回しと晒の処刑
大手札二枚一組　四〇〇円
新宮夫人　略号〈るに〉

血紅使用血まみれ切腹
大手札五枚一組　七〇〇円
大塚啓子　略号〈わい〉

殿中の自決女体切腹
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚啓子　略号〈わこ〉

切腹美態から絶命ポーズへ
大手札五枚一組　七〇〇円
大塚啓子　略号〈わは〉

女体自刃の美態
大手札三枚一組　五〇〇円
細川アヤ子　略号〈ねに〉

女体切腹媚態
大手札二枚一組　四〇〇円
細川アヤ子　略号〈ねは〉

肉体美少女全裸切腹
大手札五枚一組　七〇〇円
長野良子　略号〈なせ〉

褌裸女血斗凄惨場面
大手札五枚一組　七〇〇円
絹川・大塚　略号〈らは〉

和洋争斗場面展開
大手札六枚一組　八〇〇円
田中・愛川　略号〈らり〉

血紅使用斬られる美女
大手札七枚一組　一〇〇〇円
絹川文代　略号〈らふ〉

鎌腹を切られる女
大手札二枚一組　四〇〇円
愛川・田中　略号〈らく〉

咽喉笛を刺される女
大手札二枚一組　四〇〇円
愛川・田中　略号〈らみ〉

斬首の瞬間
大手札三枚一組　五〇〇円
新宮夫人　略号〈のき〉

晒台の女の生首
大手札三枚一組　五〇〇円
新宮夫人　略号〈のく〉

全裸正面切腹姿態
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚啓子　略号〈のみ〉

切腹に悶える悦虐裸身
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚啓子　略号〈のそ〉

切腹した裸女の屍体
大手札12枚一組　一二〇〇円
大塚啓子　略号〈のい〉

美しき裸女の屍体
大手札12枚一組　一二〇〇円
大塚啓子　略号〈のり〉

屠腹される女体
大手札12枚一組　一二〇〇円
大塚啓子　略号〈のる〉

立腹切腹に悶える女体
大手札10枚一組　一八〇〇円
大塚啓子　略号〈のさ〉

切腹に苦悶する裸女
大手札10枚一組　一八〇〇円
大塚啓子　略号〈のむ〉

絞首された女体
大手札六枚一組　一二〇〇円
大塚啓子　略号〈のひ〉

斬首処刑場面
大手札三枚一組　五〇〇円
新宮夫人　略号〈くし〉

絞首刑にされる女
大手札三枚一組　五〇〇円
新宮夫人　略号〈こけ〉

血まみれ血斗場面
大手札12枚一組　一二〇〇円
山原清子外　略号〈えみ〉

ゴムフェチの美体
大手札四枚一組　六〇〇円
梨花悠紀子　略号〈こま〉

ゴム包みの束縛女体
大手札四枚一組　六〇〇円
東浦ひかる　略号〈こは〉

メンスバンド只今着用
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈もか〉

白褌刺青女体脇差切腹
大手札10枚一組　一八〇〇円
山原清子　略号〈ひに〉

白褌刺青女体短刀切腹
大手札10枚一組　一八〇〇円
山原清子　略号〈ひぬ〉

ゴム衣着用緊縛
大手札三枚一組　五〇〇円
水本茂美　略号〈みす〉

メンスバンドを脱ぐ女
大手札三枚一組　五〇〇円
遠藤百合子　略号〈ゆお〉

月経帯を着けた緊縛
大手札三枚一組　五〇〇円
遠藤百合子　略号〈ゆす〉

〔秘蔵版ＳＭ資料一覧表〕

従前一時的に分譲中止しておりましたＳＭ資料の中で特に好評だった左記の写真は特に御希望の方に限り焼増し致します故、前金にて天星社宛お申込み願います。

レインコートの拘束
大手札四枚一組　六〇〇円
大塚　啓子　略号〈いろ〉

猪吊りの美女
大手札三枚一組　五〇〇円
梨花悠紀子　略号〈いの〉

色褌の開股縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
長野　良子　略号〈いふ〉

椅子責めの果て
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚　啓子　略号〈いす〉

マニヤの全裸緊縛フォト
大手札三枚一組　五〇〇円
栗本　ミチ　略号〈いな〉

日本髪全裸強烈縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
山原　清子　略号〈いら〉

洋髪全裸強烈縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
山原　清子　略号〈いこ〉

日本髪全裸股間縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
山原　清子　略号〈いさ〉

可憐島田髷全裸縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
山原　清子　略号〈いみ〉

メンスバンド責め
大手札五枚一組　七〇〇円
東浦ひかる　略号〈はん〉

ハリツケ
大手札三枚一組　五〇〇円
新宮　夫人　略号〈はみ〉

鼻責めのアップ
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚　啓子　略号〈はす〉

メンスバンド足挙げ
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈はそ〉

鼻責め万華鏡
大手札八枚一組　四〇〇円
鈴木　晃子　略号〈はた〉

鼻いじめ三態
大手札三枚一組　五〇〇円
山原　清子　略号〈はね〉

浴後の剝玉子縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
中河　恵子　略号〈はゆ〉

投げだす緊縛裸身
大手札四枚一組　六〇〇円
中河　恵子　略号〈はよ〉

待望の脚挙げ姿態
大手札四枚一組　六〇〇円
中河　恵子　略号〈はて〉

二ツ折女体エビ責め
大手札三枚一組　五〇〇円
中河　恵子　略号〈はお〉

開股縛りにて喜悦する女
大手札四枚一組　六〇〇円
中河　恵子　略号〈はわ〉

全裸の女体立ち縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
中河　恵子　略号〈はふ〉

診察を受ける妊婦
大手札四枚一組　六〇〇円
田中美佐子　略号〈にし〉

臨月腹開陣（座位）
大手札四枚一組　六〇〇円
田中美佐子　略号〈にり〉

臨月腹開陣（立位）
大手札三枚一組　五〇〇円
田中美佐子　略号〈にす〉

突き出た臨月腹
大手札三枚一組　五〇〇円
田中美佐子　略号〈にい〉

臨月の裸身像（座位）
大手札三枚一組　五〇〇円
田中美佐子　略号〈にぬ〉

柱縛りの妊産婦
大手札二枚一組　四〇〇円
田中美佐子　略号〈にや〉

臨月の妊婦緊縛
大手札三枚一組　五〇〇円
田中美佐子　略号〈にち〉

臨月の妊婦裸身像（立位）
大手札三枚一組　五〇〇円
田中美佐子　略号〈にお〉

縛られた妊婦の裸身
大手札二枚一組　四〇〇円
田中美佐子　略号〈にる〉

九カ月の妊娠腹
大手札三枚一組　五〇〇円
安原さゆり　略号〈にん〉

八カ月の妊娠腹
大手札三枚一組　五〇〇円
安原さゆり　略号〈にへ〉

乳房強調妊婦菱縄縛り
大手札四枚一組　六〇〇円
増田みゆき　略号〈にめ〉

双胎八カ月腹大写し
大手札四枚一組　六〇〇円
増田みゆき　略号〈ほり〉

双胎妊娠線の出た蛙腹
大手札四枚一組　六〇〇円
増田みゆき　異号〈ほぬ〉

後手縛りの双胎妊孕婦
大手札四枚一組　六〇〇円
増田みゆき　略号〈ほか〉

八カ月の双胎の猿轡と緊縛
大手札四枚一組　六〇〇円
増田みゆき　略号〈ほよ〉

股間縛りに喘ぐ妊婦
大手札四枚一組　六〇〇円
増田みゆき　略号〈ほつ〉

初産双胎妊婦開股縛り
大手札四枚一組　六〇〇円
増田みゆき　略号〈ほえ〉

双胎妊孕腹の凄愴切腹
大手札四枚一組　六〇〇円
増田みゆき　略号〈ほら〉

八カ月の双胎革具責め
大手札四枚一組　六〇〇円
増田みゆき　略号〈へね〉

九カ月の双胎首枷責め
大手札四枚一組　六〇〇円
増田みゆき　略号〈への〉

逆さ吊りの正面と背面
大手札二枚一組　四〇〇円
増田みゆき　略号〈つる〉

手と足の宙吊り
大手札三枚一組　五〇〇円
梨花悠紀子　略号〈つた〉

弓吊り責め
大手札二枚一組　四〇〇円
梨花悠紀子　略号〈つき〉

〔極最新版〕新人M女性羞恥責め写真集

V組百態　大手札印画紙（9×13糎）極鮮明焼付写真

各組　一組一枚（送料共）

五組五枚　八〇〇円
十組十枚　一五〇〇円
二十組二十枚　二八〇〇円
五十組五十枚　五〇〇〇円
百組百枚　八〇〇〇円

（郵便番号545-91）天星社
大阪市阿倍野局私書箱14号

複写による不鮮明な緊縛写真が出回っているようですが、これは全部特殊マニアの蒐集用として一粒選りのネガから直接印画紙に焼付した極めて鮮明な逸品揃いばかりです。きっとファンのアルバムを最高に充実させると信じます。大阪市阿倍野局私書箱14号天星社へ前金にてお申込み願います。

☆

1 足挙げ羞恥責め（深田　菊子）
2 トイレ排泄強要（三浦　純子）
3 完全二つ折締め（三浦　純子）
4 逆エビ凄絶苦悶（前田真知子）
5 超強烈エビ責め（三浦　純子）
6 荒縄柔肌いじめ（前田真知子）
7 全裸縛玄関晒し（三浦　純子）
8 ネどうでもして（高村　浩子）
9 蝋燭責後手縛り（富田由美子）
10 羞恥の源を抉る（江口　淑子）
11 妊婦縛りの圧巻（富田由美子）
12 菱縄縛正面開放（江口　淑子）
13 正面の妊婦縛り（富田由美子）
14 麗しのマドンナ（荒尾　慶子）
15 両手挙前面晒し（福井　桃子）
16 強烈浣腸ポーズ（高村　浩子）
17 後手吊上げ猿轡（高村　浩子）
18 胡坐縛りの羞恥（江口　淑子）
19 ゴム人形の恐怖（江口　淑子）
20 菱縄股間縛前面（深田　菊子）
21 柱縛り開股強要（福井　桃子）
22 鮮烈股間縛の縄（深田　菊子）
23 本格的な麻縄責（前田真知子）
24 強烈麻縄の緊縛（前田真知子）
25 正面股間縛晒し（高村　浩子）
26 両足吊りの苦悶（江口　淑子）
27 店での全裸縛り（福井　桃子）
28 豊満な女体開陳（福井　桃子）
29 恍惚バイブ責め（江口　淑子）
30 マダム責の哀愁（江口　淑子）
31 開股強制棒責め（前田真知子）
32 大の字片足挙げ（高村　浩子）
33 雁字搦目の女体（江口　淑子）
34 足挙げ責の羞恥（江口　淑子）
35 淫虐蝋燭の挿入（福井　桃子）
36 海老開脚強制責（深田　菊子）
37 全裸立像後手縛（富田由美子）
38 麻縄逆エビ惨酷（前田真知子）
39 美女の全裸縛り（荒尾　慶子）
40 マダム全裸開陳（江口　淑子）
41 後手錠吊上げ責（江口　淑子）
42 女体美を晒して（深田　菊子）
43 高々と後手緊縛（福井　桃子）
44 猿轡に悶える女（高村　浩子）
45 太鼓腹全裸正面（富田由美子）
46 菱縄股間縛猿轡（前田真知子）
47 苛酷の宴果てて（高村　浩子）
48 美しき緊縛女体（荒尾　慶子）
49 エビ責めの序曲（江口　淑子）
50 猿轡に呻く麻縄（高村　浩子）
51 料理される女体（高村　浩子）
52 美肌に映える縄（荒尾　慶子）
53 両手両足開責め（三浦　純子）
54 剃毛責めの結果（荒尾　慶子）
55 人の字型羞恥縛（江口　淑子）
56 浴室での浣腸責（江口　淑子）
57 股間に喰込む麻（深田　菊子）
58 浣腸責めのあと（福井　桃子）
59 黒髪前に垂れる（福井　桃子）
60 スナックで縛る（福井　桃子）
61 喰込む股間縄責（江口　淑子）
62 責めに呻くM女（高村　浩子）
63 片足挙げ開股縛（江口　淑子）
64 菱縄悲し女泣く（江口　淑子）
65 M女を責め尽す（前田真知子）
66 引回される全裸（江口　淑子）
67 尻立蝋燭悦虐貨（福井　桃子）
68 羞恥責を待つ女（深田　菊子）
69 凌辱に捧げる体（高村　浩子）
70 剃毛の女体展開（荒尾　慶子）
71 被縛者のマダム（江口　淑子）
72 縄の山と浣腸器（福井　桃子）
73 強制足挙臀部晒（高村　浩子）
74 厳重菱縄緊縛責（江口　淑子）
75 両手両足吊り責（江口　淑子）
76 白肌に喰込む縄（荒尾　慶子）
77 全裸一直線開股（福井　桃子）
78 裏門を開放する（深田　菊子）
79 豆絞りの猿轡縛（深田　菊子）
80 後手胴締股間縛（深田　菊子）
81 強烈海老責地獄（江口　淑子）
82 大の字縛り正面（高村　浩子）
83 足挙げ強制開陳（高村　浩子）
84 海老責の耐久度（荒尾　慶子）
85 猿轡咽喉輪縛り（三浦　純子）
86 後手吊上げ責め（三浦　純子）
87 羞恥責臀部露出（三浦　純子）
88 柔肌に喰込む縄（荒尾　慶子）
89 淫虐に晒す女体（高村　浩子）
90 マダム開股の図（福井　桃子）
91 がっちり後手縛（深田　菊子）
92 無惨白肌の縄痕（前田真知子）
93 妊婦大の字縛り（富田由美子）
94 開脚を強要せよ（富田由美子）
95 引回される妊婦（富田由美子）
96 強烈麻菱縄掛け（前田真知子）
97 股間縛の引回し（江口　淑子）
98 正座する股間縛（荒尾　慶子）
99 荒縄後手二つ折（前田真知子）
100 椅子開股羞恥責（前田真知子）

〔秘蔵版写真一掃分譲品〕

　昭和四十年頃より四十二年頃にかけて天星社に於て分譲しておりましたＳＭ資料写真は、その後分譲中止になっておりましたが、最近になって再開を強く要望されておりますので特に希望者に限り焼増をいたします。御注文の方には五日間位の予定で作成の上、早速御送付申上げます。

〈Mフォト〉

馬乗り女王様行状記	大手札四枚一組	花田沙登子	略号〈わふ〉	一〇〇〇円
両足の首絞め責め	大手札三枚一組	花田沙登子	略号〈わむ〉	八〇〇円
肩車の臀部に喘ぐ	大手札三枚一組	花田沙登子	略号〈わら〉	八〇〇円
女王様の臀臭をかがす	大手札二枚一組	花田沙登子	略号〈わけ〉	六〇〇円
足舐めの強制	大手札三枚一組	花田沙登子	略号〈わな〉	八〇〇円
女王様の牡犬調教	大手札八枚一組	花田沙登子	略号〈わね〉	一五〇〇円

〈入墨女賊拷問刑罰集〉

女賊仰向け木馬責め	大手札三枚一組	山原　清子	略号〈よひ〉	五〇〇円
全裸の入墨女賊折檻	大手札三枚一組	山原　清子	略号〈よせ〉	五〇〇円
入墨女笞打ち白洲糾問	大手札三枚一組	山原　清子	略号〈よゆ〉	五〇〇円
ハリツケ女賊拷問	大手札三枚一組	山原　清子	略号〈よめ〉	五〇〇円
凄絶エビ責め拷問	大手札三枚一組	山原　清子	略号〈よす〉	五〇〇円
全裸の四つ這い木馬責	大手札三枚一組	山原　清子	略号〈よも〉	五〇〇円
逆さ吊りのお仕置	大手札三枚一組	山原　清子	略号〈よき〉	五〇〇円
大の字磔女賊処刑	大手札三枚一組	山原　清子	略号〈よさ〉	五〇〇円

〈日本女性拷問刑罰集〉

三角木馬責め	大手札三枚一組	美木乃々子	略号〈もと〉	五〇〇円
石抱き算盤責め	大手札三枚一組	美木乃々子	略号〈もへ〉	五〇〇円
凄惨女囚海老責め	大手札三枚一組	美木乃々子	略号〈もに〉	五〇〇円
女囚竹棒羞恥責め	大手札三枚一組	美木乃々子	略号〈もち〉	五〇〇円
白洲笞打ち折檻	大手札三枚一組	美木乃々子	略号〈もほ〉	五〇〇円
非情の囚女開股責め	大手札三枚一組	美木乃々子	略号〈もぬ〉	五〇〇円
土壇で胴斬りの仕置	大手札三枚一組	美木乃々子	略号〈もり〉	五〇〇円
白洲調べに悶える囚女	大手札三枚一組	美木乃々子	略号〈もは〉	五〇〇円

〈M写真M場面決定版〉

裸女二人の尻の下にうごめく	大手札十二枚一組	大塚・山原	略号〈まふ〉	三〇〇〇円
二女にいじめられるM男	大手札十二枚一組	山原・大塚	略号〈まも〉	三〇〇〇円
美女二人から縛られる男	大手札十二枚一組	大塚・山原	略号〈まね〉	三〇〇〇円
男馬を乗り潰す裸女二人	大手札十二枚一組	山原・大塚	略号〈まめ〉	三〇〇〇円
痛烈、ムチ打ちのご馳走	大手札十二枚一組	大塚・山原	略号〈まれ〉	三〇〇〇円
首絞めでM男に止どめを刺す	大手札十二枚一組	山原・大塚	略号〈まむ〉	三〇〇〇円
汚臭と足舐めの強要	大手札十二枚一組	大塚・山原	略号〈まり〉	三〇〇〇円
二女の臀臭にむせび泣く男	大手札十二枚一組	山原・大塚	略号〈まみ〉	三〇〇〇円
パンプスの下に喘ぐM男	大手札十枚一組	大塚　啓子	略号〈わそ〉	二〇〇〇円
豊満な太股で首を股責め	大手札十枚一組	大塚　啓子	略号〈わよ〉	二〇〇〇円
男奴隷緊縛虐待への過程	大手札十枚一組	大塚　啓子	略号〈わた〉	二〇〇〇円
顔面騎乗の女王様	大手札五枚一組	大塚　啓子	略号〈らも〉	一〇〇〇円

〈女体切腹フォト〉

腸露出無念腹切腹	大手札十枚一組	大塚　啓子	略号〈せ10〉	一五〇〇円
全裸の切腹悦楽　1	大手札四枚一組	大塚　啓子	略号〈ひた〉	七〇〇円
全裸の切腹悦楽　2	大手札四枚一組	大塚　啓子	略号〈ひと〉	七〇〇円
マニヤの切腹	大手札三枚一組	甘木　春子	略号〈まに〉	五〇〇円
血紅切腹決定版	大手札十枚一組	大塚　啓子	略号〈れは〉	一五〇〇円
血紅切腹凄惨姿態	大手札十枚一組	大塚　啓子	略号〈れみ〉	一五〇〇円
血紅切腹連続写真	大手札十二枚一組	大塚　啓子	略号〈のせ〉	二〇〇〇円
血紅美女の切腹	大手札三枚一組	絹川　文代	略号〈ちた〉	五〇〇円
豊満腹を切り裂く女	大手札三枚一組	長野　良子	略号〈ほふ〉	五〇〇円

明瞭な臨月腹の妊娠線	大手札四枚一組	増田みゆき	略号＜りき＞	六〇〇円
双胎の臨月腹を鑑賞する	大手札四枚一組	増田みゆき	略号＜りけ＞	六〇〇円
妊婦の乳房を縛り弄ぞぶ	大手札四枚一組	増田みゆき	略号＜りさ＞	六〇〇円
妊婦後手縛り引き回し	大手札四枚一組	増田みゆき	略号＜りし＞	六〇〇円
亀甲縛りの臨月妊孕美	大手札四枚一組	増田みゆき	略号＜りた＞	六〇〇円
乳房緊縛の双胎臨月腹	大手札四枚一組	増田みゆき	略号＜りち＞	六〇〇円
臨月双胎蛙腹の股間縛り	大手札四枚一組	増田みゆき	略号＜りぬ＞	六〇〇円
浣腸される妊産婦	大手札三枚一組	増田みゆき	略号＜りひ＞	五〇〇円
臨月妊婦の全身像	大手札三枚一組	安原さゆり	略号＜りせ＞	五〇〇円
臨月妊婦腹の側面	大手札三枚一組	安原さゆり	略号＜りそ＞	五〇〇円
妊婦臨月腹のアップ	大手札二枚一組	安原さゆり	略号＜りと＞	四〇〇円
恵子の妊孕美緊縛	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜おに＞	六〇〇円
膨満の妊娠腹の緊縛	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜おみ＞	六〇〇円
妊婦開股縛り哀歓	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜わう＞	六〇〇円
八カ月の妊婦開股責め	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜わの＞	六〇〇円
妊婦腹誇張の開股縛り	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜わえ＞	六〇〇円
妊孕美人の媚態立像	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜わお＞	六〇〇円
妊孕美人の媚態坐像	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜わき＞	六〇〇円
両手吊り片足挙げの妊婦	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜わく＞	六〇〇円
両手吊り妊婦の正面	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜わす＞	六〇〇円
縛られた妊婦の艶姿	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜わせ＞	六〇〇円
両手一本吊りの妊婦	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜わち＞	六〇〇円
臨月の妊婦三態	大手札三枚一組	安原さゆり	略号＜よむ＞	五〇〇円
動物的な臨月妊婦の腹	大手札三枚一組	安原さゆり	略号＜よみ＞	五〇〇円
産み月の膨大な腹	大手札三枚一組	安原さゆり	略号＜よま＞	五〇〇円
麻縄でくびった妊婦腹	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜よは＞	六〇〇円
ころがされた緊縛の妊婦	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜よほ＞	六〇〇円
臨月妊婦の革紐縛り	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜よに＞	六〇〇円
見事に美しい臨月腹妊婦	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜よち＞	六〇〇円
臨月の妊婦麻縄縛り	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜よら＞	六〇〇円
臨月の妊婦全裸鑑賞	大手札四枚一組	中河恵子	略号＜よへ＞	六〇〇円
九カ月妊婦全裸正面立像	大手札三枚一組	木戸悦子	略号＜のま＞	五〇〇円
羞らう妊婦の裸身前向立像	大手札三枚一組	木戸悦子	略号＜のめ＞	五〇〇円
九カ月の妊婦腹を晒す	大手札三枚一組	木戸悦子	略号＜のや＞	五〇〇円
九カ月の妊娠腹を縛る	大手札三枚一組	木戸悦子	略号＜のこ＞	五〇〇円
便々たる太鼓腹に縄掛け	大手札三枚一組	木戸悦子	略号＜のし＞	五〇〇円
膨満腹も露わな両手挙げ縛り	大手札三枚一組	木戸悦子	略号＜のろ＞	五〇〇円
竹棒責めに喘ぐ九カ月妊婦	大手札三枚一組	木戸悦子	略号＜のは＞	五〇〇円
十文字縛りの妊婦腹	大手札三枚一組	木戸悦子	略号＜のに＞	五〇〇円
柱縛りに苦しむ九カ月の妊婦	大手札三枚一組	木戸悦子	略号＜のほ＞	五〇〇円
開股責めと椅子縛りの妊婦	大手札三枚一組	木戸悦子	略号＜のへ＞	五〇〇円
脈打つ全裸の臨月腹	大手札三枚一組	中河恵子	略号＜こふ＞	五〇〇円
猿轡にうめく臨月妊婦腹	大手札三枚一組	中河恵子	略号＜この＞	五〇〇円
革紐による臨月腹股間縛り	大手札三枚一組	中河恵子	略号＜こや＞	五〇〇円
逆さ吊りの臨月妊婦	大手札三枚一組	金原奈加子	略号＜さめ＞	五〇〇円
両手吊りの臨月妊婦	大手札三枚一組	金原奈加子	略号＜さも＞	五〇〇円
強烈縛り妊婦責め	大手札三枚一組	金原奈加子	略号＜さろ＞	五〇〇円
妊婦全裸縛りの全身	大手札三枚一組	金原奈加子	略号＜さに＞	五〇〇円

二人のマダムのハイライト

＜印画紙直接焼付極鮮明写真＞

開股縛りの強烈な肢体
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号＜ちお＞

逆エビ責めに喘ぐマダム
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略子＜ちと＞

一直線の開脚羞恥縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号＜ちう＞

菱縄縛りの種々相
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号＜ちま＞

縛って抜きとられるズロース
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号＜ちむ＞

逞ましき臀部強調縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号＜ちも＞

後手縛りの全裸を見せる
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号＜ちめ＞

赤裸な剝貝の羞恥責め
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号＜ちろ＞

悦虐涕泣のMポーズ
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号＜ちえ＞

柔肌に喰い込む縄目
大手札三枚一組　五〇〇円
福井　桃子　略号＜ちほ＞

高手小手縛り女の哀感
大手札三枚一組　五〇〇円
江口　淑子　略号＜ちよ＞

苦悶するエビ縛りの神秘
大手札三枚一組　五〇〇円
江口　淑子　略号＜ちん＞

翻弄されるマダムの法悦境
大手札三枚一組　五〇〇円
江口　淑子　略号＜ちひ＞

愁いある目と猿ぐつわ
大手札三枚一組　五〇〇円
江口　淑子　略号＜ちゆ＞

悦虐天国への階段
大手札三枚一組　五〇〇円
江口　淑子　略号＜ちそ＞

いたぶられて燃える媚態
大手札三枚一組　五〇〇円
江口　淑子　略号＜ちわ＞

紅閨へのいざないに濡れる
大手札三枚一組　五〇〇円
江口　淑子　略号＜ちは＞

後手高手小手縛り三態
大手札三枚一組　五〇〇円
江口　淑子　略号＜ちい＞

開股縛りの醍醐味披露
大手札三枚一組　五〇〇円
江口　淑子　略号＜ちし＞

強烈股間縛りの点描
大手札三枚一組　五〇〇円
江口　淑子　略号＜ちへ＞

強烈足吊り縛りの苦痛
大手札三枚一組　五〇〇円
江口　淑子　略号＜ちせ＞

T字型生理帯着用フォト
大手札十二枚一組　二〇〇〇円
深田　菊子　略号＜ちあ＞

前開型バンド着用フォト
大手札十二枚一組　二〇〇〇円
深田　菊子　略号＜ちか＞

最新版分譲フォト

うら若き美女を緊縛する

印画紙直接焼付極鮮明写真

逆エビ縛り吊り上げ
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろて＞

縄付きで愛してネ
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろせ＞

棒責め開股縛り
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろひ＞

可愛い牝犬の珍芸披露
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろり＞

開股責めの種々相
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろみ＞

柔肌に喰い込む麻縄
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろし＞

海老責めで虐める女
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろめ＞

責め抜かれた結末
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろに＞

股間縛りにあえぐ女
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろち＞

高手小手縛り首縄悦楽
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろと＞

脚吊り柱強烈縛り
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろも＞

白ロープの亀甲縛り
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろへ＞

逆エビ縛りで晒す美形
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろす＞

開股開陳羞恥責め
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろは＞

白縄の強烈縛り地獄
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろそ＞

牢舎へ引き回す囚女
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろい＞

菱縄縛りで責める
大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号＜ろふ＞

M女荒尾慶子のすべて
大手札三枚一組　四〇〇円
荒尾　慶子　略号＜ふに＞

浣腸溶液受入態勢充分
大手札三枚一組　四〇〇円
荒尾　慶子　略号＜ふし＞

剃毛の美女を縛る
大手札三枚一組　四〇〇円
荒尾　慶子　略号＜ふん＞

私をよく観賞してね
大手札三枚一組　四〇〇円
荒尾　慶子　略号＜ふな＞

ベッド上での狂態を縛る
大手札三枚一組　四〇〇円
荒尾　慶子　略号＜ふは＞

強烈菱縄股間縛り
大手札三枚一組　四〇〇円
荒尾　慶子　略号＜ふい＞

〔女相撲と褌関連資料〕

御要望により再分譲開始します

裸女レスリング熱戦譜
大手札40枚一組　五〇〇〇円
山原・大塚　略号〈れす〉

好取組女相撲三番勝負
大手札10枚一組　一五〇〇円
大塚・東浦・木村略号〈うむ〉

迫力実戦好取組女相撲
大手札10枚一組　一五〇〇円
大塚・東浦・木村略号〈うめ〉

取組む女相撲三人娘
大手札七枚一組　一〇〇〇円
大塚・東浦・木村略号〈うゆ〉

マワシを締める三人娘
大手札五枚一組　八〇〇円
東浦・大塚・木村略号〈うや〉

二女真迫格斗場面
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚・玉田　略号〈のか〉

女子全裸斗争場面
大手札三枚一組　五〇〇円
玉田・大塚　略号〈のわ〉

裸女相搏つ取り組み
大手札八枚一組　一二〇〇円
大塚　啓子　略号〈えく〉

褌裸女の寝業乱斗
大手札五枚一組　一〇〇〇円
木村・大塚　略号〈めき〉

褌裸女の真剱な争斗
大手札五枚一組　一〇〇〇円
大塚・木村　略号〈めん〉

女相撲連続写真（四つ相撲）
大手札10枚一組　二〇〇〇円
山原・大塚　略号〈めれ〉

女相撲連続写真（投げ業）
大手札10枚一組　二〇〇〇円
山原・大塚　略号〈めよ〉

女相撲連続写真（投げ合い）
大手札12枚一組　二四〇〇円
山原・大塚　略号〈めわ〉

女斗美立業大立回り
大手札10枚一組　二〇〇〇円
大塚・山原　略号〈めた〉

女斗美寝わざ妖艶攻合い
大手札10枚一組　二〇〇〇円
大塚・山原　略号〈めな〉

女斗美妖蛇の固め業
大手札12枚一組　二四〇〇円
大塚・山原　略号〈めそ〉

女と女の争い髪の掴み合い
大手札10枚一組　二〇〇〇円
山原・大塚　略号〈めか〉

女同士の争斗押さえ込み
大手札10枚一組　二〇〇〇円
山原・大塚　略号〈めね〉

女子レスリング首絞め業
大手札12札一組　二四〇〇円
山原・大塚　略号〈めつ〉

女子レスリング押え込み
大手札12枚一組　二四〇〇円
大塚・山原　略号〈めお〉

白晒六尺褌姿（背面）
大手札四枚一組　六〇〇円
遠藤百合子　略号〈しろ〉

白晒六尺褌姿（正面）
大手札四枚一組　六〇〇円
遠藤百合子　略号〈しは〉

六尺褌を着用し終るまで
大手札20枚一組　三〇〇〇円
山原　清子　略号〈ひは〉

砂浜での真剱裸女格斗
大手札12枚一組　二四〇〇円
東浦・大塚　略号〈すえ〉

草原で止どめをさす格斗
大手札12枚一組　二四〇〇円
東浦・大塚　略号〈すう〉

松林の中での裸女死斗
大手札12枚一組　二四〇〇円
大塚・東浦　略号〈すき〉

琵琶湖畔での女相撲
大手札20枚一組　四〇〇〇円
大塚・東浦　略号〈すよ〉

女相撲真迫連続スナップ
大手札10枚一組　二〇〇〇円
大塚・東浦　略号〈すな〉

室内女相撲熱戦模様
大手札六枚一組　一二〇〇円
大塚・東浦　略号〈すも〉

相撲褌着用連続フォト
大手札11枚一組　二〇〇〇円
大塚　啓子　略号〈すま〉

相撲褌を締ゆ込む
大手札四枚一組　六〇〇円
遠藤百合子　略号〈すい〉

女相撲激しい投げ業
大手札八枚一組　一五〇〇円
大塚・木村　略号〈すね〉

女相撲組打ちの美体
大手札八枚一組　一五〇〇円
木村・大塚　略号〈すか〉

女斗立術の応酬
大手札六枚一組　一二〇〇円
大塚・木村　略号〈すち〉

寝業の女レスリング
大手札六枚一組　一二〇〇円
大塚・木村　略号〈すほ〉

女斗の連続場面展開
大手札九枚一組　一八〇〇円
木村・大塚　略号〈すく〉

女斗立術の攻撃場面展開
大手札六枚一組　一二〇〇円
大塚・木村　略号〈すた〉

室内女相撲好取組み
大手札六枚一組　一二〇〇円
東浦・大塚　略号〈すみ〉

湖畔女相撲連続スナップ
大手札10枚一組　二〇〇〇円
大塚・東浦　略号〈すふ〉

女相撲四十八手の内六手
大手札六枚一組　一二〇〇円
大塚・木村　略号〈すは〉

女相撲四十八手の内六手
大手札六枚一組　一二〇〇円
木村・大塚　略号〈すむ〉

湖畔女相撲迫力場面開陳
大手札20枚一組　四〇〇〇円
大塚・東浦　略号〈すや〉

湖畔女相撲熱戦場面点景
大手札20枚一組　四〇〇〇円
東浦・大塚　略号〈すゆ〉

実戦女相撲業の応酬
大手札六枚一組　一二〇〇円
大塚・東浦　略号〈すに〉

実戦さながら女相撲図絵
大手札六枚一組　一二〇〇円
東浦・大塚　略号〈すぬ〉

雪崎京人指導女相撲実戦
大手札六枚一組　一二〇〇円
大塚・東浦　略号〈すの〉

迫力抜群実戦女相撲
大手札六枚一組　一二〇〇円
東浦・大塚　略号〈すつ〉

読者通信
TAKASHI

○

山光純先生の、パロディ「花と蛇」は、欲望の渦の中に、また欲望を生むナマの人間の姿を見る様な気がします。SとかMとかいう狭い範チュウに必ずしも拘泥せずとも、一般社会の縮図としても多分に共感を呼びます。今、掲載されている京子に対する責めも結構ですが、他にも魅力ある女性が沢山、登場しているのですから、引続いて次々と責めの祭壇にのせて下さるよう願います。

（千葉県・望月富士男）

○

仲々むずかしい世の中なのに、我々ファンの満足のゆくよう、常に誌面を充実されている御努力には感謝しています。SM雑誌もふえていますが、文献性に特色のある奇クの右に出るものはありません。やはりその歴史と編集者の熱意の賜物と思います。あからさまに公に出来にくい、この趣味の世界のことですから、より深く、その物に触れたくなるのは我々マニア共通の願望です。希望者のみに、限定しての撮影会（モデル使用、又は会員有志による）のようなものは開けませんでしょうか。以前は座談会や撮影会が催されたようですが、これからも、開いてほしいものです。

（神奈川県・横尾則夫）

○

鈴木千鶴子さん、私の在住する同じ武蔵野市に、あなたが住んでおられるなんて、夢のようです。私は二十四才の大学の研究室に籍をおくものですが、あなたの自慢の美しい体を、いたぶり恥かしめ責めぬいてみたいという気持で、落着かぬ毎日を送っています。是非お会いしてプレイをしたいのですが、如何ですか。又、私の友達に一人Sの男がおりますので、あなたの求めておられる複数のプレイも可能です。私の方も時間的に自由がききますので、一日中、精根つきるまでプレイができます。同じ武蔵野にSの男とMの女が、みず知らずで相手を求めて生活しています。是非、御連絡下さい。

（東京都・大内孝）

○

小生、貴誌を愛読して早や十年を過ぎ様としております。当初SMプレイが何であるか、というより正直の話、女体が晒されているショックの方が大きく、SMF云々を理解する術もなかった様に想えます。本格的に興味を抱く様になったのは、それから二、三年後かと思います。ですが、小生は執拗なSでもMでもFでもありません。唯、SMFの心理を少しでも把握出来ればと思い、始めた心理研究が、何とはなしに潜在的に、Sに育てMに育てFに育てて来た様にも思えます。まあ強いて言うなら、SMFプレイ・アドバイザーという処かもしれません。相手の女性がSならMになり切り、またMならSに徹すると、相手が恍惚の世界に浸る姿を見て満足するという、まあ何と言いましょうかこれも何がしかの性倒錯の一種と申すんでしょう。

（東京都・足立孝一）

○

奇クを愛読して五年。あと一年で二十代も終わりを告げるという青年です。仕事も年々向上し、それに対してナヤミもあり、奇クをイットキの慰安として心のウサを晴らしております。小生、奇クを愛読して五年の間、考えた結論ですが、M女との交際こそ、我々に希望の灯をとぼすものだと思います。女性には少なくとも多少はM気はあると思いますが、いくら世の中が違ってきても、自分の性向の発表までは中々、勇気は出ないと思います。それと、相手の男性による事でもあると思います。小生、楽天家（といっても、人がいい性格です）で婦人服製造卸をやっており、M女さえ出現していただければ、きっと希望にそえるものと思います。人生の相談にものります。情のあるスバラシイ、プレイを実現したいものだと思います。それには、M女性の方の協力がいります。ぜひ、協力をお願いします。

（広島県福山市・高橋一夫）

○

私は、今年二十才になる一大学生です。このたびは、ぜひお願いがありましてペンをとりました。実は私は、半年ほど前から奇クを買い始め、ずっと愛読するようになりました。そして、たちまち千葉先生の「大噴火」のファンになってしまいました。ところがバックナンバーを大噴火の第一回からそろえようとしたら、2冊ほど足らないのです。そして値も、はります。そこで「花と蛇」のようにぜひ「大噴火」の一冊に、まとまった特集号を出してもらいたいのです。なるべくなら「花と蛇」のように、口絵などのついたものです。同じような考えの読者の方もたくさんいると思います。又、各号にのっていたイラストも、すべて、それぞれの場所に書き入れる様お願いします。

（市川市・下山光二）

＝御送金についてのお願い＝

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、振替、定額小為替、普通小為替等の方法もありますのでご利用下さい。便宜上「切手代用」にても結構ですが、その場合は必ず一割増にてお願い致します。

○

高村浩子さん、お元気でいらっしゃいますか。まだ一度も、お会いした事はありませんが、奇クの誌上で＜M女通信＞での写真、よく見せていただいておりますので全然、知らない方みたいな気がしません。福山市へ来て、早いもので一年三カ月、たちました。SMの世界から足を洗うつもりで広島へ来たのですが、一度、知ってしまった甘美な味は、少々の事では忘れる事が出来ないらしく、又、逆戻りしてしまいました。一度ぜひ、お会いして、お話したいと思いますが、どうでしょうか。どうすれば貴女と、れんらくがつくのか、おしえて下さいませんか。それとも私みたいに過去の人間と会うのはおイヤかしら。今、どこに住んでいらっしゃるの。それも知らせて下さいね。お会いするまで、お元気で。

（広島県・谷山久美子）

○

毎月、御配本戴き、有難う存じます。本誌について特に感じられることは、バックナンバーの、どの号を抜き出して読んでも、一向にその感動に変わりないということです。巷間にSM誌と称する月刊誌が店頭に並んでいますが、再びページを開いても興味を呼ばなく、他人の手に渡しても忘れ去ることができますが、本誌は愛蔵書として、他人の手に渡してしまうことは、考えも及ばないところです。これからも一層の御努力にて時流を超えて充実した本誌を送り出して頂きたく存じます。

（佐賀県・村瀬広三）

○

七月号の読者通信欄にて一際、異彩を放つ青山かおり様の一文を読みまして、電撃に打たれた様に私は震えました。どの様な仕打ちも愛情として受けとり、女王様の悦びを満足させると共に、ドレイ本来の悦楽に生き甲斐を感じ、興味本位ではなく、真性のMドレイを求めると宣言される素晴しい女王様。私は生来、女性に御奉仕申し上げる事に依って、生き甲斐を見出して参りました。たとえ、どの様な御奉仕を強要されましょうとも「女王様の悦びはドレイの悦楽である」という、ドレイ哲学を身を以て今迄、実践して参りました。貴女様の前に出れば私は、人格を失った動物であり、器物でしかありませんから、どの様な扱いを受けましょうとも、異論はありませんし、人間対人間の時の様な既成観念に、とらわれる事も御座いません。私は女王様にドレイ以下の家畜や快楽のための道具として使用して頂きたいと思います。頑丈な体は馬として、又、従順な性質は犬として、使用して頂きたいと思います。心底から女王様に対し奉り御奉仕の念に燃えて居りますので、人間椅子やマットとして許りでなく、舌人形や人間便器としても、便利な道具として御悦びになられます様、精一杯の努力をしてみたいと思います。女王様のお悦びを己が悦びとして、御奉仕に明け暮れる日の一日も早からん事を祈りつつペンを擱きます。

（高岡市・西村六夫）

○

私は一応、健全な家庭を営む中年の男ですが、奇クを通じてSMの世界に、足を踏み入れております。家内はSMに全く関心を示さず、止むを得ず他にM女性を求めて二、三の方とプレイをしましたが、帯に短しで、欲を言うわけではありませんが、何とも味気ない物足りなさを、味わっておりました。しかし、偶然の機会で奇ク誌上を飾ったことのある女性と知り

合い、以来、充実したプレイに明日の活力を得ております。七月号の読者通信の三浦純子様。彼女とのプレイに不足はないのですが、一度、機会を得て、お逢いしたいと存じます。彼女とのプレイは開股責め、股間縛り（特に彼女は好みます）アヌス責め、プレイに興がのれば、吊り責め等も加え、その都度、カメラに納め、羞恥ポーズ、責めポーズも今では大分、アルバムに貼られております。先輩辻村氏のプレイには到底、及びもつかぬかも知れませんが、プレイのルールは心得ておると自負しております。（神奈川・小川竹夫）

〇

先日、久し振りに十一年程も前の昔の旧号を、本箱の奥から引張り出して読んでみました。十年ひと昔と、よく言われますが、最近の奇ク誌と並べてみますと、なるほど才月の流れと申しますか、世の中の移り変わりが手に取る様に窺い知れます。昔なら、とても表現出来ない言葉や文章も、最近では随所に見受けられますし、それを何気なく吸収出来る現代の感覚に私自身、心から満足感を味わっております。内容の充実も、さる事乍ら、巻頭のグラビヤ写真が六月号より復活、その迫力ある写真の一つ一つが、どんなに奇ク誌を引き立たせている事でしょう。まことに我々にとって万々歳といったところです。唯一つ、物足りなく感じます事は、深田菊子さんや佐野みさ子さん等に対して、読者に依って行われたプレイのレポートが、あまりにも断片的で、その委しい詳細を発表しておられない事です。読者を代表してプレイをされた方の義務として、少しでも私達を楽しませてくれるレポートを、出来れば写真と共に是非、お願いしたいものです。と申しましても私自身、いざ書くとなると仲々筆が進まないもので、書きかけの原稿が、あれこれと数種も未整理のまま、抽出しの中で場所を塞いでおります。ある機会に知り合った女性と、もう数カ月以上にもなりますが、度々ＳＭプレイに興じて、その模様等を発表させていただく心つもりでおりました処、写真は勿論、体験としての投稿も彼女の承諾が得られず、残念に思っております。七月号の読者通信欄の三浦純子様の呼びかけに、お便りを書きました。御誌の片隅にでも掲載していただけるか、もしそれが不可能であれば、転送願えれば幸甚に存じます。

（大阪市・大木喬）

＜編集部より＞三浦純子さんへのお便りは幸便がありましたので転送しておきました。読者の方へ紹介した折は、出来るだけ写真文章の寄稿を依頼しているのですが送られてくるのは稀で、殆どそのままになっているのは残念です。今後は極力、レポートを確実に書いて貰える方を選び、多くの読者の方々に楽しんで頂くように致したいと思います。

〇

せっかくモデルになりたいと志望したのですけど、編集部の都合で東京まで急に来てもらえそうにもなく、そのかわり沢山の方々からのお便りをいただきました。七月号では誌上でのお呼びかけを待っていましたのに、せっかちな方が多いのですね。でも、今のところ私のしばりの写真をとって下さるような方はいらっしゃらないようです。しばりのモデルになりたいと書いた私ですのに、プレイをしたいというお便りの方が多かったようです。今は東京へぐらいしか行けませんが、そのうち、大阪へまで行けるようになるかもわかりませんので、その時はぜひ、私のしばりの写真をとって下さるようお願いします。いちいちお返事を出すのが大変ですから、どうか誌上でお呼びかけ下さい。そうしたら私もお返事しますから。

（千葉県・石田令子）

〇

奇ク読者の皆さま、今日は。私は又々アパートを変わりました。前から来る来るといっていた妹がとうとう上阪してきたので、一緒に住むことになったからです。前のとこは狭くてうるさいので、今度は少し郊外の広いところへ移りました。今までのように、転送していただいたお手紙を机の上にひろげておいたり、書きさしの原稿を放っておいたり出来ませんから原稿の方も当分お休みさせていただくようになるかもしれません。奇クの方は、なんとか毎月、愛読させていただきますから、今後ともどうかよろしくお願いします。私を、とことんまで恥かしめ犯して下さる読者の方がおられましたら、ぜひ、いじめられたいと思っておりますが、今、引っ越しのすぐあとで、整理に忙しく落ち着きません。私にお手紙を下さった沢山の読者の方々には厚くお礼申上げます。誌上で心からお礼申し上

げます。

（摂津市・高村浩子）

○

私は貴誌を愛読して二年になる青年です。SMに非常に興味を持ちM女性と是非プレイをしたくペンを執りました。まだ一度もプレイの経験はありませんが、女性をマゾの陶酔に浸してやれる自信は持っています。二十才より三十才ぐらいまでの、M女性を希望します。責めの趣向としては股間縛りクリップ責め、ローソク責め、または風呂場での湯づけ責めや、首輪をはめて鎖を引っぱりながら濡れタオルで軽く鞭打ちしたり、言葉でいじめたり、色々と構想を練っています。一風変わった責めとして、酢責めといった特異なものも考えています。それに女性を二人ぐらい従えて奴隷として飼育したいです。しかし平時には何の変哲もない恋人として、やさしく可愛がってあげます。愛さえあればSMはアブノーマルでもグロテスクでもないのです。

（東京都・世田谷一郎）

○

私は以前からM女性に接してみたい、またMにしたてて行きたいと念願しておりますが、現実にはなかなか恰好な人を見つけるのはむずかしくて、いろいろな、ルポルタージュを読むたびに、当事者のことが、うらやましくてなりませんでした。私は目下の処、肉体的に痛めつけるようなプレイにはあまり興味を持っておらず、女性を羞恥の極に追いやることに非常な興味と関心を持っております。羞恥責めを行なうのは、実に私には楽しいのですが、残念ながら浣腸と排便だけは相手が許してくれません。何とかして浣腸をし、排便させたいとは思うものの、相手が嫌がるのを強行するのは私も嫌で、目下、果たせぬ欲望で悶々としているところです。カメラ歴はまだ浅く五年ぐらいにしかなりません。しかし現像、焼付の設備もあり、カラー以外は自分で引伸ばしを行なっております。カメラの腕は、そう劣るとは思いません。大山俊江さん、如何でしょうか。貴女のご希望の通り、生まれたままの姿、剃毛されている時の貴女羞恥責めに悶えている肉体のすべて、排泄の状況等も克明に写真に撮ってみたいと思います。貴女が記念として残すのにふさわしいものを私なりに努力してみたいと存じますが……。剃毛、アヌス責めについては何回かやっております

笠井奈保子の自由日記帳

六月号のカメラルポに引き続いて七月号の「奈保子の日記帳」で示した彼女の純情で無垢、そしてピチピチとした若さに溢れる肉体が縄に縛られることによって一層煽情的にマニアの胸にいたく迫ってきます。誌上では顔をあからさまに晒すことは差控えねばなりませんでしたが、印画紙焼付の分では可愛い彼女の表情、羞恥の魅力も十分に組み入れました。

豊満臀部晒し責め
大手札三枚一組　笠井奈保子　五〇〇円　略号〈るろ〉

猿轡に悶える全裸
大手札三枚一組　笠井奈保子　五〇〇円　略号〈るほ〉

エビ縛りのグラマ
大手札三枚一組　笠井奈保子　五〇〇円　略号〈るへ〉

羞恥の魅力を縛る
大手札三枚一組　笠井奈保子　五〇〇円　略号〈るる〉

緊縛羞恥表情各種
大手札三枚一組　笠井奈保子　五〇〇円　略号〈るつ〉

〔観世音菩薩さまの縛り〕

数カ月ぶりに訪れた松本たえに対して行われた責めは、塚本氏のペンにて七月号に詳細記録されましたが、縛りが何よりも大好きなM女観音の激しい被虐の実態は、生々しい印画紙焼付の極鮮明な貴写真によって、特に熱心なSMマニアの方々の秘蔵版蒐集品としてアルバムの一端に加えて頂きたく存じます。カメラルポの記事と併せてご覧下されば更に一層研究の成果が向上するものと思います。

柱縛りの悦虐肢体
大手札三枚一組　松本たえ　五〇〇円　略号〈るら〉

羞恥責め悶悦表情
大手札三枚一組　松本たえ　五〇〇円　略号〈るう〉

強烈責めに泣く女
大手札三枚一組　松本たえ　五〇〇円　略号〈るあ〉

エビ縛り開股責め
大手札三枚一組　松本たえ　五〇〇円　略号〈るさ〉

片足吊りに悶える
大手札二枚一組　松本たえ　四〇〇円　略号〈るき〉

両足吊り宙縛り責
大手札二枚一組　松本たえ　四〇〇円　略号〈るゆ〉

開股責めに痺れる
大手札三枚一組　松本たえ　五〇〇円　略号〈るめ〉

ので、私としては充分に貴女を満足させることができる自信を持っております。貴女の良きパートナーになれば幸いです。

（埼玉県・鈴木昇）

○

辻村氏の奇ク一本にかける姿勢に感銘した。このような世界であるからこそ、道義は守られるべきだと思う。辻村氏の心に触れ、私も便りを出したくなった。私が奇クを始めて見たのは十数年前である。それから、ずっと愛読している。しかし、その間、便りは十年前に一度、出しただけである。私は生まれついてのフェミニストであると思う。しかし、同時にSMマニアでもある。裸女緊縛はフェミニズムの裏返しでも、あるようだ。今まで色々なSM誌が現われては消えていった。その中で奇クに太刀打ちできるものはW誌だけであろう。奇ク誌をマニア向きというならW誌は文学好み向き、耽美向きともいえるものであった。奇クのモデルにも多くの人が現われ消えていったが、その中で絹川文代、梨花悠紀子両嬢が印象に残っている。今の人の中では荒尾慶子嬢、笠井奈保子嬢などが私の好みにあっている。私もまた、肉体的苦痛を与えるものより、羞恥責めに興味を感じる。特に乳房縛りバイブプレイ、肛門責め、浣腸責めに興味を感じる。どなたか私とプレイしませんか。

（東京・秋山荻二）

○

山添清子様。あたの呼びかけを拝見して、お便りを出す気になりました。私も当年とって四十六才という年令のせいか、中年の人妻に一番、魅力を感じます。若いピチピチした女の子も、それはそれで責め甲斐もありますし、プレイも結構、楽しいのですが、何か情緒に欠けているものを感じます。私の好みから言えば、やはり子供を一人、生んだことのある、人生経験も、ある程度、つんだ人妻との、お互いの人格を充分に尊重しお互いの家庭の幸福を絶対に壊さないという約束の下での、しっとりとしたプレイを望みます。私も相手に苦痛を与えたり、まして血を見るようなプレイは好きではありません。お互いにプレイを通して楽しまなくては、何にもなりませんから。あなたは、まだプレイの経験が全然ないご様子なので、今ここで、すぐ私とプレイして下さいと申しても無理なことは、よ

☆福井桃子の臨月腹と臨月腹緊縛写真

愈々迎えた福井桃子さんの臨月は私達妊婦ファンの待望の日でありましたが、出産間際までSM資料として自分の妊娠した女体を提供された福井桃子さんの協力によって、ここに見事な文献を残すことが出来ました。八カ月から始まって九カ月、そしてここに臨月と月を追った極鮮明な資料はきっとマニアの方々を熱狂させることと思います。どうか文献的価値高きこの妊婦資料を各月一括して蒐集下さるようお待ちいたします。

出産直前の緊縛美
大手札三枚一組　五〇〇円
福井桃子　略号〈ぬせ〉
出産を目前に控えた臨月腹の上と下に縄を掛け便々と見事なまでに丸く膨らんだ妊婦を縛る。

臨月腹の開股縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
福井桃子　略号〈ぬく〉
もうこれ以上大きくならないという程最大限に膨らんだ妊婦に対して命ずる苛酷な開股縛り。

堂々たる臨月縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
福井桃子　略号〈ぬよ〉
フットボールのように膨らんだ丸い臨月腹を堂々と突き出して縛られた妊婦は羞らいを含む。

両手吊り臨月妊婦
大手札三枚一組　五〇〇円
福井桃子　略号〈ぬり〉
両手首を縛って吊れば臨月の妊娠腹をかくすことも出来ず羞じらいながら巨大なメロン腹を晒す。

逞しき腹と臀部
大手札三枚一組　五〇〇円
福井桃子　略号〈ぬし〉
後手に高々と縛られた臨月妊婦の豊かに脂肪ののった臼のような臀部と蛙腹の異様なまでの美景。

後手縛りの太皷腹
大手札三枚一組　五〇〇円
福井桃子　略号〈ぬぬ〉
両手を厳しく高手小手縛りにされているのでパンク寸前の羞かしい巨大なる腹部をかくす業もない。

全裸臨月腹の展示
大手札三枚一組　五〇〇円
福井桃子　略号〈ぬい〉
あと数日で出産するという膨大な臨月腹を晒した縛りなしの全裸の全身像で妊婦の神秘を見よ。

臨月の奴隷犬調教
大手札三枚一組　五〇〇円
福井桃子　略号〈ぬの〉
巨大な臨月腹の全裸だけでも恥かしいのに、首に犬の首輪を巻かれて芸を仕込まれる哀れな妊婦。

◎福井桃子の妊婦シリーズは今回で完結しますが貴重な資料として是非お求め下さるよう願います。

く分かっております。お互いに相手がどんな人か何も知らないわけですから。ですから最初は、あなたのおっしゃるようにボーリング（余り得意ではありませんが）でもやりながら、ゆっくり、お話でもすることにしたいと思います。充分、話し合った上で、これならいいとなったところでプレイをしたいと思います。もちろん、私がSで、あなたがMのわけですが、あなたのMの程度が、どのぐらいか分かりませんし、あのお便りから拝見する限りでは、まだ初期の頃のMに開眼し立てのような感じがいたします。でも、経験をつみかさねて行けば、すばらしいM女になる素質を、お持ちのように、お見受けします。ですからプレイも初めから全裸開股縛りというような強烈なものは避けて、着衣の上から縄をかける大人しいものから、はいって行き、つぎには上半身ヌードにして後手に縛り、そのつぎには、そうして縛ったまま、下半身の着衣を脱がせて行くと言った方法でも、とりたいと思います。そして順次、エスカレートさせてあらゆる羞恥責めを、あなたに試してみたいと思うのです。A責め、V責め、セックスを伴うプレイ等は、あなたがご希望になれば、その通りにしますし、そうでなければ、しいて私の方からは、しないことにします。あなたは、お顔もきれい、お体も均整のとれた方のように思います。おそらくお肌も、きめ細かい美しい肌をお持ちだと想像いたしますが、そのヌードを長い真珠のネックレスで縛り上げてみたいのです。もっとも、そんな丈夫なネックレスもないでしょうし、そんな長いものはイミテーションにしてもないでしょうから、これは私の夢に過ぎないでしょうか。プレイが成功したら、誌上に手記でも寄せたいと思います。カメラはアマチュアとしては、まずまずの腕前と自負しておりますので、あなたの魅力あふれるフォトも沢山、挿入したいと思います。

（東京・竹田信正）

〇

小生は二十三才のおむつ、女装のマニアです。現在、おむつカバー、パンティ、パンティストッキング、ブラジャー、スリップを持っています。特に小生の好きな状況は、赤ん坊のように、おむつとおむつカバーをあてられ、その上からパンティ、パンティストッキングをはかされ、ブラジャー、ス

☆笠井奈保子の若々しき肢体を緊縛す

六月号のカメラ・ルポで、その初々しい緊縛姿態を誌上に登場させた笠井奈保子さんは女性の緊縛フォトを見るのが大好きだという家事手伝いのお嬢さんであるが、第一回第二回にわたって塚本氏がその鮮鋭なるカメラを駆使して取材した成果をここに印画紙焼付の迫真的写真によってファンコレクターのアルバムの一頁を盛大に飾りたいと思う。乞う御一見！

縄に依る悶悦姿態
大手札三枚一組　五〇〇円
笠井奈保子　略号〈ぬゆ〉
縛られたことで心中の動揺をかくしきれず真白い全裸の肢体をくねくねとくねらせて悶える乙女。

縛りを耐える表情
大手札三枚一組　五〇〇円
笠井奈保子　略号〈ぬき〉
縛られることが好きなのか嫌いなのかわからないが、強烈に縛られ必死に耐える表情は美しい。

若き肢体美を縛る
大手札三枚一組　五〇〇円
笠井奈保子　略号〈ぬさ〉
伸びやかな若々しい肢体を思いきり開陳して緊縛美をいっぱいにふりまく二十才の乙女の柔肌。

羞恥縛りの種々相
大手札三枚一組　五〇〇円
笠井奈保子　略号〈ぬあ〉
乙女の羞かしさをいやという程露呈させるためには全裸の女体に縄を用いて縛るのが最上である。

女体の悦虐を抉る
大手札三枚一組　五〇〇円
笠井奈保子　略号〈ぬな〉
縄―それは奈保子にとって果たしてどのような刺戟を与えるのだろうか。この恍惚の表情を見よ。

若さを縄でくびる
大手札三枚一組　五〇〇円
笠井奈保子　略号〈ぬた〉
むちむちと匂う花のような若さの溢れる女体を思いのままに縄によって縛り上げ弄ぶSの醍醐味。

緊縛の姿態に恥ず
大手札三枚一組　五〇〇円
笠井奈保子　略号〈ぬて〉
白い頬を真赤に染めて縛られることを恥ずる乙女は肢体をエビのように屈伸させて表情に現わす。

乙女の女体を曝く
大手札三枚一組　五〇〇円
笠井奈保子　略号〈ぬら〉
奈保子の猿轡をかまされた表情の美を縦横正面から女体の秘奥を涎の垂れるほど正確にあばく。

開股縛りの決定版
大手札三枚一組　五〇〇円
笠井奈保子　略号〈ぬつ〉
肉のった太股を縄によって強制的に拡げさせられた美しくも妖しいムードの漂う女体開陳版。

リップをつけさせられ、授乳をしてもらったり、おむつをとりかえたりしてもらうものです。ところが家人の留守のときに入った空巣が居直って、スリップとおむつ姿の小生をロープで縛り、パンティストッキングを、ひざまで下ろして浣腸され、おむつを汚したまま長時間、放置される。といったことです。おむつに興味のある二十才前後の女性の方のお便りをお待ちしております。

（西宮市・川村昌治）

○

小生は二十二才のサラリーマンです。奇クを読み出して四年目です。最近、非常に不満に思っていることは、関西方面のSM愛好家のパーセントに比べ、関東、とりわけ、東北、北海道のSMにおいての沈滞した状況。あまりにも北海道のSM道の活気のなさ。よかったら札幌に、奇クの同窓会みたいなものを作りたいと考えています。自分自身はサディストでホモ気は全然ないのですが、SM、レズ、ホモなど、ありとあらゆる世間でいう変態の組織を作り、みんなでプレイしませんか。

（札幌・月光のドミナ）

○

笠井勢津子様。あなたの「私は便秘マニア」に大きな感銘を受け何度も読み返しました。その後、また何か、発表されるのではないかと、心待ちしております。毎号奇クが出るたびに、あなたの名前が見あたらないかと、目次の下半分の作者名に目を走らせます。二月号と五月号に取り上げてもらった拙稿の中で、私が主張しておりますD感覚が、あなたの感覚と大いに通じ合うものを持つ、あるいは全く同一のものではないだろうかと考えます。あなたの「便秘マニア」に対し私は「下痢マニア」と言いますが、どちらも同じ根底から、派生したものと思います。短いものでも御発表になることを期待しています。大作を御準備中ならば、大変失礼な言い方になりお許し下さい。また、幸に私の文をお読み下さっておれば、御意見御批判をお寄せ賜りますよう、厚かましいながら、お願い申し上げます。

（堺・上条直）

○

私は過去十年間、SMファンで奇クの愛読者です。三浦純子様。ぜひ、あなたとのプレイを、お願いします。何分、今までの女性はすぐ怖がって面白くありません。全然、M性のない女性とのプレイは、もうたくさんです。ぜひ貴女と……想像するだけで胸がはずみます。一度、思いきり貴女を喜悦させたいですね。ただし、きずをつけるようなことは大嫌いです。お互いにエンジョイできたらと思います。

（東大阪市・八木）

○

宮前協子様。七月号のあなたの文章、読ませていただきました。最初から最後まで読んでも、なぜか、あなたのほほえんでいる顔しか想像できません。女性の年輪を思わせるような文章、だからといって、けっして年をとっているという意味ではありません。どんなことばで言い表わしたら良いのかわかりませんが、とにかく、あなたの文章が心に感じたのです。ぼくは二十二才。今年、初めて自分の力で作ったお金を手にした。こんな、あなたから見たら、こども？　です。決して、あなたの中にある発酵物の防腐剤には、ものたらないかもしれません。また、あなたにも家庭がおありになることですし……こんなことを書きながら、あなたに自分の存在を知ってもらいたい、そしてお返事をいただけたら……なんて、自分勝手なことを思っている次第です。

（東京・井上信行）

○

石田令子様。あなたの呼びかけを読みました。私は二十二才のSMの愛好者の一人です。令子さんはSMについて、まだ知識があまりないように書かれておりましたが、私もSMプレイの経験はありません。私は、令子さんの良き理解者となれると思います。私の好きな責めは羞恥責めです。早く令子さんを縛ってみたいと心の中でウキウキしています。

（東京・SM研究生）

○

毎月、奇クの発売日をたのしみにしています。手に入れた時、最初に開くページが、読者通信欄です。以前、小生が中部地区でのSMの同志が少ないと発言したところ、ここ三、四カ月は中部地区からの発言もあり、同好の志がおられることは実によろこばしいことと思います。七月号にも水川那美子さんからの便り拝見いたしました。多分、豊田市にお住いと思いますが、小生の友達になって下さい。SMについて、小生の知っている限りの体験談など、お話をしませんか。

（名古屋・中村たけし）

○

七月号の青山かおり女王様。ぼくは二十三才の奴隷犬です。百パーセント奉仕できます。ボクの好きなのは浣腸です。どんな仕打ちでも喜んでうけます。一生に一度でもいいから女王様に奉仕をしたいと思いますので呼んで下さい。今は一人でプレイをしていますがやはり一人では、つまりません。早くチャンスが来ることを待っております。色々な責めを、ためして下さい。また、アヌス責め、バイブ責め、ロウソク責めなど、色んな責めをして下さい。お呼び下されば尻尾を振って女王様の前に跪きます。

（強度の奴隷志願の牡犬）

○

七月号の圧巻「Mアニマルの華麗な対決」に讃辞を呈して一言。以前にも、類似したカメラハントがあったが、これは、本格的な責めを伴った競争の様子が楽しい。とくに、臀塊並置の同時浣腸は見事。フォトはカラーの由。ぜひ分譲作品としていただきたい。浣腸四葉と屈折位数葉は、奇ク刊行史上に残る逸品。惜しむらくは久美子さんの「どうしても好美さんと一緒に縛ってほしい」との希望が誌上で実現しなかった事である。「花と蛇」の静子と京子のように責め合う女体の美は何ものにも、かえがたい。こうした企画を大いに組んでいただきたい。たとえば浣腸ファンの若い女性は投稿にも多くみられる。彼女達のプレイの公開は困難なものだろうか。ここで私は小杉千恵さんを思い出す。彼女は同性間の浣腸前後責めに深い関心を示している。彼女のハントを何としても実現してほしい。私は千恵さんが年下の娘の前に下半身を開いて、自らの行為に没入することを想像する。御本人に接見したいが夢にすぎぬ。それを奇クに求めてやまない。彼女の初投稿以来のファンであることに免じて暴言御容赦。

（東京・自由ケ丘・無志人）

○

水川那美様。貴女のお便りを拝見して、私の求めていた女性は貴女ではないかと思ってペンをとったわけです。私はS性百パーセントの二十二才の独身男性です。私のS性持論は、女性への責めは女体の内部から、にじみ出てくるものでなければならないと思っております。今までの私のSMプレーは、特にこれといった、きまったプレーはありませんでしたが、浣腸責めや歯の間にかまされた強烈な猿ぐつわ責め等は好んでやっていました。以前にも二、三人の女性と交際しておりましたが、SMプレーに理解がないためか、数回で終わってしまい、今は特定の女性との交際は、いたしておりません。私のM女性観としては、やはりSMに関して、ある程度の予備知識を持っていること。プロポーションの数字、特にヒップ、バストが五以上である方。体重が平均より十キロ――五キロ、上回っている方がよいと、いつも思っております。水川さん、貴女は、いかがですか。もし、できることなら御交際ねがい、将来はプレーにまで持っていきたいと思っております。

（東京・西村真）

○

石田令子さんの「しばりのモデルになりたい」を読み、私でよろしかったら、お友達になりたいと思って、これを書きました。私は公害で有名な川崎に住む二十七才のサラリーマンです。奇クは五年ぐらい前よりの愛読者です。キザのようですがロマンチストを自認しています。貴女は縛られることについては嫌なことはありませんか云々と書いておりますが、羞恥責め、浣腸責め等、SMには貴女が想像する以上に恥かしい責めがあります。でも、そんなことは、これから勉強したいという貴女にはもう知っていることかもしれませんね。私が貴女と気持が合うかどうかは分かりませんが、少なくともSMを愛するという点では一致していると思います。辻村氏のカメラルポ、塚本氏のカメラハント等、気に入った文だけを集めて、一冊の合本にして所蔵して楽しんでいます。縛りについては上手とはいえませんが、一通りのことはできると思っています。カメラは自信があり、気にいった写真は現像して引きのばしています。こんな私ですが友達になっていただけましょうか。貴女のよいお返事をお待ちしています。SMの絆求めてたよりする我が心根よ届けかなたに。

（川崎一夫）

○

茨木ミノル様。嬉しき投稿、拝読。日夜悶々となさることはありません。私が希望をかなえて上げましょう。二十CCの小さいのから百CCの大きいのまでの各種ガラスシリンダー、エネマシリンジ

次号（九月号）は七月二十五日に発売いたします

イルリガトール等々、道具も揃っています。必ずや、あなたを満足させて上げると、楽しみに、しています。

（堺市・浜浣好）

○

可哀想な純子。出来ることなら今すぐにでも助けてあげたい。純子の写真が四十五年十月号「緊縛は夫婦生活の活性炭」を発表して以来のファンです。私の妻も四十五年十月号がデビューです。純子とは同期です。それだけに印象も強く、一度はお手紙をと、ペンをとったのですが、なかなか、うまく書けず、そのうちに十二月号で辻村様にハントされ、以後、純子は奇クのスター、私にとっては高嶺の花。あまりにも差ができたので、私もなんとか妻をカメラハントにと思い昨年末、辻村様が純子をハントしたときのように妻を誘ってくれるよう、おねがいしたのですが、私達夫婦の機、未だ熟せずと見て、辻村様から御親切なアドバイスをいただき、感激いたしました。さすがに緊縛の第一人者妻を純子のようにと、あせった自分が恥かしく思いました。今度は純子からの呼びかけ、先をこされないうちにと、早速ペンをとった次第です。（和歌山・若山巨人）

○

愛知県に住む水川那美子様。山々の新緑が目に美しい季節。七月号の貴女の通信を見て、さっそく便りを出した次第です。私は二十六才の青年です。身長は一七〇センチ、体重は五八キロ。比較的、すんなりしています。奇クは大分以前から愛読しております。私はまだ一度も女性を縛った経験はありませんし、SMについても、くわしいことが分かりませんが、こんな私でもよかったら、ゆっくり一度、お話でもしたいと思いますので、お便り下さい。

（豊田市三軒町・岡村哲也）

○

水川那美子さんのおたよりを拝見し、うれしくなり早速、お手紙することにしました。ぼくも水川さんのように、まずお友達としてMやS、フェチ等について、お話合いをして後、段々お互いにムード的な感情を持つようになりましたら、プレイ等について考えていきたいと思うのですが、いかがでしょう。水川さんのご返事を待っています。

（東京・斉藤一郎）

○

大阪の山添清子さんへ。貴女のお便り拝見いたしました。私は京都に住む三十才の健康な男性愛読者です。SMに関しての造詣も体験歴も決して他の人に劣らない者と自負しております。もともと文学好きだったのですが、大学時代は専門の詩作のかたわら、同好の士を募って SM文学研究会等も作っておりました。もっとも当時は今頃ほどSMブームと言われる世相ではなかったのですが、それだけに集まってきた者は皆、熱心に様々な女体責めの構想などを披露しあったものでした。しかし学生の常で、いささか机上の空論の気味がありました。私のSM歴は本誌によって始まり、社会に出てから実際のプレイ開眼ということになります。私の傾向は勿論Sですが貴女と同じく残酷な責めより羞恥責めの方が好きです。肉体的苦痛だけで愉悦を感じられる方もあるようですが、私はそれ以上に精神の抵抗がくずれ、踏みにじられてゆくときの女性の表情の美しさや肢体のなまめかしさに息を呑むのです。幸せな家庭をお持ちの貴女でしたら、安心して交際でき私としても貴女の御期待に充分、応えられると思います。ぜひ一度お目にかかりたいと思います。

（京都・山田竜二）

○

鈴木千鶴子様。読者サロンで始めて貴女様のお便りを拝見し、矢も楯もたまらず、お手紙いたしました。私は完全なM男性で奴隷志望ですが、今度、始めて願いがかなって奴隷として徹底的に調教されることになりました。私は貴女様と同じく極度に露出狂です。ヌードで多勢の人の前で恥かしめられたいと思っています。私は今後調教されながら、ぜひM奴隷のモデルとしてショウ等に出演するつもりです。それも、本格的な同好の人々だけのショウは勿論のことその他、クラブなどに出演したいと思っています。もしよかったら御一緒にSMのモデルとしてグループをつくり、活躍してみませんか。MであればSの役もできますし、互いにSになってもよいですし、またSの男、女等と組めば、なおよいと思います。私は容姿には自信があります。こんな私に興味ある女王様。そして現在、その

ようなショウをしていらっしゃる方、ぜひ、おたより下さい。

（横浜・佐藤直美）

○

七月号は、ひさかたぶりの圧巻で「紫蘭の門」やパロディ「花と蛇」も息を吹きかえしたような、さえかたを思わせた。それから高村浩子が近頃になって、ぐうっと美しくなってきたのに驚く。男でもできたのかと、はなはだ、けしからん失礼なことも考えたが、やはり真実のマゾ感を得ての開花かもしれぬ。縛られた表情といい、腰つきといい、ふるいつきたくなるような妖美さである。世をあげてポルノ逆行で映倫も態度豹変の風潮の中で辻村隆氏が久美子、好美を縛っての活躍だが、ハッスルしすぎて御用にならぬかと心配でたまらぬ。大人の玩具を置いて後手に縛られた全裸の松葉くずし態位の仰臥や、二人並んでの海老責め開股縛りの正面を向けている姿など最高だったし、浣腸競宴なんてマゾ女の興奮の極致とみた。サロン欄で鈴木千鶴子の便りを読んだが、頑張って浣腸姿ぐらい発表してほしい美女である。つぎに中津浩氏へ。明美さんという良き緊縛モデルを手に入れ、お羨ましき限り。明美嬢はマゾ気のない全く素人の娘さんで、お金のためモデルになっているとかですが、ぜひ私めに、ご紹介の栄を賜りたい。このような素人の現代娘は案外、シンプルに割りきって、お金次第で浣腸なら貞操に関係ないし、菊蕾を貸してくれると思う。A感覚もわかるようになって本当のM女に育つかと思うのだが、まだ未完成の体つきが、たまらない魅力の娘である。（神戸市・国川栄一）

○

東京の鈴木千鶴子様。貴女のマゾヒスティックな御希望に接し、お便りいたします。小生は当年四十三才、会社員。本誌は十五年間愛読しています。貴女の御希望にピッタリのSです。よろしければ交際いたしたいと思います。

（東京・原　市造）

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少なものもありますから、お早い目に御注文願います。

○七月一日よりの郵便料値上に伴い、在庫既刊号の〈送料共値段〉も全面的に改訂の必要が生じましたので御諒承願います。尚、既刊号以外で、三カ月以上御予約の場合は送料の全額を当社にて負担致します。多数一括して既刊号御注文の節は〈小包〉にて発送致します。

既刊雑誌在庫案内

昭和40年11月号（送共三三二円）

昭和40年12月号	（送共三三二円）
昭和41年1月号	（送共三三二円）
昭和41年2月号	（送共三三二円）
昭和41年4月号	（送共三三二円）
昭和41年5月号	（送共三三二円）
昭和41年6月号	（送共三三二円）
昭和41年7月号	（送共三三二円）
昭和41年8月号	（送共三三二円）
昭和41年10月号	（送共三八二円）
昭和41年11月号	（送共三八二円）
昭和42年6月号	（送共三八二円）
昭和42年11月号	（送共三八二円）
昭和43年2月号	（送共三八二円）
昭和43年3月号	（送共三八二円）
昭和43年4月号	（送共三八二円）
昭和43年5月号	（送共三八二円）
昭和43年6月号	（送共三八二円）
昭和43年11月号	（送共三八二円）
昭和43年12月号	（送共三八二円）
昭和44年1月号	（送共三八二円）
昭和44年2月号	（送共三八二円）
昭和44年3月号	（送共三八二円）
昭和44年4月号	（送共三八二円）
昭和44年5月号	（送共三八二円）
昭和44年6月号	（送共三八二円）
昭和44年7月号	（送共三八二円）
昭和44年8月号	（送共三八二円）
昭和44年9月号	（送共三八二円）
昭和44年10月号	（送共三八二円）
昭和44年11月号	（送共三八二円）
昭和44年12月号	（送共三八二円）
昭和45年1月号	（送共三八二円）
昭和45年2月号	（送共三八二円）
昭和45年3月号	（送共三八二円）
昭和45年4月号	（送共三八二円）
昭和45年5月号	（送共三八二円）
昭和45年6月号	（送共三八二円）
昭和45年7月号	（送共三八二円）
昭和45年8月号	（送共三八二円）
昭和45年10月号	（送共三八二円）
昭和45年11月号	（送共三八二円）
昭和45年12月号	（送共三八二円）
昭和46年1月号	（送共三八二円）
昭和46年2月号	（送共三八二円）
昭和46年3月号	（送共三八二円）
昭和46年4月号	（送共三八二円）
昭和46年5月号	（送共三八六円）
昭和46年6月号	（送共三八六円）
昭和46年7月号	（送共三八六円）
昭和46年8月号	（送共三八二円）
昭和46年9月号	（送共三八二円）
昭和46年10月号	（送共三八二円）
昭和46年11月号	（送共三八二円）
昭和46年12月号	（送共三八二円）
昭和47年1月号	（送共三八二円）
昭和47年2月号	（送共三八二円）
昭和47年3月号	（送共三八二円）
昭和47年4月号	（送共三八二円）
昭和47年5月号	（送共四三二円）
昭和47年6月号	（送共四三二円）
昭和47年7月号	（送共四三二円）

〈編集後記〉

○巻頭の緊縛美写真がグッと増した八月号をお届け致します。競い咲く二十五態の艶姿は評価して頂けるに足ると自負していますが、いかがでしょう。〝写真面を、もっと充実しグラビアを復活せよ〟との強いご要望に出来るだけお応えしようとする編集部の努力……なんて、手前ミソをコネたいところです。

○おんなのお喋りには閉口させられるのが多いようですが、ことSMに関しては、つい目尻の下がる思いで、なんとなく圧倒されそうな雰囲気を持つ福井桃子姐さんを始め、前田真知子、笠井奈保子、梅川幸子等、女性陣の告白が本号の艶増しをしてくれました。加うるに辻村節でM女三人の生態が浮かで上がり塚本氏の健筆に彷彿たるモデル諸嬢の面影。さぞやSM愛好者の耳目をそばたてせしむるならんと、その寄稿に感謝する次第ですが、ご期待の向きにお詫びしなければならないのは、『パロディ・花と蛇』が、作者山光純氏の御都合で間に合わなかったことです。ご旅行中の由ですので、御諒承願います。

○本誌に寄せられる多くの〝SM愛戯族〟の中にあっては、異端ともいえそうな『拷問クラブ・シリーズ』〈鶴見浩一〉が本号で完結しましたので、次号よりは、前々から折りに触れてのSM論評でお馴染みの「柴利好」氏の創作『命預けます』を約十回の予定で連載致します。SMに造詣深い氏が〝悪人の居ない、緊縛による女体美の発現と、その魅惑の陶酔〟を狙われる由。ご声援を願います。

〔懸賞原稿募集〕

〈体験、告白、手記〉

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千円以上の賞金を贈呈します。

〈創作、小説、物語〉

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未発表作品に限ります。これはと思う作品は必ず誌上に取り上げます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万円迄贈呈。

〈感想、論評、批判〉

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌弾なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千円以上の賞金を贈呈します。

〈（映画、雑誌）通信〉

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千円以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております故悪しからず御諒承願います。

◎本文記事中に各種の〔懸賞原稿募集〕を致しております故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

〈読者通信原稿〉

巻末の通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放しています。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆本誌御購読の栞☆

予約に限り

一月分（1冊）四〇〇円〈送32円〉
三月分（3冊）一二〇〇円〈送共〉
半年分（6冊）二四〇〇円〈送共〉

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ　定価　四〇〇円
八月号（第二十六巻第八号 通刊第二百九十四号）
昭和四十七年七月二十日印刷
昭和四十七年八月一日発行
編集人　杉原虹児
発行人　吉田稔
印刷人　北村俊夫
大阪市住吉郵便局私書函第四十一号
発行所　暁出版株式会社
〈指替口座大阪四二七八三番〉
（昭和三一年四月二〇日第三種郵便物認可）
（昭和四二年四月二一日国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号）
郵便番号558

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の検討、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に関する各条例に指定されないよう、充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しております関係上、十八才未満の方には絶対販売下さらないよう、特にくれぐれもお願い申し上げます。